

博士学位論文

近代日本におけるフランス建築理論と教育手法の受容

— 中村順平の理論と教育を中心として —

The acceptance of French architectural theories and teaching methods in Modern Japan:

Theory and education of Jumpei Nakamura

横浜国立大学大学院

林 要次

2015年9月

< 目 次 >

序論.....	5
研究の目的と対象	6
中村順平・略歴.....	8
既往研究の成果と課題.....	9
① 近代日本の参照可能な建築教育機関と教育手法	9
② 近代日本における建築教育とフランス人建築家	11
③ 近代フランスの建築教育と中村順平	12
④ ジュリアン・ガデと中村順平の建築理論	13
⑤ 中村順平と横浜高等工業学校における建築教育	13
研究の方法と本論文の構成	16
序論 註.....	19
 本論第 1 編 近代建築教育機関の潮流	23
第 1 章 近代における世界の建築教育機関と建築思潮	25
1. 近代日本とお雇い外国人の主要 4 カ国	26
2. 近代における世界の建築教育：お雇い外国人主要 4 カ国を中心に	27
3. 近代における世界の建築思潮.....	35
小結	37
第 1 章 註.....	38
第 2 章 近代日本における建築教育機関再考	41
1. ジョサイア・コンドルと辰野金吾の建築教育	42
1.1 工部大学校の教育モデル	42
1.2 ジョサイア・コンドルの建築教育の功績と錯誤	44
1.3 辰野金吾の教育改革とその教育者たち	47
1.4 辰野金吾の教え子たち	50
2. 近代日本における建築教育機関再考	52
2.1 「建築学」と「造家学」－日仏建築教育機関構成比較	52
2.2 近代日本におけるフランス人建築家による教育	54
2.3 フランス人「建築教師」アベル・ゲリノー.....	56
2.3.1 フランス軍事顧問団と陸軍士官学校.....	56
2.3.2 アベル・ゲリノーと陸軍士官学校	57
2.3.3 エコール・デ・ボザールと陸軍士官学校の教科書	59
2.3.4 アベル・ゲリノーが描いた「日本」	61
小結	64
第 2 章 註.....	67

本論第2編 中村順平の受けた日仏の建築教育	75
第1章 中村順平の受けた日本の建築教育	77
1. 高等工業学校の建築科黎明期：東京と名古屋の建築科.....	78
2. 名古屋高等工業学校建築科の教育者.....	80
3. 中村順平在学期の教育プログラム.....	81
4. 名古屋高等工業学校建築科の実態証言.....	84
小結.....	87
参考資料：名古屋高等工業学校の教育者たちー中村順平在籍期を中心に.....	89
第1章 註.....	92
第2章 中村順平の受けたフランスの建築教育	95
1. 近代日本の建築教育者にみる外国経験.....	96
2. エコール・デ・ボザールと中村順平.....	98
2.1 エコール・デ・ボザール①：歴史と世界的伝播.....	99
2.2 エコール・デ・ボザール②：建築教育システム.....	101
2.3 エコール・デ・ボザール③：アトリエ制度.....	103
2.4 中村順平のアトリエ選択.....	106
2.5 中村順平の入学までの流れ.....	108
2.6 建築セクションの教育者.....	109
2.7 「建築理論」科目略史.....	110
2.8 「構造」科目略史.....	112
2.9 建築セクションの各種課題ー中村順平の提出課題を中心としてー.....	117
2.9.1 各課程の所要単位.....	119
2.9.2 上下2級課程の概要と中村順平のプロセス.....	120
2.9.3 中村順平の卒業制作.....	126
小結.....	128
参考資料：中村順平の2人のパトロン.....	130
第2章 註.....	133
本論第3編 中村順平にみるフランス建築理論と教育手法	143
第1章 横浜高等工業学校建築学科と 設計・製図科目の教育者	145
1. 横浜高等工業学校建築学科.....	146
1.1 官立横浜高等工業学校の設立背景.....	146
1.2 学校設立から建築学科増設までのいきさつー関東大震災と横浜市の要請ー.....	148
1.3 初代学科長中村順平教授就任までの経緯と時代的背景.....	149
1.4 中村順平の「注意書」.....	151
2. 設計・製図科目の教育者.....	154
2.1 建築学科教員陣の概要.....	154
2.2 第1期の教員陣の特徴.....	158
2.3 設計・製図科目の教育者.....	163

2.4 設計・製図科目の教育プログラム上の時間数：他校との比較から	165
小結	166
第1章 註	168
第2章 横浜高等工業学校建築学科の 設計・製図教育にみるフランス建築理論と教育手法 .	173
1. 設計・製図教育にみるフランス建築理論と教育手法①：「実習」科目	174
1.1 中村順平の「実習」科目概要	175
1.1.1 「実習」科目の教育プログラム上の時間数	175
1.1.2 「実習」科目の課題分類	176
1.2 「実習」科目の基礎課程	180
1.2.1 「建築図画」	180
1.2.2 西洋建築「建築図画」の参考図	182
1.2.3 日本建築の「建築図画」の制作意図	184
1.3 「実習」科目の練磨課程	186
1.3.1 各種設計競技課題とエコール・デ・ボザールの接点	186
1.3.2 「要素分析」・「16時間略設計」課題の参考作品・参考資料	189
2. 設計・製図教育にみるフランス建築理論と教育手法②：「図学」科目	192
2.1 伊藤三郎の図学プリント	192
2.2 伊藤三郎の図学研究にみるフランス建築理論との接点	193
2.3 中村順平のエコール・デ・ボザール留学期の図学系科目	194
2.4 「図学プリント」にみるフランス建築理論	195
小結	197
参考資料：「実習」科目関連史料リスト	200
第2章 註	220
第3章 中村順平の「建築学」にみる フランス建築理論と教育手法①：「建築学」	223
1. 「建築学」	224
1.1 「建築学」と卒業生の証言	224
1.2 「建築学」の4つの講義録	225
2. 既刊「建築学」	228
2.1 「建築学」科目と講義録に関する既往研究	228
2.2 中村順平の「建築学」既刊書物にみるフランス建築理論	229
3. 中村順平とエドワー・アルノー	232
3.1 エドワー・アルノー	232
3.2 エドワー・アルノーの講義録	233
3.3 『建築の諸要素と理論』にみる「構造」理論	235
3.4 エドワー・アルノーの「構造」科目	236
3.5 中村順平にみるエドワー・アルノーの「構造」科目	238
3.6 中村順平にみるフランス建築理論の受容：パルティを一例として	241
小結	242
第3章 註	244

第4章 中村順平の「建築学」にみる フランス建築理論と教育手法②：『建築学』草稿	249
1. 「『建築学』草稿」	250
1.1 「『建築学』草稿」に関する既往研究	250
1.2 「『建築学』草稿」概要	251
2. 「『建築学』草稿」参考文献調査	252
2.1 調査方法	252
2.2 「ノート1」の参考文献情報解析	256
2.3 「ノート2」の参考文献情報解析	263
2.4 『建築学』草稿のフランス語・日本語参考文献比率	272
3. 「『建築学』草稿」にみるフランス建築理論	274
3.1 「『建築学』草稿」にみるフランス語参考文献	274
3.2 ①エコール・デ・ボザールの歴代教員による文献	276
3.3 ②技術教育機関・技術者向け文献	277
3.4 ③歴史教則本	281
3.5 ④フランス建築系雑誌	283
3.5 ⑤その他仏語文献の特徴	284
4. 「『建築学』草稿」にみるフランスとの接点	285
4.1 日本語参考文献とフランス語参考文献の関係	285
4.2 「『建築学』草稿」にみる『建築の諸要素と理論』の構成	287
4.3 「『建築学』草稿」にみるフランス建築教育手法	289
小結	292
参考資料：『建築学』草稿 表題部切抜き一覧表	295
第4章 註	298
結論	305
関連公表論文リスト	311
参考文献リスト	313
謝辞	329

序論

序論

研究の目的と対象

本論文は、近代日本におけるフランス建築理論と教育手法の受容に関する研究である。本論文では、特に、横浜高等工業学校（現、横浜国立大学理工学部）で行われた中村順平（1887-1977）の建築教育に着目し、新たに発見・入手した史料から既往研究の実証的な検証を行う。本論の目的は、この実証的な検討から、中村順平が建築教育を通じて提示したフランス建築理論と教育手法の受容を明らかにすることである。なお、主たる研究対象期間は、中村順平が横浜高等工業学校建築学科の教授職にあった1925年から1944年とする。

本論文が、近代日本におけるフランス建築理論と教育手法の受容に着目するのは、以下の2つの理由に由来する。

第1の理由は、近代建築運動の立脚点にあるとされる近代フランスにおける建築教育手法の再考にある。

近代フランスの建築理論や建築教育は、日本の開国期にはすでに世界的な影響力を有していた。近代フランスにおける建築教育は、近代世界の建築教育の範となり、その伝播はいくつかの国々で確認できる。そして、その影響力は、これまで様々な研究において指摘されてきた。

例えば、イギリスの建築史家レイナー・バンハムは、著書『第一機械時代の理論とデザイン』（原題：*Theory and Design in the First Machine Age*（1960）、邦訳：1976）¹の冒頭で、近代建築の展開の主要な出発点であった1910年ごろに表面化した一連の革命的な動きについて、その展開の諸素因として3つの点を挙げている。そのうちのひとつにアカデミックな教育の伝統が据えられ、その勢力と権威について、「パリのエコール・デ・ボザールに負うところが非常に多い」²と指摘した。

別のイギリス出身の建築史家ケネス・フランプトンは、著書『現代建築史』（原題：*Modern Architecture*（1980）、邦訳：2003）³の「序章」において、近代建築の成立時期を「フランス医師であり建築家であるクロード・ペローがウィトルウィウスの比例理論の絶対的な正当性に対して挑戦した時から、下って一七四七年に最初の技術学校である「エコール・デ・ポン・ゼ・ショッセ」がパリに設立されて、建築と技術とが決定的に分離することになったときまでの、ちょうど中間期」⁴と述べ、また、別の著書『テクトニック・カルチャー』（原題：*Studies in Tectonic Culture*（1995）、邦訳：2002）⁵の冒頭において、近代フランスを代表する「歴史的な建築理論家」、ヴィオレ＝ル＝デュク（Viollet-Le-Duc, 1814-1979）を据えるなど、近代建築の成立におけるフランスの建築理論の果たした重要性を指摘している。

さらに付け加えるならば、イタリアの建築史家レオナルド・ヴェネヴォッロは、著書『近代建築の歴史』（原題：*Storia dell'Architettura moderna*（1973）、邦訳：1978-1979）⁶の序章において、フランスから論じ始めるなど、フランスの存在は世界の近代建築の発展を考える上でひとつの重要な指標として考えられてきた。

第2の理由は、近代日本は建築学の発展過程において、果たしてどのようなフランス建築理論や教育手法を受容したのかについての再考である。

教育面では、近代日本におけるフランス技術教育の導入過程に関する研究は多く確認できるが、近代日本の建築教育とフランスとの関係に着目した研究は、あまり多くはみられず、例えば、近江榮が

「中村順平のようなエコール・ド・ボーザール（原文ママ）での成果も正しく評価され、また日本の近代建築の発展過程の内容も、一足跳びにではなく段階的な成熟期を経て、豊かさとエスプリがくわえられていたことであろうがまことに残念」⁷と指摘されているものの、この発言以降も、中村順平の留学期の成果の実証的な研究は十分になされていない。また、藤井正一郎が、中村順平の教育を近代日本の建築教育の 3 つの流れのひとつに据えているように⁸、教育者として数多くの教え子を輩出した中村順平によるフランス建築理論と教育手法の受容を具体的な解明は、現代の建築教育を考える上でも重要な意味をもつだろう。

こうした問題意識にもとづき、いまいちど中村順平に焦点をあて、近代日本におけるフランス建築理論や教育手法の受容を再考することは、近代日本における欧米的な建築学の導入・発展過程の問題の整理につながる可能性がある。

翻って、現代に目を向ければ中村順平の建築教育の流れを汲む横浜国立大学理工学部建築・都市環境学科建築教育プログラムは、現在に至るまで日本のみならず世界的にも知られる建築家を多数輩出してきた。例えば、一般社団法人日本建築学会が優れた建築に対して授与される日本建築学会作品賞を受賞した飯田善彦（1998）、北山恒（2010）、工藤和美（1997）、西沢立衛（1998, 2006, 2012）、渡辺誠（2002）（以上、あいうえお順、括弧内は受賞年）、プリツカー賞受賞者・西沢立衛（2010）などが挙げられる。

こうした建築家の輩出は、大きく見れば工業技術の習得のみを目的とする建築士養成に留まらない、むしろ建築、都市、文化に習熟したヨーロッパにおける伝統的な“Architecte”アーシテクト像をモデルにする「建築家」の育成をめざした中村順平の建築家教育の伝統を引き継いだ結果とも考えられる。横浜高等工業学校建築学科以来の伝統は、建築都市デザインコース Y-GSA（Yokohama Graduate School of Architecture）の発足とも関連が深く、横浜国立大学の建築学教室カタログ『横浜国立大学で建築を学ぶということ』⁹にみる言説からも明らかな連続性が見出される。

こうした中村順平に始まる伝統が、今もなお横浜国立大学に息づき、建築、都市計画、他分野で活躍する卒業生を輩出している礎を築いたのであれば、そこにはいかなる歴史的状況、必然性が存在したか。そうした疑問を開国から現在に至る近代日本の建築教育の発展から解き明かすことも、本論文の目指すもうひとつの視点である。

2007 年の大阪歴史博物館での展覧会「生誕 120 年 大阪が生んだ偉才 建築家・中村順平」を契機に、また、時を同じくして設立された Y-GSA を契機に、中村順平の再考が始まった。特に、中村順平や教え子達の遺品が大阪歴史博物館に収蔵されたことで、新史料が出現し、また、近年の日仏における史料のアーカイブ化により、これまでアクセスが困難であった史料の閲覧が可能となり、中村順平研究に新たな地平がうまれつつある。

本論文では、近代において世界的に伝播したといわれるフランスの建築理論や教育手法に向けた基盤的研究として、主に中村順平がフランス留学期に受けた建築教育を整理し、中村順平が横浜高等工業学校建築学科で行った建築教育にみるフランス建築理論と教育手法の受容の一端を明らかにする。

中村順平・略歴

中村順平は、1887年8月29日大阪市北区に生れた。中村順平は、1907年に大阪府立天王寺中学校（現、大阪府立天王寺高等学校）を卒業し、同年、名古屋高等工業学校（現、名古屋工業大学）建築科に入学した。当時の同校建築科の建築教育は、東京帝国大学工科大学（現、東京大学工学部）出身の鈴木禎次（1870-1941）、土屋純一（1875-1946）の2人の教授によって牽引された。

中村順平は、1910年3月に名古屋高等工業学校建築科を卒業後、上京し、東京丸の内にあった曾禰中條建築事務所へ就職した。この建築事務所は、工部大学校第1回卒業生である曾禰達蔵（1853-1937）と、鈴木禎次の第一高等学校時代の同級生で、東京帝国大学工科大学建築学科では後輩となった中條精一郎（1868-1936）が共同主宰した。なお、中村順平は、在職1年目の末、1910年12月1日より1年間、志願兵として大阪・高槻工兵第四大隊第一中隊に入営した。

中村順平は、1920年までの約10年間、曾禰中條建築事務所にて設計活動に従事し、1920年7月31日に神戸港からフランスに向けて出発した。そして、中村順平は、同年9月12日にフランス南部の港町マルセイユに到着し、その後、リヨンなどを経てパリに到着した。なお、中村順平のパリ生活は、同年9月20日から始まった。

中村順平は、パリでフランスにおける国家公認の建築家を養成する当時唯一の国立高等教育機関であったパリ・エコール・ナショナル・デ・ボザール *Ecole Nationale des Beaux-Arts de Paris*（通称、エコール・デ・ボザール。以下、エコール・デ・ボザールと表記）の建築セクション *Section d'Architecture* に1921年7月に入学した。その後、中村順平は、所定の課程を修め、1923年9月1日に発生した関東大震災の直後である、同年11月14日付けでフランス政府公認建築家 *Architecte D.P.L.G. (Diplômé par le gouvernement* の略) の称号を得た。この称号を受けた中村順平は、その後、現地で就業をすることなく、師である中條精一郎の要請により、すぐに帰国の途についた。

1924年1月に帰国した中村順平は、中條精一郎の要請により東京の都市計画を行う。翌年1925年に、中村順平は、横浜高等工業学校に増設された建築学科の主任教授として着任し、第2次世界大戦期の1944年に学校名称は横浜工業専門学校へと改称されるが、1947年までその任にあった。中村順平は退官後、1950年まで横浜国立大学講師として教育に従事した。また、中村順平は、横浜高等工業学校での教育と並行し、第2次世界大戦開戦期に至るまで、私塾「中村塾」において社会人となった教え子らの卒業後の教育を行なうなど、学外にも教育活動の場を広げた。さらに、こうした教育活動に加え、中村順平は、数々の客船インテリアの設計に従事するなど、設計活動も同時に行なわれた。なお、近年、大阪歴史博物館学芸員、酒井一光により、既往研究を更新する戦前・戦後における中村順平の設計活動の概要が明らかになった¹⁰。

中村順平は、横浜国立大学での教員生活終えた後、1959年に長年の業績に対し、昭和33年度（第15回）日本芸術院賞（第一部美術第六分科建築）を受賞し¹¹、その後、1975年11月25日に日本芸術院会員に内定し、同年12月15日に会員に就任した¹²。そして、日本芸術院会員となった2年後、中村順平は、1977年5月29日に89歳で没した。

既往研究の成果と課題

① 近代日本の参照可能な建築教育機関と教育手法

どのような建築教育を近代日本が行ってきたのか。この点について、日本語で整理された文献の代表格は、『近代日本建築学発達史』（1972）¹³であろう。この書物には、近代日本の建築教育機関史がまとめられており、それぞれの機関に関する概要が把握できる。一方、世界との関係に着目すると、例えば、近代日本が受容可能であった当時の世界の建築教育機関や、その時代の世界の教育事情など、当時の歴史的背景に関しては別文献をたどる必要がある。近代日本を牽引した欧米からのお雇い外国人の出身主要4ヶ国であるイギリス、フランス、ドイツ、アメリカの近代の建築教育機関についてみれば、各教育機関において独自に編纂された教育機関史は確認できるものの、各教育機関の相互の関係や、それらの具体的な教育比較に関する日本語の研究は少ない。

ここでは、近代日本が参照可能であった建築教育機関について、近代のイギリス、フランス、ドイツ、アメリカにおける教育機関の管轄組織に着目し、大学・アカデミー・職能組織・官公庁の4分類から、既往研究を整理する。

まず、大学が管轄組織となる近代の代表例は、アメリカであろう。

例えば、クラソン・ウェザーヘッド¹⁴（Clason Weatherhead, 1888-1952）がコロンビア大学へ提出した学位論文 *The History of Collegiate Education in Architecture in the United States*（1941）¹⁵は、『近代日本建築学発達史』（1972）の建築教育部分のアメリカ版といえる研究で、近代アメリカにおける建築教育機関の発展過程の把握が可能である。一方、これに類する日本語文献では、近代アメリカの黎明期の建築教育機関におけるエコール・デ・ボザールとの接点に着目した『SD8311 特集・アメリカン・ボザール』（1983）¹⁶がある。この書物はアメリカ建築教育史全体を包括的に論じたものではないが、そのタイトルが示すように近代アメリカにおける建築教育の一部の流れが把握できる。

次に、アカデミーが管轄組織となった近代の代表例は、ドイツとフランスだろう。

ニコラス・ペヴスナーの『美術アカデミーの歴史』（原題：*Academies of art, past and present*（1940）, 邦訳：1974）¹⁷では、ドイツのアカデミーを中心にその発展過程が描かれており、西欧のアカデミーに関するその歴史的な流れが把握できる。しかし、この書物は、建築分野に特化されたものではないため、ドイツやフランスなどのアカデミーを出発点にもつ建築教育の発展過程を把握するためには十分ではない。なお、田所辰之助が、ドイツの近代建築を論じた学位論文『20世紀初頭のドイツ近代建築の発展過程における近代工芸理念成立史の研究』（1997）¹⁸の「あとがき」において、「ドイツの工芸学校改革は、いまだ包括的な記述がなされていない」と指摘しているように、近代ドイツの建築教育の歴史的な発展過程について包括的にまとめられた日本語文献は乏しい。

こうしたドイツのアカデミーや建築教育機関に関する論考に比して、フランスのアカデミーやそのアカデミーが中心となって行った建築教育に関する論考は、これまで多岐にわたって発表されてきた。

エコール・デ・ボザールに関する詳細を知る日本語文献の中心的存在は、三宅理一編の雑誌『SD7811 特集：ボザール その栄光と歴史の全貌』（1978）¹⁹やアニー・ジャックと三宅理一による『ボザール建築図集』（1987）²⁰であろう。また、アカデミーの建築理論を論じた土居義岳の『アカデミーと建築

オーダー』(2005)²¹は、エコール・デ・ボザールの起源とされる王立建築アカデミーの教育からエコール・デ・ボザールの成立に至るまでの経緯が詳細にまとめられている。なお、これらの補足的な説明資料として、三宅理一の『フランス建築事情』(1979)²²では、エコール・デ・ボザールの概要の把握が可能である

一方、外国語文献では、フランスのアカデミーからの流れにあるエコール・デ・ボザールを中心とした建築教育に関する詳細に迫るアーサー・ドレクスラーの大著 *The Architecture of the Ecole des Beaux-Arts* (1977)²³がある。この書物は、エコール・デ・ボザールの教育に再び光をあてたという意味において重要である。この書物の刊行後、これが端緒となり同種の研究が続いて発表された。その中には、例えば、主に 19 世紀のエコール・デ・ボザールが扱われ、研究者・専門家によるアンソロジーがまとめられたロビン・ミドルトン編の *The Beaux-Arts Tradition and nineteenth-century French Architecture* (1982)²⁴がある。この書物は、その性質上、エコール・デ・ボザールの全体像の詳細が記述されたものではないが、点としての詳細な出来事が記述されている。

また、本国フランスでは、ロビン・ミドルトン編の書物とは異なる視点により編集された *Architecture, une anthologie: Les architectes et le projet* (1992)²⁵がある。ジャン＝ピエール・エプロンが中心となって編集したこの書物は、エコール・デ・ボザールの建築教育に関与した当事者による多くの論考が収められており、1 次資料に近い文献資料として貴重である。

第 3 に、職能組織が管轄組織となった近代の代表例は、イギリスであろう。

イギリスにおける職能と建築教育との関係については、フランク・ジェンキンスの『建築家とパトロン』(原題: *Architect and patron* (1961), 邦訳: 1977)²⁶やスピロ・コストフが編集した『建築家: 職能の歴史』(原題: *The architect: chapters in the history of the profession* (1977), 邦訳: 1981)²⁷において論じられている。しかし、これらの書物から、イギリスやアメリカの断片的な状況は把握できるものの、世界的な大きな流れについて体系的なまとまりは見られない。

第 4 に、官公庁が管轄組織となった近代の代表例は、フランスであろう。

フランスの建築教育史では、前出の文献のほか、アカデミーを起源としたエコール・デ・ボザールにおける建築教育に関する論考はこれまでいくつか発表されてきた。一方で、近代フランスの状況を把握するためには、エコール・デ・ボザールと同時代に存在した近代フランスにおけるその他の建築教育機関である官公庁管轄の技術教育機関で行なわれた建築教育に関する研究も重要である。

こうした視点から論じた日本語文献の代表格は、丹羽和彦の『エコール・ポリテクニクにおける建築教育の理論的特性に関する研究』(1993)²⁸であろう。この書物では、エコール・ポリテクニク *Ecole Polytechnique* (1794 年設立) の黎明期の建築教育に関する内容がまとめられている。また、エコール・デ・ボザールとエコール・ポリテクニクの建築教育の相関関係については、前出の土居義岳の書物において論じられている。

また、エコール・ポリテクニク以外のフランスの同時代に存在した高等教育機関における建築教育やそれぞれの機関の関係や、近代日本における建築教育との関連性などに言及した日本語文献として、北河大二郎の『近代都市パリの誕生—鉄道・メトロ時代の熱狂—』(2010)²⁹がある。この書物では、フランスの技術教育機関に関する項目が設けられ、近代フランスにおける主要教育機関に関する概要がまとめられている。さらに、近代フランスにおいて建築教育が行なわれた教育機関の断片について、

例えば、フランスの国立土木学校 *Ecole Nationale des Ponts et Chaussées* に関する記述は、オーギュスト・ショワジー (Auguste Choisy, 1841-1909) の『建築史』(原題: *Histoire de l'Architecture* (1899), 邦訳: 2008)³⁰の翻訳者・桐敷真次郎による解説部分にみられ、また、エコール・サントラル・デ・ザー・エ・マニュファクチュール *Ecole Centrale des Arts et Manufactures* (1829年設立, 以下エコール・サントラル) での建築教育の一端は、『古市公威とその時代』(2004)³¹の北河大次郎による分担執筆箇所を確認できる。その他のフランス建築理論等の翻訳書の解説部において技術教育機関に触れられているものも確認できるが、それぞれが関連付けられ、体系的にまとめられるまでには至っておらず、断片的な記述にとどまっている。

一方、フランスでは、近年、例えば、ジャック・リュカンの *Composition, non-composition : Architecture et théories, XIXe-XXe siècles* (2009)³²やギー・ランベールとエステル・ティボーの編著 *L'atelier et l'amphithéâtre : Les écoles de l'architecture, entre théorie et pratique* (2011)³³において近代フランスにおける建築教育機関に関する横断的な再考が行われている。また、ジャン＝フィリップ・ガリックが中心となってまとめた、フランス国立美術史研究所 *Institut national d'histoire de l'art* (略称: INHA) で行なわれた展覧会カタログ *Bibliothèques d'atelier. Edition et enseignement de l'architecture, Paris 1785-1871* (2011)³⁴も、近年の近代フランスの建築教育再考のひとつの流れと捉えることができる。

② 近代日本における建築教育とフランス人建築家

近代日本において工部省管轄組織を源流とする建築教育機関の発達については、前出の『近代日本建築学発達史』(1972)が参考になる。一方、フランスとの関係から、近代日本の建築教育を再考する場合、フランスの技術教育との関係や来日したフランス人建築家の存在の再検証などが必要だろう。ここでは、日本の近代化のプロセスにおけるフランスの果たした役割や、フランスと世界の技術教育との関係に着目した既往研究を整理する。

例えば、近代日本における技術教育機関に関する研究では、恒川清爾の学位論文『明治期における技術者の分析: 近代技術確立をめぐる職人と職人的技術者』(2006)³⁵などがある。恒川清爾の研究では、明治期の日本と西欧の技術者教育に関する比較として、建築分野の研究ではないが、機械工学、電気工学、土木工学分野における技術者教育の比較が行われている。また、三枝博音らによる『近代日本産業技術の西欧化』(1960)³⁶において「建築業」の項目が設けられ建築業界の近代化のプロセスがまとめられている。

フランスにおける技術教育やフランスからの技術教育の導入といった視点から既往研究を整理すると、例えば、アントワヌ・レオンの『フランス技術教育の歴史』(原題: *Histoire de l'éducation technique* (1961), 邦訳: 1968)³⁷は、タイトルにあるようにフランスの技術教育の成立からその発展過程にいたる歴史的な概略が述べられており、日本のフランス技術教育機関の研究では度々参照されている。

堀内達夫の『フランス技術教育成立史の研究: エコール・ポリテクニクと技術者養成』(1997)³⁸や、中村征樹の学位論文『近代フランスにおける技術教育の展開: 技師集団と職人層の技術知の創造と共有をめぐる』(2005)³⁹など、主に近代フランスにおける技術教育機関の世界的なモデルとなったエ

コール・ポリテクニクに関する研究や、近代日本とフランス技術教育に着目した研究として、飯田史也の学位論文『近代日本における仏語系専門学術人材の研究』（1996）⁴⁰などがある。いずれも建築教育に関する詳細な言及はなされていないが、同様の視点から建築教育をフランスとの関係で読み解くことは可能だろう。さらにそれら全体を含んだ、近代日本におけるフランス教育の受容に関する西堀昭の『日仏文化交流史』（1981）⁴¹や『日本の近代化とグランド・ゼコール：黎明期の日仏交流』（2008）⁴²、富田仁との共著『横須賀製鉄所の人びと』（1983）⁴³などの一連の研究は、多くの示唆に富んだ研究といえるが、建築教育についての論考はきわめて少ない。

澤護の「幕末・明治初年来日のフランス人建築家」（1985）⁴⁴では、近代日本の発展に寄与したと考えられる7名のフランス人建築家を取り上げられている。

③ 近代フランスの建築教育と中村順平

近代フランスの建築教育に関する既往研究には、①で述べたもののほか、フランスの王立建築アカデミーやエコール・デ・ボザールとゆかりのある人物の建築理論書の訳書における解説部分の情報がある。こうした情報は、フランスの建築教育における建築理論の役割を考える上で有用だろう⁴⁵。また、中村順平の留学期の検証をする際に必要な19世紀中盤から20世紀初頭にかけてのフランスの建築教育に関する研究として、ヴィオレ＝ル＝デュクに着目した羽生修二の研究⁴⁶や、フランスの近代建築家に着目した吉田鋼市の一連の研究⁴⁷は重要である。

次に、中村順平の留学期に着目した文献として、三宅理一の「強烈な異国体験に生きた孤高の建築家 中村順平」（所収：『近代日本の異色建築家』（1984）⁴⁸）があるが、ここでは、当時のエコール・デ・ボザールの状況が簡潔に触れているにすぎず、当時の建築教育の詳細は論じられていない。また、横浜高等工業学校建築学科の第1回卒業生である網戸武夫による中村順平の評伝『情念の幾何学』（1985）⁴⁹には、中村順平の留学期に関する情報が記されているが、同書の他の部分に比して、内容の曖昧さがある。

一方、中村順平とエコール・デ・ボザール教育に関する論文として、中島久男の「日本におけるエコール・デ・ボザール教育の導入について」（1987）⁵⁰がある。この論文では、中村順平を「日本におけるエコール・デ・ボザール教育の導入者」と位置づけ、中村順平がフランスから帰国した年に開催したエコール・デ・ボザールでの成果に関する展覧会の情報を提示している。また、中島久男は、建築系雑誌『建築世界』に不定期連載された中村順平の著述「建築学」に着目し、横浜高等工業学校における中村順平の建築教育が「これまで、「建築製図」のシステムについてのみ語られることが多かった」⁵¹と述べ、「建築学」なる講座が存在し、ボザールの建築理論が教授されていた事実も感化し得ない⁵²と指摘している。さらに、中島久男は、中村順平の「翻訳原稿 VI」⁵³の存在に触れ、この原稿がジュリアン・ガデ（Julien Guadet, 1834-1908）の『建築の諸要素と理論』*Eléments et théorie de l'architecture*（1901-1904）⁵⁴の翻訳原稿ノートである可能性を示唆している。このように、中島久男の研究では、中村順平のエコール・デ・ボザールで受けた建築教育の断片的な情報が記述されている。

もうひとつの中村順平とエコール・デ・ボザール教育に関する研究として、吉田鋼市「《parti》の意味について—クロケ、ガデ、グロモールの使用例による一考察—」⁵⁵（1989）がある。吉田鋼市は、この論文において、フランス語圏の建築教育機関で19世紀から20世紀にかけて用いられたとされる

「parti」の概念について論じている。吉田鋼市は、この論文の文末脚注 3) において「この語（筆者註：parti）を好んで用いた中村順平は『建築学第一巻』では原語をそのまま用い、後の『建築という芸術』（相模書房 1978）では parti に相当すると覚しき個所で、「根本方案」という表現を用いている」⁵⁶と述べ、また、文末脚注 9) において「中村順平『建築学第一巻』でも parti はグロモールとほぼ同じ調子で強調されている。ガデの叙述に則ったという『建築学第一巻』ではあるが、parti に関する同様な記述は、先述の通りガデにはない。したがって、それは中村が受けた当時のボザールの教育の直接の反映と見られる」⁵⁷と述べ、中村順平が受けたエコール・デ・ボザールでの建築教育がその後の中村順平の建築理論や教育手法に影響を与えた可能性を示唆している。

④ ジュリアン・ガデと中村順平の建築理論

中村順平がジュリアン・ガデを意識し自身の建築理論書といえる「建築学」をまとめた可能性については、これまで様々な研究で触れられてきた。例えば、黒石いずみは、「フランス外でのエコール・デ・ボザール」（2002）⁵⁸において、中村順平の「教育思想や方法は他校に広がることはなく日本の近代建築教育では孤立したもの」⁵⁹であったと述べ、中村順平がジュリアン・ガデの「造形原理」とその方法の普遍性に固執したために、「日本の歴史的な、また現実的な建築文化のコンテクストに適合できなかった」⁶⁰と指摘している。また、黒石いずみは、中村順平がジュリアン・ガデの『建築の諸要素と理論』を「翻訳」し、「日本に紹介した」と述べ⁶¹、前出の『情念の幾何学』（1985）や中島久男の論文での指摘にみられるような同様の見解を示している。

一方、既往研究には、『建築の諸要素と理論』の重要性について指摘する研究もある。例えば、三宅理一は、『SD7811 特集 ボザール その栄光と歴史の全貌』（1978）において、『建築の諸要素と理論』がエコール・デ・ボザールの代表的な建築理論書であったことを指摘し、また、吉田鋼市は、「デュランとガデ（建築書の 20 世紀）」（1999）⁶²において、同書の 1929 年から 1930 年ごろに刊行された第 6 版が 1970 年代までフランスの本屋で流通していたことを指摘している。このことからエコール・デ・ボザールで学んだ中村順平の留学期間においても『建築の諸要素と理論』は重要な書物であった可能性が高く、『建築の諸要素と理論』がエコール・デ・ボザールの建築教育において長期にわたり重要な役割を果たしてきたことがわかる。

⑤ 中村順平と横浜高等工業学校における建築教育

中村順平の横浜高等工業学校における教育活動やその成果は、これまで様々な場面で発表された。特に、網戸武夫による一連の論考、特に雑誌『建築知識』に全 35 回にわたり連載された「建築家外伝」（1978-1981）⁶³の加筆修正版である『情念の幾何学』（1985）はその中心的な役割を担ってきたといえるだろう。網戸武夫によるこれらの研究の他、横浜高等工業学校初代校長をつとめた鈴木達治の一連の論考は、中村順平の人物像を知る上で重要な史料である⁶⁴。また、三木哲が横浜国立大学卒業論文として提出した『建築家中村順平論序論』（1965）⁶⁵は、中村順平の存命中にまとめられた評伝ともいえ、多くの教え子たちへの実際の聞き取り証言の結果が記載されており、資料性が高い。なお、網戸武夫から多くの情報を得たこの論文は、『情念の幾何学』との類似性が指摘できる。

一方、『近代日本建築学発達史』（1972）における横浜高等工業学校の建築教育に関する伊達邦男に

よる論考では、中村順平の教育の全貌やその他の教育者による教育についての論及が少ないが、中村順平の建築教育の特徴的な成果とも考えられる「建築図画」の表現技法や、その教育のインパクトが指摘されている。

その他、横浜高等工業学校における建築教育に関連する研究として、中村順平の著述にみる古典概念を概括した筆者の修士論文『中村順平《classique》考』(2001)⁶⁶や、網戸武夫の言説と距離を保ちながら独自の視点で中村順平が分析された前出の吉田鋼市論文、さらに、横浜高等工業学校における建築教育の断片的な情報が記載された『横浜国立大学工学部五十年史』(1973)⁶⁷がある。また、横浜高等工業学校での建築教育に関する卒業生の証言が度々掲載された文献には、中村順平の死後の1983年ごろに教え子たちが中心となって設立し、2009年に閉会した「檜の会」の機関誌『檜』(全14号、1989～2004)⁶⁸や『あすなろ』(全9号、1990～2009)⁶⁹、横浜国立大学の同窓組織「水煙会」による会報『水煙会報』(1971～)⁷⁰などがあり、中村順平の当時の建築教育の動向を把握する上で有用な史料といえる。

また、近年、大阪歴史博物館による『館蔵資料集 5 建築家・中村順平資料』(2009)⁷¹発刊以降、大阪歴史博物館学芸員酒井一光の尽力により、これまで各地に分散して存在した中村順平関連資料が収集されている⁷²。こうした資料や前述の「檜の会」の2009年閉会後の後継組織「桧の会」が保存する横浜高等工業学校で行われた設計・製図課題の史料などは中村順平研究において重要である。

既往研究を以上の5つの分類により整理した結果、近代日本におけるフランス建築理論・教育手法の受容に関して、また、中村順平との関係において、以下の課題が浮き彫りになった。

①の既往研究の整理から、近代フランスの建築教育や技術教育の伝播について、各国間における教育機関相互関係の明示の必要性が指摘できる。また、例えば、渡邊研司が2012年に発表したイギリス・AAスクール創設期に着目した論考において「建築教育に対する貢献があるにも関わらず、それを検証する学術的研究はイギリスにおけるものを除き、ほとんど行われていない」⁷³と述べるように、近代の外国の建築教育機関の整理も重要な課題である。本論文では、近代フランスにおける教育機関に関する既往研究の断片的な情報を整理し、その歴史的な変遷を日本語情報としてまとめる。

②の既往研究の整理から、近代日本におけるフランス建築理論や教育手法の受容を解明するための情報としてお雇いフランス人建築家の再整理の必要性が指摘できる。澤護の研究はひとつの先行研究といえるが、別のお雇いフランス人建築家の存在などを含め再調査し、近代日本における建築教育機関との関係を改めて整理する。

③の既往研究の整理から、中村順平のエコール・デ・ボザール留学期の情報の再調査・再整理の必要性が指摘できる。既往研究では、概要の描写に留まっており、中村順平が具体的にどのような教師のもとでどのような教育を受けエコール・デ・ボザールを過ごしたのかについては不明な点が多い。中村順平にみるフランス建築理論や教育手法の受容の解明には、吉田鋼市が指摘するように、中村順平の留学期の整理は必要だろう。例えば、辰野金吾の欧州体験について着目し、その足跡をたどり論考をまとめた清水重敦・河上眞理の『佐賀偉人伝 08 辰野金吾』(2014)⁷⁴やその発展的な書物である『辰野金吾』(2015)⁷⁵にも見られるように、近代日本の建築教育を牽引した人物たちなどの外国体験に関する部分に着目した研究は、いまだ発展過程にある研究といえる。本論文においても、同様の

問題意識から、中村順平が行なった建築教育との相対化を図るために、中村順平のエコール・デ・ボザールでの経験を整理する。

また、中島久男が指摘するように、中村順平の教育にみる建築製図のシステムやその表現に関する特徴を捉えた言説はいくつか発見できるものの、中村順平の理論面での貢献に関する具体的な分析は乏しい。中島久男が残した課題ともいえる「翻訳原稿 VI」の分析は、中村順平にみるフランス建築理論や教育手法の受容の解明には必要だろう。「翻訳原稿 VI」は『『建築学』草稿』と見られ、『建築の諸要素と理論』との内容上の比較が必要だろう。さらに、吉田鋼市が指摘する《parti》に着目し、中村順平の当時の建築理論の受容経路の一端を解明する。

④の既往研究の整理から、ジュリアン・ガデの『建築の諸要素と理論』と中村順平の「建築学」の比較の必要性が指摘できる。確かに、『建築の諸要素と理論』の内容を日本に紹介した中村順平の功績は大きい。が、はたして中村順平は『建築の諸要素と理論』だけを翻訳し日本に紹介したのか。この点については、中村順平の既刊著述や③の課題でもある『『建築学』草稿』を手がかりに再検討する。

⑤の既往研究の整理から、中村順平の教育とエコール・デ・ボザールの教育システムとの具体的な比較、中村順平の参照した理論の解明、中村順平の教育活動における座学と設計製図科目との具体的な相関関係に関する分析の必要性が指摘できる。

また、既往研究では、中村順平の建築教育をエコール・デ・ボザールの領域を超えた広範囲にわたる他のフランスの教育機関と比較した研究は少なく、中村順平にみるフランス建築理論と教育手法の受容という観点からの分析により、中村順平が意図した建築理論や教育手法の全体像の把握や教育モデルの発見の可能性が高まる。一方、中村順平の教育モデルを検証する上で、エコール・デ・ボザールの教育の整理のみならず、中村順平が受けた日本での建築教育の整理も必要である。

最後に、中村順平に関する既往研究の多くは、一人の弟子、網戸武夫によって中村順平の死後まとめられた評伝『情念の幾何学』（1985）が参照され、その評伝がベースとなり発展・拡散し、中村順平に関する通説となり事実として捉えられているところがある。本論文では、いまいちど網戸武夫の一連の論考を史料から客観的・批判的に読み直し、中村順平の業績を再考する。

研究の方法と本論文の構成

本論文の目的は、近代日本におけるフランス建築理論と教育手法の受容に関する研究のうち、1925年より横浜高等工業学校建築学科教授を務めた中村順平（1887-1977）の建築教育にみる受容の一端を解明することにある。本論文では、近代日本におけるフランス建築理論と教育手法の受容という観点から中村順平の教育と理論を学術的に論証する。特に、中村順平の留学期のフランスの建築教育に関する史料や、各所に分散した中村の教育史料の発掘や調査に努め、実証的に史料を分析・再構成し、既往研究を再検討し、中村順平の教育業績を再考する。

本論文は、序論と本論全3編8章、結論で構成される。

序論は、研究の目的、中村順平の略歴、既往研究の成果と課題、研究の方法と本論文の構成について述べる。

本論第1編全2章および本論第2編全2章は、中村順平が横浜高等工業学校で行なった建築教育の内容に関する具体的な分析のための基盤的研究と位置づけ、

- ① 近代における世界の建築教育機関と建築思潮（本論第1編・第1章）
- ② 近代日本における建築教育機関再考（本論第1編・第2章）
- ③ 中村順平が受けた日本の建築教育（本論第2編・第1章）
- ④ 中村順平が受けたフランスの建築教育（本論第2編・第2章）

の4点に焦点をあて、中村順平が受けた建築教育を中心に歴史的事象を整理し、それぞれフランス建築理論・教育手法の受容の観点から考察を加える。

本論第1編・第1章では、近代日本の発展に寄与したお雇い外国人の出身国のうち、欧米主要4ヶ国、イギリス、フランス、ドイツ、アメリカの建築教育機関に着目し、近代日本が参照可能であった建築教育機関の存在を整理する。各国での教育の特徴をまとめ、フランス建築教育との関係性を解明し、同時に、近代日本の建築教育開始以前の近代世界の建築思潮およびフランスの役割を概括する。

本論第1編・第2章では、近代日本における工部大学校の建築教育を牽引したジョサイア・コンドル（Josiah Conder, 1852-1920）と、その教育を引き継いだ辰野金吾（1854-1919）の建築教育の特徴を整理し、中村順平が横浜高等工業学校で行った建築教育と近代日本の建築教育機関における教育との因果関係を検証する際に使用する基礎情報を概括する。また、近代日本の教育制度の導入期におけるフランスの教育制度や教育機関の分類との類似性に着目し、その当時の建築教育機関を再考する。主に太政官制から内閣制に移行するまでの教育機関に着目し、近代日本の黎明期の教育機関における工部省管轄の建築教育機関以外の存在や、当時のお雇いフランス人建築家や建築教師と建築教育機関との関係を分析する。

本論第2編・第1章では、中村順平が受けた近代日本の建築教育の整理を目的とし、まず、高等工業学校における建築教育の成立を概括し、その後、中村順平の母校のひとつ、名古屋高等工業学校建築科の建築教育にみるフランスとの関係を検証する。同校において行なわれた鈴木禎次の建築教育を通じて、中村順平は当時のフランスの建築教育に触れた可能性が高い。ここでは、中村順平の在学期の教育者、教育プログラムに着目し、名古屋高等工業学校の教育の特徴を史的資料から整理し、さらに卒業生達の証言を加え、鈴木禎次の建築教育にみるフランスとの関係を考察する。

本論第2編・第2章では、中村順平が受けたフランスの建築教育について概括する。本章は、主に本論第3編において検討する横浜高等工業学校における中村順平の建築教育との関係を検証するための基礎資料である。特に、既往研究から浮き彫りになった中村順平がパリのエコール・デ・ボザールで受けた建築教育および留学期に関するいくつかの未解決の課題を概括する。なお、未解決の課題として考えられるのは、

- ①当時のエコール・デ・ボザールにおける建築教育（歴史とその世界的伝播）
- ②建築専門科目の教育プログラムと教員陣容
- ③中村順平留学期のエコール・デ・ボザール建築セクションのアトリエとその主宰者
- ④中村順平所属アトリエとその在籍者
- ⑤エコール・デ・ボザールの進級システム
- ⑥中村順平の卒業までのプロセスと提出設計課題

の6項目に大別できる。本章では、これら6項目を主としてこれまで発行・出版された史料と当時の中村順平のエコール・デ・ボザールでの成績表をもとに整理し、本論第3編で考察する中村順平の横浜高等工業学校で行った建築教育との相関関係の検証にむけた基礎資料の整備を行なう。

本論第3編全4章では、主に横浜高等工業学校において中村順平が担当した実技科目「実習」と座学科目「建築学」の2つの科目に着目し、フランス建築理論と教育手法の受容を考察する。

本論第3編・第1章では、横浜高等工業学校建築学科と設計・製図の教育者に関する概括である。横浜高等工業学校建築学科に関する既往研究では、中村順平の存在は大きく取り上げられてきた。一方で、中村順平以外の教育者にみるフランス建築教育や教育手法の受容の可能性に関する具体的な検証、中村順平との関係、ならびに、横浜高等工業学校建築学科の教育内容にみるフランスとの関係性に関する分析はこれまで希薄であった。

本章では、こうした問題意識から、

- ①横浜高等工業学校設立背景
- ②横浜高等工業学校建築学科歴代教育者
- ③中村順平を中心とした設計・製図科目の教育者

の3点に着目し、その特徴を概括する。これらの整理から、横浜高等工業学校建築学科の位置づけや、同校における設計・製図の教育者科目の傾向を中村順平との関係から紐解き、中村順平の教育が受け入れられた横浜高等工業学校の建築教育機関のあり方を分析する。

本論第3編・第2章は、横浜高等工業学校建築学科の設計・製図教育にみるフランスの建築理論と教育手法の受容の研究である。

本章では、まず、中村順平の「実習」科目を以下の2点から概括する。

- ①「実習」科目の基礎課程としての建築図画 *Dessin d'architecture*
- ②「実習」科目の練磨課程としての各種設計競技課題

「実習」科目の分類に関しては、『横浜高等工業学校建築設計競技図集』（1937）⁷⁶掲載の中村順平による分類と、中村順平が受けたエコール・デ・ボザールでの分類とを比較する。その比較から横浜高等工業学校で行われた「実習」科目にみるフランス建築教育手法の受容を考察する。また、中村順平の「実習」科目課題を基礎課程と練磨課程の2つの課程に大別し、それぞれの特徴を整理する。基

礎課程については、実際の課題提出作品の写真保存された資料を対象に、練磨課程については、これまでに収集した当時の課題文や提出された図面の画像などを対象に、フランス建築理論と教育手法の受容の観点から分析する。

次に、中村順平以外の教員が担当した設計・製図科目のうち「図学」科目に着目し、その教育にみるフランス建築理論と教育手法の受容を考察する。

本論第3編・第3章および第4章は、中村順平の座学「建築学」科目に関する研究である。

本論第3編・第3章では、中村順平の担当した「建築学」と呼ばれる科目について

- ①「建築学」科目に関する卒業生などの体験談や講義録という形で残された資料の分析
- ②その内容にみられるフランスの建築理論との接点
- ③「建築学」科目とエコール・デ・ボザールの建築教育との接点

の3点に着目し「建築学」を再考する。中村順平の講義録は、雑誌『建築世界』（建築世界社）において「建築学」として1925年7月号より1937年2月号までの約12年間にわたり、不定期で計63回掲載された。その後、連載された「建築学第一巻」と「建築学第二巻」の部分は改稿され、中村順平の著書『建築学総説篇』（1944）⁷⁷として刊行された。既往研究では、この著作が20世紀初頭に出版されたエコール・デ・ボザールの建築理論書の翻訳であるとする見方が定着している。

本章では、こうした定説に対し、『建築世界』誌で連載された「建築学」（1925-1937）や『建築学総説篇』（1944）が、エコール・デ・ボザールの建築理論書の単なる翻訳ではないと仮定し、中村順平留学時の同校の建築教育との直接的な接点を探り、より広範な視点から他の建築理論書等との関係を探る。特に、中村順平の理論的な影響として既往研究で取り上げられてきたジュリアン・ガデや、中村順平が留学期に師事したジョルジュ・グロモールとの関係を検証するだけでなく、本論第2編・第2章の整理から得られる中村順平の留学期の専門科目の教育者などに着目し、前掲の「建築学」（1925-1937）や『建築学総説篇』（1944）との関係性を解説し、中村順平のより広範な建築理論の受容を具体的に考察する。

本論第3編・第4章では、中村順平の未刊行『『建築学』草稿』を対象にその構成およびそこで使用された参考文献を解明する。既往研究ではこれまで十分に行なわれていない『『建築学』草稿』に記された内容やその構成に着目し、本章では、この草稿を翻訳原稿と捉え、参考文献書誌情報を解明する。そして、この解明作業から得られる文献情報とフランスの建築教育や日本の建築教育との相関関係を解明し、中村順平にみるフランス建築理論や教育手法の受容を考察する。また、本論第3編・第2章で整理する収集課題とこの草稿との関係を探り、「建築学」科目と「実習」科目との相関関係を解明する。こうした、検証を通じ、近代フランスにおけるエコール・デ・ボザール以外の建築教育機関を含めた広範にわたる建築理論と教育手法へとその射程を広げ、これまでその価値づけが不明確であった中村順平の横浜高等工業学校での「建築学」講義の草稿とされる『『建築学』草稿』におけるフランス建築理論との具体的な関係を分析し、近代日本建築史および教育史における位置づけを再定義する。

結論では、各章での成果と課題を整理し、全体を総括する。

序論 註

- ¹ レイナー・バンハム『第一機械時代の理論とデザイン』（石原達二・増成隆士訳）鹿島出版会，1976
- ² レイナー・バンハム，前掲書，p.8
- ³ ケネス・フランプトン『現代建築史』（中村敏男訳）青土社，2003
- ⁴ ケネス・フランプトン，前掲書，pp.17-18
- ⁵ ケネス・フランプトン『テクトニック・カルチャー』（松畑強・山本想太郎訳）TOTO 出版，2002
- ⁶ レオナルド・ヴェネヴォッロ『近代建築の歴史』（上巻・下巻：武藤章訳）鹿島出版会，1978-1979
- ⁷ 近江栄「建築教育 明治・大正の歩み」『建築雑誌』Vol.90, No.1101, pp.1027-1031, 日本建築学会，1975, pp.1029-1030
- ⁸ 藤井正一郎「JIA の建築家達 松本陽一」<http://www.jia.or.jp/topics/kenchikuka/dat/matsumoto.htm>
(最終アクセス：2015.02.05)
- ⁹ 横浜国立大学建築学教室編，建築学教室カタログ「横浜国立大学で建築を学ぶということ」横浜国立大学建築学教室，2012によれば，「横浜国立大学の建築教育は，その前身である横浜高等工業学校に建築学科が創設された時(1924年)から主任教授をつとめた中村順平（エコール・デ・ボザールで学びフランス建築士 D.P.L.G.の称号をもつ，芸術院会員，文化功労者）により，日本で初めてそして唯一の徹底した建築家教育が実践されたことで有名です。戦時中も，横浜では芸術文化としての建築教育が行われていました。中村順平は戦後，横浜国立大学移行後も 1950 年まで教育を続けられ，その四半世紀にわたるデザイン教育の伝統が横浜国立大学建築学教室に継承されています。この伝統の故，本学は建築デザイン部門においてもその実践が国際的に高く評価されている教員が多く，またその教育の成果として建築界に優れた人材を多数輩出していることでも知られています。」
- ¹⁰ 酒井一光「9013 建築家・中村順平の設計活動についての一考察」『日本建築学会近畿支部研究報告集：計画系』第 53 号，p.797-800，日本建築学会，2013
- ¹¹ 日本芸術院令 1 条によれば，日本芸術院は「芸術上の功績顕著な芸術家を優遇するための荣誉機関」であり，日本芸術院賞は，日本芸術院「会員以外の者で，卓越した芸術作品と認められるものを制作した者及び芸術の進歩に貢献する顕著な業績があると認められる者」に対して贈られる賞である。
- ¹² 日本芸術院会員は，日本芸術院賞受賞者の中から各分野に空席がある場合に限り，「芸術上の功績顕著な芸術家」が推挙され会員となる。日本芸術院賞受賞者全員がその荣誉を授かるわけではなく，中村順平の場合，日本芸術院会員であった吉田五十八が 1974 年に逝去したため，第六分科建築に空席が発生したからであった。1975 年から村野藤吾（在任期間 1955-1984），谷口吉郎（在任期間 1962-1979）と中村順平の 3 名が第六分科建築の会員となった。
- ¹³ 日本建築学会によれば，『近代日本建築学発達史』（丸善，1972）は建築学会 80 周年の記念事業として 1972 年に刊行されたもので，東京大学教授を務めた建築史家関野克が日本建築学会内に設置された「近代日本建築学発達史委員会」の委員長をつとめ実現した。12 分科会が設置され，その中のひとつに「建築教育」に関する分科会が設けられていた。なお，この書物は，「明治初期に西洋建築が導入されて以降 100 年における近代建築の発展過程について網羅的に資料の収集整理を行い，戦前に重点をおいて建築学の動向を記録したもの」である。
- ¹⁴ 南カリフォルニア大学建築学部長を 1945 年ごろまでつとめた。
- ¹⁵ Weatherhead, A., C. : The History of Collegiate Education in Architecture in the United States, Columbia University, 1941, PhD Thesis

-
- ¹⁶ 小林克弘編『SD8311 特集・アメリカン・ボザール』鹿島出版会, 1983
- ¹⁷ ニコラス・ペヴスナー『美術アカデミーの歴史』(中森義宗・内藤秀雄訳) 中央大学出版部, 1974
- ¹⁸ 田所辰之助『20 世紀初頭のドイツ近代建築の発展過程における近代工芸理念成立史の研究』東京大学, 1997, 学位論文
- ¹⁹ 三宅理一編『SD7811 特集 ボザール その栄光と歴史の全貌』鹿島出版会, 1978
- ²⁰ アニー・ジャック, 三宅理一解説『ボザール建築図集』(求龍堂グラフィックス) 求龍堂, 1987
- ²¹ 土居義岳『アカデミーと建築オーダー』中央公論美術出版, 2005
- ²² 三宅理一『フランス建築事情』鹿島出版会, 1979
- ²³ Drexler, A. (éd) : The Architecture of the Ecole des Beaux-Arts, Museum of Modern Art, 1977
- ²⁴ Middleton, R. : The Beaux-Arts Tradition and nineteenth-century French Architecture, The MIT Press, 1982
- ²⁵ Epron, J., P. : Architecture, une anthologie. Les architectes et le projet, Mardaga, 1992
- ²⁶ フランク・ジェンキンス『建築家とパトロン: 16 世紀から現代までの建築家の職能と実務の史的研究』(佐藤彰・五島利兵衛訳) 鹿島出版会, 1977
- ²⁷ スピロ・コストフ編『建築家: 職能の歴史』(槇文彦監訳, 日経アーキテクチュア・ブックス) 日経マグローヒル社, 1981
- ²⁸ 丹羽和彦『エコール・ポリテクニクにおける建築教育の理論的特性に関する研究』名古屋大学, 1993, 学位論文
- ²⁹ 北河大二郎『近代都市パリの誕生—鉄道・メトロ時代の熱狂—』河出ブックス, 2010
- ³⁰ オーギュスト・ショワジー『建築史 (上巻・下巻)』(桐敷真次郎訳), 中央公論美術出版, 2008
- ³¹ 土木学会編『古市公威とその時代』土木学会, 2004
- ³² Lucan, J. : Composition, non-composition. Architecture et théories XIXe-XXe siècles, PPUR (Presses polytechniques et universitaires romandes), 2009
- ³³ Lambert, G., Thibault, E. : L'atelier et l'amphithéâtre. Les écoles de l'architecture, entre théorie et pratique, Mardaga, 2011
- ³⁴ Sénéchal, P., Barbillon, C., (ed) : Dictionnaire critique des historiens de l'art actifs en France de la Révolution à la Première Guerre mondiale, site web de l'INHA, 2009, <http://www.inha.fr/spip.php?article2309> (最終アクセス: 2015.02.05)
- ³⁵ 恒川清爾『明治期における技術者の分析: 近代技術確立をめぐる職人と職人的技術者』東京工業大学, 2006, 学位論文
- ³⁶ 三枝博音, 野崎茂, 佐々木峻『近代日本産業技術の西欧化』東洋経済新報社, 1960
- ³⁷ アントワーズ・レオン『フランスの技術教育の歴史』(もののべ・ながおき訳・文庫クセジュ) 白水社, 1968
- ³⁸ 堀内達夫『フランス技術教育成立史の研究: エコール・ポリテクニクと技術者養成』多賀出版, 1997。なお, この著書のもととなった堀内達夫『フランス近代技術教育の成立史研究: エコール・ポリテクニクの成立と技術者養成』名古屋大学, 1995, 学位論文もある。
- ³⁹ 中村征樹『近代フランスにおける技術教育の展開: 技師集団と職人層の技術知の創造と共有をめぐって』東京大学, 2005, 学位論文
- ⁴⁰ 飯田史也『近代日本における仏語系専門学術人材の研究』広島大学, 1996, 学位論文
- ⁴¹ 西堀昭『日仏文化交流史』駿河台出版社, 1981

- 42 西堀昭『日本の近代化とグランド・ゼコール：黎明期の日仏交流』柘植書房新社，2008
- 43 富田仁・西堀昭『横須賀製鉄所の人びと』有隣堂，1983
- 44 澤護「幕末・明治初年来日のフランス人建築家」『千葉敬愛経済大学研究論集』第28号，pp.119-153，千葉敬愛経済大学，1985
- 45 例えば，マルク・アントワヌ・ロージエ『建築試論』（三宅理一訳，中央公論美術出版，1986），ジャック・フランソワ・ブロンデル『建築序論』（前川道郎監修・白井秀和訳，中央公論美術出版，1990），ルイ・ピエール・バルター『ボザール建築理論講義』（白井秀和訳，中央公論美術出版，1992），ヴィオレ＝ル＝デュック『建築講話』（飯田喜四郎訳，中央公論美術出版，2004），オーギュスト・ショワジー『建築史』（上・下巻，桐敷真次郎訳，中央公論美術出版，2008）などがある。
- 46 羽生修二『ヴィオレ・ル・デュック：歴史再生のラショナルリスト』（SD選書218）鹿島出版会，1992
- 47 吉田鋼市『オーギュスト・ペレ』（SD選書196，鹿島出版会，1985），『トニー・ガルニエ』（SD選書219，鹿島出版会，1993），『オーダーの魅惑』（鹿島出版会，1994）
- 48 三宅理一「強烈な異国体験に生きた孤高の建築家 中村順平」『近代日本の異色建築家』（朝日選書261：近江栄・藤森照信編）朝日新聞社，pp.183-192，1984
- 49 網戸武夫『情念の幾何学：形象の作家中村順平の生涯』建築知識，1985
- 50 中島久男「日本におけるエコール・デ・ボザール教育の導入について」『学術講演梗概集．F，都市計画，建築経済・住宅問題，建築歴史・意匠 1987』pp.771-772，日本建築学会，1987
- 51 中島久男，前掲書，p.772
- 52 中島久男，前掲書，p.772
- 53 中島久男，前掲書，p.772
- 54 Guadet, J. : Eléments et Théorie de l'architecture, 4 vol., Librairie de la construction moderne, n. d., 1901-1904
- 55 吉田鋼市「《parti》の意味について―クローケ，ガデ，グロモールの使用例による一考察―」『学術講演梗概集．F，都市計画，建築経済・住宅問題，建築歴史・意匠 1989』pp.903-904，日本建築学会，1989
- 56 吉田鋼市，前掲書，p.904
- 57 吉田鋼市，前掲書，p.904
- 58 黒石いずみ「フランス外でのエコール・デ・ボザール」『青山学院女子短期大学紀要』第56号，pp.A109-A122，青山学院女子短期大学，2002
- 59 黒石いずみ，前掲書，p.A113
- 60 黒石いずみ，前掲書，p.A113
- 61 黒石いずみ，前掲書，p.A112
- 62 吉田鋼市「デュランとガデ（建築書の20世紀）」『建築雑誌』Vol.114，No.1433，p.29，日本建築学会，1999
- 63 網戸武夫「建築家外伝」『建築知識』建築知識，1978-1981
- 64 鈴木達治『煙州満筆』煙州会，1951や鈴木達治『煙州残筆』煙洲鈴木達治先生米寿祝賀会，1959
- 65 三木哲『建築家中村順平論序論』横浜国立大学工学部建築学教室，1965，卒業論文
- 66 林要次『中村順平《classique》考』横浜国立大学大学院，2001，修士論文
- 67 横浜国立大学工学部編『横浜国立大学工学部五十年史』横浜国立大学工学部，1973
- 68 『檜』（檜の会発行）は全14号発行された。創刊号は1989年6月に，最終号第14号は2004年9月に発行。

⁶⁹ 『あすなろ』（檜の会発行）は全 9 号発行された。創刊号は 1990 年 5 月に、最終号第 9 号は 2009 年 2 月に発行。

⁷⁰ 『水煙会会報』（水煙会発行）は、2014 年末現在、第 44 号まで発行されている。

⁷¹ 大阪歴史博物館編『館蔵資料集 5 建築家・中村順平資料』大阪歴史博物館、2009

⁷² 大阪歴史博物館学芸員酒井一光は大阪歴史博物館に所蔵された資料等をもとに、中村順平の作品リストの公表や、中村順平と弟子たちとの設計活動に着目した論考（註 10）前掲論文）などを発表している。その他に「中村順平の設計した商店建築—Yukiya 洋裁店と尾上美粧院について—」（所収：『大阪歴史博物館研究紀要』第 11 号，pp.37-54，大阪歴史博物館，2013），「中村順平画「前橋八幡宮透視図」と実現した社殿について」（所収：『共同研究成果報告書』第 4 号，pp.A39-A54，大阪歴史博物館，2010）などがある。

⁷³ 渡邊研司「アーキテクチュラル・アソシエーション創設時における建築教育の理念と内容 1847 年から 1859 年を中心に」『日本建築学会計画系論文集』第 77 巻，第 677 号，pp.1809-1815，日本建築学会，2012，p.1809

⁷⁴ 清水重敦・河上眞理『佐賀偉人伝 08 辰野金吾』佐賀県立佐賀城本丸歴史館，2014

⁷⁵ 清水重敦・河上眞理『辰野金吾』（ミネルヴァ日本評伝選）ミネルヴァ書房，2015

⁷⁶ 横浜高等工業学校建築学科編『横浜高等工業学校建築設計競技図集』洪洋社，1937

⁷⁷ 中村順平『建築学総説篇』土木雑誌社，1944

本論第 1 編 近代建築教育機関の潮流

第 1 章 近代における世界の建築教育機関と建築思潮

第 2 章 近代日本における建築教育機関再考

第 1 章 近代における世界の建築教育機関と建築思潮

1. 近代日本とお雇い外国人の主要4カ国

明治期の日本の建築教育を牽引した辰野金吾（1854-1919）は、「東京に於ける洋風建築の變遷」⁷⁸と題した論考において、当時の欧米からの建築技術の導入過程の変遷をお雇い外国人との関係を交え、次のように分類している⁷⁹。

- ① アメリカ時代（リチャード・ブリジェンス（Richard P. Bridgens, 1819-1891）および和洋折衷風）
- ② トーマス・ジェームズ・ウォートルス（Thomas James Waters, 1842-1892）のイギリス時代
- ③ シャルル・アルフレッド・シャステル・ド・ボアンヴィル（Charles Alfred Chastel de Boinville, 1850-1897）らのフランス時代
- ④ ルネッサンス、ロマネスク風の流行するイタリア時代
- ⑤ ジョサイア・コンドル（Josiah Conder, 1852-1920）のイギリス時代（④とほとんど前後して）
- ⑥ ヘルマン・グスタフ・ルイ・エンデ（Hermann Gustav Louis Ende, 1829-1907）・ヴィルヘルム・ベックマン（Wilhelm Böckmann, 1832-1902）以後のドイツ時代

この分類に従うならば、欧米からの建築技術の導入経路は、アメリカ→イギリス→フランス→イタリア→イギリス→ドイツという流れとなる。近代日本を支えた欧米からのお雇い外国人の主要出身国が、イギリス・フランス・ドイツ・アメリカの4カ国であったことを考えれば、この主要4カ国の人物によって、近代日本における建築技術が発展したといえる。

また、『明治初期の洋風建築』（1929）⁸⁰の著者で知られる建築家堀越三郎は、同様の発展過程について、「明治維新から明治7年1月まで」を「ウォートルス時代」、「明治7年から同10年工部大学校開校まで」を「ボアンヴィル時代」、「明治10年から同18年工部省廃止まで」を「コンドル時代」と分類し、近代日本における建築技術が、イギリス・フランスからの人物によって導入されたことを指摘している。

ところで、明治初年におけるお雇い外国人の国別割合は、植村正治の研究⁸¹によれば、フランスが最も高く、全体の約2/3を占めていたことが読み取れる。この数字は、徳川幕府とフランスとの関係の表れとみられる。その後、徳川幕府の勢力が衰えとともに、1880年代には、お雇いフランス人の割合が全体の10%と激減した。一方、明治初年におけるお雇いイギリス人の割合は2割程度であったが、明治政府がイギリスとの良好な関係を築いた結果、その割合は次第に増大する。そのため、工部省管轄の工部大学校設立頃の1870年代中盤のイギリス人の割合は、欧米からのお雇い外国人の約半分となり、この傾向は1880年代後半に至るまで続いた。しかし、さらに時代が進むにつれ、イギリス人の割合は減少し、それとは対照的にドイツ人の割合が高まった。ドイツ人の割合は、1888年ごろには一時イギリスを凌いだ。その後、若干落ち込みをみせたものの、1900年にはイギリスの割合を上回り、お雇い外国人出身国の首位となった。なお、お雇いアメリカ人の割合は、明治初年から1割から2割程度で推移し、一定の勢力が保たれた。

こうしたお雇い外国人比率の変化は、前述の辰野金吾の分類にも対応しており、近代日本の建築教育は、建築分野を担当したこれら4カ国のいずれかのお雇い外国人に牽引される可能性を有していた。

2. 近代における世界の建築教育：お雇い外国人主要 4 カ国を中心に

前述のように、近代日本が世界に要請した結果、お雇い外国人が近代日本の発展に寄与した。特に、イギリス人の割合は、近代日本の黎明期全体を通じて最も高く、イギリス人の多くが工部省に雇われた。その工部省が管轄した教育機関、工部寮からの流れを汲む工部大学校が、近代日本において建築教育を行なった高等教育機関の源流となったと考えられてきた。そして、工部省のお雇いイギリス人建築家ジョサイア・コンドルが、そこでの建築教育の礎を築いたことはよく知られている。しかし、当時のイギリスが技術教育の面では他の欧米諸国、フランスやドイツ、さらにはアメリカに遅れをとっていた。それでは、当時のイギリスにおける建築教育はどのような位置にあったのか。また、他のアメリカ、フランス、ドイツではどのような建築教育が行なわれたのか。

ここでは、イギリスの建築教育と他の 3 カ国の建築教育の相対化を図るため、辰野金吾の分類に従い、お雇い外国人の主要 4 カ国、アメリカ・イギリス・フランス・ドイツの順に、ジョサイア・コンドル来日以前、1877 年以前のこれら 4 カ国の建築教育事情を概観する。

① アメリカ

アメリカにおける 19 世紀初頭の建築教育は、フランスのエコール・ポリテクニクに影響を受けた「科学的な civil engineering 教育」⁸²から始まった。一方、当時の「設計やデザインの教育は一般のオフィス教育」⁸³に委ねられていた。

こうした状況の中、1845 年から 1855 年にかけてアメリカ人として初めてパリのエコール・デ・ボザールに入学し、現地で実務経験を積んだリチャード・モーリス・ハント (Richard Morris Hunt, 1827-1895) が、アメリカ帰国後に自身のアトリエで行った教育が嚆矢となり、デザイン教育を取り入れた建築教育機関の出現へつながった⁸⁴。これは、19 世紀末期のアメリカがヨーロッパの様式移入の折衷主義 (エクレクティズム) 期にあったため、パリのエコール・デ・ボザールを教育機関のモデルとして取り入れた⁸⁵。

アメリカ初となる建築教育機関は、リチャード・モーリス・ハントの弟子、ウィリアム・ロバート・ウェア (William Robert Ware, 1832-1915) 主導で発足したマサチューセッツ工科大学 Massachusetts Institute of Technology に設置された。マサチューセッツ工科大学において、初めて授業が行なわれたのは、1868 年秋であった。つまり、近代アメリカにおける高等教育機関における建築教育は、ジョサイア・コンドルの教育による工部大学校での教育が開始される 10 年前に始まったことになる。

ウィリアム・ロバート・ウェアは、建築教育を開始するにあたりエコール・デ・ボザール出身の建築家ウジェーヌ・レタン (Eugène Létang, 1842-1892) を雇い入れ、マサチューセッツ工科大学の教育にエコール・デ・ボザールの建築教育を導入した。マサチューセッツ工科大学では開設当初から学士・修士のコースが用意され、学士号 Bachelor of Science in Architecture および修士号 Master of Science in Architecture の取得が可能であった。なお、マサチューセッツ工科大学の建築教育の発展に尽力したウィリアム・ロバート・ウェアは、1881 年に開設されたコロンビア大学の建築教育の立ち上げにも尽力した。

アメリカの第2番目の建築教育機関は、コーネル大学 Cornell University に設置された。コーネル大学では、College of Engineering のひとつとして建築教育が盛り込まれた。アメリカの芸術系教育機関であるユニオン・カレッジ Union College の芸術修士号取得者チャールズ・バブコック (Charles Babcock, 1829-1913) によって 1871 年秋より建築教育が開始された。チャールズ・バブコックは、アメリカ建築家協会 American Institute of Architects の立ち上げメンバーの一人で、同協会の初代会長をつとめた。チャールズ・バブコックは、ゴシック・リバイバル Gothic Revivalism の影響を受けたイギリス生まれの建築家リチャード・アップジョン (Richard Upjohn, 1802-1878) に師事し、建築実務を経験した。コーネル大学の最初期 6 年間、チャールズ・バブコックはすべての科目を一人で担当した。最初期のコーネル大学では、学士コースのみ設置され、学士号 Bachelor of Science in Architecture の取得が可能であった。

チャールズ・バブコックの教育方針は、ジョン・ラスキンの "before an architect can become a true artist, he must be a master of the art of building and a man of science." の理念に基づいたものであった。したがって、コーネル大学は、マサチューセッツ工科大学のようにエコール・デ・ボザールを範とした教育機関ではなく、イギリス建築思潮に基づきながらそのスタートを切った教育機関といえる。

一方、コーネル大学の創成期において、イギリスの影響を受けて始まった建築教育は、1881 年にチャールズ・フランシス・オズボーン (Charles Francis Osborne, 1855-1913) が教員に加わり、さらに、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてアレクサンダー・ビューエル・トロブリッジ (Alexander Buel Trowbridge), フランス国立工芸学校およびアメリカ人初のエコール・デ・ボザール修了者のジョン・フリーデンバーグ・ヴァン ペルト (John Vredenburg Van Pelt, 1874-1962) や、クラレンス・オーガスティン・マーティン (Clarence Augustine Martin, 1862-1944) らが加わり、エコール・デ・ボザール流の教育がコーネル大学の建築教育に融合した。

コーネル大学で建築教育を受けた初の卒業生は、ジョン・レイモンド・シューノーヴァー (John Raymond Schoonover) で、1873 年に輩出された。その後、1874 年に 6 名、1875 年に 4 名、1876 年に 6 名、1877 年に 7 名、1878 年に 2 名、1879 年に 4 名と、卒業生が続々輩出されたが、1877 年までの卒業生は 24 名に過ぎない。なお、コーネル大学の創成期に留学した日本人として、小島憲之 (1857-1918) と妻木頼黄 (1859-1916) の 2 名が知られている。小島憲之は、チャールズ・バブコックが一人で教育した時代に入学し、初の外国人として 1879 年に同校を修了した⁸⁶。また、妻木頼黄は、1882 年に工部大学校造家学科を中退し、同年コーネル大学に編入し、1884 年に同校を修了した。

アメリカの第3番目の建築教育機関は、イリノイ大学 University of Illinois に設置され、コーネル大学とほぼ同時期に教育が開始された。イリノイ大学では、マサチューセッツ工科大学での建築教育開始以前にあたる 1867 年に、すでに建築学部設立準備委員会の建議が立てられたが、正式なコースとして建築学部が認められたのは、1873 年秋であった。1873 年に誕生したイリノイ大学での初の建築の学位取得者であるネイサン・クリフォード・リッカー (Nathan Clifford Ricker, 1843-1924) は、同校の建築学部を 1873 年から 1910 年にかけて牽引した。

イリノイ大学の創成期には、バウアカデミー Bauakademie で教育を受けたスウェーデン人建築家ハラルド・ハンセン (Harald M. Hansen) が設計製図の指導にあたった。その関係からか、ネイサ

ン・クリフォード・リッカーは、学位取得の後、半年間ドイツに渡り、ベルリンのパウアカデミーに留学し、同時に他のヨーロッパの建築教育機関の教育手法を研究した。なお、イリノイ大学の建築教育を受けた日本人として、1893年に学士課程を修了し、帰国後、東京高等工業学校（現、東京工業大学）木工科（建築系学科）設立に尽力した滋賀重列（1866-1936）⁸⁷や、鉄筋コンクリート研究で1914年に博士号を受けた阿部美樹志（1883-1965）らがいる。なお、阿部美樹志は、横浜高等工業学校建築学科の講師を務めた人物である。

以上3校が、アメリカの大学機関において1877年以前から建築教育が行われた学校である。工部寮が設立された1874年から工部大学校にジョサイア・コンドルの来日した1877年ごろのアメリカは、各大学がようやく卒業生を輩出した時期で、アメリカの建築教育の黎明期は、フランス、イギリス、ドイツの流れから築かれた。アメリカの建築教育黎明期では、これら3カ国の教育がほぼ同時に吸収され、その後、次第にフランスのエコール・デ・ボザール流の建築教育が主流となった。

② イギリス

イギリスにおいて公式に建築教育を提供した機関は、王立アカデミー・スクール Royal Academy Schools といわれている⁸⁸。1768年創設の王立アカデミー Royal Academy of Arts の付属の教育機関として、王立アカデミー・スクールは、翌年の1769年に開校した。そこでの教育は、「学生の趣味を育て、構成法とその原理への関心を深め、名作の美醜を明示し、隔たりのない書籍学習と構造物の批判的検討への養成を行なうために年6回の講義を開き、そのための建築教授を一名置く」⁸⁹とアカデミーの規約にあるものの、講義は実際には年数回に留まることはしばしばで、その教育は包括的なものではなく、さらに全日制の体系的な建築教育機関といえるものではなかった。

しかし、この王立アカデミー・スクールの開校により、ロンドンの学生の間に建築修行の明確な型が確立された。それは、「既成の建築家のもとに約5年間入門し、それと平行した、製図学校に通い、あるいは王立アカデミーに通学して、講義や模型を図にする演習を受け、これらにつづいて経済が許せば一定期間海外に留学する」⁹⁰というものであった。なお、この種の見聞を広めるために行なわれた外国への一定期間の留学はグランド・ツアー⁹¹と呼ばれた。

近代イギリスにおける大学機関の建築教育は、1840年によく始まる。その教育は、ロイヤル・アカデミー所属の建築家ウィリアム・ホスキング（William Hosking, 1800-1861）による「土木及び建築の構造術」 Arts of construction, in connection with civil engineering and architecture の教室がロンドンのキングス・カレッジ King's College London（1829年創立）において始まり、また、翌年の1841年には、ユニバーシティ・カレッジ University College（1826年創立）において王立英国建築家協会（RIBA, Royal Institute of British Architects の略）の設立に尽力した建築家トーマス・レバートン・ドナルドソン（Thomas Leverton Donaldson, 1795-1885）が講義をはじめたに過ぎない⁹²。いずれの課程も夜間の定時制で、国家標準の建築家養成という観点からみると、イギリスでは必ずしもこの時期までに国家標準の建築家養成制度の確立には至っていない。

また、1847年にロバート・カー（Robert Kerr, 1823-1904）とチャールズ・グレイ（Charles Gray, 1827-1881）によってロンドンにアーキテクチュラル・アソシエーション The Architectural Association が設置され、その付属建築学校として AA スクール The Architectural Association School

of Architecture が誕生したが、AA スクールが正式にはじまるのは 1890 年になってからである。

近代イギリスにおける建築教育は、建築事務所において行われ、その教育は実践を通じた実務者の養成を主眼としたものであった。したがって、アカデミックな理論は、体系的に伝承されず、それぞれの事務所により教育は異なるものであった。近代イギリスにおける建築教育は、主として建築事務所における徒弟制度が核となる修行であったため、学校などの教育機関における教育は補助的なもので、設計事務所での日中の修行の後、通常、夜間に学校で行われた。

つまり、建築事務所が「質の高い「工房（アトリエ）」となり、そこに将来建築家を志望するものたちが属した。建築事務所では、教育という面で見れば、確立された手法が存在していたわけではなかったが、将来建築家を志望するものたちは、建築事務所「丁寧かつ熱心な教えを受け、読書や一般の勉強も促され」⁹³たといわれている。建築家志望者にとって、建築事務所は、建築家への道であったが、建築事務所での修行法は問われていなかった⁹⁴。

こうした徒弟制度がベースとなる近代イギリスの建築教育は、アソシエーションによって支えられ、職能団体偏重型・依存型の実務者の優位性が高い建築教育であったといえる。

一方、建築家養成の視点から王立アカデミーの教育機関の再編成が行なわれ、1870 年には、新たに建築学校が設立され⁹⁵、エコール・デ・ボザールで養成された最初のイギリス人建築家リチャード・フネ・スパイアーズ (Richard Phené Spiers, 1838-1916) がその学寮長に指名された⁹⁶。

そして、イギリスの大学における全日制建築教育は、1894 年になりリヴァプール大学 University of Liverpool においてようやく始まり、20 世紀に入りイギリス全土に展開した。近代日本に招き入れられたジョサイア・コンドルが、イギリスで教育を受けた時期は未だ建築教育の過渡期であった。そのため、ジョサイア・コンドル自身も、他の建築家志望者と同様に、建築家としての自立を目指し、徒弟的立場で師からの教義を受けた。

③ フランス

フランスの場合、建築教育は、将来の役割に対応した省庁管轄の高等教育機関グラン・ゼコールなどで行われた。建築家養成機関の代表格は、パリのエコール・デ・ボザールで、その源流は、フランスの王立建築アカデミー Académie Royale d'Architecture の建築教育にある。1671 年に設立された王立建築アカデミーの附設教育機関 Ecole de l'Académie Royale d'Architecture が、後のエコール・デ・ボザールの源流にあたる。

この王立建築アカデミーの附設教育機関で発展した教授法が、18 世紀から 19 世紀にかけて全ヨーロッパの建築教育に大きな影響を及ぼしたことは様々な研究が指摘するところである⁹⁷。その教授法は、20 世紀初頭ごろまで世界を席卷し、20 世紀に入りドイツにバウハウス Bauhaus が設立されたことにより、ようやくエコール・デ・ボザールの教授法に疑いがもたれるようになったといわれるほどであった⁹⁸。

エコール・デ・ボザールの教育は、アトリエ Atelier・コンクール (設計競技) Concours・講義 Lecture の 3 つの軸で構成された。アトリエは、イギリス同様、徒弟制であり、そこでも教育が行なわれた。一方、イギリスとは異なり、コンクールによってアトリエ内及びアトリエ間の競争が図られ、学内での講義の場において建築理論を授けることで、建築理論の発展・継承が促進された特徴がある。さら

に、フランスでは、教育機関が省庁によって管轄されたことで、国家との強固なつながりのある教育システムが構築された特徴もある。

フランスのエコール・デ・ボザールにおける建築教育システムは、19世紀の世界の建築教育のモデルとなり、国内外の他の建築教育機関にまでその影響力が及んだ。フランス国内では、18世紀末のフランス革命以降から19世紀初頭にかけて、建築教育を導入した高等教育機関が続々と整備され、それぞれ民と官、非軍事と軍事視点から学校の役割が大別された。

軍事的な分野を総括する代表的な教育機関は、1794年に国防省 *Ministère de la Défense* 管轄の組織として設立された公共事業中央学校 *Ecole Centrale des Travaux Publics* である。この機関は、翌1795年9月にエコール・ポリテクニクと改称された。この時代のフランスは、「技師の職業を徹底的かつ組織的な方法で教育した、ただひとつの国」⁹⁹といわれ、エコール・ポリテクニクの教授要綱や教授方法を範とした学校がアメリカやドイツを含む欧米で設立された¹⁰⁰。

エコール・ポリテクニクは、諸芸学 *Polytechnique* を授ける学校として誕生し、教育は単一のコースで行なわれたため、全教科必修であった¹⁰¹。教育内容は、大きく「数学系」と、物理・化学を中心とする「自然学系」に分かれ、前者は更に「解析」と「画法幾何学」*Géométrie Descriptive* に分類され、「建築学」は「画法幾何学」に属す科目として存在した。なお、「画法幾何学」の分類には、「建築学」のほか、「截石学」*Stéréotomie*、「築城学」*Fortification* が、さらに「建築学」科目は第1部と第2部に分類され、第1部では土木分野の教育が行なわれ、第2部では建築分野の教育が行なわれた。ジェネラルな理論の習得が図られたエコール・ポリテクニクの建築教育は、建築の理論的側面の習得と製図を主とした実習、さらに、建築の実践手法を学ぶ建設に関する講義で構成された。なお、ここでの講義は1810年ごろまで行われたが、それ以降、エコール・ポリテクニク出身者が主に進学した応用学校で行われた。

エコール・ポリテクニクでは、2年間でジェネラルな知識を習得し、その後、軍事・民生の6つの応用学校 *Ecole d'application* において実践手法を学んだ。エコール・ポリテクニクは、これら応用学校の準備段階としての位置づけであった。つまり、エコール・ポリテクニクは、軍事・民生の隔てなくあらゆる分野の高級技術官僚を養成する教育機関であり、その教育は、理論や解析学を重視し、数学と物理を最重要科目に位置づけ、さらに、文学・歴史などの文系科目の充実が図られた。エコール・ポリテクニクは、いわば百科全書的教育を特徴とする教育機関であった¹⁰²。

なお、エコール・ポリテクニク修了後に進学可能であった応用学校は、士官養成を目的とした陸軍系の砲工応用学校 *Ecole d'Application de l'Artillerie et du Génie*¹⁰³（1748年設立）、海兵学校 *Ecole de la Marine* の2校、および、技術官僚養成を目的とした国立土木学校¹⁰⁴（1747年設立）、国立高等鉱業学校 *Ecole de Mines*¹⁰⁵（1783年設立）、造船工学校 *Ecole du Génie Maritime*（1741年設立）、測量・地図特別学校 *Ecole Spéciale de Géographie et de Topographie* の4校であった。

前者2校は、専門性の高い軍用の知識や実践手法の習得を目的とした士官養成機関で、後者4校は、非軍用の専門的機関で、国家の技術官僚の養成機関であった。これら応用学校の源流は、エコール・ポリテクニク設立以前から存在し、その源流の技術教育機関は、国家の経済的・軍事的な必要から誕生した。フランスでは、軍事的な側面での「陸軍」、「海軍」の必要と、それに必要な武器の製造が発端となった「マニユファクチュア」の必要から、それぞれ独立した技術教育機関の枠組みが定められ

た。こうした軍事的な側面から設立された応用学校の母体を統合するエコール・ポリテクニクが国防省管轄であることや、技術官僚養成機関の卒業者に与えられた称号に共通する“ingénieur”の語が、かつて「軍事的な機能（武器の製造）」¹⁰⁶を意味したことは、こうした歴史的経緯の名残であった。

一方、建築分野との関係でいえば、砲工応用学校では、“Architecture Militaire”（軍用建築）や軍用土木分野が教授され、また、官僚的立場の人材を輩出した国立土木学校では、非軍用建設全般を取り扱うため、土木分野や建築分野の教育が行われた。さらに、造船工学校では、いわゆる“Architecture Navale”（船の建築）の分野を極めることが可能であり、造船技術にとどまらず、造船所建設のための技術習得などもその教育に含まれた。

ところで、エコール・ポリテクニクでの建築教育は、創設期の1794年ごろから開始された。その開始の約3年間は、建築家ルイ＝ピエール・バルタール（Louis-Pierre Baltard, 1764-1846）が担当した。なお、ルイ＝ピエール・バルタールは王立建築アカデミーで建築家アントワヌ・フランソワ・ペイレ（Antoine-François Peyre, 1739-1823）の元で学んだ建築家で、1818年から1846年にかけて、エコール・デ・ボザールの「建築理論」Théorie de l'architecture 科目を担当した人物である。

ルイ＝ピエール・バルタールの後任として、建築家ジャン＝ニコラ＝ルイ・デュラン（Jean-Nicolas-Louis Durand, 1760-1834）が1797年よりエコール・ポリテクニクの建築教育を牽引し、エコール・ポリテクニクの建築教育の礎を築いた。ジャン＝ニコラ＝ルイ・デュランは、建築家エティエンヌ＝ルイ・ブレ（Etienne-Louis Boullée, 1728-1799）の元で研鑽を積んだ建築家である。ジャン＝ニコラ＝ルイ・デュランによる教授法は、後年に至るまでフランスのエコール・ポリテクニクのみならずエコール・デ・ボザールにおける建築教育にも大きな影響を及ぼしたことが知られている。

また、エコール・ポリテクニクに影響を受け誕生したフランス国内の教育機関として、民間企業の技術者養成機関として設立されたエコール・サントラル（1829年設立）がある。エコール・サントラルは、エコール・ポリテクニクを範とした代表的な教育機関である¹⁰⁷。

エコール・サントラルでは、エコール・デ・ボザール・国立土木学校・砲工応用学校で別個で行われていた公共事業関連の教育を取りまとめ、理論のみならず実務能力の養成を掲げた建築教育が行なわれた。ここでは、総論で学習する理論の習得から実務に即した専門性の獲得を目指した教育が行われ、理論と実務のバランスを図るため、エコール・ポリテクニクのように純粹理論を極めることに主眼をおくのではなく、現実に即した「工学」¹⁰⁸“sciences industrielles”の習得が標榜された。そのため、エコール・サントラルでは、実利的な目的に忠実な技術者の養成を目標に掲げていた。

さらに、1877年以前のフランスに存在した建築教育が行なわれたその他の高等教育機関として、夜学教育機関としての出自をもつ労働者に建築系の講義を行ったフランス国立工芸院 Conservatoire National des Arts et Métiers（1794年設立、1819年ごろより講義開始、1824年より公開講座開始）や、エコール・サントラル出身の技術者エミール・トレラ（Emile Trélat, 1821-1907）によって設立された私立建築学校 Ecole Spéciale d'Architecture（1865年設立。設立時の名称は Ecole Centrale d'Architecture）がある。

こうした建築教育を受けた技術系教育機関の特筆すべき特徴として付言すべき事項として、教科書の存在を指摘する必要があるだろう。これは、建築分野のみならず他の分野においても同様に教科書が整備されたが、特に、建築教育を行ったエコール・デ・ボザール以外の教育機関では、その存在が

重要である。建築教育でいえば、前述のエコール・ポリテクニクにおけるジャン＝ニコラ＝ルイ・デュランの『建築講義要録』¹⁰⁹は、その代表例といえ、ジュリアン・ガデの『建築の諸要素と理論』¹¹⁰にも影響を与えた。こうした教科書の整備・発達が、教育方法の受容を比較的容易としたため、多言語への翻訳などにより、フランスの技術教育が世界的にも影響力を有したと考えられる。

④ ドイツ

徳川幕府がフランスとのつながりを有していたのに対し、明治政府は、当初イギリスとのつながりを重視したが、その後、多くの分野においてドイツの制度を採用するなど、ドイツとの関係を重視した。前述の辰野金吾による明治期における欧米からの建築技術の導入過程の分類において、その最終段階にドイツがあてられているように、近代日本にはドイツの制度が浸透した。これは1870年の普仏戦争のはじまり、翌年フランスがドイツに降伏したことや、明治14年の政変（1881年政変）が示すように、近代日本における憲法のモデルとして、ビスマルクによるドイツ憲法を採用する方針が固められたことなど、複数の要因が考えられる。また、こうした影響が教育にも影を落とした可能性が高い。

建築分野では、近代日本における官庁計画を委ねられた建築家ヘルマン・グスタフ・ルイ・エンデの影響が考えられる。ヘルマン・グスタフ・ルイ・エンデは、ベルリン・バウアカデミーならびにシャルロッテンブルク工科大学（Königliche Technische Hochschule Charlottenburg、現ベルリン工科大学）の教授をつとめた人物である。

ドイツの建築教育は1799年に設立されたベルリンのバウアカデミーを起源として発展した。バウアカデミーは、測量・建築・土木技術者に理論と実地を教える学校として発足した。1879年にバウアカデミーがベルリンの実業学校 Gewerbeinstitut Berlin や工芸学校と合併することで、王立シャルロッテンブルク工科大学が誕生した。その際、入学年齢が18歳に定められ古典的な大学機関と同等のものとされた。1880年ごろの卒業生に見られる実際的な訓練不足を補う意味において、この合併は重要であった。大学における実験室や研究施設への資金援助が政府レベルから行われ、大学内での理論の検証が可能となったといわれている。なお、日本人では、ヘルマン・グスタフ・ルイ・エンデを支えた松ヶ崎萬長（1858-1921）が、岩倉使節団の一員としてドイツに滞在し、そのまま現地の学校で教育を受けたが、その学校が王立シャルロッテンブルク工科大学の前身のひとつの工芸学校であったといわれ¹¹¹、その後、王立シャルロッテンブルク工科大学において建築教育を受けた。松ヶ崎萬長は、まさに合併のタイミングに立ちあつた。また、1911年から1914年にかけてドイツに留学した佐野利器（1880-1956）もシャルロッテンブルク工科大学で過ごしている。

なお、当時のドイツの工科大学は、卒業後の実地で応用できる科学や工学を学ぶ場であった。ドイツの工科大学には、実験室や作業場が設けられた。そこでは、理論の検証が行なわれ、さらに、そこで実務的な訓練を経て、生産の流れが把握できた。しかし、産業が発達するにしたがい、こうした作業場での訓練の重要性が徐々に薄れ、工科大学の作業場は理論の確認の場となり、実務の訓練は卒業後の工場やオフィスにゆだねられた。このように、ドイツの工科大学は、大学卒業後、すぐに役に立つ管理者を求めているイギリスや日本とは異なる教育機関であったといえる。なお、ドイツの場合、技術官僚は別の方法で養成された¹¹²。

以上から、これら4カ国において、近代日本が参照可能であった大学レベルの教育機関は、フランスやドイツを除き過渡期であったといえる。特にアメリカでは、1873年に建築学部を有する大学における初の卒業生が輩出されたが、この1873年は日本では工部省工学寮第1回生が入学した年である。したがって、アメリカからの建築教育モデルの移入は困難であったと考えられる。また、フランスやドイツでは、建築教育機関はアカデミーとつながりのある機関として存在し、いわゆる *University* の一部ではなく、大学機関に属していない組織であった。このことを考慮すれば、近代日本の教育の方向性を模索した人物たちが、当時の欧米列強を視察し、建築教育機関を正確に把握することは困難だった可能性がある。例えば、岩倉使節団の久米邦武による欧米歴訪資料¹¹³によれば、フランスでの教育機関の視察の際、「建築学校」を見聞したが、実際に見聞した学校は正確には国立土木学校であったように¹¹⁴、また、イギリスにおいてサウス・ケンジントン美術館の視察を行なった際、そこで行われていた教育への言及がないように、アカデミーにおける建築教育に関する視察は行われなかった。

そして、北正巳の研究¹¹⁵にあるように、岩倉具綱（1841-1923）が作成した科学技術の習得に関する「海外留学生規則案」において、イギリス・フランス・ドイツ・オランダ・アメリカの欧米諸国のうち、イギリス（建築学）、フランス（建築）、オランダ（建築学）の3カ国の長所には、建築が含まれた。「学」が含まれないフランスを除き、イギリス・オランダの選択肢から、工学系学校の設立をイギリス系としたことにより、結果的に、近代日本は建築学の発展をイギリス人に委ねた。

3. 近代における世界の建築思潮

近代日本における明治中頃までの工部大学校における建築教育は、その教育を牽引したジョサイア・コンドルの影響によるゴシック期と称すべき時代であった。こうした状況に対し、ジョサイア・コンドルから建築教育を引き継いだ辰野金吾（1854-1919）は、「将来の建築は復興式たるべき気運に際している」¹¹⁶と述べ、自身が建築教育の中樞を担った際、ゴシックからルネッサンスへと移行した。この移行は、ある意味では「イギリス建築の主流とされるゴシック・リバイバルや新古典主義など歴史主義をとる姿勢」¹¹⁷からエコール・デ・ボザールが当時行っていた歴史主義や復興主義、折衷主義の建築にみられるルネッサンス的視点からの学びへと変化したことを示しており、こうした建築思潮の変化が近代日本の建築教育に反映された可能性がある。ここでは、19世紀前後の世界の建築思潮を概括する。

「経済史で産業革命期とみなされている 1760～1830 年の時代は、芸術史では、ネオ・クラシシズム期に相当する」¹¹⁸といわれている。この時代に建築と施工との間での乖離が始まり「一方の科学とその技術、他方の芸術、すなわち建設と建築とのギャップ」¹¹⁹が結果的に生じた。レオナルド・ベネヴォロが指摘するように、ネオ・クラシシズムの啓蒙主義精神は、ギリシャやローマの古代建築のモデルとの一致や、伝統的建築部材が構造部材と同一とみなされ得るという範囲での形態自体の合理性を認めることに正当性があると考えられた。また、ネオ・クラシシズムにおいてギリシャやローマの古典的形態よりもゴシックの模倣を模索する動きが、18世紀半ばにはネオ・ゴシックの運動としてイギリス、フランス、ドイツなどで立ち現れる。なお、ゴシックがその時代のデザインへと昇華される背景には、中世の建物修復の経験があったためと考えられている¹²⁰。

世界における教育機関の隆盛と建築思潮の流れと社会情勢の相関関係から紐解くと、世界各国での革命と帝国主義への流れが関係する。なお、ネオ・クラシシズムは、考古学的な古代の再発見と呼応し、欧州の国々で興った独立運動や産業革命などと呼応し終息した。

フランスとの関係でいえば、エコール・デ・ボザールの前身の母体に当たる王立建築アカデミーにおいてローマ賞制度が始まる 1720 年以降、ローマ大賞受賞者がイタリア・ローマへ滞在し、古代ローマの建築実測調査を開始した。こうした実測調査の過程において、1748 年にポンペイを発見することで、ローマ時代の建築を見出し、1762 年にパエストゥムを再発見することで、ギリシャ・リヴァイヴァルへつながり、こうしたポンペイやパエストゥムの再発見により、古代ローマ以前の建築への理解が深まり、古代の様式のヴォキャブラリーの蓄積が可能となった。つまり、ローマ大賞受賞者は、修復建築家としてそのキャリアをスタートさせた点に特徴があり、彼らによって発見・創造された過去のヴォキャブラリーが折衷主義（エクレクティズム）の建築に反映されたと捉えることもできる。また、1789 年に始まるフランス革命および、その後の第一帝政時代へと流れの中でエジプトの建築を見出し、1821 年からはじまるギリシャの独立戦争による 1830 年のギリシャの独立によりギリシャ・リヴァイヴァルの熱に一層の深まりを見せ、1830 年のフランス革命以降の産業革命の影響をヨーロッパ大陸が受けることでネオ・クラシシズムから折衷主義（エクレクティズム）の建築へとその思潮は変化した。

ネオ・クラシシズム期で蓄積されたギリシャやローマ建築のヴォキャブラリーは、その後、ゴシック

ク、ロマネスク、ルネッサンス、エジプト、オリエント（イスラム、中国、日本など）の様式のリヴァイヴァル建築の出現とともにエクレクティズム期においてそれぞれの様式が混ざりあうまでに進化した。1860 年ごろから第一次世界大戦の終局ごろまで欧米ではボザール様式と呼ばれる時期が存在した。これはエクレクティズム期とほぼ同時期に捉えることができるが、エコール・デ・ボザールで行われていた教育に裏付けられた様式選択と現代的な技術の折衷を図ったもので、ジャン＝ピエール・エプロンが述べるように、装飾的なエクレクティズム建築、国家的なエクレクティズム建築、地方におけるエクレクティズム建築、植民地におけるエクレクティズム建築、アメリカのエクレクティズム建築の 5 つの分類が可能である¹²¹。アメリカのエクレクティズムは、主に「ボザール様式」であり、「アメリカン・ボザール」と呼ばれるものに相当する。

こうした状況によって「19 世紀を通じて、技術者は建設技術において進歩し、近代運動によって利用されることになる手段をととのえたが、同時に、彼らはその手段に対して、それを一種の形態の定義に対する無関心と一緒にし、また、構造上の習慣を過去の様式とのある伝統的な照応に拘束してしまうことによって、重い文化的な抵当権を設定した」¹²²とレオナルド・ベネヴォロは指摘している。

小結

本章では、まず、近代日本における欧米からのお雇い外国人の出身国の当時の建築教育機関を概観した。

「1. 近代日本とお雇い外国人の主要4カ国」では、辰野金吾が分類した欧米からの建築技術の導入過程の変遷を整理し、当時の欧米からのお雇い外国人の各国間の比率の変化との相関関係を分析した。その結果、欧米からの建築技術の導入過程の変遷が、欧米からのお雇い外国人の比率に対応して変化したことを指摘した。

「2. 近代に於ける世界の建築教育：お雇い外国人主要4カ国を中心に」では、前節で確認した辰野金吾の分類に従い、お雇い外国人の主要4カ国、アメリカ・イギリス・フランス・ドイツの順に、これら4カ国の建築教育事情を概括した。なお、この概括では、工部寮の建築教育を牽引したジョサイア・コンドル来日以前、1877年以前を主たる対象とした。

その結果、まず、アメリカでは、イギリス、フランス、ドイツ、それぞれとの相関関係を見出せる3つの建築教育機関が建築教育黎明期に出現した。また、アメリカにおいて建築教育を受けた初の卒業生が輩出されたのは、日本の工部寮の開校と同時期であった。したがって、近代日本がアメリカの建築教育を教育モデルとして取り入れるまでには至らなかったことを指摘した。

次に、イギリスでは、大学機関での全日制の教育機関は存在せず、体系的な建築教育の成立は1877年以降であった。また、イギリスの当時の建築教育は徒弟制度がベースであり、その制度はアソシエーションによって支えられた職能団体偏重型・依存型の実務者の優位性が高い建築教育であった。

フランスにおいては、アカデミーを母体として発展したエコール・デ・ボザールにおける建築教育のほか、18世紀末に技術教育機関において建築教育の始まりが確認できた。特に、ここでは、それぞれ民と官、非軍事と軍事の役割に応じた建築教育が行なわれた技術教育機関の存在を確認した。フランスでは、1877年以前に建築教育システムはすでに確立され、その教育システムは、前述のようにアメリカのみならず、世界各国に影響を及ぼした。また、フランスの教育機関は省庁管轄であったため、国家との強固なつながりのある教育システムが構築された。

ドイツにおいては、18世紀末にアカデミーでの建築教育が開始されたが、技術教育機関とアカデミーの融合が図られたのは、日本の工部大学校で初めて造家学科の卒業生を輩出した1879年であった。

「3. 近代における世界の建築思潮」では、欧米における近代建築運動黎明期の建築の潮流を概観した。イギリスにおける18世紀半ばに立ち現れたネオ・ゴシックの運動が、ネオ・クラシズム期においてゴシックの模倣を模索する動きの延長として出現したことを確認した。また、フランスの建築教育との関連では、ローマ大賞受賞者のローマへの派遣により、考古学的な分析が進み、その結果、過去の様式のヴォキャブラリーの収集に成功した。こうした過去の様式の収集量に比例し、ネオ・クラシズムから折衷主義（エクレクティズム）の建築へとその思潮は変化した時代においても、フランスの建築教育は有効性を帯びていた。欧米であればどの国でも一様にエクレクティズム期にあり、近代日本に現れた欧米からの建築家や技術者は、こうした時代に、自らの建築経験のスタートを切り、日本において建築の設計を行った。

第1章 註

- ⁷⁸ 辰野金吾「東京に於ける洋風建築の變遷」『建築雑誌』Vol.20, No.229, pp.15-20, 建築学会, 1906
- ⁷⁹ 三枝博音・野崎茂・佐々木峻『近代日本産業技術の西欧化』東洋経済新報社, 1960
- ⁸⁰ 堀越三郎『明治初期の洋風建築』(1929年の復刊版) 南洋堂書店, 1979
- ⁸¹ 植村正治「明治前期お雇い外国人の給与」『流通科学大学論集: 流通・経営編』Vol.21-1, pp.1-24, 流通科学大学学術研究会, 2008
- ⁸² 嶋田勝次「5006 19世紀末期のアメリカにおける Ecole des Beaux-Arts の影響」『日本建築学会論文報告集』Vol. 63-2, pp.533-536, 日本建築学会, 1959, p.535
- ⁸³ 嶋田勝次, 前掲書, p.536
- ⁸⁴ Weatherhead, A., C. : The History of Collegiate Education in Architecture in the United States, Columbia University, 1941, PhD Thesis
- thesis, p.24
- ⁸⁵ 嶋田勝次, 前掲書, p.535
- ⁸⁶ Buchman, A., Fleischman, A., Wright, F. A. : The Ten-Year Book of Cornell University 1868-1898, Cornell University, 1898
- ⁸⁷ 1905年にはイリノイ大学修士号を取得。(『建築雑誌』Vol.50, No.620, 建築学会, 1936, p.119)
- ⁸⁸ フランク・ジェンキンス『建築家とパトロン』(佐藤彰・五島利兵衛訳) 鹿島出版会, 1977
- ⁸⁹ フランク・ジェンキンス, 前掲書, p.118
- ⁹⁰ フランク・ジェンキンス, 前掲書, p.120
- ⁹¹ 清水重敦, 河上眞理『佐賀偉人伝 08 辰野金吾』佐賀県立佐賀城博物館, 2014, p.21
- ⁹² 渡邊研司「アーキテクチュラル・アソシエーション創設時における建築教育の理念と内容 1847年から1859年を中心に」『日本建築学会計画系論文集』第77巻, 第677号, pp.1809-1815, 日本建築学会, 2012, p.1810
- ⁹³ スピロ・コストフ編『建築家—職能の歴史』(横文彦監訳) 日経アーキテクチュア・ブックス, 1981, p.177
- ⁹⁴ そのため, 必ずしも全ての建築事務所が熱心に教育していたわけではなく, 仕事のない建築事務所においても修行は可能であり, 受け入れ手数料として手にする数百ポンドを得るためだけを目的とした形式的な事務所の存在が指摘されており, 徒弟制度の悪用が行われていたケースも確認できる。
- ⁹⁵ フランク・ジェンキンス, 前掲書, p.187
- ⁹⁶ フランク・ジェンキンス, 前掲書, p.187。なお, リチャード・フネ・スパイアーズは, ジョサイア・コンドルの師であり, 辰野金吾の師でもあるウィリアム・バージェス事務所に一時期勤務した人物である。
- ⁹⁷ スピロ・コストフ編, 前掲書, p.185
- ⁹⁸ スピロ・コストフ編, 前掲書, p.185
- ⁹⁹ アントワーズ・レオン『フランスの技術教育の歴史』(もののべながおき訳・文庫クセジュ) 白水社, 1968, p.72
- ¹⁰⁰ アントワーズ・レオン, 前掲書, p.72
- ¹⁰¹ 丹羽和彦「エコール・ポリテクニクにおける初期の建築教育とデュラン : J.・N.・L. デュランの建築教育の理論的特質に関する研究 (1)」『日本建築学会計画系論文報告集』第412号, pp.153-163, 日本建築学会, 1990, p.155
- ¹⁰² 北河大二郎『近代都市パリの誕生—鉄道・メトロ時代の熱狂—』河出ブックス, 2010, pp.36-37

¹⁰³ メズィエー王立工兵学校 *Ecole Royale du Génie de Mézières* として設立され、1794 年に砲工応用学校 *Ecole d'Application de l'Artillerie et du Génie* へと改称された。なお、文献により、メス Metz またはフォンテーヌブロー Fontainebleau の2種の地名が確認できる。これは1871年以前の拠点がメスで、それ以後の拠点がフォンテーヌブローであったように、同校の拠点の違いを示している。

¹⁰⁴ 王立土木学校 *Ecole Royale des Ponts et Chaussées* としてはじまり、1775 年国立土木学校 *Ecole Nationale des Ponts et Chaussées* へ改称された。後者の呼称が長年使用されたため、本文では後者の表記を採用した。以後、その名称で呼ばれたが、ボローニャ・プロセスのあおりを受け、フランスの教育制度が改変され、2008 年7月よりエコール・デ・ポン・パリテック *Ecole des Ponts ParisTech* へ改称された。道路・運河・港湾などの交通ネットワーク整備を担う技術官僚の養成機関として設立。北河大二郎の前掲書 pp.23-37 によれば、教育の特徴として、実践教育の徹底、実際に計画整備する人材の養成、競技試験の重視の3点を挙げている。

¹⁰⁵ 鉱業分野を担う技術官僚の養成機関として設立。

¹⁰⁶ アントワーン・レオン、前掲書、p.30

¹⁰⁷ 1829 年に開校したエコール・サントラルは、前述の古市公威や文部省の建築家をつとめた山口半六（1858-1900）らが留学し、修了した学校である。

¹⁰⁸ 古市公威による訳語。

¹⁰⁹ Durand, J.-N.-L. : *Précis des leçons d'architecture données à l'Ecole royale polytechnique*, 1817

¹¹⁰ Guadet, J. : *Eléments et Théorie de l'architecture*, 4 vol., Librairie de la construction moderne, n. d., 1901-1904

¹¹¹ 岡田義治・初田亨「建築家 松ヶ崎萬長の初期の経歴と青木周蔵那須別邸：松ヶ崎萬長の経歴と作品(そのⅠ)」『日本建築学会計画系論文集』第514号、pp. 233-240、日本建築学会、1998、p.237

¹¹² 例えば、政府のエンジニアへの道として卒業後の工場実習（1年間）や建設作業に関わり（最低18ヶ月）地方事務所での実習（3ヶ月）を経て、役人になるための試験の受験資格が得られた。（参照：恒川清爾『明治期における技術者の分析：近代技術確立をめぐる職人と職人的技術者』東京工業大学、2006、学位論文、p.85）

¹¹³ 久米邦武『現代語訳 特命全権大使 米欧回覧実記』（水澤周訳注、普及版、全5巻＋別冊総索引）、慶應義塾大学出版会、2008

¹¹⁴ 1873 年1月20日に「建築学校」として国立土木学校 *Ecole Nationale des Ponts et Chaussées* を見学している。
（『現代語訳 特命全権大使 米欧回覧実記3 ヨーロッパ大陸編・上』（水澤周訳注、普及版）慶応大学出版会、2008、pp.127-128）

¹¹⁵ 北正巳「ヘンリー・ダイアーと日本—彼の日本観を中心として—」『創大アジア研究』創刊号、pp.123-146、創価大学、1980、p.136

¹¹⁶ 村松貞次郎『お雇い外国人⑮—建築・土木』鹿島出版会、1976、p.30

¹¹⁷ 渡邊研司、前掲書、p.1811

¹¹⁸ レオナルド・ベネヴォロ『近代建築の歴史・上』（武藤章訳）鹿島出版会、1978、p.55

¹¹⁹ レオナルド・ベネヴォロ、前掲書、p.55

¹²⁰ レオナルド・ベネヴォロ、前掲書、p.85

¹²¹ Epron, J. P. : *Comprendre l'éclectisme*, Norma, 1997, pp.305-306

¹²² レオナルド・ベネヴォロ、前掲書、p.66

第 2 章 近代日本における建築教育機関再考

1. ジョサイア・コンドルと辰野金吾の建築教育

1.1 工部大学校の教育モデル

ここでは、工部大学校の教育モデルを以下で述べる2人の教育者の教育思想から検証する。

明治期の教育全般に関する大森東亜の研究¹²³によれば、近代日本の黎明期における高等教育の制度として、フランスの制度に従った中央集権型の教育制度が導入されたという。当初、文部省管轄の大学および師範学校等の国立の学校とともに、文部省以外の各省庁管轄下の教育機関には、高等専門学校（フランスにおけるグラン・ゼコール *Grands Ecoles* に相当）および各種専門学校が併設された。その後、各省庁の高等教育機関は、軍事関係など一部を除き、文部省傘下に集約され、フランスの制度をモデルとした教育機関の構成とは異なる方向へ変化した。そして、帝国大学を頂点とする近代日本の教育制度は、フランス以上の中央集権型教育制度へと発展した。

実学関係の工学・農学・商学等の分野は、アメリカと同様に総合大学に内包された。この点に近代日本の教育機関の特徴が見られる。また、私立の高等教育機関は、専門学校段階の萌芽期にあり、「アメリカ・モデル」と同様に国公立部門と並立し存在した。慶応義塾に象徴されるように時代の先端的学問を民間のイニシアチブで担い、また、キリスト教神学や教会など宗教組織からの影響や制約を蒙ることなく、学問を広く大学等の高等教育機関に受容した。欧米各国では神学が大学の中心にあった。それは、教会が高等教育を含む教育制度をそれまで担ってきた自負によるものであった。欧米各国において神学と教会は、大学制度においてもなお影響力を及ぼした。

工部大学校の前身である工部寮の設立にあたり、近代日本政府は明治初年に最も多く雇い入れたフランス人ではなくイギリス人を据えた。この選択により工学教育に導入された建築教育もイギリス人に委ねられた。諸説あるが、工業技術を牽引した長州閥の人脈との関係が考えられる。

建築系学科である造家学科は、工部寮内に設置された。この学校設立の理念には、1873年から工部省工部寮の実質的な校長（都検）をつとめたグラスゴー大学 *University of Glasgow*（スコットランド）出身のヘンリー・ダイアー（Henry Dyer, 1848-1918）の思想が反映されている。ヘンリー・ダイアーは、工部寮の設立にあたり、教育機関のモデルとしてスイス・チューリッヒ連邦工科大学 *Eidgenössische Technische Hochschule Zürich* の前身、チューリッヒ技術大学 *Eidgenössische Polytechnische Schule*（1854年設立）を参照した¹²⁴。チューリッヒ技術大学は、フランスの2つの学校、エコール・ポリテクニク（1794年設立）とエコール・サントラル（1829年設立）の教育システムを参照し、設立された学校である¹²⁵。そのため、近代日本の工業技術教育機関のモデルには、フランスの教育システムが間接的に導入された。つまり、イギリス人ヘンリー・ダイアーによって近代日本に高等技術者教育が導入され、イギリス的な実践重視とヨーロッパ大陸で行われた理論重視の教育が取り入れられ、工学寮で実践された。なお、このヘンリー・ダイアーによる実践と理論の折衷型の教育方法は、「サンドイッチ方式」として知られている。

この「サンドイッチ方式」は、イギリスにおける技術教育手法の問題解決に向けたひとつの実験的試みと捉えることも可能である。近代日本の技術教育に関する前掲の恒川清爾の研究では、イギリスでは1867年のパリ万博においてフランスやドイツに大きく遅れ産業競争力の低下が叫ばれ、その一因として技術教育制度の問題が指摘された¹²⁶。こうした問題点を考慮すれば、ヘンリー・ダイアーは

近代日本における技術教育制度の黎明期において、単にイギリス的な教育システムの導入を図るのではなく、チューリヒ技術学校で行われたように理論の時間を取り入れ、実践と理論のバランスを図った折衷型の教育手法の確立をめざした可能性がある。

しかし、恒川清爾は、ヘンリー・ダイアーが牽引した工部寮および工部大学校において、理論に十分な時間が割り当てられていなかったことを指摘している。恒川清爾の研究では、ヘンリー・ダイアーが割り当てた理論の時間数を取り上げ、他国の教育機関と比較している。ドイツ・アメリカなどの教育機関との時間数を比較した結果として、特に、近代日本における技術教育カリキュラムは、実習などの実地教育の時間が長く割かれ、理論を学ぶ時間が短いことなどを恒川清爾は指摘した¹²⁷。つまり、ヘンリー・ダイアーの教育思想は、実地重視型の教育の域を脱することができず、イギリスの伝統的徒弟制度の延長にあったといえる。

また、恒川清爾は、工部大学校を吸収した帝国大学工科大学の初代学長となった古市公威（1854-1934）が、自身が留学したフランスのエコール・サントラルの教育観を帝国大学工科大学の教育方針への導入を試みたことを指摘している¹²⁸。古市公威が理想としたエコール・サントラルの教育観は、その設立趣意書に凝縮されているといわれ¹²⁹、そのエコール・サントラルの教育観では、理論を極めるのではなく、現実に即した“*sciences industrielles*”，古市公威が解釈するところの「工学」の習得を目指した¹³⁰。したがって、古市公威の出現により、理論にかかる時間数のさらなる増加よりも、「工学」理念が強固なものへと発展し、近代日本の帝国大学における教育全体へ影響を及ぼした可能性もある。

いずれにせよ、ヘンリー・ダイアーの工部大学校の実地重視の傾向は、古市公威の帝国大学工科大学においても変わらず引き継がれた。近代日本における技術教育には、ヘンリー・ダイアーの管理者育成、遅れていたイギリス式の実地教育、古市公威の古いフランスの指導者教育の3つの思想が反映された。

1.2 ジョサイア・コンドルの建築教育の功績と錯誤

近代日本の「建築家」教育の発展を概観するにあたり、そもそも日本が目指した建築教育とは何であったのか。近代日本の目指した建築家像の実相やその現代までの問題点、そして、今後の建築教育に求められる事象は、近代日本における建築教育の源流を再考することで発見できる可能性がある。そこで、ここでは、工部大学校におけるジョサイア・コンドルの教育が目指した地平を再考する。

前述のように、工部大学校における建築教育の黎明期は、イギリス人建築家ジョサイア・コンドルによって牽引された。そもそも、近代日本は、ジョサイア・コンドルに対して何を求めたのか、建築教育としての功績と錯誤について史料から検証する。

まず、近代日本は、ジョサイア・コンドルに2つの役割を要請した。ひとつは、教育者として本格的な洋風建築の学と術を日本人に引き渡すこと、もうひとつは、建築家として明治の国家を飾ることであった。そのため、ジョサイア・コンドルには、前者の活動の場として工部大学校造家学科が準備され、後者の役割を果たすため工部省や宮内省での建築設計の場が与えられた。当時、工部省は国家的建築の担当省庁であり、宮内省は新宮殿造営計画を推進した機関であった¹³¹。

ジョサイア・コンドルの教育面での貢献について、建築史家村松貞次郎は、建築史学と課題設計と実施設計の3つを柱とした設計教育が行なわれ、その教育は文化的と技術のバランスが図られたものであったことを指摘している¹³²。特に、計画学の確立前という事情もあるが、ジョサイア・コンドルの設計教育では、計画学以上に歴史が重視された¹³³。また、建築史学では、当時の建築設計にとって必須であった歴史的様式の選択と折衷が意識され、エジプトに始まる西洋諸様式のほかに、地理的な広がりをもって、インドや他の東洋建築も教えられ、特に、ゴシック様式に力点が置かれた。当時、歴史様式の知識は直接設計に使われたため、歴史様式の大きな特徴が伝えられただけでなく、細部にいたるまで正確に教えられた。なお、課題設計は協働で行われ、歴史博物館などが課された。

こうした設計課題のほか、設計競技も行われた。例えば、第1回造家学科学生の卒業前には、山県有朋邸の学内競技設計が行なわれた。この設計競技は、山県有朋（1838-1922）の東京市麹町区5番町の邸内に新築する自邸の提案で、萩出身の山県有朋が同郷の片山東熊（1854-1917）を通じて実施した。この設計競技には、片山東熊と他の第1回生であった辰野金吾（1854-1919）、曾禰達蔵（1853-1937）、佐立七次郎（1856-1922）ら3名を含めた計4名が参加し、片山東熊の案が入選し、実際に建設された。これは日本最初期の設計競技であった¹³⁴。

ジョサイア・コンドルは教壇での教育のほかに、自身が進める諸建築の実施設計の手伝いを学生たちにさせることで設計の実務を教えた。これは、工部大学校における6年間の教育プログラムにおいて、最初の4年間は学内で教えるべきことを教え、後の2年間は現場に出て働き、その報告を持って卒業論文とした工部大学校の制度に起因する。造家学科も他科と同様、最後の2年は設計組織に加わって設計現場での実務経験が求められたが、ジョサイア・コンドルの来日の遅れにより、創設期は教室での授業と現場の体験が並行して行われた。こうした卒業要件としての現場という教育の場は、工部大学校の後身である東京帝国大学工科大学造家学科において消滅し、近年まで多くの学校で行われなくなった明治期初期の特筆すべき建築教育であった¹³⁵。

一方で、ジョサイア・コンドルは、技術への関心が高く、地震学者ジョン・ミルン（John Milne,

1850-1913)¹³⁶を招聘し、地震学の講義を行うなど、耐震構造の研究と教育に力を注いだ。こうした耐震構造への関心の高さは、ジョサイア・コンドルの建築学講述書『造家必携』¹³⁷にも現れている。ジョサイア・コンドルは、耐震の根本は基礎にあると考え、この講述書では基礎構造から記述し、その内容を詳細に論じている。これは、ジョサイア・コンドルの構造技術への深い関心の現われともいえ、こうした構造技術へのまなざしは「ゴシック様式が本来秘めている構造的な薫陶」であったという指摘もある¹³⁸。

後に、ジョサイア・コンドルは「要するに今日の建築家たるものは第一に理学者であり、第二に美術家であるようにするのが必要」と述べているが、この理学者は、“scientist”を指し、美術家は“artist”を指しており、ジョサイア・コンドルは美術的なものと構造技術の融合を意図した。また、こうした考えは当時の西洋に共通して芽生え始めた建築家像であったと同時に、ジョサイア・コンドルのロンドンでの実務経験に起因している可能性がある。ジョサイア・コンドルが、イギリスで勤めた建築事務所の所長であるウィリアム・バージェス（William Burges, 1827-1881）は、当時イギリスを代表する建築家の一人でゴシック主義者として知られている¹³⁹。ジョサイア・コンドルは、ウィリアム・バージェスのもとで単にゴシックの様式を習得しただけではなく、ウィリアム・バージェスの熱心なゴシック主義と東方への異国趣味豊かな環境の中で自己の基本的な精神の型としてロマン主義を獲得した¹⁴⁰。こうしたジョサイア・コンドルの意識は、ウィリアム・バージェスの時代のひとつの建築家像として掲げられた「美術建築家」¹⁴¹art architect の理念の表れと捉えることができる。

そして、設計と構造の2つを教育の軸としたジョサイア・コンドルは、その教育の最終的な成果を問うために、学生に卒業制作と卒業論文の提出を求めた。ジョサイア・コンドルが確立したこうした教育スタイルは、時代とともに多少の変化はしたものの現在まで引き継がれたスタイルといえる。また、こうした教育スタイルの確立と同時に、ジョサイア・コンドルは、今日の日本の構造を設計と対等な建築家必須の教養とみる独自の教育体系の源泉をつくりあげた¹⁴²。

しかし、こうしたジョサイア・コンドルの歩みは、そもそも明治政府が望んでいたものではなかった可能性もある。明治政府が望んでいたのは、純粋な西洋建築の修得であり、ジョサイア・コンドルがその要望を知らなかった可能性がある¹⁴³。この錯誤は、ジョサイア・コンドル自身が行った建築教育に見出せ、ジョサイア・コンドル自身がイギリスに深く根をおくゴシック主義、中世主義の環境の中で修業を積み、その様式の世界であるロマン主義精神を己のものとしたことから読み取れる。ジョサイア・コンドルは、そうしたものとして、ゴシックを教育の中で教えており、工部大学校造家学科卒業生の論文にはゴシックの事象からの引用が多く、卒業制作の過半がゴシックであることが物語っている。ジョサイア・コンドルの影響により、明治の中頃までの工部大学校の「当時の設計教育は、まさに様式選択主義」¹⁴⁴であり「ゴシックに傾倒」¹⁴⁵した時代であった。

こうした錯誤を含んで始まった近代日本の建築教育について中村順平は次のように述べている¹⁴⁶。「我が国工部大学で造家学科を設けて、西洋の建物構築を指導する為、イギリスの Josiah Condre (1827-1881) F.R.I.B.A.を招聘したのは明治10年のことである。当初この若い建築家の教育は専ら style gothique に依り、従って学生の卒業制作もこの様式に限られていたと聞かすが、彼が建築上における Vitruve の 5 Ordres に関する思考に付いては、これを第1回卒業生辰野金吾を通して推究する時彼は此等の比例の神聖さからする形態尊重の傾向から、構築材料の如何に拘らず墨守すべきものの

如くおしえられていたものか。この傾向は、少なくとも彼の英国留学後に強く見受けられたばかりでなく、これが明治を通じて我が国一般の建築教育の基盤となっていた。」

中村順平には、明治の日本の外国人による建築教育が単なる「形態尊重」の教育であり、表面的な模倣の修練でしかないと見えたのだろう。本来その形態を採用する確たる理由があるにもかかわらず、その精神性の深層部分について、たとえ教師自身がその民族性や歴史性といった部分において理解ができたとしても、鎖国を続けた江戸時代に生まれた当時の学生にとって、理解は困難を極めたのだろう。こうした状況を外国人教師がはたして理解したのか。

中村順平が指摘するこうした錯誤は考えられるが、ジョサイア・コンドルに託された「本格的な洋風建築の学と術を日本人に引き渡すこと」¹⁴⁷は実現し、ジョサイア・コンドルは日本人建築教育者を育成し、日本人による建築教育の土台を築いたといえる。日本人による建築教育に向かって歩み始める土台が整備されたことは、ジョサイア・コンドルの功績であり成果である。

1.3 辰野金吾の教育改革とその教育者たち

辰野金吾¹⁴⁸は、ジョサイア・コンドルの教育によって育成された日本人建築教育者である。辰野金吾による建築教育の課題は、外国人によってつくりあげられた建築教育を日本的に練り直し、再考することにあつた。ここでは、辰野金吾は、ジョサイア・コンドルから受け継いだ建築教育をどのように改革し、どのような教育者とともにその改革を推し進めたのか概括する。

辰野金吾ら工部大学校造家学科第1回生が受けたジョサイア・コンドルの造家学教育の内容は、第3学年時において測量学、材料強弱学、地質学、造家および家屋構造、図学、図画であつた。これらの科目全体には、1週間あたり計39時間が割り当てられ、「造家製図」には、そのうちの19時間が割り当てられた。つまり、教育プログラムの約半分が設計製図教育であつた¹⁴⁹。しかし、工部大学校造家学科では、デザイン教育が考えられておらず、技術教育に力点が置かれたといわれている¹⁵⁰。

ところで、第1回造家学科首席卒業生であつた辰野金吾は、将来の建築教育を担う人材としてジョサイア・コンドルの母国イギリスに留学した。辰野金吾はロンドンにおいてジョサイア・コンドルの師であるウィリアム・バージェスの建築事務所で実地を学び¹⁵¹、そこで実地を学ぶ傍ら、同時にジョサイア・コンドルの母校であるロンドン大学で理論を学んだ。辰野金吾は、1882年3月ロンドン大学建築課程及び美術課程2等を修了し、2年間の留学生活を終えたが、日本政府からの援助を受けて継続して、1年間のフランスおよびイタリアを遊学した。1883年5月に日本に帰国した辰野金吾は、帰国後、工部省に勤務し、1886年に工部大学校造家学科の教授に就任した¹⁵²。この辰野金吾の就任により、それまで造家学科の主任を務めたジョサイア・コンドルは講師へ転じ、最終的に1891年には大学から去った。つまり、1891年より名実ともに日本人のみの建築教育が開始された。

辰野金吾は、自身が造家学科を牽引するにあたり、ジョサイア・コンドルが確立した建築教育に対し、様々な改革を行なった。

辰野金吾の改革のひとつとして、ジョサイア・コンドルの歴史学での未開拓分野であつた日本建築の講座の設置がある。日本建築の講座は、当時宮内省内匠寮技師であつた木子清敬（1845-1907）が担当した。また、もうひとつの改革として、古社寺建築の実測製図を実施し、さらに、自在画および装飾画科目の新設を行った。なお、自在画および装飾画科目を担当した教育者は、工部美術学校出身の曾山幸彦¹⁵³（1860-1892）であつた。

これらは、辰野金吾の目指す建築家像の実現に向けた建築学科の欠陥を補うための教育改革であつた。なお、この自在画教育の導入について、清水重敦・河上眞理の研究によれば、当時、日本の美術界において西洋美術排斥運動が隆盛しつつある中、辰野金吾が、西欧の建築教育における「自在画及写精画」重視の傾向を「工部大学年報 起明治十九年一月止同年十二月」で報告し、近代日本の建築教育へ導入したことが指摘されている¹⁵⁴。

この自在画科目の新設は、イギリス留学時に辰野金吾が師事した建築家ウィリアム・バージェスから吸収した「美術建築」を意図した教育の第一歩と清水重敦・河上眞理が指摘している¹⁵⁵。「美術建築」とは、“art-architecture”の訳語で、辰野金吾の留学期のイギリスで用いられた建築観であり、ウィリアム・バージェスは、「美術建築」の体現者の代表例といわれ、自らを「美術建築家」と称したほどであつた¹⁵⁶。

また、辰野金吾は日本だけではなくアジアにも目を向け、東洋建築研究を開始し、学生研究者を現地に送り込むなど積極的な研究を行い、さらに、耐震学にとどまらない材料構造の科学的探究を目指した。辰野金吾は、次々に建築教育の拡張・改革や、大学内での科目の整備を行い明治期の建築教育の礎を築いた¹⁵⁷。

また、辰野金吾もジョサイア・コンドルのようにゴシックに傾倒した時期があったが、後にゴシックの勉強を禁じ、ゴシックよりも抑制のきいたルネッサンス様式を奨励した。これは *Baukunst der Renaissance*¹⁵⁸が、帝国大学の図書館に輸入され設計課題の参考文献となったためともいわれている¹⁵⁹。また、辰野金吾が留学を終え、日本に帰国の後に設計した日本銀行などに見られるルネッサンス様式もその現れといえる。「辰野らにとって、ゴシック式とは取り換え可能な衣装（原文ママ）のひとつにすぎなかった」¹⁶⁰と村松貞次郎が指摘するように、明治初頭にコンドルから建築教育を受けた人びとが様式と精神の対応を知るには日が浅く、コンドルの孫弟子にあたる長野宇平治（1867-1937）が大正初年古典主義に目覚めて以後、様式と精神の対応を発見した¹⁶¹。

辰野金吾のこうした教育を受けた人材は、全国各地に分散し、建築業界の発展に寄与した。このように、工部大学校から日本人の建築家が巣立つ一方、その建築家を補助するための人員の確保が望まれ、教育機関も徐々に増加した。

そこで、誕生したのが工手学校である。工手学校は、技術官僚を養成する機関を出自にもつ帝国大学造家学科出身の技師らを補助すべき工手の養成、および、技術立国を下支えする技術者の養成を目的とし、当時東京帝国大学総長であった渡邊皇紀の呼びかけによって、民間からの寄付を募り設立された夜間学校であった。また、工手学校の学科構成は、工部大学校に倣ったため、造家学科も設置された。なお、工手学校での教育は1888年より行われ、修学年限は、5ヶ月×3期という速習であった。

教授陣は、当時の帝国大学出身者が占めており、その中には、辰野金吾や中村達太郎（1860-1942）、塚本靖（1869-1937）や大沢三之助（1867-1945）など、帝国大学工科大学の教授陣も含まれた。なお、夜学の特性を活かし、その他の教育者として、工部大学校や帝国大学出身の官庁営繕の建築家もその責を担った¹⁶²。

ところで、工部大学校造家学科から帝国大学工科大学造家学科への転換は、辰野金吾の着任と関係がある。工部大学校では辰野金吾の教授着任時の1886年には、すでにジョサイア・コンドルの補佐役として曾禰達蔵が助教授として教育にあたっていたが、造家学科出身者ではない工部美術学校出身の曾山幸彦が助手として加わった。翌年1887年には、アメリカ・コーネル大学で建築学を修めた初の外国人である小島憲之¹⁶³（1857-1918）と第4回卒業生中村達太郎が、共に講師として着任し、帝国大学工科大学造家学科の新たな教育体制が編成された。

1888年には小島憲之が教授に、中村達太郎、曾山幸彦がそれぞれ助教授に昇格する。辰野金吾が教授を退任する1902年までの教員陣営をみると、1886年からジョサイア・コンドルが去るまでの辰野金吾、中村達太郎、小島憲之、曾山幸彦の時代、その後、小島憲之が去り、辰野金吾、中村達太郎に石井敬吉（1866-1932）、木子清敬、松岡壽（1862-1944）らが加わる時代、そして石井敬吉が去り伊東忠太（1867-1954）、塚本靖、武田五一（1872-1938）、大沢三之助ら辰野金吾の教え子達が教員となる時代の3期に大別できる。

教育の舵取りがジョサイア・コンドルから日本人教育者へと移行した際、教育言語が問題となった。

ジョサイア・コンドルの時代、講義は、漢文を除き、すべて英語で行われた。そのため、知識のほとんどが英語によって伝えられ、イギリスの建材の産地や西欧の建築構造に関する知識は学生たちに十分に叩き込まれたが、当時、それらに対応する日本語は未整備であった。

こうした問題に正面から対応したのは、中村達太郎であった。中村達太郎の功績は、ジョサイア・コンドル時代の完全な西欧用語一辺倒であった建築材料や構造の知識を日本語に置き換えた点にある。この日本語への置き換え作業の成果は、中村達太郎ひとりによって収集・編纂された辞書『日本建築辞彙』(1903)¹⁶⁴に反映され、そこには、伝統的な日本建築から、当時の西洋式建築の部位までの4000語弱の建築関連用語が並べられた。なお、中村達太郎は、建築とそれを取り巻く「領域をオールマイティにこなし」¹⁶⁵、今にいう建築環境学や材料学、構法、施工、建築法規など「多様なジャンルの事実上の創始」ともみなされる研究者であり教育者である。

また、自在画の教育者、曾山幸彦の急逝により、後任として松岡壽が招聘され、装飾画や自在画など表現技法が伝習された。松岡壽は、曾山幸彦と同様に工部美術学校出身の洋画家で、工部美術学校の後、イタリア留学を経て日本に帰国した。なお、松岡壽は、辰野金吾のイタリア遊学中にローマとともに過ごした人物である。

以上から、辰野金吾が牽引した帝国大学工科大学では、建築設計・意匠分野が強化され、建築教育の拡充と様々な改革が行われたことがわかる。この辰野金吾が牽引した時代は、村松貞次郎が指摘するように、建築界をあげて「造家」が「建築」へと改められ、明治時代を通じて西欧建築の手法に慣れ、しきりに芸術づいた時代¹⁶⁶、また、近江栄が述べるように「いわばエコール・デ・ボザール流の教育がなされていた時代」¹⁶⁷であった。そうした教育は、以上の教育者の傾向からのみならず、伊東忠太の残した当時の講義ノート¹⁶⁸からも、こうした芸術的教育の色彩が濃厚な、原則的には西欧的建築家像の育成に焦点がしぼられた建築教育の輪郭が読み取れる。

1.4 辰野金吾の教え子たち

工部大学校造家学科が帝国大学工科大学に吸収された1886年以降、辰野金吾が退官する1902年までに卒業した学生は、本科53名・選科4名の合計57名であった¹⁶⁹。ここでは、卒業生のうち、選任教員として活躍した人物に着目し、どのような人物が教員として巣立ったのか、また、辰野金吾のどのような側面が受け継がれたのかを検証する。

清水重敦・河上眞理の研究¹⁷⁰での指摘にあるように、辰野金吾のイギリス留学以後のフランス・イタリアへのグランド・ツアーの経験が、辰野金吾が主導した芸術色の濃い教育へと反映された。そうした辰野金吾の教育を経験した人物のうち、近代日本における建築教育分野に貢献した人物として、次の10名が考えられる。

東京帝国大学において活躍した教育者は、石井敬吉、伊東忠太、塚本靖、関野貞（1868-1935）、武田五一、大沢三之助であった。武田五一は、東京帝国大学のほか京都高等工芸学校（現、京都工芸繊維大学）や京都帝国大学（現、京都大学）においてもその建築教育の発展に寄与し、また、大沢三之助は東京美術学校（現、東京藝術大学美術学部）の発展に寄与した。また、東京帝国大学以外の教育界では、鈴木禎次（1870-1941）、土屋純一（1875-1946）が名古屋高等工業大学において活躍し、古宇田実（1879-1965）が東京美術学校ならびに神戸高等工業学校（現、神戸大学工学部）において活躍し、天沼俊一（1876-1947）が京都帝国大学において活躍した。なお、以上の教育者は、石井敬吉および関野貞を除き、一様に大学院に進学しており、それぞれの研究課題をこなした¹⁷¹。それぞれの研究テーマは、現在の歴史・意匠、計画、構造、設備、ランドスケープで、こうした研究によって建築学全般の細分化が開始され、同時に、講座制確立への萌芽とも捉えられる。

また、教育者の輩出と並行し、辰野金吾は、建築家職能の定着を目指した卒業生も輩出した。官公庁や民間機関へ進んだ人物では、東京で日本建築士会を立ち上げた長野宇平治（1867-1937）や中條精一郎（1868-1936）などが、また、野口孫一（1869-1915）、片岡安（1876-1946）、日高胖（1875-1952）といった関西建築界の創始者たちが輩出され、辰野金吾の遺伝子は各方面へ分散した。

一方、辰野金吾による芸術づいた建築教育時代の終盤には、鉄骨や鉄筋コンクリートという極めて技術的、工学的な新しい構造手法に応じた建築工学的分野の急激な成長を予見した佐野利器（1880-1956）が出現した¹⁷²。佐野利器は自身の在学期の東京帝国大学の建築教育を「芸術教育の色彩が非常に強かった」¹⁷³と評し、構造については「応用力学で梁や柱の単純な計算法を知る位で、之も建築之構造とは一向結びついて居なかった」¹⁷⁴と述べ、「之から耐震構造で、国家社会に尽くそうと決心」¹⁷⁵し「応用力学、地震学と建築を結びつけ」¹⁷⁶た教育を重視した。つまり、佐野利器の出現が、建築構造の工学的な側面を強化する教育への転換点と捉えることができる。

なお、佐野利器の出現の前兆として、1891年の濃尾地震の経験が考えられる。中部圏を襲った濃尾地震をきっかけに、東京圏においても1894年に明治東京地震が発生するなど、19世紀末の日本ではマグニチュード7以上の地震が多発した。大きな被害は、明治時代に多用されたレンガ造の建物に現れたため、建築分野での構造・構法学の再検討が始まった。こうした時代に、佐野利器は1903年卒業と同時に大学院へ進学し、進学後まもなく講師として「鉄骨構造学」の講義を開始した。なお、内田祥三（1885-1972）や内藤多仲（1886-1970）らがこの講義を聞いて育った。

また、もうひとつの前兆は、武田五一の東京帝国大学からの離脱にみられる¹⁷⁷。武田五一は東京帝国大学の教育スタッフとしてのポストを「一方的に放り出すようにして」¹⁷⁸ヨーロッパへ渡り、結果、再び東京帝国大学へ戻ることはなく、1903年より京都高等工芸学校教授として、そして、1920年より京都帝国大学教授となった。この武田五一の離脱が、「色彩」や「建築物の格好に就て」の教育が建築教育の主流的な位置から、側流的な立場へと移行した第一歩と長谷川堯が指摘している¹⁷⁹。

佐野利器は、建築の「芸術教育」と「構築技術」の発達を目指したと述べているが、建築教育の舵取りは、結果として「構造技術」という第3の軸の発展に寄与したとみることもできる。つまり、建築における「芸術教育」と「構築技術」教育の遅々たる進化・発展を誘引した原因がここにあったのではないだろうか。この時期、「芸術教育」と「構築技術」教育の分化が進み、逆に、そもそも両者によって支えられた建築学の両側面の融合や融和を図るための措置を講ずるために必要な思考の発展が見られなくなった。

建築分野の教育分化は、1893年に東京帝国大学工科大学において講座制が組まれた時点にはじまったと捉えることも可能だろう。東京帝国大学工科大学では、全学科で計21講座が設けられ、造家学科は3講座で編成され、第1講座が「建築一般構造」、第2講座が「建築計画」、第3講座が「建築歴史・意匠」となった。なお、講座制が安定する時期は1905年といわれ¹⁸⁰、高等工業学校に建築科が設置された時期に相当する。当時の第1講座は、現在の「構法」に相当し、中村達太郎が、第2講座は建築設計を含む中心的講座と位置づけられ、辰野金吾から引き継いだ塚本靖が、第3講座は建築の歴史的意匠と建築史の講座とされ、造家学科初の大学院課程修了者で、1901年に学位を取得した伊東忠太が、それぞれ担当した¹⁸¹。佐野利器が問題視した構造技術を深化させる講座は、この時点では設置されておらず、1915年に、鉄筋コンクリート構造および鉄骨構造に関する研究を行う講座が新設され、建築学科は4講座制へと発展した。

2. 近代日本における建築教育機関再考

2.1 「建築学」と「造家学」―日仏建築教育機関構成比較

前述のように、近代日本の黎明期の教育は省庁附設の機関において行われ、教育機関はいわゆるフランスのグラン・ゼコールのような組織として存在した。工部省の技術官僚を養成する観点から工部大学校が設立されたことを考慮すれば、工部大学校は、フランスの枠組みでいえば、技術官僚を養成したエコール・ポリテクニクや国立土木学校に相当する教育機関と捉えられる。

ところで、菊池重郎が指摘するように、幕末期の日本において、「建築学」は“Military Architecture”を意味していたが¹⁸²、今日に至るまで近代日本の建築教育の源流は“Civil Architecture”を意味する「造家学」教育の流れで、主としてジョサイア・コンドルによる工部大学校における教育からその後の発展や伝播が記述されてきた。

仮に、近代日本の各省庁がそれぞれ独自の教育機関を有したのであれば、フランスのエコール・ポリテクニクと応用学校の関係のように、近代日本においても建築教育が、士官養成機関と技術官僚養成機関の2つにおいて行われた可能性がある。そこで、フランスにおける官・民、非軍事・軍事の分類により異なる建築教育機関が存在したように、“Military Architecture”としての「建築学」教育が、工部大学校以外の教育機関において、例えば、兵部省やその流れを汲む陸軍省および海軍省管轄の教育機関において行なわれた可能性がある。そこで、ここでは、幕末から明治初期に始まる近代日本における建築の学問体系の発展過程を再考する。

近代日本の黎明期における陸軍系の教育機関の代表格は、陸軍士官学校である。これまで、例えば『近代日本建築学発達史』（1972）などにおいても、陸軍士官学校における「建築学科」の存在や陸軍士官学校における建築教育に関する具体的な言及はなされていない。

陸軍士官学校は、1872年に京都に設置された兵学校を起源とし、1874年に陸軍士官学校条例により東京・市ヶ谷に設置された。陸軍士官学校は、工部大学校とほぼ同時期に設立された陸軍省管轄の学校で、創成期の教育は、フランスから招き入れられた軍事顧問団のメンバーによって行われた。陸軍士官学校の黎明期に教育者として従事した軍事顧問団のメンバーには、フランスのエコール・ポリテクニク出身で砲工応用学校に進んだ軍人が多く含まれ、数名の民間フランス人も同時に雇われた。ここでは、歩兵や騎兵の士官教育のみならず、砲兵や工兵養成を主眼とした教育も行なわれ、「築城学」や「図学」などがフランス人によって教授された。

しかし、こうしたフランス人による教育は、明治政府が1887年に陸軍士官学校をフランス式からドイツ（プロイセン）式へと変化させたため、フランスからの人材登用率が極端に低下し、次第にフランスの教育システムとの関係は薄れ、歴史の中でもその存在が薄まった。こうして、フランス軍事顧問団が関与した時代の陸軍士官学校は、学校制度が法的に整備された時期であった1887年にドイツ式の教育へと変化し、陸軍士官学校とは別の新たな教育機関が誕生した。

そのうちのひとつに、1889年に砲兵や工兵の将校養成の教育機関として誕生した陸軍砲工学校がある。他の陸軍系の学校がドイツ式へと転換したのに対し、この学校では、ドイツ式へ変更される以前の陸軍士官学校において行なわれたフランス式の教育が引き継がれ、エコール・ポリテクニクをモデルとした教育が推進された¹⁸³。そして、この陸軍砲工学校の開校時の図学教官として任官されたの

は、帝国大学工科大学造家学科の教育者でもあった松岡壽であった。

なお、1900年に制定された「工科大学及理科大学陸軍砲工学生規定」により、陸軍砲工学校の卒業生が東京帝国大学では定員外の「員外学生」として工科大学（現、工学部）や理科大学（現、理学部）において「軍用上必用ナル科目ヲ修」¹⁸⁴めることが可能となった。この制度は、当初、工科大学では、土木工学科、機械工学科、電気工学科、応用化学科の4科のみに特別な課程が用意されたが、1906年には、一般の学生と同様の規定に従うものとなった。なお、「員外学生」の中には、同大学の建築学科へ進学するものもあった¹⁸⁵。

こうした陸軍の状況と並行し、後に海軍組織に組み込まれた組織において、フランスとの接点が確認できる。それは、江戸幕府が開設した横須賀製鉄所（後の横須賀造船所）であり、その設立には、フランスからの人材が登用され、さらに、そこにはフランスの技術移転が行われた。また、この横須賀製鉄所には、エンジニアや職工長養成を主眼とした教育機関である横須賀製鉄所附設覺舎が設立され、造船技術のみならず教育面においてもフランスが貢献した。なお、近代日本における海軍の組織の発展には、イギリス軍事顧問団が大きく関与した¹⁸⁶。

横須賀製鉄所建設にあたり、指導的立場にあったのが、フランス人技術者レオンス・ヴェルニー（François Léonce Verny, 1837-1908）である。レオンス・ヴェルニーは、エコール・ポリテクニクから造船工学校へ進学し、造船関連技術を習得し、横須賀製鉄所建設にあたっては、フランスでの実務経験のほか、エコール・ポリテクニクでの建築学の習得ならびに造船工学校における講義や講義録などから習得した技術などがその素地として考えられる。

また、横須賀製鉄所の教育機関である横須賀製鉄所附設覺舎のモデルは、レオンス・ヴェルニーの出身校であるブレストの造船工学校と工業に関する幅広い応用科学を教えたエコール・サントラルといわれている¹⁸⁷。そのため、この横須賀製鉄所附設覺舎で教鞭をとったフランス人には、レオンス・ヴェルニーのようなエコール・ポリテクニク出身の技術者のみならず、エコール・サントラル出身の技術者が含まれた。このことから、レオンス・ヴェルニーが考案した学校が、単に造船に特化したエンジニアではなく、百科全書的な知識を備えた指導的なジェネラリストとしてのエンジニア養成を目指したことがわかる。さらに、レオンス・ヴェルニーは、単純にフランスの学校モデルを移転するのではなく、近代日本の産業的・教育的な実情に適合した学校を構想した¹⁸⁸。この広範な教育を教授するなかで、1876年の本科プログラムによれば、4年次の教育に「築造学」が含まれており、建設に関する教育が行われた¹⁸⁹。

2.2 近代日本におけるフランス人建築家による教育

近代日本の開国にあたり、様々な分野においてフランスは日本の技術発展に寄与した。例えば、江戸幕府がフランスに援助を仰ぎ実現したとされる横須賀製鉄所の建設や、明治初頭のフランス軍事顧問団による軍事教育システムや工兵技術の導入などがあり、フランスがその最初期の技術教育のシステムづくりに貢献し、多くのお雇い外国人やフランス軍事顧問団のメンバーがそれに貢献した。

お雇いフランス人に関するこれまでの研究では、例えば、前述の横須賀製鉄所のレオンス・ヴェルニーや陸軍士官学校におけるフランス軍事顧問団の一員、クロード・ジョルダン（Claude Gabriel Lucien Albert Jourdan, 1840-1898）やルイ・クレットマン（Charles Alexandre Louis Kreitmann, 1851-1914）など、フランスの技術官僚養成学校や砲工応用学校出身者などに焦点をあてた研究や、その主任的役割を担った主要なメンバーの関与に関する研究が度々発表され¹⁹⁰、さらに、近年ではこうした人物が関与した軍事施設の歴史的遺産価値を再評価する研究が発表されている¹⁹¹。

一方、近代日本の発展に貢献したフランス人建築家に関する詳細な研究は、澤護の「幕末・明治初年来日のフランス人建築家」（1985）を除き、これまであまり行われていない。なお、この澤護の研究では、近代日本国家の発展に寄与したフランス人建築家として、表 1.2.1 に掲げる 7 名が取り上げられている。

表 1.2.1 澤護による「幕末・明治初年来日のフランス人建築家」

日本語表記	フランス語表記	所属	備考
L.F.クリペ	Clipet	不明	横浜地図製図者 フランス公使付き建築家
エドモン・バスチャン	Edmond Bastien	横須賀製鉄所※	船工兼製図職工
フランソワ・ピヨン	Francois Pillon	工部省	営繕寮造家職工長
ジュール・レスカス	Jules Lescasse	工部省	鉱山寮生野银山
シャルル・アルフレッド・シャステル・ド・ボワンヴィル	Charles Alfred Chastel de Boinville	工部省	測量司
ポール・サルダ	Paul Sarda	横須賀製鉄所※	機械学教師
ルイ・フェリックス・フローラン	Louis Felix Florent	横須賀製鉄所※	
※「横須賀製鉄所」（1865 年開設）は、1871 年に「横須賀造船所」に改称されたが、上表の表記は「横須賀製鉄所」に統一した。			

このうち、ポール・サルダ（1844-1905）とシャルル・アルフレッド・シャステル・ド・ボワンヴィルの 2 人は、近代日本の教育機関で教鞭を執った教育者として重要である。

ポール・サルダは、エコール・サントラル出身の技術者で、同校修了直後の 1873 年に横須賀製鉄所附設覺舎の教育者として雇われたフランス人である。なお、ポール・サルダは、1882 年に横浜において建築事務所を開設した人物として知られている。なお、ポール・サルダは横浜で亡くなり、横浜外人墓地に埋葬された。

横須賀製鉄所附設覺舎では、レオンス・ヴェルニーのようなエコール・ポリテクニク出身の技術者

が教育者として活躍したが、ポール・サルダは他のフランス人とともに「画法幾何学」や「数学」などを講じた。なお、横須賀製鉄所附設黌舎で行われた代数・幾何・解析・三角関数などは、当時の日本では最も水準の高いものといわれ¹⁹²、また、後にフランスに留学し近代造船学を修めた辰巳一による当時のポール・サルダの講義ノートも残されている¹⁹³。

1877年の横須賀製鉄所附設黌舎解体に伴い、ポール・サルダは同年の6月から12月にかけて東京大学で「数学」を講じたが、工部大学校などにおいて建築教育に従事した記録はこれまで確認されていない。しかし、前述のようにエコール・ポリテクニクにおいて「建築学」が「画法幾何学」の一分野として捉えられた背景を考えれば、ポール・サルダが横須賀製鉄所附設黌舎において「画法幾何学」を講じたという点において建築教育の一端を担ったと考えることができる。

次に、シャルル・アルフレッド・シャステル・ド・ボワンヴィルは、曾禰達蔵の証言にあるように、「建築実地家の外人をして教師の代」¹⁹⁴としてジョサイア・コンドルの来日以前の「工部寮」時代の建築教育に従事した。1850年に生まれたシャルル・アルフレッド・シャステル・ド・ボワンヴィルは、12歳のころからフランスのA・ギュヨーに師事し、1870年にイギリスに戻り、翌年の1871年よりグラスゴーのCampbell Douglas & Sellarsに勤務し、その後、1872年にフランス旅行を経て、1873年10月に日本へ向かった¹⁹⁵。なお、シャルル・アルフレッド・シャステル・ド・ボワンヴィルの来日期間は1873年から1881年であった。

曾禰達蔵は、シャルル・アルフレッド・シャステル・ド・ボワンヴィルについて「技師として工部省に傭はれた人で、大分設計した建物もある」と述べ、実務面での活躍について触れる一方、「此の建築教師は建築学の講義をしなかった」と述べ、シャルル・アルフレッド・シャステル・ド・ボワンヴィルによる建築教育の不十分さを指摘した。また、その建築教育の概要について、曾禰達蔵は、「図面を写さしたり、クラシックオーダーを書籍より取って拡大したる図面としたり、又は実地見学として当時建築中の千住製絨所を視察したり、印刷局の建設現場を参観したり、其局部を写生したりして居った、又氏は時々説明を与へ、又問題を作りて学生に答案を出さしめた」¹⁹⁶と述べ、当時、欧米の建築事務所等で行われた一般的な教育手法である徒弟制度的教育¹⁹⁷に近い形での講義・実習であったことを証言している。つまり、「一流の腕を持っていたにせよ、徒弟制のなかで親方アーキテクトのやり方を”盗む”ことで腕を鍛えたボアンヴィルには、ディテールのほかに教えようもなかった」¹⁹⁸ことを示している。

こうした徒弟制度的な建築教育は、ジョサイア・コンドル来日まで続き、例えば、別の教師、ジョン・ダイアック（John Diack, 1828-1900）も同様の教育を行なった¹⁹⁹。学生たちは、このような現状に対し、明治政府が切望した国家のための建築を設計する技術者として養成されることを望み、徒弟制度的な教育ではなく、むしろよりアカデミックな建築教育を求めた²⁰⁰。こうした不満を背景に「建築実地家の外人をして教師の代」であったシャルル・アルフレッド・シャステル・ド・ボワンヴィルらとは異なる建築教育者としてジョサイア・コンドルが招聘された。

2.3 フランス人「建築教師」アベル・ゲリノー

2.3.1 フランス軍事顧問団と陸軍士官学校

澤護の「幕末・明治初年来日のフランス人建築家」(1985)²⁰¹では、取り上げられていない近代日本に雇われたフランス人建築家に、陸軍士官学校で教鞭を執ったエコール・デ・ボザール建築セクション出身のアベル・ゲリノー (Abel Jean Louis Guérineau, 1841-1929) がいる。ここでは、アベル・ゲリノーを取り巻く時代状況について着目し、アベル・ゲリノーが日本およびフランス帰国後に果たした役割を考察する。

近代日本の建築教育黎明期に建築教育者として雇われたにもかかわらず、建築史においてこれまでほとんど言及されてこなかったフランス人建築家アベル・ゲリノーの来日中の活動に着目し、日本における教育活動とフランスにおける日本の建築や芸術文化の普及活動においてアベル・ゲリノーが果たした役割について考察する。ここでは、アベル・ゲリノーの建築教育者としての側面や日本での教育に使用したと考えられる教科書とフランスの建築教育との接点を見出し、また、教育活動の傍ら描かれたと考えられる日本の建築や装飾芸術などの図版が、フランス帰国後、アベル・ゲリノーのどのような活動に反映されたのか、自身の著作のほか当時のフランス建築系雑誌や建築関連書籍を対象に分析する。

これまでの研究では、例えば、堀内達夫や飯田史也らの近代日本におけるフランスの技術教育導入の既往研究²⁰²において、フランスのエコール・ポリテクニクの教育システムとの関連で陸軍士官学校に触れている箇所もあるが、フランスの芸術学校などとの関係で陸軍士官学校を論じている部分は極めて少ない。なお、澤護の一連の研究²⁰³では、アベル・ゲリノーの名の記載は確認できるが、例えば、澤護の前掲論文(1985)においてアベル・ゲリノーに関する言及はなく、具体的に何を導入した人物かについて不明な点が多い。

陸軍省直轄の1874年に開校した陸軍士官学校は、“Military Architecture”としての「建築学」教育が行なわれた機関のひとつとして、フランスからの軍事顧問団等によって近代日本の軍事教育の礎が築かれ発展した。菊池重郎が「幕末期において西洋技術西洋建築導入の直接要請は **military architecture** であって **civil architecture** ではなかった」²⁰⁴と指摘するように、近代日本の発展過程において陸軍士官学校の建築教育は重要な教育であった可能性がある。

“Military Architecture”としての「建築学」教育が行なわれた機関である陸軍士官学校は、前述のように、フランスからの軍事顧問団等によって近代日本の軍事教育の礎が築かれ発展した。開校当時において、その教育実践では、主導的立場をフランス人で構成された教師陣がとり、その補佐的役割を日本人教師が担っていた。フランス人教師の多くは、軍事顧問団のメンバーで構成されていた。陸軍士官学校は、歩兵や騎兵のみならず、砲兵や工兵の士官クラスの人材を養成する機関で、フランスの士官養成学校のひとつサンシール士官学校 *Ecole Spéciale Militaire de Saint-Cyr* を範とし²⁰⁵、フランスの協力を得て教育・将校養成のシステム等の導入を図った。工兵を施設設計の統括的な役割を担う人物という視点で見た場合、非軍事的な技術官僚の養成を目指した工部大学校の教育モデルとは異なるモデルが導入されたと考えられる。

2.3.2 アベル・ゲリノーと陸軍士官学校

陸軍士官学校には、金子一夫の研究²⁰⁶に見られるように学科としての「建築科」が存在し、アベル・ゲリノーは同校の「建築科教師」として雇われた。

アベル・ゲリノーは、1841年フランス西部の都市アンジェ Anger に生まれた。1861年にパリのエコール・デ・ボザールの建築セクションに入学し²⁰⁷、上下2級の下級課程であるセコンド・クラス Seconde classe に在籍した。アベル・ゲリノーが入学した1861年頃のエコール・デ・ボザールは1863年の教育改革を控えた変革期であった。

エコール・デ・ボザール入学者は、通常「アトリエ」Atelier と呼ばれる建築家が主宰する塾のような組織に属すのだが、アベル・ゲリノーは建築家ルイ・ルノルマン (Louis Lenormand, 1801-1862) が主宰者 (パトロン Patron) を務めたアトリエに所属した。

第二帝政の崩壊、普仏戦争、パリ・コミュンなど、国内の混乱期を経て、1874年1月15日にルイズ・セレスティヌ・ゴルジュラ (Louise Célestine Gorgerat) と結婚したアベル・ゲリノーは、陸軍省のお雇外国人として同年4月5日に来日し、同年4月11日から1880年6月30日までの契約期間中、主に陸軍士官学校で教鞭を執った²⁰⁸。

篠原宏の書物では「民間人」²⁰⁹とされているアベル・ゲリノーだが、アベル・ゲリノーの日本政府による雇用時期が第二次フランス軍事顧問団来日中 (1872-1880) であり、「フランス軍人」Militaire français²¹⁰や、「中尉」lieutenant²¹¹^{注12}とフランス文献で指摘されているように軍人であり、アベル・ゲリノーの俸給は他の民間人お雇いフランス人に比べ高額で、軍事顧問団の中尉相当の俸給を得ていたように軍事顧問団の別働隊として来日した可能性がある²¹²。

篠原宏や原正敬らの研究²¹³において、アベル・ゲリノーの担当は、「図学」や「作図」とされているが、1875年7月の「陸軍省大日記」によれば、アベル・ゲリノーは「仏国人建築教師」とされ、主な職務として「建築の図案」などの教授が挙げられている²¹⁴。また、当時の陸軍士官学校には「定員のない建築学科」²¹⁵が存在した。さらに、アベル・ゲリノーは、建築科設立の建議が建てられた在任期間の後期において、図学のほか、芸術関連科目とでも呼べる「石版写真銅版及び彫刻」、「写景立体幾何建築」といった科目を日本人図学教官へ教えるために契約が延長されている。なお、このアベル・ゲリノーの担当科目の後任は、工部省のお雇いイタリア人建築家ジョヴァンニ・ヴィンチェンツォ・カッペレッティ (Giovanni Vincenzo Cappelletti, 1841-1887?) であり、さらにその後任が、明治期の風刺画を描いたフランス人、ジョルジュ・ビゴー (Georges Ferdinand Bigot, 1860-1927) であった²¹⁶。

また、アベル・ゲリノーは、こうした「建築教師の役割」les fonctions de professeur d'architecture を果たしただけでなく、「建築家の業務」son service d'architecte に従事したことをフランスの建築系雑誌 “Revue générale de l'architecture et des travaux publics” が伝えている²¹⁷。

陸軍士官学校の学生に対する図画教育は、フランス人教師アベル・ゲリノーが主任的役割を演じ、その下に日本人教師として川上寛 (川上冬崖)、小山正太郎、近藤正純、河北道介、榎本正忠、鈴木雪村、小平狭山、久保嘉門、横山松三郎らがつき、補佐した²¹⁸。

一方で、アベル・ゲリノーは、陸軍士官学校の教師を教育する役割も担っており、日本人図画教師

に対して西洋の図画技術を教えていた。例えば、1874年陸軍士官学校図画教授掛となった日本人教師の一人、洋画家小山正太郎（1857-1916）は、アベル・ゲリノーから水彩画の技術などを学んだ²¹⁹。また、1876年より陸軍士官学校で写真や石版術を講じたとされる明治初期の写真家横山松三郎（1838-1884）は、アベル・ゲリノーから石版法や墨写真法などを教わり、実験したことが伝えられている²²⁰。このようにアベル・ゲリノーは、近代日本における芸術分野、特に洋画や写真分野などの発展に寄与した人物であり、この点に関して陸軍士官学校においてただひとりのエコール・デ・ボザール建築セクションの出身者であったことは特筆に価する。また、帝国大学工科大学造家学科で「自在画」などを担当し、後年、陸軍砲工学校において図学を担当した松岡壽もアベル・ゲリノーに学んだことを考えれば²²¹、近代日本の建築教育における画学や図学教育の源流、つまりは設計・製図教育の源流²²²にはアベル・ゲリノーによって伝えられた技術が反映された可能性がある。

2.3.3 エコール・デ・ボザールと陸軍士官学校の教科書

陸軍士官学校の教育課程では、日本語の教科書が使用され、そのいくつかはエコール・デ・ボザールとの関わりが見出せる。

まず、陸軍士官学校の「図学」科目で使用された『図学教程』は、冒頭に「法国、ル・ベアール氏及びデレエストル氏著の本を翻訳」との記載があり、「法国」からフランスの書物であることがわかる²²³。

カタカナ表記された人名情報、「ル・ベアール氏」と「デレエストル氏」を手がかりに調査した結果、前者はアレクサンドル・ル・ベアール (Alexandre Le Béalle)、後者はルイ・デレストル (Louis-Jean Désiré Delaistre, 1800-1871) であり、各人の著書が参照された。なお、この2人については、陸軍士官学校の教育制度改変に伴って1889年に誕生した陸軍砲工学校の『砲工学校図学教程第四版』(1898)においても参照されている。

アレクサンドル・ル・ベアールは、ヴェルサイユの師範学校 *Ecole Normale de Versailles* 出身で、母校やエコール・サントラルで教師を務めた測量技師である²²⁴。著書には、『図学教程』で参照されたとみられる『水彩・装飾線描理論・実践講義』²²⁵のほか、『古典的・初歩的地図素描講義』²²⁶や『コレージュ・パンシオンの初等測量学』²²⁷などがある、

また、一方のルイ・デレストルは、エコール・デ・ボザールの版画セクション *Section Gravure* 出身者で、20歳で版画セクションのローマ大賞に相当する銅版画賞 *Le prix de gravure en taille-douce* で第2等次席 *Le Deuxième second grand prix* を獲得した人物である。著書に『発展的線描完全講義』²²⁸や『素描・絵画手法講義』²²⁹がある。

なお、この『図学教程』は、陸軍士官学校の教育制度が改変された際に誕生した、陸軍砲工学校の図学テキストにおいても発展的に継承され、『図学教程』と同様に冒頭部分において「ル・ベアール氏」と「デレエストル氏」の両名の表記が確認できる。

次に、陸軍文庫の『寫景法範』は、陸軍士官学校と陸軍大学校の教科書として使用されたが、その冒頭には「佛国学士ブイヨン氏ノ著書ニ基ク」という記載の存在を原正敏が指摘しているが、その具体的な参考文献名は述べられていない²³⁰。また、1876年から1886年にかけて陸軍士官学校教官をつとめた石丸三七郎による『泰西絵原写景法解説』²³¹においても「佛国学士ブイヨン氏ノ著書ニ基ク」という同じ表記が確認できる。これらの書物は、陸軍士官学校においてその最初期から使用されたとみられるが、その具体的な参考文献名の記載はない。

そこで、『泰西絵原写景法解説』およびその附図『泰西絵原写景法附図』とフランス語文献を比較し、分析した結果、「ブイヨン氏」は、建築家オーギュスト・ブイヨン (Auguste-Louis-Edouard Bouillon, 1805-1864) であることが判明した。オーギュスト・ブイヨンは、1823年にエコール・デ・ボザール建築セクションの2級課程に入学し、1783年にローマ大賞 *Grand Prix de Rome* を受賞した建築家アントワーヌ・ヴォードワイエ (Antoine-Laurent-Thomas Vaudoyer, 1756-1846) がパトロンを務めたアトリエに所属した建築家である。オーギュスト・ブイヨンの主な著書に『線描諸原理』²³²や『線遠近法諸原理』²³³があり、『泰西絵原写景法附図』の一部(図1.2.1, 1.2.2)と『線遠近法諸原理』の一部(図1.2.3)を比較してわかるように、『線遠近法諸原理』が参照された。

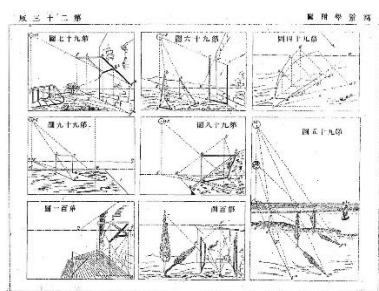


図 1.2.1 「第 23 版」

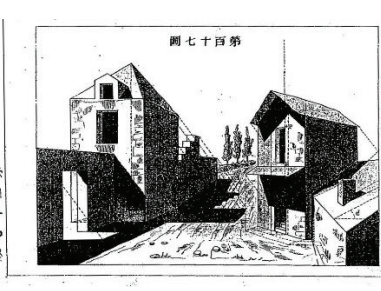


図 1.2.2 「第 27 版」

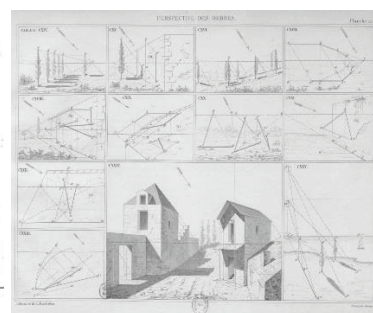


図 1.2.3 「第 21 版」 Planche 21

【図版出典】

図 1.2.1, 1.2.2) 石丸三七郎編：泰西絵原写景法附図，原亮三郎，1885

図 1.2.3) Bouillon, A. : Principes de perspective linéaire, L. Hachette, 1841

さらに、陸軍士官学校の「数学」科目は、フランス軍事顧問団のメンバーで陸軍士官学校教育部長となったエルネスト＝アントニン・ヴィエイヤール (Ernest-Antonin Vieillard, 1844-1915) とルイ・クレットマンによって行なわれた。この「数学」科目におけるアベル・ゲリノーの直接的な関与は不明だが、アベル・ゲリノーが「図学」担当であったことを考慮すると、アベル・ゲリノーが幾何図学の描写に関与した可能性が考えられる。

「数学」科目の教科書として使用された『算学講本』の幾何部分の記述は、19 世紀フランスの数学者アントワヌ・アミオ (Antoine Amiot) の著書『幾何諸要素』*Eléments de Géométrie* の翻訳といわれている²³⁴。アントワヌ・アミオは、アベル・ゲリノーがエコール・デ・ボザールに入学した 2 年後の 1863 年から建築セクションに新設された科目のひとつ、「幾何図学」*Géométrie Descriptive* 科目を 1865 年まで担当した人物であり²³⁵、エコール・デ・ボザールとの関連が指摘できる。

さらに、アベル・ゲリノーの直接的な関与は不明だが、ルイ・クレットマンが担当した「築城学」の教科書は、フランスの砲工応用学校の教科書の翻訳版であった²³⁶。その教科書には、エコール・ポリテクニクの建築教師レオンス・レイノー (Léonce François Raynaud, 1803-1880)²³⁷の名が刻まれており、エコール・ポリテクニクや砲工応用学校での設計要領とみられる図版などが掲載された。近代日本における兵舎の設計に、その設計要領を含めエコール・ポリテクニクや砲工応用学校で習得した技術が適用され、フランス軍事顧問団メンバーによって実践された²³⁸。

こうしたことから陸軍士官学校の教育には、既往研究で触れられているようにエコール・ポリテクニクやその応用学校における技術教育と共に、エコール・デ・ボザール出身者としてのアベル・ゲリノーの視点やエコール・デ・ボザールに代表される芸術教育手法が導入されており、近代日本における建築の学問体系黎明期において、フランスの建築理論と教育手法が日本人教師に伝えられた。

このように、エコール・デ・ボザール出身の建築家アベル・ゲリノーは、近代日本の建築教育における“Military Architecture”としての「建築学」教育を担った人物の一人であり、エコール・デ・ボザールやゲリノーとの関係に着目し、陸軍士官学校で使用された教科書を分析した結果、フランスのエコール・デ・ボザールの建築家による書物が「写景学」、つまり、現在の「透視図学」の教育に導入されていたことや、さらには、エコール・デ・ボザールの版画家による書物、そして、エコール・デ・ボザールの建築セクションで教鞭を執った人物による書物など陸軍士官学校とエコール・デ・ボザールとの教育面での関わりが明らかとなった。

2.3.4 アベル・ゲリノーが描いた「日本」

アベル・ゲリノーは来日中、陸軍士官学校での教鞭の傍ら、日本国内で見聞を広め、日本の建築や装飾芸術の図を描いていた²³⁹。

1880年に日本を離れたアベル・ゲリノーは、フランス帰国後パリを拠点に建築家として活動をする傍ら、日本建築紹介者として自らが日本で描いた図版を様々な方法で発表している。

アベル・ゲリノーはフランス帰国直後、日本建築をフランスで紹介するため展覧会での作品展示を試みている。アベル・ゲリノーは、1881年に「日本建築研究」*Etude sur l'architecture japonaise*と題した作品をフランス芸術家協会 *Société d'artistes français* 主催の第98回展覧会「1881年のサロン」*Salon de 1881* に出品し、建築部門 *Section d'Architecture* の2等賞 *médaille de deuxième classe* を獲得した²⁴⁰。アベル・ゲリノーは1881年の出品以後も定期的に「サロン」への出品を試みており、度々話題となった²⁴¹。

アベル・ゲリノーは、自身の著作として、図集“*Ornements japonais*”²⁴²を1889年に刊行し、日本を体験した建築家として現地で得た同時代の異国の情報をフランスに紹介した。このアベル・ゲリノーの図集は、陸軍省に雇われていた期間に得た情報をまとめた集大成ともいえるもので、日本語表題『日本国築造、装飾図』が表紙(図1.2.4)に記載されているように、日本で見聞した建築や装飾芸術にもとづく図版50点が掲載されている。掲載された図版は、家紋や木彫のほか、寺社仏閣や大名屋敷などにおける破風の建築彫刻、障子や高窓などの開口部の装飾、数々の組物といった建築要素が占めている。なお、図集の目次 *Table explicative des planches* において、アベル・ゲリノーは“*Dessin d'architecture et d'ornement Japonais*”という日本語表題に関するフランス語の説明を残している。アベル・ゲリノーが、“ornement”を「装飾」とし、“architecture”を「建築」や「造家」ではなく「築造」としており、ここに工部省と陸軍省の違いが見られる。

本書でのアベル・ゲリノーの肩書き“*Ex-Architecte du Gouvernement Japonais*”は、「前」を示す接頭語“*Ex-*”，「建築家」を示す“*Architecte*”，「日本政府」を示す“*Gouvernement Japonais*”で構成されており、アベル・ゲリノーがフランスでは「前・日本政府の建築家」として活動していたことを示している。

アベル・ゲリノーの図集発刊のきっかけは、フランスの建築系雑誌“*Revue générale de l'architecture et des travaux publics*”への日本建築に関する図版の提供であると考えられる。

アベル・ゲリノーが描いた日光や東京・芝からイメージしたとされる²⁴³日本の神社配置の特徴を説明する透視図(図1.2.5)や日光中禅寺を中心とした図版7点が1886年に掲載され、翌年には一間社流造の神社建築や日本家屋の透視図や平面図、屋根瓦の型、小屋組図などの図版9点が掲載され、図版に付随する形で編集部による日本建築の比例分析などの論考が続いている²⁴⁴。

この特集は、日本の開国後、仏教建築や寺院建築の実例が海外で紹介された最初期のもので、編集部が述べるようにヨーロッパ諸国の書籍に日本建築の構造的な詳細を含む情報が希薄であったことなどの問題意識に基づいて組まれていた。この特集において日本建築の情報充実を目指していた編集部側は、より多くの図版や情報をアベル・ゲリノーに期待していたが²⁴⁵、アベル・ゲリノーが1886年にチリ・ホーン岬へ出発することにより日本特集が1887年以降に継続することはなかった²⁴⁶。

1886年掲載の「日本の多彩色建築」L'architecture polychrome au Japon (図1.2.6)は、日本建築を題材にエコール・デ・ボザールのセコンド・クラスで課される「要素分析」Elément analytiqueの表現手法が採用されている。これは、日本人で初めてエコール・デ・ボザール建築セクションを修了しフランス公認建築家資格を取得した中村順平が、横浜高等工業学校において1925年より学生達に課した日本建築の「建築図画」に先駆けていた²⁴⁷。

1887年に掲載された一間社流造の神社建築の図版(図1.2.7)には、「日光山内小寺」と書かれているが、その具体的な名称の記載はない。この図版の対象が日光山内地区の神社であるならば、日光二荒山神社本社境内社のひとつ、朋友神社が該当するものと見られる

アベル・ゲリノーがこの神社を実際に訪問したか否か、また制作時期は不明だが、陸軍士官学校で教鞭を執ったフランス軍事顧問団のルイ・クレットマンが1877年8月頃に撮影したとされる日光の写真資料から判断すると、アベル・ゲリノーがこのときに同行していた可能性もある²⁴⁸。一方で、明治初期に日光写真を撮影していた横山による写真群や日本の絵画技法との比較検討なども今後必要だろう。

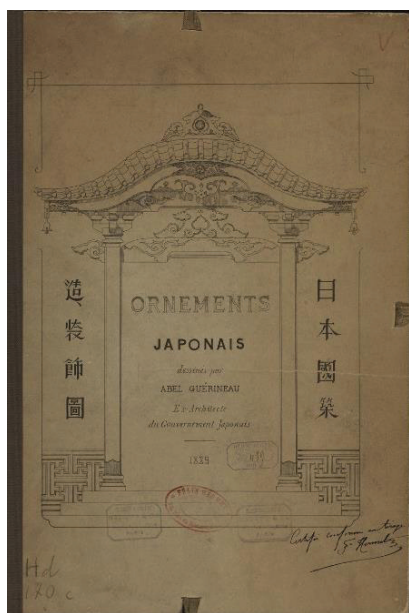


図1.2.4 『日本国築造 裝飾図』

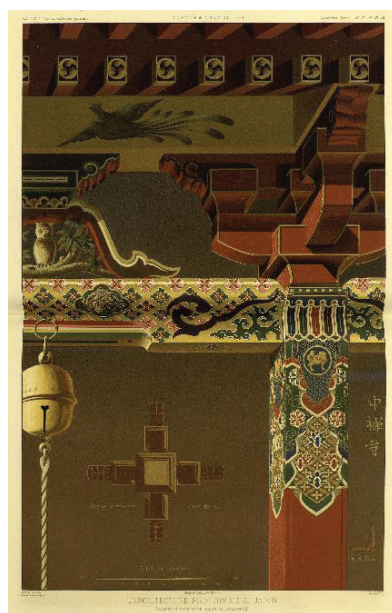


図1.2.6 「日本の多彩色建築」



図1.2.5 「日本之寺円」
Grand temple japonais



図1.2.7 「日本の建築」
L'architecture au Japon

こうした雑誌に掲載されたアベル・ゲリノーの図版や日本建築特集における分析が、他のフランス人建築関係者に投影されている。

同年生まれのフランス人建築史家オーギュスト・ショワジーは、著書『建築史』の日本や中国について触れる第6章において、前述の雑誌“Revue générale de l'architecture et des travaux publics”での日本建築特集に掲載された屋根や組物に関する図版の一部や比例の分析部分などを参照している。

例えば、雑誌に掲載された図版(図1.2.8, 1.2.10)とオーギュスト・ショワジーの『建築史』に掲載された図版(図1.2.9, 1.2.11)を比較すると、オーギュスト・ショワジーによって屋根瓦の分析部分や組物に関する情報が汲み取られていることがわかる。

また、オーギュスト・ショワジエの「正面が三つのスパンから成る寺院では、中央のスパンがタルキの軸線間隔の18倍、両端のスパンは16倍、屋根の張り出しは14倍」²⁴⁹という日本建築の比例に関する記述には、前述の雑誌“Revue générale de l'architecture et des travaux publics”の1887年に掲載された図版（図1.2.12）の三間社に関する比例分析部分²⁵⁰が参照されるなど、オーギュスト・ショワジエの日本に関する論考においてアベル・ゲリノーが日本滞在中に収集した日本建築の情報が重要な要素となっている。

こうしたことから、アベル・ゲリノーが、フランス帰国後、日本建築の紹介者としての役割を演じ、アベル・ゲリノーにより紹介された日本の情報が、フランス近代の建築史家のひとりオーギュスト・ショワジエに参照された。オーギュスト・ショワジエの『建築史』は構造的古典主義の建築論の頂点に達したといわれ²⁵¹、国際的に評価も高い書物であり²⁵²、この書物が多くの建築家に影響を与えていたと考えれば、アベル・ゲリノーの日本建築に関する情報も重要性の高い情報であったといえる。

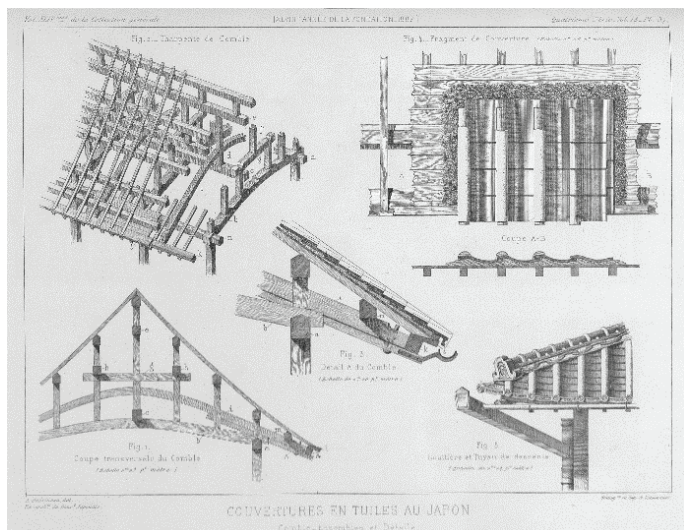


図 1.2.8 「日本の屋根瓦」 Couverture en tuiles au Japon

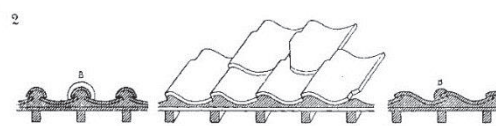


図 1.2.9 「日本の屋根瓦のタイプ」

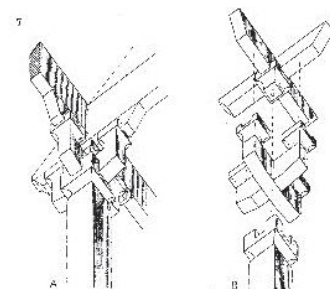


図 1.2.11 「階層的な放射状組物をもつ柱」

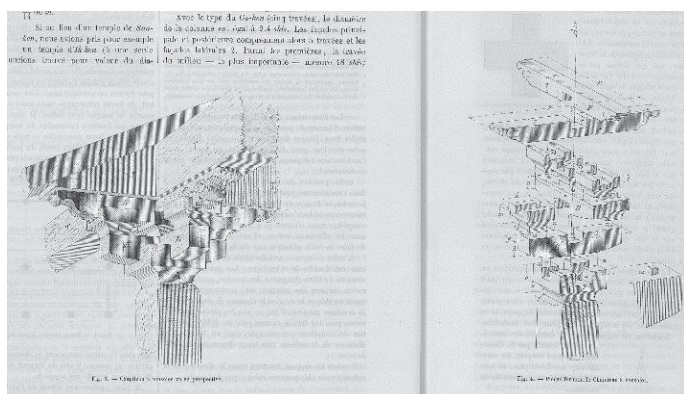


図 1.2.10 雑誌掲載の組物分析図

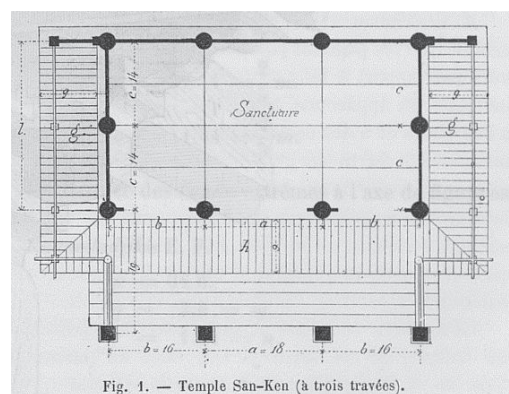


図 1.2.12 雑誌掲載の三間社比例分析図

【図版出典】

- 図 1.2.4) Guérineau, A. J.-L. : Ornaments japonais, 1889
 図 1.2.5, 1.2.6) Daly, C. (Ed) : Revue générale de l'architecture et des travaux publics, 1886
 図 1.2.7, 1.2.8, 1.2.10, 1.2.12) Daly, C. (Ed) : 前掲書, 1887
 図 1.2.9, 1.2.11) Choisy, A. : Histoire de l'architecture Tome 1, Gauthier-Villars, 1899

小結

本章では、工部省管轄工部寮を起源とした工部大学校や帝国大学工科大学造家学科の2人の教育者、ジョサイア・コンドルと辰野金吾の建築教育に着目し、それぞれの特徴を整理した。また、近代日本の建築教育をフランスの省庁管轄の学校組織との関係から再考した。

「1. ジョサイア・コンドルと辰野金吾の建築教育」では、まず、建築教育を内包した組織である工部省管轄工部寮の教育方針を整理し、ジョサイア・コンドルと辰野金吾の建築教育の特徴を整理した。

1.1 では、工部省管轄工部寮や工部大学校、その延長にある帝国大学工科大学の教育方針をヘンリー・ダイアーと古市公威の2人の教育理念から読み解き、フランスとの関係を確認した。その結果、近代日本の技術教育機関が少なからずフランスの影響を受け発展し、近代日本の建築教育はそうしたヘンリー・ダイアーと古市公威の理念を踏襲した技術教育観に基づいた教育機関において発展したことを指摘した。

1.2 では、ジョサイア・コンドルの建築教育の特徴を整理した。その結果、ジョサイア・コンドルが建築史学と課題設計と実施設計の3つを柱とした設計教育を行ない、設計と構造の2つを教育の軸とした建築教育スタイルを確立したことを確認した。また、ジョサイア・コンドルが日本人建築教育者を育成し、日本人による建築教育の土台を築いたことを確認し、ジョサイア・コンドルによって日本人による建築教育の土台が整備されたことを指摘した。

1.3 では、辰野金吾の建築教育に着目し、その教育の特徴とその教育を支えた他の教育者を整理した。その結果、辰野金吾がジョサイア・コンドル教育への問題意識から新たな教育プログラムの編成を考案し、辰野金吾の時代に近代日本の建築教育が自在画教育を重視する方向へと改革された事実を確認した。特に、辰野金吾の教育は、後年歴史家によって「ボザール流」といわれるに至り、芸術的教育へと変化した。辰野金吾の建築教育が、芸術家としての建築家を理想とする教育の礎を築いた。こうした芸術的教育の色彩が濃厚な、原則的には西欧的建築家像に基づいた建築教育の在り方は辰野金吾の教育改革の成果であったと同時に、辰野金吾が「美術建築」思想を受容した現れであった可能性を指摘した。

1.4 では、1.3 に続き、辰野金吾の教え子に着目し、近代日本における建築教育分野に貢献した人物を整理した。その結果、辰野金吾の教え子のうち10名が官立の高等教育機関で建築教育を牽引したことを確認した。こうして輩出された教育者の教育手法にみる辰野金吾の教育からの連続性については、本論第2編・第1章において検証する。また、佐野利器の登場による建築教育の変化について、「芸術教育」と「構築技術」の両立に加え、新たに「構造技術」教育の出現を指摘した。

「2. 近代日本における建築教育機関再考」では、近代日本の黎明期の教育が省庁附設のフランスのグラン・ゼコールのような組織として存在したことに着目し、フランス人によってはじめられた建築教育の存在を検証した。

2.1 では、その可能性として考えられる2つの教育機関、陸軍士官学校と横須賀製鉄所附設覺舎の存在を指摘し、両校においてエコール・ポリテクニク出身のフランス人技術者が教育に関与した事実を確認した。特に、陸軍士官学校の教育システムが変更になった1887年以降においても、エコール・ポリテクニクを参照した陸軍砲工学校においてフランス流の教育が引き継がれたことを確認した。

2.2 では、お雇い外国人のうち、フランス人建築家としてこれまで取り上げられた7名から、教育活動に貢献した2名、ポール・サルダとシャルル・アルフレッド・シャステル・ド・ボワンヴィルに着目し、近代日本における建築教育への貢献を検証した。その結果、ポール・サルダは横須賀製鉄所附設覺舎での図学教育へ貢献し、また、シャルル・アルフレッド・シャステル・ド・ボワンヴィルが工部寮での建築教育に貢献した事実を確認した。

2.3 では、既往研究においてこれまでほとんど言及されなかった陸軍士官学校の「建築教師」として雇われたフランス人のエコール・デ・ボザール出身の建築家アベル・ゲリノーに着目し、陸軍士官学校との関係や、同校で使用された教科書との関係、および、アベル・ゲリノーのフランス帰国後の貢献を整理した。

2.3.1 では、既往研究を整理し、陸軍士官学校において非軍事的な技術官僚の養成を目指した工部大学校の教育モデルとは異なるモデルが導入された可能性を指摘した。

2.3.2 では、アベル・ゲリノーの経歴を整理し、陸軍士官学校での役割を概括した。その結果、アベル・ゲリノーは陸軍士官学校において日本人教育者の育成にも貢献し、また、建築教師としての職責のほか、建築家としての役割も担っていた事実を指摘した。つまり、アベル・ゲリノーは近代日本の発展に貢献したフランス人お雇い建築教育者であり建築家であったことが明らかになった。また、育成された日本人教育者の多くが、近代日本における洋画や写真分野などの発展に貢献した人物であったことを指摘し、さらに、帝国大学工科大学において辰野金吾が牽引した建築教育に関与した松岡壽との関係を指摘した。

2.3.3 では、陸軍士官学校で使用された教科書とエコール・デ・ボザールとの関係を検証した。その結果、「図学」科目で使用された『図学教程』、『泰西絵原写景法附図』、「数学」科目の教科書として使用された『算学講本』の幾何部分の記述にエコール・デ・ボザールとの関係を見出した。

2.3.4 では、アベル・ゲリノーのフランス帰国後の活動と日本での経験との接点を検証した。その結果、アベル・ゲリノーはフランスへ帰国後、展覧会、雑誌への図版提供、図集刊行の3つの方法により、当時の日本の建築事情をフランスで発表したことを確認した。また、アベル・ゲリノーの図集から、アベル・ゲリノーが、「前・日本政府の建築家」としてフランスで活動した事実を確認した。さらに、雑誌へ提供されたアベル・ゲリノーの日本を描いた図版などが、その後、フランスのフランス近代の建築史家のひとりオーギュスト・ショワジエの著書『建築史』に参照されたことを確認した。

以上より、イギリス人建築家ジョサイア・コンドルの建築教育は、日本人建築教育者辰野金吾の手に渡ることで、前章で指摘したように、エコール・デ・ボザールが当時行っていた歴史主義や復興主義、折衷主義の建築にみられるルネッサンス的視点からの学びへと変化した。辰野金吾の建築教育改革により、「ボザール流」と呼ばれる芸術的な教育へと変化した。近代日本の建築教育に自在画重視の傾向が現れた。

また、こうした変化の影で、近代日本において建築に従事する技術者の養成は工部省だけの問題ではなく、他の省庁においても同様の人材が必要とされていた。工部大学校が、官における公共事業に従事することに主眼を置き、産業振興に貢献する建築技師の養成を意図したのに対し、軍事面において工兵的な役割としての建築技師の養成も同時期に行われた。軍事面の教育機関では、フランスからの技術者や建築家を雇い入れ、教育が行なわれた事実を確認した。このことから、殖産興業および軍

需拡大の両面に建築教育が導入されたことが明らかになった。特に、後者を目的とした養成機関のひとつ、陸軍士官学校では、エコール・デ・ボザール出身のフランス人建築家による技術が伝習され、その技術が辰野金吾とともに帝国大学工科大学造家学科の建築教育の発展に貢献した松岡壽へと受け継がれた。

第2章 註

- ¹²³ 大森東亜「19世紀米欧高等教育モデルと日本モデル形成—岩倉使節団の米欧高等教育回覧—」米欧回覧の会 HP：
<http://www.iwakura-mission.gr.jp/tokubetu-kikou/kyoiku.pdf>（最終アクセス：2015.02.05）。その他、明治期の学校
制度について天野郁夫「伝統と近代—明治期日本の高等教育—」『明治聖徳記念学会紀要』復刊第47号、明治聖徳記
念学会、2010、pp.362-383
- ¹²⁴ 海津忠雄「福沢諭吉の『芸術』の概念」（所収『福沢諭吉と近代美術』、慶応義塾大学アート・センター、2009年）
によれば、旧工部大学校史料編集会『旧工部大学校資料』虎之門会、1931、p.51での言説により、以降、チューリッ
ヒ技術学校が通説となっていたが、三好信浩「工部大学校の教育」（所収『広島大学教育学部紀要』第24号、広島大
学、1975）や館昭「日本における高等技術教育の形成—工部大学校の成立と展開—」（所収『教育学研究』第43巻No.1、
pp.13-23、日本教育学会、1976）などの研究により、その通説に疑いがもたれ、現在では諸説あると述べ、また、
堀内達夫「日本近代技術教育と学校モデルの移転」（所収『職業と技術の教育学』第17号、pp.7-14、名古屋大学、
2006）、p.11によれば、三好信浩『ダイアールと日本』福村書店、1989、pp.62-64の説が「説得的」と述べている。
- ¹²⁵ 土木学会編『古市公威とその時代』土木学会、2004、p.30
- ¹²⁶ 恒川清爾『明治期における技術者の分析：近代技術確立をめぐる職人と職人的技術者』東京工業大学、2006、学位
論文、p.69
- ¹²⁷ 恒川清爾、前掲書「第2章 明治期における技術者教育と日本的技術者」
- ¹²⁸ 恒川清爾、前掲書、p.81
- ¹²⁹ 恒川清爾、前掲書、p.81
- ¹³⁰ 土木学会編『古市公威とその時代』土木学会、2004、p.28
- ¹³¹ 村松貞次郎『お雇い外国人⑤—建築・土木』鹿島出版会、1976、p.25
- ¹³² 村松貞次郎、前掲書、p.26
- ¹³³ 藤森照信「建築設計教育事始め 辰野金吾が受けた建築設計教育」『建築雑誌』Vol. 109, No. 1362, pp.10-11、日
本建築学会、1994
- ¹³⁴ 村松貞次郎、前掲書、p.26によれば、「ジョサイア・コンドルより競技設計の存在を聞いた」とあるが、曾禰達蔵の
「明治建築座談會（第2回）」『建築雑誌』Vol.47, No.566, pp.145-196、建築学会、1933、p.156での発言をここで
は採用した。
- ¹³⁵ なお、近年、現場という教育の場が、再び建築教育に取り込まれつつある。2008年に建築士法の改正に伴い、建築
士試験の受験資格要件が、従来の「大学院における研究が建築に関するものであると認められるもの」から「建築物
の設計又は工事監理に係る実践的な能力を培うことを目的として建築士事務所等で行う実務実習（以下「インターン
シップ」という。）及びインターンシップと関連して必要となる科目（以下「インターンシップ関連科目」という。）に係
る単位を修得した単位数が所定のもの」へと修正された。（出典：公益社団法人日本建築技術教育センター発行「大学
院における実務経験の審査基準」（2008））この基準にみるように「インターンシップ」が教育現場へと戻されたが、
大学院修学期間を実務経験年数へ算入するための措置であり、大学院により修了要件に含まれない例もある。したが
って、明治期の教育機関の卒業要件であった現場での実習と現在の「インターンシップ」は若干意味合いが異なるが、
明治初期の教育システムの再考と捉えることも可能だろう。
- ¹³⁶ 鉱山学教師としてイギリスから招かれた。ジョン・ミルンによって、日本の地震学は、生みだされ育まれた。日本地

- 震学会の創設に貢献したジョン・ミルンは、西欧地震学の祖といわれている。(村松貞次郎, 前掲書)
- 137 ジョサイア・コンドルの建築学講述書。ジョサイア・コンドル述, 松田周次・曾禰達蔵筆記『造家必携』加藤良吉(出版人), 1886
- 138 村松貞次郎, 前掲書, p.26
- 139 村松貞次郎, 前掲書, p.25
- 140 村松貞次郎, 前掲書, p.25
- 141 清水重敦・河上眞理『佐賀偉人伝 08 辰野金吾』佐賀県立佐賀城本丸歴史館, 2014, p.34
- 142 村松貞次郎, 前掲書, p.27
- 143 村松貞次郎, 前掲書, p.29
- 144 近江栄「建築教育 明治・大正の歩み」『建築雑誌』Vol.90, No.1101, pp.1027-1031, 日本建築学会, 1975, p.1028
- 145 近江栄, 前掲書, p.1028
- 146 中村順平「パリ美術院—明治 200 年」『檜』第 1 号, 檜の会, 1989, p.4。中村順平の未定稿の論考。雑誌『新建築』で連載された「パリ美術院」の続稿で, 檜の会の会報に草稿が転載された。
- 147 村松貞次郎, 前掲書, p.25
- 148 ジョサイア・コンドルによって育成された日本人建築教育者の代表格。辰野金吾就任以前には, 日本人建築教育者として曾禰達蔵がジョサイア・コンドルを補佐する助教授を務めた。
- 149 近江栄, 前掲書, p.1028
- 150 藤森照信, 前掲書
- 151 辰野金吾がロンドン滞在中の 1881 年にウィリアム・バージェスは亡くなった。
- 152 村松貞次郎, 前掲書, p.25
- 153 曾山幸彦は卒業の翌月, 1883 年 2 月に工部大学校の図学教場掛兼博物掛の職を得た。自らの制作と, 大学, 私塾での教育に勤勉ぶりを貫いた人物として知られる。腸チフスに罹り, 1892 年 1 月 10 日に没した。なお, 「故大野義康君小伝」(『建築雑誌』Vol.6, No.61, pp.29-30, 建築学会, 1892) にみるように曾山幸彦は「大野義康」や「大野幸彦」と表記されることもある。
- 154 清水重敦・河上眞理『辰野金吾』(ミネルヴァ日本評伝選), ミネルヴァ書房, 2015, p.128
- 155 清水重敦・河上眞理, 前掲書, 2015, p.96
- 156 清水重敦・河上眞理, 前掲書, 2015, pp.113-114
- 157 辰野金吾がジョサイア・コンドルから教育の舵取りを引き継いだ際, ひとりのフランス人オーギュスト・サラベル(Auguste Salabelle) が教師として雇われたことが『近代日本建築学発達史』p.1818 において触れられている。なお, オーギュスト・サラベルは同校造家学科に 1888 年 9 月 10 日から同年 10 月 6 日まで雇われたが, 来歴等詳細は不明である。
- 158 近江栄, 前掲書, p.1028。当該文献は, Burckhardt, J.: Die Baukunst der Renaissance in Italien (1891) と思われる。
- 159 近江栄, 前掲書, p.1028
- 160 村松貞次郎, 前掲書, p.30
- 161 村松貞次郎, 前掲書, p.30
- 162 NICHE (工学院大学建築学部同窓会誌編集部) 編『工手学校—日本の近代建築を支えた建築家の系譜—工学院大学』

彰国社, 2012

¹⁶³ 小島憲之は、アメリカ人ジャーナリスト、エドワード・ハウス（Edward H. House, 1836-1901）に連れられアメリカに渡ったとされる人物である。（Huffman, J. L. : A Yankee in Meiji Japan. The Crusading Journalist Edward H. House, Rowman & Littlefield Pub Inc, 2003, p.66）小島憲之は 1875 年 9 月アメリカ・コーネル大学建築学科に入学し、1879 年 6 月バシュラー・オブ・アーキテクチャーの称号を得た。同年 9 月よりアメリカ・コネチカット州の建築家ジョージ・ケラルのもとで実務経験を積む。1881 年にヨーロッパにわたり、インド・中国を経て帰国した。帰国後、1881 年 10 月に文部省御用掛となり、東京大学理学部を兼務した。1886 年に第一高等中学校の教諭となり、その後帝国大学工科大学造家学科の講師となる。1888 年より東京美術学校にて「幾何画法」科目の教授嘱託となった。

¹⁶⁴ 『日本建築辞彙』の初版の刊行は、1906 年だが、中村達太郎の死後も版を重ねた。中谷礼仁によれば日本初の本格的な建築辞書、現在流通している建築辞書の、少なくともその「日本建築」に関する項目については中村達太郎のこの辞典が参照されている。

¹⁶⁵ 中谷礼仁「亀裂の保存・中村達太郎『日本建築辞彙』を読む」『建築文化』彰国社, 2000

¹⁶⁶ 村松貞次郎『日本建築家山脈』鹿島出版会, 1965, p.26

¹⁶⁷ 近江栄, 前掲書, p.1029

¹⁶⁸ 倉方俊輔『伊東忠太の建築理念と設計活動に関する研究』早稲田大学, 2004, 学位論文

¹⁶⁹ 東京帝国大学編「別冊大正 8 年」『東京帝国大学一覧』東京帝国大学, 1919

¹⁷⁰ 清水重敦・河上眞理, 前掲書, 2014

¹⁷¹ 辰野金吾の教え子達の大学院進学者とその研究テーマ、教育者としての主な所属先（カッコ内に表記）は次の通り。
伊東忠太：日本建築術（東京帝国大学、東京美術学校、早稲田大学、他）、塚本靖：造家学科装飾法（東京帝国大学、東京美術学校）、大沢三之助：劇場建築及日本建築（*1897 年より日本建築が研究課題に加わる）（東京帝国大学、東京美術学校）、鈴木楨次：鉄材耐震構造（名古屋高等工業学校）、武田五一：建築学上採光及音響に関する事項（東京帝国大学、京都高等工芸学校、京都帝国大学）、土屋純一：居宅建築に関する事項（名古屋高等工業学校）、天沼俊一：五重ノ塔構造（京都帝国大学）、古宇田実：建築と造園との関係（東京美術学校、神戸高等工業学校）。その他、辰野金吾の教え子で大学院に進学したのは、野口孫一（1869-1915：耐震家屋、1899 年修）、片岡安（1876-1946：建築衛生の事項、1902 年修）、森山松之助（換気及暖房事項、1902 年修）がいた。なお、1900 年に卒業した保岡勝也：劇場の建築は 1903 年に大学院へ入学したため、大学院において辰野金吾の指導を受けていない。（参照：『東京帝国大学一覧』）

¹⁷² 村松貞次郎, 前掲書, 1965。なお、佐野利器もまた大学院へ進学している。研究テーマは「架骨構造に関する事項」。

¹⁷³ 佐野博士追想録編集委員会編『佐野利器』佐野博士追想録編集委員会, 1957, p.6

¹⁷⁴ 佐野博士追想録編集委員会編, 前掲書, p.6

¹⁷⁵ 佐野博士追想録編集委員会編, 前掲書, p.6

¹⁷⁶ 佐野博士追想録編集委員会編, 前掲書, p.6

¹⁷⁷ 長谷川堯『建築の現在』鹿島出版会, 1975, p.25

¹⁷⁸ 長谷川堯, 前掲書, p.24

¹⁷⁹ 長谷川堯, 前掲書, p.25

¹⁸⁰ 日本建築学会編『近代日本建築学発達史』丸善, 1972, p.1818

- ¹⁸¹ 日本建築学会編，前掲書
- ¹⁸² 菊池重郎「明治初期における ARCHITECTURE の訳語について（続）：文部省刊行の百科全書「建築学」に関する研究・その2のb」『日本建築学会論文報告集』第67号，pp.162-168，日本建築学会，1961，p.167
- ¹⁸³ 安藤洋美「我が国における明治期の確率・統計の教育について」『数理解析研究所講究録』1130巻，pp.174-188，京都大学数理解析研究所，2000
- ¹⁸⁴ 東京帝国大学編「従明治三十三年至明治三十四年」『東京帝国大学一覧』東京帝国大学，1900，p.342
- ¹⁸⁵ 石井正紀『陸軍員外学生』光人社 NF 文庫，2014
- ¹⁸⁶ 篠原修『海軍創設史』リプロポート，1986
- ¹⁸⁷ 堀内達夫「日本近代技術教育と学校モデルの移転」『職業と技術の教育学』vol.17, pp.7-14，名古屋大学，2006，p.8
- ¹⁸⁸ 堀内達夫，前掲書，p.8
- ¹⁸⁹ 堀内達夫，前掲書，p.9
- ¹⁹⁰ 例えば，横須賀製鉄所での教育については，堀内達夫『フランス技術教育成立史の研究—エコール・ポリテクニクと技術者養成』多賀出版，1997などに記載がある。レオンス・ヴェルニーについては，『お雇外国人⑥軍事』（鹿島出版会，1968）など書籍化された多数の情報がある。フランス軍事顧問団による日本の建築への影響についての研究では，日本建築学会学術講演梗概集に掲載された中森勉や前島美知子の一連の研究がある。ルイ・クレットマンに関しては『フランス士官が見た近代日本のあけぼの』（ニコラ・フィエヴェ・松崎 碩子（編），アイアールディ企画，2005）などがある。なお，篠原宏『陸軍創設史』リプロポート，1983においてもこうした士官クラスの人物などについての概略が触れられている。
- ¹⁹¹ 例えば，旧陸軍施設の歴史的遺産価値を再評価する研究として前島美知子の『日仏技術交流史からみた陸軍の施設計画に関する研究』（学位論文，慶應義塾大学，2012）や Journal of Asian Architecture and Building Engineering に掲載された2つの論文“A Study of Late 19th Century Military Bases and Barracks of the Former Army of Japan”（Vol. 7, No. 2, pp.155-161, 2007）および“The Typology of Officers' Mess Halls in Japanese Military Heritage”（Vol. 10, No. 1, pp.23-30, 2011），2007年から2011年にかけての日本建築学会大会発表（日本建築学会学術講演梗概集 F-2，建築歴史・意匠所収）などがある。これらでは主に旧陸軍における日仏の技術システムや人的ネットワークの解明が試みられているが，陸軍士官学校における建築家アベル・ゲリノーによる教育についての言及はなされていない。
- ¹⁹² 西堀昭「横須賀とフランスの歴史～横須賀製鉄所の建設と日仏交流」横須賀市 HP（最終アクセス：2015.02.05）
http://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/0130/culture_info/french/yokosukaseitetuzyo.html
- ¹⁹³ 小野雄司『日本人最初の先端技術者辰巳一造船大監：修学と近代造船学』研成社，2009
- ¹⁹⁴ 曾禰達蔵，「コンドル先生表彰余滴」『建築雑誌』Vol.33, No.403, pp.330-333，建築学会 1920，p.330
- ¹⁹⁵ スコットランド建築家事典 Dictionary of Scottish Architects HP（最終アクセス：2015.02.05）
http://www.scottisharchitects.org.uk/architect_full.php?id=200323
- ¹⁹⁶ 曾禰達蔵，前掲書，p.330
- ¹⁹⁷ 渡辺俊夫『日本近代建築教育の曙』東京大学創立百二十周年記念東京大学展学問の過去・現在・未来第一部学問のアルケオロジー第2章 実学の黎明—東京医学校と工部大学校，1997（最終アクセス：2015.02.05）
http://www.um.u-tokyo.ac.jp/publish_db/1997Archaeology/index.html
- なお，シャルル・アルフレッド・シャステル・ド・ボワンヴィルは，日本での活動を終えた後，イギリスに戻り，1882

年に RIBA のアソシエイトとなる。イギリス帰国後、ロンドンを中心に活動したこと考慮すれば、フランス人家庭に生まれたイギリス育ちの建築家ともいえる。

198 藤森照信, 前掲書

199 また、「デボアンビル氏の前であったか後であった乎今判然と記憶せぬが、工部省は其備技師ダイアックと云う人をも教授代りに学校へよこした、氏は建築の構造には明るかったが、美術家ではなく、年齢も余程高く実地から進んだ人かとおもはれた。……此の人も亦講義をなさず、図面を写させ、或は建築の実測図を作らせた位であった」(曾禰達蔵, 前掲書, pp.330-331) という証言に見られるように、他の臨時教師もまた同様の手法で造家学科の学生達に徒弟制度的教育を施していた。

200 曾禰達蔵が述べるように「斯くの如く吾吾は或る可なり永き期間専門の建築学に就て少しも秩序的な教授を受けることが出来ず、心中甚だ不満に堪えず、専任教師の着任を熱望して止まなかった」(曾禰達蔵, 前掲書, p.331)

201 澤護「幕末・明治初年来日のフランス人建築家」『千葉敬愛経済大学研究論集』第28号, pp.119-153, 千葉敬愛経済大学, 1985

202 堀内達夫『フランス技術教育成立史の研究ーエコール・ポリテクニクと技術者養成』多賀出版, 1997 や、飯田史也『近代日本における仏語系専門学術人材の研究』風間書房, 1998 などがある。

203 千葉敬愛経済大学研究論集に掲載された一連の研究や『お雇いフランス人の研究』(敬愛大学経済文化研究所, 1991) などがある。

204 菊池重郎, 前掲書, p.167

205 篠原宏, 前掲書, p.383

206 金子一夫『近代日本美術教育の研究 明治時代』中央公論美術出版, 1992, p.758 では、「陸軍省が建築科教師及び建築師として雇った」と記されている。

207 エコール・デ・ボザール出身者の主な情報源として De Penanrun, T. D., Delaire, E. A., Roux, L. F. : Les architectes élèves de l'Ecole des beaux-arts 1793-1907, Librairie de la construction modern, 1907 を参照。

208 篠原宏, 前掲書, p.383

209 篠原宏, 前掲書, p.383

210 Frédéric, L. : Le Japon. Dictionnaire et civilisation, Robert Laffont, 1999, p.313

211 クロード・エステブ (Claude Estèbe) の学位請求論文 “Le premier âge d'or de la photographie au Japon” (INALCO (Institut national des langues et civilisations orientales フランス国立東洋言語文化研究所), 2006), p.339

212 澤護「資料 官雇・お雇いフランス人明細表ー明治年間を中心としてー」『千葉敬愛経済大学研究論集』第23号, pp.105-156, 千葉敬愛経済大学, 1983, p.151

213 篠原宏前掲書では「図学」や「作図」と記載され、その研究を参照した原正敏の一連の図学研究においても同様の表現が採用されている

214 「建築教師」であったことを示す資料として、防衛省防衛研究所所蔵資料「仏国人建築教師グリノー氏当局へ御雇の儀に付届」(JACAR : C04026459100) などが存在する。なお、澤の前掲書「資料 官雇・お雇いフランス人明細表ー明治年間を中心としてー」p.151においても、職務欄には「建築」「図案」の文字が記載されている。

215 保谷徹「クレットマンとフランス軍事顧問団」(所収：ニコラ・フィエヴェ・松崎 碩子 (編), 前掲書), p.203

216 篠原修, 前掲書, 1983

217 Daly, C. (éd) : Revue générale de l'architecture et des travaux publics, Paulin & Hetzel, 1886, p.96

- ²¹⁸ 圓山茂子「美術教育の変遷考:明治時代から現代まで」『宝塚造形芸術大学紀要』第2号, pp.99-108, 宝塚造詣芸術大学, 1988, p.100
- ²¹⁹ 小山正太郎については, 金子一夫, 前掲書, p.248
- ²²⁰ 横山松三郎については, 谷昭佳「クレットマンと明治前期の日本写真」(所収: ニコラ・フィエヴェ・松崎 碩子(編), 前掲書), p.230 を参照した。竹岡和田男「黎明期の西洋画事情 覚書<長崎・秋田・函館>」『北海学園大学人文論集』第6号, pp.77-88, 1996, p.85 によれば, 横山の陸軍士官学校在勤期間は, 1876年から1881年までとされている。なお, 横山とのやりとりの成果は, アベル・ゲリノーのフランス帰国後1884年8月12日付の特許(Brevet No.163752, pour un procédé autophotographique (*Tome cinquante et unième, Description des machines et procédés pour lesquels des brevets d'invention*, 1888, p.6) にも現れている。
- ²²¹ 主に青木茂, 歌田眞介『松岡壽研究』中央公論美術出版, 2002などを参照した。なお, 工部美術学校の第一期生の小山正太郎や松岡壽は, 陸軍士官学校や大学南校などフランス系の学校で図画教師を務めた川上冬崖の聴香読画館に学んでいる点が共通し, 聴香読画館もアベル・ゲリノーと何らかの関わりがあった可能性が考えられる。
- ²²² 村松貞次郎, 市浦健『新訂建築学大系 37 建築学史・建築実務』彰国社, 1968, p.98に掲載された「1.2 表 東大工学部建築学科 科目沿革一覧表」などから科目の流れがわかる。
- ²²³ 原正敏「第3回シンポジウム概要 明治期の図学教育」『図学研究』Vol.31-1, pp.21-26, 日本図学会, 1997, p.25
- ²²⁴ 測量技師であったことは Le Béalle, A. : Réformes, régénération, E. Lachaud, 1872 などからわかる。
- ²²⁵ Le Béalle, A. : Cours théorique et pratique de dessin linéaire lavis et ornement, J. Delalain, 1851
- ²²⁶ Le Béalle, A. : Cours de dessin classique-élémentaire des cartes géographiques, J. Delalain, 1851
- ²²⁷ Lebrun, Th., Le Béalle, A. : Géographie élémentaire des collèges et des pensions, J. Delalain, 1859
- ²²⁸ Delaistre, L. : Cours complet de dessin linéaire gradué et progressif, Mallet-Bachelier, 1855
- ²²⁹ Delaistre, L. : Cours méthodique du dessin et de la peinture, Carilian-Goeury et Vor Dalmont, 1862
- ²³⁰ 原正敏, 前掲書, p.25
- ²³¹ 石丸三七郎編『泰西絵原写景法附図』原亮三郎, 1885
- ²³² Bouillon, A. : Principes de dessin linéaire, L. Hachette, 1839
- ²³³ Bouillon, A. : Principes de perspective linéaire, L. Hachette, 1841
- ²³⁴ 公田の一連の研究(公田蔵「明治前期の日本において教えられ, 学ばれた幾何」『数理解析研究所講究録』第1513巻, pp. 188-203, 京都大学数理解析研究所, 2006, pp.194-195 や公田蔵「明治時代に学ばれたフランス流数学」『数理解析研究所講究録』第1677巻, pp. 230-242, 京都大学数理解析研究所, 2010, pp.235-236)を参照。
- ²³⁵ アントワーズ・アミオの在職期間は, Drexler, A. (éd) : The Architecture of the Ecole des Beaux-Arts, Museum of Modern Art, 1977, p.504 を参照した。なお, この書物において「アミオ」の綴りは“Amyot”であるが, ここではアミオの著書や公田蔵, 前掲書の表記“Amiot”を採用した。
- ²³⁶ 菊池重郎『『法蘭西建築課程圖』解題』『明治文化全集 補巻 3 (農工篇)』日本評論社, 1974, p.8。菊池重郎は「工兵少佐シェリー氏」であるフランソワ・ジュール・シェリー (François Jules Chéry, 1832-1909) の全84ページからなる著書『建設講義: 第3部 軍事施設と建築』*Cours de Construction. Troisième partie Croquis. Bâtiments militaires et architecture* (Lithogr. de l'Ecole Imp. d'application de l'artillerie et du Génie, 1868) の翻訳である可能性を指摘している。なお, フランソワ・ジュール・シェリーのもうひとつの著書『建設講義: 第2部 木造・鉄造・鋳鉄造の構造』*Cours de construction. 2e partie Résumé des leçons. Constructions en bois, en fer, en fonte* (Lithogr. de l'Ecole

- Imp. d'application de l'artillerie et du Génie, 1867 や、1865 年には、別の著者ジョセフ・アルベール・シャシナ (Joseph Albert Chassinat, 1814-?) による『建設講義：第1部 組積造の諸要素・形態・寸法・構造』*Cours de constructions. Première partie. notions pratiques sur les éléments, la forme, les dimensions et la construction des maçonneries* などもある。
- ²³⁷ 来歴等については、丹羽和彦「エコール・ポリテクニクにおける L.レノーの建築教育プログラムについて」『日本建築学会計画系論文集』第 482 号, pp.211-220, 日本建築学会, 1996 に詳述されている。エコール・ポリテクニクで学び、国立土木学校で建築教育を深めたレオンス・レイノーは、1837 年からジャン＝ニコラ＝ルイ＝デュランの後任として、エコール・ポリテクニクの建築教育を担当した。この建築教育のその後の流れは、1867 年よりエコール・ポリテクニクで学び、国立土木学校で建築教育を深めたフェルディナン・ド・ダルタン (Ferdinand de Dartein, 1838-1912) へ引き継がれ、1913 年よりエコール・デ・ボザール出身の建築家ギュスターヴ・ウムデンストック (Gustave Umbdenstock, 1866-1940) へと流れている。
- ²³⁸ 前島美知子『日仏技術交流史からみた陸軍の施設計画に関する研究』慶應義塾大学, 2012, 学位論文に詳しい。
- ²³⁹ Daly, C. (Ed) : op.cit., 1886, p.98 には、アベル・ゲリノーが帰国の際、現地で描いたいくつかの図版を持ち帰ったことが述べられている。しかし、そのすべての図版の内容および描いた場所、時期等の詳細は不明である。
- ²⁴⁰ Tomas, A. : Salon de 1881 – Architecture, Revue générale de l'architecture et des travaux publics, 1881, p.106 や Société des artistes français (Ed) : Explication des ouvrages de peinture, sculpture, architecture, gravure et lithographie des artistes vivants, Charles de Mourgues frères, 1882, p.XIV などを参照した。
- ²⁴¹ 例えば、アベル・ゲリノーが「1890 年のサロン」へ出品した作品について、フランスの建築系雑誌 Daly, C. (Ed) : op.cit., 1891, p.5 誌上で賞賛されている。
- ²⁴² Guérineau, A. J.-L. : Ornaments japonais, 1889
- ²⁴³ Daly, C. (Ed) : op.cit., 1886, p.103
- ²⁴⁴ “Revue générale de l'architecture et des travaux publics”1886 年号および 1887 年号において日本建築、特に寺社仏閣建築の特集が組まれ、主に比例や屋根組などの分析が行われている。
- ²⁴⁵ Daly, C. (Ed) : op.cit., 1886, p.99
- なお、“Revue générale de l'architecture et des travaux publics”掲載の図版のほか、フランス国立ギメ東洋美術館 Musée national des arts asiatiques-Guimet (パリ) 所蔵のものやクリスティーン・清水 Christine Shimizu の個人所蔵品として Shimizu, C. : Le Japon du XIXe siècle, la redécouverte, AGEP, 1990 に掲載されたものなどがある。
- ²⁴⁶ アベル・ゲリノーは建築家としてチリのロタ市 Lota にあるロタ公園 Parque de Lota 内の施設を手がけている。
- ²⁴⁷ 「要素分析」や「建築図画」については『横浜高等工業学校建築学科建築設計競技図集』(洪洋社, 1937) に中村順平による説明がある。
- ²⁴⁸ ルイ・クレットマン写真資料についてはニコラ・フィエヴェ・松崎 碩子 (編), 前掲書, pp.129-144 を参照した。また、アベル・ゲリノー作の『日光東照宮』Le Sanctuaire de Toshogu à Nikko : la terrasse des salles du trésor (フランス国立ギメ東洋美術館所蔵) の制作年とされている 1880 年ごろの可能性もある。
- ²⁴⁹ オーギュスト・ショワジー『建築史 (上巻・下巻)』(桐敷真次郎訳) 中央公論美術出版, 2008, p.196
- ²⁵⁰ Daly, C. (Ed) : op.cit., 1887, p.10
- ²⁵¹ ケネス・フランプトン『現代建築史』(中村敏男訳) 青土社, 2003, p.36
- ²⁵² オーギュスト・ショワジー, 前掲書, p.xxviii

本論第 2 編 中村順平の受けた日仏の建築教育

第1章 中村順平の受けた日本の建築教育

第2章 中村順平の受けたフランスの建築教育

第1章 中村順平の受けた日本の建築教育

1. 高等工業学校の建築科黎明期：東京と名古屋の建築科

ここでは、近代日本における高等工業学校の成立と、高等工業学校に設置された黎明期の建築科について概括する。

1894年の「高等学校令」ならびに1903年の「専門学校令」の発布により、帝国大学、高等学校、専門学校の3種の高等教育機関が編成された。また、1899年に発布された「工業農業商業等ノ実業ニ従事スル者ニ須要ナル教育ヲ為ス」ことを目的とした「実業学校令」，ならびに前出の「専門学校令」より、近代日本の工業教育制度が確立され、高等工業学校は「高等の学術技芸を教授する」高等教育機関として規定された。さらに、1903年3月27日に発布された勅令第62号「実業学校令中改正ノ件」により「第二条 実業学校ニシテ高等ノ教育ヲ為スモノヲ実業専門学校」の条文が加えられ、近代日本における実業専門学校の歴史が始まった。

この勅令第62号の施行により、実業専門学校として札幌農学校（現、北海道大学農学部）²⁵³、盛岡高等農林学校（現、岩手大学農学部）、東京高等商業学校（現、一橋大学）、神戸高等商業学校（現、神戸大学）、東京高等工業学校、大阪高等工業学校（現、大阪大学工学部）、京都高等工芸学校の以上7校が認定された。

高等工業学校では、1901年に東京工業学校ならびに大阪工業学校が、それぞれ東京高等工業学校、大阪高等工業学校と改称され、2つの高等工業学校が誕生した。そして、第3番目の学校として翌年1902年には、高等工業学校の範疇として扱われた京都高等工芸学校が設立された。さらに、1903年には、第4番目の高等工業学校となる名古屋高等工業学校の校舎建設が始まり、同校は1905年に開学した。なお、明治時代後期に存在した高等工業学校は、以上4校に加え、熊本高等工業学校（設置：1906年。現、熊本大学工学部）、仙台高等工業学校（設置：1906年。現、東北大学工学部）、米沢高等工業学校（設置：1910年。現、山形大学工学部）、秋田鉱山専門学校（設置：1910年。現、秋田大学工学資源学部）の計8校のみであった。

高等工業学校の出現により、「大学」とは別の官立高等実業教育機関に建築教育が組み込まれ、まず、東京と名古屋の2校に建築科が設置され、また、私学では、1910年に、早稲田大学にも建築学科（本科）が開設された²⁵⁴。なお、明治中期頃までの高等教育機関における建築教育は、工部大学校造家学科の流れを汲む東京帝国大学工科大学造家学科（1898年より建築学科）においてのみ行われた。

一方、高等工業学校の出現以前、すでに中等程度の教育機関には建築科が存在した。1903年に文部省が、東京帝国大学建築学科教授（当時）、中村達太郎に依頼した当時の実業学校学科課程ならびに設備調査結果によれば、当時、中等技術者養成機関である工業学校に建築科を設置した学校は、福岡（設置：1896年）、山形（設置：1897年）、盛岡・佐賀・熊本（設置：1898年）、神戸（設置：1902年）、秋田・徳島（設置：1903年）の計8校、徒弟学校に建築科または木工科を設置した学校は、東京高等商業学校附属商工徒弟講習所工科中の木工科（設置：1887年）、秋田（設置：1893年）、仙台（設置：1896年）広島（設置：1897年）、琴平（設置：1898年）東京高等工業学校付設工業教員養成所付属工業補修学校（設置：1899年）、別府・首里（設置：1902年）、人吉（設置：1903年）、奈良（吉野）、宮崎（設置：1904年）の計11校であった²⁵⁵。

こうした機関に人材を送り込んだのは、東京高等工業学校の前身校の付設工業教員養成所木工科で

あった。

東京高等工業学校の前身は、1881年に設立された東京職工学校で、その設立当時、同校には建築科は設置されていない。そして、東京職工学校は、1890年に東京工業学校へと改称され、1894年に付設工業教員養成所が設置された際、建築系の学科として木工科が設置された。これは、大学機関ではない高等教育機関に設置された日本初の建築系学科であった。この木工科は「建築教育に従事する者のため必要なる学理及技術を教授する」ことを目的とした学科であった。この設置は、日清戦争前後にかけて急速に発展した産業を支える職人の養成が必要だったにも関わらず、実業教育が全くの不振であったことに由来している²⁵⁶。

この付設工業教員養成所の主たる目的は、その名の通り教員養成であったことから、前掲の工業学校へ卒業生が教員として送り込まれた。また、この養成所は職人養成のための実業教育機関としての役割を担っただけでなく、近代日本の建設に直接たずさわる技術者の専門教育機関として存在した。

この養成所の木工科の創設に尽力したのが、後の東京高等工業学校建築科科长となる滋賀重列（1866-1936）であった。滋賀重列は、東京府立一中（現、東京都立日比谷高等学校）を卒業後渡米し、本論第1編・第1章でドイツ・バウアカデミーとの関係を指摘したイリノイ大学建築学部で建築学を修めた。滋賀重列は1893年に同校を卒業し「建築学士」Bachelor of Science in Architectureの学位を得て帰国した。滋賀重列は帰国後の1894年7月に同校木工科授業方取調べとなり、翌月には同校講師となり、以後木工科の発展と人材育成に尽力した。なお、滋賀重列が教授に抜擢された経緯は、当時の同校校長であった手島精一（1850-1918）がアメリカに出張の際、滋賀重列に木工科の創設を依頼したことに起因している²⁵⁷。

東京工業学校は、1901年5月に「東京高等工業学校」へ改称され、その翌年1902年12月に、建築科が新設された。なお、初の生徒募集は1907年に行なわれ、同年4月より授業が開始された。同校の教育は、その教旨にもうたわれるように、計画・意匠・構造・材料など広範な知識や技術を教授する専門教育を目的とし、「実際的技術者養成の最高の学校」²⁵⁸として「設計すなわち製図実習」を重視し、職業教育として製図実習に最も重点をおいた教育が行なわれた²⁵⁹。

教員陣には、前述の滋賀重列のほか、東京帝国大学工科大学建築学科教員・卒業生などが講師として送り込まれた。特に応用重学や家屋構造の講師として東京帝国大学教員から中村達太郎、佐野利器が、東京帝国大学卒業生からは福岡常次郎、森山松之助（1869-1949）らが教鞭を執った。なお、教員には、当時の工手学校の講師も務めたものが多く含まれた。

また、東京高等工業学校に次いで建築科が設置された高等工業学校は、名古屋高等工業学校で、設立時に建築科が設置され、1905年9月より授業が開始された。前述のように、東京の建築科の授業開始が1907年4月からであったことから、名古屋の建築科が、高等工業学校における実質的な嚆矢であった。

2. 名古屋高等工業学校建築科の教育者

ここでは、名古屋高等工業学校建築科の特徴を教育者の傾向から分析する。

名古屋高等工業学校建築科は、1905年9月に第1期生を迎え、授業を開始した。開設当時の建築科科長は、講師嘱託の工学士、中栄徹郎²⁶⁰（1872-1926）で、東京帝国大学建築学科出身の辰野金吾の教え子であった。翌1906年6月25日付けで、約3年半のイギリスやフランスなどの留学生生活を終えた「フランス新古典主義建築を直接体得した唯一の日本人」²⁶¹といわれる鈴木禎次（1870-1941）が、名古屋高等工業学校建築科教授に任官され、学科長となった。なお、鈴木禎次の着任により、同年度末までに中栄徹郎が去った。

中村順平は、同校建築科第3回生として1907年4月に入学した。中村順平の入学年度は、鈴木禎次に加え、土屋純一（1875-1946）教授、坪井安二郎助教授の以上3名が中心となり建築教育が行なわれた。なお、第1編・第2章で述べたように、鈴木禎次と土屋純一は辰野金吾の教え子であった。つまり、辰野金吾の教え子3名が同校の建築科創成期の教育を牽引した。

中村順平の第3学年時にあたる1909年度は、鈴木禎次、土屋純一の両教授のほか、坪井安二郎の後任として同校建築科第1回卒業生、佃忠蔵が助教授として加わった。なお、職員リストには設立当時からメンバーである安成一雄が助教授として名を連ねているが、1907年8月より2年間の任期中で中国北洋師範学堂に手工図画の教育者として出向中であった²⁶²。

また、『名古屋工業大学建築学科百年史』（2006）によれば、各教育者の専門分野は、鈴木禎次・安成一雄が設計、土屋純一が歴史、坪井安二郎・佃忠蔵が構造であった²⁶³。なお、中村順平の卒業後、1921年の鈴木禎次退官期までを見ると、鈴木禎次・土屋純一の2教授に変化はなく、構造科目に変動があった。構造科目には、東京帝国大学出身の2人、栗山俊一²⁶⁴（1888-?）が1910年度より1917年度まで、三浦耀²⁶⁵（1891-1931）が1918年度より1925年度までそれぞれ教授として在職した。

このように中村順平の卒業以降、東京帝国大学出身者によって建築教育が行なわれたが、同校の建築教育では自在画科目の教育者にも特徴がみられる。

開設時には、日本画を専門とする福井信之進（1856-1937）が講師嘱託として、また、中村順平の入学年度には、福井信之進に加え、日本画を専門とする奥村季彦（1874-1945）が授業嘱託として自在画を担当した。さらに、中村順平の在学期後半には、福井信之進が東京美術学校へ転出し、新たな教育者としてデザインを専門とする前東京高等工業学校工業図案科助教授小室信蔵（1870-1922）が加わり、建築教育にデザイン教育の要素が組み込まれた。なお、小室信蔵は東京高等工業学校工業図案科第1回卒業生で松岡壽の教え子である。さらに『名古屋高等工業学校一覧』²⁶⁶には記載のない洋画の専門家も呼ばれた。鈴木禎次は、東京から東京美術学校教授岡田三郎助（1869-1939）ならびに中沢弘光（1874-1964）を呼び寄せ²⁶⁷、芸術色の濃い建築教育を推進した。岡田三郎助は辰野金吾や曾禰達蔵と同郷の佐賀藩出身の洋画家で、フランス留学経験者であった。また、岡田三郎助や中沢弘光は、帝国大学工科大学造家学科の教育者曾山幸彦の門下生であった。

このように、鈴木禎次の教育意図は、特に自在画科目の教育者に色濃く投影され、名古屋で教鞭をとった自在画科目の教育者は、東京帝国大学の建築教育において辰野金吾が新設した自在画科目の教育者、曾山幸彦や松岡壽とつながりのある人物で、辰野金吾教育の継承ともいえる布陣であった。

3. 中村順平在学期の教育プログラム

ここでは、中村順平の在籍時の教育プログラムに着目し、その変遷からどのような教育が行なわれ、どのような教育が強化されたのか検証する。特に、名古屋高等工業学校建築科創設時からの教育プログラムの変遷を辿り、同時期の東京高等工業学校の教育プログラムとの比較を行ない、さらに、鈴木禎次が受けた建築教育プログラムとを比較することで、東京帝国大学から名古屋高等工業学校に至る教育方針の連続性を検証する。なお、分析対象の名古屋高等工業学校の教育プログラムは、開設時の1905年度²⁶⁸、中村順平の入学年度である1907年度²⁶⁹、さらに中村順平の最終学年度である1909年度²⁷⁰の3つの年度を分析対象とし、比較対象とする東京高等工業学校の教育プログラムは1909年度²⁷¹の学校一覧を使用した。

① 中村順平在学期の教育プログラムの特徴

名古屋高等工業学校建築科の1905年度の教育プログラムでは、各学年各学期とも毎週の合計時間数は39時間に設定された。この時間数は、工部大学校や帝国大学工科大学と同様の時間数で、名古屋高等工業学校においても同様の時間数が割り当てられた。なお、この時間数は、1907年度、1909年度とも同数で、中村順平在学期に変更されることはなかった。

また、1905年度の教育プログラムでは、基礎科目、専門科目の別が定められ、設計・意匠関連科目は、第1・2学年ともほぼ同数の45時間程度が年間で割かれ、第3学年では製図や実習に多くの時間が割り当てられた。設計・意匠関連科目の時間数比率が、第1・2学年において約38%で、全体に占める割合は極めて高いものではない。ただし、この教育プログラムが開設期のものであったことを考慮すれば、第1学年にのみ適用された過渡期の教育プログラムといえる。

次に、開設時と中村順平の入学した1907年度の2つの教育プログラムを比較した。

その結果、1907年度のものに設計・意匠関連科目の時間数の全体的な増加傾向が確認できた。第3学年における製図、実習の時間数は、両者に大きな相違はないが、第1・2学年の専門科目における自在画と製図、実習の時間数の増加が顕著である。1907年度の教育プログラムは、鈴木禎次が着任した1906年に修正検討され、1907年度に実施されたプログラムであることから、鈴木禎次の意向が教育プログラムに反映された最初の例といえる。

また、1909年度では、1907年度を基盤としながら、1907年に着任した土屋純一の専門分野である日本建築の独立など、建築史の分化および設計・意匠系科目の時間数のさらなる増加が確認できた。

このように、中村順平在学期の教育プログラムは、教育者の専門分野ごとに科目が再編成され、徐々にその枠組みが確立された。特に、「自在画」、「幾何画」、「透視画法」、「建築史」、「製図及実習」といった設計・意匠関連科目についてみれば、1905年度の全学年の毎週時間数の合計は、180時間であったのに対し、科目名が細分化された1907年度には、220時間にまで上昇した。また、1909年度には、さらに増加し、235時間となった。なお、1909年度の全学年の専門科目（合計：276時間）に占める設計・意匠関連科目の割合は約85%であり、設計・意匠関連科目が特に重視された教育プログラムが組まれていたことがわかる。つまり、中村順平在学期の名古屋高等工業学校建築科の建築教育は、流動的に変化したものの、徐々に設計・意匠関連科目が重視されたものへと発展した。

② 東京・名古屋高等工業学校建築科教育プログラムの比較

名古屋高等工業学校建築科における前述の傾向は、同時期に開設された東京高等工業学校建築科にも見られるのか。両校の教育プログラムを比較し、教育プログラム上の類似点や相違点を検証する。

まず、両校の教育プログラム比較表（表 2.1.1）を作成した。

表 2.1.1 1909 年度東京・名古屋高等工業学校建築科教育プログラム比較表²⁷²

東京高等工業学校				名古屋高等工業学校					
内訳（3 学期合計）			全学年 合計	科目名		全学年 合計	内訳（3 学期合計）		
第 3 学年	第 2 学年	第 1 学年					第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年
				基礎科目					
3	3	3	9	倫理		9	3	3	3
6	9	12	27	英語		30	12	9	9
0	4	15	19	数学		15	15	0	0
0	0	12	12	物理学		6	6	0	0
0	9	0	9	物理学実験	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	化学	3	3	0	0
6	6	6	18	兵式体操	体操	12	6	6	0
				専門科目					
0	0	21	21	図画	幾何画	16	16	0	0
					自在画	32	12	12	8
0	0	8	8	建築沿革	建築史	12	4	6	2
					日本建築	4	0	2	2
4	0	0	4	測量		3	0	3	0
0	5	0	5	応用力学		11	0	11	0
0	9	9	18	家屋構造		15	9	6	0
0	0	4	4	建築用材料	建築材料	4	4	0	0
3	0	0	3	施工法附仕様見積	施工法	4	0	0	4
3	0	0	3	衛生工学	衛生建築	4	0	0	4
44	72	27	143	製図及意匠	設計及装飾法	12	2	6	4
39	0	0	39		製図及実習	159	25	53	81
3	0	0	3	工場実修	-	-	-	-	-
3	0	0	3	工業経済	-	-	-	-	-
3	0	0	3	工業衛生	-	-	-	-	-
3	0	0	3	工業簿記	-	-	-	-	-
117	117	117	351	毎週時間数・3 学期合計		351	117	117	117

両校の科目構成は、概ね同様で、専門学校令第八条「官立専門学校ノ修業年限、学科、学科目及其ノ程度並予科、研究科及別科ニ関スル規程ハ文部大臣之ヲ定ム」の規定により、大枠が定められた可能性はある。しかし、基礎科目の科目名は両校でほぼ一致しているが、専門科目名は、それぞれ異なる表現となっている点を考慮すると、それぞれの学校において教育プログラムが構想されたと考えられる。

なお、上表では、科目名に相違点はあるものの同様の講義が行なわれたと考えられる科目を整理し、それぞれを並列させ整理した。例えば、東京高等工業学校における「建築沿革」では、西洋建築史などが講義されており、名古屋高等工業学校における「建築史」に相当している。また、東京高等工業学校における「工場実修」は、「建築科ノ製図及意匠ハ工場実修ト看做ス」²⁷³との記載から「製図及意匠」と同様のものであったと考えられる。さらに、東京高等工業学校の「製図及意匠」には、名古屋高等工業学校にみられる「設計及装飾法」が含まれた²⁷⁴。

また、両校の大きな相違点は、名古屋高等工業学校にはない東京高等工業学校における工業関連の 3 科目（「工業経済」、「工業衛生」、「工業簿記」）で、これらは、同校の全科共通科目として存在した。

これは、東京高等工業学校が、職工学校を出自とする学校であった要因とみられる。

一方、両校の専門科目の時間数にみる相違点として、「自在画」や「幾何画」といった図画関連科目が挙げられる。これらの科目は、名古屋高等工業学校では第3学年まで課されたのに対し、東京高等工業学校では第1学年で終了している。なお、東京高等工業学校の「図画」は、「用器画」および「自在画」が教授された。また、名古屋高等工業学校では、これらの科目に東京高等工業学校の2倍以上の時間数が割り当てられており、図画関連科目を重視した教育プログラムが組まれた。

一方、学科長の担当科目に着目すると、東京高等工業学校の滋賀重列は、「建築沿革」「家屋構造」「衛生工学」「製図及意匠」や建築科の実習を担当し、建築の設計・意匠から構造、設備、施工法に至るまで総合的に教授したのに対し、鈴木禎次の担当科目は、「設計及装飾法」、「建築史」など概ね設計・意匠関連科目が中心であった。

また、教育者の陣営に着目すると、東京高等工業学校では、滋賀重列のほか、佐野利器の1学年後輩にあたる東京帝国大学工科大学建築学科出身の前田松韻や曾禰達蔵が講師をつとめたのに対し、名古屋高等工業学校では、前述のように辰野金吾の教え子、鈴木禎次や土屋純一が同校の建築教育を牽引した。名古屋高等工業学校では、辰野金吾の「美術建築」思想に裏付けられた教育を受けた人物が教育にあたった。

次に、全科目に対する専門科目の毎週時間数を比較すると、全科目351時間に対し、名古屋高等工業学校では276時間、東京高等工業学校では257時間で、名古屋高等工業学校のほうが19時間多い。また、名古屋高等工業学校における「自在画」「幾何画」「建築史」「日本建築」「設計及装飾法」「製図及実習」の計6科目および東京高等工業学校における「図画」「建築沿革」「製図及意匠」「工場実修」の計4科目を設計・意匠関連科目とし、全科目に対する設計・意匠関連科目の毎週時間数を合計すると、名古屋高等工業学校では235時間、東京高等工業学校では211時間となり、同様に名古屋高等工業学校のほうが24時間多い。なお、専門科目の合計時間数に対する設計・意匠関連科目比率は、名古屋高等工業学校では85.1%、東京高等工業学校では82.1%であった。

表 2.1.2 名古屋・東京高等工業学校建築科専門科目比率比較表²⁷⁵

校名	全科目比		専門科目比
	専門科目比率	設計・意匠系科目比率	設計・意匠系科目比率
名古屋高等工業学校	78.6% (276時間/351時間)	67.0% (235時間/351時間)	85.1% (235時間/276時間)
東京高等工業学校	73.2% (257時間/351時間)	60.1% (211時間/351時間)	82.1% (211時間/257時間)

こうした両校の建築教育の差は、その将来における問題提起と捉えることもできる。滋賀重列が建築教育の将来について「建築教育に於ける天下の形勢は建築美術と建築工学の教育が追々分立するの有り様であって、現に米国などにては明らかに分つてある大学でさへある、余輩は我国の建築教育を已に二期に分けた第三期は即ち此の建築美術と建築工学が各分立して盛大を極める時であって、大学は其の間に超然たるか、或は一方に傾くか未来のことは解らぬが、今現に工業学校と美術学校とで其の動機が察せられる」²⁷⁶と述べているが、建築教育の新たな局面への幕開けが、東京と名古屋の2つの高等工業学校の特徴としても現れていた。つまり、東京と名古屋の教育は、前者が建築工学の教育を重視し、後者は建築美術の教育を重視したと読み替えることができるだろう。つまり、高等工業学校における建築教育の黎明期において2つの異なる建築教育の型が形成された。

4. 名古屋高等工業学校建築科の実態証言

ここでは、前節で分析対象とした『名古屋高等工業学校一覧』などの公的資料にはない実態を卒業生の具体的な証言から鈴木禎次の建築教育を検証し、フランス建築理論や教育手法の受容という観点から分析する。なお、ここでは、本論第1編・第2章で確認した「ボザール流」と歴史家に指摘された辰野金吾の建築教育が、高等工業学校においてどのように展開したのか検証し、中村順平が横浜高等工業学校で行った建築教育との関係性の解明に向けた基礎的研究である。

まず、中村順平の1年先輩にあたる篠田進（1909年卒、第2回生）は、名古屋高等工業学校の建築教育黎明期の教育者について、中栄徹郎が「大変温厚な無口な先生」であったことを述べたのに対して、鈴木禎次からは「公私ともに」多くの教訓を得たと述べ、両者の違いを指摘した²⁷⁷。

篠田進の証言から、鈴木禎次の人物像の輪郭が浮かび上がる。鈴木禎次によって雄弁で面白く巧みな講義が行なわれたこと、講義は時間数を無視して行なわれたこと、試験の代替手段としてノートの検定により採点されたこと、厳格な製図教育が行なわれたことが指摘されている。また、鈴木禎次は、生徒に対しては好き嫌いが激しかったこと、好まない生徒の作品は見向きしなかったこと、優秀な製図が廊下に展示されたことなどを述べている。

他の教育者では、土屋純一については、「古建築の大家、殊に貴公子式で奈良から赴任された」と述べているが、同時に「土屋先生の教授に対しては逸話は見出せない」と述べ、安成一成については、「明治時代の教育や先生の変っていた事といえば、礼儀正しく、規律厳格で上、下の座もやかましかった」と述べるに過ぎない。このように、篠田進の証言から、鈴木禎次が際立った個性をもった教育者であったことを指摘できる。

小林仙次²⁷⁸（1891-?、1914年卒、第7回生）は、鈴木禎次の建築教育について「熱心の余りよく腕力を振われ、クラスの大部分の者は叩かれつきとばされ」るような「建築教育ははげしい教育で（中略）フォーティーンエキザサイズと言って、二週間に一度、小品の問題で交番とか自動電話ボックスなどの平面図と立面図を徹夜で仕上げ、提出時間に遅れるとそれは落第に繋がった」と述べるように「フォーティーンエキザサイズ」という2週間課題が出題された。こうした課題は、名古屋高等工業学校における重要な建築教育の根幹であったのだろう。中村順平は第3回の卒業生（1910年卒）であったが、1912年ごろには既に2週間に一度徹夜で設計製図を行う課題が存在した。この課題の源泉には、塚本靖が東京帝国大学で行った「意匠設計」課題における「2週間課題」にあると考えれば、おそらく中村順平の時代も同様の課題が課された可能性が高い²⁷⁹。なお、課題提出時間に遅れた場合落第につながり、建築科の落第生は他科に比べて多く、小林仙次の証言によれば、留年も多かったようである。

1916年に卒業した浅井新一（1893-?、1916年卒、第9回生）による設計課題に関する詳細な証言が残されている²⁸⁰。浅井新一によれば、表2.1.3のような製図課題が課された。構造形式は、煉瓦造や石造、木造といったものが中心ではあるが、鈴木禎次が得意とした鉄骨造の建物の設計に至るまで幅広く修練されていた。浅井新一の証言から、名古屋高等工業学校における主な設計製図課題は、3学年全体で22課題が与えられ、様々なプログラムの建築が問われた。

表 2.1.3 名古屋高等工業学校建築科第9回生課題リスト

第1学年	第2学年	第3学年
①ブリックボンド ②煉瓦造矩計図	⑪1戸個建小住宅 基本設計	⑰小事務所(壁・煉瓦造, 床・鉄筋コンクリート3階建)
③木造家屋矩計図 ④煉瓦造詳細図	⑫小学校雨天体操場 基本設計(木造)	⑱ローマ「コリンシアレオーダー(原文ママ)」矩計図(陰影共)
⑤木造詳細図 ⑥木造小屋図 ⑦鉄骨小屋組図	⑬鉄骨造倉庫 基本設計	⑲日本古建築(奈良, 京都, 大和) 一部実測およびスケッチ
⑧ギリシャ「ドリックオーダー(原文ママ)」柱詳細図	⑭住宅 炊事場内部展開図(色彩共)	⑳中流住宅(木造平家, 一部2階造) 基本設計
⑨小学校教室 基本設計の一部	⑮ローマ「アイオニクオーダー(原文ママ)」矩計図(陰影共)	㉑小病院(煉瓦造平家, 一部2階造) 基本設計
⑩銀行支店 基本設計の一部	⑯小店舗(木造二階建) 基本設計(色彩共)	㉒卒業制作

松田軍平(1894-1981, 1918年卒, 第11回生)によれば, 鈴木禎次の教育は「将来日本の建築家を作る意気込みだったのか, すべて建築の学問は設計に集結するという信念だったのか, 設計製図には特に力を入れて教えられ, 自在画の時間なども, 当時の洋画の大家である岡田三郎助, 中沢弘光の両先生が, 東京から出張して教えられた。設計の問題が出ると, 徹夜しても基本設計図を作って先生(筆者註: 鈴木禎次)の承認を得ないと始められないという厳しさで, 高等工業学校といっても建築科の教育は, 全然土木や機械科と異なった教育」²⁸¹であった。この松田軍平の証言から, 設計製図にかけられた時間数の多さや, 教育プログラムに記載のない自在画の非常勤講師の存在が明らかとなる。

また, 松田軍平は, 「学校長は鈴木禎次先生で随分厳しい薫陶を受け」たことを吐露し, 「君等が教わっている総ての学科は, 終局に於て設計に集結される。立派な建築家になる野心を持って努力せよ」という鈴木禎次の言葉を述べ, さらに, 名古屋高等工業学校では「フランス流の建築家を作る教育」が行われたことを述べている²⁸²。

伊藤三郎(1897-1984, 1919年卒, 第12回生)は, 後述するが横浜高等工業学校で教育者として中村順平を支えた人物である。伊藤三郎は「中村順平の業績と建築図画」²⁸³と題された座談会で「横浜高工の中村先生よりは鈴木先生のほうが少しくつかったようですね。中村先生は言葉でチクリとやられるのですが鈴木先生は腕力でやられました。製図が下手だと製図版をひっくり返してしまわれます。当時は万年筆ではなくインキでしたから, インキがパーッと図面にかかってしまうのでどうしてもやり直さねばなりません。(中略) そんなわけで鈴木先生は中村先生にもうひとつ輪をかけた厳しさのようでしたね」と述べている。

こうした鈴木禎次の厳しさについての証言は, 他にも石原巖(1917年卒)の述懐などにも見られ²⁸⁴, 鈴木禎次の教育は中村順平の教育以上に厳しかったことがわかる。

城戸武男²⁸⁵(1899-1980, 1920年卒, 第13回生)は「私の受けた建築教育は建築学の学修というよりも, 専門科目は設計製図に必要な初歩的なものであったように思う。図工ではないまでも設計製図の職人教育を受けたのではない。後に母校の大先輩中村順平先生が横浜高工に新設の建築科で指導された教育方針は, 私の受けた教育の極点のように思う」と述べている。

「毎日午後の時間はすべて製図であったから, 週15時間は製図の時間でそれでも期限に提出するためには週10時間位は下宿に持ち帰って補ったと記憶している。図面をT定規に差し込んで通学した

ことを思い出す。1年の製図の担任は栗山俊一先生、ブリックボンド、木構造継手、キングポストアンドインキングの練習が主であった。途中で失敗して3枚位は常にかき直しをした。2年は土屋純一先生、鉛筆仕上げとなり、オーダーのコンポジションに陰影をつける製図を2, 3枚仕上げ、木造住宅、レストランなど1学期3つ位課題が出て、学期末にはワンデーエキササイズがあった。3年は鈴木禎次先生が担任で、極めて厳しく、よく雷が落ち一年前のクラスで製図版が割れた激しさを聞いた。煉瓦造の変電室、石造の銀行、図書館、西洋住宅など設計製図の練習が行われた」と城戸武男が述べるように、様々な建築プログラムに関する設計製図課題が課された。城戸武男の課題と前述の浅野新一が回想した課題は概ね一致しており、例年、同様のプログラムの課題が課されていたと考えられる。

伊藤紘一²⁸⁶（1900-1987、1922年卒、第15回生）は名古屋高等工業学校の教育について、「製図の時間が週何時間かおぼえていませんが、大変多かった」と語り、「設計製図に重点を置いた教育方法をとられ、建築家というものがいかに貴い仕事であるかということを常に強調」されたことを述べている。鈴木禎次の製図教育に関しては「有名になった程厳しい教育」であり、教育全般は「学究と實際が同居」したもので、「学校は塾のような考え方で教育」していたと語っている。鈴木禎次は教授でありながら、傍らでの設計活動が数多くあり、「学校の授業も時間割り通り」ではなく、生徒たちは突然現れる鈴木先生の「雷がおちるのをこわがって勉強していた」。講義はノートに筆記し1学期に一度位ノートの提出が義務付けられた。特に「大変まずいノートの人」は「建築家になることをあきらめなさい」と宣告され退学した学生もいた。製図に関しては、「クラシックからはじめてルネッサンススタイルを製図」させられた。伊藤紘一は、土屋純一教授から日本建築とゴシック建築の歴史を主として教わったと語っている。伊藤紘一は中村順平に関するコメントも載せており、中村順平の「日本絵風」に仕上げられた「チャーチの上に Kristus が昇天される図」で「天国は近づく悔い改めよ」と書かれた作品「チャーチの設計図」が講堂の壁に掲げられていたと語っている。この図面については前出の伊藤三郎も同様の述懐している²⁸⁷。

鈴木禎次退官後に卒業した浅野清²⁸⁸（1905-1991、1926年卒、第19回生）によれば、鈴木禎次の在任中は「様式主義の徹底的な技術習得に専念」した時代と述べ設計製図重視の教育が行われていたのに対し、鈴木禎次退官後には「製図を怠けるようになった」時代へと変化した。また、浅野清が在学中、教育プログラムにおいて重視されたのは、自在画と建築史であったことを述べている。自在画重視の教育は、鈴木禎次以降、土屋純一が学科長の時代においても引き継がれ、辰野金後から連続する自在画重視の建築教育の伝統は引き継がれた。

小結

本章では、まず、「1. 高等工業学校の建築科黎明期：東京と名古屋の建築科」において、近代日本における高等工業学校の成立と、高等工業学校に設置された黎明期の建築科について概括した。

1903年に帝国大学、高等学校、専門学校の3種の高等教育機関が法的に整備されたことで、高等教育機関における建築科の設立が始まった結果、高等工業学校の黎明期には、東京と名古屋の2校にのみ建築科が設置された。東京の建築科には前身校があり、それが東京工業学校における建築系学科として設立された木工科であった。この学科を牽引した滋賀重列の教育は、計画・意匠・構造・材料など広範な知識や技術を教授し、最も重点をおいたのは職業教育としての製図実習であった。一方、名古屋高等工業学校は、1905年に新設された学校で、その開設当時から建築科が設置された歴史的経緯を解明した。

「2. 名古屋高等工業学校建築科の教育者」では、中村順平の在籍期の教育者に着目し、辰野金吾の2人の教え子である鈴木禎次と土屋純一を中心とした教育者の構成であったことを確認した。そして、名古屋高等工業学校の建築教育において、充実した自在画教育が行なわれたことを教育者から解明した。同校の建築教育では、本論第1編第2章で概括した辰野金吾の「美術建築」教育思想の継承と見られる教育が継承され、特に同校の自在画教育者は、東京帝国大学の建築教育を支えた自在画教育者、曾山幸彦や松岡壽とつながりのある人物で構成されたことを明らかにした。

また、「3. 中村順平在学期の教育プログラム」では、中村順平が鈴木禎次の建築教育のスタートに立ち会い、中村順平の入学期に拡充された教育者によって名古屋高等工業学校の教育基盤が整備されたことを確認した。また、教育プログラムの変遷から、中村順平の入学期の教育プログラムが流動的で実験的であったことを指摘した。さらに、東京と名古屋の教育プログラムの比較した結果、両校はともに設計製図重視の傾向があるが、自在画教育に両校の違いが現れたことを指摘した。名古屋では、辰野金吾の自在画重視の教育が継承され、設計製図が重視され、一方、東京では、自在画重視の傾向は見られず、教育者に辰野金吾の教え子は少なく、佐野利器を中心とした教育者の構成という特徴があった。つまり、両校の教育の型は2つの異なる型として捉えることが可能だろう。つまり、ひとつは、辰野金吾が標榜したデザイン重視の建築教育に礎を定め、その基盤をもとに高等工業学校の課程に適合させ整備され「建築美術」の教育を目指した名古屋型、もうひとつは佐野利器を中心として発展した「建築工学」の教育を目指した東京型の2つの型が高等工業学校における建築教育黎明期に誕生し、その後の高等工業学校の建築学科における教育の型となった可能性がある。したがって、名古屋高等工業学校での教育は、近代日本の芸術面の強化に力を注いだ高等工業学校建築科で行われた教育システムのひとつのルーツと考えられる。

最後の「4. 名古屋高等工業学校建築科の実態証言」では、卒業生の各種証言の分析により、建築科の教育は、設計・意匠分野が特に重視されたことを確認した。鈴木禎次の教育方法は「フランス流」で、名古屋では鈴木禎次を中心とした「塾」のような雰囲気教育が行われた。また、鈴木禎次の指導方法が、横浜高等工業学校で行った中村順平の建築教育へと引き継がれた可能性を指摘した城戸武男の証言があるように、中村順平が横浜で実践した建築教育プログラムの基礎に名古屋型の建築教育が潜んでいる可能性がある。

また、鈴木禎次の教育が「フランス流」の教育であったという証言から、中村順平の建築教育システムの源泉と考えられるエコール・デ・ボザールの教育システムは、すでに名古屋で導入された可能性がある。ロンドンやパリを留学先とした鈴木禎次が、欧州留学で見聞した成果を自身の教育プログラムに反映させ、名古屋での教育に特にパリでの経験を反映させた結果、こうした証言が教育の受容者である卒業生から得られた。また、一方で、鈴木禎次の教育には、見聞先の教育手法が単純に導入されたわけではなく、アメリカにおいてボザール流教育を受けた松田軍平が証言するように、「モジュール的なやり方」²⁸⁹が加味された日本的な教育でもあったといえる。

以上の証言からわかることは、名古屋高等工業学校の建築教育は鈴木禎次が牽引した建築教育であり、辰野金吾が近代日本の建築教育に導入した自在画を重視した建築教育であった。本論第1編・第2章で整理した辰野金吾が目指した建築家養成の教育プログラムは、辰野金吾の牽引する東京帝国大学工科大学においてよりも、むしろ名古屋高等工業学校で実践され発展したとみることも可能だろう。建築家育成教育の発展的モデルの形成を試みた結果、辰野金吾は伊東忠太を東京美術学校へ送りこみ建築が芸術の一分野であることを認識させ、また、辰野金吾は、中村順平の師となる鈴木禎次を名古屋高等工業学校建築科へ送りこみ、高等工業学校のひとつの建築教育モデルの確立を目指したと考えられる。こうした建築教育は、中村順平へと引き継がれた可能性が高く、また、中村順平の建築教育は、近代日本における建築教育の先覚者である鈴木禎次から受けた建築教育に一部由来している可能性が高い。さらに、中村順平には、その教育に「技術者養成ではなく建築家（アーキテクト）養成」²⁹⁰であったといわれた鈴木禎次の教育理念が受け継がれた可能性もある。こうした点については、第3編・第1章で検証する。

参考資料：名古屋高等工業学校の教育者たち—中村順平在籍期を中心に

●鈴木禎次（1870-1941）

鈴木禎次は、旧幕臣鈴木利亭の長男として静岡に生まれ、父の明治政府出仕のため東京で育った²⁹¹。鈴木禎次は、第一高等中学校（後に第一高等学校、現、東京大学教養学部）卒業後、1893年、帝国大学工科大学造家学科に入学した。当時、すでにジョサイア・コンドルは退官し、辰野金吾が主任教授として意匠、設計を担当し、中村達太郎が一般構造を担当した。卒業後、大学院へ進学した鈴木禎次は、研究テーマを耐震構造とした。大学院在籍時に、鈴木禎次は当時「鉄骨構造」科目の講師であった横河民輔（1864-1945）に誘われ、三井総本店の設計に参加した²⁹²。鈴木禎次は、三井総本店の設計実務を通じて、耐震構造と大規模建築物の実務経験を体得した。

1903年1月、鈴木禎次は、約3年半の欧州留学に旅立つ。辰野金吾によって後押しされたこの留学は名古屋高等工業学校の教授就任のためで、文部省の奨学金を得てのものであった²⁹³。なお、1904年夏にはイギリス、グラスゴーなどの諸都市の歴訪し、同年9月にはケンブリッジ大学留学中の中條精一郎を訪ねている。1905年2月ごろにはパリへ移動し、その後フランス、ドイツ、イタリア、アメリカを歴訪し、1906年6月11日に日本に帰国した。

帰国後すぐに、鈴木禎次は、名古屋高等工業学校教授に着任し、同時に建築科長として同校の建築教育を始めた。鈴木禎次は退官まで同校の建築教育の根幹を担い、長年学科長をつとめた。東京帝大建築学科卒の後輩武田五一が同校学校長を務めた際、鈴木禎次は建築科の教育環境の特殊性を他科や学校側に説き、早朝・深夜にわたる講義や、時間表の時間数をはるかに越えた建築製図の指導など、学内での建築科の教育に対する認識を深める基盤を確立した。この伝統は、鈴木禎次の退官後も土屋純一や卒業生として初めて母校の教授となった鷹栖一英（1888-1969）が退任する1939年に至るまで、意匠設計に重点がおかれた「アーキテクト」教育が行われた²⁹⁴。

こうした教育活動と並行し、鈴木禎次は設計活動も活発に行い、『名古屋百紳士』²⁹⁵や『名古屋百人物評論』²⁹⁶で取り上げられるなど名古屋の建築文化の発展に寄与した。なお、この2誌には当時の名古屋高等工業学校校長土井助三郎（1867-1925）の項も設けられている²⁹⁷。

このように、急激な近代化の道を模索した明治時代において、欧米を遊学し海外経験の豊富な鈴木禎次が、自らが経験した西欧での教育プログラムを日本に輸入しようとしたであろうことは想像にがたくない。鈴木禎次は、エコール・デ・ボザールの学生たち設計競技課題の優秀作品が掲載された年次競技設計図集を教室に付置するなどして、学生たちに様々な刺激をもたらしていた。その刺激を受けた学生のひとりが中村順平であった²⁹⁸。

●土屋純一（1875-1946）

土屋純一は、1897年第一高等中学校卒業の後、東京帝国大学工科大学建築学科に入学し、1900年同校卒業後、大学院へ進学した。土屋純一は、1901年に同校助教授に就任した関野貞の後任²⁹⁹として、大学院修了後の1902年に奈良県技師となる。

中村順平の入学年である1907年4月に、土屋純一は名古屋高等工業学校建築科の教授に就任した。その後、1908年には、土屋純一は文部省建築課で古社寺保存に従事し³⁰⁰、中村順平の卒業年である

1910年3月より3年間の予定でイギリス、フランス、アメリカへの留学が命ぜられた。帰国後、土屋純一は再び名古屋で教鞭を執り、1933年から名古屋高等工業学校校長となった。土屋純一は、1939年に退官するまで、校務の傍ら古社寺、城郭等の古建築の保存と研究を行い、1946年70歳でなくなった。

●坪井安二郎

坪井安二郎は愛知県営繕課の技手を務め、1903年から1907年までの5年間愛知県議会へ出席する県委員を務めた。このことから、瀬口哲夫は、当時、坪井安二郎が愛知県営繕課において重要な立場にあったと指摘している³⁰¹。坪井安二郎は、名古屋高等工業学校建築科の創設された1907年から1909年までの2年間、助教授として主に構造科目を担当した。

●佃忠蔵

佃忠蔵は名古屋高等工業学校第1回卒業生（1908年卒）で、坪井安二郎の後任として1909年より1912年まで助教授として主に構造科目を担当した。

鈴木禎次は佃忠蔵について「大正3年に起工して5年に落成した、いわゆる八層閣があります。北浜銀行の名古屋支店で、この建物は、名古屋の高層建築の始めです。（中略）故人の卒業生佃忠蔵君が設計製図を勤め、これも故人となった3回卒業生の水野三郎君が現場を監督した。ご覧のとおり間口が狭い、ちょうど『マッチ』の箱を立てにしたような形です。鉄筋『コンクリート』の外壁で、内柱と梁は鉄骨造です」³⁰²と述べているように、鈴木禎次による建築作品の設計製図を担当した人物でもある。鈴木禎次は名古屋高等工業学校に赴任して後、自身の設計活動の場として大学を使用していた逸話が残っている。鈴木禎次の初期の建築作品の多くは名古屋高等工業学校の教え子が関わっており、佃忠蔵も鈴木禎次の建築の設計製図を担当していた卒業生の一人であった。名古屋高等工業学校での教職の後、佃忠蔵は愛知県営繕課に勤務し、技手、技師を経て1922年に退職するが、退職後まもなく病気により逝去した。

●福井信之進（1856-1937）

福井信之進は福井江亭という号で知られた日本画家である。東京出身の福井信之進は、別号に天真堂と称し、川端玉章に学んだ人物である。また、福井信之進は川端玉章同門の平福百穂・結城素明らとともに无声会を結成し、自然主義を標榜した新しい写実を目指したことも知られている。愛知県立工業学校教諭を務めていた福井信之進は名古屋高等工業学校開設時の「講師嘱託」として「自在画」科目を担当した。福井信之進の名古屋高等工業学校での教員生活は1907年度一杯とみられ、1908年度から東京美術学校の教員となった。

●奥村季彦（1874-1945）

奥村季彦は1907年度から「自在画」科目の「授業嘱託」として任命された。四条派の画を学んだ奥村季彦は奥村石亭という号で知られた名古屋出身の日本画家である。奥村季彦の父、奥村庸（1834-1895）は奥村石蘭³⁰³という号で知られた日本画家で名古屋の美術教育界の重鎮として君臨した。奥村

季彦は福井信之進とともに愛知県立工業学校で教鞭を執っており、奥村季彦は愛知県立工業学校での肩書きは、中村順平在籍時「助教諭」であった。

●小室信蔵（1870-1922）

福井信之進の東京美術学校への転出による後任として、小室信蔵が自在画を担当した。なお、1908年の福井信之進の転出により、小室信蔵が同年から愛知県立工業学校教諭および名古屋高等工業学校講師を務めた。小室信蔵は東京高等工業学校図案科出身で工業図案を専門とした人物である。同校の第一期生として松岡壽に学び、その将来が嘱望された人物で、海外留学への切符を手に入れかけたが、身体上の問題で海外留学が出来ず、その切符は後に東京高等工芸学校（現、千葉大学工学部）校長となった同級の安田禄造（1874-1942）に譲り渡された。小室信蔵は、卒業後、東京高等工業学校図案科助教授を務めた。小室信蔵は著書『一般図案法』³⁰⁴などを記すなど近代日本のデザイン教育の発展に寄与した。

第1章 註

²⁵³ 1907年に東北帝国大学の分科大学となり東北帝国大学農科大学となる。1918年北海道帝国大学に移管され、北海道帝国大学農科大学となる。

²⁵⁴ 早稲田大学では建築学科予科は前年の1909年に開設された。

²⁵⁵ 村松貞次郎, 市浦健「改定増補 建築学体系 37 建築学史・建築実務」彰国社, 1968, pp.108-109

²⁵⁶ 日本建築学会編, 前掲書, p.1822

²⁵⁷ 日本建築学会編, 前掲書, p.1822

²⁵⁸ 専門学校建築科担任教官協議会報告(1926年4月)では「大学は研究の最高学府, 高等工業学校は実際の技術者養成の最高の学校, 実業学校は以上の技術者の助手, 部分的工事監督者または商人の養成所たるべき」とされている。このように, それぞれの高等教育機関は, 別々の目的で設立されたことがわかる。

²⁵⁹ 日本建築学会編, 前掲書, p.1822

²⁶⁰ 中栄徹郎は嘱託の役職にあたる「講師」として赴任した。他科では教授が学科長を務めたが, 開校当時, 建築学科では講師である中栄徹郎が務めた。中栄徹郎の担当科目は建築材料, 家屋構造, 透視画法, 建築製図を担当し, 建築学科全般の講義を担った。なお, 助教授として安成一雄が建築製図を担当した。中栄徹郎の名は「明治三十九年至明治四十年」(『名古屋高等工業学校一覧』)まで記載されているが, 翌年の「自明治四十年四月至明治四一年三月」(『名古屋高等工業学校一覧』)に記載はなく, 設立2年目から名古屋高等工業学校建築学科を牽引した東京帝国大学工科大学建築学科の先輩, 鈴木禎次の外遊の穴を埋める形での赴任と考えられる。おそらく鈴木禎次の帰国までの開校時の臨時教員とみられる。

²⁶¹ 名古屋工業大学建築学科創立百周年記念会編, 前掲書, p.103

²⁶² 教育者については, 名古屋高等工業学校編「自明治四十年四月至明治四一年三月」『名古屋高等工業学校一覧』名古屋高等工業学校, 1907 名古屋高等工業学校編「自明治四二年四月至明治四三年三月」『名古屋高等工業学校一覧』名古屋高等工業学校, 1909 を参照。安成一雄については, 山本経天『近代中国における中等教員養成史研究』神戸大学, 2004, 学位論文参照。

²⁶³ 名古屋工業大学建築学科創立百周年記念会編『名古屋工業大学建築学科百年史』名古屋工業大学建築学科創立百周年記念会, 2006, p.105

²⁶⁴ 1888年生まれ。東京帝国大学建築学科(1910年卒)。中村順平の卒業以後の名古屋高等工業学校で主に「鉄骨鉄筋コンクリート構造」「応用力学」「家屋構造」「構造計算」「設計要規」「特種建築設計法」などを担当した。伊藤三郎の第1学年時まで名古屋高等工業学校で教鞭を執っていたが, 1919年より中栄徹郎の後任者として台湾総督府営繕課技師を歴任した。

²⁶⁵ 名古屋高等工業学校では, 1917年より講師として栗山俊一の後任を務め, 「鉄骨鉄筋コンクリート構造」「応用力学」「家屋構造及計算」「特種建築設計法」「建築製図」などを担当した。翌1918年より教授となる。1925年に京都帝国大学建築学科助教授となり, 1927年より教授を務めた。

²⁶⁶ 名古屋高等工業学校編「自明治三八年四月至明治三九年三月」『名古屋高等工業学校一覧』名古屋高等工業学校, 1905

²⁶⁷ 浅井新一「私の受けた建築教育」『建築雑誌』Vol.90, No.1101, pp.1052-1053, 日本建築学会, 1975 や松田軍平「私の受けた建築教育」『建築雑誌』Vol.90, No.1101, pp.1054-1055, 日本建築学会, 1975

²⁶⁸ 名古屋高等工業学校編, 前掲書, 1905

- 269 名古屋高等工業学校編, 前掲書, 1907
- 270 名古屋高等工業学校編, 前掲書, 1909
- 271 東京高等工業学校編「自明治四二年四月至明治四三年三月」『東京高等工業学校一覧』東京高等工業学校, 1909
- 272 名古屋高等工業学校編, 前掲書, 1909 及び東京高等工業学校編, 前掲書を参照し作表。
- 273 東京高等工業学校編, 前掲書, p.31
- 274 東京高等工業学校編, 前掲書, pp.51-52
- 275 東京高等工業学校編, 前掲書
- 276 滋賀重列「我国建築教育の過去及現在」『建築雑誌』Vol.19, No.227, pp.743-756, 建築学会, 1905, p.754
- 277 「名古屋工業大学建築学科 100 年の歩み」<http://www.kitalab.jp/ad/history.html> (最終アクセス: 2015.02.05)
- 278 小林仙次「私の受けた建築教育」『建築雑誌』Vol.90, No.1101, pp.1050-1051, 日本建築学会, 1975
- 279 波江梯夫, 『建築と社会』1961 年 3 月号 (長谷部鋭吉特集号)
- 280 浅井新一「私の受けた建築教育」『建築雑誌』Vol.90, No.1101, pp. 1052-1053, 日本建築学会, 1975
- 281 松田軍平, 前掲書, 1975
- 282 松田軍平・松田軍平〈回顧録〉編纂会『松田軍平〈回顧録〉』松田平田坂本設計事務所, 1987, p.49
- 283 伊藤三郎, 飯田喜四郎, 岡本博信, 網戸武夫, 佐久間達二, 菊池利治「座談会: 中村順平の業績と建築図画」『C and D』, No.32, Vol.6, pp.11-22, C&D 同人, 1975, pp.11-22
- 284 名古屋工業大学建築学科創立百周年記念会編, 前掲書, p.104
- 285 城戸武男「私の受けた建築教育」『建築雑誌』Vol.90, No.1101, pp.1056-1057, 日本建築学会, 1975
- 286 伊藤鉦一「私の受けた建築教育」『建築雑誌』Vol.90, No.1101, pp.1058-1059, 日本建築学会, 1975。名古屋高等工業学校大正 11 年卒。長谷部竹腰建築事務所に勤務し, 後に日建設計社長を務めた。日建設計退職後, 名古屋に伊藤建築設計事務所を設立。
- 287 網戸武夫『情念の幾何学』建築知識社, 1985, p.51
- 288 浅野清「私の受けた建築教育」『建築雑誌』Vol.90, No.1101, p.1060, 日本建築学会, 1975
- 289 松田軍平・松田軍平〈回顧録〉編纂会, 前掲書, p.54
- 290 名古屋工業大学建築学科創立百周年記念会編, 前掲書, p.104
- 291 鈴木禎次の略歴については, 瀬口哲夫「名古屋をつくった建築家・鈴木禎次」『INAX REPORT』No.180, pp.4-16, INAX, 2009 や瀬口哲夫『名古屋をつくった建築家・鈴木禎次』名古屋 CD フォーラム, 2004, p.120 を参照した。
- 292 瀬口哲夫, 前掲書, 2004, p.120
- 293 瀬口哲夫, 前掲書, 2004, pp.120-121
- 294 日本建築学会編, 前掲書, pp.1834-1836
- 295 馬場籍生『名古屋百紳士』名古屋百紳士発行所, 1917
- 296 手島益雄『名古屋百人物評論』日本電報通信社名古屋支局, 1915
- 297 名古屋高等工業学校創設時校長, 土井助三郎は, 『名古屋百人物評論』によれば, 1887 年帝国大学工科大学応用化学科出身で東京高等学校, 山口高等学校に歴任し, 1899 年に石川県立工業学校校長, その後, 名古屋高等工業学校建設委員として欧米各国を歴訪し, 名古屋高等工業学校の校舎建設などを指揮した。1905 年に名古屋高等工業学校校長の任命を受け 13 年間の在職期間を全うした。東京高等工業学校の校長手島精一とともに日本における工業教育に全力を投じていた人物と評されている。

²⁹⁸ 名古屋高等工業学校時代に見た2冊のエコール・デ・ボザールの設計競技図集について中村順平は述べているが(成澤福松「中村順平先生随聞記 No.18」『あすなろ』第9号, 檜の会, 2009, p.9), 具体的な書名については記載されていない。おそらく, 鈴木禎次の留学時期を考えれば, 年次設計競技図集”Concours d'architecture de l'année scolaire”の前身の図集シリーズ”Les médailles des concours d'architecture à l' Ecole nationale des Beaux Arts”と思われる。

²⁹⁹ 稲葉信子「帝国大学における「日本建築学」講義 建築アカデミズムと日本の伝統」『学問のアルケオロギー』東京大学, 1997 (http://www.um.u-tokyo.ac.jp/publish_db/1997Archaeology/03/31400.html (最終アクセス:2015.02.05))

³⁰⁰ 渡辺俊一「欧米都市計画との遭遇」『建築雑誌』Vol.101, No.1254, pp.60-61, 日本建築学会, 1986

³⁰¹ 瀬口哲夫『官庁建築家 愛知県営繕課の人々』名古屋 CD フォーラム, 2006, p.168

³⁰² 鈴木禎次「名古屋に於ける建築の今昔感」『建築雑誌』Vol.45, No.551, pp.1713-1718, 建築学会, 1931, p.1716

³⁰³ 奥村庸(奥村石蘭)は尾張藩士の家に生まれ, 10歳のとき野村玉溪の門下生となり四条派の画を学んだ。多くの門下生を養成したことでも知られ, 国風学校の画学教員として『小学校毛筆画初歩』や『高等小学校毛筆水墨画』を著している。

³⁰⁴ 小室信蔵『一般図案法』丸善株式会社, 1909

第2章 中村順平の受けたフランスの建築教育

1. 近代日本の建築教育者にみる外国経験

「帝国大学の教授への昇進には欧米留学が義務付けられていた」³⁰⁵という瀬口哲夫の指摘があるように、近代日本の建築教育者にとって外国経験はひとつの重要な要素であった可能性がある。また、「建築科の学風は、それぞれ創始期のプロフェッサーによって大きく影響を受けている」³⁰⁶という村松貞次郎の指摘があるように、各校の建築科長がそれぞれの学校の教育の方向性を定めた可能性もある。このように考えた場合、少なからず各学校を牽引した教育者の外国経験が、その学校の教育方針に影響を及ぼした可能性がある。

ここでは、各官立学校の建築教育の主導的立場をとった人物に着目し、その人物の外国経験の有無や留学先の国名などを整理する。なお、近代日本における建築教育について、工部大学校の成立から辰野金吾の出現までを第1期とし、高等工業学校において建築教育が開始された時期を第2期とし、京都帝国大学から仙台高等工業学校建築学科の出現までを第3期と分類した。そして、各期に開設された官立学校の学科科長または各学校一覧において建築系科目を担当した叙位の高い専任の教授を取り上げ、彼らの出身校および主な留学先を次表（表2.2.1）にまとめた。

表 2.2.1 各官立学校の設立当時の学科長、出身校、留学先

	学校名	設置年	科長／設計製図担当	出身校	主な留学先
第1期	工部大学校	1877 (1873 開校)	ジョサイア・コンドル	ロンドン大学	英 (出身)
	東京帝国大学	1886 (造家学科) 1896 (建築学科)	辰野金吾	工部大造家	英・仏・伊
第2期	名古屋高等工業学校	1905 (建築科)	鈴木禎次 (科長)	東京帝大造家	英・仏・独・伊・米
	東京高等工業学校	1907 (建築科)	滋賀重列 (科長)	イリノイ大建築	米
第3期	京都帝国大学	1920 (建築学科)	武田五一	東京帝大建築	英・独・米
	神戸高等工業学校	1922 (建築科)	古宇田実 (科長)	東京帝大建築	英・仏・独・奥・洪・米
	東京美術学校	1923 (建築科)	岡田信一郎 ³⁰⁷ (主任)	東京帝大建築	-
	福井高等工業学校	1924 (建築科)	坂部保治 (科長)	東京帝大建築	独
	横浜高等工業学校	1925 (建築学科)	中村順平 (科長)	名高工建築 エコール・デ・ボザール	仏
	仙台高等工業学校	1930 (建築学科)	小倉強 (科長)	東京帝大建築	独
備考 (凡例)		英：イギリス，米：アメリカ，仏：フランス，独：ドイツ，奥：オーストリア，洪：ハンガリー			

まず、全3期についてみると、岡田信一郎を除く全ての教育者が外国留学を経験した。また、第2期および第3期の日本人教育者は、滋賀重列、中村順平を除き、東京帝国大学出身者であった³⁰⁸。

また、留学資金をみると、第2期および第3期の留学経験者のうち、滋賀重列、中村順平を除く全ての人物は国費による留学で、文部省を通じての留学であった。なお、滋賀重列は私費での留学、中村順平は岩崎財団からの出資による留学で、教育機関への所属のきっかけは、それぞれの所属した学校の学校長の人選であった。

国費留学者では、例えば、鈴木禎次は、自身が語るように名古屋高等工業学校の着任が約束された

留学であった³⁰⁹。また、小倉強は、仙台着任以前、東北帝国大学技師を務めていたが、開設準備の段階で、学科の内容を立案し、開設前の1929年3月に建築視察のため留学し、同年12月の帰国直後に学科長に任命された³¹⁰。

一方、鈴木禎次と同世代である武田五一や古宇田実は、第3期の学校の教育者として建築教育界を牽引したが、武田五一は東京帝国大学や京都高等工芸学校での教職歴豊富な人物であり、また、古宇田実も東京美術学校図案科で既に教鞭をとり、神戸高等工業学校建築科の開設期は東京美術学校との兼務であった。なお、武田五一は3度外遊しているが、第1回目の1901年から1903年にかけての留学は、京都高等工芸学校着任直前の出来事で、その留学の目的は、建築装飾・図案の研究であったため、多くの国々を見聞した。一方、古宇田実は、建築教育の各国間の相違を体験するため、1920年から1922年にかけて多くの国々を見聞した。古宇田実の留学も、神戸高等工業学校への着任直前の出来事であった。なお、鈴木禎次らの世代の留学は、複数国を歴訪するスタイルであった。

次に、留学先に目を向けると、第2期までの3名の日本人教育者は、英語圏に留学している。滋賀重列は日本国内での建築教育を受けていないが、英語圏への留学は、工部大学校での黎明期の建築教育がイギリス人ジョサイア・コンドルによって行なわれたことや、辰野金吾の場合、教育言語が英語であった時代を経験したことに起因するだろう。一方、第3期の坂部保治や小倉強の留学先がドイツであったことは、古宇田実が述べるように、1923年ごろの日本の建築教育が「ドイツ風もしくはイギリスの風を加味したドイツ風」であったことの反映といえる³¹¹。

こうした留学先の傾向は、東京帝国大学における建築教育の主導的立場の人物との関係性が考えられる。第2期の辰野金吾全盛期における留学先が、イギリス・フランス・アメリカであったのに対し、第3期の佐野利器全盛期においては、佐野利器の留学先であるドイツが主流となった。なお、この流れは、本論第1編・第1章で述べた辰野金吾による欧米からの建築技術の導入過程の変遷とも一致している。

また、こうした傾向は、東京帝国大学の学生たちが使用した設計の参考文献の傾向にも現れている。1900年頃の学生の設計製図においてイギリスの雑誌 *Building news and engineering journal*³¹²や *Academy architecture and architectural review*³¹³が参考文献であったのに対し、大正時代には、ドイツ・オーストリアなどドイツ語圏の雑誌 *Deutsche Kunst und Dekoration*³¹⁴や *Moderne Bauformen*³¹⁵が参照された³¹⁶。

さらに、東京帝国大学建築学科における外国語科目の影響も考えられる。近江栄が述べるように、大正期の同校における外国語の必修科目は、英語、ドイツ語であり、フランス語は必修ではなかった³¹⁷。大正期の東京帝国大学において教育を受けた坂部保治や小倉強によって牽引された福井、仙台³¹⁸の両校における外国語必修科目は、英語、ドイツ語であったが、一方で、横浜高等工業学校ではフランス語が必修であった。近江栄が「もし、フランス語も必修の外国語として加えてあれば、おそらく中村順平のようなエコール・ド・ボーザール（原文ママ）での成果も正しく評価され、また日本の近代建築の発展過程の内容も、一足跳びにではなく段階的な成熟期を経て、豊かさとエスプリがぐわえられていたことであろうがまことに残念」³¹⁹と述べるように、必修科目としての外国語の選択肢は、日本の近代建築の発展過程に影響を及ぼしたと同時に、建築教育のその後の発展にも影響した。

2. エコール・デ・ボザールと中村順平

中村順平は、名古屋高等工業学校時代に見た2冊のエコール・デ・ボザールの設計競技図集が自身のフランス留学のきっかけであったことを述べている。中村順平はこれら2冊の図集を見た際、「平面図に現れて居るものの内、どれが内部でありどれが外部であるかわからない。これはなさけないことだ」³²⁰と思い、フランス留学を決意した。

中村順平のフランス留学への願いは、名古屋高等工業学校建築科を牽引した鈴木禎次から、中村順平の就職先である曾禰中條建築事務所の中條精一郎に託された。中村順平が「僕がフランスにやっていただいたのは中条先生ですよ」³²¹と語っているように、中條精一郎の計らいで留学が実現した。また、「中村さんのエコール・デ・ボザール入学には、中条さんのお世話と、岩崎小弥太さんの援助がありました。中条さんと岩崎さんとは親交がありましたので、中条さんがこういう才能のある人だからと推薦された」³²²といわれているように、中條精一郎の後押しにより、岩崎小弥太が中村順平の留学資金を手配した³²³。

当初、予定された中村順平の留学時期は、中村順平と国民美術協会会頭や東京大正博覧会審査員を務めた黒田清輝（1866-1924）とのやりとり³²⁴が物語っているように、1915年ごろであったと推定できる。しかし、第1次世界大戦による時局の変化によりエコール・デ・ボザールが休校になるなどの理由から中村順平の留学時期は先送りされた³²⁵。

中村順平は、1920年7月末にフランスへ向けて日本をたち、約3年半、主にパリを拠点とし、エコール・デ・ボザール建築セクションにおける建築教育を受けた。

なお、中村順平の留学期は、「ル・コルビュジエのプュリスムの造形やバウハウスの前衛性とは地平を異にした、ペレー流の合理主義やロジェ＝アンリ・エクスペールに代表されるアール・デコの手法が大きく影を投げかけていた」³²⁶時代であった。中村順平がパリに到着した1920年のフランスは、第1次世界大戦の休戦協定が締結された直後のようやく落ち着きを取り戻しつつあった時期であり、第1次世界大戦によって大きな被害を受けたフランスが、国内の復興へと歩みはじめた時期であった。そして、エコール・デ・ボザールでは、第1次世界大戦期に中断された教育がようやく再開され、技術系の学校ではそれまでの学生数の倍以上の入学者を迎え、復興のために必要な技術者の養成がはじまった時期であった³²⁷。

2.1 エコール・デ・ボザール①：歴史と世界的伝播

中村順平は、エコール・デ・ボザールの学校史、教育制度史、設計課題史を題材とした論考を、雑誌『新建築』上において「パリ美術院」と題し、1968年2月号から同年8月号にかけて全7回にわたり発表した³²⁸。「パリ美術院」の論考は、『新建築』に連載されたもののほか、未刊行原稿も存在し、その原稿は、中村の死後、教え子たちが立ち上げた組織「檜の会」の会報誌「檜」の第1号（1989年発行）から第6号（1992年発行）にかけて、全6回にわたり掲載された³²⁹。

ここでは、まず、中村順平の上記の資料のほか、序論で取り上げた三宅理一の編著書や土居義岳の著書などを参考に、19世紀末から20世紀初頭にかけて世界各国に影響を及ぼしたとされる同校の教育が、具体的にどのような国々に伝播し、発展したのか、その歴史的な流れを検証する。

パリのエコール・デ・ボザールの起源は、ルイ14世治下に遡る。まず、フランスにおけるアカデミーの成立では、1648年の王立絵画彫刻アカデミーAcadémie Royale de Peinture et de Sculptureの創立を嚆矢とし、1666年にはフランス・アカデミーAcadémie de France à Romeがローマに創立され、ローマへの芸術家派遣が始まった。その後、1671年に王立建築アカデミーAcadémie royale d'architectureが創立された。その後、王立絵画彫刻アカデミーと王立建築アカデミーに加え、1669年創立の王立音楽アカデミーが、1816年3月21日のルイ18世の条令で再編され、アカデミー・デ・ボザールAcadémie des Beaux-Artsとなった。そして、1816年12月18日のルイ18世の条令で、それまで別々の組織であった絵画・彫刻と建築の2つのアカデミーを統合し、組織の再編が図られ、絵画・彫刻・建築の3分野を有する独立した高等教育機関として「エコール・ロワイヤル・エ・スペシアル・デ・ボザール」Ecole Royale et Spéciale des Beaux-Artsが誕生した。当時の教育は、アカデミー会員、王立アカデミー、エコール・ド・ラカデミーの教授によってルーヴル宮で行われた。この組織での教育は1819年より開始され、現在のパレ・デ・ゼチュードPalais des Etudesの建物に移された。

エコール・デ・ボザールは、その歴史の中で様々な改革や改称が行われたが、アカデミー・デ・ボザールを後見とした一元的な教育形態が解体する1968年まで存続した。同校の建築セクションは、建築家養成機関としてアトリエ制を敷き、150年にわたり一種の徒弟制にも似た方式で建築家育成の役割を果たした³³⁰。

表 2.2.2 エコール・デ・ボザールの名称・管轄機関変遷史³³¹

年	校名	年	管轄
1671	王立建築アカデミー附属学校	1671	王立建築アカデミー（設立）
1793	国立建築学校（改称） Ecole nationale d'architecture	1793	王立建築アカデミー（廃止） le Comité d'Instruction publique de la Convention
1795	Ecole nationale d'architecture	1795	フランス学士院Institut de France 内務省ministère de l'Intérieur
1797	Ecole nationale de peinture, de sculpture et d'architecture		
1816	エコール・ロワイヤル・エ・スペシアル・デ・ボザール	1852	国務省 ministère d'Etat
1819	エコール・デ・ボザール Ecole impériale et spéciale des beaux-arts 第二帝政期 Second Empire 期の名称	1863	宮内省 ministère de la Maison de l'empereur
1870	Ecole nationale des beaux-arts 第三共和制 IIIe République 期の名称	1870	公教育省 ministère de l'Instruction publique
1940	Ecole nationale supérieure des beaux-arts	1959	文化省 ministère de la Culture

こうしたエコール・デ・ボザールの建築教育は、本論第1編・第1章で述べたように、世界にも稀な教育システムとしてフランス国内に影響を与えただけでなく、国外の関心も集めた³³²。

例えば、アメリカでは、「アメリカン・ボザール」という言葉に代表されるように、アメリカ南北戦争後の再建時代から第2次世界大戦に至る約70年間は、パリのエコール・デ・ボザールがアメリカの建築界に影響を与え続けた³³³。

本論第1編・第1章で述べたように、1868年に創設されたマサチューセッツ工科大学の初期の建築教育では、フランスから招かれたエコール・デ・ボザール出身の建築家やパリで建築教育を受けたアメリカ人建築家によるエコール・デ・ボザール流の建築教育が行われた。アメリカのその他の大学においても19世紀末から20世紀初頭にかけて同様の傾向が見られ、例えば、ルイス・カーン (Louis Isadore Kahn, 1901-1974) の師、ポール・クレ (Paul Philippe Cret, 1876-1945) は、エコール・デ・ボザール卒業後すぐにアメリカ・ペンシルヴァニア大学 University of Pennsylvania に招かれた教育者である。アメリカにおいて、こうしたエコール・デ・ボザールを範とした教育は、次第にヴァルター・グロピウス (Walter Gropius, 1883-1969) らによるバウハウス流のものにかわる1930年代後半までの間、影響を与え続けた³³⁴。

また、カナダにおいても、パリのエコール・デ・ボザール出身のフランス人建築家ジュール・ポワヴェール (Jules Poivert, 1867-1955) が、1909年よりモンリオールのエコール・ポリテクニク Ecole Polytechnique de Montréal (仏語表記), Ecole Polytechnique of Montreal (英語表記) 建築学部において、エコール・デ・ボザール流の建築教育を行なった。そして、ジュール・ポワヴェールは、1923年に創設されたモンリオールのエコール・デ・ボザール Ecole des Beaux-Arts de Montréal³³⁵においても教鞭をとり、エコール・デ・ボザール流の建築教育をさらに発展させ、その後、同校校長として活躍し1951年まで影響力を保った³³⁶。

一方、エコール・デ・ボザールの教育は、フランス植民地での建築教育にも導入された。例えば、ベトナムでは、1925年にハノイに新設されたインドシナのエコール・スーペリウール・デ・ボザール Ecole Supérieure des Beaux-Arts de l'Indochine (1925-1945) では、エコール・デ・ボザール出身の建築家ルイ＝ジョルジュ・ピノー (Louis-Georges Anatole Pineau, 1898-1987) が教鞭をとるなどエコール・デ・ボザール出身者による建築教育が行われた。

さらに、他の植民地、アルジェリアでは、アルジェのエコール・デ・ボザール Ecole des Beaux-Arts d'Alger において、エコール・デ・ボザールの教育が導入された。この学校の場合、1930年代にはアルジェの学校からパリへの進学を可能とするシステムが構築された³³⁷。

19世紀末から20世紀初頭にかけて世界の建築教育者に、エコール・デ・ボザール出身者が配備された。フランス国外においては、技術系の学校に属した建築学科にエコール・デ・ボザール出身者が教育者となり、また、植民地にあつてはエコール・デ・ボザールそのものが輸入された可能性があり、ある種のフランスの植民地戦略の現れと捉えることもできる。これは、西堀昭が指摘するように「フランスが外国に進出する場合、教育システムをとりわけ重視する」³³⁸傾向によるもので、「フランス人の帰国後のことを託す者を育成」³³⁹し、さらには、「フランスの影響力を将来にわたって残すため」³⁴⁰であった。以上の植民地におけるエコール・デ・ボザール教育の受容期とほぼ同時期に、中村順平は日本に帰国し、近代日本の高等工業学校において建築教育を開始した。

2.2 エコール・デ・ボザール②：建築教育システム

エコール・デ・ボザール建築セクションの教育システムはいかなるものであったのか。ここでは、エコール・デ・ボザールにおいてフランス政府公認建築家資格を取得するための一般的な流れに着目し、その歴史的な背景や具体的な教育システムを解明する。

パリのエコール・デ・ボザールでは、フランス国家の要請する標準を備えた建築家の育成をめざした教育が行われた。エコール・デ・ボザールでは、定められた課程を修了し、国家的な資格を得るために提出された卒業制作課題が認められた場合、その提出者に対してフランス政府公認建築家資格 *Architecte D.P.L.G.* が与えられた。

フランス政府公認建築家資格制度が公式に確立されたのは、1914年のことであった。それ以前にはこのフランス政府公認建築家資格はエコール・デ・ボザールの教育制度内にもみ存在し、国家的な資格の類のものではなかった。1867年にフランス国家が事実上公認した資格として、エコール・デ・ボザールの卒業生に対して与えられた資格、フランス国家公認建築資格 *Diplôme d'architecture reconnu par l'Etat* が確立された。その後、フランス政府公認建築家資格定着への舵取りが行なわれ、1877年にエコール・デ・ボザールの卒業生達が設立した協会 *Société des architectes diplômés du gouvernement* (略称, *S.A.D.G.*) の設立により職能の道のりが開かれた。

1895年にいわゆる職能の具体的な取り決めが明文化された「ガデ法典」*Code Guadet* が発表され、エコール・デ・ボザールの卒業生を中心とした建築家職能意識の統一見解がまとまった。そして、1914年に公式にフランス政府公認建築家資格制度が確立された。登録建築家の制度は、第2次世界大戦に入る1940年のヴィシー政権下に確立された。このように、約100年にわたる議論を重ね建築家という職能が定着した³⁴¹。

フランス政府公認建築家資格の取得までの一般的な流れは、エコール・デ・ボザールの入学試験 *Epreuves d'admission* 合格後、2級課程 *Seconde Classe* への登録、2級課程での所定単位 *valeur* の取得により1級課程 *Première Classe* への進級、1級課程での所定単位の修学権利年限内での取得による卒業制作提出資格の取得というプロセスであった。この卒業制作提出資格の取得後、所定の実務経験を経て、卒業制作を提出し、口頭試問に合格し、はじめてフランス政府公認建築家資格の取得が可能となった。

エコール・デ・ボザールの修学権利年限は、通常15歳から30歳までと定められていた。しかし、中村順平の留学期にあたる第1次世界大戦後については、従軍者に限り、修学権利年限の延長制度が設けられ、該当学生に限り満30歳の上限が満35歳まで延長された。

修学権利年限の規定は、入学試験、2級課程、1級課程に適用され、卒業制作提出資格は60歳までとされた。修学権利年限の上限により、所定単位の取得は修学権利年限までとなり、仮に1級課程の修了に必要な単位数不足の場合、卒業制作に取り組みず、結果的に公認建築家資格は生涯取得不可能であった。

入学試験は年に2回(例年2月～3月、6月～7月頃)行われた。この試験は下級課程に相当する2級課程への登録のための試験であった。入学願書には、フランス人の場合、出生証明書、外国人の場合、大使館や大使などが作成した照会状に出生に関する情報を記載した書類、さらに出身国に関わら

ず入学試験の受験可能レベルへの到達度を証明する書類の添付が求められた。到達度を証明する書類は、通常「アトリエ」*Atelier* と呼ばれるエコール・デ・ボザールが認定する建築家の塾のような機関の主宰者（パトロン *Patron*）によって作成された。そのため、入学前のアトリエ選びは必須で、中村順平も入学に先立ちアトリエを選択した。なお、入学準備中の候補生は、「入学志願者」を意味する「アスピラン」*aspirant* という呼称が与えられた。

入学試験合格者たちが2級課程に登録可能となる。2級課程を有する学校は、中村の所属したパリのエコール・デ・ボザールだけでなく、フランスの主要な地方都市の美術学校にも存在し、リヨン *Lyon*, マルセイユ *Marseille*, ボルドー *Bordeaux*, リール *Lille*, ルーアン *Rouen*, デイジョン *Dijon* などの都市に限られていたが、入学試験の得点や希望に応じてパリ以外の都市の学校への進学が可能であった。1級課程への進学は、パリのエコール・デ・ボザールのみならずこれら地方都市に点在する学校の2級課程修了者も可能であったが、1級課程は、地方都市には存在せず、パリのエコール・デ・ボザールにのみ存在した。

2級課程では、年間6回出題される3種の設計演習課題のみならず、後述する所定の専門科目での単位取得が求められた。一方、1級課程では、2級課程とは異なり、座学の専門科目は2科目のみで、主として設計演習課題による単位取得であった求められた。設計演習課題は、各設計課題の受賞の有無により、異なる単位数が割り当てられた。

卒業制作に着手するための要件は、1級課程における所定単位の取得のほか、通常、1級課程修了後、少なくとも1年以上の実務研修が求められた。なお、卒業制作着手にあたって、その実地における建築主任の証明書の提出が求められた。

卒業制作の題材は、建築家資格取得希望者が事前にパトロンなどと相談の上、決定した。その後、その題材は、エコール・デ・ボザール内部の教授会において審議され、審議会の許可を得る必要があった。これらのプロセスを経て、建築家資格取得希望者は本格的に卒業制作へ取り組むこととなった。

卒業制作の規定提出図書には、通常、プログラムに応じた適切な縮尺による配置図、各階平面図、立面図、断面図などのほか、卒業制作の計画概要とその計画内容に関する説明書が含まれていた。卒業制作作品を提出後、卒業制作提出者はその作品の面前でエコール・デ・ボザール教授陣との口頭試験を行い、それに合格することでフランス政府公認建築家資格が得られた。

2.3 エコール・デ・ボザール③：アトリエ制度

ここでは、エコール・デ・ボザールのアトリエ制度について、中村順平の分析等を交えながら、そのシステムと中村順平の留学期に存在した具体的なアトリエ名、さらにアトリエ制度と将来の就職等についての関係性に着目し、概括する。

エコール・デ・ボザールの基本はアトリエ制度であるといわれている。アトリエといっても、今日の大学における講座制度とは異なり、各々の建築家の塾のようなものであったといわれている³⁴²。フランス政府公認建築家目指す者にとって、エコール・デ・ボザールが公認したアトリエの選択は、最初に行うべき行為であったが、その選択は入学志願者の自由であった。

通常、エコール・デ・ボザール入学志願者の資格を得るためには、入学までの流れの中で、アトリエのパトロンの推薦が必要とされた。入学志願者は、アトリエで修業しながら入学試験の準備に励み、入学試験の合格者は、エコール・デ・ボザール下級課程、2級課程の学生として登録される。学生にとって生活の基盤は常にアトリエにあり、入学以後課題の成果物の提出の際は、学生は「何々アトリエ」所属という形で認定された。

エコール・デ・ボザールの教育システムにおいて「アトリエ」の選択は入学試験の準備段階で必要であった。それはエコール・デ・ボザール入学の際に課せられる試験に、すでに建築の設計が含まれ、12時間で描く「クラシック」Classique とされる「建築構成」Composition d'Architecture 課題が課されたためである。そのため、エコール・デ・ボザール近辺に多く散在していた公認のアトリエに所属し、入学試験の受験前の訓練が必要であった。入学志願者はアトリエで各所の建築に関する基礎的勉強や設計演習の一応の手ほどきを受け、アトリエのパトロンから入学試験受験に適当と認められた証明書を獲得した。

エコール・デ・ボザール公認のアトリエは、大きく分けて2種類存在した。ひとつは、私塾のような組織で、校外に設けられた「アトリエ・リーブル」Atelier Libre でエコール・デ・ボザールの従来型のアトリエである。なお、アトリエ・リーブルは、学生から月謝を徴収して運営された。もうひとつは、1863年11月に発令されたエコール・デ・ボザールの教育改革によりエコール・デ・ボザール内に設置された3つの「アトリエ・オフィシエル」Atelier Officiel である。この組織での活動内容は、アトリエ・リーブルと変わりはないが、両者の違いは、アトリエ・オフィシエルの場合、国がその運営費を負担し、その活動拠点が学内に設置された点にある。

中村順平が入学準備に取り掛かった1920年から1921年のパリのエコール・デ・ボザールには、当時、13のアトリエが存在した。その13のアトリエの名称、パトロン名、その存在期間、2種のアトリエの別を整理し、表2.2.3を作成した³⁴³。

表2.2.3に掲載した13のアトリエのパトロンの平均年齢は57.8歳で、最高齢は、アトリエ・ランベールのパトロン、74歳のマルセル・ランベールで、中村順平が日本で師事した曾禰達蔵よりも年上であった。一方、最年少は、中村順平がパリで師事したロジェ＝アンリ・エクスパーレで39歳であった。なお、中村順平が師事したもう一人のパトロン、ジョルジュ・グロモールは、平均年齢を下回るパトロンであった。

表 2.2.3 エコール・デ・ボザール・アトリエ・リストー1920年

アトリエ名		アトリエ主宰者	アトリエ存在期間
アトリエ・オフィシエル			
1	アトリエ・アンドレ Atelier André	ピエール・アンドレ (Pierre-François-Paul André, 1860-1930)	1919-1931
2	アトリエ・ポントルモリ Atelier Pontremoli	エマヌエル・ポントルモリ (Elysée-Emmanuel Pontremoli, 1865-1956)	1919-1932
3	アトリエ・ランベール Atelier Lambert	マルセル・ランベール (Marcel-Noël Lambert, 1847-1928)	1908-1925
アトリエ・リーブル			
4	アトリエ・ルクーラ Atelier Recoura	アルフレド＝アンリ・ルクーラ (Alfred-Henri Recoura, 1864-1939)	1920-1947
		アンリ＝ポール・ネノ (Henri-Paul Nénot, 1853-1934)	1922-1929
		ジョセフ・デュケーヌ (Joseph Eugene Armand Duquesne, 1868-1929)	1922-1929
5	アトリエ・エロー Atelier Héraud	ガブリエル・エロー (Gabriel Héraud, 1866-1941)	1907-1937
6	アトリエ・ジョスリー Atelier Jausse	レオン・ジョスリー (Léon Jausse, 1875-1933)	1910-1924
7	アトリエ・ルドン Atelier Redon	ガストン・ルドン (Gaston Fernand Redon, 1853-1921)	1891-1921
		アルベール・トゥルネール (Joseph Albert Tournier, 1862-1958)	1921-1930
8	アトリエ・ドゥグラン Atelier Deglane	アンリ・ドゥグラン (Henri Adolph Auguste Deglane, 1855-1931) シャルル・ニコ (Charles Henri Nicod, 1878-1967)	1894-1931
9	アトリエ・ドゥフラス Atelier Defrasse	アルフォンス・ドゥフラス (Alphonse-Alexandre Defrasse, 1860-1939)	1905-1939
10	アトリエ・ラルー Atelier Laloux	ヴィクトール・ラルー (Victor-Alexandre-Frédéric Laloux, 1850-1937)	1890-1937
		シャルル・レマレスキエ (Charles Henri Camille Lemaire, 1870-1972)	1920-1937
		ジョルジュ・ラブロ (Georges Antoine Pierre Labro, 1887-1981)	1922-1925
11	アトリエ・ウムデンストック Atelier Umbdenstock	ギュスターヴ・ウムデンストック (Gustave Umbdenstock, 1866-1940)	1909-1940
12	アトリエ・ゴドフロワ Atelier Godefroy	ジュル＝アレクシス・ゴドフロワ (Jules-Alexis Godefroy, 1863-1928)	1919-1928
13	アトリエ・グロモール＝エクスパー Atelier Gromort-Expert	ジョルジュ・グロモール (Georges Désire Gromort, 1870-1961)	1919-1937
		ロジェ＝アンリ・エクスパー (Roger-Henri Expert, 1882-1955)	1919-1925
備考	・フランス語表記は、ミドルネーム等も記載。 ・日本語表記は、多くの文献で通常使用される氏名のカタカナ表記を記載。		

各アトリエにはそれぞれの指導法があったといわれている³⁴⁴。

エコール・デ・ボザールでは、学年制がとられておらず、その代わりに、アトリエ内部では、学年制に類する学生の序列が定められていた。中村順平によれば、通常、エコール・デ・ボザール入学志願者や入学者は「新参者」cochon と呼ばれ、エコール・デ・ボザール入学試験合格者のなかで古参者によって認められたものが「中位生」mixte と呼ばれた。さらに、アトリエの後進の指導や運営等も任された「古参者」ancien を含め、3つの序列が存在した。

新参者は、自身の勉学の傍ら、古参者の建築製図の手伝い、アトリエ内の掃除、ストーブ番、買い物など奉仕が必要で、徒弟制度であり丁稚奉公の様相を呈していた。一方、古参者は、アトリエの先

輩としてアトリエ主宰者に代わって新参者の勉学に注意を与え、また、図面の修正などをし、後進を指導する立場にあった。また、古参者や中位生の中には、エコール・デ・ボザールで行われる設計競技の課題と日取りが発表されない間は、建築設計事務所などに勤務し、実務で報酬を得ながら技術上の研鑽を積み、自身が参加したい設計競技を待つものもいた。したがって、アトリエには、必ずしもそこに属する全員が一同に会し、作業しているわけではなく、中村順平によれば、パトロンの指導を受けるものの数は、所属者の全数でないことが多かった。

中村順平が「新参者」の時代、アトリエでは、パロン自らがエコール・デ・ボザール入学のための準備のため、3日間の制作期間を定め、実際の試験を想定した内容で設計課題を与えた。その後、提出された図面に対し、パロンは、建築性格表現の適不適、デッサンの仕上げ良・不良などを批評した。中村順平の場合、こうした練習が週2回行なわれ、入学試験まで続けられた。

学内の設計競技の制作作業を行っている学生などは、コンクール場で提出した略設計図（エスキス）に示した方針やそれに基づく仕上図について、パロンに批評や知識を求めながら制作するなど、芸術上の知識や練磨の道場としてアトリエで作業した。

このアトリエ選びは、将来の役割との関係性も見出せる。

例えば、ジャン＝ピエール・マルティノンの研究では、「公共建築・国家宮殿主任建築家」*Architecte en chef des bâtiment civil et palais nationaux*を肩書きにもつ国家的公共建築に携わる主任建築家を務めた人物の出身アトリエとの関係性が指摘されている³⁴⁵。1962年を例にみると、公共建築・国家宮殿主任建築家は89名で、出身アトリエ別に見ると、アトリエ・ポントルモリ（表2.2.3 アトリエ・オフィシエル2）の系譜³⁴⁶にある建築家が29名、アトリエ・ドゥフラス（表2.2.3 アトリエ・リーブル9）の系譜³⁴⁷にある建築家が27名、アトリエ・ラルー＝レマレスキエ（表2.2.3 アトリエ・リーブル10）の系譜³⁴⁸にある建築家が16名で、実に、89名に対して72名がこの3アトリエの系譜にあった³⁴⁹。こうしたことから、アトリエ選択が、自身の将来の役割との緊密な関係性を有していた。

2.4 中村順平のアトリエ選択

ここでは、表 2.2.3 に掲げた 13 のアトリエから、中村順平がどのアトリエを選択し、なぜそのアトリエを選択したのか。また、中村順平が所属したアトリエには当時どのような人物が所属していたのかを概括する。

まず、フランスに降り立った中村順平は、マルセイユからパリに向けての移動中、リヨンに立ち寄った。中村順平は、そこでエコール・デ・ボザールの設計競技課題の優秀作品が掲載された年次設計競技図集 *Les Concours d'architecture l'année scolaire* の 1919-1920 年度版³⁵⁰を購入した。中村順平は、この図集に掲載された作品群から、入賞者を多数輩出したアトリエを調査した。その結果、最も多くの入賞者を輩出したアトリエが「アトリエ・ラルー」であったことから、中村順平はそのアトリエへの所属を考えた³⁵¹。つまり、中村順平は、留学以前からアトリエを定めていたわけではなく、フランス到着後にその選定を行なった。

中村順平のパリ生活は、1920 年 9 月 20 日から始まった。中村順平は、3 日後の同年 9 月 23 日に、初めてエコール・デ・ボザールに向かい、同校の施設などを見学し、同時に、学生課の担当者から入学試験に関する情報を収集し、アトリエの住所録を入手した³⁵²。

その後、中村順平は、同年 9 月 30 日に、エコール・デ・ボザールの正門近くにあったオーギュスト・ヴァンサン Auguste Vincent 書店³⁵³に立ち寄った。その際、中村順平は、エコール・デ・ボザールの学生らしき人物から年齢を尋ねられ、実年齢とは 3 歳異なる「30 歳」と答えた。その答えを聞いた書店の店主に「グロモール・エクスペールのアトリエしかいかならない」といわれたため、中村順平は、パリ・モンパルナス界隈のメヌ大通り 21 番地 (21, Avenue du Maine) ³⁵⁴にあった「アトリエ・グロモール＝エクスペール」への入門を決意した³⁵⁵。なお、中村順平が選択したアトリエのパトロンの一人、ジョルジュ・グロモールは、「アトリエ・ラルー」出身者であった。

この書店での出来事から 1 ヶ月以上を経過した同年 11 月 9 日に、中村順平は、アトリエ・グロモール＝エクスペールをはじめて訪れた。しかし、この訪問に際して、面会できたのはパトロンの一人、ロジェ＝アンリ・エクスペールだけであった。なお、ロジェ＝アンリ・エクスペールが、アトリエ内部にいる者たちへ向けた眼差しに、中村順平は「名古屋の教室そのままだ」³⁵⁶という感想を述べている³⁵⁷。そして、中村順平はロジェ＝アンリ・エクスペールに対し、同年 12 月に再度訪れる旨を述べたが、実際、再び訪れ、アトリエに入門したのは、翌年 1921 年 2 月 4 日であった。

当時、アトリエ・グロモール＝エクスペールには、様々な国籍の学生が集まっていた。中村順平がアトリエに所属した 1921 年ごろに在籍した人物の国籍は、フランスをはじめ、アメリカやオーストリア、スペインやルーマニア、エジプトやキューバなどであった³⁵⁸。

ところで、1921 年ごろのアトリエでの一風景が残されている。この中にはジョルジュ・グロモール、ロジェ＝アンリ・エクスペールのパトロン 2 名の他、中村順平を含めた 22 名が写されている。『情念の幾何学』³⁵⁹に掲載されたこの写真 (図 2.2.1) の撮影時期は不明だが、ブラジルで活躍したフランス・ボルドー出身の建築家アンリ・サジュ (Henri Sajous, 1897-1975) の関係者が同様の写真を所持していたことから³⁶⁰、1921 年から 1923 年の間のいずれかの時期に撮影されたものであることがわかる。なお、アンリ・サジュの在学期間は、1921 年から 1924 年で、概ね中村順平の留学期間と同時

期である。

中村順平とアンリ・サジュを除く 20 名には、中村順平の日記に登場する人物である 1921 年にフランス政府公認建築家資格を取得したエジプト出身のヴェハン・アゴピアン (Vahan Hagopian, 1889-1971) や、1922 年にフランス政府公認建築家資格を取得したフランス人ジャン・パペ (Jean Papet, 1889-1965) のほか、1920 年 7 月に入学したフランス人アンドレ・メサジエ (André Messenger)³⁶¹や、中村順平と同時に入学したフランス人エルネスト・ラコンブ (Ernest Lacombe, 1899-?) が含まれた可能性が高い。

彼らに加え、その他の可能性を指摘するならば、1921 年入学の人物で、1971 年にフランスの建築アカデミー会員に選出されたメキシコ生まれのエミル・アヨー (Emile Aillaud, 1902-1988)³⁶²のほか、1921-1922 年度から 1924-1925 年度の年次設計競技図集³⁶³に登場する 3 名のフランス人、アルフレッド・ポルトヌーヴ (Alfred Porteneuve, 1896-?), ルネ・マルゾー (René Marouzeau, 1898-?), ガストン・スネ (Gaston Sené, 1902-) らが、また、同図集に登場する 1922 年入学の人物では、フランス人のピエール・フォレストイエ (Pierre Forestier, 1902-1989)³⁶⁴やキューバ出身ホセ・マリア・ベン・アラルテ (Jose Maria Bens Arrarte, 1893-?)³⁶⁵が、さらに、中村順平の入学以前の入学者で、同図集に登場する 3 名のフランス人、ジョルジュ・ゲイ (Georges Gay, 1894-?), ジョルジュ・ペレーヴ (Georges Perreuve, 1888-?), イヴ・ランドン・ド・グローリエ (Yves Randon de Grolier, 1901-?), ジョルジュ・ギアー (Georges Guiard, 1899-?) らが挙げられる。



図 2.2.1 中村順平の在籍期間中のアトリエ・グロモール＝エクスペールのアトリエ内部の写真
(出典：Site henri-sajous de Marie Christine Sajous Clause (<http://www.sajous-henri.com/Biographie%20fr.html>))

2.5 中村順平の入学までの流れ

アトリエ・グロモール＝エクスペールに入門した中村順平は、その直後、エコール・デ・ボザールの入学試験の準備に取り掛かった。ここでは、中村順平の入学までの流れを整理する。

エコール・デ・ボザールの入学試験は前述のように例年2回行われた。中村順平の留学期は、同年2月から3月および、同年6月から7月にかけての2回、入学試験が行われた。当初、中村順平は春入学をめざし同年2月下旬から順次に行われる入学試験準備に取り掛かった。しかし、大使館に作成依頼した出生証明書に代わる書類の不備により、願書が提出できず、結果的に中村順平は同年6月から行われる入学試験を受けた。

同年6月の入学試験に向け、まず、中村順平は、大使館に出生証明書に代わる書類の作成を依頼し、同年5月17日付けの大使館からの書類を受領した。中村順平はその書類とともに同年6月4日付けで入学願書を提出し、同月13日から行なわれる試験に臨んだ。

中村順平は、建築セクションの入学試験課題を、「芸術面」と「学課面」の2種に大別した。前者の科目として「建築構成」Composition d'architecture, 「石膏写生」Dessin, 「塑像」Modelageの3科目が、後者の科目として「数学」Calcul, 「幾何図学」Géométrie descriptive, 「歴史」Histoire généraleが課された。これらのうち、最も重視された科目が、全試験期間中の冒頭に行われた「建築構成」であった。この課題は、志願者全員に課された12時間の実技で、ここで合格点を得ることで、次に続く「石膏写生」、「塑像」、「数学」、「幾何図学」、「歴史」の受験が可能となった。なお、志願者をいくつかのグループに分けて試験が行なったため、必ずしも志願者全員が同日の試験を受けたわけではなく、志願者ごとに日程が組まれた。中村順平は、1921年の次の日程で試験に挑んだ³⁶⁶。

表 2.2.4 中村順平の入学試験科目および日程表

	試験科目	試験方法	試験時間	試験日程	備考
芸術面	①建築構成	実技	12時間	6月13日	
	②塑像	実技	8時間	6月20日	石膏薄肉モデルによる塑像:石膏の薄肉オーナメントの塑像
	③木炭写生	実技	8時間	6月22日	石膏の木炭写生:頭部またはオーナメントの石膏の木炭写生
学課面	④数学	筆記試験	2時間	6月27日	“Loge”と呼ばれる製図室において行われる試験。例年、対数計算が含まれている。
	⑤歴史	筆記試験	2時間	6月27日	
	⑥幾何図学	実技	2時間	6月28日	大講義室において行われる建物投影図の試験
	⑦数学	口述試験	—	7月6日	
	⑧歴史	口述試験	—	7月8日	

「建築構成」の試験結果により、約190名がその後の試験に挑んだ。中村順平は、「建築構成」で13点(20点満点)、塑像で10点(15点満点)、木炭写生で15点(20点満点)であった³⁶⁷。

入学試験の採点方法は、「建築構成」の得点×15(係数) + 「塑像」の得点×5(係数) + 「木炭写生」の得点×10(係数)が芸術面の得点となるのだが、こうした係数を見ても「建築構成」が特に重視されていたことがわかる。中村順平の場合、「芸術面」の総得点が460点で、全受験者中1位の成績であったが、この得点に「学課面」の得点を加え、中村順平は全受験者中2位の成績でエコール・デ・ボザールへの入学許可を得た。それは1921年7月15日のことであった。なお、中村順平のエコール・デ・ボザールの登録番号Matricule de l'Ecole des Beaux-Artsは、7651番であった³⁶⁸。

2.6 建築セクションの教育者

中村順平在籍時の建築セクションにおける専門科目およびその担当教官は、表2.2.5の通りである。

表 2.2.5 建築セクション教員リスト：1921-1922 年度

	講義名 ³⁶⁹	担当教官	在職期間
1・2級課程	建築理論 Théorie de l'architecture	ヴィクトール・ブラヴェット ³⁷⁰ ：建築家 (Victor-Auguste Blavette, 1850-1933)	1908-1927
	装飾画 Dessin ornemental	エクトール・デスプイ ³⁷¹ ：建築家 (Marie Désiré Hector Jean-Baptiste d'Espouy, 1854-1929)	1895-1926
1級課程	建築史 ³⁷² Histoire générale de l'architecture	レオン・ジョスリー ³⁷³ ：建築家 (Léon Jaussely, 1871-1942)	1917-1924
	建築法規 Législation du bâtiment	エルネスト・カサナド：弁護士 (Ernest Marie Jean Cassagnade, 1856-1924)	1904-1924
	物理・化学・地質学 ³⁷⁴ Physique, Chimie et géologie	ウジェーヌ・ブロシュ：物理学者 (Eugène Bloch, 1878-1944)	1920-1941
	構造 ³⁷⁵ Construction	エドワー・アルノー：建築家・技術者 (Edouard Arnaud, 1864-1943)	1920-1934
2級課程	透視図学 Perspective	ポール・ガデ ³⁷⁶ ：建築家 (Paul Guadet, 1873-1931)	1914-1931
	截石学 ³⁷⁷ Stéréotomie	ラウル・ブランドン ³⁷⁸ ：建築家 (Jacques Ernest Raoul Brandon, 1878-1941)	1917-1939
	幾何図学 Géométrie descriptive	エリー・カルタン：数学者 (Elie Cartan, 1869-1951)	1917-1931
	構造力学 ³⁷⁹ ・材料力学理論 Statique et théorie de résistance des matériaux	ポール・モンテル：数学者 (Paul Montel, 1876-1975)	1913-1938
	フランス建築史 ³⁸⁰ Histoire de l'architecture française	ポール・ベスヴィルワルト ³⁸¹ ：建築家 (Paul-Louis Boeswillwald, 1844-1931)	1892-1928

中村順平の留学期の教育者の顔ぶれを見ると、「構造力学・材料力学理論」、「幾何図学」、「物理・化学・地質学」、「建築法規」を除く科目は、エコール・デ・ボザール出身者がその教育にあたった。また、「建築理論」、「装飾画」、「建築法規」、「フランス建築史」の4科目については、第1次世界大戦以前から担当した教育者であったのに対し、その他の科目の教育者は概ね第1次世界大戦後から担当した。なお、ラウル・ブランドンは、「截石学」科目の担当以前、「幾何図学」を担当していた。中村順平の留学期の教育者は、多くが建築家で、その他、数学者、物理学者、弁護士であったが、エドワー・アルノーのように、建築家で技術者であった人物の存在も特徴的である。

前述のように、エコール・デ・ボザールでは、2級課程から1級課程への進級、および、卒業制作着手要件となる必要単位数が定められた。専門科目での単位取得は、設計競技課題や実技試験での成績に左右された。講義への出席などは付随的なもので、学生たちにとっては、「建築理論」科目の教育者が作成する設計競技課題での単位取得が重要な位置を占めていた。なお、通常、講義も行なわれたとされる「建築理論」科目だが、中村順平の留学期については、講義は行なわれず、ヴィクトール・ブラヴェットは、設計競技課題の作成者に徹した。なお、次項「2.7」では、1級・2級の両課程で単位取得に最も影響したこの科目の重要性を考慮し、この科目の略史を整理する。

また、2級課程から1級課程への進級に影響した科目として「構造」科目がある。中村順平の留学期、この科目の最終試験への挑戦には、事前に他の科目での必要単位の取得が求められた。こうした点を考慮し、次々節「2.8」において、この科目の略史を整理する。

2.7 「建築理論」科目略史

前述のように、「建築理論」科目の教育者は、学生達に建築理論を教授するだけではなく、学内で行なわれる1級・2級の両課程の設計競技課題の課題作成者としての役割が求められた。ここでは、「建築理論」科目の成立からエコール・デ・ボザール解体期に至るまでの歴史的な流れを概括する。

ジュリアン・ガデやジョルジュ・グロモールが担当した「建築理論」科目はエコール・デ・ボザールの建築教育で最も歴史のある講義科目のひとつで、最も重要なポストであり、建築セクションの最も権威のある地位として認識された。また、たとえ、アトリエのパトロンであったとしても、そのパトロンとしての座を降り、「建築理論」科目に専念することが教育者に求められた。そのため、例えば、ジュリアン・ガデは、「建築理論」科目の教育者となった1894年以降、アトリエ・オフィシエルのパトロンを辞し、「建築理論」科目の教育に専念した。

この「建築理論」科目の起源は、エコール・デ・ボザールの前身である建築王立アカデミー附属の建築学校における「建築」Architecture科目にある。この科目は、ジュリアン＝ダヴィッド・ル・ロワ（Julien-David Le Roy, 1724-1803）によって1774年から開始された。その後、1793年の王立建築アカデミーの廃止以降においても、ジュリアン＝ダヴィッド・ル・ロワが「国立建築学校」としてその教育を守り続け、「建築」科目は引き継がれた。1803年より「建築」科目は、レオン・デュフルニー（Léon Dufourny, 1754-1818）に引き継がれ、エコール・デ・ボザールへと改称される1818年まで担当した。そして、レオン・デュフルニーの後任であるルイ＝ピエール・バルタール（Louis-Pierre Baltard, 1764-1846）が、この科目の教育者となって以降、この科目の担当者がエコール・デ・ボザールの設計競技課題の出題者となり、同校の「建築理論」科目の伝統の礎が築かれた。

その後、ルイ＝ピエール・バルタールの後任として、1846年よりアベル・ブルエ（Guillaume Abel Blouet, 1795-1853）がこの科目を担当し、1853年よりジャン＝バティスト・ルスユー（Cicéron Jean-Baptiste Lesueur, 1794-1883）へ引き継がれた。なお、ジャン＝バティスト・ルスユーは『建築史・理論』³⁸²（1879）を著したが、この書物から、「建築理論」科目の担当者が、建築の理論、構造、構法、歴史などを総合的に教授したことが読み取れる。

しかし、この科目の伝統は、1863年のエコール・デ・ボザールの大改革によって一時期途絶えた。その理由は、「建築理論」科目の廃止と「芸術史・美学」Histoire de l'art et esthétique科目の新規開設がこの大改革の目的に含まれたためである。なお、ここで新設された「芸術史・美学」科目の初代担当教員は、ヴィオレ＝ル＝デュク（在任期間：1863-1864）が務め、2代目担当教員はイポリット・テーヌ（Hippolyte Adolphe Taine, 1828-1893, 在任期間：1864-1874）が務めた。なお、イポリット・テーヌの退任にともない同名の講座は、建築セクションの専門科目から姿を消したが、この科目は「建築理論」科目不在期に建築理論を授けた科目であったといえる。この「芸術史・美学」科目は約10年間続いたが、1873年より再び「建築理論」科目が復活し、ジャン＝バティスト・ルスユーが再びそのポストについた。なお、「建築理論」科目不在期も、ジャン＝バティスト・ルスユーが学内での設計競技課題の出題者を務めた。その後、ジャン＝バティスト・ルスユーの死去により、1884年にエドモン・ギョーム（Edmond Jean Baptiste Guillaume, 1826-1894）が後任となる。しかし、エドモン・ギョームの急逝により、1894年にジュリアン・ガデがこの科目の教育者となった。

ところで、「建築理論」科目の伝統となった設計競技課題を考案する上で貢献したのは、この科目の初期の2人の教育者、ルイ＝ピエール・バルタールとアベル・ブルエのみであった。その後のジャン＝バティスト・ルスューおよびエドモン・ギョームの時代は、ルイ＝ピエール・バルタールとアベル・ブルエが考案した「既にでき上がっていたテーマ群の中から好んで課題を用いていた」³⁸³ことが知られている。こうした点に問題意識をもって改革に臨んだ人物が、ジュリアン・ガデであった。こうしたことを考慮すれば、ジュリアン・ガデのエコール・デ・ボザールの建築教育における功績は、『建築の諸要素と理論』を残したことだけではなく、こうした過去の課題を焼き直すのではなく、「世の中の流れを考慮してテーマの内容を一新」³⁸⁴したことにもあった。まさに、ジュリアン・ガデは「建築理論」科目の改革者であった。しかし、こうした改革を行なったジュリアン・ガデは1908年に死去し、その後、ヴィクトール・ブラヴェットに引き継がれた。中村順平の留学中は、この科目をヴィクトール・ブラヴェットが担当したが、講義は休講で、設計競技課題のみを作成した³⁸⁵。なお、ヴィクトール・ブラヴェットの講義は1927年に退任するまで休講であった³⁸⁶。そして、ヴィクトール・ブラヴェットの後任として、ルイ・マドリヌ（Marie Joseph Eugène Louis Madeline, 1882-1962）が就任し、さらにその後任には、中村順平の留学期間中所属したアトリエのパトロン、ジョルジュ・グロモールが就任し、1937年から1940年までこの科目を担当した。

第2次世界大戦期には教育者の入れ替わりが多く、ジョルジュ・グロモールからポール・トゥルノン（Paul Tournon, 1881-1964）へ、その後、ミシェル・ルー＝スピッツ（Michel Roux-Spitz, 1888-1957）へ引き継がれ、1944年より再びルイ・マドリヌが「建築理論」科目の担当となった。1949年にアンドレ・ギュトン（André Gutton, 1904-2002）に引き継がれ、1957年にはルイ・オブレ（Louis Aublet, 1901-1980）が担当し、エコール・デ・ボザール解体の直前期にあたる1965年よりジャン・フェイエトン（Jean Fayeton, 1908-1968）が「建築理論」科目を担当した。

以上から、歴代の教育者リスト（表2.2.6）を作成した。

表2.2.6 エコール・デ・ボザール「建築理論」科目と「芸術史・美学」科目の教育者たち

年	「建築理論」科目	「芸術史・美学」科目
1774	ジュリアン＝ダヴィッド・ル・ロワ	
1803	レオン・デュフルニー	
1818	ルイ＝ピエール・バルタール	
1846	アベル・ブルエ	
1853	ジャン＝バティスト・ルスュー	
1863		ヴィオレ＝ル＝デュク
1864		イポリット・テーヌ
1873	ジャン＝バティスト・ルスュー	
1884	エドモン・ギョーム	
1894	ジュリアン・ガデ	
1908	ヴィクトール・ブラヴェット	
1927	ルイ・マドリヌ	
1937	ジョルジュ・グロモール	
1940	ポール・トゥルノン	
1942	ミシェル・ルー＝スピッツ	
1944	ルイ・マドリヌ	
1949	アンドレ・ギュトン	
1957	ルイ・オブレ	
1965	ジャン・フェイエトン	

2.8 「構造」科目略史

2.6 で述べたように、中村順平の留学期には、「構造」科目の最終課題受験のため、事前に「截石学」、「幾何図学」、「構造力学・材料力学理論」の3科目の必要単位取得が求められており、「構造」科目は2級課程から1級課程へ進級する際の重要な科目であったと考えられる。ここでは、「構造」科目の歴史的な流れを概括する。

エコール・デ・ボザールが誕生した1819年以前の前身校では、「構造」という名称の科目は存在なかった。教育の新制度が導入された1819年に、エコール・デ・ボザールへと学校名が改称されたが、そのとき「構造」科目という名の科目が誕生した。「構造」科目の初代の教育者は、前身校で行なわれた「截石学」科目の教育者が担当した。つまり、この科目は「截石学」科目の名称が変更されたに過ぎない。

その後、「構造」科目は、1863年のエコール・デ・ボザールの教育を管轄する組織がアカデミーから国へ移管された大改革の際、「管理と会計・構造と現場での応用」Administration et comptabilité, construction et application sur les chantier へと改称された。この講義名が物語るように、設計過程における実施設計から現場監理において必要とされる知識を授けることが標榜され、土居義岳が指摘するように、「現代の建築は現代の技術や方法で建設されねばならないという理念」³⁸⁷が現れている。

しかし、1863年の大改革によって混乱したエコール・デ・ボザールの教育が、一定の落ち着きを取り戻した1874年に、この科目は再度「構造」へと改称され、それ以降、確認できる範囲では1968年のエコール・デ・ボザール解体前まで「構造」という名称でこの科目が存在し続けた。このように、「截石学」科目から連続する「構造」科目は、エコール・デ・ボザールの建築専門科目において、永い歴史を有する科目のひとつであった。歴史の長さが物語るように、エコール・デ・ボザールの教育では重要な科目のひとつと目され、「構造」担当教官は、「建築理論」担当教官について2番目に重要なポストと考えられた³⁸⁸。

ところで、そもそも「構造」とは一体何をさしたのか。この語の理解には、「構造」という語を重視したフランスを代表する近代建築家、オーギュスト・ペレ (Auguste Perret, 1874-1954) の解釈が参考になる。

オーギュスト・ペレが用いる「構造」という語は「何らかの構築物をつくること、組み立てること、建て設けること、あるいはそのようにしてつくられ、組み立てられた構築物」³⁸⁹を意味した。20世紀初頭のエコール・デ・ボザールの建築教育においては「建築の図面が一個の独立した作品であり、図面を描くためだけに何ヶ月もの多大な日月が投じられ、それが実際に建てられるか否かということはほとんど問題」³⁹⁰ではなく、「実際に建て上げる技術よりも、図面を巧みに描く技術が競って学ばれていた」³⁹¹当時のエコール・デ・ボザールへの教育への問題提起として、オーギュスト・ペレがこの語を用いたと考えられる。

これは、当時の建設業界における鉄やコンクリートの出現による現実の「構造」教育に対する疑問が立脚点にあるのだろう。鉄やコンクリートが構造材として使用される以前の建物の構造は、主に石や木によって構成された。そのため、例えば、石造の建物であれば「壁を意味する平面状の黒い線にそって石を積みあげさえすればよく」³⁹²構造技術上の問題はそれほど大きな話題とはならなかった。

エコール・デ・ボザールの「構造」科目の発生の歴史を振り返ると、石造や木造の時代に発展した「截石学」科目が、新材料を発見し、その新材料にふさわしい図面化への道のりの末、「構造」科目へと進化した可能性がある。その前兆として、それまで単に「黒い線」を描いていただけに過ぎなかった図面に対して構築可能性や構築実現性への問いがたてられ、より正確な図面化の必要から、新しい「截石学」科目のあり方が模索された。それは、「構造」科目の初代教育者であるジャン＝バティスト・ロンドゥレ (Jean-Baptiste Rondelet, 1743-1829) が、前身校での「截石学」科目ではじめて「構造」と名づけた石造と木造の架構を描かせた 1812 年の課題に見出せる。

ジャン＝バティスト・ロンドゥレが考案したこうした主題は、その後、何度もエコール・デ・ボザールの「構造」設計課題として登場した。さらに、ジャン＝バティスト・ロンドゥレからその担当を引き継いだアドフル・フランソワ・マリー・ジェイ (Adolphe François Marie Jaÿ, 1789-1871) の時代の「構造」設計課題では、接合部や都市インフラなどのディテールまでその課題の射程が拡大した。しかし、課題の範囲が拡張したことで、「構造」科目のそもそもの問題意識であった構築可能性や構築実現性についての課題の出題率が低下していった。1863 年以前の「構造」科目では、ジャン＝バティスト・ロンドゥレが確立した石、木による構築術の描画に加え、アドフル・フランソワ・マリー・ジェイの時代における鉄の構築術の 3 つの構造的なカテゴリーが設定され、「構造」設計課題の伝統が確立され、同時に、「構造」の歴史を語る講義スタイルが確立した。こうして、エコール・デ・ボザールの「構造」科目の伝統が確立された³⁹³。

一方、こうした「構造」科目の伝統に批判の矛先を向けた人物が、ヴィオレ＝ル＝デュクである。ヴィオレ＝ル＝デュクは「構造はひとつの科学である。またそれは芸術でもある」³⁹⁴と同時に、「構造は手段であり、建築はその結果である」³⁹⁵と述べ、1863 年のエコール・デ・ボザール大改革を先導し、エコール・デ・ボザールの教員陣の一新を図った。この一新案に「構造」科目も含まれた。

この大改革の際、「構造」科目は「管理と会計・構造と現場での応用」科目へと改称され、その教育者にはヴィオレ＝ル＝デュクは自身の弟子であるウジェーヌ・ミレ (Eugène Louis Millet, 1819-1879) が就任した。しかし、学生たちの抗議活動によるヴィオレ＝ル＝デュクの早々の退陣により、結果的にはウジェーヌ・ミレの講義も長くは続いていない。

その後、エコール・ポリテクニク的な技術教育の導入が図られたこの大改革を象徴するように、技術官僚を養成する学校のひとつ、国立土木学校出身の技術者エルフェージュ・ボード (Pierre Jacques Alphonse Elphège Baude, 1826-1871) がこの科目の教育者に就任した。エルフェージュ・ボードは、エコール・デ・ボザールのみならず、母校の国立土木学校でも教鞭をとる教育者で、「構造」科目の後継教官の多くがこうした芸術学校と技術学校を横断的な教育者であったのだが、その先駆的役割を果たした。

しかし、1871 年のパリ・コミューンの際、エルフェージュ・ボードはその犠牲となったが、パリ・コミューン期はエコール・デ・ボザールの教育は混沌の一途を辿ったが、1873 年ごろには安定を取り戻した。なお、エルフェージュ・ボードの後を継いだのは、エマニュエル・ブリュヌ (Emmanuel-Jules Brune, 1836-1886) で、エコール・ポリテクニク出身の技術者であると同時に、1863 年に国家的建築家への登竜門とされたローマ大賞 Grand Prix de Rome を受賞した建築家でもあった。

エマニュエル・ブリュヌは、1871 年より 1886 年までの間、「構造」科目の教官として教鞭をとる

かたわら、エコール・ポリテクニクでは1876年から1881まで製図の実習助手 *Répétiteur* を務めた³⁹⁶。建築家であり技術者でもあったエマニュエル・ブリュヌは、かねてから数学研究にのめりこんでいたとされ、エコール・デ・ボザールでの講義録として発刊された材料力学に関する計算式などが多数掲載された『構造講義』*Cours de Construction*³⁹⁷からも、この講義において数学的要素が重視された傾向が読み取れる。

さらに、エマニュエル・ブリュヌの後任の教育者であるポール・モンデュイ (Paul Louis Monduit, 1850-1927) もまた、その講義での数学重視の傾向を継承した³⁹⁸。なお、ポール・モンデュイが退官する1919年に至るまで鉄筋コンクリートなど当時の新しい構造方式に対して関心を示した課題や、それらの構築可能性を問う課題は希薄であった。つまり、この時期まで、エコール・デ・ボザールの「構造」科目では、ヴィオレ＝ル＝デュクが意図したその時代の技術や建設方法の習得を目的とした教育は確立されなかったといえる。

こうした中、構築実現性について考えた建築家で理論家が出現した。それがジュリアン・ガデである。ジュリアン・ガデは、1894年からエコール・デ・ボザールの教育の中核ともいえるべき「建築理論」科目の担当者となり、前述のように「建築理論」科目の改革を行なった。アカデミーの権化ともいえるジュリアン・ガデもまた、ヴィオレ＝ル＝デュクと同じように「建てる (筆者註: *Construire*)」ことは建築家の目的であると同時に手段でもある³⁹⁹と述べ、「構造」*Construction* の重要性を説いた。

「構造」論的な流れでは、前述の「構造」科目の初代教員、ジャン・バティスト・ロンドゥレの構造的古典主義の建築論が嚆矢となり、19世紀末の国立土木学校出身の技術者で、同校の教育者でもあるオーギュスト・ショワジエの『建築史』*Histoire de l'architecture* によって頂点に達したといわれている⁴⁰⁰。オーギュスト・ショワジエが考える建築の本質は構築であり、様式の変貌などはすべて技術的発達の論理的帰結であった。こうした構造的合理主義者としてのオーギュスト・ショワジエと同時代に、ジュリアン・ガデは伝統的な有軸性構成にできるだけ従いながら、構造物を現代的要素による構成を基準とする考え方の確立をめざした。なお、「建築理論」科目を担当したアベル・ブレはジャン＝バティスト・ロンドゥレの著書の追補版⁴⁰¹をまとめた人物であり、ジュリアン・ガデ以前の教育者においても「構造」理論を意識した傾向が読み取れる。

こうした要素主義的な構成の原理が20世紀の先駆的建築家たちに引き継がれたのは「ジュリアン・ガデの教育の賜物である」といわれている⁴⁰²。ジュリアン・ガデのこうした視点は、『建築の諸要素と理論』の冒頭に記され、エコール・デ・ボザールの「構造」科目の開祖であるジャン＝バティスト・ロンドゥレや、エコール・ポリテクニクなどで建築教育を発展させたレオンス・レイノーの賛辞などからも読み取れる。つまり、ジュリアン・ガデの『建築の諸要素と理論』が長年読み続けられた背景には、それまでの「古典主義」的な建築理論とは異なり、技術的・構築的な視点が盛り込まれた点にある。

そして、ポール・モンデュイの後任のエドワー・アルノーが、このジュリアン・ガデの教育によって醸成された「現代的要素による構成」の構築手法の教育を「構造」科目において発展させたとみられ、中村順平の留学期は、このエドワー・アルノーが担当した時期にあたる。エドワー・アルノーの改革は、自身が担当する以前の「構造」科目において鉄やコンクリートの建築の「構造」手法を学ばせたことだけでなく、新しく建築に設置される要素としての設備機器への問いをたて、建築に取り込

まれる設備デザインの学問的発展を図った点にもある。この教育は中村順平留学期以後に確立されたのだが、エドワー・アルノーは積極的に自身の講義に建築設備に造詣の深い人材などを講師として招き入れ、「構造」科目の新たな潮流をつくりあげた。

エドワー・アルノーは、エコール・サントラル出身の技術者で母校の教育者でもあるマルセル・ヴェロン (Marcel Veron, 1900-1984)⁴⁰³に空調や暖房などの設備機器の設置に関する講義を、エドワー・アルノーとともにエコール・サントラルで教鞭を執ったフェリックス・マーブタン (Felix Marboutin, 1864-1941) に住居における衛生学の講義を依頼し、実践した。

こうした外部からの講師の登用は設備分野のみならず、建設に関わる実践理論を補完する形でも行なわれた。1931年にはエドワー・アルノーの後任として「構造」講義を担当することになるフランソワ・ヴィタル (François Vitale, 1898-1962) や、フランス国立工芸院やエコール・サントラルで教鞭を執ったレイモン・ギヨム (Raymond Guillaume, 1882-1946 ?) を招聘し、実践論や技術論の講義を補完した⁴⁰⁴。

エドワー・アルノーの後任の教育者であるフランソワ・ヴィタルは、エコール・サントラル終了後の1921年に中村順平と同じ入学試験を受け⁴⁰⁵、中村順平とほぼ同時期のエコール・デ・ボザールの教育を受けた。フランソワ・ヴィタルは、1927年にエコール・デ・ボザールを修了した技術者であり建築家で、その経歴はエドワー・アルノーに通じる。またフランソワ・ヴィタルは、エコール・デ・ボザール在籍中の1923年よりエコール・サントラルの講師を務め、1925年には私立建築学校にて「鉄筋コンクリート・現場講義」Cours de béton armé et de chantier 科目の担当となり、1961年までその職にあった。フランソワ・ヴィタルのエコール・デ・ボザールでの講義は、1934年から1961年まで行なわれ、エドワー・アルノーの講義を踏襲、発展させた。なお、1951年ごろからはルネ＝アンドレ・クロン (René-André Coulon, 1908-1997) とともに「構造」科目は運営された。

また、フランソワ・ヴィタルの後任であるジャン・フェイエトン (Jean-Louis Fayeton, 1908-1968) は、1968年のエコール・デ・ボザール解体直前まで「構造」科目を担当した。ジャン＝ルイ・フェイエトンもまた、エドワー・アルノーやフランソワ・ヴィタルと同様にエコール・サントラルとエコール・デ・ボザールを卒業した技術者であり建築家で、さらにエコール・サントラルでの教育経験を有する人物であった。なお、ジャン・フェイエトンは、「1962年2月16日のデクレ (Décret du 16 février)」の発令によるエコール・デ・ボザール解体へ向けた動きの中で、1965年より、エコール・デ・ボザールの建築部門全体を統括する新たなポストである建築教育ディレクター Directeur d'études d'architecture に任命され、時の文化大臣アンドレ・マルロー (André Malraux, 1901-1976) とともにエコール・デ・ボザール以後の建築教育機関への移行に向けた取り組みを行なった。このとき、ジャン・フェイエトンは、「構造」科目のみならず、最重要科目であった「建築理論」科目も引き受けた。

また、エコール・デ・ボザール解体直前、時の文化省大臣、アンドレ・マルローとともに建築教育改革に臨んだ教育者、ジャン・フェイエトン (Jean Fayeton, 1908-1968)

このように「構造」科目の歴史を紐解いて見ると、エコール・デ・ボザールでの教育が開始される1819年から解体を迎える1968年に至る過程で、大きく3つの期に分けることができるだろう。

第1期は、ジャン＝バティスト・ロンドウレが、エコール・ロワイヤル・エ・スペシアル・デ・ボザール時代に開始した「截石学」科目からの流れを汲んだ「構造」教育の黎明期で、構造合理主義建

築理論の嚆矢とされるジャン＝バティスト・ロンドウレの理論書に掲載された図版などが用いられ「構造」教育がなされ、アドフル・フランソワ・マリー・ジェイがその教育を発展的に継承した。この科目の担当者は、王立建築アカデミー附属学校出身者とエコール・デ・ボザール出身の建築家であった。

第2期は、エコール・デ・ボザールの教育改革が行われた1863年から第一次世界大戦が終わる1919年までの時期で、この期において初めてエコール・デ・ボザールの教育に技術官僚や技術者養成学校出身者が登用されるなど、建築家だけでなく、技術者による教育が行われた。

技術者による教育により、この科目は構造的な側面が強調され、数学的な要素の強い分野となった。この傾向は、日本における本格的な建築教育がジョサイア・コンドルによって開始された講義のひとつ“Architecture and Building Construction”との関連も見出せる。この科目は、辰野金吾が「建築材料家屋構造及ヒ構造計算法」と講義名を改めたものと考えられ、ある意味でこの科目とエコール・デ・ボザールの「構造」科目の性質上の類似性が確認できる⁴⁰⁶。また、「構造」科目において建築構法的な側面が強化されたのは、次の時期のことである。

第3期を牽引したのがエドワー・アルノーであり、エドワー・アルノーがエコール・デ・ボザールで行なった「構造」科目はエコール・デ・ボザールの歴史においても特筆すべき改革が行なわれた。中村順平はこの教育改革期に立ち会った。

第3期は、エドワー・アルノーと同様の教育を受けた人物が担当した時期で、エコール・サントラルとエコール・デ・ボザール双方で教育を受けた人物が担当した。ある意味では、エコール・デ・ボザールにエコール・サントラルの建築技術教育が導入された時期であり、第3期を通じてそれが定着した。また、一方でこうした定着に対する違和感が1863年の教育改革同様に、1968年の解体を牽引した可能性がある。エドワー・アルノーによって行なわれた建築教育は、フランスにおいて1919年に職業教育制度を導入するアスティエ法 Loi Astier (1919年7月19日) 制定後の教育で、エコール・サントラルの民間技師を養成する高等工学教育とエコール・デ・ボザールの建築家を養成する芸術教育の折衷的な教育であった。より実践的な教育を目指し、改革された歴史をもつエコール・デ・ボザールの「構造」科目はこうした意味において、エコール・デ・ボザール史上、重要な科目といえる。

表 2.2.7 エコール・デ・ボザール「構造」科目の教員たち

在任期間		担当教官氏名	備考
1	1819-1824	ジャン＝バティスト・ロンドウレ	1806年からエコール・ロワイヤル・デ・ボザールの「截石学」科目教官。構造合理主義建築理論の嚆矢。
2	1824-1863	アドフル・フランソワ・マリー・ジェイ	1863年のエコール・デ・ボザールの大改革で退任。エドワー・アルノー以前の設計教育モデルの形成。
3	1863-1865	ウジェーヌ・ミレ	ヴィオレ＝ル＝デュクの弟子
4	1865-1871	エルフェージュ・ボード	1871年のパリ・コミューンの犠牲
5	1871-1886	エマニュエル・ブリュヌ	初めての建築家・技術者教員
6	1886-1919	ポール・モンデュイ	数学教育の強化
7	1920-1934	エドワー・アルノー	エコール・サントラルの教育の導入
8	1934-1961	フランソワ・ヴィタル	エコール・サントラル出身。エドワー・アルノーの教育の発展
9	1962-1968	ジャン・フェイエトン	エドワー・アルノー以降エコール・サントラル出身者により発展

2.9 建築セクションの各種課題—中村順平の提出課題を中心として—

序論の「既往研究の成果と課題」で指摘したように、中村順平のエコール・デ・ボザール時代についての論考の多くは、網戸武夫の『情念の幾何学』を基盤として記述されてきたといえる。例えば、近年の発刊された大阪歴史博物館編『館蔵資料集 5 建築家・中村順平資料』などにおいても、『情念の幾何学』が参照され、エコール・デ・ボザール時代の作品群が解説されている。

『情念の幾何学』では、中村順平の経験した2級課程に至るまでのプロセス、2級課程の課題やその内容の大枠に関する情報がある程度整理されている一方で、2級課程修了以降の1級課程の課題内容の詳細についての記述は極めて少ない。これは、中村順平のエコール・デ・ボザール期の情報の多くが中村順平自身の留学中の日記によっており、中村順平のパリ日記の最終日とされる1921年12月28日以降の記述に困難さをもたらした結果と推測できる。

このように、2級課程の精確な進級プロセスおよび1級課程の動向は、中村順平のエコール・デ・ボザール時代の未整理分野といえ、この部分を含め『情念の幾何学』の再検証が必要だろう。これまで、他の中村順平研究においても、特に1級課程に関する具体的な情報の更新が進んでおらず、管見の限り、中村順平が卒業制作提出資格を得るために必要な単位数を、入学後の2級課程や1級課程のどの設計課題を通じて獲得したかについて具体的に論じたものは少ない。

一方、既往研究には、中村順平のエコール・デ・ボザール留学期の提出作品に関する情報を報告した中島久男の研究「日本におけるエコール・デ・ボザール教育の導入について」がある。この研究によれば、1924年8月13日から19日までの期間、東京市実業之友社で開催された「中村順平君佛国美術院に於ける及佛国サロン出品製作展覧会」（名古屋工業会主催）において、中村順平がパリ留学から持ち帰った作品13点が展示され、その展示品から少なくとも表2.2.8に掲げる課題に中村順平は取組んだと考えられる。なお、表中の表記は中島久男論文のものを採用した。

なお、この中島久男の研究では留学期の作品群は明されているが、展示された提出課題がエコール・デ・ボザールの建築教育における1級・2級のいずれの課程の課題かなどに関する具体的な言及はなされていない。

表 2.2.8 中村順平の提出課題（1921-1923）

課題種別	課題名
1. 本設計競技	体育館
2. 略設計競技	バスチード
3. アルケオロジー競技	ローマネスク住家の正面
4. アナリチック競技	城館の一角
5. アナリチック競技	廻り階段
6. 本設計競技	装飾美術学校
7. 本設計競技	高等電気学校（キャンベル賞）
8. 設計競技	万国現代装飾美術及び工業会正面鉄扉（ルージュバン賞）
9. 配景図試験競技	鐘楼三つ
10. ステレオトミー試験競技の一部	石造廻り階段の実測
11. 本設計競技	下院議場内部
12. 本設計競技	パノラマ
13. 卒業製作課題	大学街日本館

ここでは、以上の問題意識から、中村順平の展示作品が1級・2級課程のどちらの課題であり、中村順平が前表の課題を留学期のいつ段階で取り組み、また、どのようなプロセスを経て卒業制作提出資格の取得に至ったのか整理する。なお、この作業にあたって、主にエコール・デ・ボザールの動向が定期的に掲載されたフランスの建築系雑誌“*La construction moderne*”⁴⁰⁷、および、1921-1922年度および1922-1923年度のエコール・デ・ボザールの年次設計競技図集⁴⁰⁸、さらに、フランス国立美術史研究所 *Institut national d'histoire de l'art* (INHA) が編纂した『エコール・デ・ボザール建築学生事典 (1800-1968)』⁴⁰⁹に掲載されたフランスの国立アーカイヴ *Archive Nationale* 所蔵の中村順平の当時の成績表等の資料、以上3つの資料から解明した。

2.9.1 各課程の所要単位

まず、検証作業を始めるにあたり、エコール・デ・ボザールの上下2級の設計課題の種別及びその設計課題によって得られる具体的な単位数、ならびに、進級に必要な単位数を整理し、上下2級の所要単位要件表（表2.2.9）を作成した。

表 2.2.9 1級・2級課程の所要単位要件表

課程	課題名		年間 出題回数	最低所要 単位数	主な試験内容	備考（獲得可能単位数等）
2級課程	●設計演習課題 Concours d'émulation			計 6 単位	学内外：設計課題	選 1 席：2 単位，選 2 席：1 単位 (内，設計競技 2 単位以上)
	①	要素分析 Elément d'analytique	各 6 回	2 単位		
	②	エスキス競技 Esquisse		4 単位		
	③	設計競技 Projet rendu				
	●構造（含，構造設計）		1 回	2 単位	学内外：設計課題 学外：図帖 学内：口頭試問	賞または選以上 1 等：5 単位，2 等：4 単位， 3 等：3 単位，選：2 単位
	●透視図学		各 2 回	各 2 単位	学外：事前課題 学内：製図試験・口頭試問	3 等または選以上 3 等：3 単位，選：2 単位
	●載石学				学外：図帖・事前課題 学内：製図試験・口頭試問	
	●幾何図学				学外：図帖 学内：製図試験・口頭試問	
	●構造力学・材料力学理論				学内：製図試験・口頭試問	
	●フランス建築史		各 2 回	各 2 単位	学内：口頭試問	3 等または選以上 3 等：1.5 単位，選：1 単位
	●石膏木炭写生					
	●石膏塑像					
	●装飾画					
1級課程	●設計演習課題			計 10 単位	学内外：設計課題	1 等：3 単位，2 等 1 席：2 単位， 2 等 2 席：1.5 単位，選 1 席：1 単位， 選 2 席：0.5 単位 ①～③の単位のほか，卒業設計着手要件として，「ルー・ジュヴァン設計競技」Concours Rougevin，「ゴドブフ設計競技」Concours Godeboeuf，「ローマ大賞コンクール」Prix de Rome いずれかでの獲得単位が必要。
	①	設計競技	各 6 回			
	②	エスキス競技				
	③	建築史（歴史設計）	2 回			
	●その他実技科目				学内：実技	2 等：2 単位，3 等：1.5 単位， 選 1 席：1 単位，選 2 席：0.5 単位 1 等：3 単位，2 等：2 単位， 選：1 単位
	石膏木炭写生		各 2 回			
	石膏塑像					
	装飾構成競技					
	●その他科目				学内：口頭試問	3 等または選以上 3 等：1.5 単位，選：1 単位
	物理・化学・地質学					
	建築法規					
備考	単位：Valeur 1 等：Premier Médaille 2 等：Seconde Médaille 2 等 1 席：Première Seconde Médaille 2 等 2 席：Deuxième seconde médaille 3 等：Troisième médaille 選：Mention 選 1 席：Première Mention 選 2 席：Seconde Mention					

2.9.2 上下2級課程の概要と中村順平のプロセス

●2級課程の概要

2級課程では、設計演習課題、「石膏木炭写生」、「石膏塑像」などの実技と、各専門科目では筆記・製図試験が課され、特に、中村順平の留学時では、前述のように「構造」科目受験に際し、「截石学」、「幾何図学」、「構造力学・材料力学理論」の3科目の単位取得が要求されるなどの規定が存在した。

「截石学」科目は、エコール・デ・ボザールの教育史上、最も古い歴史を有する科目のひとつで、王立建築アカデミー附属学校時代から存在した。エコール・デ・ボザールとしての新体制の教育が開始された1819年に「構造」科目へ一時吸収されたが、同校の1863年の大改革後の1868年に再度独立し、同校の教育プログラムに盛り込まれた。中村順平の留学期には、この科目の最終製図試験の受験要件として、「截石学」科目の研究図帖、および、建物実測図の提出が事前に必要とされた。

次に、「幾何図学」科目は、1863年の大改革大改革の際、エコール・ポリテクニクでの主要科目で近代教育の象徴的な存在として君臨したこの科目がエコール・デ・ボザールに持ち込まれたことではじまった⁴¹⁰。なお、「幾何図学」科目や前述の「截石学」科目は、主に物体や建物の投影ならびに数学的素養、図面に施す陰影の描き方などを習得するものであった。

また、「構造」科目の最終試験に必要なもうひとつの科目、「構造力学・材料力学理論」科目は、ポール・モンテル着任以前の1874年から1913年までは「数学」*Mathématique*科目であった。この科目では、その歴史的な経緯もあり、「数学」科目の延長として、数学的素養を基礎に、力学的なメカニズムの習得が意図され、数学者によって構造力学や材料力学が講義された。

中村順平の留学期は、以上の3つの専門科目の単位を取得することで「構造」科目の設計演習課題に取り組むことが可能となった。「構造」科目の課題は、本論第3編・第3章で詳述するが、中村順平の留学期においては、2級課程の最終課題といえるものであった。なお、中村順平は、留学期間中に苦心した科目として「構造」科目と「透視図学」科目を挙げている⁴¹¹。なお、「透視図学」科目も「截石学」科目同様、1819年以前から存在した科目で、エコール・デ・ボザールでは重要な科目であった。

一方、設計演習課題は、3つの課題が存在し、それぞれ年間6回出題された。これらのうち、通常、最初に行う課題が「要素分析」課題であった。これは、入学試験の「建築構成」試験の延長に位置づけられた課題で、建築の構成要素の分析・研究課題で、この課題の主題は、例えば、入口や玄関、建物の一部などの局所的な研究であった。

「要素分析」の次の段階の課題として、「エスキス競技」と呼ばれた12時間の即日設計演習と、「設計競技」の2つが存在した。1級課程への進級には、専門科目での単位取得のほか、設計演習課題での所定の単位数の取得が求められた。特に、2級課程では、「設計競技」課題において2単位以上の取得が要求された。なお、設計演習課題は、前述のように通常、「建築理論」科目の教育者が作成した。

「設計競技」課題は、課題出題日に、まず、学内の製図室（*Loge*）において、12時間のエスキス設計を行ない、そこで提出したエスキスが認められることで、次の段階としての清書・着色等を行なう本仕上図面の作成に取り組むことが可能となった。エスキスは正副2枚作成し、1枚は学内に提出し、1枚をアトリエに持ち帰り、通常、パトロンなどからの指導を受け、最終提出図面を完成させるものであった。なお、その他に「フランス建築史」での単位取得が求められた。

●中村順平の2級課程

○専門科目

1921年9月6日に、中村順平は、「構造」科目試験の受験のため、事前に「構造力学・材料力学」、「幾何図学」、「截石学」での必要最低限の単位数の取得が必要であることを知った。

そこで、中村順平は、同年10月に行なわれる「幾何図学」、「截石学」の試験対策に臨んだ。これら2科目の製図試験の受験には、その受験前までに必要な図面や図帖を作成する必要がある。そのため、中村順平は「截石学」、「幾何図学」の両科目の研究図帖、および、「截石学」の学外での課題である実測図2枚を、同年9月から取り掛かった。なお、ここで作成した実測図の1枚が「石造廻り階段の実測」（表2.2.8「ステレオトミー試験競技の一部」）である。また、「截石学」の研究図帖作成の際、前出の同門生アンドレ・メサジエの図帖を参照した。さらに、中村順平は、「截石学」科目の最終製図試験に臨むため、「截石学」、「幾何図学」の参考書としてジュール＝ジャン・ピレの2つの書物を古本で購入した⁴¹²。

また、もうひとつの「構造」科目試験の受験に必要な科目「構造力学・材料力学」について、中村順平は、年度内第2回目に行なわれた1922年3月の試験に臨んだ。中村順平は、この試験のため夜学に通い、数学者タッソ・カンパナキス（Tasso Campanakis）に師事した⁴¹³。

その他の専門科目では、受験日程が早いものから並べると、「建築史」科目は同年1月に、「透視図学」科目は同年3月に、「石膏写生」、「装飾画」科目は同年4月に、それぞれ取り組んだ。なお、「石膏塑像」科目については、取り組んだ日程は不明だが、結果は同年6月に得ている。

○設計演習課題

中村順平の在籍期間中の設計演習課題は、「建築理論」科目の教育者ヴィクトール・ブラヴェットによって作成された。

まず、中村順平が設計演習課題で最初に取り組んだのは、入学試験の結果発表後の1921年7月28日出題の「要素分析」課題の第1課題「城館の一角」（表2.2.8「4. アナリチック競技」）であった。製作期間は、夏のバカンス休暇期間を含め、約3ヶ月間で、中村順平は同年10月29日に提出した。

次に、同年11月3日出題の「要素分析」課題の第2課題「廻り階段」に挑戦し、1921年末までに「要素分析」課題で必要な最低単位である2単位を取得した。なお、「城館の一角」の提出の5日後に出題されたこの課題は、約2ヶ月の制作期間が与えられ、同年12月24日に提出した。

1922年に入り、中村順平が最初に取り組んだ設計演習課題は、1922年3月3日出題の「設計競技」課題の第4課題「体育館」であった。中村順平は、この課題の最上位である「選1席」に選ばれ、2単位取得した。なお、この中村順平の提出課題は、1921-1922年度年次設計競技図集に掲載された。

次に取り組んだ課題は、同年4月7日出題の「エスキス」課題の第5課題「バスチード」であった。この課題は、既往研究などでは「南国の別荘」とされている。なお、網戸武夫を参照した既往研究の多くは、この課題を「1921年」としているが、実際には「1922年」の課題である。中村順平はこの課題で「選2席」に選ばれ1単位取得したが、学内でのこの評価は必ずしも高くはない。

2級課程の最後に取り組んだ設計演習課題は、同年5月5日出題された「設計競技」課題の第5課題「パノラマ」で、「構造」科目との共通テーマであった。中村順平は1922年7月18日の「構造」

課題の結果発表を受けて2級課程を修了し、1級課程に進級した。なお、網戸武夫は『情念の幾何学』p.154で1921年12月28日までに中村順平が2級課程の「単位点数も大半をこなし終えた」と述べているが、以上のように、2級課程の「設計競技」課題への参加は1922年に入ってからで、中村順平が2級課程で取得した21単位中、1921年に取得した単位は6単位にすぎない。

●1級課程の概要

1級課程は、主に設計演習課題に比重が置かれた課程で、卒業制作着手に必要な最低単位数：10単位の規定が存在した。2級課程とは異なり、1級課程では、設計演習課題やその他科目のいずれかでの最小合計単位数以上を取得する必要があった。

また、1級課程では、2級課程の設計演習課題の分類から「要素分析」課題を除き、一方で「建築史」科目が設計演習課題に含まれた。1級課程の「エスキス」課題および「設計競技」課題は、それぞれ年間6回行なわれ、「建築史」課題は、年間2回であった。前者2課題は、「建築理論」科目の担当教員が作成し、後者の課題は、「建築史」科目の担当教員が作成した。なお、表2.2.9の備考欄に記したように、設計演習課題では、3つの設計競技「ルージュヴァン設計競技」、「ゴドブフ設計競技」、「ローマ大賞設計競技」のいずれかへの参加が求められ、合わせて単位取得が求められた。

さらに、設計演習課題のほか、その他実技科目である「石膏木炭写生」や「石膏塑像」、「装飾構成競技」およびその他座学科目である「物理・化学・地学」科目や「建築法規」科目などの選択肢が存在した。なお、表2.2.9では、最小限必要とされる単位を取得するための課題で、中村順平が参加可能なものを中心に掲載したため、その他設計演習課題として存在するフランス人でなければ参加できない「設計競技」課題等については割愛した⁴¹⁴。

●中村順平の1級課程

○特例措置

中村順平は、前述のように1922年7月18日に2級課程を修了し、1級課程に進級した。卒業制作に取り組むためには、中村順平が入学願書に記載した生年月日「1887年12月29日」から数えて35歳になる直前、つまり、「1922年12月29日」までに卒業制作取り組み要件となる10単位の取得が必要であった。中村順平は、結果的にフランス政府公認建築家資格を取得したことから、この「1922年12月29日」までに修了に必要な単位数を取得したとみられ、これまで、1922年7月18日から約5ヶ月で1級課程を修了したと考えられてきた。

しかし、フランス国立アーカイヴに所蔵された当時の資料を調査した結果、中村順平の場合、特例として権利年限中、つまり、「1922年12月29日」までに5単位を取得すれば卒業制作に着手できる措置がとられていた⁴¹⁵。こうした特例措置は、中村順平が初めてではなく、第1次世界大戦後に数名同様の措置がとられた⁴¹⁶。1級課程の修了要件である10単位の獲得は、通常、表2.2.9に掲げたいずれかの科目で取得すればよく、中村順平の特例措置における5単位の内訳に関する具体的な取り決めはなかった。そのため、例えば、設計演習課題のみが評価された場合でも、中村順平は、権利年限中に「設計競技」課題2題、「建築史設計」課題1題、「ゴドブフ設計競技」課題を修了し、これらの課題において5単位を取得しており、特例要件は満たしている。また、1922年12月29日まで権利年

限中に9単位取得したことからも、中村順平は、卒業設計への取り組みが可能となった。

○設計演習課題

中村順平は、「構造」課題の提出直後の1922年7月13日に発表された1級課程の「設計競技」課題「高等電気学校」に挑んでいる。これは、2級課程修了を前提として取り組んだとみられる。通常、設計競技課題は、2級課程と同様に課題発表当日に行なわれる12時間のエスキスを経て、本仕上図面の提出へとつながる。したがって、これら一連のプロセスが評価され、採点対象となった。

まず、中村順平が1級課程の最初に提出した「設計競技」課題の第1課題「高等電気学校」では、中村順平は2等1席を得た。

ところで、網戸武夫は、この課題通過によって1級課程の「所要の単位数をすべて獲得」⁴¹⁷したことを述べているが、進級に必要な所要単位数や帰国直後の展覧会での展示作品から、この「高等電気学校」によって獲得した単位数では、1級課程修了に至っていない。また、修了に必要な単位とされた「ゴドブフ設計競技」や「ルージュヴァン設計競技」等の未取得単位の存在を考えれば、中村順平の1級課程の最終課題がこの課題ではないことがわかる。

つまり、中村順平の当初の権利年限である1922年12月29日までに取り組んだ1級課程の最終課題は、ゴドブフ設計課題である。この課題は、網戸武夫が「門扉」⁴¹⁸とした作品で、大阪歴史博物館の館蔵資料集掲載の「グリル」⁴¹⁹である。この課題の課題文冒頭には、“Une Exposition internationale des Arts décoratifs doit se tenir à Paris en 1924.”⁴²⁰と記されており、この課題が、パリが1924年に開催を目指した「万国現代装飾美術及び工業会」の正門の課題であることがわかる。この作品に関する吉田鋼市の「中央のメダリオンに「1924」の数字と「漂えども沈まず」というラテン語の表記が記されている」⁴²¹という指摘からも、この作品が「ゴドブフ設計競技」であることがわかる。

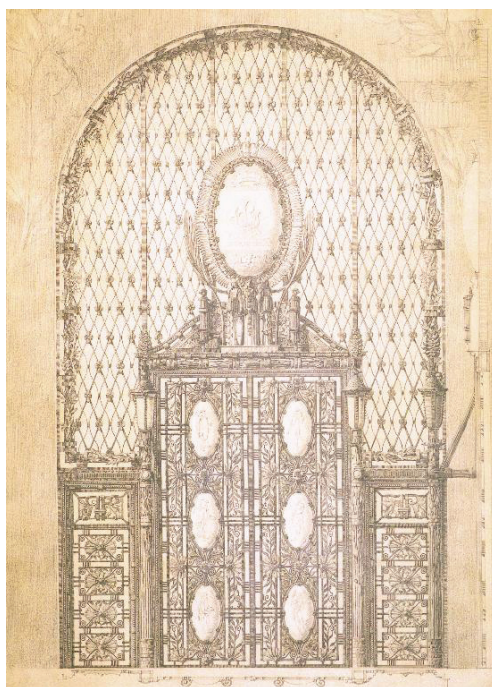


図 2.2.2 「ゴドブフ設計競技」中村順平提出作品

【図版出典】

図 2.2.2) 大阪歴史博物館編：大阪歴史博物館館蔵資料集 5 建築家・中村順平資料，大阪歴史博物館，2009，p.12

なお、これまで網戸武夫が「高等電気学校」を中村順平のエコール・デ・ボザール留学期最後の課題としたことから⁴²²、この作品は、例えば、大阪歴史博物館集では「エコール・デ・ボザールの課題作品を思わせるが、中央に「1924」とあることから、帰国後の作品であろうか」⁴²³と記述されている。このように、いくつかの既往研究では中村順平の帰国後の作品とされてきた⁴²⁴。しかし、この作品は帰国後の作品ではなく、名古屋工業会会報掲載作品であり、「ゴドブフ設計競技」の提出作品であった。

一方、網戸武夫の証言から⁴²⁵、中村順平がこの課題を重要視していたことがわかる。中村順平が、仮にこの課題の提出が不可能な場合、1級課程の修了要件であるこの課題以外の「ルージュヴァン設計競技」を権利年限中に取り組み、単位取得の必要があった。しかし、「ルージュヴァン設計競技」は1923年2月3日に出题された課題であり中村順平の権利年限を越えた時期の出题であった。そのため、網戸武夫が述べるように、中村順平はアトリエのパトロン、ロジェ＝アンリ・エクスペールの手ほどきを受け、この「ゴドブフ設計競技」課題に取り組んだ。

また、この課題の提出前に出题された設計競技課題の第3課題「下院議場内部」を中村順平は1923年1月23日に提出し、同年1月30日の結果をもって、通常の1級課程修了要件である10単位を満たした。

なお、表2.2.8では本設計課題「高等電気学校」について「キャンベル賞」という表記が附されているが、正確には「キャヴェル賞」*Prix Cavel*の課題で、1910年の1級課程の「設計競技」課題の第1課題に副賞として研究旅行のための賞金が附与されたことから始まった。また、同表の「万国現代装飾美術及び工業会正面鉄扉」には、「ルージュバン賞」という表記が附されているが、これは「ゴドブフ設計競技」の課題であった。

○その他実技科目・その他科目

1級課程では、2級課程とは異なり、設計競技課題が重視された。しかし、「物理・化学・地質学」、「文学」、「建築法規」といった講義科目も用意されたが、これらで取得が求められる単位の規定はなく、すべてが必要というわけではなかった。なお、中村順平の証言⁴²⁶から、「建築法規」を除いた「物理・化学・地質学」科目を受講したことが知られているが、中村順平の成績表には、「建築法規」科目での取得単位が附与されていた。

以上、中村順平の具体的な取り組みを整理し、1級・2級の両課程における中村順平が取り組んだ設計演習課題や専門科目の出题日、提出日、結果発表日、取得単位数および表2.2.8との関係を明記し、一覧表（表2.2.10）を作成した。なお、設計演習課題名称は、表2.2.8の表記とし、それぞれフランス語表記を付した。フランス語の表記については、「要素分析課題」は、中村順平の日記の表記から、「エスキス競技」および「設計競技」は、1921-1922年度および1922-1923年度年次設計競技図集の表記を採用した。また、結果を受けた日程を除く、他の全ての日程は、雑誌 *La Construction Moderne* の1921年7月以降1923年1月までに発行されたもの、さらに、1921-1922年度および1922-1923年度年次設計競技図集を参照した。なお、両方で齟齬があった場合、1921-1922年度および1922-1923年度の図集に表記された日程を採用した。

表 2.2.10 中村順平の1級・2級課程

2 級課程								
科目および課題名		出題回	出題	上：提出 下：口頭	結果	受賞	単位	表 2.2.8 No.
設計 演習 課題	●要素分析							
	城館の一角 Pavillon d'angle	第 1 回	7/28	10/29	11/2	選 2 席	1	4
	廻り階段 Un escalier circulaire	第 2 回	11/3	12/24	12/27	選 2 席	1	5
	●エスキス競技							
	バスチード Une bastide	第 5 回	4/7	4/7	5/2	選 2 席	1	2
	●設計競技							
	体育館 Un gymnase	第 4 回	3/3	4/29	5/2	選 1 席	2	1
そ の 他 専 門 科 目	パノラマ Un panorama	第 5 回	5/5	7/8	7/18	選 2 席	1	12
	●構造							
	パノラマ（第 5 回設計競技課題付随課題） 事前提出：構造教授著書内構造図略図約 300 枚の トレース	第 1 回	5/5	7/8 不明	7/18	選	2	12
	●透視図学							
	学内：透視図作図 事前提出：鐘楼の設計・陰影付透視図・鐘楼 3 つ 写生	第 2 回	3/11	3/15 3/17	3/28	選	2	9
	●載石学							
	学内：作図試験（サンジールの廻り階段） 事前提出実測図①：石造廻り階段の実測 （Hôtel de Sens の廻り階段） 事前提出実測図②：建物実測図 （ルーヴル宮、フランソワ一世暖炉実測） 事前提出：図帖	第 1 回	10/8	10/11 10/14	10/28	選	2	10
	●幾何図学							
	学内：作図試験（内容不明） 事前提出：図帖	第 1 回	10/18	10/18 10/20	10/28	選	2	記載無
	●構造力学・材料力学理論	第 2 回	3/25	3/27	4/7	選	2	記載無
	●フランス建築史	第 1 回	1/16	1/21	1/24	3 等	1.5	記載無
	●石膏木炭写生	第 2 回	4/24	5/24	5/26	選	1	記載無
	●石膏塑像	第 2 回	不明	不明	6/21	選	1	記載無
	●装飾画	第 2 回	4/24	5/24	5/26	3 等	1.5	記載無
第 2 課程合計取得単位数							21 単位	
1 級課程								
科目および課題名		出題回	出題	提出	結果	受賞	単位	表 2.2.8 No.
設計 演習 課題	●設計競技							
	高等電気学校（キャヴェル賞） Prix Cavel : Une école supérieure d'électricité	第 1 回	7/13	10/7	11/2	2 等 1 席	2	6
	装飾芸術学校 Une école des arts décoratifs	第 2 回	10/11	11/25	11/28	選 2 席	1	7
	下院議場内部 La salle des séances d'un palais de parlement	第 3 回	11/29	1/23	1/30	選 1 席	1	11
	●ゴドプフ設計競技							
	万国現代装飾美術及び工業会正面鉄扉 La porte d'entrée, en fer forge, d'un palais des arts décoratifs	第 1 回	12/1	12/16	12/19	選 1 席	1	8
	●建築史							
そ の 他	ローマネスク住家の正面 Une façade de maison romane	第 1 回	10/10	10/20	10/24	選 1 席	1	3
	●石膏木炭写生	第 1 回	不明	10/31	11/3	選	1	記載無
	●石膏塑像	第 1 回	不明	不明	11/22	選	1	記載無
	●物理・化学・地質学	第 1 回	10/26	10/26	10/30	選	1	記載無
●建築法規	第 1 回	10/24	10/24	10/27	選	1	記載無	
第 1 課程合計取得単位数							10 単位	

2.9.3 中村順平の卒業制作

中村順平は、卒業制作のタイトルとして「パリ大学街日本館」と記載した。そのフランス語タイトルは、提出図面では“Université de Paris・Maison du Nippon”という記載が確認できるが、学校に提出した書類上の正式名称は“La maison du Japon dans la cite universitaire de Montsouris”⁴²⁷であった。

卒業制作は、通常1年以上の実務経験が必要とされたが、中村はエコール・デ・ボザールの学友の父親による証明書を得て制作に取り組んだ⁴²⁸。エコール・デ・ボザールの卒業制作は、実現を前提とした設計が求められ、平面図、立面図、断面図などのほか部分的な概算見積書の提出も要求されていた。この設計は、パリ大学都市内に建設地を設定したもので、その敷地内に建設される日本館の設計であった。なお、現在のパリ大学都市内にある日本館とは別の設計である。

中村順平は、1923年11月10日に卒業制作を提出した。同年11月14日に発表された第125期 125^e promotion 卒業制作受理者の名簿には、中村順平の名が記載されており⁴²⁹、中村順平が、フランス政府公認建築家資格を得たことがわかる。中村順平がフランス政府公認建築家資格の獲得までの期間は入学から2年4ヶ月であったが、ジョルジュ・グロモールが8年、ロジェ＝アンリ・エクスペールが14年という期間と比較すると極めて短い。

中村順平の卒業制作は、公認建築家資格を取得した翌月には、エコール・デ・ボザール内の卒業制作優秀作品 Concours du meilleur diplôme の4つの作品のひとつとして選定され、3等を受賞した⁴³⁰。また、翌年1924年春に開催された展覧会「1924年のサロン」Salon de 1924（フランス芸術家協会 Société des Artistes Français 主催）では銀賞を獲得した⁴³¹。この卒業制作の5つの図版はフランスの建築雑誌 *La Construction Moderne*（1924年8月17日号）⁴³²でも取り上げられ、一般の眼にも触れた。

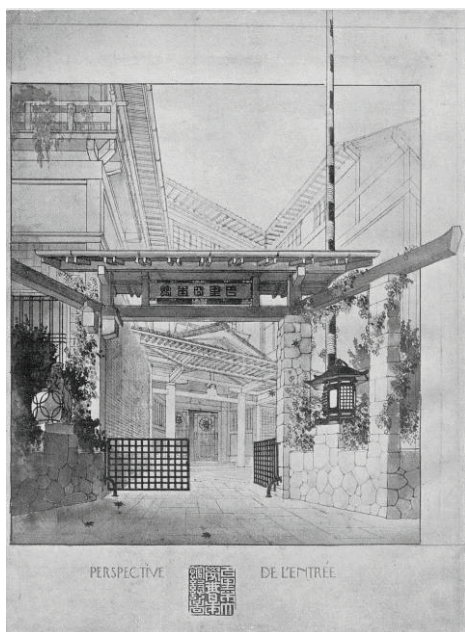


図2.2.3 パリ大学街日本館・エントランス

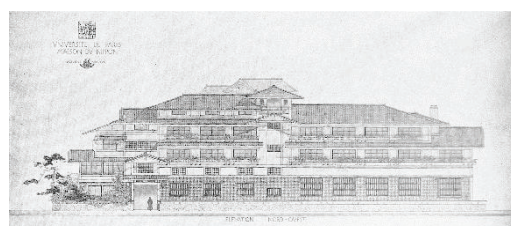


図2.2.4 「パリ大学街日本館」・北西側立面図

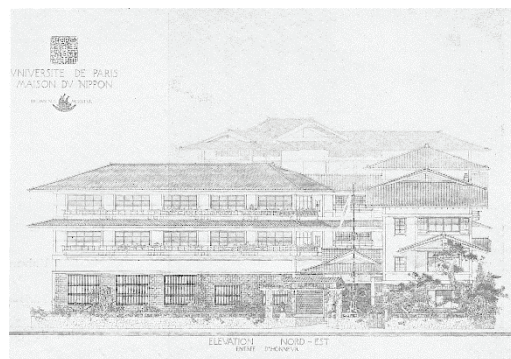


図2.2.5 「パリ大学街日本館」北東側立面図

【図版出典】図2.2.3-2.2.5) *La Construction Moderne*（1924年8月17日号），pl.181, p.541, p.546

中村順平がこの卒業制作に取り組むまでのいきさつは明らかではないが、様々な資料を持っていたことを考えると何らかの関係者の存在が浮かび上がる。

ひとつは、アトリエのパトロン、ジョルジュ・グロモールの存在である。ジョルジュ・グロモールは、理論家として様々な著述を残した人物として知られる一方、多くの作品こそ残してはいないが、同門アトリエのフランス人建築家ルシアン・ベクマン（Lucien Beckmann, 1880-1968）⁴³³の共同設計者として知られている。ルシアン・ベクマンは、1922年ごろよりパリ大学都市の敷地全体の配置計画を行い、大学都市において最初に建設された建物、ドゥーシュ・ドゥ・ラ・ムルト館の設計者である。この館は、石油王エミル・ドゥーシュ・ドゥ・ラ・ムルト（Emile Deutsch de la Meurthe, 1847-1924）の名をとった建物で、この建物の設計協力者としてジョルジュ・グロモールの名は刻まれている⁴³⁴。こうした関係を考慮すれば、中村順平はジョルジュ・グロモールから卒業制作の敷地ならびにテーマおよび具体的な設計条件を入手し、実際の設計として卒業制作に着手した可能性があるが、その詳細は不明である。

なお、1919年に始まったパリ大学都市の計画⁴³⁵だが、パリ大学都市に日本館を建設する構想は1920年頃に日本政府内で討議された。当時の日本政府はパリ大学都市構想の発起人であるフランスの時の文部大臣アンドレ・オノラ（André Honnorat, 1868-1950）の提唱した「世界の国々が留学生のために宿舎を立て、ここを留学生による国際交流の場にしよう」という趣旨に賛同し、駐仏大使が日本館建設を約束したが、1923年の関東大震災によって日本の国力が疲弊したことで資金調達の目処が立たなくなり頓挫した。

中村順平の設計は、当時の大使館が大学都市から仮に提示された敷地の条件を中村順平に提供し、当時パリの美術学校に留学中であった中村順平に設計させたことが指摘され⁴³⁶、中村順平は、卒業制作において日本館設計に着手するにあたって、在仏日本大使館を訪れ、外務省などとの折衝を行ない、設計の了解を得ていた。

また、外務省の外交資料館に残された資料には、「1920年末に日本館設立が討議されたとき、他の国に日本館が無くてフランスだけ特別扱いするのはいかなものかという、官僚特有の論理でくにからの資金導入は否決されていた」ことが記されており、1921年にフランス政府からの大学都市参加打診の話があり、時の外務省嘱託の松岡新一郎が日本館への民間資金の導入を提案して、資金提供者を探した⁴³⁷。なお、その後の外務資料には日本館の話は出てくるものの出資者が現れず1925年9月9日の幣原外務大臣から松島代理大使への連絡の中で「貴地大学町ニ最高限二百万法ノ日本館ヲ建設シ共ニ維持費百万法ヲ添ヘ寄付シタシトノ特志家アリ」と出資者が登場するが、この出資者は薩摩家（薩摩治郎八）であると推定され、現在のパリ大学都市内の日本館が建設されるに至った経緯がある⁴³⁸。

小結

本章では、まず、「1. 近代日本の建築教育者にみる外国経験」において、近代日本における建築教育を行なった教育者の外国留学の経験を整理し、当時の傾向を概括した。その結果、官立学校の建築科を牽引した教育者の多くが外国経験を有したことが確認された。また、留学費用の出資者から、公費・私費の別を述べ、公費の場合、特定の学校への着任が予定されての留学であったこと、私費の場合、校長からの推薦による学校への着任であったことを指摘した。さらに、第一次世界大戦以降の建築教育が「ドイツ風もしくはイギリスの風を加味したドイツ風」の建築教育であったため、留学先もドイツが含まれ、中村順平のフランスは一時代前の留学先であったことが明らかになった。こうした状況が成立した背景を、当時の外国語科目から読み解き、横浜高等工業学校においてフランス語が必修となった特殊性を指摘し、また、福井や仙台の高等工業学校において、ドイツ語科目が英語とともに必修であったことを確認した。

「2. エコール・デ・ボザールと中村順平」では、まず、2.1において、エコール・デ・ボザールが世界的に伝播した歴史的な事実をまとめ、具体的な国々の学校名を明らかにし、担当した主たるエコール・デ・ボザール出身の建築家について述べた。その結果、アメリカやカナダにおけるエコール・デ・ボザール教育の受容を確認し、また、フランスの植民地であったインドシナやアルジェリアの建築教育にエコール・デ・ボザール出身者が関与したことを確認した。

2.2では、中村順平のエコール・デ・ボザールの入学から修了までの流れを整理し、フランス政府公認建築家資格取得までを概括した。その結果、修学権利年限の設定、入学時の必要書類、入学前のアトリエ選択、上下2級課程における単位取得による進級、卒業制作の事前審査の存在等を確認した。また、上下2級課程の上級課程は、パリのエコール・デ・ボザールにおいてのみ行なわれ、下級課程は、地方都市のエコール・デ・ボザールにおいてもパリと同様に行なわれたことを確認した。

2.3では、中村順平の留学初年にあたる1920年のアトリエ数およびパトロンを整理した。その結果、当時、選択肢として13のアトリエが存在したこと、運営上の違いによる2種のアトリエが存在したことを確認した。また、アトリエと将来の活動との接点に着目し、一例を検証した結果、特定のアトリエと公共建築・国家宮殿主任建築家との関係が明らかとなり、アトリエと将来の役割との関係性を指摘した。

2.4では、中村順平がなぜジョルジュ・グロモールとロジェ＝アンリ・エクスペールのアトリエを選択したのかについて中村順平のパリ日記などから分析した。その結果、中村順平が選択したアトリエは、中村順平が当初想定したアトリエではなかったこと、エコール・デ・ボザール近くに存在した本屋での会話によってアトリエの選択肢が絞られたことを確認した。また、既往研究ではこれまでほとんど言及されなかった中村順平の所属したアトリエにどのような人材がいたのかについて調査した結果、中村順平が所属したアトリエには、フランス人のみならず、多国籍な学生が集まったことが明らかになった。

2.5では、中村順平の入学までの流れを整理した。その結果、入学試験までの足取りを既往研究から整理し、さらに、既往研究ではこれまでほとんど言及されなかった入学願書の提出日や、中村順平の具体的な登録日およびエコール・デ・ボザールでの登録番号を提示した。

2.6 では、中村順平在学時の建築セクションの専門科目の担当教官や、エコール・デ・ボザールの上
下2級における科目を整理した。その結果、既往研究ではほとんど言及されてこなかった中村順平の
留学期の専門科目の教育者の具体的な氏名を確認し、どのような建築教育が行なわれていたのかにつ
いてその概略を示した。

2.7 では、2.6 で整理した専門科目のうち、エコール・デ・ボザールの建築教育において最も重要な
科目であった「建築理論」科目に着目し、エコール・デ・ボザールの成立直前から解体に至るまでの
教育者とその特徴を概括した。その結果、エコール・デ・ボザールの成立以降、「建築理論」科目の教
育者は、通常、講義と設計競技課題の出題者としての役割があったこと、また、1863年のエコール・
デ・ボザールの大改革の時期に一時中断はあるものの、解体に至るまで連続していたこと、さらに、
中断期にこの科目を補完する「芸術史・美学」科目が存在し、その初代の教育者がヴィオレ＝ル＝デ
ュクであったことを確認した。

2.8 では、2.6 で整理した専門科目のうち、中村順平のエコール・デ・ボザールの留学期において2
級課程から1級課程への進級を左右する科目であった「構造」科目に着目し、エコール・デ・ボザ
ールの成立直前から解体に至るまでの教育者とその特徴を概括した。その結果、「構造」科目の教育者の
出自から、この科目の特徴を3つの期に分類した。それぞれ、黎明期の建築家による教育、大改革を
経て技術者による教育の導入、中村順平の留学期から始まるエコール・サントラルとエコール・デ・
ボザールを修了した建築家で技術者による教育に大別した。

2.9 では、既往研究ではほとんど言及されてこなかった中村順平がエコール・デ・ボザールにおいて
受けた建築教育の概要を明らかにした。2.9.1 では、上下2級の進級に必要な単位数の存在を明らか
に具体的な単位取得方法を整理した。その結果、上下2級の課程においてそれぞれ進級に必要な単位
数を確認し、一覧表を作成した。2.9.2 では、中村順平のエコール・デ・ボザールでの進級プロセスを
中村順平が取り組んだ課題を整理し、フランス国立アーカイヴ所蔵史料から中村順平のエコール・デ・
ボザール時代の成績表などを参照し、課題を通じて取得した単位数を明示した。また、同史料から、
中村順平の1級課程における特例措置に関する取り決めに発見した。そこで、特例措置が与えられた
条件下で、改めて卒業設計取り組み要件にかかる中村順平の単位数の取得状況を確認した。また、そ
の整理を受け、エコール・デ・ボザールにおける進級システムと照らし合わせ中村順平が具体的に取
得した単位数とそれに対応する科目を明記し、一覧表を作成した。2.9.3 では、卒業制作までの流れを
整理した。なお、卒業制作を作成するにあたり通常1年間の実務経験が必要であったが、中村順平が
1年間をかけずして卒業制作を提出し、フランス政府公認建築家資格を得ていた特例的な扱いであっ
たことを指摘した。また、卒業制作においてテーマとされた大学都市における日本館の設計に至る過
程のひとつの可能性をジョルジュ・グロモールとの関係から紐解いた。

以上の概括、整理により、既往研究での誤謬を指摘し、その点を改めた。また、中村順平の上下2
級の課程を修了するまでに至るプロセスをを実証的に解明した。この解明によって新たな知見を提示
した成果は、本論第3編で論ずる横浜高等工業学校の建築教育との比較のための基礎資料として重要
である。

参考資料：中村順平の2人のパトロン

中村順平は、アトリエ・グロモール＝エクスペールへ入門し、エコール・デ・ボザールへの入学を目指した。2人のパトロン、ジョルジュ・グロモールとロジェ＝アンリ・エクスペールの人物像を概括する。

●ジョルジュ・グロモール⁴³⁹

年長のパトロン、ジョルジュ・グロモールは、1870年にパリで生まれる。中村順平留学期にも存在したアトリエ・リーブルのアトリエ・ラルー（パトロン：ヴィクトール・ラルー）出身の建築家である。ジョルジュ・グロモールは、1892年2月－3月の入学試験を突破し、パリ・エコール・デ・ボザール建築セクションの2級課程へ同年3月31日に登録された。エコール・デ・ボザールの登録番号は4364番であった。2級課程において20単位取得し、1896年1月31日に1級課程へ進級した。1級課程では13.5単位取得し、その後、第52期 52è promotionの卒業制作として、「フランス・ミディ地方の小さな教会：広場とある村の教会」Une petite église dans le midi de la France, la place et l'église d'un villageを提出し、1900年6月22日にフランス政府公認建築家資格を取得した。ジョルジュ・グロモールの公認建築家資格取得までの期間は、約8年であった。

ジョルジュ・グロモールは1900年と1902年のサロンでメダルを獲得するなど建築家としての才能にも恵まれ、その実力は高く評価された。ジョルジュ・グロモールの建築家としての建築設計作品は多く残されていないが、ジョルジュ・グロモールは、エコール・デ・ボザール出身の建築家ルシアン・ベクマンと共同でいくつかの作品を手がけている。ルシアン・ベクマンは、ジョルジュ・グロモールと同門のアトリエ・ラルー出身の建築家で、ジョルジュ・グロモールの後輩にあたる。

ジョルジュ・グロモールとルシアン・ベクマンの協働による代表的な作品には、前述のようにパリ大学都市にあるドウッシュ＝ド＝ラ＝ムルト館がある。このドウッシュ＝ド＝ラ＝ムルト館は、パリ南部にある大学都市に最初に建設された建物で、中村順平の卒業制作でのプログラムとの類似性が見出せる作品である。

一方、ジョルジュ・グロモールは、建築史家、建築理論家としての功績が評価されている⁴⁴⁰。ジョルジュ・グロモールの著作は、建築理論書からギリシャ・ローマ、イタリアとフランスのルネッサンス、フランス近代にいたる歴史書のほか、建築図面の書き方に関する教則本や庭園史研究書など多岐にわたる⁴⁴¹。中でも建築理論書『建築試論』⁴⁴²は、エコール・デ・ボザールの建築教育史上、重要な理論書として位置づけられている⁴⁴³。

ジョルジュ・グロモールは、第1次世界大戦後の1919年にアトリエ・リーブルを開設する。その際、当時の新進の建築家であるロジェ＝アンリ・エクスペールとともにアトリエを開設した。なお、この開設間もないアトリエに、中村順平は所属した。1925年には、ロジェ＝アンリ・エクスペールとの共同が解消され、ジョルジュ・グロモールは、その後、単独でアトリエを主宰する。

1937年に、ジョルジュ・グロモールは、ルイ・マドリヌの後任として、エコール・デ・ボザールの「建築理論」科目の教員に就任する。前出の著書『建築試論』は、「建築理論」科目でのジョルジュ・グロモールによる講義録である。

「建築理論」科目の教育者となったジョルジュ・グロモールは、その在職期間中、アトリエでのパトロンとしての指導は中断した。これは「建築理論」科目教授が、設計課題出題者となる関係上、公平性の観点からアトリエのパトロン兼務を不可とする慣例に従っての対応であった。そこで、ジョルジュ・グロモールは、「建築理論」科目の教員を退く1940年まで共同のパトロンを立て、アトリエを存続させた。この間、アトリエ・グロモール・エクスペール出身の建築家ルイ・アレッチュ (Louis Arretche, 1905-1991) が、共同パトロンを務めた。「建築理論」科目教授退任後、ジョルジュ・グロモールは、亡くなる1961年まで、ルイ・アレッチュとともにアトリエを主宰した。ジョルジュ・グロモールは、エコール・デ・ボザールのアトリエの主宰者として42年間在職し、貢献した。

なお、アトリエ・グロモール＝アレッチュは、ジョルジュ・グロモールの死後、アトリエ・アレッチュの名で継承された。エコール・デ・ボザールが解体された1968年以降、それまで存在したアトリエは、新しい教育システムに取り込まれた。アトリエ・アレッチュは、その新制度においてヴェルサイユに拠点を置く「第3建築教育ユニット」Unité Pédagogique d'Architecture numéro 3 (略称, UP3) としてスタートし、その後、1977年の教育制度改革により「ヴェルサイユ建築学校」Ecole d'Architecture de Versailles (略称, EAV) と改称された。なお、2005年に「ヴェルサイユ国立高等建築学校」Ecole Nationale Supérieure d'Architecture de Versailles (略称, ENSAV) と再度改称され、現在(2015年)に至っている。

ジョルジュ・グロモールとルイ・アレッチュがアトリエを共同主宰した時代には、第2次世界大戦以後のフランスの建築界を支えた建築家たちが輩出されている。中でも、アトリエ・ド・モンルージュ Atelier de Montrouge の立ち上げメンバーでル・コルビュジエ (Le Corbusier, 1887-1965) のもとでアメダバードの計画に参画したジャン＝ルイ・ヴェレ (Jean-Louis Vêret, 1927-2011) やジャン・プルーヴェ (Jean Prouvé, 1901-1984) との共同をしたピエール・リブレ (Pierre Riboulet, 1928-2003) とジェラルド・トゥルノエ (Gérard Thurnauer, 1926-) といった建築家や、ルイス・カーンの元で学び、フランスにアメリカン・ボザールの流れを逆輸入した建築家ベルナー・ユエ (Bernard Huet, 1932-2001)、建築理論家としても知られるジャン・カステックス (Jean Castex, 1942-)、都市計画家として理論と実践にも長けた才能を有するフィリップ・パヌレ (Philippe Panerai, 1940-) など、建築教育者として名を残した人物を輩出した。

●ロジェ＝アンリ・エクスペール⁴⁴⁴

もう一人のパトロン、ロジェ＝アンリ・エクスペールは、1882年ボルドーに程近いアルカッションに生まれる。ボルドーのエコール・デ・ボザール絵画セクションに1900年から1902年にかけて在籍し、その後、ボルドーのエコール・デ・ボザール建築セクションに転科し、1905年まで在籍した。ロジェ＝アンリ・エクスペールは、奨学金を得て、1906年パリのエコール・デ・ボザールに入学した。なお、ロジェ＝アンリ・エクスペールの2級課程への登録日は1906年1月3日で、登録番号は5848番であった。また、ロジェ＝アンリ・エクスペールは、パリでは3つのアトリエに所属した。ひとつはギュスターヴ・ウムデNSTOCKが主宰するアトリエ・ウムデNSTOCK、ギュスターヴ・ウムデNSTOCKと一時期共同でアトリエを運営したアンリ・ドゥグランのアトリエ、そして、もうひとつはガストン・ルドンが主宰するアトリエ・ルドンに所属した。

ロジェ＝アンリ・エクスペールは、2級課程において33.5単位を取得し、1908年7月28日に1級課程へ進級した。また、1級課程では、47単位取得し、アトリエ・ルドン時代の1912年にローマ大賞2等2席となった。第1次世界大戦を挟み、第112期 112^e promotionの卒業制作「集合住宅」Une Maison de rapportを中村順平がフランスに渡った年である1920年に提出し、同年2月24日にフランス公認建築家資格を得た。

後年、ロジェ＝アンリ・エクスペールのモノグラフ⁴⁴⁵が出版されるなど、近代フランスを代表する建築家として名が知られ、パリ・エコール・デ・ボザール別館の設計者として、また、大型客船ノルマンディー号のインテリア・デザインでも知られている。

ロジェ＝アンリ・エクスペールは、1919年から1925年までジョルジュ・グロモールとアトリエを共同した。その後、アトリエ・ジョスリー（表2.2.3 アトリエ・リーブル6）の後継者として、1937年まで単独でパトロンを務めた。さらに、ロジェ＝アンリ・エクスペールは、3つのアトリエ・オフィシエルのひとつを1937年から1952年まで主宰した。なお、このアトリエは、中村順平留学期のアトリエ・アンドレ（表2.2.3 アトリエ・オフィシエル1）の系譜に位置づけられる。なお、このアトリエの後継者は、アトリエ・ドゥフラス＝マドリヌ＝オブレ Atelier Defrasse-Madeline-Aublet⁴⁴⁶（表2.2.3 アトリエ・オフィシエル9の系譜）出身の建築家ジョルジュ・ダングレ（Georges Dengler, 1904-1983）で1968年のボザール解体の後、「第4建築教育ユニット」Unité Pédagogique d'Architecture numéro 4（略称、UP4）としてスタートした⁴⁴⁷。なお、ロジェ＝アンリ・エクスペールは、1954年にオーギュスト・ペレの後任としてアカデミー・デ・ボザールの建築部門第1席に選出された⁴⁴⁸。

第2章 註

³⁰⁵ 瀬口哲夫『名古屋をつくった建築家・鈴木禎次』名古屋 CD フォーラム, 2004, p.126

³⁰⁶ 村松貞次郎『日本建築家山脈』鹿島出版会, 1965

³⁰⁷ 建築世界社編「第四編建築関係各種機関 建築学校」『建築年鑑』大正15年度版, 建築世界社, 1926, p.34 における「建築科主任岡田信一郎」という表記から, 岡田信一郎をこの欄に記載した。なお, 東京美術学校では, 古宇田実やドイツ留学経験のある森井健介(1887-1976, 1911年東京帝国大学工科大学建築学科卒業)などもいた。

³⁰⁸ 各校の大学一覧及び学校一覧を参照。(東京帝国大学に関しては東京帝国大学編『東京帝国大学一覧』東京帝国大学, 名古屋高等工業学校編『名古屋高等工業学校一覧』名古屋高等工業学校, 東京高等工業学校編『東京高等工業学校一覧』東京高等工業学校, 京都帝国大学編『京都帝国大学一覧』京都帝国大学, 神戸高等工業学校編『神戸高等工業学校一覧』神戸高等工業学校, 東京美術学校編『東京美術学校一覧』東京美術学校, 福井高等工業学校編『福井高等工業学校一覧』福井高等工業学校, 横浜高等工業学校編『横浜高等工業学校一覧』横浜高等工業学校, 仙台高等工業学校編『仙台高等工業学校一覧』仙台高等工業学校)

私学もまた以下のとおり。早稲田大学: 佐藤功一 1903年東京帝国大学工科大学建築学科卒業。日本大学: 笠原敏郎 1907年東京帝国大学工科大学建築学科卒。関西高等工業学校: 池田実 1904年東京帝国大学工科大学卒業。東京高等工業学校: 大沢三之助 1894年工部大学校造家学科(文部省から, 建築装飾研究のために3年間1907年1月1910年10月, 英国, フランス, イタリアに留学)。武蔵高等工科学校: 蔵田周忠(1913年工手学校建築科卒業)。以上のように, 明治開国以降, 東京帝国大学出身者が日本の建築教育, 特にデザイン教育の面において絶大な影響力を持っていたことがわかる。

³⁰⁹ 鈴木禎次「名古屋に於ける建築の今昔感」『建築雑誌』Vol.45, No.551, pp.1713-1718, 建築学会, 1931, p. 1714

³¹⁰ 仙台高等工業学校編『創立三十周年記念誌』仙台高等工業学校, 1939, p.501

³¹¹ 古宇田実「建築教育私見(特別大会講演)」『建築雑誌』Vol.37, No.446, pp.367-374, 建築学会, 1923

³¹² 1854年に創刊されたイギリスの建築系雑誌。手書きで図面などが掲載された初期(1854-1856)は *Building News* という名称で, その後, 1860-1862は *Building News and architectural review* となり, 1863-1926は *Building news and engineering journal* であった。

³¹³ 1889年に創刊されたイギリスの建築系雑誌(Alexander Koch(1848-1911)編)(参照: “A Dictionary of Architecture And Landscape Architecture”)

³¹⁴ 1897年に創刊されたドイツの建築系雑誌(Alexander Koch(1860-1939)編)。前註のイギリスの建築系雑誌の编者 Alexander Koch とは別人。(参照: “A Dictionary of Architecture And Landscape Architecture”)

³¹⁵ 1902-1944にかけて発刊されたドイツの建築系雑誌(編集: Julius Hoffmann Verlag)

³¹⁶ 近江栄「建築教育 明治・大正の歩み」『建築雑誌』Vol.90, No.1101, pp.1027-1031, 日本建築学会, 1975, pp.1029-1030

³¹⁷ 近江栄, 前掲書, pp.1030

³¹⁸ なお, 『仙台高等工業学校一覧』によれば, 開設初年の「自昭和五年至昭和六年」の教育プログラムでは「英語」のみが必修であったが, 翌年の「自昭和六年至昭和七年」では「ドイツ語」が必修として加わった。

³¹⁹ 近江栄, 前掲書, pp.1030

³²⁰ 成澤福松「中村順平先生随聞記 No.18」『あすなろ』第9号, 檜の会, 2009, p.9

- ³²¹ 神代雄一郎「中條精一郎」『近代建築の黎明』美術出版社, 1963, p.109
- ³²² 神代雄一郎, 前掲書, p.111-112
- ³²³ 伊藤三郎・飯田喜四郎・岡本博信・網戸武夫・佐久間達二・菊池利治「座談会：中村順平の業績と建築図画」『C and D』, No.32, Vol.6, pp11-22, C&D 同人, 1975, p.16 によれば岩崎財団によるものとされ, 中村順平は第2回目の奨学生となったといわれている。なお, 第1回目奨学生は, 作曲家・指揮者の山田耕筰(1886-1965)で, ドイツ・ベルリン音楽学校へ留学した。
- ³²⁴ 中村順平はパリ留学経験のある洋画家で東京美術学校教授を務めた黒田清輝(1866-1924)の日記に少なくとも3度(1915.12.10, 1916.09.01, 1920.07.26)登場する。(出典：「黒田清輝日記」独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所：http://www.tobunken.go.jp/kuroda/archive/k_diary/ (最終アクセス：2015.02.05))
- ³²⁵ 網戸武夫『情念の幾何学』建築知識, 1985, p.92
- ³²⁶ アニー・ジャック・三宅理一『ボザール建築図集』求龍堂グラフィックス, 1987, p.15
- ³²⁷ ジャン＝ジャック・ベッケール・ゲルト・クルマイヒ『仏独共同通史 第一次世界大戦(上巻・下巻)』(剣持久木・西山暁義訳) 岩波書店, 2012 等参照
- ³²⁸ 中村順平「パリ美術院」(I～VII)『新建築』1968年2月号～8月号, 新建築社, 1968 (パリ美術院 I : pp.215-222, パリ美術院 II : pp.217-224, パリ美術院 III : pp.215-222, パリ美術院 IV : pp.213-220, パリ美術院 V : pp.251-258, パリ美術院 VI : pp.243-250, パリ美術院 VII : pp.215-218)
- ³²⁹ 中村順平「パリ美術院」『檜』第1号～第6号, 檜の会(第1号 : pp.4-14 (1989.6), 第2号 : pp.32-50 (1989.11), 第3号 : pp.1-22 (1990.6), 第4号 : pp.1-11 (1990.11), 第5号 : pp.1-26 (1991.7), 第6号 : pp.1-19 (1992.6))
- ³³⁰ 三宅理一編『SD7811 特集=ボザール：その栄光と歴史の全貌』鹿島出版会, 1978。歴史的に振り返れば, 「Mai68」といわれる 1968 年 5 月革命を期にエコール・デ・ボザールの建築セクションは, 「建築教育ユニット」Unité Pédagogique d'Architecture (以下 UPA)へと改称され, アトリエ制度が廃止された。1968 年の解体後, UPA は, パリ近郊に 8 校, 地方 13 校の計 21 校存在した。その後, 学校所在地の名前が付き, 1984 年の UPA 制度改革により 1986 年ごろから UPA は「建築学校」Ecole d'Architecture (以下 EA)となる。2005 年度から新教育制度導入のあおりを受け「国立高等建築学校」Ecole Nationale Supérieure d'Architecture (ENSA)と改称され現在に至る。2015 年現在, ENSA はパリ近郊に 6 校, それ以外の地方都市に 14 校, フランス全土で 20 校存在する。
- ³³¹ Archive Nationale, AJ/52 ECOLE NATIONALE SUPERIEURE DES BEAUX-ARTS, Etat général des fonds des Archives nationales (Paris). Mise à jour 2007, Archive Nationale を参照し作表。
- ³³² 三宅理一編, 前掲書, p.50
- ³³³ 小林克弘「序：アメリカン・ボザールへの視座」『SD8311 特集=アメリカン・ボザール』鹿島出版会, 1983, p.17
- ³³⁴ 小林克弘, 前掲書, p.17
- ³³⁵ 学校施設の設計は同じくパリエコール・デ・ボザール出身のカナダ人建築家ジャン＝オマー・マルシャン(Jean-Omer Marchand, 1872-1936)が担当した。
- ³³⁶ Pérusse, J. : J.O. Marchand, premier architecte canadien diplômé de l'Ecole des Beaux-Arts de Paris, et sa contribution à l'architecture de Montréal au début du vingtième siècle, Université Concordia, 1999, Mémoire au grade de Maîtrise ès arts
- ³³⁷ Chebahi, M. : L'enseignement de l'architecture à l'Ecole des beaux-arts d'Alger et le modèle métropolitain. Réceptions et appropriations. 1909-1962, 2013, Thèse de Doctorat

- ³³⁸ 西堀昭「日本の技術革新と横須賀製鉄所（造船所）」『桜文論叢』vol.58, pp.51-69, 2003, p.62
- ³³⁹ 西堀昭, 前掲書, p.62
- ³⁴⁰ 西堀昭, 前掲書, p.62
- ³⁴¹ 2007年12月末日をもって Architecte D.P.L.G.資格の取得は不可能となった。2015年現在, Architecte D.P.L.G.に変わる制度として, H.M.O.N.P. (Habilitation à la Maîtrise d'Œuvre en son Nom Propre) 制度がはじまり, 以前の D.P.L.G.における資格取得制度とは異なったものとなった。略称は, H.M.O. (アッシュ・エム・オー) である。
- ³⁴² 三宅理一編, 前掲書, p.56
- ³⁴³ 主に Drexler, A. (éd) : The Architecture of the Ecole des Beaux-Arts, Museum of Modern Art, 1977 及び Epron, J., P. : Architecture, une anthologie. Les architectes et le projet, Mardaga, 1992 を参照し作表した。
- ³⁴⁴ 網戸武夫, 前掲書, p.218
- ³⁴⁵ Martinon, J. -P. : Trace d'architectes, Anthropos édition Economica, 2003, pp.222-225
- ³⁴⁶ アトリエ・ポントルモリ出身者とその流れを汲むアトリエ・ルコント Atelier Leconte 出身者の合計。
- ³⁴⁷ アトリエ・ドゥフラス出身者とその流れを汲むアトリエ・マドリヌ Atelier Madeline 出身者の合計
- ³⁴⁸ アトリエ・ラルー出身者とその流れを汲むアトリエ・レマレスキエ Atelier Lemaesquier 出身者の合計。
- ³⁴⁹ Martinon, J. -P. : op.cit., pp.222-225
- ³⁵⁰ Ecole nationale des beaux-arts (éd) : Les Concours d'architecture de l'année scolaire 1919-1920, Auguste Vincent, 1920
- ³⁵¹ 成沢福松「中村順平先生随聞記 No.18」『あすなろ』第9号, 檜の会, 2009, p.9
- ³⁵² 中村順平「パリ日記 其の2」『檜』第10号, 檜の会, 2000, p.49
- ³⁵³ エコール・デ・ボザールの正門から垂直に延びる通りである「ボザール通り4番地」4, rue des beaux-arts にあった書店。
- ³⁵⁴ 2013年現在, モンパルナス博物館 Musée du Montparnasse。中村順平が帰国後, 1930年代には, ジョルジュ・グロモールのアトリエは大所帯となり, ジョルジュ・グロモール亡き後, 存続したアトリエは, エコール・デ・ボザール解体期には一大勢力となっていた。
- ³⁵⁵ 中村順平「パリ美術院」(I~VII)『新建築』新建築社, 1968
- ³⁵⁶ 中村順平「パリ日記 其の2」『檜』第10号, 檜の会, 2000, p.53
- ³⁵⁷ 中村順平が名古屋高等工業学校の第3回目の卒業生であったように, 「アトリエ・グロモール・エ・エクスペール」は, 開設3年目のアトリエで, ジョルジュ・グロモールは, 中條精一郎の2歳年下で鈴木禎次と同年生まれであり, ロジェ＝アンリ・エクスペールは, 中村順平と5歳違いの年齢で, 曾禰中條建築事務所の先輩, 徳大寺彬磨³⁵⁷と同じ年齢であった。こうしたことから, 曾禰中條建築事務所のような上下関係と鈴木禎次に建築教育を叩き込まれた「名古屋の教室そのまま」の雰囲気を感じたのだろう。
- ³⁵⁸ フランス国立美術史研究所 INHA web サイト内 AGORHA 所収公開データベース : Leconte, M.-L. C (éd) : Dictionnaire des élèves architectes de l'Ecole des beaux-arts (1800-1968), INHA, 2009-2015 (<http://agorha.inha.fr/inhaprod/servlet/LoginServlet> (最終アクセス : 2015.05.20))
- ³⁵⁹ 網戸武夫, 前掲書, p.135
- ³⁶⁰ アンリ・サジュの親族が運営する web サイト <http://www.sajous-henri.com/> (最終アクセス : 2015.02.05) には, 中村順平も所有していたアトリエの風景の写真が掲載されている。アンリ・サジュの名は網戸武夫の著『情念の幾何学』

などには現れないが、この写真は、同書 p.135 掲載図版と同様である。

³⁶¹ 「截石学」科目の図帖作成の際に参考図帖を中村順平に提供した人物である。

³⁶² なお、エコール・デ・ボザール解体直前の1965年～1967年にかけてアトリエのパトロンを務めた。

³⁶³ Ecole nationale des beaux-arts (éd) : Les Concours d'architecture de l'année scolaire 1921-1922, 1922-1923, 1923-1924, 1924-1925, Auguste Vincent, 1922-1925

³⁶⁴ 1923年に開設されたオーギュスト・ペレ (Auguste Perret, 1874-1954) のアトリエ・リーブル, 「パレ・デュ・ボワ」 Palais du Bois の立ち上げメンバーの一人である。

³⁶⁵ キューバの国立美術・文学アカデミー l'Academia Nacional de Artes y Letras の会員となった人物で、母国キューバにおいて雑誌 Architectos cuba の編集に携わった。

³⁶⁶ 中村順平の「パリ日記」や「パリ美術院」、網戸武夫『情念の幾何学』を参考にまとめている。最も信頼性のある情報として「パリ日記」を採用した。「パリ美術院」の中では、「塑像」、「木炭写生」の試験時間に関する記述の中で「12時間」となっていたのだが、「パリ日記」によれば「8時間」となっている。『情念の幾何学』では「科学」という試験科目が設定されているが、「パリ日記」「パリ美術院」ともにその科目の存在が確認できなかったため、割愛している。なお、「科学」という試験科目は、専門科目のうち「構造力学・材料力学」「幾何図学」「截石学」「透視図学」の4科目を指した。また、それぞれの情報を精査する上で De Penanrun, T. D., Delaire, E. A., Roux, L. F. : Les architectes élèves de l'Ecole des beaux-arts 1793-1907, Librairie de la construction moderne, 1907 や Guédy, H. : L'Enseignement à l'Ecole nationale et spéciale des beaux-arts. Section d'architecture. Admission, 2e classe, 1re classe, diplôme-prix de l'Académie et prix de Rome, Librairie de la construction moderne, n. d., 1899 からさらに検討を加えた。試験時間に関する記述について調査し表をまとめた。

³⁶⁷ フランスの多くの学校では、20点満点で採点される。筆者のフランス建築学校所属時の採点は20点満点で行われた。また、日本の評価方式、「優」、「良」、「可」、「不可」に相当する評価基準で、“Très bien”, “Bien”, “Assez Bien”, “Passable” という評価基準があるが、筆者の所属した課程では、“Très bien” : 16点以上, “Bien” : 14点以上16点未満, “Assez Bien” : 11点以上14点未満, “Passable” : 10点以上11点以下という分類であった。なお、通常10点未満は不可に相当するが、これらの分類を含め所属する課程等により若干の違いがあった。

³⁶⁸ 1921年7月入学者のうち、第1番目の成績で入学したのは、アメリカ人レディック・バイケル (Reddick H. Bickel, 1894-1983) で、登録番号が7650番であった。また、第3番目の成績で入学したのは、フランス人ジャン・デュレー (Jean Delaire, 1897-1961) で、登録番号が7652番であった。これらから、登録番号は入学時の成績順であったと推定できる。なお、1921年7月入学者は、登録番号7650番から7764番で、115名であった。

³⁶⁹ 1874年5月6日に改定された講義名をもとに記載。

³⁷⁰ 1850年フランス・ブラン Brains 生まれ。1869年2期入学。アトリエ・コンスタン＝デュフー＝ジナン Constant-Dufeux et Ginain 出身。1872年1級課程進学。1878年ローマ大賞2席。1879年ローマ大賞。

³⁷¹ 1854年生まれ。1876年1期入学。アトリエ・ドメ Daumet 出身。ローマ大賞受賞者1884年。1889年修了。1884年, 1890年, 1892年のサロンでメダルを得る。(De Penanrun, T. D., Delaire, E. A., Roux, L. F. : op.cit., 1907, p.255)

³⁷² この科目は1874年から1891年にかけて“Histoire de l'architecture”という科目名であった。ルシアン・マーニュ (Lucien Magne, 1849-1916) が着任後“Histoire générale de l'architecture”へと改称された。

³⁷³ 「建築史」科目の担当者レオン・ジョスリーは、ルシアン・マーニュの後任として1917年に着任する。レオン・ジ

ヨスリーは、ローマ大賞1等受賞者で、当時歴史家としてよりもむしろ建築家・都市計画家として既に様々な都市計画の仕事を行ったことで知られている。レオン・ジョスリーは、1875年フランス南部の都市トゥールーズに生まれ、1893年パリのエコール・デ・ボザールに入学、アトリエ・ドメ+エスキエ Atelier Daumet et Esquié に所属する。レオン・ジョスリーは、在学期間中、エコール・デ・ボザールで行われた数々のコンクールで賞を獲得する。(ショーデセグ賞 Chaudesaigues (1897), アメリカ建築家賞 Architectes américains (1897), シュナヴァール賞 Chenavard (1902), エドモン・ラバール賞 Edmond Labarre (1903), etc) レオン・ジョスリーは、1903年にローマ大賞グランプリに選出され、ヴィラ・メディチ(ローマ)での滞在研修が始まった。当時、ヴィラ・メディチにはトニー・ガルニエ (Tony Garnier, 1869-1948) やアンリ・プロスト (Henri Prost, 1874-1959) らが滞在していた。レオン・ジョスリーは、ローマ滞在期間中に参加したバルセロナ都市拡張計画の設計競技で1等を獲得する。レオン・ジョスリーは、バルセロナの設計競技を通じ、イルデフォンソ・セルダ (Ildefons Cerdà i Sunyer, 1815-1876) の『都市化の一般理論』 *Teoría general de la urbanización* に現れるユルバニズム思想をフランスに紹介し、また、タウン・プランニング思想をフランスで発展させた。レオン・ジョスリーは、バルセロナの設計競技以降、数々の都市計画規模のプロジェクトに参加した。例えば、ベルリンの都市再開発設計競技では2等を、ロジェ＝アンリ・エクスペールやボルドー生まれの建築家レイ・ソイエ (Louis Sollier, 1885-1957) らと協働したパリ拡張設計競技では1等を、出身地であるトゥールーズ再開発計画ではプランナーとして活躍した。レオン・ジョスリーは建築家としての仕事も多数残し、例えば、アルベール・ラプラード (Albert Laprade, 1883-1978) らと協働したパリ植民地博物館, P.T.T. (1921年から1991年まで存在した郵便電報電話局 Postes, télégraphes et téléphones。日本の通信省、郵政省に相当する組織) 主任建築家として残した作品群などが知られている。レオン・ジョスリーは、ミュゼ・ソシアル(衛生・都市・田園セクション) (Musée social (section d'hygiène et urbaine et rurale)), フランス・ユルバニスト協会 (Société française des urbanistes), 建築家中央協会 (Société centrale des architectes) など数々の協会の立ち上げメンバーとしても名を残し、実務や社会貢献とともに教育機関でも活発に活動していた。レオン・ジョスリーは、エコール・デ・ボザールで「建築史」で教鞭をとる傍ら、アトリエ・リーブルのパトロンとして学生の設計指導にもあたった。さらに、エコール・デ・ボザールでは「建築史」を講義する一方、公共芸術高等学院 Ecole supérieure d'art public では「ユルバニズム理論」を教授した。さらにマルセル・ポエト (Marcel Poète, 1866-1950) が所長を務めた都市史・地理・経済学院 Institut d'histoire, de géographie et d'économie urbaines では、公開講座などを行なうなど積極的に教育活動にも従事した。インドシナのエコール・デ・ボザールの教育者、ルイ＝ジョルジュ・ピノー (Louis-Georges Pineau, 1898-1987) が残した1922年から1924年にかけてのレオン・ジョスリーのエコール・デ・ボザールでの講義録『レオン・ジョスリーのユルバニズム講義』 Cours d'urbanisme de Léon Jaussely à l'Ecole nationale supérieure des Beaux-Arts が物語っているように、中村順平留学中のレオン・ジョスリーの講義は、都市計画思想を反映したものであったことを考慮すれば、中村順平の「ユルバニズム」観の起源のひとつと考えられる。中村順平は「ユルバニズム」という言葉を日本で最初期に使用した人物であるが、「ユルバニズム」という当時の新しい概念をレオン・ジョスリーの講義を通じて理解した可能性がある。

³⁷⁴ 1883年以前は、「物理・化学」 Physique et Chimie という講義名であったが、ジョセフ・リバン (Alexandre Joseph Riban, 1838-1917) が着任した1883年から「物理・化学・地質学」に講義名称の改称が行われる。また、ウジューヌ・ブロシュが退任後、再び「物理・化学」へと改称される。

³⁷⁵ 中村順平はこの科目名である“Construction”というフランス語を「構造」と訳した。この語の意味については、吉田鋼市の著書『オーギュスト・ペレ』(鹿島出版会, 1985)での解説が参考になる。吉田鋼市は同書で“Construction”

の訳語として「コンストラクション」を採用し、その語彙について「何らかの構築物を実際につくること、組み立てること、建て設けること、あるいはそのようにしてつくられ、組み立てられた構築物」(p.200)と述べている。

³⁷⁶ ポール・ガデは、1891年にパリ・エコール・デ・ボザールに入学、入学当初は父ジュリアン・ガデのアトリエに所属し、その後、ジュリアン・ガデが「建築理論」教員に就任の際、慣例に従いアトリエのパトロンを辞したため、その後任として建築家であるエドモン・ポーラン (Edmond Paulin, 1848-1915) に師事し、ポール・ガデはアトリエ・ポーラン Atelier Paulin 所属となる。1893年1級課程へ進学。「1902年のサロン」でメダルを得る。1904年に実現したポール・ガデの処女作、タンジェのフランス公使館が卒業制作の主題であった。ポール・ガデは、フランス外務省の建築家として外交的な建物の建設、再建などに従事し、また、レオン・ジョスリーと同様に1913年から1931年までP.T.T.の建築家として活躍し、パリ市内にある郵便局の設計を行なった。

³⁷⁷ 中村順平はこの単語の意味について日記において当初この単語の意味が不明であることを述べている。なお、中村順平は時折「規矩術」や「規矩法」という訳語を与えていたが一定の見解がなかったと判断し、本論文では、丹羽和彦の「截石法」という訳語や土居義岳の「截石学」の訳語の可能性を検証し、最終的に後者を採用した。

³⁷⁸ 1878年生まれのエコール・デ・ボザール出身の建築家。1898年2期入学アトリエ・ラルー＝セリエ Laloux-Scellier 出身。1900年1級課程進学。1904年卒業制作提出。「1905年のサロン」でメダルを得る。(De Penanrun, T. D., Delaire, E. A., Roux, L. F. : op, cit., 1907, p.211)

³⁷⁹ 直訳では「静力学」ではあるが、建築分野であることを考え、また、中村順平が『パリ美術院』の中で「構造力学」と訳出したことから、ここでは「構造力学」という訳語を採用した。

³⁸⁰ ポール・ルイ・ベスヴィルワルドが初代の教員。1892年に新設された科目。

³⁸¹ 1844年ストラスブール生まれ。1863年入学。父エミル・ベスヴィルワルドのアトリエ出身。「1870年のサロン」でメダルを得る。

³⁸² Lesueur, J.-B. : Histoire et théorie de l'architecture, Firmin Didot et Cie, Paris, 1879

³⁸³ アニー・ジャック「エコール・デ・ボザールの建築図」『ボザール建築図集』(求龍堂グラフィックス) 求龍堂, 1987, p.8

³⁸⁴ アニー・ジャック, 前掲書, p.8

³⁸⁵ 中村順平・山下寿郎「パリ留学時代の思い出」『建築士』1955年9月号, pp.8-14, 日本建築士会連合会, 1955, p.10

³⁸⁶ Lucan, J. : Composition, non-composition. Architecture et théories XIXe-XXe siècles, PPUR (Presses polytechniques et universitaires romandes), 2009

³⁸⁷ 土居義岳「第三章 エコール・デ・ボザールの成立」『アカデミーと建築オーダー』中央公論美術出版, 2005, p.175

³⁸⁸ Epron, J. P. : Comprendre l'éclectisme, Norma, 1997, p.122

³⁸⁹ 吉田鋼市『オーギュスト・ペレ』(SD選書196) 鹿島出版会, 1985, p.200

³⁹⁰ 吉田鋼市, 前掲書, p.201

³⁹¹ 吉田鋼市, 前掲書, p.201

³⁹² 吉田鋼市, 前掲書, p.201

³⁹³ Epron, J. P. : op.cit., p.122 や Brucculeri, A. : Building Construction and Architectural Practice: the Teaching of François Marie Jaÿ at the Ecole des Beaux-Arts of Paris (1824-1863), Proceedings of the Third International Congress on Construction History, BTU/CHS, 3 vol., vol. I, pp. 245-255, 2009

³⁹⁴ 吉田鋼市, 前掲書, p.203

³⁹⁵ 吉田鋼市, 前掲書, p.203

³⁹⁶ なお, エマニュエル・ブリュヌの後任の実習助手はオーギュスト・ショワジーである。

³⁹⁷ Brune, E. J., Flamant, A. (éd.) : Première partie, Résistance des matériaux. Cours de construction professé à l'Ecole des Beaux-Arts, Librairie des Imprimeries Réunies, 1888。エマニュエル＝ジュル・ブリュヌの死後, 国立土木学校やエコール・サントラルで教鞭を執った技術者アルフレッド＝エメ・フラマン (Alfred-Aimé Flamant, 1839-1915) によってまとめられた。

³⁹⁸ ル・コルビュジエが, 1908年オーギュスト・ペレの下で研修した際, エコール・デ・ボザールの「構造」科目を聴講したことが知られている。その際の状況を, ル・コルビュジエは, 雑誌「L'architecture d'aujourd'hui」のオーギュスト・ペレ特集号で述べている。Le Corbusier : Perret, L'architecture d'aujourd'hui, No.7, L'architecture d'aujourd'hui, 1932, p.7

³⁹⁹ 吉田鋼市, 前掲書, p.203

⁴⁰⁰ ケネス・フランプトン『現代建築史』(中村敏男訳) 青土社, 2003, p.36

⁴⁰¹ Traité théorique et pratique de l'art de bâtir de Jean Rondelet. Supplément de G.-Abel Blouet, 2 volumes, Firmin Didot, 1847-1848

⁴⁰² レンナー・バンハム『第一機械時代の理論とデザイン』(石原 達二・増成 隆士共訳, 原広司校閲) 鹿島出版会, 1976

⁴⁰³ 1922年エコール・サントラル修了。1931年から1972年まで母校にて「工業物理」科目教授をつとめる。また, 1941年から1954年にかけて国立工芸院にて「工業暖房」科目教授をつとめる。同校で1954年から1972年にかけて「熱工学」科目主任教授をつとめた。(参照: Societe Francaise de Thermique サイト (最終アクセス: 2015.02.05) <http://www.sft.asso.fr/document.php?pagendx=9984>)

⁴⁰⁴ Brucculeri, A. : Renewal and tradition in the teaching of building construction in the Ecole des Beaux-Arts of Paris : the course of Edouard Arnaud, 1920-1934, in M. Dunkeld, J. Campbell, H. Louw, M. Tutton, B. Addis, C. Powell et R. Thorne (dir.), Proceedings of the Second International Congress on Construction History, Construction History Society, 3 vol., vol. I, pp. 417-440, 2006

⁴⁰⁵ フランソワ・ヴィタルのエコール・デ・ボザール登録番号は, 7654番であった。

⁴⁰⁶ 日本においては, 1915年に東京帝国大学で建築構造に関する新たな講座が設けられ, 鉄筋コンクリート構造及び鉄骨構造に関する研究が行なわれたように, 1919年を境にエコール・デ・ボザールにおいても「構造」科目は材料力学・構造力学分野を独立させ, 「数学」科目と融合させ, 「数学」科目は「構造力学・材料力学」科目へと改称された。

⁴⁰⁷ La construction moderne (éd.) : La construction moderne, La construction moderne, 1921-1924

⁴⁰⁸ Ecole nationale des beaux-arts, section d'architecture (éd.) : Les concours d'architecture de l'année scolaire 1921-1922, Auguste Vincent, 1922 および Ecole nationale des beaux-arts, section d'architecture (éd.) : Les concours d'architecture de l'année scolaire 1922-1923, Auguste Vincent, 1923

⁴⁰⁹ フランス国立美術史研究所 INHA web サイト内 AGORHA 所収公開データベース : Leconte, M.-L. C (éd.) : op, cit., (最終アクセス: 2015.05.20)

⁴¹⁰ 土居義岳『アカデミーと建築オーダー』中央公論美術出版, 2005

⁴¹¹ 中村順平・山下寿郎, 前掲書

⁴¹² 中村順平「パリ日記」(『檜』第14号所収)によれば, 1921年7月21日に「Vincentで géometrie descriptive 及 stéréotomie (per Pillet) の古本各 100fr で兎に角買ふ」という記載がある。中村順平は正確な書誌情報を記載して

いないが、これらの記述から、書名を推定した。おそらく、“géometrie descriptive”はジュール＝ジャン・ピレ著『幾何図学概論』*Traité de géometrie descriptive, ligne droite et plan-polyèdres-surfaces*, C. Delagrave; 1887が相当し、“stéréotomie”は『截石学概論』*Traité de stéréotomie, charpente et coupe des pierres*, C. Delagrave; 1887が相当する。

⁴¹³ 中村順平のパリ日記にたびたび“Campanakis”の名が記載されている。また、夜学に通ったことについては、中村順平は「パリ美術院」(I～VII)『新建築』新建築社、1968.2～8)で触れている。

⁴¹⁴ アメリカ建築家賞(12時間エスキス(製図室)+本設計(アトリエ)):受賞3単位 次点 2単位, エドモン・ラバール賞(12時間エスキス(製図室)+3日間本設計(アトリエ)):賞金 200fr, 装飾構成競技 *Concours de composition décorative* (エコール・デ・ボザール全セクションを対象とした設計競技):1等メダル3単位 2等メダル2単位 佳作 1単位, シュナヴァール賞などがある。

⁴¹⁵ これは、1921年12月30日付けの在仏日本大使館からエコール・デ・ボザールに宛てられた手紙から始まっている。この手紙で、中村順平の在学期間の1年間の延長を願った。在仏日本大使館駐在大使や黒田清輝らによる権利年限の1年間の延長に関する嘆願が、まず、フランス外務省を通じ公教育省へ伝えられ、その後、公教育省からエコール・デ・ボザールへその可能性が打診された。さらに、エコール・デ・ボザールによる回答が公教育省へ伝えられた。

⁴¹⁶ 1913年3月登録のマルセル・グワン(Marcel Gouin, 1886-?)には、1922年4月に1級課程での最低取得単位10単位のところ5単位で卒業制作着手要件を満たすことが可能となる軽減措置がとられた。また、1910年7月登録のモーリス・ジュリアン・マランダ(Maurice Julien Marandas, 1888-1929)の場合、権利年限の延長などの措置がとられた。(参照: Leconte, M.-L. C (éd.): op. cit., 2009-2015 (最終アクセス: 2015.05.20))

⁴¹⁷ 網戸武夫, 前掲書, p.160

⁴¹⁸ 網戸武夫, 前掲書, p.155

⁴¹⁹ 大阪歴史博物館編『館蔵資料集5 建築家・中村順平資料』大阪歴史博物館, 2009, p.90

⁴²⁰ Ecole nationale des beaux-arts (éd): 3e Série – Planches 64 à 91, Les Concours d'architecture de l'année scolaire 1922-1923, Auguste Vincent, 1923, pp.1-2 参照。

⁴²¹ 吉田鋼市「素描空間 歌い舞う鉛筆 中村順平」『建築雑誌』Vol.115, No.1463, 日本建築学会, 2000, p.4

⁴²² 網戸武夫, 前掲書, p.160

⁴²³ 大阪歴史博物館編, 前掲書, p.90

⁴²⁴ 吉田鋼市, 前掲書, p.4 や吉田鋼市を参照した大阪歴史博物館編, 前掲書, p.90 などでは、帰国後の作品と推定。

⁴²⁵ 網戸武夫, 前掲書, pp.155-156

⁴²⁶ 中村順平・山下寿郎, 前掲書, p.10

⁴²⁷ *La construction moderne* 1923年11月25日号(La Librairie de la Construction Moderne, 1923)での表記。

⁴²⁸ 中村順平・山下寿郎, 前掲書, p.9

⁴²⁹ *La construction moderne* 1923年11月25日号(La Librairie de la Construction Moderne, 1923)に発表されている。このときの卒業制作受理者の中に、中村順平の所属アトリエの他の人物の記載はない。

⁴³⁰ *La construction moderne* 1923年12月9日号(La Librairie de la Construction Moderne, 1923) p.118 から卒業制作優秀作品選(Concours du meilleurs diplôme)選出の4作品のうちのひとつに選出されている。

⁴³¹ *La construction moderne* 1924年5月25日号(La Librairie de la Construction Moderne, 1923) p.401

⁴³² *La construction moderne* 1924年8月17日号(La Librairie de la Construction Moderne, 1924)

⁴³³ ルシアン・ベクマンは、1898年5月21日に2級課程に登録された。登録番号は4986番であった。2級課程で21.5単位を取得し、1901年3月7日に1級課程へ進学した。1級課程では16単位取得し、その後、第69期 69^e promotionの卒業制作として、Une Crèche municipale à Paris を提出し、1905年2月24日にフランス政府公認建築家資格を取得した。なお、ルシアン・ベクマンの公認建築家資格取得までの期間は、約7年であった。(参照：De Penanrun, T. D., Delaire, E. A., Roux, L. F. : op.cit., p.172)

⁴³⁴ なお、ドゥーシュ・ドゥ・ラ・ムルト館本館エントランスには、設計者のみならず関連業者の担当者氏名の刻印された礎碑があり、その中にジョルジュ・グロモールの名が発見できる。(2012年6月現地確認)

⁴³⁵ 小林茂『薩摩治郎八 パリ日本館こそわがいのち』ミネルヴァ書房、2010

⁴³⁶ 小林茂、前掲書、p.208

⁴³⁷ 村上紀四郎『バロンサツマとよばれた男』藤原書店、2009

⁴³⁸ 村上紀四郎、前掲書、p.141

⁴³⁹ De Penanrun, T. D., Delaire, E. A., Roux, L. F. : op.cit., p.299

⁴⁴⁰ 三宅理一、前掲書、1978

⁴⁴¹ 主な理論書・歴史書として、*Histoire abrégée de l'architecture de la Renaissance en Italie* (A. Vincent, 1913 (新版：1922)), *Histoire générale de l'art français de la Révolution à nos jours. Tome II. L'Architecture* (Librairie de France, n.d., 1920), *Jardins d'Italie* (A. Vincent, 1922), *Jardins d'Espagne* (A. Vincent, 1926), *L'Architecture romane. Volume I : Provence et Languedoc, 64 planches. Volume II : Auvergne, Périgord, Guyenne, Saintonge et Angoumois, 86 planches. Volume III : Poitou, Berri, Nivernois, Normandie, Champagne, Bourgogne* (Vincent Fréal et Cie, 1928-1931), *Histoire abrégée de l'architecture de la Renaissance en France (XVI^e, XVII^e et XVIII^e siècle)* (Vincent Fréal et Cie, 1930), *Jacques-Ange Gabriel* (Vincent Fréal et Cie, 1933), *L'Art des jardins* (Vincent Fréal et Cie, 1934), *Initiation à l'architecture* (R. Ducher, 1938), *Essai sur la théorie de l'architecture, cours professé à l'Ecole nationale supérieure des Beaux-arts de 1937 à 1940* (Vincent, Fréal et Cie, 1942), *Lettres à Nicias* (Vincent, Fréal et Cie, 1951), *Histoire abrégée de l'architecture en Grèce et à Rome* (Vincent Fréal et Cie, 1953) などがある。また、主な建築図面の描画法に関する教則本として *Choix d'éléments empruntés à l'architecture classique. Première partie : Parallèle d'ordres grecs et romains. 50 planches accompagnées d'un traité élémentaire des ordres* (Vincent Fréal et Cie, 1927), *Introduction à l'étude du tracé des ombres* (Vincent Fréal et Cie, 1931), *Mémento* (Vincent, Fréal et Cie, 1946), *Introduction à l'étude de la perspective* (Vincent Fréal et Cie, 1953) などがある。

⁴⁴² Gromort, G. : *Essai sur la théorie de l'architecture, cours professé à l'Ecole nationale supérieure des Beaux-arts de 1937 à 1940*, Vincent, Fréal et Cie, 1942

⁴⁴³ 三宅理一、前掲書、1978, p.123

⁴⁴⁴ De Penanrun, T. D., Delaire, E. A., Roux, L. F. : op.cit., p.256

⁴⁴⁵ Institut Français d'Architecture (éd) : Roger-Henri Expert 1882-1955, Editions du Moniteur, 1983

⁴⁴⁶ アルフォンス・ドゥフラスとルイ・マドリヌとルイ・オブレの共同アトリエ。

⁴⁴⁷ UP4 は、その後の制度改革により、パリ＝コンフラン建築学校 (Ecole d'Architecture Paris-Conflans) となり、2001年の統廃合によりパリ＝ヴァル・ド・セーヌ建築学校 (Ecole d'Architecture Paris-Val de Seine, 2005年以降, Ecole Nationale Supérieure d'Architecture Paris-Val de Seine) へ併合された。

⁴⁴⁸ http://archiwebture.citechailot.fr/fonds/FRAPN02_EXPRO (最終アクセス：2015.02.05.)

本論第3編 中村順平にみるフランス建築理論と教育手法

第1章 横浜高等工業学校建築学科と設計・製図科目の教育者

第2章 横浜高等工業学校建築学科の設計・製図教育にみるフランス建築理論と教育手法

第3章 中村順平の「建築学」にみるフランス建築理論と教育手法①：「建築学」

第4章 中村順平の「建築学」にみるフランス建築理論と教育手法②：「『建築学』草稿」

第 1 章 横浜高等工業学校建築学科と 設計・製図科目の教育者

1. 横浜高等工業学校建築学科

1.1 官立横浜高等工業学校の設立背景

1868年の明治維新以降、日本の工業化が第1次世界大戦終わりまでに一応大成したことで、急速に建築活動に盛んとなった。特に、1914年に勃発した第1次世界大戦を契機として、日本は空前の経済的繁栄を見た。例えば、1914年から1919年にかけて農林水産関連、鉱工業の総生産高は価格で3倍以上に膨れ上がり、特に工業生産は5倍以上となった。また、製鉄造船機械器具の生産は急速に上昇し工業立国が標榜され、横浜港から発達した商業都市であった横浜市の場合、工業振興が市是として打ち出された。

高等教育の拡充は、第1次世界大戦期の寺内正毅内閣時代（1916～1918）の文部大臣岡田良平によって大きな目標が描かれた。その目標は、寺内政権崩壊により実現しなかったが、次の内閣、原敬内閣時代（1918～1921）の文部大臣中橋徳五郎によって高等教育の拡充計画が再始動した。

中橋徳五郎は、1919年度から1924年度に至る6ヵ年で高等教育機関の増設を図り、高等学校はそれまでの8校から25校へ、高等工業学校は8学校から18学校へ、高等農林学校は5学校から10学校へ、高等商業学校は5学校から12学校へと大幅に拡充された⁴⁴⁹。

この拡充期には、横浜高等工業学校、広島高等工業学校（現、広島大学工学部）、金沢高等工業学校（現、金沢大学工学部）の3校が1920年に、東京高等工芸学校、神戸高等工業学校の2校が1921年に、浜松高等工業学校（現、静岡大学工学部）、徳島高等工業学校（現、徳島大学工学部）の2校が1922年に、長岡高等工業学校（現、新潟大学工学部）の1校が1923年に、福井高等工業学校（現、福井大学工学部）、山梨高等工業学校（現、山梨大学工学部）の2校が1924年にそれぞれ設立された。これら新設校のほか、桐生高等工業学校（現、群馬大学理工学部）、明治専門学校（現、九州工業大学）の既設の2校に工学系学科が増科された。

官立の高等教育機関における建築系学科は、1920年の京都帝国大学工学部に増科された「建築学科」の誕生を皮切りに、関西圏では、創設時から神戸、福井の両高等工業学校に「建築科」が設置された。

一方、関東圏では、東京美術学校（1887年創設）において、1902年に設置された「図案科建築教室」が、1923年に「建築科」として独立し、1925年には、横浜高等工業学校の新たな学科として「建築学科」が増科された。また、1929年に東京および大阪の高等工業学校が、それぞれ工業大学に昇格した際⁴⁵⁰、両校の学科の廃止に伴い、各地の高等工業学校へ学科の分散配置が行なわれた結果、翌年1930年、仙台高等工業学校（現、東北大学工学部）に「建築学科」が増科され、東北地方における建築教育を授ける高等教育機関の拠点となった⁴⁵¹。

また、私学では、この拡充期以前、工手学校や早稲田大学には既に建築系学科が設置されていたが、この拡充期に、私学においても新設校として日本大学高等工学校（現、日本大学理工学部、1920年創設）、関西工学専修学校（現、大阪工業大学、1922年創設）、東京高等工商学校（現、芝浦工業大学、1927年創設）武蔵高等工科学学校（現、東京都市大学、1929年創設）が誕生し、各学校の創設時に建築系学科が設置された⁴⁵²。

なお、横浜高等工業学校建築学科が設置された1925年以前では、建築系学科を有する官立の高等

教育機関は、東京と京都の2つの帝国大学、および、東京、名古屋、神戸、福井の4つの高等工業学校、ならびに、東京美術学校の計7校であった。なお、その他、東京と京都の2つの高等工芸学校において建築教育が行なわれたが、これらを含めても、建築教育を受けた官立高等教育機関は僅か9校であった。

こうして国内の建築教育機関数は、1920年から1930年にかけて増加し、それ以前の2倍以上となった。この状況に伴い、建築教育の多様化が始まる一方で、建築専門教育が整備され中堅技術者が多数輩出されるシステムが確立した。この時期は、日本国内の情勢に要請され、技術者育成を目的とした高等教育機関の拡大が求められた時期で、さらに1923年の関東大震災の発生により建築需要の高まりが見られ、大正末から昭和初期に至るまでこうした動きが続いた。

当時の高等工業学校には「工業発展の重要な要素たるエンジニアの養成」⁴⁵³が求められ、日本の急速な工業化時代において、専門知識と技術をもつ即戦力としての技術者の存在が社会的に求められた。特に、この時期は、西欧に経済的、技術的に追いつくため、近代以前の職人制度、徒弟制度ではない、近代的な教育システムが求められ、欧米の近代的な教育機関をモデルとする技術者育成を目的とした学校教育システムの確立と教育機関の設立が急務となった時代であった。

教育システム確立の一方で、1930年に始まる不況、1931年の満州事変、その後の第2次世界大戦の勃発により、建築教育は戦時体制化におかれた。戦時下には技術者の増員が急務となり、その結果、1942年には東京帝国大学第二工学部（現、東京大学生産技術研究所の母体）の設置により建築学科の定員が倍増され、同年に熊本高等工業学校（現、熊本大学工学部）建築工学科が設置された。この時点で、第2次世界大戦終戦以前に存在した建築の高等教育機関が出揃った⁴⁵⁴。

こうした高等教育機関における建築系学科の増加に伴い、建築教育は多様化した。その多様化による問題点が明らかとなり、教程に関する統一的指針の確立への動きや、その際の参照元となる外国教育に関する研究などが行われた。

例えば、外国教育に関する研究として、神戸高等工業学校建築科科长をつとめた古宇田実による外国建築教育現場を視察報告がある。古宇田実は、同校建築科設立前のを命じられた際、1920年から1922年にかけてヨーロッパを中心に留学し、その視察概要を1922年に建築学会において報告した。その報告は「建築教育私見」⁴⁵⁵として『建築雑誌』に掲載された。古宇田実はその中で当時の建築教育へ警笛を鳴らした。古宇田実は、講演当時の日本の建築教育を、前述のように「ドイツ風もしくはイギリスの風を加味したドイツ風」⁴⁵⁶であったと指摘し、その講演で外国の真似ではなく、日本独自のオリジナリティの必要性を説き、加えて、3年間の専門教育期間の短さや、大学、高等工業学校、その他の専門学校それぞれが3年間という同一の年限により教育内容の差異が見られない点などを指摘している。また、高等教育機関に建築学科が次々に設置され一定の卒業生が世に出たころ、古宇田実は改めて『建築雑誌』に掲載された「建築教育」⁴⁵⁷に再度警鐘を鳴らしている。また、古宇田実の警鐘は、別の人物による投稿記事で、鈴木忠五郎による「現代建築教育再検討と之が改善」⁴⁵⁸においても同様の問題意識が見出せ、当時の建築教育の共通の問題として認識されていたと考えられる。

1.2 学校設立から建築学科増設までのいきさつ—関東大震災と横浜市の要請—

東京近郊の都市である横浜の地に建築学科が設立されるに至ったのはなぜか。ここでは、横浜高等工業学校の設立について史的資料から、その経緯を概括する。

横浜市は、多くの学校の集中する東京の隣接都市という地理的特性から、横浜高等工業学校の設立まで、官立の大学や高等専門学校などの高等教育機関が存在しなかった。当局から横浜市側に提示された横浜高等工業学校の設立条件は、神奈川県が70万円（当時）⁴⁵⁹と約66,000 m²の敷地を政府に寄付することで、このとき選定された敷地が弘明寺であった。当時の弘明寺は、花柳界のある地域として知られ、芸者や遊女などが集まる遊郭のような場所であった。そのため、当時の神奈川県知事有吉忠一は、教育上好ましくないという理由で、遊興施設を移転させた上で付近の料亭に奉仕する女性の年齢制限を設けた。

こうして横浜高等工業学校は、1920年1月19日付の勅令第15号文部省直轄学校官制の改正により設置が正式に決定され、同日付で東京高等工業学校教授鈴木達治が初代校長に任命された。次いで、同年1月23日には横浜高等工業学校規則が制定され、同年4月、機械工学科、応用化学科、電気化学科の3学科で、各科40名、合計120名の応募人員を募り、同年4月12日より授業が開始された。そして、開設3年目に当たる1923年3月に、第1回卒業生が輩出された。

同年9月1日の関東大震災により横浜高等工業学校は多大な被害を受け、被災した校舎の面積が7,564 m²に対し、残存校舎は960 m²であった。この大震災の復興を契機に、横浜市には横浜市復興会が組織され、市の再興が図られた。この復興会において、当時の校長鈴木達治は、総務部および工業部の委員となった。関東大震災は神奈川県を中心とする広い範囲に甚大な被害をもたらした。日本災害史上最大級の被害を与えた。この復興事業として、土木、建築工事が必至であり、その状況を勘案し、鈴木達治は、土木、建築の2科増設を考案した⁴⁶⁰。これは、震災復興に必要なローカルな技術者不足を補うだけではなく、学科増設と教育内容の充実による同校全体の発展を目算しての提案であった。同年11月16日の工業部委員会の席で、副委員長石塚彦輔、委員出口直吉から横浜高等工業学校校に土木、建築の両科を増設および県立商工実習学校に色染科の増設の件が付議可決され、続いて総会で可決され、文部大臣宛に陳情書⁴⁶¹が提出された。この陳情書とともに横浜市復興会市事業部委員長平沼亮三、同工業部委員長中村房次郎、出口直吉、鈴木達治は揃って文部省に出頭し、詳細に陳情した結果、文部省の内諾を概ね得た。さらに、横浜市復興会原富太郎会長、同市財政部井坂孝委員長、中村房次郎、鈴木達治が大蔵省との折衝を行い、結果的に建築学科のみの増設の了解を得た⁴⁶²。

横浜高等工業学校建築学科が増設されるに至り、国家機関に予算が計上されたのは1924年11月であった。学校側は1925年度からの開校を目指し、1925年3月下旬に他科とは別に建築学科生徒募集広告を出した。この入学試験に先立ち中村順平は「建築家志望の諸君への希望」と題した中村順平の求める生徒像を描いた文章を全国各地の中学校へ送付した。建築学科は他科からは遅れる形で同年4月11日に入学試験を行い、220名の応募者⁴⁶³の中から第1回の入学生37名が選抜された⁴⁶⁴。他科の授業は通常通り4月1日より開始されたが、建築学科での授業は入学試験から10日後の同年4月21日からであった。その後、同年5月22日文部省令第23号ヲ以テ本校規定中改正シ建築学科ヲ増設セラレ同時ニ学科課程ヲ制定⁴⁶⁵し、建築学科が正式に始まった。

1.3 初代学科長中村順平教授就任までの経緯と時代的背景

なぜ中村順平が横浜高等工業学校建築学科の主導的立場となったのか。横浜高等工業学校校長鈴木達治の言葉など史的資料を分析し、その経緯を整理し明らかにする。

1924年、横浜高等工業学校校長鈴木達治は新設の建築学科教授の人選に乗り出した。その際、鈴木達治は曾禰達蔵に相談するため⁴⁶⁶、曾禰中條建築事務所を訪れた。なぜなら、鈴木達治が東京高等工業学校教員時代、東京高等工業学校評議委員を務めた曾禰達蔵と知己の仲であったためである。そこで、鈴木達治はパリのエコール・デ・ボザールにおいてフランス政府公認建築家資格を得て、1924年に帰国し、独立して事務所を構えた曾禰中條建築事務所元所員の中村順平に白羽の矢を立て、後日、中村順平と面談し、中村順平を主任教授に据えることを決意した。

中村順平の教授就任への障壁は、鈴木達治が『煙州満筆』⁴⁶⁷で述べるように、官歴のないものを高等官六等以上にすることにあつた。網戸武夫は、『情念の幾何学』において、当時の状況を推測し、任官までのやり取りをまとめているが、国立公文書館の資料から次のことが明らかになった。

まず、中村順平は高等官五等として任官されたが、官歴として提出されたのは判任官で下士官である「陸軍工兵軍曹」という肩書きであった。序論「中村順平・略歴」で述べたように、中村順平は、志願兵として従軍しており、除隊退官の際、「陸軍工兵伍長」に叙せられ、下級官吏の叙位を得ていた。さらに、上申書とみられる文書によって「高等官五等」という官位を得た⁴⁶⁸。

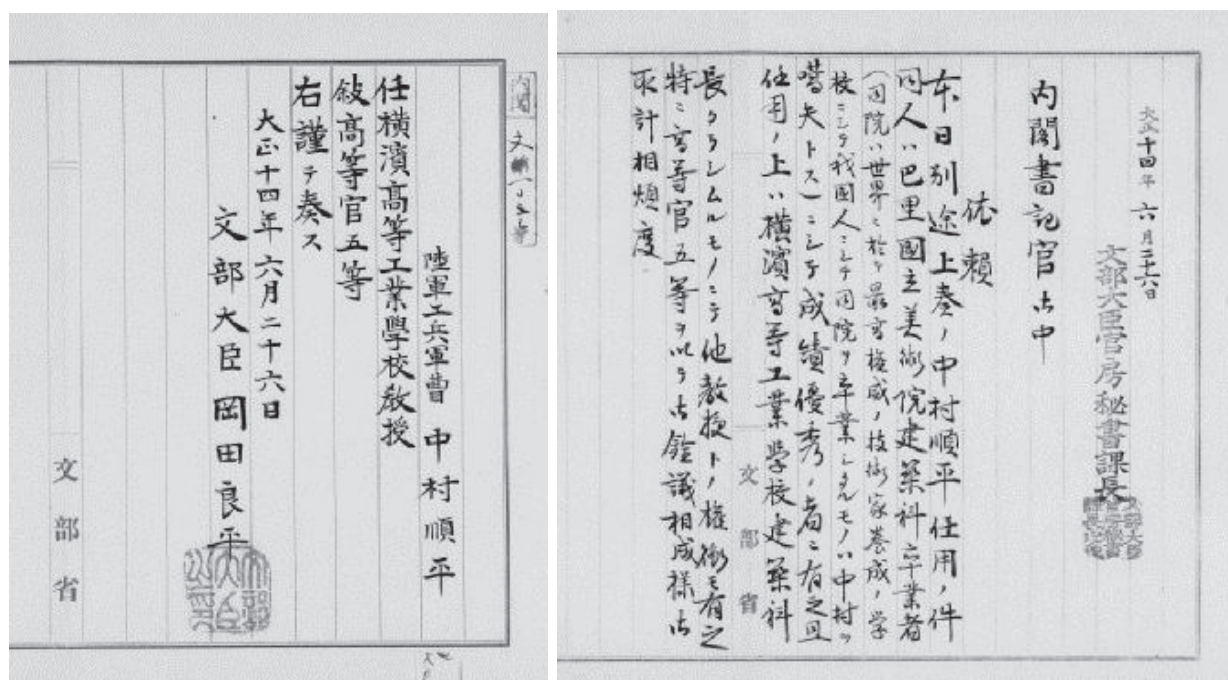


図 3.1.1 中村順平高等官五等任官に関する書類（一部）
 (出典：「陸軍工兵軍曹中村順平任官ノ件」国立公文書館⁴⁶⁹)

この上申書からも読み取れるように、当時、中村順平がフランスで建築教育を受け国家資格を得た、欧州帰りの稀有な建築家であったことはひとつの決定要素といえるだろう。なお、鈴木達治が中村順

平を横浜高等工業学校教授へと導く一連のやり取りは、鈴木達治の『煙州漫筆』⁴⁷⁰に詳述されている。

また、こうした鈴木達治とのやり取りとは異なるところで、中村順平自身が語るように、曾禰達蔵、中條精一郎の両氏は別の教育機関への着任の可能性を探り、中村順平を東京帝国大学の伊東忠太や塚本靖と面会させた⁴⁷¹。しかし、当時の東京帝国大学建築学科を先導した佐野利器と中條精一郎の建築家観の違いから判断すれば、様々な障壁があったと考えられ、結果的に中村順平は横浜高等工業学校への就任に落ち着いた。

一方、曾禰達蔵や中條精一郎側が中村順平を横浜高等工業学校に推薦した背景には、別の目論見も考えられる。

横浜高等工業学校建築学科の増設にあたり、鈴木達治は日本建築士会とつながりのある中村順平を建築教育者として選定した。1920年代の日本の建築界は、日本建築学会を母体とし佐野利器を中心としたグループと、日本における建築家という職能を定着させるために奔走した中條精一郎が会長をつとめた日本建築士会の流れを汲むグループが建築界で明確に分裂しつつあった時代であった⁴⁷²。

こうした時期に新たな学科が新設され、横浜の地に曾禰達蔵や中條精一郎が中村順平を送り込んだのは、単に鈴木達治が「変り種」⁴⁷³であったためというだけでなく、日本建築士会が提唱する「アーキテクト」の養成、もしくは、「アーキテクト」を支える人材の育成を目指した教育機関の創設への絶好の機会と判断した結果と捉えることもできる。それは、『横浜高等工業学校一覧』に掲載された卒業生の進路のうち民間建築設計事務所に勤務した人物の勤務先のほとんどが、日本建築士会側の事務所であったことを考慮すれば、両者の関係は無縁ではないといえる。

1.4 中村順平の「注意書」

中村順平が建築学科のはじめての入学試験を迎えるに当たって、全国各地の入学希望者に向け「建築学科に入学を志望する青年諸君への希望」(以下、「注意書」)を1925年3月に発行した。この文面から中村順平の建築家観を分析する。ここでは、『建築雑誌』に掲載された「建築学科に入学を志望する青年諸君への希望」⁴⁷⁴と、『水煙会会報』No.7に再録された「建築学科(本科)に入学を志望する青年諸君への注意」⁴⁷⁵を対象に、建築家像の部分では前者を、建築教育観の部分では後者の言説を採用した。なお、両者の内容の大枠は同様だが、細かいニュアンスや用語の使用法において異なる点が見られたことから、両者をそれぞれ参照した。

この「注意書」において、中村順平は自身が考える建築家像について「「建築家とは諸々の比例(Proportion)の美や、配置やその装飾やを自分で創造して始めて諸々の建物を構成し、その命令の許に此等を施行せしめ、此等の工費を制規通りに処理してゆく芸術家である。」(一八七八年発刊仏蘭西翰林学院編纂の辞林に之を定義す)」⁴⁷⁶と述べ、フランスの辞書からその定義を引いている。

その後、中村順平は「一定の規則」がないとする「比例の美」について述べ、「千変万化美しい比例の存在は無限」とし「建築の芸術的表現は比例の美」で「始めて描き得られる事が常」と述べる。さらに建築家はこうした「比例の美」を「創造すべき天職を有った芸術家」とし、建築はこれらの美を「創造して紙の上で製図といふ形式で表現する芸術」と述べている。続いて、職能の問題について述べ、建築家の職能範囲についての考えを述べている。建築家は「科学の範囲のみで物を設計する土木技術家若くは構造専門家(シビルエンジニア)」とは異なる職種であり、「建築請負師」とも異なり、「営利業者たる請負師建築材料商人及此等の雇人とは寧ろ反対の立場」であると述べている。

こうした「建築家」観は、フランスの建築家ジュリアン・ガデによる建築家職能観との類似性が指摘できる。1929年、長野宇平治によりジュリアン・ガデによる建築家職能観が辰野金吾の息子辰野隆(1888-1964)の協力のもと翻訳され『建築士及其職責』⁴⁷⁷として出版された。ジュリアン・ガデの建築家職能観は、1895年に発表された「ガデ法典」Code Guadetとしてまとめられている。これは、ジュリアン・ガデの『建築の諸要素と理論』第4巻 Tome Addition の最後に掲載された。

また、中村順平が曾禰中條建築事務所へ入所した翌年の1911年に行なわれた中條精一郎の講演録⁴⁷⁸から、中村順平の「建築家」観と中條精一郎のそれとの接点も読み取れる。

中條精一郎は、同年4月1日に東京神田青年会館で行われた建築学会の講演会で「注文者と建築技師と請負業者」と題した講演を行った⁴⁷⁹。中條精一郎は、この講演で「注文者」「建築技師」「請負業者」それぞれの違いについて述べた。中條精一郎は「建築技師は御互に社会的地位を高めて行きたい、社会に誤解されることのないようにして、完全に建築技師の地盤を固めたい」という想いから、日本国内における民間の建築家の職能の定着に対する問題提起を行なった。

中條精一郎は、この講演で建築技師の業務の定義を「建築技師は技術家たると同時に事務家である、其執る所の業務は構図(コムポジション)を理解し、考案し、其工事を指揮監督するのみならず、正當なる材料の選択、工費の産出および仕様までも適当に処理する義務を注文者に対して有するものである」と述べ、「建築技師は之に対して依頼者より相当の報酬を受けるの外、請負者若しくは材料供給者となんらの関係を有せざる者足るべき義務を有する」とし、「建築技師は請負者でもなく、又請負者

の代人若しくは手代でない、又同時に大工でない、商賈人でもない」「高尚自由なる一の職業者（プロフェッショナルマン）であつて芸術家たると同時に事務を語るの資格のあるもの」である必要を説いている。

また、中條精一郎は、建築技師に必要な性質と修養について、「建築技師は技術家であつて併せて事務を見る人」として、「第一に技術家としては審美眼即ち批評的、美的眼光」と「物の容積、或は線とか色とかに対してきわめて鋭敏なる感覚」の必要性を説き、「建築技師」は「画家の領分」と「或程度までは彫刻家」である必要を述べている。

中條精一郎と中村順平の大きな違いは、「事務家」という視点で、中村順平の注意書において欠落している視点である。中村順平の注意書では、建築家＝芸術家という図式のみが強調され、中條精一郎が定義する建築家＝技術家＋プラクショナー≡芸術家＋実務家という図式に見る「プラクショナー」の視点について語られていない。

中條精一郎は「事務の方面、プラクショナーとして見ますれば、最も広い常識を備えなければならぬ」とし、「建築技師にとっては此コンモンセンスが必要」で「依頼を受けるものに対しては極めて多様に、何れの方面の業務にも注意する必要」があると述べ、「普通教育は申す迄も無く専門的の教育が必要であると同時に高尚なる美的趣味の養成」の必要性を説き、「芸術家として実務家として美術と学術とを合併したる、建築に対する堪能なる」「建築技師」となると考えている。また、中條精一郎は「建築技師」の社会的地位について「建築技師と請負業者との境界線を全然明らかにすることを社会に要求すると同時に建築技師の側においては、自家の社会的立場を自覚して、自ら重んじて混同を来すやうな行動をしないようにする」必要性を説き、「注文者」「建築技師」「請負業者」それぞれの役割について論じ「建築技師」としての建築家の地位向上を訴えている。こうした言説から、中條精一郎は「事務家」であることによって「建築技師」としての建築家の地位の向上が図れると考えていたのだろう。

ところで、そもそも近代日本において「建築家」という呼称は、どのように使用されていたのか。その一例として、1890年に出版された『東京百事便』⁴⁸⁰の職能分類における「建築家」という項目に着目した。この書物は、東京帝国大学「造家学科」の学科名が「建築学科」へ改称された1896年以前のもので、伊東忠太による「アーキテクチュア」の訳語に関する問題を取り上げた論文が発表される以前のものである。「造家」と「建築」かの間で揺れ動いた19世紀末の近代日本において、社会一般の職業として「建築家」という呼称が1890年ごろには既に使用されていた。なお、この「建築家」の項目には、20名の氏名および住所、ならびにそれぞれの肩書きが記されている。なお、1889年までの工部大学校および帝国大学工科大学の造家学科の卒業生は20名であり、その半数にあたる11名がこの項目に記載された⁴⁸¹。

この書物には、東京在住者に限定された情報ではあるが、東京で活躍する造家学科出身者などが「建築家」として掲載され、掲載された人物のほとんどが国家の機関で活躍した。ジョサイア・コンドルが1888年に工科大学造家学科講師の職を辞して設けた民間設計事務所がわが国設計事務所の始まりとされているが、1890年ごろの職能呼称としての「建築家」は、民間設計事務所を主宰した建築家を示したわけではなく、むしろ、国家機関に所属した人物に対して使用された。つまり、明治期の「建築家」という呼称は、一般的には国家機関の建築技師を指していたとみられる⁴⁸²。こうした状況に対し、中條精一郎らによる日本建築士会の運動は、民間設計事務所の地位向上への問題提起であったと

考えられる。

一方で、中村順平は、以上の「建築家」観とともに「建築教育」観として、建築家を志す学生に必要な「素質」を述べている。

第1に、中村順平は、「己の今迄に想像も出来なかった物体でもその形を正確且忠実に出来得るだけ実物に近く描き現はし得る画を描く事を絶対に必要とする」とし、「出来るだけ立派な写生画家」である必要を述べている。中村順平は、その理由として「二百年来巴里国立美術院の建築学生に於て最も優れた写生画家が最も深い創造構成芸術家」になっていることを挙げ「相当若くは以上に勝れた写生画家でない限り、諸君は建築士として志しても大成の見込が全くない」と述べている。そのため、中村順平は、入学試験における「石膏写生」の試験を課すことや、入学後における「木炭写生」と「塑造」の重要性を説いているが、これらは何れもエコール・デ・ボザールでの教育に基づいている。

第2に、中村順平は、「科学としては論理推理的の能力」の必要性を説き、「数学が出来るだけ優れてゐる事が望ましい」と述べ、また、中村順平は「建築芸術は常に構造的に真でなければならぬ」と述べ、そのために「数学を十分に修得すべき」としている。数学の重要性は、エコール・デ・ボザールにおいても同様に認識されており、1819年にエコール・デ・ボザールとしての組織が確立されてからその科目は存続し続けた。さらにその中でも「幾何及幾何図学は甚だ重要」と述べている。なお、「幾何図学」は、前述のように1863年の教育改革の際に、新たに加えられた近代教育の象徴的な存在として君臨した科目であった⁴⁸³。

第3に、中村順平は、「健全な文学に依って己の思想感情を啓発してゆく事は甚だ重要」とし、それが「創作上の原動力となるべき筈のもの」と述べている。こうした文学もエコール・デ・ボザールにおいて選択可能な科目として存在し、また、エコール・ポリテクニクにおいては、文学・歴史などの文系科目の教育の充実が図られたように、フランスの2つの教育機関に範を得たものといえる。

以上3点を、中村順平が建築学科入学を志望する学生に対し要求した素養であった。つまり、この中村順平の「注意書」は、「中条を中心とする戦前の日本建築士会の職能に対する基本的な精神にも通ずるもの」⁴⁸⁴という村松貞次郎の指摘のように、中條精一郎が考える「建築家」観やジュリアン・ガデの『建築の諸要素と理論』第1巻にみられる「建築教育」観が融合されたものであり、中村順平の「建築家」観および「建築教育」観には、少なからずエコール・デ・ボザールとの関係が指摘できる。

2. 設計・製図科目の教育者

2.1 建築学科教員陣の概要

受験者に向けられた前述の「注意書」や横浜高等工業学校校長鈴木達治の回想に代表されるように同校建築学科は、中村順平が教育方針の方向性を定め、教育が開始されたと考えられる。しかし、中村順平の教育は、「私塾的な雰囲気」⁴⁸⁵をもったものと評されているが、同校建築学科の教育は、中村順平のみが行っていたわけではない。同校建築学科の中村順平以外の教員陣にはどのような人物が教育を担ったのか。

前述のように建築学科の授業は1925年4月21日より開始されたが、建築学科の専門科目を担当する教育者の正式な任用は、同年5月22日文部省令第23号の施行後からであった。以下では、『横浜高等工業学校一覧』および『文部省職員録』を参考に、建築学科の教育者を整理する。

まず、建築学科において最初に任官されたのは、東京帝国大学出身、文部省技師および東京市技師を務めた建部裕一郎であった。同年6月6日付けで「教授」として任官された建部裕一郎の担当講義科目は「建築構造」、「建築材料」であった。次に「建築史」科目の「講師嘱託」として東京帝国大学文学部出身、バニスター・フレッチャーの著書『フレッチャ建築史』の訳者の一人として知られる斎藤茂三郎が同年6月30日付けで任官された⁴⁸⁶。そして、建築学科科長となる中村順平が同年7月13日付けで「教授」として任官された。なお、中村順平の担当講義科目は、当初、「建築学」、「建築実習」、「木炭画」、「日本画」であった。

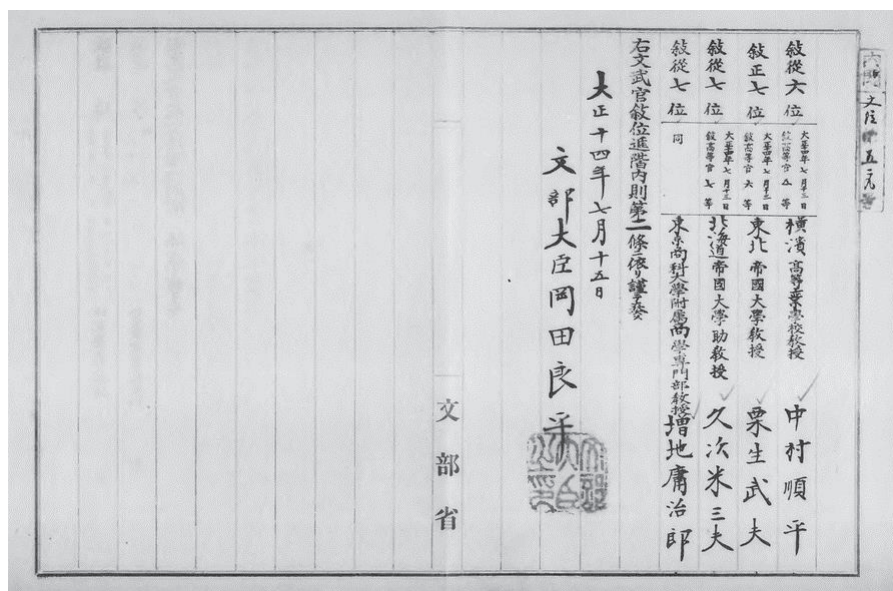


図 3.1.2 中村順平任官資料

(出典：JACAR (アジア歴史資料センター), Ref.A11113540300, 第5画像目から)

さらに、初年度末には、横浜高等工業学校校長鈴木達治の招聘により構造分野の「鉄骨鉄筋」科目を担当する阿部美樹志が「講師嘱託」として加わる。阿部美樹志は既に同校他科の基礎学科科目「工場建築」科目の「講師嘱託」としての着任歴があった⁴⁸⁷。また、『横浜高等工業学校一覧』の建築学科職員名簿欄への記載はないが、同書第7年版の巻末にある「教職員異動及在外研究員」欄から畑正吉

が1926年1月4日付けで「講師嘱託」として任官されたことがわかる。なお、畑正吉は「塑像」を担当した⁴⁸⁸。さらに、初年度のみ嘱託職員として中末郁二が建築学科の教職員名簿に記載された。

開設2年目の1926年4月には、「配景学」科目ならびに「建築製図」科目の担当となる名古屋高等工業学校出身の伊藤三郎が「助教授」として、「材料強弱」科目ならびに「建築製図」科目の担当となる東京高等工業学校出身の佐藤好が「教授」として任官される。この年には、中末郁二に変わり「雇」として神奈川県立工業学校家具科出身の堂畑辰蔵⁴⁸⁹が加わる。さらに、1927年1月17日付で「建築製図」科目を担当する森井健介、「塑像」科目を担当した畑正吉に代わり渡邊郁一が「講師嘱託」として任官された。また、開設3年目には、「施工法」科目の担当となる山田七五郎が同年11月15日付で「講師嘱託」として任官され、建部裕一郎が翌1928年3月31日付けで横浜高等工業学校から去った⁴⁹⁰。横浜高等工業学校建築学科教員の初期の布陣は開設3年目に確立され、この陣容で1930年度まで教育が行われた。

また、1931年には、伊藤三郎が1月17日付で「教授」へ昇格し、学期の終わりには森井健介が4年間の講師生活に終わりを告げ、同年3月31日付けで「解嘱」された⁴⁹¹。同年6月17日付けで新しく設立された工業教員養成所の指導および本科建築学科内の統一を委託された林豪蔵⁴⁹²が「講師」として任官され、同年10月14日付けで「教授」となる。1933年7月31日付けで阿部美樹志が「解嘱」となり、その後1934年まで教員陣営に大きな変動はない。

1934年6月30日付で、佐藤好は「依願免官」となるが、同年10月16日付で「講師嘱託」となる。また、同年6月30日付で鈴木秀一が「助教授」に就任する。鈴木秀一は「雇」として中村順平の教育を補助していた。この鈴木秀一の昇格人事は、伊藤三郎が1935-1936年度の2ヵ年の在外研修のため、伊藤三郎の「図学」科目代役として昇進したと考えられる⁴⁹³。また伊藤三郎の在外研修の時期に合わせ、伊藤三郎が担当した「建築材料」や「測量」科目などの代役として、また、構造系科目の担当として新たに大瀬威が「講師嘱託」として加わる。鈴木秀一、佐藤好は1939年度をもって退官し、横浜高等工業学校卒業生藤野節儀が構造系科目の担当として「助教授」に任官された。

1940年度には定員が倍増され、中村順平が率いる1組と林豪蔵が率いる2組に分かれた。その際、横浜高等工業学校卒業生である小泉勝世、神戸藩がそろって助教授となり、大瀬威は退官し、構造系科目の担当講師として新たに山崎三郎が加わった。1941年度には田口武一と大泉博一郎が講師として着任し、1942年度には大泉博一郎が助教授へ昇格する。さらに、横浜高等工業学校出身者から、同年「塑像」科目の担当として田辺謙輔が「講師嘱託」なり、1943年度には田口武一が「助教授」となった⁴⁹⁴。

なお、近代日本におけるフランス教育の導入という視点から付言すれば、建築学科の基礎科目、「外国語」科目において「フランス語」が行なわれていたことは特筆すべき点である。「フランス語」は、内藤濯（1883-1977、東京帝国大学文学部仏文科（1910年卒）、フランス文学者、東京商科大学教授）によって行なわれており、横浜高等工業学校建築学科におけるフランス重視の傾向が読み取れる。なお、前述のように、同時代の福井・仙台の両高等工業学校では、「英語」に加え「ドイツ語」が外国語の必修科目であり、横浜高等工業学校が「フランス語」を必修とした点は教育の特徴を示している。

以上が史的資料から判明する教員陣の顔ぶれである。それぞれの教員の出身校等を判明した範囲内でまとめると表3.1.1が得られる。

表 3.1.1 横浜高等工業学校建築学科歴任教員リスト (1925-1944)

氏名	役職	主な担当科目	在任期間	出身校
設計・意匠関連科目				
斎藤茂三郎	講師	建築史, 英語	1925－1944	東京帝大 (1907 年卒)
中村順平	教授	木炭画, 建築学, 実習	1925－1944	名高工建築 (1910 年卒) エコール・デ・ボザール (1923 年修了)
畑正吉	講師	塑像	1926－1927	東京美術学校 (1906 年卒)
伊藤三郎	助教授 →教授	幾何図学, 配景図学, 建築材料, 家屋構造, 測量	助教授: 1926－1931 教授: 1931－1944	名高工建築 (1919 年卒)
渡邊郁一	講師	塑像 木炭画	1927－1938	東高工芸彫刻部 (1924 年卒)
鈴木秀一	雇→ 助教授	規矩, 製図	雇: 1930－1934 助教授: 1934－1939	神奈川県立工業学校建築科 (1926 年卒) 横高工建築 (1929 年卒 (第2回生))
神戸蕃	雇→ 助教授	図学	雇: 1936－1940 助教授: 1940－1944	横高工建築 (1936 年卒 (第9回生))
小泉勝世	嘱託→ 助教授	塑像 木炭画	嘱託: 1938－1940 助教授: 1940－1942	横高工建築 (1933 年卒 (第6回生))
大泉博一郎	講師→ 助教授	塑像 木炭画	講師: 1941－1942 助教授: 1942－1944	東高工芸彫刻部 (1924 年卒)
田辺謙輔	講師	塑像	1942－1944	横高工建築 (1934 年卒 (工教第1回生))
構造関連科目				
建部裕一郎	教授	建築構造, 建築材料	1925－1927	東京帝大 (1917 年卒)
阿部美樹志	講師	鉄骨鉄筋	1926－1933	札幌農学校土木工学科 (1905 年卒) イリノイ州立大学大学院 (1914 年卒)
佐藤好	教授→ 講師	材料強弱, 鉄骨構造, 耐震構造学, 応用力学	教授: 1926－1935 講師: 1935－1940	東高工建築 (1911 年卒) 京都帝大土木選科中退
森井健介	講師	建築構造, 製図, 建築材料	1927－1931	東京帝大 (1911 年卒)
林豪蔵	講師→ 教授	建築法規, 製図, 家屋構造	講師: 1931 教授: 1931－1944	東京帝大 (1927 年卒)
大瀬威	講師	鉄筋構造, 耐震構造学	1935－1940	東京帝大 (1935 年卒)
藤野節儀	助教授	鉄骨構造, 鉄筋構造	1939－1944	横高工建築 (1934 年卒 (第7回生))
山崎三郎	講師	応用力学	1940－1944	東京帝大 (1936 年卒)
田口武一	講師→ 助教授		講師: 1941－1943 助教授: 1943－1944	横高工建築 (1932 年卒 (第5回生)) 東工大 (1935 年卒)
施工法				
山田七五郎	講師	施工法	1927－1944	東京帝大 (1899 年卒)
外国語				
内藤濯	講師	外国語 (フランス語)	1926－1944	東京帝大 (1910 年卒)

このように、教員陣の顔ぶれを整理した結果、1925年に開設されてから第2次世界大戦の混乱期に至るまで、2度、横浜高等工業学校建築学科の教員陣の顔ぶれが大きく様変わりする時期が訪れていた。この2度の転換点は日本社会の動向とも密接につながっている。

1度目は1931年である。1931年は柳条湖事件が9月に起こり満州事変が勃発した年である。この年に横浜高等工業学校では工業教員養成所が新設され、建築学科の教授に林豪蔵が新たに加わった。

次の転換点は1940年である。1940年は日独伊三国同盟が締結された年であり、第2次世界大戦へ向けて日本が動き出した年でもある。この年に横浜高等工業学校の建築学科は、全国各高等工業学校に見られた募集定員倍増のあおりを受け、中村順平を長とする第1組と林豪蔵を長とする第2組に分割された。

以上の転換点を考慮することで、建築学科の教育は3つの期に分類することができる。

第1期：開設の1925年から1931年まで

第2期：1931年から1940年まで

第3期：1940年から1944年まで

このように分類すると中村順平が牽引した教育は、第1期は、建築学科の教育の方向性が確立へと向う過渡期に相当し、そこで確立された教育が、第2期にある一定の成果を見せつつ安定し、第3期は、中村順平の建築教育がある一定の成果を見せつつも戦時下体制に突入し教育そのものの質の充実が図れない十分な教育を行なうことがかなわない環境となった時期と考えられる。

2.2 第1期の教員陣の特徴

ここでは、横浜高等工業学校の建築教育黎明期である第1期を中村順平の教育が推進された時期と捉え、第1期の教員と中村順平の関わり、および、曾禰中條建築事務所や中條精一郎を中心とする国民美術協会との関わりを検証する。なお、第1期の専任教員陣は、任官順に建部裕一郎、中村順平、伊藤三郎、佐藤好の4名で、中村順平を除く他3名はいずれも前職に官歴を有していた⁴⁹⁵。以下の概括にあたり、1925年度から1940年度までの情報は、主に『横浜高等工業学校一覧』の「第六年 自大正14年至大正15年」から「第二十一年自昭和十五年至昭和十六年」を参照し、それ以降にあたる1941年度から1943年度までの情報は『文部省職員録』を参照した。

●建部裕一郎

建部裕一郎は、中條精一郎と同じ文部省の出身者ではあるが、関東大震災復興関連事業において佐野利器の下で働いていたことや唯一の東京帝国大学出身の専任教員であったことを考えると、佐野利器からの推薦と思われる。同時期に開設された他の高等工業学校をみると、例えば、福井では、佐野利器と第二高等学校時代からの友人であった関盛治（1878～1933）が校長を務め、佐野利器の教え子である吉田宏彦（1899-1986）が教授として着任したように、また、東京高等工業学校では、佐野利器の「いわゆる“四天王”」⁴⁹⁶のひとり小林政一（1891-1973）が1926年に着任し、学科長を務めたように、佐野利器と関わりのある人物が建築教育者として活躍した時期であることわかる。さらに付言すれば、小林政一の同級には、仙台の初代学科長を務めた小倉強が、また、前年の卒業生には、福井の学科長を務めた坂部保治、名古屋高等工業学校教授から京都帝国大学教授となった三浦耀、神戸高等工業学校教授となった永澤毅一らがあり、いずれも佐野利器と同様にドイツを中心とした留学経験者であった。このように佐野利器の教え子が各校に建築教育者として配置された時期に、建部裕一郎も新設された横浜の建築学科の教授となった。

建部祐一郎は1914年に第八高等学校卒業後、東京帝国大学工科大学建築学科に入学し、1917年に卒業した。卒業後、建部祐一郎は文部省に入省し、入省の2年後（1919年）には、すでに技師となっている⁴⁹⁷。建部祐一郎は、文部省技師から東京市技師へ転じ、1922年には東京市役所建築課工務掛長となり、その後、関東大震災の際に設立された臨時建築局（局長囑託：佐野利器）学校建築局設計掛長を歴任した⁴⁹⁸。

建部祐一郎は、1925年に横浜高等工業学校教授に任官され、1927年度まで教授として教鞭を執ったが⁴⁹⁹、1928年3月31日付けで「休職」し、1930年3月31日付けで「休職満期」となり、その後、復職はしなかった。

建部祐一郎の在任期間は、建築学科開設後の3年間であるが、建築学会において設立された委員会「実業学校程度ノ標準教科書編纂委員会」⁵⁰⁰の委員であったように、対外的な折衝が重要な役割であったと考えられる。建部祐一郎は同委員会が1929年2月末に提出した最終報告書に名を連ねている。建部祐一郎がこの委員に選出された背景として、当時、建部祐一郎が、横浜高等工業学校建築学科教員で唯一の東京帝国大学建築学科出身者の専任教員であったことが考えられる。また、この委員会の委員の出身校別人数をみると、東京帝国大学から17名、東京高等工業学校から5名が委員となって

おり、この2つの学校の卒業生のみで教科書編纂委員会が成立していた。一方、これは1920年1月24日に発令された文部省令第4号「実業学校教員検定に関する規定」に準じた人選であるともいわれている⁵⁰¹。なお、中村順平も1926年12月に都市計画と建築論分野の担当者として任命されたが、最終報告書の委員名簿には記載されていない。

●斎藤茂三郎

斎藤茂三郎の人選は、中條精一郎や曾禰達蔵らとの関係、東京美術学校教授および神戸高等工業学校教授をつとめた古宇田実⁵⁰²（1879－1965）と中條精一郎との関係、古宇田実と中村順平との関係など複数の関係が浮かび上がる。この中で、最も有力なのは中村順平と古宇田実の関係だろう。古宇田実は、中村順平の建築学会への入会時の推薦人の一人である。また、中村順平はパリ留学中、現地で同時期に欧米の建築教育見聞のためにパリ滞在中であった古宇田実と複数回接触していることから、中村順平と古宇田実との関係が深いことがわかる。これらを考慮すれば、古宇田実から斎藤茂三郎が推薦された可能性がある。

斎藤茂三郎は、1904年第一高等学校文科志望卒業後、東京帝国大学へ進学し、1907年7月に同校文学部心理学科を卒業した文学士である⁵⁰³。斎藤茂三郎は、『優生學：人類の遺傳と社會の進化』（不老閣書房、1916）や『遺傳と人性』（中文館、1926）を記し、また『種の起源』の著者として有名なチャールズ・ダーウィンの息子であるレナード・ダーウィンの著書『優生学とは何か』などの翻訳書を手がけた。斎藤茂三郎は、近代日本における優生学の発展に寄与した人物の一人⁵⁰⁴であり、1930年には社会・文化的背景を考慮にした医学研究および社会啓発を目的に設立された日本民族衛生学会の中心的なメンバーでもあった。

斎藤茂三郎の建築分野における貢献は、バニスター・F・フレッチャア（Banister F. Fletcher）の“A History of Architecture on the Comparative Method”（1905）⁵⁰⁵の翻訳書『フレッチャア建築史』⁵⁰⁶（1919）の刊行にある。この原著はフレッチャア親子⁵⁰⁷の第5版であるが、この初版は、1896年に刊行された。また、この訳書は古宇田実との共訳で、斎藤茂三郎は、横浜高等工業学校の「建築史」科目でこの訳書を使用した。

●阿部美樹志

阿部美樹志は、建築学科の設立以前にあたる1923年に講師として横浜高等工業学校の基礎科目を担当した。また、鈴木達治が阿部美樹志の送迎をした記録⁵⁰⁸があるように、中條精一郎らによる推挙ではない可能性がある。しかし、鈴木達治が信頼をおいた人物で、鈴木達治は建築学科で問題があるたびに阿部美樹志に相談したといわれており、開校当時の学校にとって阿部美樹志の存在は大きなものであった。

阿部美樹志は、1883年に岩手県で生まれた。旧姓は菅原である。阿部美樹志は、札幌農学校土木工学科に進学し、1905年同校首席卒業後、鉄道作業局に採用された。阿部美樹志は、1911年に農商務省海外実業練習生の選抜試験に合格し、アメリカ・イリノイ大学でコンクリート工学の専門家アーサー・タルボット（Arthur Newell Talbot, 1857-1942）⁵⁰⁹に学ぶ。阿部美樹志は、同校における1914年5月22日の最終試験を経て、同年6月にPh. D.（Doctor of Philosophy）の学位を取得した。な

お、学位審査は6名で構成され、同大学における鉄筋コンクリート部門最初の学位取得であった⁵¹⁰。阿部美樹志は、学位取得後ドイツ留学を命ぜられ、ドイツ・ハノーヴァー工科大学での研究に入るが、第一次世界大戦の開戦により日本に帰国し、鉄道院東京改良事務所に復職した。阿部美樹志は、1916年に『鉄筋混凝土工學』（丸善、1916）を刊行し、1920年には阿部美樹志事務所を開設し、鉄筋コンクリート建築を次々と手がけた。なお、中村順平は「金光教難波教会所」設計の際、阿部美樹志に構造設計を相談した⁵¹¹。また、阿部美樹志は、同年6月に「鉄筋コンクリート緊定框橋の理論及びその実験的研究」（英文）を京都帝国大学に提出し、工学博士の学位を取得した。なお、この学位論文はイリノイ大学に提出したものと同一のものである。

ところで、1925年には北海道帝国大学（現、北海道大学）においても土木、鉱山、機会、電気の4学科からなる工学部が設置され、阿部美樹志は、この土木工学科コンクリート工学講座担当教授の予定者として任命されていた。しかし、阿部美樹志は、研究用機材の購入をめぐる問題により、その責任を取り北海道帝国大学赴任を辞退した。こうした時期に、阿部美樹志は、鈴木達治による招聘で横浜高等工業学校建築学科開設前の1923年1月に講師を委嘱された⁵¹²。阿部美樹志は横浜高等工業学校の講師のほか、1929年3月開校した混凝土専修学校（現、浅野工学専門学校）の設立に尽力し1934年12月まで教授として教鞭をとる傍ら校長を務めた。その他、東洋セメント⁵¹³（現、住友大阪セメント株式会社）社長、海外土木興業社長など企業の実業界で活躍し、戦後、戦災復興院総裁をつとめ貴族院最後の勅撰議員に選出されるなど政界でも活躍した⁵¹⁴。

当時の阿部美樹志の講義について混凝土専修学校の教員を務めた福岡季吉（横浜高等工業学校第4回卒業生）は次のように回想している。「偉い先生と聞いてあまり欠席する者もなく講義を聴いていましたが、先生ご自身はご多忙の身で、休講も多かったと記憶しています。先生の著書の、鉄筋コンクリート工学の内容にしたがって話をされるより、米国で学ばれたイリノイ大学での理論結構を話され、『要は諸君は設計の仕事に役立つ必須の部分をマスターすることだ。製図室（ホームルーム）にて田中悠先生が、諸君の質問にいくらかでもよく応じてくれるようにしてあるから、田中先生の指導を良く理解するように』とのことでした」という回想から、横浜高等工業学校建築学科の教科書として前掲著書『鉄筋混凝土工學』が使用されたことがわかる。なお、福岡季吉の文章に表れる「田中悠」は、1931年度および1932年度の横浜高等工業学校の嘱託職員であった⁵¹⁵。

●畑正吉

畑正吉は、東京美術学校出身で国民美術協会理事を務めていた関係もあり中條精一郎による推挙とも考えられるが、中村順平がフランスへ向けて出港する際、神戸で見送りをした人物であり⁵¹⁶、中村順平との親交も厚かったと考えられる。

畑正吉は1882年2月富山県高岡市に生まれた。1906年4月東京美術学校（現、東京芸術大学）彫刻本科卒業、引続き研究科在籍する。翌1907年7月商務省海外実業練習生を命ぜられ、工芸彫刻研究のためフランス・パリ留学する。1910年に帰国し、東京美術学校奉職の後、1915年造幣局彫刻技術顧問となる。1921年4月文部省より工芸彫刻研究のため、フランス、イタリア、ドイツ、イギリス、アメリカ各国留学を命ぜられる。1922年7月帰国する。同年8月より東京高等工芸学校工芸彫刻部教授となり1942年8月に退官する⁵¹⁷。

横浜高等工業学校建築学科には、1926年1月4日付けで「講師嘱託」となっているが、該当年次の『横浜高等工業学校一覧』の建築学科講師欄に畑正吉の名は刻まれていない⁵¹⁸。1927年1月12日付けで「解嘱」され、教え子である渡邊郁一を後任に据えた。

●伊藤三郎

伊藤三郎は、鈴木禎次の教え子で、フランス帰国直後の中村順平の下で修行した人物である。

神戸蕃によれば⁵¹⁹、伊藤三郎は1897年7月に名古屋の木匠の名家、伊藤平左衛門家の一人として生まれたという。伊藤三郎は1916年に名古屋高等工業学校建築科に入学した。当時、一学年上には現在の松田平田設計の創始者である松田軍平が、一学年下には城戸武男がいた。伊藤三郎は、武田五一が同校校長であった時代に入学し卒業した。伊藤三郎在学時は、鈴木禎次、土屋純一、栗山俊一の3教員から、鈴木禎次、土屋純一、三浦耀の3教員が中心となって建築教育が行なわれた。

伊藤三郎は、1919年3月に同校卒業後、中部鉄道管理局営繕課に勤務し、翌年、歩兵第六連隊第三中隊に所属する。その後、伊藤三郎は、東京鉄道局工務課建物係、鉄道省第二改良事務所技術雇を経て、千葉利智⁵²⁰事務所に勤務し、1924年にフランスから帰国した中村順平に師事した。

1926年4月に、伊藤三郎は横浜高等工業学校に助教授として着任した⁵²¹。伊藤三郎の着任の具体的な経緯は明らかではないが、フランスから帰国した中村順平のもとで「建築図画」の習得を目的に修行していたことを考えれば、中村順平の推薦と考えられる。1931年に伊藤三郎は、教授へ昇進し、1935年から2ヵ年、フランスにて在外研修を行った。

また、神戸蕃によれば⁵²²、伊藤三郎は、1940年ごろに召集され、目黒にあった通信関係の学校の軍事教官となった。なお、この召集に関係し、1937年の段階で伊藤三郎は、陸軍技術本部への充当が定められていたことが、防衛省防衛研究所所蔵の資料⁵²³から読み取れる。また、1940年以降の『文部省職員録』では、軍事教官となった伊藤三郎の肩書きに「陸軍少尉」が加えられた。戦後、伊藤三郎は、1951年3月に横浜工業専門学校を依願退職後、同年4月より横浜市立鶴見工業高等学校に着任した。その後、伊藤三郎は、1963年4月に開校間もない愛知県の中部工業短期大学（翌1964年4月より中部工業大学）の教授となり、1973年までその職にあった⁵²⁴。伊藤三郎は、1984年9月24日に亡くなった。

●佐藤好

佐藤好の横浜高等工業学校への着任は、曾禰達蔵との関係が指摘できる。

佐藤好は、1889年8月15日に福島で生まれた。佐藤好は、1911年東京高等工業学校建築科を卒業し、京都帝国大学工科大学土木工学科（選科）に1915年に進学するが、同校土木工学科卒業生名簿に佐藤好の名はない。佐藤好は、1918年2月より三菱合資会社技師として1922年5月まで勤務した。なお、佐藤好が技師を務めた三菱合資会社は、曾禰達蔵が定年まで勤務した会社であり、曾禰達蔵が退職後も顧問的な立場で関与した会社である。その後、佐藤好は、警視庁警察技師を経て、横浜高等工業学校建築学科教授に就任する。佐藤好は、1935年に同校講師となり、その後、日本大学専門部工科教授となった⁵²⁵。

●森井健介

森井健介は、自著『師と友：建築をめぐる人びと』⁵²⁶（1967）で、横浜高等工業学校講師への着任の経緯について、中條精一郎からの推挙であったことを述べている。森井健介は、1908年第一高等学校卒業後、東京帝国大学建築学科に入学し、1911年同校を卒業し、その後、大学院へ進学した。森井健介は、大学院在籍中、早稲田大学講師となる。1913年からドイツに留学し、佐野利器の世話によりシャルロッテンブルク工科大学で構造力学や材料科学の講義などを聴講し、翌1914年に帰国した。その後、森井健介は、東京美術学校講師となり、1944年まで同校で教鞭を執った。森井健介は、大正・昭和を代表する建築教育者のひとりである。

●山田七五郎

山田七五郎は、中條精一郎の1学年下のクラスを卒業した東京帝国大学出身者で、中條精一郎の推薦が考えられる。山田七五郎は、1896年第二高等中学校卒業後、東京帝国大学工科大学に入学し、1899年同校建築学科を卒業する。卒業後、同年10月15日より有栖川宮邸御建築掛員となり1903年1月7日より文部省福岡医科大学創立工事監督補助嘱託、その後、第三光等商業学校設立工事取調嘱託を経て、1905年8月7日より1913年6月28日まで長崎県技師として長崎県庁舎、長崎市庁舎を手がけた。山田七五郎は、その後、1914年4月9日より横浜市技師となり、1922年4月1日より横浜市の初代建築課長を務めた。山田七五郎は、退職する1929年5月2日まで、横浜市建築課の営繕組織を統率し、その間、山田七五郎は、工手学校にて講師なども務め、1925年にはフランス・パリで開催された現代装飾美術・産業美術国際博覧会（通称アール・デコ博）における日本館の設計担当者を務めた。山田七五郎は、横浜市を定年退職後、横浜高等工業学校の「施工法」科目の講義を担当し、同校の講義を戦時中まで続けた。なお、山田七五郎は、1945年6月27日に没している。

●渡邊郁一

渡邊郁一は、畑正吉が牽引した東京高等工芸学校工芸彫刻部を1924年3月に卒業後、同校工芸彫刻部研究生を経て1927年に横浜高等工業学校嘱託講師に任官された。渡邊郁一は畑正吉の後任として推挙により採用されたものと思われる。東京高等工芸学校工芸彫刻部の同級には、中村順平のアシスタントとして船内インテリアの設計活動を支えた大泉博一郎（1903-?）がいた⁵²⁷。なお、中村順平は、横浜高等工業学校建築学科が開設された1925年から2年間、「講師」として東京高等工芸学校工芸彫刻部の「特別講義」を担当した⁵²⁸。この講義を聴講した学生に、大泉博一郎と渡邊郁一がいた。

以上の第1期の教員のほとんどは、鈴木達治、中條精一郎、中村順平との関係の深い人物と思われ、可能な限り中村順平の教育が推進できる環境づくりが行なわれたといえる。また、1927年には第1回生の卒業と同時に建部裕一郎が休職したため、中村順平がめざした建築教育を強固に推進できた可能性がある。1927年の建部裕一郎の休職以後、東京帝国大学出身の専任教員不在という他校では見られない状況ではあったが、その代役が講師を務めた森井健介とみられ⁵²⁹、さらにその後、林豪蔵に引き継がれた。なお、1931年に林豪蔵が赴任後、構造系教員の変動が起こり、構造系教員が東京帝国大学出身者で固められた。

2.3 設計・製図科目の教育者

中村順平が「注意書」で述べたように、入学後の「木炭写生」（なお、『横浜高等工業学校一覧』の教育プログラム上では「木炭画」）、「塑造」、「幾何図学」の3科目は横浜高等工業学校建築学科の重要科目であった。本論第2編・第2章で述べたように、エコール・デ・ボザールの入学試験の際に課された科目でもあり、エコール・デ・ボザールの2級課程においても単位取得が必要とされた科目であった。

これら3科目について、横浜高等工業学校では、中村順平が一時期「木炭画」科目を担当したが、概ね中村順平以外の教育者が担当した。これら3科目を同校の建築教育において重要視したにも関わらず、教育プログラム上、中村順平が関与していないことから、これらの教育の担当者は、中村順平の思想を理解した人物で構成された可能性がある。つまり、中村順平は、これらの科目に自身と関わりの深い人物を配し、自身の教育理念の確実な実践を目論んだ可能性がある。

ここでは、これら設計・製図科目を担当した教育者と中村順平の関係を考察する。なお、建築学科の設計・製図科目は、『横浜高等工業学校一覧』上の教育プログラム上の科目名表記と職員名簿の職員名上部に記載された科目名表記が異なっている。ここでは、両者を総合的に判断し、設計演習を含む「実習」や「製図」または「建築製図」、「図学」およびその細目としての「幾何図学」や「配景図学」および「規矩」、さらに「木炭画」や「塑像」を設計・製図科目の範疇に含めた。

まず、「製図」や「規矩」科目を担当した鈴木秀一は、在学中、中村順平の設計競技課題において高い評価を受けた人物の一人で、多くの課題でその手腕を発揮した。鈴木秀一は、神奈川県立工業学校建築科を経て横浜高等工業学校入学し、同校卒業後、「雇」という立場で教育を支えた中村順平の教え子である。鈴木秀一は教育する側の立場になってからも設計競技課題に挑戦し、優秀な成績を修めた。鈴木秀一は1934年に助教授となり、1937年に出版された中村順平の設計競技課題の優秀作品集『横浜高等工業学校建築設計競技図集』⁵³⁰の編纂に携わった。なお、鈴木秀一による「中村順平問題表」⁵³¹が残されているように、中村順平の「実習」科目の補助も行なっていたとみられる。

なお、その他、「製図」科目が職員名簿上に記載された人物に、森井健介や林豪蔵がいる。建築学科で行なわれた設計課題文から、構造設計を附与した設計課題の問題作成者に両名の名を確認したが、主として設計課題は中村順平によって作成されたことから、両名が設計製図課題に深く関与していないと判断した。

次に、「図学」関連科目を担当した人物として、伊藤三郎が挙げられる。

伊藤三郎は中村塾の第1期生⁵³²ということもあり、中村順平による直接指導を仰いだ上で教員として赴任している。伊藤三郎は、名古屋高等工業学校の後輩山崎忠夫（1922年3月卒）とともに、1924年にフランスから帰国して間もない中村順平の門を叩き、中村順平に「建築図画」の手ほどきを受けた。横浜高等工業学校では、1926年4月より助教授として教鞭をとり、1935年2月より2ヵ年、「建築構造」、「幾何図学」の研究のためフランスに留学した。在職期間中、伊藤三郎の主な担当科目は、「幾何図学」、「配景図学」、「測量」、「建築材料」で、一時期「家屋構造」も担当した。このように、中村順平の同窓であり、教え子であり、フランス留学経験者であったことを考慮すれば、中村順平の教育を支えた人物であった可能性が高い。

また、1940年から神戸蕃も助教授として「図学」科目を担当したが、それ以前の1936年より「雇」という立場で教育に関与しており、すでに、「雇」の時代から「図学」科目等を補助した可能性がある。神戸蕃は、横浜高等工業学校建築学科出身者で、学生時代から中村順平の設計競技課題において高い評価を受けた人物であった。また、神戸蕃はフランス語に堪能であったようで、しばしば中村順平からの頼まれごとか、未刊行だがジョルジュ・グロモールの著書を翻訳したことが知られている⁵³³。

一方、エコール・デ・ボザールにおいても重視された「塑像」科目については、中村順平と親交のあった畑正吉が当初担当し、その後、建築学科開設3年目よりその教え子であり、中村順平の特別講義を受けた渡邊郁一が1938年まで担当し、その後、中村順平の教え子である小泉勝世や、渡邊郁一の同級生であり中村順平の船内インテリア・デザインを長年支えた大泉博一郎が同科目を担当した。また、戦時下の1942年ごろより工業教員養成所建築学科第1回卒業生、田辺謙輔が「塑像」科目の担当者に加わった。なお、渡邊郁一、小泉勝世、大泉博一郎の3名は、「木炭画」科目も担当した。

小泉勝世は、横浜高等工業学校建築学科在学中、学生時代から中村順平の設計競技課題において高い評価を受けた人物で、鈴木煙州の墓碑のデザインをしたことでも知られている。なお、小泉勝世は中村順平の「16時間略設計」の設計課題「煙州鈴木達治氏之墓」（1935年5月31日出題）において最高賞である銀賞を獲得した。小泉勝世は、日本画家で東京美術学校教授をつとめた小泉勝爾（1883-1945）の子息で、卒業後は中村順平の個人事務所勤務となり、1938年度頃から渡邊郁一の後任講師として「塑像」および「木炭画」を担当し、1940年度から「助教授」となった。

『文部省職員録』によれば大泉博一郎は1940年の人員倍増の時期に「助教授」に就任した。大泉博一郎は、父、大泉龍之輔⁵³⁴（1868-1946）から中村順平のことを知り、自身が東京高等工芸学校の学生時代に同校の特別講師として中村順平の招聘を願った⁵³⁵。大泉博一郎は同校卒業後、中村順平の個人事務所に勤務し、中村順平の設計活動を補佐した。なお、後年、大泉博一郎は今和次郎監修のもと『建築百年史：近代編』⁵³⁶を著した。

このように、設計・製図科目の教育者には、中村順平のほか、中村順平と同窓の伊藤三郎や、横浜高等工業学校出身者である鈴木秀一、小泉勝世、神戸蕃らが担当し、戦渦の時期にあっても中村順平の中村塾の初期のメンバーで、中村順平の設計活動を支えた大泉博一郎も加わり、中村順平の推進した建築教育が常に保持された。

2.4 設計・製図科目の教育プログラム上の時間数：他校との比較から

次に、横浜高等工業学校において「木炭画」、「塑造」、「幾何図学」等の設計・意匠系科目が重視された傾向を、他の高等工業学校の教育プログラム上の毎週時間数との比較から検証する。

まず、横浜高等工業学校においてこれら3科目が重視されたことを、これらの科目に割り当てられた教育プログラム上の時間数から読み取る。そこで、まず、名古屋、神戸、福井、横浜、仙台の5つの高等工業学校における設計・意匠系科目の時間数の比較表（表3.1.2）を作成した⁵³⁷。なお、中村順平の「建築学」科目はAに含め、自在画関連科目には、横浜高等工業学校における「木炭画」および「塑像」の時間数を記載した。

各校の授業時間数を比較すると、必ずしも横浜高等工業学校は、設計・意匠関連科目に多くの時間数が割り当てられたわけではない。

一方、同校の特徴として、AおよびCの分類に多くの時間数が割り当てられていたことがわかる。特に「木炭画」や「塑像」科目を含むCの分類については、他校に比べ、時間数が最も多く、また、「図学」に関しても時間数が多く割かれ、表現力を高める基礎科目に多くの時間数が割り当てられていたといえる。

なお、CおよびDの時間数を多く割いている学校は、名古屋と横浜の2校で、名古屋は中村順平の母校であり、辰野金吾の弟子である鈴木楨次が黎明期を牽引した学校である。本論第2編第1章で指摘したように、名古屋は辰野金吾が建築教育に導入した自在画教育が重視された教育機関であり、また、鈴木楨次の弟子である中村順平が牽引した横浜も、まさに辰野金吾が近代日本に導入した教育を継承した発展させた建築教育機関であった。

表 3.1.2 名古屋・神戸・福井・横浜・仙台高等工業学校建築学科設計・意匠系科目比較表

校名	A	B	C	D	E	A～E合計 時間数	設計意匠関連科目割合	
	建築計画 意匠装飾 等 関連科目	建築史 関連科目	自在画 装飾画 造型 関連科目	図学 用器画法 規矩法 関連科目	製図 実習 関連科目		専門科目 比 (※1)	全科目比 (※2)
名古屋高等工業学校	15	20	32	6	136	209	78.28% (209/267)	59.54% (209/351)
神戸高等工業学校	6	24	18	3	158	209	81.01% (209/258)	59.54% (209/351)
福井高等工業学校	9	6	15	4	127	161	58.97% (161/273)	45.87% (161/351)
横浜高等工業学校	15	9	45	6	117	192	76.19% (192/252)	52.03% (192/369)
仙台高等工業学校	16	10	15	3	144	188	75.81% (188/248)	53.56% (188/351)
備考	A～Eの数字は、各校学校一覧の教育プログラム上の数字（毎週時間数）から算出 ※1 比率（%）表記下部の括弧内の数字は、A～E合計時間数／専門科目合計時間数 ※2 比率（%）表記下部の括弧内の数字は、A～E合計時間数／全科目合計時間数							

小結

本章では、横浜高等工業学校の背景を概括し、同校建築学科の教員陣を整理し、設計・製図教育に従事した教員構成の特徴を整理した。

「1. 横浜高等工業学校建築学科」では、横浜高等工業学校の成立背景を整理し、建築学科増設までのいきさつを概括し、その後、中村順平に着目し、中村順平の教授就任までのやり取りを整理し、さらに、中村順平が入学希望者に向けて発行した「注意書」にみる「建築家」観と「建築教育」観を概括した。

1.1 では、学校成立背景を整理した結果、第一次世界大戦を経て、工業発展の機運の高まりにより、エンジニア養成が叫ばれた結果、高等工業学校が次々に新設・増科された時期である 1919 年度から 1924 年度の期間にそれ以前の 8 校から 18 校へと増加し、そうした時代の流れのなかで、横浜高等工業学校が成立したことを確認した。

1.2 では、建築学科の成立背景を整理した結果、横浜高等工業学校では開学当初、建築学科は設置されておらず、1923 年の関東大震災を契機に横浜市と横浜高等工業学校が文部省へ陳情し、建築学科の増設が認可された歴史的経緯を確認した。当初、学校側は土木と建築の 2 科の増設希望であったが、結果的に建築学科のみ増設された。そして、1924 年 11 月に増設に向けた予算が計上され、翌年 1925 年に横浜高等工業学校建築学科が誕生した。

1.3 では、中村順平が教授へ就任するまでの過程およびその時代背景を整理した結果、当時の横浜高等工業学校の校長鈴木達治が、建築学科の教員選定にあたり曾禰達蔵に相談を持ちかけ、中村順平に白羽の矢を立てたことを鈴木達治の『煙州満筆』から確認した。また、中村順平が「高等官 5 等」に至った経緯について、国立公文書館の史料を入手しその経緯を確認した。一方で、『横浜高等工業学校一覧』に掲載された卒業生の勤務先の分析結果をもとに、中條精一郎との関係から横浜高等工業学校を日本建築士会が目指した「アーキテクト」養成の教育機関とする意図があった可能性を指摘した。

1.4 では、中村順平の「注意書」にみる「建築家」観ならびに「建築教育」観について整理した結果、中村順平の「建築家」観では、ジュリアン・ガデが『建築の諸要素と理論』で提示した「建築家」観との類似性や、中村順平の師である曾禰中條建築事務所の中條精一郎の「建築家」観との類似点や相違点を指摘した。また、中村順平は、初学者に対し、写生画家であること、木炭写生や塑像の重要性、幾何図学や数学、文学的素養の必要性を説いた「建築教育」観を示した。こうした概念は、ジュリアン・ガデが『建築の諸要素と理論』において指摘した「建築教育」観と一致した。さらに、中村順平の「建築教育」観において重視された科目がエコール・ポリテクニクにおいて重視された科目と類似することを指摘した。

次に、「2. 設計・製図科目の教育者」では、横浜高等工業学校建築学科の教育者を整理し、その中から開設から 1930 年度までの教育者を取り上げ、中村順平との関係を分析した。さらに、建築学科の教育者のうち設計・製図科目を担当した教育者に着目し、中村順平との関係を分析し、加えて、設計・製図科目重視の傾向を、他の高等工業学校との教育プログラムとの比較を通じ分析した。

2.1 では、横浜高等工業学校建築学科の教員を整理した結果を、設計・意匠関連科目の担当者、構造関連科目の担当者、施工法、外国語の 4 つに分類し、一覧表（表 3.1.1）にまとめた。なお、ここでは、

『横浜高等工業学校一覧』および『文部省職員録』の2種を用いることで1943年度までの教育者を整理した。この整理により、開設3年目から1931年の林豪蔵の着任までの間、東京帝国大学出身者不在の時代が存在したことを確認した。また、外国語科目においてフランス語が必修であったことを確認し、他の高等工業学校との違いを指摘した。

2.2では、2.1で整理した教員から1930年度までの教育者を取り上げ、それぞれの来歴を整理し、初期の教育者と中村順平との関係を分析した。その結果、中村順平とのつながり、中條精一郎とのつながり、鈴木達治とのつながりのある教育者が多数を占めていることを確認し、中村順平の建築教育を推進するための人選であった可能性を指摘した。

2.3では、2.1で整理した教員のうち、主に設計・製図科目を担当した教育者を整理し、中村順平との関係を分析した。特に、中村順平が「注意書」で入学後の必要科目として取り上げた「木炭写生」、「塑像」、「幾何図学」の3科目の教育者には、中村順平と関連の深い人物が担当したことを確認した。

2.4では、横浜高等工業学校の建築教育が設計・製図科目重視の教育であった可能性を他の高等工業学校の教育プログラム上の時間数との比較から考察した。その結果、2.3で述べたように中村順平と関連の深い人物が担当した「木炭写生」、「塑像」、「幾何図学」の科目が他校に比べて重視されたことを明らかにした。また、こうした傾向は、中村順平の母校である名古屋の教育においても確認でき、辰野金吾の孫弟子にあたる中村順平が牽引した横浜の学校は、辰野金吾が近代日本の建築教育に導入した自在画重視の教育を発展させた建築教育機関であったことを指摘した。

以上から、中村順平がフランスの「建築家」養成の教育機関における建築教育観と、フランスの「技術官僚」養成の教育機関で重視された科目を意識し、横浜高等工業学校の建築教育の方向性を定めたことが明らかにした。特に、「木炭写生」、「塑像」、「幾何図学」の科目の教育には、中村順平の思想を共有した人物があたり、黎明期からこうした教育者によって編成されていた。

第1章 註

- ⁴⁴⁹ 拡充は官立学校のみならず、私学の大学化なども促進した。
- ⁴⁵⁰ 日本建築学会編『近代日本建築学発達史』丸善、1972
- ⁴⁵¹ 新谷肇一「戦前の高等工業学校の制度と建築科の教育に関する研究」『高等専門学校教育と研究：日本高専学会誌』Vol.8(2), pp.17-24, 日本高専学会, 2003, p.18
- ⁴⁵² 日本建築学会編, 前掲書
- ⁴⁵³ 中上川義一郎,『高等工業学校入学の要領』富勘書院, p.1
- ⁴⁵⁴ 日本建築学会編, 前掲書
- ⁴⁵⁵ 古宇田実「建築教育私見」『建築雑誌』Vol. 37, No. 446, pp.367-374, 建築学会, 1923
- ⁴⁵⁶ 古宇田実, 前掲書, p.368
- ⁴⁵⁷ 古宇田実「建築教育」『建築雑誌』Vol.46, No. 559, pp.843-854, 建築学会, 1932
- ⁴⁵⁸ 鈴木忠五郎「現代建築教育再検討と之が改善」『建築雑誌』Vol.52, No. 643, pp.1091-1096, 建築学会, 1938
- ⁴⁵⁹ 『横浜国立大学工学部五十年史』では通貨価値換算値として約19億5千万円と記載している。(横浜国立大学工学部編『横浜国立大学工学部五十年史』横浜国立大学工学部, 1973)
- ⁴⁶⁰ 鈴木達治『煙州満筆』煙州会, 1951, p.24
- ⁴⁶¹ 「陳情書 横浜口頭工業学校拡張の件」(横浜国立大学工学部編, 前掲書, p.57)
- ⁴⁶² 鈴木達治『煙州残筆』煙洲鈴木達治先生米寿祝賀会, 1959, p.125
- ⁴⁶³ 横浜高等工業学校編「第六年 自大正14年至大正15年」『横浜高等工業学校一覧』横浜高等工業学校, 1925, p.99
- ⁴⁶⁴ 横浜国立大学工学部編, 前掲書, pp.68-69
- ⁴⁶⁵ 横浜高等工業学校編, 前掲書, 1925
- ⁴⁶⁶ 鈴木達治, 前掲書, 1959, p.125
- ⁴⁶⁷ 鈴木達治, 前掲書, 1951, p.33
- ⁴⁶⁸ 官位の高い建部裕一郎が高等官六等で任官されたため、中村順平の叙位を建部裕一郎以上とする必要があったのだろう。
- ⁴⁶⁹ 「陸軍工兵軍曹中村順平任官ノ件」『任免裁可書・大正十四年・任免卷三十二』(請求番号: 本館・2A-019-00・任B 01257100, マイクロフィルム: リール番号: 038500, 開始コマ: 0631, 1925年7月13日) 3枚目(左) 5枚目(右)
- ⁴⁷⁰ 鈴木達治, 前掲書, 1951
- ⁴⁷¹ 中村順平(口述)成沢福松(記)「中村順平先生隋問記 No12」『あすなろ』No.8, 檜の会, 2007, p.13。また、網戸武夫によれば、京都帝国大学建築学科の武田五一との面会もあったという逸話が残されている。しかし、同校の建築教育を牽引した武田五一は、自身の教え子を次々と建築教育者に仕立て上げ、開校間もない同校での武田五一自身の建築教育の徹底を図った。このことを考えれば、武田五一の教育を受けた教え子でもない中村順平が教授に就任する可能性は低かったと考えられる。
- ⁴⁷² 村松貞次郎『日本建築家列伝』鹿島出版会, 1965, pp.27-28
- ⁴⁷³ 森井健介『師と友ー建築をめぐる人びと』鹿島出版会, 1967, p.63
- ⁴⁷⁴ 中村順平「建築学科に入学を志望する青年諸君への希望」『建築雑誌』Vol.39, No.470, pp.33-35, 建築学会, 1925
- ⁴⁷⁵ 中村順平「建築学科(本科)に入学を志望する青年諸君への注意(大正14年3月)」『水煙会会報』No.7, 水煙会,

1977

476 中村順平, 前掲書, 建築学会, 1925, pp.33-34

477 ジー・ガデー著, 長野宇平治訳『建築士及其職責』建築世界社, 1929

478 中條精一郎「註文者と建築技師と請負業者」『建築雑誌』Vol.25, No.292, pp.84-92, 建築学会, 1911

479 『建築雑誌』25周年記念講演会。当時の建築学会会長辰野金吾の開会の挨拶に続いて、関野貞による「東京市の古社寺」、古宇田実による「住宅と庭園」、中村伝治による「商店の陳列室」、大江新太郎による「日光建築と議院建築」に続いて、中條精一郎が「註文者と建築技師と請負業者」と題した講演を行なった。中條精一郎の講演の後には、武田五一による「建築と色」、中村達太郎による「東京市に於ける西洋建築の沿革」が続き、最後に当時の副会長である曾禰達蔵による閉会の言が発せられ、この講演会は終了している。

480 三三文房編『東京百事便』三三文房, 1890

481 東京帝国大学編「別冊大正8年」『東京帝国大学一覧』東京帝国大学, 1919を参照

482 ジュサイア・コンドルが民間の建築設計事務所を開設した翌年に出版されているように、民間の建築設計事務所を営んでいる人物の名前は見られない。

483 土居義岳『アカデミーと建築オーダー』中央公論美術出版, 2005

484 村松貞次郎, 前掲書, p.40

485 鈴木達治, 前掲書, 1959, pp.128-129

486 横浜高等工業学校編, 前掲書, 1925, p.109に記載された表記には、「6月3__日」とあるが、建部祐一郎の任官の記載のほうが、斎藤茂三郎よりも前に記載されている、誤記と判断し、「6月30日」とした。

487 横浜高等工業学校編「第四年 自大正十二年至大正十三年」『横浜高等工業学校一覧』横浜高等工業学校, 1924, p.77によれば、阿部美樹志は1923年1月17日付けで「講師嘱託」として任官された。

488 横浜高等工業学校編「第七年 自大正十五年至昭和二年」『横浜高等工業学校一覧』横浜高等工業学校, 1927

489 堂畑辰蔵は、1943年度の『文部省職員録』まで教職員名簿に掲載された。堂畑辰蔵は、神奈川県立工業学校家具科の出身で、1924年3月に同校第10回生として卒業後、横浜木工所に勤務した。(神奈川県立工業学校編「大正十三年五月一日現在」『神奈川県立工業学校一覧』神奈川県立工業学校, 1922) その後、堂畑辰蔵は、1926年より横浜高等工業学校建築科の「雇」として、また、1931年からは「嘱託」職員として勤務し、1939年ごろより「助手」となった。堂畑辰蔵は「建築図画」の下絵の拡大やガラス乾板を使用した「建築図画」の写真撮影などを行なった。

490 建部祐一郎は1928年3月31日付けで「休職」となり、1930年3月31日付けで「休職満期」となり横浜高等工業学校を去っている。(参照:『横浜高等工業学校一覧』)

491 横浜高等工業学校編「第十二年 自昭和六年至昭和七年」『横浜高等工業学校一覧』横浜高等工業学校, 1932

492 林豪蔵は1897年に生まれた。義父は東京帝国大学出身の建築家大熊喜邦(1877-1952)である。林豪蔵は1927年に東京帝国大学建築学科を卒業し、大阪府建築課に勤務する。林豪蔵は1931年に横浜高等工業学校に講師となり、同年10月には教授となった。林豪蔵は戦前・戦後にわたり横浜高等工業学校から横浜国立大学工学部の教授をつとめ、専任教員として旧制高等工業学校から新制大学工学部を連続して教鞭をとった人物のひとりである。(水煙会編『水煙会会報』No.5, 水煙会, 1975, p.9)

493 伊藤三郎は1937年6月24日付けで「在外研修ヨリ帰朝」し、横浜高等工業学校に復職している。(参照:『横浜高等工業学校一覧』)

494 現在確認できる『横浜高等工業学校一覧』は建築学科が設立された当時「第六年 自大正14年至大正15年」から

「第二十一年自昭和十五年至昭和十六年」までである。そのため、1941年度から1943年度までの情報は『文部省職員録』を参照した。また、『横浜高等工業学校一覧』と『文部省職員録』の間での不整合などがあった場合は適宜情報を取捨選択した。なお、1942年には当時文部省技手をつとめていた小田代恒正が「嘱託」として加わった。

⁴⁹⁵ 網戸武夫『情念の幾何学』建築知識社、1985、p.91によれば、中村順平は東京大正博覧会会場設計の際、「東京市嘱託」となっていた。また、網戸武夫によれば中村順平が「陸軍歩兵伍長」と述べられているが、国立公文書館資料から「歩兵」ではなく「工兵」であったことが判明した。

⁴⁹⁶ 村松貞次郎、前掲書、p.27

⁴⁹⁷ 文部省編「大正八年」『文部省職員録』文部省、1919

⁴⁹⁸ 東京市編「大正十一年八月」『東京市職員録』東京市、1922および東京市編「大正十三年七月」『東京市職員録』東京市、1924参照

⁴⁹⁹ 横浜市建築局企画管理課編『横浜・都市と建築の100年』横浜市建築局企画管理課、1989、p.198

⁵⁰⁰ 松永文雄「第5章建築学会における中等建築教育の検討」『我が国における中等建築教育の確立に関する基礎的研究：大正末、昭和初期の文部省内と建築学会の検討活動を通じて』九州大学、2008、学位論文、p.113。松永文雄が述べるように、「実業学校程度ノ標準教科書編纂委員会」には、大熊委員長、森井健介幹事以下、20名の委員が名を連ねた。20名のうちの大半は高等教育機関の教育者で、東京帝国大学、京都帝国大学、早稲田大学の3大学から5名、東京、名古屋、神戸、福井、横浜の5つの高等工業学校及び東京美術学校から9名が委員に選出された。その内訳は、東京帝国大学：内田祥三、佐野利器、京都帝国大学：武田五一、早稲田大学：内藤多仲、吉田享二が、高等工業学校からは東京：小林政一、中村伝治、野田俊彦、前田松韻、名古屋：土屋純一、神戸：古宇田実、福校：坂部安治、横浜：建部裕一郎、東京美術学校：大沢三之助であった。その他の委員は秋保安治、秋山岩吉、池田譲次、渋谷元郎、津田信良、宮本金七であった。

⁵⁰¹ 松永文雄、前掲書、p.114

⁵⁰² 古宇田実は辰野金吾が退官する1902年に東京帝国大学を卒業し、その後、庭園研究のため大学院へ進学した。翌年には東京美術学校嘱託に、1905年には同校教授となり、建築科設置以前の同校図案科において建築系科目の教鞭をとった。古宇田実の中條精一郎と同様に第一高等学校から東京帝国大学へ進学し、斎藤茂三郎もまた同様に第一高等学校出身者である。古宇田実は「一高会」（森井健介によって催された小島憲之の第一高等学校在職25年を記念した会がきっかけで生まれた第一高等学校及び東京帝国大学建築学科（造家学科も含む）卒業生などで構成された会）のメンバーで、中條精一郎とのつながりや面識もあった。古宇田実は1919年に建築装飾研究のために留学し、インド、イギリス、フランス、イタリア、アメリカを経て1922年に帰国した。古宇田実は、帰国後、神戸高等工業学校建築学科主任教授になり、東京美術学校教授との兼任となる。なお、古宇田実はこの留学の際、パリ留学中の中村順平と度々接触していた。（網戸武夫『情念の幾何学』建築知識社、1985、p.131）

⁵⁰³ 東京帝国大学編「従明治四十年至明治四十一年」『東京帝国大学一覧』東京帝国大学、1907

⁵⁰⁴ 平田勝政「大日本優生学の研究」『長崎大学教育学部紀要 教育科学』Vol. 63、pp15-29、長崎大学教育学部、2002

⁵⁰⁵ Banister F. Fletcher : A History of Architecture on the Comparative Method" Fifth Edition, B. T. Batsford, 1905

⁵⁰⁶ フレッチャー『建築史』（古宇田実・斎藤茂三郎共訳）岩波書店1919

⁵⁰⁷ フレッチャー親子は、父パニスター・フレッチャー（Banister Fletcher, 1833-1899）はキングス・カレッジ・ロンドンの教員を務め、子パニスター・フライト・フレッチャー卿（Sir Banister Flight Fletcher, 1866-1953）はR.I.B.A.の会長などを務めた。

- 508 田口武一「阿部美樹志先生の伝記に関連して」『水煙会会報』No.23, 水煙会, 1994, p.31
- 509 当時の肩書き: Professor of Municipal and Sanitary Engineering, in charge of Theoretical and Applied Mechanics
- 510 江藤静児『鉄筋混凝土(コンクリート)にかけた生涯 阿部美樹志と阿部事務所』日刊建設通信新聞社, 1993, p.17
- 511 大阪歴史博物館編『館蔵資料集 5 建築家・中村順平資料』大阪歴史博物館, 2009, p.92
- 512 田口武一, 前掲書, p.31 や, 江藤静児, 前掲書
- 513 東洋セメント工業株式会社は磐城セメントと 1950 年に合併される。磐城セメントは 1963 年に住友セメント株式会社へと社名変更, 1994 年に大阪セメントと合併し, 住友大阪セメント株式会社となり現在に至っている。
- 514 小野田滋「阿部美樹志とわが国における黎明期の鉄道高架橋」『土木史研究』第 21 号, pp.113-124, 土木学会, 2001 や江藤静児, 前掲書, 1993
- 515 横浜高等工業学校編「第十二年 昭和七年至昭和八年」『横浜高等工業学校一覧』横浜高等工業学校, 1933 及び横浜高等工業学校編「第十三年 昭和八年至昭和九年」『横浜高等工業学校一覧』横浜高等工業学校, 1934
- 516 中村順平「航西日記」『檜』No.9, 檜の会, 1998, p.47
- 517 関勇「畑正吉先生の消息と創立同時の講師の先生がた」『水煙会会報』No.19, 水煙会, 1990, p.8
- 518 横浜高等工業学校編「第七年 自大正十五年至昭和二年」『横浜高等工業学校一覧』横浜高等工業学校, 1927, p.105。横浜高等工業学校編「第八巻 自昭和二年至昭和三年」『横浜高等工業学校一覧』横浜高等工業学校, 1928, p.102
- 519 神戸蕃「伊藤三郎先生を偲ぶ」『水煙会会報』No.15, 1985, pp.17-18
- 520 第二高等学校卒業。第二高等学校では佐野利器, 佐藤功一と同期。東京帝国大学工科大学土木学科入学, 1903 年同校卒業。翌 1904 年渡米。1910 年帰国後, 東洋コンプレッソル会社技師長となる。1913 年長崎造船所, 1917 年同所建築課長, 1922 三菱電機会社を経て, 1924 年ごろ千葉利智公務所創設。(参照:「チの部 二」『日本産業人名資料事典, 2 第 2 巻』日本図書センター, 2002)
- 521 以上,『名古屋高等工業学校一覧』の「大正 8 年至大正 9 年」から「昭和 2 年至昭和 3 年」までを参照し経歴を記載した。鉄道省時代最後勤務先は,『名古屋高等工業学校一覧』と『鉄道省職員録』とに相違があったため,『鉄道省職員録』大正 15 年版を参照し「東京改良第二事務所」勤務としている。
- 522 神戸蕃, 前掲書, pp.17-18
- 523 「軍需動員要員適任者(将校)調査名簿 昭和 12 年 8 月調」『軍需動員に関する書類綴 其 2』(陸軍技術本部)
- 524 神戸蕃, 前掲書, pp.17-18
- 525 横浜市建築局企画管理課編『横浜・都市と建築の 100 年』横浜市建築局企画管理課, 1989, p.197 及び『京都帝国大学一覧』,『警視庁職員録大正 13 年 11 月 1 日現在』参照。
- 526 森井健介『師と友ー建築をめぐる人びと』鹿島出版会, 1967
- 527 東京高等工芸学校編「昭和二年度」『東京高等工芸学校一覧』東京高等工芸学校, 1927 によれば大泉博一郎の勤務先は「中村建築事務所(東京)」となっている
- 528 東京高等工芸学校編「大正十四年度」『東京高等工芸学校一覧』東京高等工芸学校, 1925 および東京高等工芸学校編「大正十五年度」『東京高等工芸学校一覧』東京高等工芸学校, 1926 を参照。
- 529 森井健介, 前掲書, 1967, pp.63-65
- 530 横浜高等工業学校建築学教室編『横浜高等工業学校建築設計競技図集』洪洋社, 1937
- 531 大阪歴史博物館所蔵。1935 年ごろのものと思われ『横浜高等工業学校建築設計競技図集』編集用に作成されたものと思われる。

⁵³² 網戸武夫, 前掲書, p.196

⁵³³ 私家版として中村順平のエコール・デ・ボザール時代の師, ジョルジュ・グロモールの著書を数冊翻訳していた。神戸蕃はフランス語に堪能だった人物のようである。

⁵³⁴ 工手学校第1回卒業生。曾禰達蔵に師事し, 後年, 積算事務所を自営する。積算事務所として曾禰中條建築事務所からの仕事の依頼を受け, 中村順平の存在を知っていた。『建築知識』1980年8月号, 建築知識社, p.156) また, 村松貞次郎, 市浦健「改定増補 建築学体系 37 建築学史・建築実務」彰国社, 1968, p.110によれば, 大泉龍之輔の編纂した『建築工事設計便覧』(建築書院, 1887)はひとつの「日本人による個性のある西洋建築技術書」として取り上げられている。

⁵³⁵ 大泉博一郎「解説にかえて」『情念の幾何学』建築知識社, 1985, p.378

⁵³⁶ 今和次郎(監修)・大泉博一郎(執筆)・平沢順(写真)『建築百年史:近代編』有明書房, 1957

⁵³⁷ 各校1935年度版の『～高等工業学校一覧』を参照。なお, 時間数の算出にあたっては, 各校とも必修学科目を中心にまとめ, 名古屋等高等工業学校については「専門選択科目」(時間数不記載)を除外, 神戸高等工業学校については「製図及実験」の時間数の最大値を採用し, 「選択学科目」および「参考学科目」を除外, 福井高等工業学校については「各学期末10日間(70時間)製図」を除外, 仙台高等工業学校については「校外実習」(時間数不記載)を除外した。

第2章 横浜高等工業学校建築学科の 設計・製図教育にみるフランス建築理論と教育手法

1. 設計・製図教育にみるフランス建築理論と教育手法①：「実習」科目

前章で整理したように、中村順平の横浜高等工業学校建築学科での担当科目は、主として「実習」科目と「建築学」科目であった⁵³⁸。同校での建築教育に関するこれまでの研究では、「実習」科目で行なわれた「建築図画」が大きな成果として取り上げられ、その制作方法や表現手法などに関する個人的な体験談とともに、断片的に発表されてきた。また、もうひとつの成果である「設計競技」課題は、ひとつの集大成といえる『横浜高等工業学校建築設計競技図集』（1937）⁵³⁹（以下『図集』（1937））や、網戸武夫の一連の著述に掲載された情報、さらに、これまで開催された展覧会等のカタログに掲載された情報などはあるが、その全貌は余り明らかではない。

筆者は、これまで、中村順平が「実習」科目の教育で行なった「建築図画」ならびに「設計競技」課題に関する史料の存在を調査し、分散した資料の入手に努めてきた。

その結果、「建築図画」関連史料として、檜の会の大西春雄がまとめた「建築図画」のデジタル・データ（以下、「建築図画」D.D.）の存在を確認した。なお、このデータ整理にあたって、大西春雄は、卒業生・故仁瓶進一のご子息である仁瓶俊介の補助を得て私家版としてリスト化した。また、調査の過程において、大西春雄がまとめた「建築図画」D.D.の原データが、卒業生故谷喜夫氏が所蔵した写真ネガであったこと、また、更にその原データであるガラス乾板を檜の会が所蔵したことを確認した。なお、本章では、檜の会が所蔵する「建築図画」D.D.を対象に分析・検討を行なう。

一方、「設計競技」課題資料については、公表された『図集』（1937）掲載課題や大阪歴史博物館館蔵資料集に掲載された課題文のほか、大西春雄が中心となって収集し、仁瓶俊介の補助を得て私家版としてまとめられた「設計競技」課題文のほか、檜の会が保管した未整理の「設計競技」課題文の存在が明らかとなった。なお、本章では、以上の「設計競技」課題文を対象に分析・検討を行なう。ここでは、以上の入手したデータから、中村順平の建築教育にみる「建築図画」の傾向や「設計競技」の種類ならびにその内容とフランスの建築教育との接点を解明する。

1.1 中村順平の「実習」科目概要

1.1.1 「実習」科目の教育プログラム上の時間数

ここでは、教育プログラム上の時間数から中村順平の「実習」科目の概要を概括する。

横浜高等工業学校建築学科の教育プログラムを分析すると、各学期における週当たりの時間数は41時間で、当時の名古屋高等工業学校や東京帝国大学の時間数よりも2時間多い。専門科目の時間は、第1学年では22時間、第2学年では30時間、第3学年では32時間が割り当てられた⁵⁴⁰。

教育プログラムに掲載された中村順平の担当科目「建築学」と「実習」の2科目に着目し、全学年全学期の合計時間数でみると、「建築学」科目は15時間、「実習」科目は117時間（ただし、開設当初から2カ年にあつては111時間）であり、全科目合計369時間の約1/3が、また、専門科目でみれば、合計252時間の約半分以上が、これらの科目に割り当てられた。さらに、各学年での内訳をみると、第1学年では18時間、第2学年では33時間、第3学年では81時間となり、第3学年では教育プログラムの約2/3が中村順平の担当科目「建築学」と「実習」に割り当てられていた⁵⁴¹。

一方、例えば、表3.2.1に掲げたように、1928年度の中村順平以外の教員の担当時間数をみると、中村順平に次いで多くの時間が割り当てられたのは、21時間の佐藤好で、以下、18時間の森井健介・渡邊郁一、9時間の阿部美樹志・齋藤茂三郎、6時間の伊藤三郎、3時間の山田七五郎という順となり、明らかに多くの時間数が中村順平に割り当てられた⁵⁴²。

こうした教育プログラム上の時間数の割合から、建築学科の教育が中村順平によって形成され、特に「実習」科目が重要視されたと考えられる。

表 3.2.1 横浜高等工業学校建築学科・教育プログラム（1928年度）⁵⁴³

科目名	担当者	第1学年			第2学年			第3学年			全学年 合計
		1学期	2学期	3学期	1学期	2学期	3学期	1学期	2学期	3学期	
修身	大西友太	1	1	1	1	1	1	1	1	1	9
体育	横地捨次郎 他	4	4	4	4	4	4	4	4	4	36
外国語	内藤濯	7	7	7	4	4	4	2	2	2	39
物理学	池内本 他	3	3	3	—	—	—	—	—	—	9
漢文	座間美都治	—	—	—	—	—	—	2	2	2	6
数学	安川數太郎 他	4	4	4	2	2	2	—	—	—	18
●基礎科目合計（時間／週）		19	19	19	11	11	11	9	9	9	117
図学	伊藤三郎	2	2	2	—	—	—	—	—	—	6
材料構造強弱	佐藤好	—	—	—	3	3	3	—	—	—	9
鉄骨構造	佐藤好	—	—	—	3	3	3	—	—	—	9
建築構造	森井健介	2	2	2	2	2	2	—	—	—	12
建築材料	森井健介	2	2	2	—	—	—	—	—	—	6
鉄筋構造	阿部美樹志	—	—	—	3	3	3	—	—	—	9
耐震構造学	佐藤好	—	—	—	—	—	—	1	1	1	3
建築設備	不明	—	—	—	—	—	—	1	1	1	3
建築史	齋藤茂三郎	1	1	1	2	2	2	—	—	—	9
建築学	中村順平	1	1	1	2	2	2	2	2	2	15
測量	不明	—	—	—	—	—	—	1	1	1	3
施工法	山田七五郎	—	—	—	—	—	—	1	1	1	3
建築法規	不明	—	—	—	—	—	—	1	1	1	3
木炭画	中村順平	6	6	6	3	3	3				27
塑像	渡邊郁一	3	3	3	3	3	3				18
実習 ・図学実習 ・設計製図	中村順平	5	5	5	9	9	9	25	25	25	117
●専門科目合計（時間／週）		22	22	22	30	30	30	32	32	32	252
●合計（時間／週）		41	41	41	41	41	41	41	41	41	369

1.1.2 「実習」科目の課題分類

「実習」科目では、実際、どのような課題分類が設定されたのか。

開設当初から2年間の『横浜高等工業学校一覧』上の教育プログラムでは、各学年の「実習」科目について、第1学年は「アルケオロジー」、第2学年は「クラシック」、第3学年は「設計」と、それぞれ異なった名称で分類された。開設3年目よりこの分類は解消され、「実習」科目は、「図学実習」と「設計製図」の2つに分類された。つまり、各学年の異なった名称表記は、各学年共通の表現に統一され、「アルケオロジー」および「クラシック」が、後年の「図学実習」に相当し、「設計」が、後年の「設計製図」に相当したと考えられる。

「実習」科目の概要について、『図集』（1937）の中村順平による序文が参考になる。

この図集には、1927年から1937年にかけて横浜高等工業学校建築学科で行われた設計競技課題の一部が抜粋され、課題文と選出された学生の優秀作品が掲載された。図集の体裁は、エコール・デ・ボザールでの設計競技課題の受賞作品が掲載された年次設計競技図集 *Les Concours d'Architecture de l'Année scolaire* を範としていることは、両者を比較すれば明らかである。（図3.2.1および図3.2.2）

中村順平は、この『図集』（1937）の序文において、「実習」科目の内容や課題の種類、その教育方針や目的を述べている。その序文によれば、横浜高等工業学校の「実習」科目での課題は、「基礎設計練習」と「創作的設計練習」という2つの課程に大別され、「基礎設計練習」課程の課題として、まず、建築上の諸要素の分析的研究として「アナリチック」と呼ばれた「要素分析」*Elément d'analytique* 課題が課せられた。

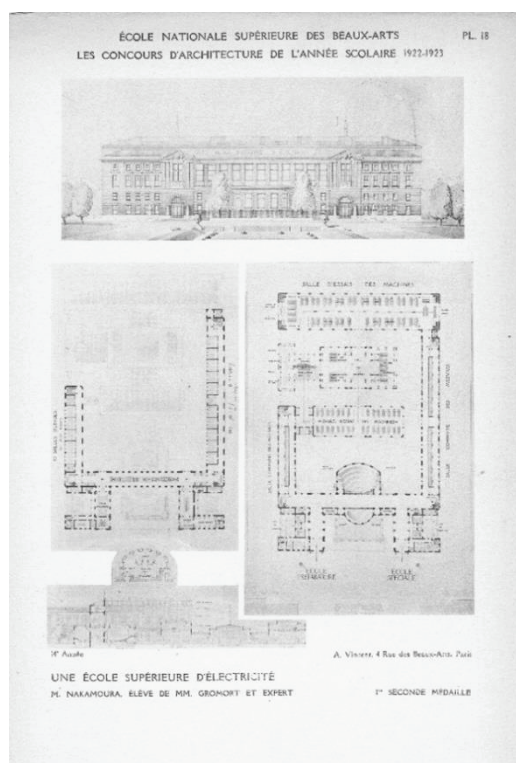


図 3.2.1 エコール・デ・ボザールの設計図集
(中村順平の掲載作品)

(出典：Concours d'architecture de l'année scolaire 1922-1923)

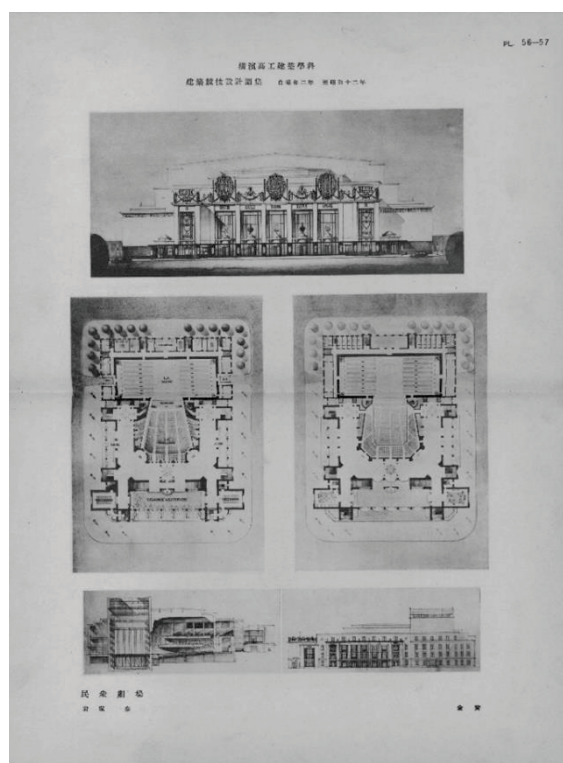


図 3.2.2 横浜高等工業学校の設計図集
(君塚泰の掲載作品)

(出典：『横浜高等工業学校建築設計競技図集』（1937）)

中村順平は「要素分析」課題を課す目的として、「将来自由に composition をなし得べきその能力を育成」を掲げ、この研究で習得すべき重要な骨子として次の5つを挙げている。

- ① 過去の classique の芸術とその時代構造との関係の研究
- ② これら諸建築に関する caractère 表現上の研究
- ③ 以上より健康なる芸術批判力の養成と美しき classique 比例よりする精神上的の審美眼滋養
- ④ 過去各時代の遺産として、又時には世襲財産として吾等に残されたる建築諸要素上の知識
- ⑤ 過去東西建築の composition 上の technique の会得および技能の上達

そして、中村順平はこれらの目的を果たすため、課題での分析対象を日本および外国の「classique（世にこれを古典式と訳し様式的の意味に解するは誤り）の建築上の諸要素」とし、その後続く、建築設計の創作練習の土台づくりを目指し、課題を作成した。

中村順平の定義する「クラシック」classique は、「論理、合理的な伝統と、崇高なる原理とよるして、深い尊敬を以って、神聖視せられた建築諸要素の研究を基礎」⁵⁴⁴とし、その字義は、「何等の起源、時代、世紀、又は場所を意味するものではなく、否、寧ろ此等の時代を超越し、国境を超越し、流派を超越して変遷したる芸術の、総ての勝利者」⁵⁴⁵を示している。中村順平が示す「勝利者」とは、「世の永い批評の歴史を経て、なお美しい物という名声を保持し続けている」⁵⁴⁶ものであり、「勝利者」であることが「クラシック」と呼ばれる必要条件であると述べている。なお、中村順平は、「クラシック」の実例を著書『建築学総説篇』（1944）や『建築という芸術』（1961）で挙げている⁵⁴⁷。

この「要素分析」課題は、中村順平が留学したパリのエコール・デ・ボザールの教育システムに由来し、同校での初学者向けの課題と同様の課題が、横浜高等工業学校の「実習」科目に導入された。また、他の設計課題種別も同様に、エコール・デ・ボザールで行なわれた課題種別分類を明らかに模しており、第2編・第2章を参考にすれば、横浜高等工業学校における「本設計」は、エコール・デ・ボザールの“Concours d'émulation, Projet rendu”，すなわち「設計競技」課題に相当し、「archéologie 競技」は“Projet de l'histoire de l'architecture”，すなわち「歴史」科目の設計課題に、「一二時間若しくは二十四時間 esquisse esquisse」は、「設計競技」課題の「エスキス」にそれぞれ相当する。

このように横浜高等工業学校の「実習」科目では、エコール・デ・ボザールと同様の課題が導入されたが、採点方法は、エコール・デ・ボザールとは異なる方式であった。第2編・第2章で述べたように、エコール・デ・ボザールでは、賞や選などが割り当てられ、課題によりそれぞれ異なる単位数が割り当てられた。一方、中村順平は、「基礎設計練習」課程の課題の採点では、最高点を20点満点とし、その課題を修了したことを認める最低点を8点と定めた。また、「創作的設計練習」課程の課題では、金・銀・銅賞・選・落といった採点方法が適用された課題もあった。このように、各課題の性質により最高得点の設定に違いがみられる。「基礎設計練習」課程の採点方式は、エコール・デ・ボザールにおける入学試験の採点方式といえ、「創作的設計練習」課程の採点方式は、エコール・デ・ボザールの上下2級の採点方式に習ったといえる。なお、中村順平が定めた金・銀・銅賞を、それぞれ20, 19, 18点と捉えれば、概ね1作品20点満点で設定されたと考えられる。

また、中村順平は、「基礎設計練習」課程において、150点以上を獲得する必要を説き、150点以上の獲得をもって、「創作的設計練習」課程に取り組めるようなシステムを構想した。「基礎設計練習」課程において、150点を獲得するためには、建築図画において10点前後が通常とされていたことを

考慮すれば、「建築図画」3枚で30点程度、「要素分析」・「16時間略設計」で120点程度の獲得が求められた。つまり、「要素分析」・「16時間略設計」は、12点程度を平均的な獲得得点と想定した場合、10作品程度の参加が必要とされたと考えられる。実際、「建築図画」3枚を描き、10作品程度の「要素分析」・「16時間略設計」に取り組んだ学生がどの程度存在したのか、現在までのところ不明である。

表 3.2.2 得点総数・賞碑種別一覧表

競技問題種別	賞碑順位別
Archéologie (アルケオロジー)	銅賞・選・落に分つ
基本設計	各回共得点最高 20 最低 8 以下落
16 時間略設計	同上
12 時間略設計	銀賞、銅賞、選、落に分つ
24 時間略設計	同上
本設計	銅賞・選に分つ
略設計 (12 時間) 及本仕上設計	金賞・銀賞・銅賞・選・落に分つ
略設計 (12 時間) 及本仕上並に構造設計	同上。 設計銀賞以上たるには構造銅賞以上たるを要す

なお、こうした課題設定から、中村順平の「実習」科目とエコール・デ・ボザールの教育課程の対応関係が指摘できる。その両者の関係は、「略設計 (十二時間) 及本仕上並びに構造設計問題」と称するは、以上の設計手続以外、さらに構造図をも要求する競技設計であり、修学期間の短かい自分の学校では、既に三年生の第三学期に亘って之を行はしている」という発言から読み取れる。

中村順平が「パリ美術院」⁵⁴⁸において自身の留学経験を振り返った際の「構造の伴う建築設計コンクール」、すなわち“Projet de Construction générale”がこの課題がエコール・デ・ボザールにおける2級課程での習熟度を測る課題として設定されたことを中村順平は述べている。この課題は2級課程の最終課題と位置づけられたエコール・デ・ボザールにおける「構造」科目の設計競技課題で、この課題が、横浜高等工業学校で行われた「略設計及び本仕上並びに構造設計問題」に相当する。

したがって、中村順平が想定した横浜高等工業学校の建築教育レベルは、エコール・デ・ボザールの2級課程相当であったといえる。さらに、2級課程相当であったという点を補完する中村順平の発言もある。中村順平は「自ら問題を考案して設計する如きは、無意義若しくは有害な場合さえ多い」とし、「不完全な問題を起稿する如きはありがちであり、設計盗作も亦容易」と述べ、横浜高等工業学校建築学科では卒業設計を行わず、その代替の課題として「略設計及び本仕上並びに構造設計問題」を課した。

このように、横浜高等工業学校での教育レベルをエコール・デ・ボザールにおける2級課程程度と捉えれば、中村順平が学外で行った中村塾での活動はエコール・デ・ボザールの1級課程と捉えることができる。また、後年、中村順平が横浜高等工業学校を巣立った学生を「卒業生」と呼ばなかったことは、中村塾での活動を横浜高等工業学校から連続した教育として捉えていた表れともいえる。さらに、「注意書」において、中村順平は「卒業後も出来得るだけ永く在学して貰いたい。自分は諸君の技能の上達に応じていくだけでも講究の問題を課する積りである」⁵⁴⁹と述べているように、卒業後においても継続して修学させるために1級課程と同等の教育を施すことを建築学科設立時から考案していたことが読み取れる。なお、中村塾のほか、研究生として卒業後も在籍した人物もあり、こうした研究生の制度もある種の1級課程相当の教育課程であった可能性がある。

以上の分析から、中村順平が「実習」科目において「基礎課程」、「基礎設計練習」、「創作的設計練習」の3つの段階を設定し、「基礎課程」では、西洋と日本の「建築図画」を3枚描かせ、「基礎設計練習」では「要素分析」、「16時間略設計（エスキスエスキス）」の2種の課題（最高得点20点／1課題）により150点以上の取得が求められ、「創作的設計練習」では「アルケオロジー」、「12時間略設計（エスキスエスキス）」、「24時間略設計（エスキスエスキス）」、「本設計」、「12時間略設計＋本仕上」、「12時間略設計＋本仕上＋構造設計」の6種の課題の存在が明らかとなった。

これらを整理し、「実習」科目における課題構成の一覧表（表3.2.3）を作成した。

表3.2.3 「実習」科目の段階・課題種別・ノルマ

段階		課題種別	エコール・デ・ボザールの 課題名称対応	ノルマ
基礎課程		建築図画	要素分析 Elément d'analytique	3枚： 西洋オーダーと日本建築の習得 20点満点採点
練 磨 課 程	基礎 設計練習	要素分析 (アナリチック)	エスキス Concours d'émulation, Esquisse	得点加算方式： 最高得点20点／1課題により150 点以上獲得により創作的設計練習 課程に進む。 なお、基礎課程の得点も考慮。
		16時間略設計 (エスキス・エスキス)		
	創作的 設計練習	アルケオロジー	歴史設計 Projet de l'histoire de l'architecture	表彰方式： 賞を与える形式で『横浜高等工業 学校建築学科建築競技設計図集』 に記載された通り。
		12時間略設計 (エスキス・エスキス)	エスキス Concours d'émulation, Esquisse	
		24時間略設計 (エスキス・エスキス)	設計競技 Concours d'émulation, Projet rendu	
		本設計	構造設計 Concours d'émulation, Projet de Construction générale	
		12時間略設計＋本仕上		
		12時間略設計＋本仕上＋構造設計		

1.2 「実習」科目の基礎課程

1.2.1 「建築図画」

ここでは、「建築図画」について、中村順平の『図集』（1937）における解説、エコール・デ・ボザールとの関係、構図の設定を概括し、実例を取り上げ「建築図画」の制作方法について整理する。

中村順平は、『図集』（1937）の冒頭で、「基本設計練習を為さしめる以前の、当初に述べた建築の生徒最初の必須の基礎課程というは、種々の基礎学科は別として、建築上に関してはまず最初に外国建築各種の *Ordre* と、日本過去の建築とを修学せしめんため、即ち *dessin d'architecture* 吾等の建築図画と称するものとして3枚描かしめる」と述べている。中村順平は、「実習」科目の「基礎課程」と呼ばれる第1段階では、「建築図画」*Dessin d'architecture* の作成を学生に課した。

中村順平のいう「建築図画」の起源は、フランス語記載にみるように中村順平の留学先であるエコール・デ・ボザールでの教育に着想を得ている。「建築図画」の方法や建築教育における重要性については、ジュリアン・ガデが『建築の諸要素と理論』⁵⁵⁰で述べており、中村順平は『建築学総説篇』（1944）においてその考えを踏襲した⁵⁵¹。なお、「建築図画」と題する科目は、エコール・デ・ボザールには存在せず、フランス語の“*Dessin d'architecture*”は、必ずしも中村順平が行なった「建築図画」のみを指したわけではない。例えば、近年発刊されたフレデリック・ドゥ・モルジエ（Frédéric de Morsier, 1861-1931）のエコール・デ・ボザール時代の制作図がまとめられた書物のタイトルに“*Dessin d'architecture*”とつけられているように、通常、建築図面全般を指している⁵⁵²。

「建築図画」は、第1学年時の「実習」科目の課題として、西洋建築1枚、日本建築1枚、研究課題1枚の計3枚が基準とされた。制作にあたっては、通常、定められた模範例が参照され、その模範的な図版を参照し描いたとみられる。また、中村順平の机には、多数の写真群で構成された引き出しが存在し、その写真群から「建築図画」の対象を選出し、中村順平が一枚の画面に構成したという大西春雄の証言⁵⁵³もある。

一方、参考図書等にはないもの描きたい場合、学生側からその対象の断片を中村順平に提示し、下図作成を依頼することも可能であった。いずれの場合も、中村順平が通常その場で下図クロッキーを描き、それに従って、学生が鉛筆線画を準備し、その鉛筆線画を中村順平に見せ、位置の補正が行われ、その工程終了後、本番作成に至る流れであった。その一例として、卒業生で中村順平の教育を補佐した林久満のものや、松本陽一のものがある。

例えば、松本陽一の「建築図画」の中村順平による下図スケッチ（図3.2.3）は、松本陽一が中村順平に描きたい対象を相談し、その場ですぐに描かれたものである。「建築図画」の画面に表現するものは、建築作品の部分や平面だけに限らず、場合によってその時代を象徴する工芸品なども組み込まれた。また、「建築図画」では、通常、ある時代の作品の一要素が描かれたが、例えば、林久満のものでは、イタリア・ルネッサンス期の研究として、ヴァチカンとヴェネチアの作品群がレイアウトされた。

「建築図画」の仕上にはワットマン紙の大判に薄墨で烏口を使って線を入れていく。コップに墨をごく少量入れ、その量をかえたものをいくつか用意し、濃淡の順番に並べ用意する。そして、隈取筆を用いて何度か重ね塗りをしながら、完成させていくものであった。重ね塗りでは、例えば黒に近くまで、何十回と多いときには百回程度と重ね塗りを行ったという証言も残されている⁵⁵⁴。

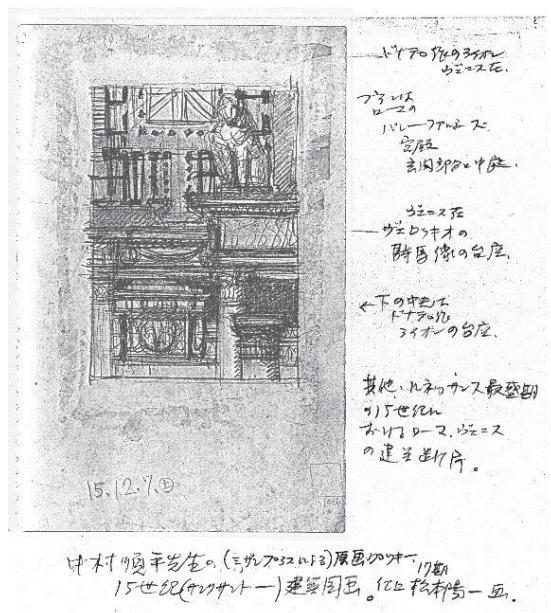


図 3.2.3 中村順平の下図と松本陽一のコメント
(出典:「建築図画」D.D.)



図 3.2.4 松本陽一による建築図画（清書）
（出典：「建築図画」D.D.）

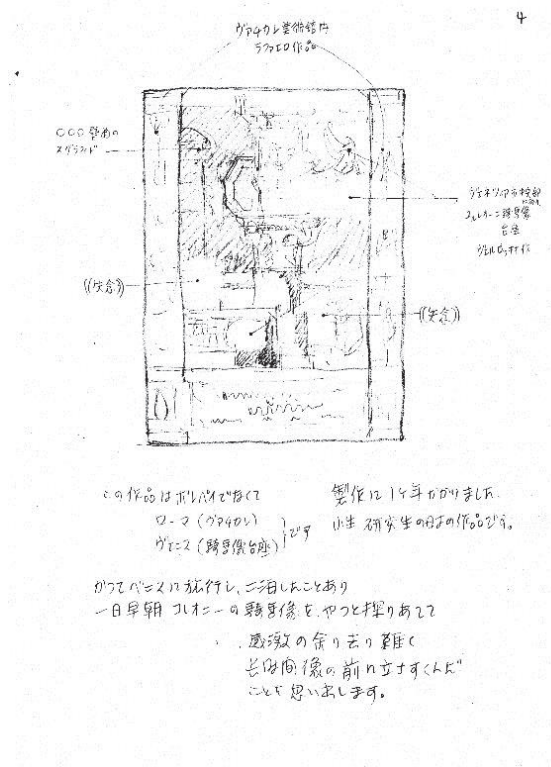


図 3.2.5 林久満の建築図画に関するコメント
(出典:「建築図画」D.D.)

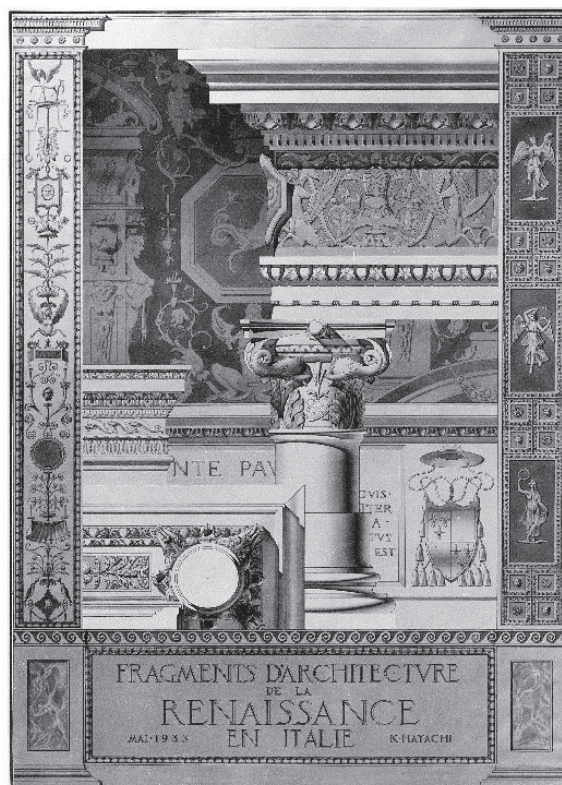


図 3.2.6 林久満による建築図画（清書）
（出典：「建築図画」D.D.）

1.2.2 西洋建築「建築図画」の参考図

ここでは、檜の会の協力を得て収集した「建築図画」D.D.内の西洋建築を対象に、その制作に使用された参考図の出典の解明を通じ、中村順平の「建築図画」を通じたフランス受容を考察する。

「建築図画」D.D.として収集した「建築図画」のうち、西洋建築に関する建築図画は83点であった。その約半数にあたる45点には、ギリシャ・ローマ期の建築やその諸要素が、残り38点には、ルネッサンス期の建築やその諸要素が描かれた。これらを研究対象時代、都市名、描かれた建築物、制作者、制作年の一覧表（参考資料①および参考資料②）を作成した。なお、図面上に制作者氏名や制作年の記載がないものには「不明」と記した。

中村順平が「最初に外国建築各種の *Ordre*」を描かせる「要素分析」課題と位置づけたように、西洋建築の「建築図画」に描かれた対象は、建築全体を表現するようなものは少なく、建築の諸要素を中心として取り上げ、その多くはジャコモ・バロツィ・ダ・ヴィニョーラ（Giacomo Barozzi da Vignola, 1507-1573）が体系化した5種類のオーダー*Ordre*であった。

西洋建築「建築図画」は、通常、参考図書の構図を元に描かれたとみられる。『情念の幾何学』には、使用された参考図書の手がかりが記され、“*Monument Antique*”や“*Fragment Antique*”といった書物が参照された。なお、“*Monument Antique*”はギリシャ・ローマ・ルネッサンスに至る古典遺稿の復元、再構築の「建築図画」図集であったことが示唆されているが、『情念の幾何学』にはこれらの詳細な書誌情報は確認できない。

この“*Monument Antique*”という表記から参考図書を調査した結果、エクトール・デスプイ監修、ヴィクトール・シャポ Victor Chapot 解説の図集『モニュモン・アンティークローマのフランス・アカデミー滞在者による復元・修復された古代記念建造物』⁵⁵⁵に相当することが判明した⁵⁵⁶。この参考図集の監修者エクトール・デスプイは、エコール・デ・ボザールの専門科目「装飾画」科目を1895年から1926年にかけて担当した建築家で、中村順平の留学期間においても同科目を牽引した。なお、本論第2編・第2章で述べたように、中村順平はこの科目を受講し、この科目の最高賞である「3等」を獲得した。こうした経験から、この図集が参照されたのだろう⁵⁵⁷。また、「装飾画」科目はエコール・デ・ボザールの建築セクションにおいて2級課程から1級課程への進級に必要で、また、1級課程の修了を左右する重要な科目のひとつであった。

また、エクトール・デスプイは、この図集の監修に携わるだけでなく、「フラグモン・ダーシテクチュール・アンティーク：ローマのフランス・アカデミー滞在者による復元・修復による古代建築の断片」⁵⁵⁸（1905）や「フラグモン・ダーシテクチュール：ローマのフランス・アカデミー滞在者による復元・修復による中世・ルネッサンス建築の断片」⁵⁵⁹（1925）の監修者としても知られている。網戸武夫が示唆する“*Fragment Antique*”はエクトール・デスプイ監修の「フラグモン・ダーシテクチュール・アンティーク」に相当していたと考えられる。さらに、これらの図集のほか、ルネッサンス期の建物の諸要素が含まれたエクトール・デスプイ監修「フラグモン・ダーシテクチュール」も参照されたことが、例えば、「トレヴィの泉」の構図から読み取れる。

こうしたエクトール・デスプイが監修した図集に掲載された一連の図面は、エコール・デ・ボザールで行なわれたローマ賞設計競技において大賞を獲得し、ローマ、ヴィラ・メディチに滞在した人物

によって描かれた。これらの図面は、ローマ滞在中に研究課題として課されたギリシャやローマを中心とした古代の建築物に関する復元予想図や修復のための遺跡調査の報告図面である。これらの報告図面の多くは、その当時の現状のファサードや断面図、復元後を想定したファサードや断面図などが含まれている。

例えば、「建築図画」課題でパルテノン神殿を描いた羽石渡の作品とエクトール・デスプイ図集掲載図版（ブノワ＝エドワー・ロヴィオ（Benoit-Edouard Loviot, 1849-1921）によるパルテノン神殿、1879年制作）を比較すると、構図そのものはほぼ同様であることがわかる。一方、ほぼ同縮尺で両者を重ね合わせると、羽石渡の「建築図画」では、基壇部一段分、柱が延長されており、中村順平が下絵を描いたことを考えれば、こうした部分に中村順平の比例感覚が反映されたといえる。

また、中村順平が参考図書として提示したのは、以上のエクトール・デスプイ監修の図集だけではなく、セザール・ダリ（César Daly, 1811-1894）の図集を参照した痕跡がいくつかの「建築図画」上の表記に残されている。「建築図画」には、図集の具体的な名称の記載はないが、セザール・ダリの図集を調査した結果、『建築の歴史的モチーフ』（1869）⁵⁶⁰の使用であることが判明した。この図集は、副題“Choix de fragments empruntés à des monuments français du commencement de la Renaissance à la fin de Louis XVI”にあるようにフランスのルネッサンスからルイ16世様式までを対象とした歴史的建造物のモチーフや装飾を描いた図版で構成されている。エクトール・デスプイのルネッサンス期の図集は、イタリアを中心とした図版で構成されたが、それに対して、セザール・ダリの図集は、フランスが中心であった。そのため、中村順平はルネッサンス期を対象とした「建築図画」作成にあたり、両者を参考図書として提示したのだろう。

西洋建築の「建築図画」は、こうした参考図書の構図が参照され描かれたものが多いが、部分的にオーダーの要素が加えられたものや、前述の林久満や松本陽一らのように中村順平に新たな構図を作成させ、その下図を元に「建築図画」を作成したものもある。下図については、中村順平が描いたものもあれば、おそらく参考図書をそのまま写したものもあっただろう。なお、中村順平が描いた下図などは、横浜高等工業学校建築学科の事務的な作業を担当した堂畑辰蔵によって拡大され、その拡大図をもとに「建築図画」が作成されたという大西春雄の証言もある。



図 3.2.7 横浜高等工業学校建築学科「建築図画」
羽石渡によるパルテノン神殿、1928年
（出典：『横浜高等工業学校建築設計競技図集』（1937））



図 3.2.8 エコール・デ・ボザール「建築図画」
ブノワ＝エドワー・ロヴィオによるパルテノン神殿⁵⁶¹
（Photo (C) Beaux-Arts de Paris, Dist. RMN-Grand Palais /
image Beaux-arts de Paris）

1.2.3 日本建築の「建築図画」の制作意図

ここでは、檜の会の協力を得て収集した「建築図画」D.D.内の日本建築に着目し、その制作にこめられた中村順平の意図をフランスにおける「建築図画」の制作意図から解明する。

「建築図画」D.D.内の日本建築を描いたものは、2種に大別できる。ひとつは、「日本過去の建築」の修学を目的とした日本建築の「建築図画」で、もうひとつは、「時代様式の研究」題されたものである。前者は、主に、建物全景や、その断面や接合部などに着目した詳細が描かれたのに対し、後者では、日本建築とその建築の成立時期の時代の文化などが一枚の構図に描き出された。

前者の制作にあたり、西洋建築の「建築図画」のように、参考図を使用した可能性はあるが、西洋建築の参考図とは異なり、日本建築の当時の図面では、エクトール・デュパイ図集のようなものはほとんどない。

一方、日本建築の「建築図画」に描かれた構図から参考図の可能性として指摘できるのは、当時の各寺社仏閣等で行なわれた実測図が主であったとみられ、『法隆寺国宝保存工事報告書』⁵⁶²などに代表される国宝建造物修理工事報告書や、建築学参考図刊行委員会編纂の『日本建築史参考図集』⁵⁶³などである。また、横浜近郊では三溪園や横浜高等工業学校の敷地付近である弘明寺の歴史的な建造物などが描かれたことから、現地での実測などによる下図作成などが行なわれた可能性も指摘できる。さらに、各時代の装飾や文化の表現にあたり参照された可能性として指摘できるのは、当時、写真家小川晴暘（1894-1960）が仏像など文化財の撮影を行うため創業した飛鳥園から発行された『仏教美術』や『東洋美術』などの掲載写真である。

「建築図画」D.D.内の日本建築の「建築図画」124点（参考資料③）を対象にみると、法隆寺（13点）、姫路城（10点）、唐招提寺（8点）、東大寺（8点）、平等院（7点）が全体の約37%を占めている。なお、中村順平が、自書で日本建築の「クラシック」実例として、奈良東大寺法華堂、奈良法隆寺夢殿、源義経潜居の間、東山東求堂、本邦の茶室建築などを挙げている。これらの「クラシック」実例のうち日本建築の「建築図画」で描かれたのは、奈良東大寺法華堂が3点、奈良法隆寺夢殿が2点にすぎず、必ずしも描かれた対象は、中村順平が自著で取り上げた「クラシック」実例だけではないことがわかる。

他方、「時代様式の研究」（参考資料④）では、日本建築の「建築図画」とは異なり、より、西洋建築の「建築図画」の構図が意識されたものといえる。つまり、一枚の構図に建築の諸要素が描かれ、特に、一枚の画面に各時代の装飾や環境、文化、芸術作品が描かれた。既存の構図は、管見の限り存在せず、西洋建築の「建築図画」同様、通常、中村順平が全体の構図を描き、学生がそれを清書する形で進められたことを考慮すれば、既存の参考図をベースに描かれた西洋建築の「建築図画」とは異なり、より中村順平の比例感覚やレイアウト感覚などが表現された図面であったと考えられる。

こうした一連の成果は、中村順平が、『図集』（1937）で「建築図画（中略）」に関する修学上の意義は追ってこれらに入賞した十二年間の生徒の建築図画の蒐集出版に当たって詳述すべく、茲には省略」と述べるように、後年、蒐集出版という形で企画したが、結果的に実現することはなかった。

しかし、この企画された図集体裁が、エクトール・デュパイ監修の一連の図集と同様の体裁かつ同様の意味合いでの作成予定であったと仮定すると、ローマ大賞受賞者が作成した遺構の復元図集を意

図した可能性がある。すなわち、中村順平は、基礎課程の初歩段階で学生たちに建築図画の表現手法を獲得させるだけでなく、日本建築の実測図をエコール・デ・ボザールの建築図画と同等の表現レベルにまで引き上げ、世界でも通用する遺構の復元図や現況図、修復図の類の作成をめざしたと捉えることもできる。また、中村順平の「時代様式の研究」における建築図画は、修復建築家などの養成も視野にいれたリノベーション課題と位置づけることもできる。

つまり、中村順平は、「建築図画」を通じ、ヴィオレ＝ル＝デュクが著書『建築講話』⁵⁶⁴で述べているように、「私たちがある建築物を眺めるとする。まず、最初にうっとりとして、＜これはすばらしい建造物だ＞と思う。しかし私たち芸術家には、この本能的な判断では十分ではなく、＜この建造物はなぜ美しいのか＞を自問する。私たちはそれが私たちに与えた印象の原因を知ろうとし、そこで推論の力に頼る必要に迫られる。私たちは私たちが魅了した建物のすべての部分を分析するが、この分析は将来、私たちが設計する立場になったとき、設計をまとめ上げられるようになるための訓練」⁵⁶⁵として、学生たちに実践させた可能性がある。それは、中村順平にとっての「建築図画」の教育の目的は過去の実例から「過去の作家が、建物の構築を目的とするかたわら、いかに構造を、芸術的に扱っていたかの手段」⁵⁶⁶を学び取らせることにあったためである。

ヴィオレ＝ル＝デュクが「過去を注意深く、誠実に探索すること」⁵⁶⁷の必要を感じ、それが単に「過去をよみがえらせるためではなく、中世建築をよく学び、それから利するものを得よう」⁵⁶⁸としていたように、「古典の基礎の上に日本人による日本の現代建築を創造すべきである」⁵⁶⁹と理想を語っていた中村順平もまた、日本の近世以前の建築をよく分析し、そこを出発点とした日本にとっての「合理的な建築」⁵⁷⁰が新しい時代の建築であることを「建築図画」の制作作業を通じ学生達に伝える教育を行なったといえる。

1.3 「実習」科目の練磨課程

1.3.1 各種設計競技課題とエコール・デ・ボザールの接点

「実習」科目では、「建築図画」の基礎課程を終えると、次の練磨課程の基礎設計練習の課程へと進むことになる。ここでは、収集した設計課題の課題文を対象に、エコール・デ・ボザールの教育との接点を探る。なお、収集した全312課題の課題文を整理し、一覧表（参考資料⑤）を作成した。

中村順平が『図集』（1937）で述べるように、設計課題は種類が細分化された。この細分化された課題分類は、前述のようにエコール・デ・ボザールで行なわれた設計競技の分類とほぼ同様である。

収集した全312課題を分析するといくつかの特徴的な点が浮かび上がる。

第1の特徴は、年間出題課題数にある。

収集した課題文のうち、最も多くの課題文が収集できたのは、1936年度のものである。1936年度には、少なくとも年間38課題が出題され、そのうち約半数の19課題が「略設計」課題であった。なお、横浜高等工業学校ならびに中村順平の私塾である中村塾共通で行なわれた。

この「略設計」課題は、前述のように、基礎課程と練磨課程のそれぞれに存在し、前者は16時間の課題で、後者は12時間または24時間のものではあった。課題の内容は同様であるが、通常、横浜高等工業学校の学生に対しては16時間で、学外の中村塾生は12時間でその解答案を制作した。前述のように、両者はそれぞれ異なる点数配分であった。なお、この略設計課題は、最も多い月で、一ヶ月に4度程度行なわれた。

また、「実習」科目の基礎課程課題として設定された「要素分析」課題が「略設計」課題について多く、1936年度には14課題が出題され、長期休暇期間を除けば、概ね一ヶ月に2度のペースで出題された。なお、「要素分析」課題は、「略設計」課題とは異なり、概ね10日前後で仕上げるものではあった。この点を考慮すれば、「要素分析」課題は、頻繁に出題されたといえる。

このように、「略設計」および「要素分析」課題が、計33題出題されたことから、横浜高等工業学校の設計製図教育は、『図集』（1937）の冒頭で中村順平が述べているように、基礎力重視の教育であった。また、設計課題のほか、前述のように初学者に対して「建築図画」が3題課されたことを考えると、1936年度には、年間41課題以上用意され、設計製図課題の選択肢の幅の広さが読み取れる。

こうした課題数の傾向を、中村順平の2つの母校の傾向と比較する。まず、エコール・デ・ボザールの設計課題数との比較から分析する。

エコール・デ・ボザールとの関係でみると、例えば、中村順平の入学年度を見ると、年間の出題数は、2級課程において、「要素分析」課題が6題、「12時間略設計」が6題、「設計競技」課題が6題、「構造設計」課題が1題、1級課程において、「12時間略設計」が6題、「設計競技」課題が6題、中村順平の「アルケオロジー」に相当する「歴史設計」課題が2課題、合計で33課題が年間に提出された。さらに、これら以外の進級に関する「設計競技」課題として「ローマ賞」課題、「ゴドブフ」課題、「ルージュヴァン」課題の課題など8課題⁵⁷¹であり、合計すると年間41課題であった。

この数字から、中村順平は、エコール・デ・ボザールでの課題数に相当する量の課題作成を行ったことがわかる。しかし、その内訳を比較すると、「略設計」課題では、エコール・デ・ボザールの年間13課題に対し、中村順平は約1.5倍の19課題出題数であり、また、中村順平の「要素分析」課題は、

エコール・デ・ボザールの約2.5倍の14課題であった。一方、中村順平の「12時間略設計+本仕上」課題は、エコール・デ・ボザールと比較し明らかに少ない。

したがって、両校の課題分類と年間出題課題数を比較した結果、中村順平は、エコール・デ・ボザールの課題数に相当する量の課題を作成したが、中村順平の設計課題は、エコール・デ・ボザールに比して基礎課程を重視した傾向があった。

また、もうひとつの比較として、名古屋高等工業学校との比較を行なう。

本論第2編・第1章「4」において名古屋高等工業学校の教育に関する証言を検証した際、浅井新一の証言から、同校の1916年の設計製図課題を整理した。そのデータを参考にすれば、同校の設計製図課題は、全学年の合計数で、卒業制作を含め年間22課題であった。一方、横浜高等工業学校では、全学年で年間41課題であったことから、単純にみれば、横浜のほうが名古屋よりも多く、課題数は両校で倍程度の差があった。なお、横浜の場合、単純にみれば、一学年あたり13～14課題程度で、そのうち6課題程度が「略設計」課題となる。「略設計」課題は1日程度で終了する課題であることから、全体から除外した場合、横浜において比較的時間をかけて作成する課題は、概ね7～8題程度となり、名古屋における1学年あたりの課題数と同程度となる。

したがって、両校を比較した結果、横浜のほうが多くの課題数が用意された。横浜高等工業学校では、学年制がとられていなかったことから、原理的には多くの課題に参加することも可能であり、自由度が高く選択肢の多い設計教育が行われていた傾向が読み取れる⁵⁷²。

以上、横浜高等工業学校の課題数をエコール・デ・ボザールおよび名古屋高等工業学校と比較した結果を一覧表（表3.2.4）にまとめた。

表 3.2.4 横浜高等工業学校・エコール・デ・ボザール課題数対照表

「実習」科目		横浜高等工業学校 (1936 年度)	エコール・デ・ボザール (1921-1922 年度)	参考：名古屋高等工業学校 (1916 年度)	
基礎課程		3 題	—	4 題 (8⑬⑮⑱)	
練習課程	基礎設計練習	要素分析	14 題	6 題	8 題 (①～⑦⑭)
		16 時間略設計	13 題	—	—
	創作的設計練習	アルケオロジー	—	2 題	—
		12 時間略設計	6 題	13 題	—
		24 時間略設計	—	—	—
		本設計	2 題	1 題	2 題 (⑨⑩)
		12 時間略設計 ＋本仕上	2 題	18 題	8 題 (⑪～⑬⑯⑰⑳～㉒)
		12 時間略設計 ＋本仕上 ＋構造設計	1 題	1 題*	—
計		41 題	41 題	22 題	
備考			*は「12 時間略設計＋本仕上課題」と同様のテーマの課題で、「構造設計」課題が附与されたもの。「構造設計」課題が附与されたものとされていないものそれぞれ 1 題ずつとして算入。	数値は対応を想定したもの。その根拠は括弧内の数字で、表 2.1.4 中の数字と対応。	

次に、第2の特徴として、過去の課題の焼き直しが少なく、時事に即した課題設定が行なわれた点が挙げられる。

収集した課題文を整理したところ、同種のプログラムの出題は度々確認できる。しかし、過去の課題の焼き直しとみられる課題は、「要素分析」課題以外では極めて少ない。「要素分析」課題では、この課題の「将来自由に **composition** をなし得べきその能力を育成」する性格上、同一課題が幾つか課されているが、課題文を見ると、製作日数が変更されたものなども存在する。

一方、各課題を総合的にみると、時事に即した課題が出題されており、例えば、1931年の満州事変以後、1932年3月に12時間略設計「満州鉄道国賓客車内装飾」課題や、同年7月に3日間設計問題「満州国宮殿正門」課題など満州を対象とした課題が出題された。また、1935年の復興記念横浜大博覧会の開催に先駆けて、1934年には「16時間略設計」課題「博覧会場内菓子売店」、「要素分析」課題「横浜復興大博覧会正門及囲障」といった課題が出題された。さらに、1935年2月の「大阪城内共同便所」や1936年4月の「通天閣中央 **pavillon**」の2つの「要素分析」課題の対象地が大阪であったのだが、大阪は、中村順平の出生地であると同時に、1935年当時、中村順平が金光教難波教会設計中であったこととの関係が指摘できる。

こうした視点は、ジュリアン・ガデがエコール・デ・ボザールの「建築理論」科目の教育者についての際のひとつの改革との関係が指摘できる。すなわち、本論第2編・第2章「2.7」の「建築理論」科目略史を整理した際に述べたが、ジュリアン・ガデは設計競技課題を作成するにあたり、時勢を読み、それ以前の教育者が過去の焼き直しを繰り返した点を自身が「建築理論」科目の教育者となった際に改め、出題するテーマをそれまでのものから一新し、新たな「設計競技」課題の考案方法を定め、実践した。ジュリアン・ガデから「建築理論」科目を譲り受けたヴィクトール・ブラヴェットもまた、同様の精神を引き継ぎ、ヴィクトール・ブラヴェットによって出題された中村順平の留学期の課題を見ても、同一課題の出題は、「設計競技」課題や「エスキス」課題には見られない。

このように、中村順平は、ジュリアン・ガデが修正した「設計競技」課題の手法を自身の留学期に学び取り、その精神を受け継ぎ、自身の横浜高等工業学校での課題作成に取り組んだといえる。

1.3.2 「要素分析」・「16 時間略設計」課題の参考作品・参考資料

ここでは、収集した設計課題のうち、「要素分析」・「16 時間略設計」課題の課題文に着目し、課題文中に記載された参考となる建築作品や参考図書等の情報の傾向から、エコール・デ・ボザールの教育やフランスとの接点を検証する。なお、検証にあたり、「要素分析」・「16 時間略設計」課題文に記載された参考となる建築作品や参考図書等の情報を取り上げ、一覧表（参考資料⑥）を作成した。

まず、「要素分析」課題について着目すると、「要素分析」課題において掲げられた参考作品全 147 作品中 117 作品がフランスおよびイタリアの建築であったことが、一覧表から読み取れる。特に、取り上げられた作品は、「建築図画」で描画対象となったルネッサンス期以降の建築であった。このことから、「要素分析」課題が基礎的研究課題である「建築図画」の延長としての課題であることがわかる。そのため、参考作品と「建築図画」において描画された建築作品の類似性が確認できる。

中村順平が、イタリアおよびフランスのルネッサンス建築を参照した背景として、中村順平のエコール・デ・ボザール時代の師の一人、ジョルジュ・グロモールとの関係が考えられる。ジョルジュ・グロモールは、『イタリア・ルネッサンス建築』⁵⁷³を 1913 年に刊行し、さらにその新版を中村順平の留学中である 1922 年に刊行した。また、中村順平の帰国後になるが、ジョルジュ・グロモールは、『フランス・ルネッサンス建築』⁵⁷⁴を 1930 年に刊行した。こうした書物の刊行実績を考慮すれば、中村順平がジョルジュ・グロモールを通じてイタリア・フランスのルネッサンス建築に関する情報を得ていた可能性がある。

例えば、噴水の課題である「広場ニ面スル噴水」や「横浜市復興記念大噴水」の「要素分析」課題では、参考作品として「トレヴィの泉」Fontaine de Trevi を挙げ、「横浜市復興記念大噴水」では、さらに補足事項として書誌情報が提示されている。そこには、「Gromort 及び同氏著イタリ（ママ）ルネッサンス挿図 65）及び Fragmenet antique ルネッサンス」と記載されており、前者の「同氏著イタリルネッサンス」に相当する書物は、前述の『イタリア・ルネッサンス建築』となる。なお、中村順平が参考図として提示した「挿図 65」は、『イタリア・ルネッサンス建築』には誤植の関係から 2 枚存在し、一方が“Façade de Saint-Jean-de-Latran”で、他方が“Motif central de la fontaine de Trevi”であり、後者が該当する。これに続く、図版が“Planche 67”（第 67 図）であることから、トレヴィの泉の番号が誤植といえるが、中村順平が指定した参考図書は『イタリア・ルネッサンス建築』であることが明らかになった。なお、同書の初版、新版とも「トレヴィの泉」の図版は第 65 図であったため、中村順平がどちらの版を使用したか詳細は不明である。

また、後者の「Fragmenet antique ルネッサンス」は「建築図画」で参照された前述のエクトール・デスプイ監修の「フラグモン・ダーシテクチュール：ローマのフランス・アカデミー滞在者による復元・修復による中世・ルネッサンス建築の断片」⁵⁷⁵（1925）とみられ、ポール・ブロンデル（Paul Blondel, 1847-1897）による「ローマ・トレヴィの泉」Rome Fontaine de Trevi の図版が、この図集中で確認できる。つまり、こうした参考図集における図版は、「建築図画」のモチーフとして用いられただけではなく、「要素分析」課題においても参照された。

また、「要素分析」課題 13 題では、ヴェルサイユ宮殿内の建築が参考作品として取り上げられ、特にグラン・トリアノンやプチ・トリアノンが取り上げられている。

この参考事例もまた、ジョルジュ・グロモールとの関係が指摘できる。ジョルジュ・グロモールは、グラン・トリアノンやプチ・トリアノンについて述べるなど、ヴェルサイユにおけるトリアノンの位置づけや建築史的な観点からの分析が行われた『トリアノンの田舎風別荘』⁵⁷⁶ *Le hameau de Trianon* を1928年に刊行した。また、この著書の表紙裏面には“*Il a été tiré de cet ouvrage dix exemplaires sur Japon Imperial, numérotés de 1 à 10*”と記載されており、当時の日本政府に1番から10番のナンバリングが施された著書が献本された。こうした記述から、この書物が中村順平との何らかの関わりを感じさせるものであり、中村順平がこの書物を参考にしたのだろう。

また、ジョルジュ・グロモールはヴェルサイユ宮殿内のプチ・トリアノンの設計者とされるアンジュ＝ジャック・ガブリエル (*Ange-Jacques Gabriel*, 1698-1782) をテーマとした『ジャック＝アンジュ・ガブリエル』⁵⁷⁷と題した著書を1933年に刊行した。こうした複数の要因から、ジョルジュ・グロモールを通じて、中村順平はアンジュ＝ジャック・ガブリエルの作品に触れたのだろう。

そのため、一覧表からも読み取れるように、中村順平が提示した参考作品には、プチ・トリアノンやフォンテーヌブローのほか、コンピエーニュ城やコンコルド広場に面する海軍省の建築など、アンジュ＝ジャック・ガブリエルの作品が含まれている。こうした点からも、中村順平がジョルジュ・グロモールを通じてこうした参考作品の情報を得たのだろう。なお、後年、中村順平が、バロック・ロココに関する寄稿を行った際、参考文献としてレオン・デセー (*Léon Deshairs*) の『プチ・トリアノン』(1908)⁵⁷⁸が取り上げられているように、こうした情報もフランス留学中にジョルジュ・グロモールから得たのだろう。なお、ヴェルサイユやフォンテーヌブロー、さらにコンコルド広場に面する海軍省の建築については、「建築図画」でもその対象として取り上げられている。

一方、こうした参考作品の提示にとどまらず、中村順平が参考図書を記載した課題文も確認できる。

まず、「要素分析」課題8題および「16時間略設計」課題の1題において記載された“*Les concours d'architecture*”は、既出の年次設計競技図集 *Concours d'architecture de l'Année scolaire* である。具体的な年度の記載はないが、中村順平がこの図集を意識した『図集』(1937)を刊行したように、中村順平は、常にこの年次設計競技図集からその当時のエコール・デ・ボザールの教育傾向を分析していたのだろう。中村順平はルネサンス建築のみを参考作品として提示したわけではなく、当時のフランスの教育機関での学生の課題答案をも提示した。なお、この年次設計競技図に掲載された「ローマ大賞」の作品も参考として挙げられており、当時のエコール・デ・ボザールの優秀設計競技作品が横浜高等工業学校の建築教育において参照された。

また、特徴的な参考文献として、「小市場」「木造牛小屋」「歩兵小隊ノ営舎」「歩兵大隊ノ営舎」の課題で提示されたジュリアン・ガデの『建築の諸要素と理論』が挙げられる。『建築の諸要素と理論』は、次章で後述するが、中村順平の座学「建築学」科目の講義録との関係が指摘された書物である。つまり、この書物は、設計課題および建築理論講義の双方で使用された。なお、卒業生、添田(旧姓:北山)賢朗の回想から、この書物が常に横浜高等工業学校の製図室に置かれていたことが読み取れる⁵⁷⁹。

例えば、「小市場」の課題文には、参考文献として“*Guadet III p.23*”と記載が確認でき、『建築の諸要素と理論』第3巻のp.23に「小市場」と対応する作品の掲載が推察される。そこで、まず、同書初版の第3巻のp.23を調査したところ、そこには古代の宗教建築に関する内容が記載され、掲載図

版は Khone 神殿であったことを確認した。したがって、中村順平の提示する “Guadet III p.23” は初版ではない可能性が高い。一方、同書第3版の第3巻の p.23 を調査したところ、掲載図版は、パリ・サン＝ジェルマン市場の図面が掲載され、「小市場」の参考事例といえる作品が掲載されていた。このことから、中村順平は、『建築の諸要素と理論』第3版以降を所持し、横浜高等工業学校で参考図書としたことが明らかになった⁵⁸⁰。なお、『建築の諸要素と理論』第3版は、ジャン・ルイ・パスカルによりジュリアン・ガデの生涯が書き加えられ、第3版の全体の構成は、初版と大きく異なっている。

また、同様に、「歩兵小隊ノ営舎」「歩兵大隊ノ営舎」の課題に記載された “Element et Theorie de l'Architecture Vol.II p.188” から、『建築の諸要素と理論』第3版第2巻の p.188 を調査したところ、兵舎の図面（第638図（Fig.638））を確認した⁵⁸¹。なお、第2巻初版の p.188 には、図版そのものの掲載はない。さらに、「木造牛小屋」の課題に記載された “Les Exemples Fig 1576-1579en "Guadet" Vol IV” から、『建築の諸要素と理論』第4巻第3版の pp.130-131 を調査したところ、牛小屋の断面や平面として「第1576図」から「第1579図」を確認した⁵⁸²。

以上から、中村順平の参考図書『建築の諸要素と理論』は、同書第3版と同様のページ構成の書物であったことが明らかになった。

その他、「客室ノ Cheminée 暖炉」課題において参考図書として提示された “Blondel Cours d'Architecture” は、フランソワ・ブロンデル（François Blondel, 1618-1686）の『建築講義』Cours d'Architecture の第4部 Quatrième Partie の第10書 Livre Dixième の「屋根窓と暖炉」Des Lucarnes & Cheminées で p.566 から始まる第2章「暖炉」Cheminées が相当すると考えられる⁵⁸³。また、“Monuments antiques” は、「建築図画」で参照された前出のエクトール・デスプイの図集『モニュモン・アンティクローマのフランス・アカデミー滞在者による復元・修復された古代記念建造物』⁵⁸⁴に相当するのだろう。

2. 設計・製図教育にみるフランス建築理論と教育手法②：「図学」科目

2.1 伊藤三郎の図学プリント

前章で述べたように、1863年にエコール・デ・ボザールに持ち込まれた近代教育の象徴的な存在とされた「幾何図学」は、中村順平の同校留学期においても重視された。また、中村順平は「注意書」において「幾何図学」の重要性を語り、横浜高等工業学校の建築教育において重視された。ここでは、横浜高等工業学校建築学科において、中村順平以外の教育者が担当した設計・製図教育のひとつ、「図学」科目に着目し、その科目にみるフランス建築理論の受容を新たに入手した史料から検証する⁵⁸⁵。

前章で述べたように、横浜高等工業学校では、主として伊藤三郎が、画法幾何学に類する科目を担当した。同校で1940年ごろより伊藤三郎と共に図学を担当した神戸蕃は、伊藤三郎が図学においてプリントを使用したことを述べている。神戸蕃が受講した1933年ごろの伊藤三郎の図学では、おそらくジュール＝ジャン・ピレ（Jules Jean Pillet, 1842-1912）の『幾何図学』*Géométrie descriptive*を訳し、ガリ版の印刷物として学生に与えていた。しかし、これまで神戸蕃所有のガリ版について、筆者は確認できておらず、その内容は明らかではない。

一方、同様の資料有無を調査した結果、筆者は横浜高等工業学校建築学科に1940年4月に入学した大西春雄が所蔵する図学で使用されたガリ版（以下、「図学プリント」）を入手した⁵⁸⁶。この「図学プリント」が、伊藤三郎の横浜高等工業学校建築学科における教育活動の終盤にまとめられたものであることから、同校建築学科における図学教育の集大成といえる。

大西所蔵の「図学プリント」のオリジナルのサイズは、賞状サイズのB4版（W390×H266）で、一部B5版程度のものも含め、全25枚で構成され、通し番号の振られた図版が全107図掲載されている。なお、大西春雄によれば、講義初日にすべて手渡されたこの「図学プリント」は、各回の講義ではそれぞれの描き方が示され、特に消失点のいち早い求め方に力点が置かれた講義であった。

ところで、「図学プリント」には、図版のみが印刷され、説明テキストの類の記載はない。図版には、例えば、「図学プリント」の第10図（図3.2.9）にみられるように角度を示す“image de α ”という表記があり、フランス語文献が参照された可能性がある。

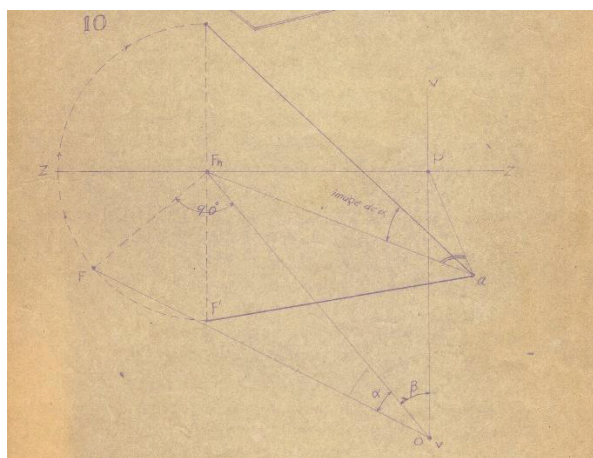


図3.2.9 「図学プリント」第10図

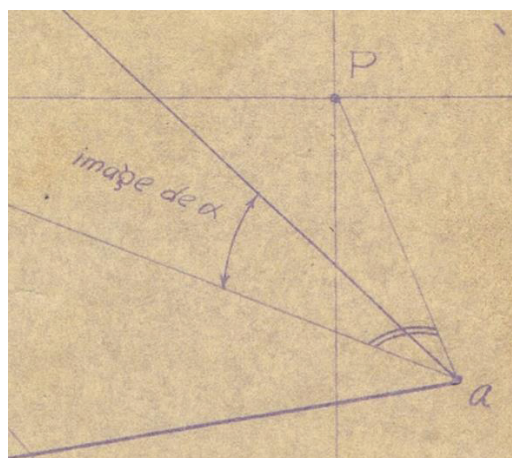


図3.2.10 左図（図3.2.9）部分拡大図

2.2 伊藤三郎の図学研究にみるフランス建築理論との接点

神戸藩は、伊藤三郎が図学に対し興味を持ち、研究を続けたことを述べている⁵⁸⁷。その興味は、横浜高等工業学校退官前の1949年から定期的に伊藤三郎が日本建築学会へ研究論文を発表したことから明らかである。なお、伊藤三郎が日本建築学会論文報告集で図学に関する研究論文を発表した最初期の人物であることが日本図学会文献調査委員会の報告⁵⁸⁸からわかる。そこで、伊藤三郎が「図学プリント」作成において参照したと思われるフランス語文献の調査にあたり、伊藤三郎が発表した論文を整理した。この整理にあたり日本図学会文献調査委員会の報告書を参考にした。

まず、伊藤三郎の日本建築学会発表論文に登場する人名を抽出したところ、主たるフランス人名として、ジャン＝ヴィクトール・ポンスレ (Jean-Victor Poncelet, 1788-1867)、ミシェル・シャスル (Michel Chasles, 1793-1880)、ジュール＝アントワーヌ＝ルネ・メイヤー・ドゥ・ラ・グルヌリー (Jules-Antoine-René Maillard de la Gournerie, 1814-1883) および前掲のジュール＝ジャン・ピレの4名が確認できた。さらに、同様の調査を伊藤三郎の日本図学会発表論文を対象に行なった結果、ジル・ペルソンヌ・ド・ロベルヴァル (Gilles Personne de Roberval, 1602-1659) の名が確認できた。

以上の5名のうち、建築教育分野での貢献度を考慮すれば、ジュール＝アントワーヌ＝ルネ・メイヤー・ドゥ・ラ・グルヌリーとジュール＝ジャン・ピレが重要である。

ジュール＝アントワーヌ＝ルネ・メイヤー・ドゥ・ラ・グルヌリーは、エコール・ポリテクニクおよび国立土木学校出身の技術者で、エコール・ポリテクニクでは1850年から、また、フランス国立工芸院では1854年から晩年にかけて、両校の「幾何図学」科目を担当した。

ジュール＝アントワーヌ＝ルネ・メイヤー・ドゥ・ラ・グルヌリーの著書『幾何図学論』(1860)⁵⁸⁹の前書きを考慮すれば、伊藤三郎はおそらくジュール＝アントワーヌ＝ルネ・メイヤー・ドゥ・ラ・グルヌリーからジャン＝ヴィクトール・ポンスレやミシェル・シャスルといったエコール・ポリテクニク出身の2人の数学者の理論に遡ったのだろう。

前述のように、神戸藩が指摘するジュール＝ジャン・ピレもまたエコール・ポリテクニク出身者で、1863年にエコール・ポリテクニクを修了後、ジュール＝アントワーヌ＝ルネ・メイヤー・ドゥ・ラ・グルヌリーのように国立土木学校に進学し、1866年に修了する。さらに、ジュール＝ジャン・ピレはエコール・デ・ボザールへと進み、1868年に修了した。

ジュール＝ジャン・ピレは、1867年からの国立土木学校での教育を皮切りに、教育者としての道を歩みだす。その後、ジュール＝ジャン・ピレは、エコール・ポリテクニクでは1874年から、私立建築学校 *Ecole spéciale d'architecture* では1878年から、エコール・デ・ボザールでは1882年から、フランス国立工芸院では、1894年から教育に関与した。ジュール＝ジャン・ピレの担当科目は多岐にわたり、国立土木学校での「截石学」や「透視図学」、エコール・デ・ボザールでの「幾何図学」、エコール・ポリテクニクでの「機械製図」 *Dessin de Machine* 等の図学関連科目のみならず、構造的な側面から講じる「建設土木」 *Construction Civile* 科目を私立建築学校やフランス国立工芸院で担当した。なお、ジュール＝ジャン・ピレは、フランスにおいて、幾何図学、透視図学、截石学に関する著書を1880年前後に刊行したことで知られ、さらに図学系科目の著書のみならず構造に関する書物を記すなど教育面で貢献した人物である。

2.3 中村順平のエコール・デ・ボザール留学期の図学系科目

横浜高等工業学校着任以前、伊藤三郎が中村順平の下で修行したことを考慮すれば、伊藤三郎が中村順平からフランス建築理論を受容した可能性もある。

中村順平の留学期のエコール・デ・ボザールの図学系科目は、本論第2編・第2章で述べたように、エコール・デ・ボザール出身の建築家の2人、ラウル・ブランドンとポール・ガデが、それぞれ「截石学」科目と「透視図学」科目を担当し、数学者エリー・カルタンが「幾何図学」科目を担当した。

建築家ラウル・ブランドンは、ジュール＝ジャン・ピレの後任として1912年より「幾何図学」科目を担当した教育者で、その後、1917年より「幾何図学」科目をエリー・カルタンに委ね、自身は「截石学」科目を1939年まで担当した。なお、ラウル・ブランドンの「幾何図学」科目の講義録は、『影と時計の理論と実践』（1926）⁵⁹⁰として発刊された。この発刊が中村順平の日本帰国後であったため、中村順平の留学当時の参考書が、前述のように、ジュール＝ジャン・ピレの2つの書物『截石学概論』（1887）と『幾何図学概論』（1887）であったのだろう。

一方、建築家ポール・ガデの「透視図学」科目は、中村順平が留学期間中、最も苦勞した科目のひとつであった。ポール・ガデは、エコール・デ・ボザールにおいてフェリックス・ジュリアン（Pierre Felix Julien, 1840-1914）の後任として1913年より「透視図学」科目を担当する傍ら、1921年から1931年にかけて郵便電報電話局高等職業学校 *Ecole Professionnelle supérieure des P.T.T.*の教育者として教鞭をとった。なお、ポール・ガデは、エコール・デ・ボザールの「建築理論」科目を1894年から1908年まで務めた建築家ジュリアン・ガデの息子である。

ポール・ガデのエコール・デ・ボザールでの講義録は、『透視図学講義』⁵⁹¹として1929年に刊行された。この書物は、中村順平の帰国後の出版であり、中村順平がこの書物を所持したか否かについては不明である。仮にこの書物を所持していたならば、中村順平が取り寄せ伊藤三郎に渡したのか、あるいは伊藤三郎が在外研修中に購入し持ち帰ったかのどちらかの可能性があり、この書物が「図学プリント」作成に使用された可能性もある。

以上、中村順平の留学期との関係から、ジュール＝ジャン・ピレの2つの書物、ラウル・ブランドンの書物、ポール・ガデの書物の4つの書物が、中村順平を通じ、伊藤三郎へ伝えられた可能性がある。こうした可能性の検証は、次節「2.4」で行なう。

2.4 「図学プリント」にみるフランス建築理論

以上の2つの流れを踏まえ、「図学プリント」とジュール＝ジャン・ピレを基点としたエコール・デ・ボザールの教育者の建築理論および中村順平が受けたエコール・デ・ボザール教育との接点を検証する。

まず、「図学プリント」の第1図は、ジュール＝ジャン・ピレの『線透視図論』⁵⁹²の第99図に類似図版といえる。この図版は、線透視画法の一般概論の説明部で使用されたもので、こうした類似性から「図学プリント」の冒頭部分は、ジュール＝ジャン・ピレの『線透視図論』における概説部が参照されたといえる。

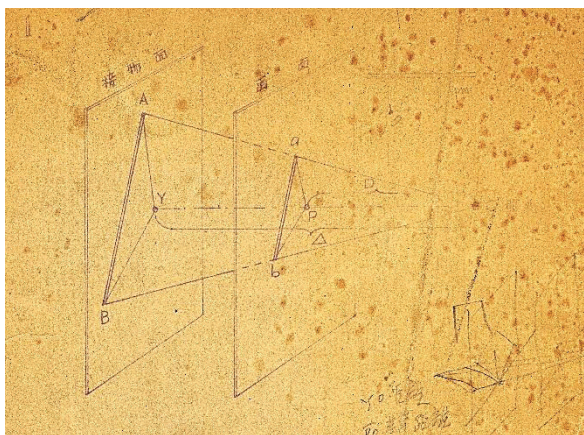


図 3.2.11 「図学プリント」第1図

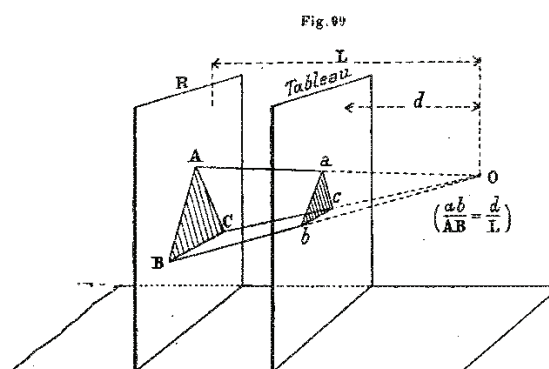


図 3.2.12 『線透視図論』第99図

次に、「図学プリント」第46図は、ポール・ガデの『透視図学講義』にその類似図版を確認した。この図版は、円の透視図作成方法の説明部に使用されていたもので、概ね一致している。円が内接するひとつの正方形から透視図を描くものではなく、2つの正方形から描き出している点特徴的である。

また、「図学プリント」第46図は、本論第1編・第2章の陸軍士官学校の教科書分析の際に取り上げた、エコール・デ・ボザール出身の建築家オーギュスト・ブイヨンの『線遠近法諸原理』において類似図版が確認できる。オーギュスト・ブイヨンの図版では、ポール・ガデの図版とは異なり消失点1点のみで描かれており、「図学プリント」に掲載された図版との類似性が指摘できる。なお、この著書は、前述のように『泰西絵原写景法附図』において参照された書物である。

さらに「図学プリント」の後半部では、前述のポール・ガデの書物の図版が引用され、例えば、「図学プリント」第101-102図は、ポール・ガデの著書の最終章に掲載された第202図および205図に相当し、建物の透視図作成法の説明のために使用されたと考えられる。

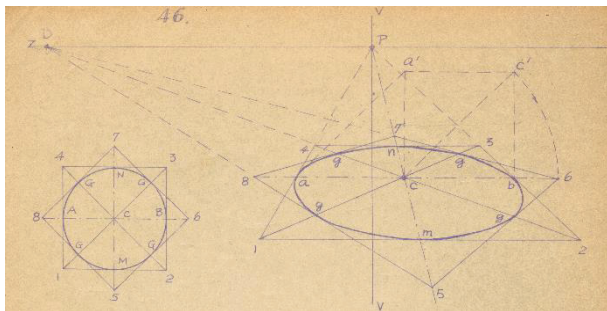


図 3.2.13 「図学プリント」第 46 図

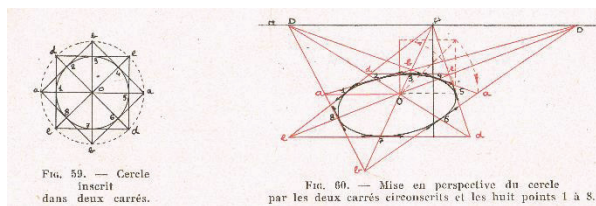


図 3.2.14 『透視図学講義』第 59-60 図

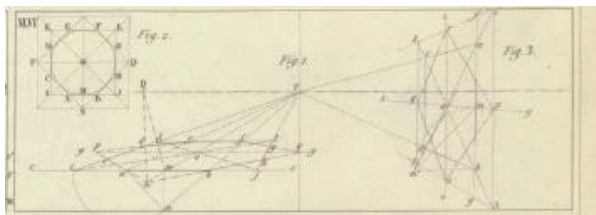


図 3.2.15 『線遠近法諸原理』第 7 図

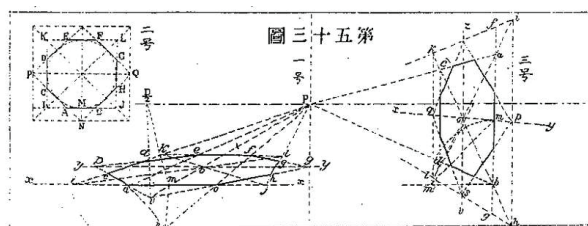


図 3.2.16 『泰西絵原写景法附図』第 53 図

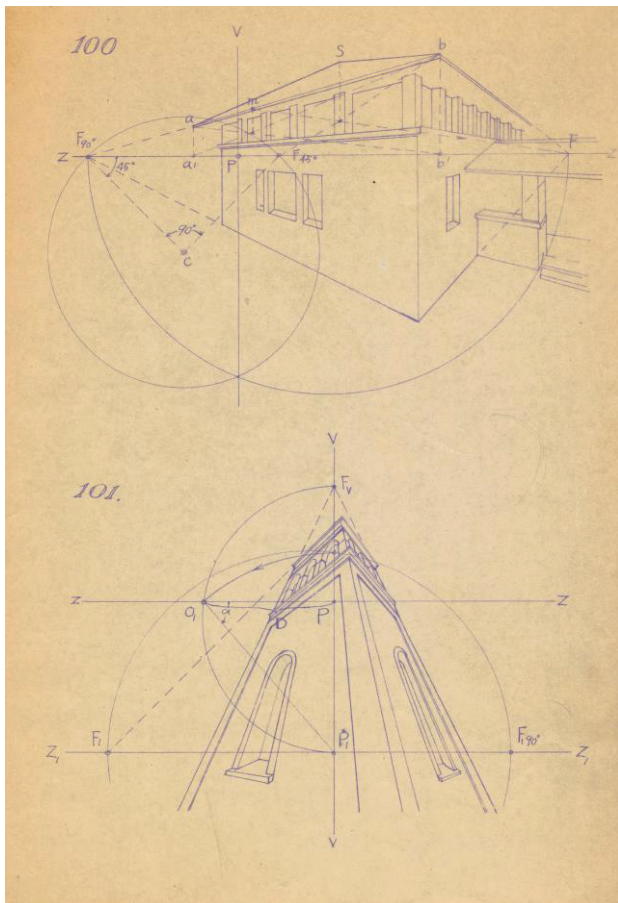


図 3.2.17 「図学プリント」第 100, 101 図

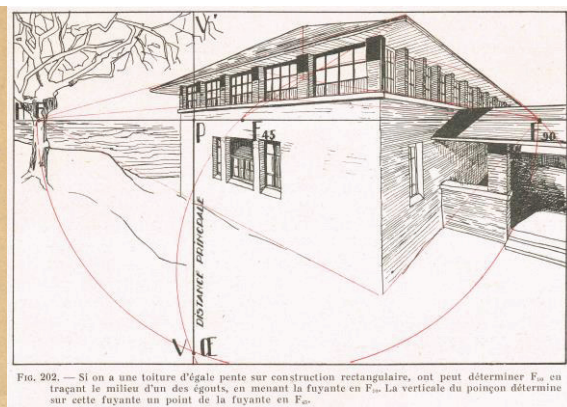


図 3.2.18 『透視図学講義』第 202 図

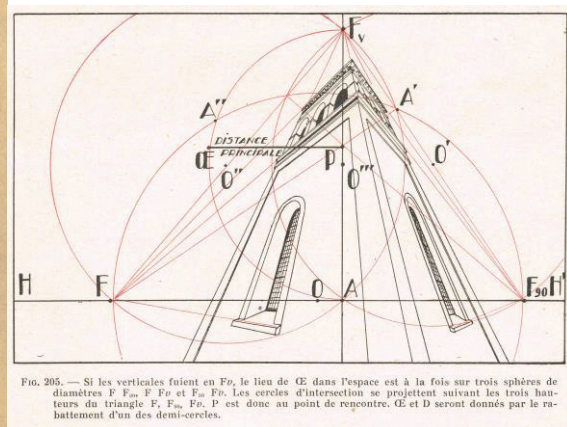


図 3.2.19 『透視図学講義』第 205 図

【図版出典】

- 図 3.2.9, 3.2.10, 3.2.11, 3.2.13, 3.2.17) 大西春雄蔵「図学プリント」
- 図 3.2.12) Pillet, J. : Traité de perspective linéaire, Deuxième édition, Librairie Ch. Delgrave, 1888
- 図 3.2.14, 3.2.18, 3.2.19) Guadet, P. : Cours de perspective, Vincent, Freal & Cie, 1929
- 図 3.2.15) Bouillon, A. : Principes de perspective linéaire, L. Hachette, 1841
- 図 3.2.16) 石丸三七郎編：泰西絵原写景法附図，原亮三郎，1885

小結

本章では、横浜高等工業学校建築学科の設計・製図教育にみる中村順平が行なった「実習」科目と中村順平以外の教育者が担当した「図学」科目の2つに着目し、それぞれのフランス建築理論と教育手法の受容を考察した。

「1. 設計・製図教育に見るフランス建築理論と教育手法①：「実習」科目」では、中村順平が担当した「実習」科目に着目し、そこで行なわれた「建築図画」および設計課題の課題文から、フランス建築理論や教育手法との接点を探り、具体的な受容を考察した。

1.1 では、中村順平の「実習」科目の全体像を概括した。

1.1.1 では、教育プログラム上の中村順平に割り当てられた時間数を整理した。その結果、教育プログラム上の時間数の割合から、建築学科の教育が中村順平によって形成され、特に「実習」科目が重要視されたことを指摘した。

1.1.2 では、『図集』（1937）を手がかりに、横浜高等工業学校建築学科で行われていた課題種別を整理し、エコール・デ・ボザールとの関係について考察した。その結果、横浜高等工業学校における設計課題の種別が、エコール・デ・ボザールの種別に対応したことを確認した。一方、両校の相違点として設計課題の採点方法の違いを指摘した。本論第2編・第2章で整理したようにエコール・デ・ボザールでは課題ごとに設定された賞碑順位に対応する単位数を与えたのに対し、横浜高等工業学校では基礎主として1課題20点満点制であった。また、エコール・デ・ボザールにおける「構造設計」課題と対応する横浜高等工業学校における最終課題に位置づけられた「略設計（12時間）及本仕上並に構造設計」課題の存在から、中村順平が横浜高等工業学校建築学科の教育レベルをエコール・デ・ボザールの2級課程相当として捉えた可能性を指摘した。

1.2 では、「実習」科目の基礎課程に位置づけられた「建築図画」について取り上げた。なお、ここで取り上げた「建築図画」は、檜の会所蔵のデジタル・データを使用した。

1.2.1 では、「建築図画」の概要を整理した。その結果、「建築図画」は、通常、中村順平の下図に習って学生が制作していたことを卒業生大西春雄の証言および、2人の卒業生、林久満と松本陽一の実例から確認した。

1.2.2 では、西洋建築が描かれた「建築図画」を対象に、その参考図版の存在を指摘し、具体的な参考図を明らかにした。特に、使用された参考図の監修者エクトール・デスピイは、本論第2編・第2章で整理したように、中村順平のエコール・デ・ボザール留学期の「装飾画」科目を担当した人物であったことを確認し、このエクトール・デスピイの3つの図版の使用を指摘した。さらに、「建築図画」上に残された記述から、セザール・ダリの図集の使用を指摘した。以上より、ギリシャ・ローマ建築の参考図およびイタリア・ルネッサンス建築の参考図については、エクトール・デスピイの図集が、フランス・ルネッサンス建築については、セザール・ダリの図集が参照されたことが判明した。

1.2.3 では、日本建築が描かれた「建築図画」から中村順平の制作意図を読み解いた。その結果、エクトール・デスピイの図集との関係から、中村順平の日本建築の「建築図画」の製作意図が、エコール・デ・ボザールの建築図画と同等の表現レベルにまで引き上げ、世界でも通用する遺構の復元図や現況図、修復図の類の作成をめざした可能性を指摘した。また、中村順平の「時代様式の研究」にお

ける建築図画は、修復建築家などの養成も視野にいれたリノベーション課題であった可能性を指摘した。さらに、中村順平が過去の実例を描くこうした「建築図画」課題の意図として、ヴィオレ＝ル＝デュク の思想との関係から「過去の作家が、建物の構築を目的とするかたわら、いかに構造を、芸術的に扱っていたかの手段」を学び取らせることにあった可能性を指摘した。

1.3 では、「実習」科目の練磨課程に位置づけられた各種設計競技課題について、エコール・デ・ボザールとの接点および「要素分析」・「略設計」課題の参考文献の傾向からフランス建築理論との接点を解明した。

1.3.1 では、収集した設計競技課題の課題文の整理から、まず、最も収集された年度である 1936 年度の課題数に着目し、エコール・デ・ボザールで出題された課題数との比較を行った。その結果、両校ともほぼ同数の課題が年間出題されたことを確認した。また、課題ごとの出題数を精査したところ、横浜高等工業学校では、練磨課程における基礎設計練習課題に該当する「要素分析」や「16 時間略設計」の問題数が多くを占めていたことを指摘した。さらに、参考として、名古屋高等工業学校での課題数との比較も行ったところ、横浜高等工業学校での課題数は、名古屋高等工業学校の課題数の倍数程度であった可能性を指摘した。

次に、収集した設計競技課題の課題文の整理から、中村順平が設定した設計競技課題は、過去の課題の焼き直しが少なく、時事に即した課題設定であったというもうひとつの特徴を指摘した。また、中村順平のこうした課題出題手法が、「建築理論」科目の設計競技課題の出題傾向を改革したジュリアン・ガデの思想と類似していることを指摘した。

1.3.2 では、中村順平が重視したいえる「要素分析」の大多数と「16 時間略設計」の一部の課題文に記載された参考作品や参考文献の傾向から、フランス建築理論との接点を考察した。中村順平が提示した参考作品は、イタリアとフランスのルネッサンス建築が多数を占めていたことが明らかになった。また、こうした作品と理論書との関係に着目したところ、中村順平のエコール・デ・ボザール時代に所属したパトロン、ジョルジュ・グロモールとの関係が明らかになった。

特に、ジョルジュ・グロモールの著書『イタリア・ルネッサンス建築』が参考文献として提示されたことを確認した。また、具体的な参考図集として、「建築図画」の参考図として使用されたエクトール・デスプイ監修のイタリア・ルネッサンス建築が掲載された図集の使用を確認した。一方、フランス・ルネッサンス建築との関係では、アンジュ＝ジャック・ガブリエルの作品が参考作品として多く取り上げられたことを指摘し、さらに、ジョルジュ・グロモールの著書『ジャック＝アンジュ・ガブリエル』との関係を指摘した。

また、中村順平が提示した参考図書から、年次設計競技図集の参照を確認し、ジュリアン・ガデの『建築の諸要素と理論』の参照を確認した。さらに、中村順平が提示した『建築の諸要素と理論』の参照頁から、中村順平が同書第 3 版以降を所持し、学生の参考図書としたことを明らかにした。

「2. 設計・製図教育にみるフランス建築理論と教育手法②：「図学」科目」では、中村順平以外の教育者によって行われた横浜高等工業学校の「図学」科目に着目し、その特徴をフランス建築理論の受容という観点から分析した。

2.1 では、同校の図学関連科目は、主に伊藤三郎が担当し、1940 年ごろに神戸蕃が加わったことを確認した。また、当時の教育証言を収集する過程において、筆者が入手した「図学」科目で使用され

た大西春雄所蔵の「図学プリント」(1940)の存在を明らかにした。

2.2 では、「図学プリント」で参照された可能性のある文献を推定するため、伊藤三郎のフランス図学に関する一連の研究で参照されたフランス人名を拾い出し、それぞれの業績を整理した。

2.3 では、「図学プリント」で参照された可能性のある文献を推定するため、中村順平がエコール・デ・ボザールで受けた図学関連科目の担当者について分析した。

2.4 では、「図学プリント」と2.2 および2.3 で推定した参考文献等との関係を分析した。その結果、「図学プリント」前半部において近代フランスにおける建築教育者で複数の建築教育機関を横断的に教育したジュール＝ジャン・ピレの建築理論の受容を確認し、後半部において、中村順平がエコール・デ・ボザールで受けた「透視図学」科目の担当者の講義録の参照を明らかにした。このように、中村順平以外の教育者においてもフランス建築理論の受容が確認でき、横浜高等工業学校の建築教育全般にフランスの建築教育との深い関係が見出せた。

参考資料：「実習」科目関連史料リスト

① ギリシャ・ローマ期「建築図画」リスト

研究対象時代	都市名等	描かれた建築物など	制作者	制作年
1	ギリシャ	パルテノン神殿	羽石渡	1928
2			網戸武夫	1926
3			君塚泰	1929.12
4			不明	不明
5			不明	不明
6		エレクトイオン	不明	不明
7			不明	不明
8			不明	不明
9			不明	不明
10			不明	不明
11		プロピュライア	中山行弘	1940
12			伊藤三郎	1929
13			中山行弘	1940
14			武田亀雄	不明
15			不明	不明
16		アテーナー・ニーケー神殿	不明	不明
17			不明	不明
18			不明	不明
19			不明	不明
20			不明	不明
21	トルコ	プリエネ・アテネ・ポリアス神殿	不明	不明
22		マウソロス霊廟	不明	不明
23	ローマ	パンテオン	伊藤三郎	1928
24			不明	不明
25			不明	不明
26		カラカラ浴場	浅輪和雄	1929
27		太陽神殿	不明	不明
28		ユピテル・スタトル神殿	不明	不明
29			不明	不明
30		マルケッルス劇場	不明	不明
31			不明	不明
32			朝日保	1940
33			不明	不明
34		オクタヴィアヌス回廊	不明	不明
35		オーダーアンティック	川村信英	1942
36		ポンペイイオニック	不明	不明
37			不明	不明
38		フラグメントアンティック	不明	不明
39			不明	不明
40			不明	不明
41		フラグメントアーキテクチャー	石川末子	1941
42			村上正二	1935
43			不明	不明
44	チヴォリ	ヴェスタ神殿	不明	不明
45	パレスチナ ベツレヘム	バジリク（降誕教会）	不明	不明

② ルネッサンス期「建築図画」リスト

研究対象時代	都市名等	描かれた建築物など	制作者	制作年
1	ルネッサ ンス イタリア	ローマ・	ルネッサンス研究	林久満 1933.05
2		ヴェネチア	ルネッサンス 15 世紀研究	松本陽一 1941
3		ローマ	ファルネーゼ宮	山崎忠夫 不明
4			不明	不明
5			パラッツォ・ファルネーゼ宮中庭	清水和弥 不明
6			パラッツォ・マッシモ・アッレ・コロネ	田村郁夫 1942
7			ピエトロ・マッシミ宮	不明 不明
8			スパーダ宮	不明 不明
9			コロッセオ	不明 不明
10			ティトゥス凱旋門	不明 不明
11			ヴィッラ・マダマ	池田英夫 1930.03.20
12			パレ・ランテ	不明 不明
13			トレヴィの泉	不明 不明
14		ヴェネチア	コッレオーニ騎馬像台座	神木東一 1941
15			不明	不明
16			新行政館(サン・マルコ広場)	不明 不明
17		ヴィチエンツァ	バシリカ・パラディアーナ	不明 不明
18			バディア・フィオレンティーナ教会墓	不明 不明
19		フィレンツェ	シエナ大聖堂ピッコロミーニ図書館	河辺弘 1937
20		シエナ		
21	ルネッサ ンス フランス	フォンテーヌブロー	フォンテーヌブロー	不明 不明
22				不明 不明
23				不明 不明
24				田窪忠美 不明
25				不明 不明
26				岩本健吾 1936.06.07
27				不明 不明
28		ヴェルサイユ	ヴェルサイユ	白居易一 1935. J
29			福井潔	1934.12
30			大滝栄蔵	1935.01
31			ヴェルサイユ大理石の中庭 (ルネッサンス・オーダー・ダリ)	成清龍四郎 1937
32			安藤穰一	1936
33		パリ	サン・ニコラ・デシャンブ： パリ・アンリⅢ世様式	不明 不明
34			海軍省・ガブリエルとその作品	不明 不明
35			海軍省・ルイ 16 世様式	大部友之 1936.01.30
36		トゥールーズ	アセザ館	不明 不明
37		その他	セザール・ダリのフラグメントより	不明 不明
38			ルイ 16 世様式	不明 不明

③ 日本建築「建築図画」リスト

建築物名称		作者	年	月	備考
法隆寺	金堂	不明	1929	7	詳細図
	金堂	八田実	1929	7	断面
	金堂	不明	1929	7	
	金堂	不明	1931	10	縦断面図
	五重塔	不明	1930	5	
	中門	深海忠雄	1930		全景および断面詳細図
	東院鐘楼	不明	1932	12	詳細図
	東院鐘楼	不明	1932	10	横断面図, 正面図
	上御堂	不明	1932	10	全景断面詳細図
	東院西門	白井実	1934	1	
	東院夢殿	不明	1942	3	正面図
	東院夢殿	不明	1942	2	断面図
	法隆寺	不明	不明		
姫路城	姫路白鷺城の研究	貫名欣也	1934		
	姫路白鷺城	大部友之	1936	5	
	姫路白鷺城	亀山健夫	1938		
	天守閣	安部憲一郎	1938		
	天守閣	千葉眞	1938		
	腹切丸	佐藤隆次	1938		
	とノ壱門, 貳門	田中久雄	1938		断面平面図
	とノ四門南北	田村克好	1938		両立面図断面図
	西小天守及び二の渡水五の門	不明	不明		
	桃山期の研究	笹倉良隆	1935		
唐招提寺	金堂	辻一蔵	1928	10	
	金堂	大智誠	1930	7	柱廊詳細図
	金堂	成澤福松	1931		横断面図
	金堂	松下正太郎	1933	10	詳細図
唐招提寺	金堂	中山行弘	1942	2	側面図
	講堂	長部一吉	1931	10	全景断面詳細図
	鼓楼	勝呂政市	1934	10	詳細図
	経蔵	瓜生時光	1936	1	詳細図
東大寺	鐘楼	副島龍夫	1929	7	
	鐘楼	長嶺次郎	1932	10	断面図
	鐘楼	柳田操	1941	7	詳細図
	法華堂	丹羽漢吉	1930	4	断面図
	法華堂	不明	1931	7	
	法華堂	不明	1934	6	詳細図
	南大門	片柳外夫	1934	12	
	湯屋	高田吟之介	1941	2	
平等院	鳳凰堂	君塚泰	1930		詳細図
	鳳凰堂	鈴木秀一	1931	10	平面図
	鳳凰堂中堂	青木堅三	1931	10	詳細図
	鳳凰堂中堂	浅田有	1931	10	横断面図
	鳳凰堂中堂	玉川嘉政	1931	10	正面図
	鳳凰堂実形造翼楼	渡辺将之	1931	12	詳細図
	平等院	小泉勝世	1931		正面
三溪園	東明寺三重塔	篠田貞雄	1931	10	正面
	天瑞院瓦門	松本陽一	1940	7	実測図
	聴秋閣	荒井(江澤)龍三	1927		断面
	聴秋閣	不明	1932		断面
	聴秋閣	不明	不明		
法界寺	阿弥陀堂	木子清一	1928	3	断面図
	阿弥陀堂	大山明吉	1933		正面図
	阿弥陀堂	野村肇一	1935	12	詳細図

建築物名称		作者	年	月	備考
法界寺	阿弥陀堂	高久洋一	1938	6	正面図
	阿弥陀堂	朝日保	1941		正面図
厳島神社	能舞台	蒲生久敏	1932	7	
	能舞台	小田原健吉	1935	12	
	厳島神社	松本陽一	1940		
	厳島神社	不明	不明		
北野神社	三光門	辻宇三郎	1934	12	
	三光門	鈴木行重	1937		
	三光門	伊藤一秀	1940		
	後門及透塀	三谷茂	1934	7	詳細図
興福寺	三重塔	不明	1932	11	正面図
	五重塔	柴田正司	1931	10	断面図
	五重塔	不明	不明		
	北円堂	太田喜孝	1934	11	断面屋根見上詳細図
大徳寺	五重塔	不明	1934	11	正面図
	唐門	石曾根永吉	1935	10	詳細図
	孤篷庵	八木章	1935		
	浴室	不明	1938		正面図
豊国神社	唐門	安井善次郎	1933	10	
	唐門	白居隆一	1935	10	詳細図
	唐門	不明	不明		詳細図
法輪寺	三重塔	不明	1930	5	
	三重塔	不明	不明		
円覚寺	舍利殿	牛尾博一	1929	5	
	舍利殿	西松長司	1934	11	詳細図
教王護国寺	金堂	古川景基	1930	7	
	金堂	勝田芳郎	1934	11	詳細図
金閣寺	金閣寺	鈴木孫市	1929		
	鹿苑寺金閣	不明	不明		
石山寺	多宝塔	不明	1936		
	多宝塔	不明	1938		正面及組物並軒裏見上詳細図
日光東照宮	陽明門	西牧実	1930	10	
	上神庫	不明	1934	11	
南禅寺	三門	花野吉平	1932	1	
	三門	宮本良行	1940	3	正面
西本願寺	京都飛雲閣	高田（河内）義就	1933		
	唐門	森谷雄一	1940		詳細図
住吉神社	山口県住吉神社	不明	1934	11	
	本殿	不明	1935	12	
栄福寺	第一峰門	范源遠	1929	9	
百済寺	三重塔	不明	1929	7	
伊勢神宮	唯一神明造	守屋哲之介	1931	1	
吉備津神社	吉備津神社	加藤操	1931	10	
日吉神社	滋賀県日吉神社	平田三郎	1931	12	
聚楽第	天楽之間	林三郎	1931	10	
新薬師寺	四御門	鈴木秀一	1931	12	
瑞應山弘明寺	楓閣門	丹羽漢吉	1931	10	詳細図
		深海忠雄			
上醍醐経蔵	上醍醐経蔵	井上健	1931	10	
春日神社	本殿	栗原実	1932	11	正面軒先見上図
鶴林寺	兵庫県鶴林寺	石川十夫	1932	10	正面及断面図
正倉院	校倉造	伊藤知二	1932	10	正面・各部詳細図
瑞巖寺	瑞巖寺	富所尚夫	1933	12	

建築物名称		作者	年	月	備考
青葉城 (仙台城)	大手門	村井喜造	1933	10	
海龍王寺	西金堂	不明	1934		
観心寺	本堂	石黒一郎	1934	11	平面断面・各部構造詳細図
薬師寺	東塔	不明	1934	2	
四天王寺	東大門	不明	1934		実測図
桂離宮	正金亭	横山実	1935	12	玄関・断面詳細図
仙洞御所	醍花亭	吉原忠直	1935	12	実測図
薩摩藩邸	装束屋敷表門	赤羽常雄	1935	12	
般若寺	楼門	高取恒夫	1936	1	側面 床 屋根平面図
栄山寺	八角堂	不明	1937	12	
園城寺	閼伽井屋	藤井秀也	1937	1	正面断面
岡山城	備前国岡山城	西芝弘	1938	11	正面断面平面・小屋伏図
前田侯邸	赤門	須田一直	1938		正面・断面図
名古屋城	天守閣	池内基周	1940	7	断面図・地階平面図
清水寺	本堂	安藤穰一	1941	7	
熱田神社	熱田神社	不明	不明		詳細図
室生寺	五重塔	不明	不明		平面正面全景各部詳細図

④ 時代様式の研究「建築図画」リスト

研究対象時代	描かれた建築物など	作者	卒業年
上古の研究	住吉神社	伊藤昌雄	1938
上古の研究	住吉神社	若山旅人	1935
上古の研究	伊勢神宮	竹森光高	1943
上古の研究	伊勢神宮	横山（大西）春雄	1942
飛鳥期の研究	法隆寺 中門	青木栄	1938
飛鳥時代の研究	飛鳥時代 金堂	岩本啓二郎	1942
飛鳥時代の研究	法隆寺 中門	内田正泰	1943
飛鳥天平期の研究	法隆寺 中門	石川秀雄	1932
飛鳥天平期の研究	法隆寺 夢殿	岩本健吾	1938
飛鳥時代の研究	法隆寺 玉虫厨子	歌崎昌太	1938
（飛鳥時代の研究）	法隆寺 金堂	中山長一郎	1941
（飛鳥時代の研究）	法隆寺 中門詳細	菊池朔朗	1941
（飛鳥時代の研究）	橘夫人厨子	長谷川治	1938
天平時代の研究	唐招提寺 構造詳細 法隆寺夢殿 当麻寺東塔	青木進	1942
天平時代の研究	唐招提寺	田村郁夫	1944
（天平時代の研究）	薬師寺	林恒士	1938
（天平時代の研究）	薬師寺 三重塔全景及詳細図	岡本裕信	1932
天平期の研究	唐招提寺	福富正己	1935
藤原期の研究	平等院中堂	松野清彦	1938
藤原期の研究	法界寺 阿弥陀像平等観	平島正	1933
藤原期の研究	法界寺	天野貫一	1936
藤原期の研究	法界寺	大王義人	1943
（藤原期の研究）	中尊寺金色堂 断面及詳細図	琴田弥四郎	1933
鎌倉期の研究	摂津国慈眼院多宝塔	谷本博	1941
平家時代の研究	厳島神社	不明	不明
（平家時代の研究）	厳島神社 能舞台高舞台	梶原政男	1934
藤原期の研究	日吉大社 西本宮本殿	寺田充彦	1938
鎌倉期の研究	東大寺 鐘楼	佐野大偉	1935
鎌倉期の研究	興福寺 三重塔	明珍高尚	1936
鎌倉期の研究	興福寺 三重塔	山下正一	1943
鎌倉期の研究	浄土寺浄土堂	不明	不明
南北朝時代の研究	歓心寺	大智正	1936
南北朝時代の研究	歓心寺	山下里	1941
南北朝時代の研究	大阪建分水神社	成清亀四郎	1939
室町期の研究	金閣寺 西側面	小森豊吉	1935
室町期の研究	金閣寺 南面	諏訪豊巳	1938
足利末期の研究	慈照寺東求堂	高鋼新一	1941
桃山期の研究	北野天満宮 三光門	甲山敏夫	1936
桃山期の研究	西本願寺 唐門	越賀邦夫	1933
桃山期の研究	西本願寺 唐門	樋口敏夫	1935
桃山期の研究	西本願寺 飛雲閣	不明	不明
（桃山期の研究）	京都西本願寺 書院内対面所 鴻の間	木南康	1944
桃山期の研究	豊国神社 唐門	加藤主雄	1938
桃山期の研究	豊国神社 唐門	木村徳	1941
桃山期の研究	姫路城	北村泰彦	1942
桃山期の研究	姫路城	石黒義行	1935
江戸上期の研究	江戸城	清水和弥	1935

研究対象時代	描かれた建築物など	作者	卒業年
江戸中期の研究	江戸城 関白鷹司房輔の娘信子入奥時使用の籠	田窪忠美	1937
江戸後期の研究	黒門	福井潔	1937
江戸末期の研究	千石船	織本幸宏	1940
江戸末期の研究	熊本藩御座舟 泰宝丸	石井愛人	1944
江戸時代の研究	赤門	宇野良夫 松本陽一	1942
(江戸時代の研究)	春日出新田臨春閣	河邊弘	1939
明治初期の研究	五稜郭	辻本(花崎) 定一	1939
朝鮮新羅時代の研究	佛国寺 多宝塔	金重業	1942
(朝鮮新羅時代の研究)	佛国寺 多宝塔	伊藤三郎	—
備考			
・研究対象年代の表記は、「建築図画」の記載による。ただし、括弧書きのものは「建築図画」での描画内容からの想定。			

⑤ 「実習」科目設計課題課題文収集リスト

(出題年度順に整理した。なお、出題月不明のものについては通常「年」の年度とし、課題種類により適宜調整した。)

No.	種類別	課題	期間	年	月
1927 年度					
1	要素分析	表広庭ノ困障	10 日間	1927	4
2	要素分析	宮殿内庭入口	1 週間	1927	5
3	要素分析	大舞踏室内ノ大ストーブ	2 週間	1927	5
4	要素分析	海水浴場ニ於ける Casino	10 日間	1927	7
5	3 日間略設計	世界飛行歓迎記念門	3 日間	1927	7
6	要素分析	横浜市復興記念大噴水	12 日間	1927	9
7	要素分析	奏楽堂	15 日間	1927	10
8	要素分析	某記念建築物玄関	1 週間	1927	10
9	要素分析	横浜市美術館	10 日間	1927	10
10	16 時間略設計	橋梁装飾	16 時間	1927	10
11	要素分析	大正記念館	不明	1927	11
12	要素分析	某温泉浴場内フランス庭園	12 日間	1927	11
13	要素分析	某地小御用邸内フランス庭園	10 日間	1927	11
14	16 時間略設計	京浜復興記念聯合大博覧会正門	16 時間	1927	11
15	要素分析	Salon 装飾	15 日間	1927	12
16	本設計	京浜復興記念聯合大博覧会美術工芸館	3 日間	1927	12
17	要素分析	Balancement ヲ有スル鉄筋コンクリート階段	4 週間	1927	不明
18	要素分析	美術館大広間正面入口	10 日間	1927	不明
19	16 時間略設計	吉備津神社屋根改築設計	16 時間	1927	不明
20	10 時間略設計	画家 Monet ノ碑	10 時間	1927	不明
21	本設計	常陸丸殉難記念碑	6 日間	1927	不明
22	本設計	飛鳥天平美術及参考品販売店店頭装飾	3 日間	1927	不明
23	12 時間略設計+本仕上	馬術練習所	20 日間	1927	不明
24	12 時間略設計+本仕上	タイトル不明	20 日間	1927	不明
25	12 時間略設計+本仕上	共同住宅	20 日間	1927	不明
26	要素分析	Balancement ヲ有スル木造階段	2 週間	1928	11
27	要素分析	横浜櫻道下隧道入口	10 日間	1928	2
28	要素分析	獵友会会所	10 日間	1928	2
29	要素分析	瓶原離宮旧跡内校倉	8 日間	1928	3
1928 年度					
30	アルケオロジー	十二世紀より十九世紀間に於ける日本又は欧州の建築様式	4 月末日	1928	4
31	要素分析	某共同墓地壁中ノ正門	8 日間	1928	5
32	要素分析	Olympique 競技場大入口	8 日間	1928	6
33	要素分析	某国立劇場側面車寄及馬車廻	10 日間	1928	6
34	要素分析	三溪園内木造柱列	8 日間	1928	6
35	12 時間略設計	日本風ノ Galerie	12 時間	1928	8
36	要素分析	歩兵小隊ノ営舎	10 日間	1928	9
37	本設計	木造の Galerie d'honneur	1 週間	1928	9
38	要素分析	自働車 abri	8 日間	1928	10

No.	種別	課題	期間	年	月
39	要素分析	直線階段	8日間	1928	10
40	要素分析	横浜市美術館	10日間	1928	10
41	本設計	某高等専門学校大講堂	4週間	1928	11
42	要素分析	Orangerie	10日間	1928	12
43	本設計	公園内の地下鉄道入口	3日間	1928	12
44	本設計	大活動写真館	5日間	1928	12
45	10時間略設計	鎌倉大仏石窟殿	10時間	1928	不明
46	12時間略設計	白虎隊之碑	12時間	1928	不明
47	本設計	街燈	5日間	1929	1
48	12時間略設計+本仕上+構造設計	交通博物館	不明	1929	1
49	要素分析	客室ノ Cheminée 暖炉	12日間	1929	2
50	要素分析	日光廟境内共同便所	10日間	1929	2
51	要素分析	四つ目垣 treillage ノ 吾妻家	10日間	1929	3
1929 年度					
52	本設計	横浜開港大記念建造物 (第一回大競技設計問題)	10月5日	1929	4
53	12時間略設計	常陸丸殉難記念碑	12時間	1929	5
54	12時間略設計+本仕上	奈良停車場	1ヶ月半	1929	9
55	12時間略設計	菊花陳列場	12時間	1929	10
56	本設計	ホテル	10日間	1929	11
57	要素分析	公衆道路上ノ有蓋渡廊下	10日間	1929	12
58	12時間略設計	日本風ノ Galerie	12時間	1929	12
59	本設計	婦人装身具店店頭装飾	12日間	1930	1
60	12時間略設計+本仕上+構造設計	大講堂	学期末	1930	1
61	要素分析	Salon 装飾	15日間	1930	3
1930 年度					
62	16時間略設計	日本海戦ニ於ける東郷元帥ノ碑	16時間	1930	5
63	本設計	横浜万国橋橋頭	1ヶ月	1930	5
64	12時間略設計+本仕上	武術館	2ヶ月	1930	6
65	要素分析	某記念建築物玄関	10日間	1930	10
66	12時間略設計+本仕上	小公園	1ヶ月半	1930	11
67	要素分析	小食堂暖炉	1週間	1930	12
68	16時間略設計	宮中池上遊覧船	16時間	1931	2
69	要素分析	劇場内客用大階段室	12日間	1931	3
1931 年度					
70	16時間略設計	平城京遺跡内ノ案内表	16時間	1931	4
71	アルケオロジ	イタリー十五世紀復興様式の研究	4月中	1931	4
72	要素分析	大 Galerie ノー travée 小間	12日間	1931	5
73	要素分析	某富豪別荘内フランス庭園	12日間	1931	5
74	16時間略設計	深山中ノ貸別荘	16時間	1931	6
75	要素分析	小市場	20日間	1931	9
76	本設計	職工住宅	20日間	1931	9
77	12時間略設計	ガソリン販売所	12時間	1931	10
78	12時間略設計	航空研究犠牲者ノ記念碑	12時間	1931	10
79	本設計	日本公使館	1ヶ月	1931	10
80	要素分析	陸軍大学正門及围墙	10日間	1931	11
81	要素分析	裁判所大控室内正面入口	10日間	1931	12

No.	種類別	課題	期間	年	月
82	要素分析	Cloître 廻廊ノ入隅	8日間	1932	1
83	12時間略設計+本仕上+構造設計	日本美術陳列館	不明	1932	1
84	16時間略設計	古戦場ノ鐘楼	16時間	1932	2
85	12時間略設計	満州鉄道国賓客車内装飾	12時間	1932	2
86	16時間略設計	江湾競馬場戦勝大凱旋門	16時間	1932	3
1932年度					
87	要素分析	宮中御苑内奏楽堂	10日間	1932	4
88	要素分析	Balancement ヲ有スル鉄筋コンクリート階段	1週間	1932	5
89	要素分析	公園中ノ Café-Restaurant	2週間	1932	5
90	12時間略設計	共同浴場	12時間	1932	5
91	12時間略設計+本仕上	民衆劇場	2ヶ月	1932	5
92	本設計	満州国宮殿正門	3日間	1932	7
93	本設計	24人用食堂	12日間	1932	9
94	12時間略設計	大東京市交通案内所	12時間	1932	10
95	要素分析	国立美術院内図書館入口	10日間	1932	11
96	12時間略設計	公園内放送塔	12時間	1932	11
97	12時間略設計+本仕上	Golf 倶楽部	1ヶ月	1932	11
98	要素分析	海軍省正面中央	不明	1932	12
99	本設計	硝子工場	3日間	1933	1
100	12時間略設計	西部増治郎博士之墓	12時間	1933	2
101	12時間略設計+本仕上	満州建国大記念碑	8日間	1933	3
102	12時間略設計+本仕上+構造設計	在満州通過駅	3学期末	1933	不明
1933年度					
103	16時間略設計	百済観音陳列箱	16時間	1933	4
104	要素分析	池畔ノ小宮殿	10日間	1933	5
105	16時間略設計	軍馬ノ供養塚	16時間	1933	5
106	16時間略設計	孔雀小屋	16時間	1933	6
107	16時間略設計	山の家	16時間	1933	7
108	要素分析	某温泉浴場内フランス庭園	15日間	1933	9
109	16時間略設計	遊覧自動車	16時間	1933	9
110	アルケオロギー	中世期の Ouverture 研究	10日間	1933	9
111	12時間略設計	《Play-Guide》店頭装飾	12時間	1933	12
112	要素分析	裁判所玄関	10日間	1934	1
113	要素分析	美術館内庭 portique	12日間	1934	2
114	12時間略設計	東京湾台場大竈	12時間	1934	2
1934年度					
115	要素分析	美術館正面入口	8日間	1934	4
116	要素分析	横浜市美術館	10日間	1934	5
117	要素分析	水浴場	15日間	1934	6
118	要素分析	Une Campanile	10日間	1934	9
119	アルケオロギー	Style Empire	12日間	1934	9
120	要素分析	横浜復興大博覧会正門及囲障	12日間	1934	10
121	16時間略設計	博覧会場内菓子売店	16時間	1934	10
122	要素分析	劇場内 Foyer	15日間	1934	11
123	16時間略設計	京都店頭正面	16時間	1934	11
124	要素分析	Une Columbarium	10日間	1934	12

No.	種類別	課題	期間	年	月
125	16 時間略設計	牡蠣船	16 時間	1934	12
126	16 時間略設計	土産品売店	16 時間	1934	12
127	3 日間略設計	帝室美術図書館	3 日間	1934	12
128	要素分析	Orangerie	10 日間	1935	1
129	要素分析	華族会館正面及塀	10 日間	1935	1
130	16 時間略設計	満洲国皇帝歓迎門	16 時間	1935	1
131	16 時間略設計	渡し守の家	16 時間	1935	1
132	12 時間略設計+本仕上+構造設計	Un gymnase	3 学期末	1935	1
133	要素分析	大阪城内共同便所	8 日間	1935	2
134	要素分析	劇場内入口	10 日間	1935	2
135	16 時間略設計	千早城址ノ碑	16 時間	1935	2
136	16 時間略設計	能楽出品館	16 時間	1935	2
137	16 時間略設計	居酒屋	16 時間	1935	3
138	16 時間略設計	逍遙坪内博士之墓	16 時間	1935	3
1935 年度					
139	要素分析	某官省正面中央	12 日間	1935	4
140	16 時間略設計	奈良市自動電話	16 時間	1935	4
141	要素分析	木造牛小屋	10 日間	1935	5
142	要素分析	三溪園内木造柱列	不明	1935	5
143	16 時間略設計	煙州鈴木達治氏之墓	16 時間	1935	5
144	16 時間略設計	故東郷元帥遺髪陳列箱	16 時間	1935	5
145	16 時間略設計	謡曲指南所	16 時間	1935	5
146	要素分析	Treillage / pavillon	7 日間	1935	6
147	16 時間略設計	前校長鈴木達治氏記念碑	16 時間	1935	6
148	16 時間略設計	瀑見茶屋	16 時間	1935	6
149	要素分析	Une Banque	15 日間	1935	9
150	要素分析	墳墓	8 日間	1935	9
151	要素分析	客室ノ Cheminée 暖炉	12 日間	1935	10
152	要素分析	陸軍大学正門及囲障	10 日間	1935	10
153	要素分析	Cloître 廻廊ノ入隅	8 日間	1935	11
154	16 時間略設計	紙芝居小屋	16 時間	1935	11
155	16 時間略設計	獵友会合場大 Salon ノ暖炉	16 時間	1935	11
156	要素分析	裁判所大控室内正面入口	10 日間	1935	12
157	16 時間略設計	共同浴場	16 時間	1935	12
158	16 時間略設計	地下鉄道換気塔	16 時間	1935	12
159	要素分析	池畔ノ離レ家	1 週間	1936	1
160	要素分析	陸軍省正面中央	12 日間	1936	1
161	16 時間略設計	三等郵便局	16 時間	1936	1
162	16 時間略設計	鼠塚	16 時間	1936	1
163	要素分析	Balancement フ有スル鉄筋コンクリート階段	12 日間	1936	2
164	要素分析	傾斜地ノ玄関	10 日間	1936	2
165	16 時間略設計	Un Colombier	16 時間	1936	2
166	16 時間略設計	共同墓地内ノ噴水	16 時間	1936	2
167	16 時間略設計	梅林中ノ共同便所	16 時間	1936	2
1936 年度					
168	要素分析	通天橋中央 pavillon	10 日間	1936	4

No.	種類別	課題	期間	年	月
169	要素分析	某市美術館	10 日間	1936	4
170	16 時間略設計	聖徳太子厨子	16 時間	1936	4
171	要素分析	Un Dôme ノ研究	15 日間	1936	5
172	要素分析	直線階段	10 日間	1936	5
173	16 時間略設計	艇庫	16 時間	1936	5
174	16 時間略設計	動物園内羊小屋	16 時間	1936	5
175	16 時間略設計	藤見茶屋	16 時間	1936	5
176	12 時間略設計	三原山地蔵堂	12 時間	1936	5
177	要素分析	Un Casino	12 日間	1936	6
178	要素分析	馬小屋	7 日間	1936	6
179	16 時間略設計	Un atelier de peintre	16 時間	1936	6
180	16 時間略設計	祭禮用神輿	16 時間	1936	6
181	12 時間略設計	燈台守ノ家	12 時間	1936	7
182	要素分析	Une Cascade	15 日間	1936	9
183	要素分析	歩兵大隊ノ営舎	10 日間	1936	9
184	16 時間略設計	Grand Opéra 観覧場電燈	16 時間	1936	9
185	16 時間略設計	梶原神宮前文化燈 (第 100 回記念)	16 時間	1936	9
186	12 時間略設計+本仕上	大百貨店	40 日間	1936	9
187	要素分析	Salon 装飾	15 日間	1936	10
188	12 時間略設計	流行服店店頭	12 時間	1936	10
189	16 時間略設計	Grand salon de luxe 内 grand piano	16 時間	1936	11
190	16 時間略設計	菊人形展覧会場正門	16 時間	1936	11
191	本設計	職工住宅	10 日間	1936	11
192	12 時間略設計+本仕上	幼稚園	1 ヶ月	1936	11
193	要素分析	Une Loge	8 日間	1936	12
194	要素分析	宮殿正面入口	8 日間	1936	12
195	12 時間略設計	赤穂義士ノ碑	12 時間	1936	12
196	要素分析	宮中乗船場	10 日間	1937	1
197	要素分析	宮殿内庭入隅	1 週間	1937	1
198	12 時間略設計	田家之雪 (昭和 12 年新春鏡開)	12 時間	1937	1
199	本設計	貸事務所	3 日間	1937	1
200	12 時間略設計+本仕上+構造設計	大講堂	3 学期末	1937	1
201	要素分析	科学博物館入口	10 日間	1937	2
202	16 時間略設計	動物園正門	16 時間	1937	2
203	16 時間略設計	梅林中休憩所	16 時間	1937	2
204	12 時間略設計	Olympique 用 stade 玉座	12 時間	1937	2
205	16 時間略設計	《本能事変》ノ décors	16 時間	1937	3
1937 年度					
206	要素分析	宮殿ノ Pavillon d'angle	12 日間	1937	4
207	16 時間略設計	Une Pergola	16 時間	1937	4
208	16 時間略設計	琵琶湖丸	16 時間	1937	4
209	要素分析	直線階段	10 日間	1937	5
210	16 時間略設計	英国戴冠式奉祝塔	16 時間	1937	5
211	16 時間略設計	Un Kiosque de boissons	16 時間	1937	6
212	16 時間略設計	建築科山車	16 時間	1937	6
213	16 時間略設計	工芸美術商店舗	16 時間	1937	6

No.	種類別	課題	期間	年	月
214	16 時間略設計	有料便所	16 時間	1937	6
215	要素分析	池畔ノ離レ家	8 日間	1937	7
216	要素分析	漁夫ノ家	7 日間	1937	7
217	要素分析	有蓋調馬場	8 日間	1937	9
218	16 時間略設計	Yacht-Club	16 時間	1937	9
219	16 時間略設計	野戦病院内齋壇	16 時間	1937	9
220	要素分析	大使官邸内フランス庭園	14 日間	1937	10
221	要素分析	帝国芸術院大講堂	10 日間	1937	10
222	16 時間略設計	北京慈恵病院高塔	16 時間	1937	10
223	16 時間略設計	紅葉茶屋	16 時間	1937	10
224	要素分析	Une salle de fête	15 日間	1937	11
225	16 時間略設計	陸軍戦病死者合同碑	16 時間	1937	11
226	要素分析	Orangerie	10 日間	1937	12
227	要素分析	自働車 abri	8 日間	1937	12
228	16 時間略設計	鬼ヶ島城門	16 時間	1937	12
229	16 時間略設計	別荘広間ノ irori adosse	16 時間	1937	12
230	本設計	職工住宅	12 日間	1937	12
231	要素分析	Balcon フ有スル窓	8 日間	1938	1
232	要素分析	Institut ノ玄関	8 日間	1938	1
233	16 時間略設計	神苑朝（昭和 13 年新春鏡開）	16 時間	1938	1
234	16 時間略設計	高架鉄道下ノ店頭	16 時間	1938	1
235	本設計	小癪病院	3 日間	1938	1
236	12 時間略設計+本仕上+構造設計	映画ノ Studio	3 学期末	1938	1
237	要素分析	宮殿内庭入隅	8 日間	1938	2
238	要素分析	北京公園内共同便所	10 日間	1938	2
239	要素分析	穹窿ノ Galerie	6 日間	1938	3
240	要素分析	薬医門ノ研究	4 日間	1938	3
1938 年度					
241	要素分析	観櫻橋	10 日間	1938	4
242	16 時間略設計	癪病院園内鳥籠	16 時間	1938	4
243	12 時間略設計	宣撫班用 guignol	12 時間	1938	4
244	要素分析	外部階段フ有スル表入口	12 日間	1938	5
245	要素分析	末端ノ Pavillon	15 日間	1938	5
246	要素分析	小美術館	12 日間	1938	6
247	16 時間略設計	女髪結所	16 時間	1938	6
248	要素分析	燈台	6 日間	1938	7
249	12 時間略設計	富士山頂旗竿装飾	12 時間	1938	7
250	要素分析	満州高等専門学校体操場	10 日間	1938	9
251	16 時間略設計	建築家アトリエ	16 時間	1938	9
252	要素分析	小図書館	12 日間	1938	10
253	16 時間略設計	軍馬祭祭壇	16 時間	1938	10
254	16 時間略設計	大講堂御真影奉安所	16 時間	1938	10
255	要素分析	Une Chambre principale	12 日間	1938	11
256	要素分析	美術館前小公園	12 日間	1938	11
257	要素分析	木造長屋門	1 週間	1938	11
258	16 時間略設計	維新支那館	16 時間	1938	11
259	16 時間略設計	横浜工業会会員表忠碑	16 時間	1938	11

No.	種類別	課題	期間	年	月
260	要素分析	陸軍大学正門及囲障	8日間	1938	12
261	本設計	在支高官住宅	23日間	1938	12
262	16時間略設計	朝陽映島	16時間	1939	1
263	本設計	活動写真館	1ヶ月	1939	1
264	要素分析	Voûte en pendentif ノ研究	12日間	1939	2
265	要素分析	宮殿内庭	10日間	1939	2
266	本設計	支那美術館	3日間	1939	2
267	本設計	在支日本館	学期末	1939	2
1939年度					
268	要素分析	Treillage ノ pavillon	不明	1939	5
269	要素分析	Un musée archéologique	12日間	1939	5
270	16時間略設計	明治神宮駅 Quais abris	16時間	1939	6
271	要素分析	広場二面スル噴水	12日間	1939	9
272	16時間略設計	木彫家 atelier	16時間	1939	9
273	要素分析	Une Salle de conseil	15日間	1939	10
274	要素分析	信用組合	14日間	1939	10
275	16時間略設計	赤穂義士切腹跡記念碑	16時間	1939	10
276	要素分析	辻公園	15日間	1939	11
277	24時間略設計	在満結婚用殿堂	24時間	1940	1
278	本設計	Une hôtel particulière	3学期末	1940	1
279	12時間略設計+本仕上+構造設計	映画ノ Studio	3学期末	1940	1
280	要素分析	宮殿内庭入隅	8日間	1940	2
281	本設計	某高等専門学校大講堂	20日間	1940	不明
1940年度					
282	要素分析	Un cabinet de l'ambassadeur	14日間	1940	10
283	16時間略設計	Un atelier de peintre	16時間	1940	10
284	16時間略設計	横浜高工防空壕入口	16時間	1940	10
1941年度					
285	要素分析	美術館彫刻陳列室内装飾	12日間	1941	4
286	16時間略設計	電車通過駅	16時間	1941	4
287	要素分析	宮中御苑内廻廊	14日間	1941	5
288	16時間略設計	満州集団移民部落円舞用櫓	16時間	1941	5
289	16時間略設計	三溪原富太郎先生碑	16時間	1941	5
290	16時間略設計	祭典用神輿	16時間	1941	6
291	16時間略設計	海水浴場監視者詰所	16時間	1941	6
292	要素分析	小市場	12日間	1941	9
293	16時間略設計	在印度支那日本館	16時間	1941	9
294	16時間略設計	乗合自動車待合所	16時間	1941	9
295	要素分析	科学大講堂	20日間	1941	10
296	要素分析	中流住宅	24日間	1941	11
297	16時間略設計	日伯協会大講堂演壇	16時間	1941	11
298	要素分析	東大寺鳥瞰図揭示所	10日間	1942	2
299	16時間略設計	操人形劇場	16時間	1942	3
1942年度					
300	要素分析	劇場内入口	10日間	1942	4
301	16時間略設計	御座舟	16時間	1942	4
302	要素分析	火葬場齋壇窯入口	12日間	1943	1

No.	種類別	課題	期間	年	月
1943 年度					
303	16 時間略設計	移動音楽堂	16 時間	1943	5
304	16 時間略設計	街頭火叩小屋 (kiosque : 小屋)	16 時間	1943	5
305	要素分析	宮殿表廣庭ノ圍障	10 日間	1943	6
306	16 時間略設計	Marionnette 小劇場	16 時間	1943	6
307	16 時間略設計	海上日出	16 時間	1944	1
308	16 時間略設計	大東亜民族歓迎門	16 時間	1944	2
1944 年度					
309	16 時間略設計	Barrage 堰中ノ水分神	16 時間	1944	8
不明					
310	本設計	大邸宅翼ノ隅館	19 日間	不明	不明
311	12 時間略設計+本仕上	植物実験室	15 日間	不明	不明
312	12 時間略設計+本仕上+構造設計	横浜高等工業学校大講堂	3 月 8 日	不明	不明

⑥ 「要素分析」・「16 時間略設計」課題の参考作品・参考文献リスト

(同一課題における出題年については、最も古いものとした。なお、「16 時間略設計」課題については、末尾に「※」印を附した。)

参考作品名	国名／都市名	課題名	出題
フランス一般			
Ancienne château en France	フランス	池畔の小宮殿	1933
Château de France		Treillage / pavillon	1935
Jardin de France		某地小御用邸内フランス庭園	1927
		海水浴場ニ於ける Casino	1927
		四つ目垣 treillage / 吾妻家	1929
		某富豪別荘内フランス庭園	1931
		Treillage / pavillon	1935
		大使官邸内フランス庭園	1937
Les maisons des pays septentrionales ou méridionales		漁夫ノ家	1937
Ministère des Français : Guichet		穹窿ノ Galerie	1938
Saint Cloud en France : Cascade	Une Cascade	1936	
Villas Casinos en France	公園中の Café-Restaurant	1932	
パリ (フランス)			
Arc de triomphe à Paris	パリ	横浜復興大博覧会正門及囲障	1934
Bibliothèque Sainte-Geneviève		小図書館	1938
Ecole de médecine : Bibliothèque		国立美術院内図書館入口	1932
Ecole de médecine : 入口		美術館大広間正面入口	1927
Ecole militaire Paris		裁判所玄関	1934
Eglise saint Nicolas de champs		Institut / 玄関	1938
Fontaine de la rue de Grenelle		広場ニ面スル噴水	1939
Galerie de Minéralogie à Museum de Paris		科学博物館入口	1937
Grand palais		Un musée archéologique	1939
Hôtel de Ville de Paris : Porte		裁判所大控室内正面入口	1931
Hôtel de Ville de Paris : Salle de fête		Une salle de fête	1937
Hôtel de Sens à Paris : Escalier		横浜櫻道下隧道入口	1928
Hôtel des Monnaies		某官省正面中央	1935
Institut de France		Institut / 玄関	1938
Invalide		Un Dôme の研究	1936
Louvre		宮殿ノ Pavillon d'angle	1937
Louvre : Galerie d'Apollon		劇場内 Foyer	1934
		大 Galerie の一 travée 小間	1931
		公衆道路上ノ有蓋渡廊下	1929
Louvre : Guichet		美術館正面入口	1934
Louvre : Salle de Cariatide		穹窿ノ Galerie	1938
Louvre : Salle des Caryatides		美術館大広間正面入口	1927
		某記念建築物玄関	1927
Louvre : Vestibule du Nord			
Manège de la Caserne des Célestins à Paris		有蓋調馬場	1937
Musée de L'école des Beaux-arts de Paris		横浜市美術館	1927
		某市美術館	1936
		小図書館	1938
		小美術館	1938
		Un musée archéologique	1939
Opéra de Paris		某国立劇場側面車寄及馬車廻	1928
		劇場内客用大階段室	1931
		劇場内 Foyer	1934
		劇場内入口	1942
Palais de Justice Paris		裁判所玄関	1934
Palais de Justice Paris : Porte	裁判所大控室内正面入口	1931	

参考作品名	国名／都市名	課題名	出題
パリ（フランス） 続き			
Palais de la Légion d'honneur à Paris	パリ	表広庭ノ囲障	1927
		陸軍省正面中央	1936
		陸軍大学正門及囲障	1938
		宮殿表広庭ノ囲障	1943
Palais de la Place Concorde à Paris		某官省正面中央	1935
Palais de la Place Vendôme à Paris		某官省正面中央	1935
Palais de l'Université		傾斜地ノ玄関	1936
Palais des Etude de L'école des Beaux-Arts Paris		国立美術院内図書館入口	1932
Palais du Luxembourg：直線階段		直線階段	1937
Palais du Luxembourg：Entrée		陸軍省正面中央	1936
Panthéon Paris		Un Dôme の研究	1936
Petit Palais		Un musée archéologique	1939
Petit Palais：Cour demi-circulaire		美術館内庭 portique	1934
Pont Alexandre-III à Paris		京浜復興記念聯合大博覧会正門※	1927
巴里造幣局		某記念建築物玄関	1927
巴里海軍省		海軍省正面中央	1932
	海軍省正面中央	1932	
パリ近郊			
Château de Chantilly	シャンティイ	Balancement を有する鉄筋コンクリート階段	1932
Château de Rambouillet：Jardin	ランブイエ	大使官邸内フランス庭園	1937
Fontainebleau：Château de Fontainebleau	フォンテーヌブロー	末端ノ Pavillon	1938
Fontainebleau：Cour des Fontaines		陸軍省正面中央	1936
Fontainebleau：Galerie de François 1er		大 Galerie の一 travée 小間	1931
Fontainebleau：Galerie d'Henri II		大舞踏室内ノ大ストーブ	1927
Fontainebleau：Palais de Fontainebleau		表広庭ノ囲障	1927
		宮殿表広庭ノ囲障	1943
Château de Maisons	メゾン・ラフィット	末端ノ Pavillon	1938
Haras à Beauvais	ボーヴェ	馬小屋	1936
Versailles	ヴェルサイユ	大舞踏室内ノ大ストーブ	1927
		宮殿ノ Pavillon d'angle	1937
Versailles：Château		末端ノ Pavillon	1938
Versailles：Galerie des Glace		大 Galerie の一 travée 小間	1931
		劇場内 Foyer	1934
Versailles：Grand Trianon		客室ノ Cheminée 暖炉	1935
Versailles：Grand Trianon・Salon		salon 装飾	1927
Versailles：Grande orangerue		Orangerie	1928
Versailles：Jardin		大使官邸内フランス庭園	1937
		某温泉浴場内フランス庭園	1927
Versailles：L'aile Gabriel		某官省正面中央	1935
		池畔の小宮殿	1933
Versailles：Petit Trianon		客室ノ Cheminée 暖炉	1935
		Balancement を有する鉄筋コンクリート階段	1936
Versailles：Petit Trianon・Salon		salon 装飾	1927
Versailles：Salon de la guerre et de la paix		salon 装飾	1927
その他フランス諸都市			
Château de Compiègne	コンピエーニュ	表広庭ノ囲障	1927
		獵友会会所	1928
		四つ目垣 treillage ノ 吾妻家	1929
		某官省正面中央	1935
		宮殿ノ Pavillon d'angle	1937

参考作品名	国名／都市名	課題名	出題
Château de Compiègne	コンピエーニュ	陸軍大学正門及囲障	1938
Casino de Monte-Carlo	モンテカルロ	Un Casino	1936
		海水浴場ニ於ける Casino	1927
Grand Théâtre de Bordeaux	ボルドー	劇場内入口劇場内客用大階段室	1931
		劇場内 Foyer	1934
		劇場内入口	1935
Hémicycle et Palais du Gouvernement à Nancy	ナンシー	陸軍大学正門及囲障	1938
Maison Carré de Nîmes	ニーム	Une Columbarium	1934
Manège à Caen	カーン	有蓋調馬場	1937
Palais de Longchamps à Marseille	マルセイユ	広場二面スル噴水	1939
		横浜市復興記念大噴水	1927
Palais Rihour à Lille : Escalier	リール	横浜櫻道下隧道入口	1928
イタリア一般			
Jardin d'Italie	イタリア	海水浴場ニ於ける Casino	1927
		某地小御用邸内フランス庭園	1927
		某富豪別荘内フランス庭園	1931
		大使官邸内フランス庭園	1937
Thermes romain		水浴場	1934
Villa Aldobrandini en Italie : Cascade		Une Cascade	1936
Villas Casinos en Italie		公園中の Café-Restaurant	1932
ローマ			
Arc de triomphe à Rome	ローマ	横浜復興大博覧会正門及囲障	1934
Campanile de Capitole à Rome		Une Campanile	1934
Columbarium		Une Columbarium	1934
Couvrent de la Pace		cloître 廻廊ノ入隅	1935
Fontaine de Trevi		横浜市復興記念大噴水	1927
Forum de Trajan		広場二面スル噴水	1939
Maison via Capo di Ferro : Porte		大正記念館	1927
Palais Barberini à Rome : Escalier ovale		宮殿正面入口	1936
Palais de la chancellerie		横浜櫻道下隧道入口	1928
		宮殿内庭入口	1927
Palais Farnèse à Rome		宮殿内庭入隅	1937
		歩兵小隊ノ営舎	1928
		歩兵大隊ノ営舎	1936
		宮殿内庭	1939
Palais Farnèse : Porte de Jardin		宮殿正面入口	1936
Palais Farnèse : 玄関		某記念建築物玄関	1927
Palais Gondi		宮殿内庭入口	1927
Palais Mattei-Paganica : Porte		宮殿内庭入隅	1937
		宮殿正面入口	1936
Palais Sciarra : Porte		宮殿正面入口	1936
Palais Spada		宮殿内庭	1939
Panthéon Rome : Porte		裁判所大控室内正面入口	1931
Villa Madame à Rome		Une Loge	1936
Villa Medicis à Rome		Une Loge	1936
Villa Pape jules à Rome : Porte		宮殿正面入口	1936
ローマ近郊			
Basilique à Saint Pierre	ヴァチカン	Un Dôme の研究	1936
Braccio Nuovo au Vatican : Porte de la galerie		美術館正面入口	1934
Palais du Vatican : Cour octogonale		美術館内庭 portique	1934
Palais du Vatican : 直線階段		直線階段	1937
Villa Adriana : Canapé	ティヴォリ	奏楽堂	1927
フィレンツェ			
Hospice innocenti	フォレンツェ	広場二面スル噴水	1939

参考作品名	国名／都市名	課題名	出題
Palais Pitti à Florence	フォレンツェ	歩兵小隊ノ営舎	1928
		歩兵大隊ノ営舎	1936
Palais Strozzi：内庭		宮殿内庭入口	1927
		宮殿内庭入隅	1937
Villa salviati à Florence		宮殿内庭	1939
その他イタリア諸都市			
Badia de Fiesole	フィエーゾレ	宮殿内庭入口	1927
		cloître 廻廊ノ入隅	1932
		宮殿内庭入隅	1937
Bevilacqua Bologna	ボローニャ	宮殿内庭	1939
Casino de Caprarole：Cascade	カブラローラ	Une Cascade	1936
Hospice de Pistoia	ピストイア	広場ニ面スル噴水	1939
Maison du centenaire à Pompei	ポンペイ	奏樂堂	1927
Palais Balbi à Genès	ジュネーヴ	傾斜地ノ玄関	1936
Palais Farnèse de Caprarola	カブラローラ	Une Loge	1936
Palais Farnèse de Caprarola：Porte		宮殿正面入口	1936
Porte de Fano	ファーノ	横浜櫻道下隧道入口	1928
Saint-Marc à Venise：Campanile	ヴェネチア	Une Campanile	1934
Villa impérial de Tibur	ティブル	奏樂堂	1927
ギリシャ			
Parthénon à Athènes	アテネ	Une Columbarium	1934
Propylée à Athènes		Une Columbarium	1934
Temple de la victor aptère à Athènes		Une Columbarium	1934
Temple d'Erechthée à Athènes		美術館大広間正面入口	1927
		美術館正面入口	1934
Temple Grèce	ギリシャ	墳墓	1935
トルコ			
Tombeau d'Amyntas à Telmissus	テルミス	墳墓	1935
その他（西洋）			
Salle de fête（その他市役所）	その他	Une salle de fête	1937
復興期の諸寺院		Institut ノ玄関	1938
中国			
北京及び奉天建築	中国	北京公園内共同便所	1938
北京北陵又は孔子廟		大正記念館	1927
日本			
京都			
桂離宮賞花亭	京都	梅林中休憩所※	1937
桂離宮松琴亭		梅林中休憩所※	1937
清水寺舞台		神苑朝※	1938
東福寺通天橋		観桜橋	1938
西本願寺飛雲閣		池畔ノ離レ家	1936
平等院鳳凰堂	京都・宇治	三溪園内木造柱列	1928
		通天橋中央 pavillon	1936
		宮中乗船場	1937
		観桜橋	1938
		宮中御苑内廻廊	1941
平安京	京都	通天橋中央 pavillon	1936
		宮中御苑内廻廊	1941
平城京		三溪園内木造柱列	1928
鹿苑寺金閣		池畔ノ離レ家	1936
		宮中乗船場	1937
奈良			
春日大社車舎等	奈良	自働車 abri	1928
春日神社		瓶原離宮旧跡内校倉	1928
正倉院校倉		瓶原離宮旧跡内校倉	1928

参考作品名	国名／都市名	課題名	出題
浄瑠璃寺吉祥天厨子	奈良	聖徳太子厨子※	1936
橘夫人念持仏厨子		聖徳太子厨子※	1936
玉虫厨子		聖徳太子厨子※	1936
手向山神社		瓶原離宮旧跡内校倉	1928
唐招提寺校倉		瓶原離宮旧跡内校倉	1928
唐招提寺金堂		美術館彫刻陳列室内装飾	1941
長谷寺廻廊		観桜橋	1938
法華寺校倉		瓶原離宮旧跡内校倉	1928
法隆寺		美術館彫刻陳列室内装飾	1941
法隆寺大伽藍		大正記念館	1927
その他（日本国内）			
厳島神社客殿	広島	神苑朝※	1938
厳島神社等		三溪園内木造柱列	1928
大阪城姫路城等諸櫓天守閣	日本	大阪城内共同便所	1935
薩摩屋敷	東京	木造長屋門	1938
三溪園内聴秋閣	横浜	池畔ノ離レ家	1936
東照宮及二荒山神社神輿	日光	祭禮用神輿※	1936
書物等			
参考文献名	種別	課題名	出題
Blondel Cours d'Architecture	書物（講義録）	客室ノ Cheminée 暖炉	1929
Blondel 図集		salon 装飾	1927
Concours	図集	日本海戦ニ於ける東郷元帥ノ碑※	1930
Concours d'architecture	図集	大舞踏室内ノ大ストーブ	1927
		美術館大広間正面入口	1927
		横浜市復興記念大噴水	1927
		某地小御用邸内フランス庭園	1927
		京浜復興記念聯合大博覧会正門※	1927
		獵友会合所	1928
		小市場	1931
		某富豪別荘内フランス庭園	1931
		公園中の Café-Restaurant	1932
		海水浴場ニ於ける Casino	1927
Concours des Grand Prix de Rome	図集		
Deneufforges	その他	Treillage / pavillon	1935
Elément et théorie de l'architecture	書物（講義録）	歩兵小隊ノ営舎	1928
		小市場	1931
		木造牛小屋	1935
		歩兵大隊ノ営舎	1936
Monuments antiques	図集	Olympique 競技場大入口	1928
Monuments historiques	その他	小食堂暖炉	1930
Ouvres de Piranesi	その他	Une Columbarium	1934
京都民家譜	図集	京都店頭正面※	1934
京都民家図集	図集	三等郵便局※	1936
国史大辞典「輦輿之図」	書物	祭禮用神輿	1936
数奇屋建築	その他	牡蠣船※	1934
		梅林中ノ共同便所※	1936
宗派浄土真宗 定紋ハ下リ藤ニ大根	その他	煙州鈴木達治氏之墓※	1935
日本地理風俗体系（大阪）	書物	牡蠣船※	1934
民家図集	図集	土産品売店※	1934

第2章 註

- ⁵³⁸ 1925 年設立当時、「木炭画」担当教官として名が記載されていたが、1932 年度には渡邊郁一がその担当教官となっている。
- ⁵³⁹ 横浜高等工業学校建築学科『横浜高等工業学校建築学科建築競技設計図集』洪洋社、1937
- ⁵⁴⁰ 横浜高等工業学校編『横浜高等工業学校一覧』横浜高等工業学校
- ⁵⁴¹ なお、1932 年ごろまで「木炭画」が中村順平の担当科目として割り当てられたのだが、これを加えると専門科目のみで見れば 117+27+15 時間となり、中村順平には専門科目の約 6 割の時間が割かれていたことになる。
- ⁵⁴² 横浜高等工業学校編『横浜高等工業学校一覧 第八年 自昭和三年至昭和四年』横浜高等工業学校、1929
- ⁵⁴³ 横浜高等工業学校編、前掲書、1929 を参照し、作表。担当者の記載にあたり、基礎科目の担当者のうち、外国語（フランス語）を担当した内藤濯を除き、同書 pp.28-29 の基礎学科教員リストからの想定で記載した。また、専門科目のうち「建築設備」「測量」「建築法規」については、同書の建築学科教員リスト（p.26）中に記載された科目名に存在しないことから担当者を「不明」とした。なお、後年の横浜高等工業学校一覧から「測量」科目については、伊藤三郎が担当者であった可能性がある。
- ⁵⁴⁴ 中村順平「建築学」建築世界版、p.67
- ⁵⁴⁵ 中村順平、前掲書、p.67
- ⁵⁴⁶ 中村順平、『建築という芸術』彰国社、1959、p.81
- ⁵⁴⁷ 西洋建築の実例では、エジプト・ギゼー王のピラミッド、ギリシャ・アテネのパルテノン、エレクトイオン、ローマのカラカラ浴場、コロッセオ、サン・ピエトロ大聖堂、ファルネーゼ宮、オクラヴィアヌス回廊、ピエトロ・マッシミ宮、復讐神マルス神殿、マルチェッロ劇場、シャーロントン病院、ヴェネチアのパラッツォ・ドゥカーレ、マルチアーナ図書館、フランス・パリのノートルダム大聖堂、ルーヴル宮、コンコルド広場の宮殿、フランス・パリのエコール・ミリテール、トルコ・コンスタンチノーブルの聖ソフィア寺院、フランス・アミアンの大聖堂、日本建築の実例では、奈良東大寺法華堂、奈良法隆寺夢殿、源義経潜居の間、東山東求堂、本邦の茶室建築などを挙げている。（参照：林要次『中村順平《Classique》考』横浜国立大学大学院修士論文、2001）
- ⁵⁴⁸ 中村順平「パリ美術院」は雑誌『新建築』に連載された。中村順平「パリ美術院Ⅱ」『新建築』1968 年 3 月号、pp.217-224、新建築社、1968、p.222
- ⁵⁴⁹ 中村順平「建築学科に入学を志望する青年諸君への希望」『建築雑誌』Vol.39, No.470, pp.33-35、建築学会、1925、p.35
- ⁵⁵⁰ Guadet, J. : Tome I, Eléments et Théorie de l'architecture, Librairie de la construction moderne, n. d., 1901-1904
- ⁵⁵¹ 中村順平「第一巻 予備研究：第三章 建築図画」『建築学総説篇』土木雑誌社、1944、pp.14-37
- ⁵⁵² Feihl, J. N. : Dessins d'architecture, les travaux de l'élève architecte Frédéric de Morsier à l'école des beaux-arts de Paris 1882-1890, Archimages, 2011
- ⁵⁵³ 大西春雄によれば、その引出しの写真群は書籍等から複写した写真が含まれたというが、その詳細は不明である。
- ⁵⁵⁴ 『檜 10』（檜の会）に、松本陽一氏が「建築図画」について記述されている。この作業の逸話は、檜の会の方々によるものである。また、檜の会の大西春雄や仁瓶俊介によれば、なお、学生の中には、この「建築図画」が中村順平に認められず、卒業するまでこれに取り組んだ学生や 1 枚も描かなかった学生もいたという証言もある。

- ⁵⁵⁵ D'Espouy, H., Seure, G., Chapot, V., Accademia di Francia (Rome, Italie), Institut de France : Monuments antiques relevés et restaurés par les architectes pensionnaires de l'Académie de France à Rome, C. Massin, n. d., 1910-1912
- ⁵⁵⁶ なお、この図集は、建築学参考図刊行委員会編『西洋建築史参考図集・上冊』建築学会、1931においてギリシャ建築「9 Partenon 復元図」において参照された。しかし、同書の第2版（1933）へ改められた際、「9 Partenon 復元図」には別文献からの図版に変更された。
- ⁵⁵⁷ 中村順平はこの図集を所持していたと見られ、後年、中村順平所有の図集は、網戸武夫の手に渡った。
- ⁵⁵⁸ D'Espouy, H. (éd) : Fragments d'architecture antique d'après les relevés et restaurations des anciens pensionnaires de l'académie de France à Rome, n. d., 1905
- ⁵⁵⁹ D'Espouy, H. (éd) : Fragments d'Architecture du Moyen Âge et de la Renaissance d'après les relevés et restaurations des anciens pensionnaires de l'académie de France à Rome, n. d., 1925
- ⁵⁶⁰ Daly, C. (éd) : Motifs historiques d'architecture et de sculpture d'ornement pour la composition et la décoration extérieure des édifices publics et privés. Choix de fragments empruntés à des monuments français du commencement de la Renaissance à la fin de Louis XVI : portes, panneaux sculptés, fenêtres, chambranles, lucarnes, oeils de boeuf, niches, etc., n. d., 1869
- ⁵⁶¹ “Parthénon : façade principale restaurée” (Paris, Ecole Nationale Supérieure des Beaux-Arts 所蔵 : Cote cliché : 13-598849)
- ⁵⁶² 法隆寺国宝保存事業部編『法隆寺国宝保存工事報告書』法隆寺国宝保存事業部、1935
- ⁵⁶³ 建築学参考図刊行委員会編『日本建築史参考図集』建築学会、1930
- ⁵⁶⁴ E・E・ヴィオレ・ル・デュック『建築講話』（飯田喜四郎訳）中央公論美術出版、1985
- ⁵⁶⁵ E・E・ヴィオレ・ル・デュック『建築講話』（飯田喜四郎訳）中央公論美術出版、1985, p.24
- ⁵⁶⁶ 中村順平『建築という芸術』彰国社、1959
- ⁵⁶⁷ 羽生修二『ヴィオレ・ル・デュック 歴史再生のラショナルリスト』（SD 選書 218）鹿島出版会、1992, p.184
- ⁵⁶⁸ 羽生修二、前掲書、p.184
- ⁵⁶⁹ 河内義就「わが建築青春記 師、中村順平」『建築雑誌』Vol.99, No.1218, p.6, 日本建築学会、1984, p.6
- ⁵⁷⁰ 羽生修二、前掲書、p.184
- ⁵⁷¹ 12 時間略設計+本仕上 : ゴドブフ賞 Concours Godeboeuf, ルージュヴァン賞 Concours Rougevin, アメリカ公認建築家賞 Prix de reconnaissance des architectes americains, アシール・ルクレール賞 Concours Achille Leclere, ドゥトゥーシュ・ドゥラージュ・ルー賞 Concours Detouche dit Detouches, Delage et Roux, ポール・ドゥローン賞 Concours Paul Delaon（庭園設計競技）以上 6 課題, 12 時間略設計 : エドモン・ラパール賞 Concours Edmond Labarre, 以上 1 課題, ローマ大賞 Grand Prix de Rome は、厳密には、1 次審査, 2 時審査を経て最終審査を受けるもので、厳密には、12 時間略設計+本仕上とは性質が異なるが、ここでは、12 時間略設計+本仕上課題と同等の 1 課題として合算した。
- ⁵⁷² なお、本論第2編・第1章において小林仙次の証言で確認したように、名古屋では2週間で行なわれた設計課題が存在した。そのため、この課題数以上の可能性もある。
- ⁵⁷³ Gromort, G. : Histoire abrégée de l'architecture de la Renaissance en Italie, A. Vincent, 1913. 新装版は Gromort, G. : Histoire abrégée de l'architecture de la Renaissance en Italie, A. Vincent, 1922

- ⁵⁷⁴ Gromort, G. : Histoire générale de l'art français de la Révolution à nos jours. Tome II. L'Architecture, Librairie de France, n. d., 1920
- ⁵⁷⁵ Fragments d'Architecture du Moyen Âge et de la Renaissance d'après les relevés et restaurations des anciens pensionnaires de l'académie de France à Rome
- ⁵⁷⁶ Gromort, G. : Le hameau de Trianon, Vincent Fréal et Cie, 1928
- ⁵⁷⁷ Gromort, G. : Jacques-Ange Gabriel, Vincent Fréal et Cie, 1933
- ⁵⁷⁸ Deshairs, L. : Le Petit Trianon, architecture-décoration-ameublement A. Calavas, 1908 (参照 : 『世界建築全集 8 : 西洋 III ルネッサンス バロック ロココ 19世紀前半』平凡社, 1962) p.104 の参考文献リスト)
- ⁵⁷⁹ 添田賢朗「芸術開眼」『建築雑誌』Vol.91, No.1106, p.414, 日本建築学会, 1976
- ⁵⁸⁰ Guadet, J. : Tome I, Eléments et Théorie de l'architecture, troisième édition, Librairie de la construction moderne, n. d., 1909-1910, p.23
- ⁵⁸¹ Guadet, J. : op.cit., p.188
- ⁵⁸² Guadet, J. : op.cit., pp.130-131
- ⁵⁸³ Blondel, F. : Cours d'Architecture, 1683, p.566
- ⁵⁸⁴ D'Espouy, H., Seure, G., Chapot, V., Accademia di Francia (Rome, Italie), Institut de France : Monuments antiques relevés et restaurés par les architectes pensionnaires de l'Académie de France à Rome, C. Massin, n. d., 1910-1912
- ⁵⁸⁵ 土居義岳『アカデミーと建築オーダー』中央公論美術出版, 2005
- ⁵⁸⁶ 神戸蕃と大西春雄のそれぞれの卒業年が, 1936年3月と1942年9月であることから, 両者のプリントには若干の相違が考えられる。なぜなら, 大西春雄の「図学プリント」は, 伊藤三郎のフランス在外研修後のものであることから, 在外研修での成果が反映されている可能性がある。また, 大西春雄の受講時には, 図学は伊藤三郎と神戸蕃の分担で行われていたことから, 「図学プリント」は伊藤三郎が単独で教育にあたった際に作成したものとは厳密には異なる可能性も指摘できる。
- ⁵⁸⁷ 神戸蕃「伊藤三郎先生を偲ぶ」『水煙会報』No.15, pp.17-18, 水煙会, 1985
- ⁵⁸⁸ 日本図学会文献調査委員会編(担当委員 竹山和彦)「文献調査報告(VI)」『図学研究』Vol.17, No.1, pp.25-32, 日本図学会, 1983
- ⁵⁸⁹ De La Gournerie, J., A.-R., M. : Traite de geometrie descriptive - texte et planches, Mallet-Bachelier, 1860, p.X
- ⁵⁹⁰ Brandon, J., E., R. : Théorie et pratique des ombres des cadrans solaires, Librairie de la construction moderne, 1926
- ⁵⁹¹ Guadet, P. : Cours de perspective, Vincent, Freal & Cie, 1929
- ⁵⁹² Pillet, J. -J. : Traité de perspective linéaire, Deuxième édition, Librairie Ch. Delagrave, 1888

第3章 中村順平の「建築学」にみる フランス建築理論と教育手法①：「建築学」

1. 「建築学」

1.1 「建築学」と卒業生の証言

中村順平の横浜高等工業学校建築学科における担当科目は、前述のように主として「建築図画」や「設計競技」などを含む「実習」と「建築学」であった⁵⁹³。なお、前者については、前章において述べた。そこで、本章では、後者の座学「建築学」科目に着目する。

「建築学」科目は、中村順平による講義形式の科目であった。中村順平は、後世にその成果を残すことを意図し、「建築学」科目の壮大な講義録を作成した⁵⁹⁴。一方、この講義を受けた学生たちによるノート等の資料は、現在までのところほとんど確認されていない。それは、大西春雄が証言するように、中村順平がこの科目において学生たちにノートをとることを禁じたためと考えられる。そこで、中村順平の「建築学」科目の受容者側の視点に立ち、卒業生の証言からこの科目の概要を整理する。

網戸武夫の証言から、「学園のアトリエに全学生を集めて行われ」、「週1回ないしは週2回を限って1回三時間を越えることが普通」⁵⁹⁵であったことがわかる。「建築学」科目の教育プログラム上の時間数は、『横浜高等工業学校一覧』から確認できる範囲で、概ね第1学年では各学期1時間/週、第2学年では各学期2時間/週、第3学年では各学期2時間/週で計画されたが⁵⁹⁶、この証言から、「建築学」科目は、学年ごとの講義ではなく、全学年が対象の科目で行なわれたことがわかる。全学年の教育プログラム上の数値を単純に足し合わせれば、5時間/週が「建築学」科目に割り当てられており、全学年の学生は、5時間/週程度この「建築学」科目を受講したと考えられる。

「建築学」科目の講義内容に関する卒業生の証言は、いくつか確認できる。

・網戸武夫（第1回卒業生）の証言

「当時丸善から購入した反射式幻灯機で、原著の挿絵や図版を直接転映するスクリーン上に、パルテノンが、伊勢神宮が、唐招提寺が、大映像となって写し出されるとき、ひときわ燃え上がる教授の弁舌に酔わされた青春の興奮は、いまになお教え子達の回想の夢に消えない。」⁵⁹⁷

・郡菊夫（第4回卒業生）の証言

「製図室の一隅に先生を囲んでの建築学の講義は、格調の高い古典の比例の美、建築芸術論、建築家論であった。先生の熱意と建築へのひたむきな姿勢は、われわれ若い学生を強く刺激し、ひき込まれ、知らないうちに建築という芸術のとりこになっていたのは当然の事ではある（中略）今考えて見ると教えられたというのではなく、比例の妙と建築の美を、そして建築の美を追求することの喜び、その美を創ることの如何に難しく、そのことを追求めて行くことの尊く一生のことだとそれにのめりこんでいくことを体で覚えたといつて良いであろう。」⁵⁹⁸

・川本喜八郎（第18回生）の証言

「中村先生の建築学の講義もユニークなものだった。（中略）素晴らしいヨーロッパの古典建築を、次から次に示して下さり、そればかりでなく、能や歌舞伎といった演劇から、映画、絵画、彫刻、つまり、ありとあらゆる芸術というものの膨大な情報を与え下さった。」⁵⁹⁹

こうした証言を総合的に判断すると、「建築学」科目は、建築とその時代性を象徴する芸術に及ぶ多様な内容を伝える歴史意匠学で、おそらく、開校当時から全体像に変化のない芸術色の濃い講義で、「格調の高い古典の比例の美、建築芸術論、建築家論」が講義されたのだろう。

1.2 「建築学」の4つの講義録

ここでは、中村順平の講義録に卒業生の前掲の証言を裏付ける内容が存在するか否かを探るため、中村順平の文章化された「建築学」と名の付く書物を整理する。名古屋高等工業学校の鈴木禎次による教育では、本論第2編・第1章で述べたようにノートの提出を義務付けたが、中村順平は、それとは対照的に「建築学」科目においてノートをとることを禁じた。そのため、講義内容を知る上で、この講義録の分析は不可欠であろう。なお、現在、確認できる中村順平の「建築学」と銘打たれた書籍や草稿は、4種に分類できる。

①『建築世界』誌連載「建築学第一巻～第五巻」(1925-1937)

雑誌『建築世界』誌で1925年7月号から1937年2月号まで不定期で講義録としての「建築学第一巻」から「建築学第五巻」まで連載された。中村順平は「建築学」全体を第一巻から第五巻の5つに大別し、それぞれ数章の内容が連なっている。それぞれの大題目は、「建築学第一巻」は「予備研究」、「建築学第二巻」は「一般原則」、「建築学第三巻」から「建築学第五巻」までは「建築之諸要素」と題された。約12年間にわたる連載期間に書かれたページ数は886頁である。なお、中島久男の研究⁶⁰⁰で指摘されているように、ジュリアン・ガデの『建築の諸要素と理論』(1901-1904)の構成が意識されていることは、両者の目次を比較すれば明らかだろう。

表3.3.2からも明らかだが、第一巻から第五巻にかけて概ね同様の構成であるが、第五巻において、屋根に関する項目を取り扱った第1章から第5章までおよび床と天井を取り扱った第6章以降の部分が割愛されている。

表 3.3.1 『建築世界』連載「建築学第一巻～第五巻」掲載号リスト

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
第19巻(1925年)							◎	◎	◎	◎	◎	◎	5
第20巻(1926年)	◎	○	○	○	○	○	○	○					8
第21巻(1927年)			○	○	○	○	○	○	○	○	○		9
第22巻(1928年)	○				○	○	○	○	○	○	○	○	9
第23巻(1929年)		○											1
第24巻(1930年)					○								1
第26巻(1932年)		○			○			○	○		○		5
第27巻(1933年)		○			○		○		○		○	○	6
第28巻(1934年)		○	○		○	○	○	○	○			○	8
第29巻(1935年)	○		○	○	○					○	○	○	7
第30巻(1936年)	○			○			○						3
第31巻(1937年)		○											1
掲載号合計													63
備考	◎は雑誌本編，○は雑誌巻末付録を示す												

②『建築学総説篇』(1944)

これは、①の「建築学第一巻」(予備研究)、「建築学第二巻」(一般原則)部分に加筆修正を加え書籍化されたものである。1000部発行された。この書物に改めて付与された序文5頁、『建築世界』版

の序文が1頁、本文は3頁目から始まり図版を除き257頁まで及んでいる。なお、①の「建築学第二巻」までの頁数は357頁であった。その他図版リスト等が新たに加わっている。

③『建築学技術篇』（1950）

…「建築学」と名の付く書籍の第2冊目で、限定600部発行された。冒頭には「第三巻建築詳説」と記述されているため、②の続きと見られる。①の「建築学第三巻」（建築之諸要素）との重複箇所は無く、全202頁にわたるそれまで未発表の書き下ろし論考と考えられる。なお、発行者は第2回卒業生の吉原慎一郎である。

④『建築学』草稿（不明）

…中村順平による表題「翻訳原稿VI」が記されたことを考慮すると、①の連続と考えられ、「建築学第六巻」として構想された可能性がある。2015年現在、大阪歴史博物館に所蔵されている。

以上をまとめると、中村順平の「建築学」科目に関する講義の記録は、まず、雑誌『建築世界』⁶⁰¹誌上に不定期ではあるが1925年7月号から1937年2月号まで連載された。この中村順平の連載は、その後、内容の一部が抜粋され、また、若干の修正が加えられ、1944年に『建築学総説篇』⁶⁰²として土木出版社より出版された。さらに、中村順平退官後の1950年に「建築学」という名のついた『建築学技術篇』⁶⁰³が弟子達の手で出版された。網戸武夫は「この二冊（筆者註：『建築学総説篇』と『建築学技術篇』）で十分に、建築家中村順平の「建築学」は完結の体裁を整えている」⁶⁰⁴と述べている。しかし、『建築学総説篇』に未掲載の『建築世界』連載の「建築学」や『建築学』草稿などが存在していることを考慮すれば、果たしてこの2冊で完結しているといえるのだろうか。

中村順平は、著書『建築学総説篇』の冒頭「序」において、「叙述住所の大体は、吾等母校の故の教授にして *Membre de l'institut* である *M. Julien Gaudet* の講義に拠ったものである、何故かなら此順序配列が実に見事に立派なもの」⁶⁰⁵と述べるように、中村順平は「建築学」講義録のガイドラインとしてジュリアン・ガデの『建築の諸要素と理論』の目次構成を参照した。両者の構成上の明らかな類似性から、既往研究では、①や②の目次から『建築の諸要素と理論』の翻訳と捉えられているのだろう。

一方、③や④に関する既往研究は極めて少ない。③や④も『建築の諸要素と理論』の目次構成に則り構成されたのか、また、内容も『建築の諸要素と理論』の翻訳なのか。さらに、『建築の諸要素と理論』以外、中村順平の「建築学」の記述内容にどのような参考文献が使用されたのか。

また、中村順平が構想した「建築学」が、ジュリアン・ガデの4巻組みの『建築の諸要素と理論』の目次構成を参照していたと考えれば、4つの『建築学』は、ジュリアン・ガデが『建築の諸要素と理論』で設定した大きな枠組みである、「A.予備研究」「B.一般原則」「C.建築詳述」「D.建築の諸要素」「E.構成の諸要素」「F.構成の一般諸要素」「G.建築家職能」の7項目にのいずれかに該当し、このうちA～Dに関しては、①～③で触れられていることから、④に遺されたのは、E～Gに関する論考である可能性がある。なお、Gに関する記述は、東京帝国大学出身で、初代日本建築士会会長をつとめた長野宇平治（1867-1937）によるジュリアン・ガデの建築家職能観に関する翻訳書『建築士及其職責』⁶⁰⁶や、中村順平の論考である横浜高等工業学校建築学科を志望する学生に向けた前述の「注意書」および日本建築士会の機関紙『日本建築士』での掲載記事「フランスの建築士」⁶⁰⁷などに含まれている。これらを考慮すると、Gに関する項目が④に遺されている可能性は低いと考えた。

表 3.3.2 『建築世界』誌連載「建築学第一巻～第五巻」と『建築の諸要素と理論』第1巻の目次比較表

『建築学第一巻～第五巻』（『建築世界』） （中村順平）				『建築の諸要素と理論』第1巻 （ジュリアン・ガデ）			
序							
基礎教育	第1章	予備研究	第1巻	建築学講座への序章 予備研究	第1章	基礎教育	
図書用器具書紙及書紙の水張り	第2章				第2章	製図用品とその使用法	
建築図書	第3章				第3章	建築図画／建築製図	
陰影と着色	第4章				第4章	淡彩画	
一般模写	第5章				第5章	模写製図／トレース	
概説	第1章	一般原則	第2巻	一般原理	第1章	建築学講座開講プログラム	
基準原則	第2章				第2章	指導原理	
基準原則（続き）	第3章				第3章	構成の諸大原則	
Composition に関する諸大原則	第4章				第4章	一般の比例	
一般の比例	第5章				第5章	特殊の比例	
特殊の比例	第6章				第6章	部屋に対する比例	
部屋に対する比例	第7章				第7章	比例系論	
比例考察の帰結	第8章				第8章	構造上の芸術と科学	
構造上の科学と芸術の交渉	第9章				壁及単一の口	第3巻其一	壁と単一の開口部 建築の諸要素
壁	第2章	第2章	壁（続）／壁の組合せ—壁の複合				
壁（続き）	第3章	第3章	壁（続）／壁の研究と				
壁（続き）	第4章	第4章	壁（続）／壁の性質と装飾				
壁（続き）	第5章	第5章	壁構造に対する開口部				
壁体中の口及其構造	第6章	口の集団即柱廊及オールドル 建築の諸要素	第4巻其二	柱廊の根本集団—オーダー（続） 建築の諸要素	第6章	入口と窓と様々な開口部の応用	
入口窓其他の口の応用について	第7章				第7章	入口と窓の装飾	
入口窓の装飾	第8章				第1章	柱廊—その構造	
柱廊とその構造	第1章				第2章	古代のオーダー	
古代の Ordre の総説	第2章				第3章	ドリス式オーダー	
Ordre Dorique	第3章				第4章	ドリス式神殿，ドリス式建築	
Dorique の寺院，Dorique の建築実例	第4章				第5章	イオニア式オーダー	
Ordre Ionique	第5章				第6章	コリント式オーダー	
Ordre Corinthien	第6章				穹窿及び階段 建築の諸要素	第5巻其三	屋根—床—ヴォールト—階段—様々な諸要素 建築の諸要素（続）
Ordre Toscan, Composite 並びに Cariatide	第7章	第7章	オーダーの応用				
Ordre の適用	第8章	第8章	アーチ状構造物の柱廊				
列供よりなる portique	第9章	第1章	屋根—その構成				
穹窿の均衡と構造上の区分	第1章	第2章	屋根—その構造				
穹窿の構造一般	第2章	第3章	小屋組				
穹窿の装飾	第3章	第4章	クーボラと尖塔				
穹窿の各種	第4章	第5章	屋根のかけ方				
中世期の穹窿	第5章	第6章	床と天井				
階段の一般概説	第6章				第7章	ヴォールト一般	
各種材料の階段	第7章				第8章	ヴォールト一般（続）	
					第9章	ヴォールトの装飾	
					第10章	ヴォールト各種	
					第11章	階段	
					第12章	建築の二次的要素	

表 3.3.3 『建築学』体系一覧表

	『建築学』体系			
	①『建築世界』誌連載	②『建築学総説篇』	③「建築学技術篇」	④「建築学」草稿
第一巻	予備研究		建築詳説	翻訳原稿VI
第二巻	一般原則			
第三巻	建築之諸要素			
第四巻	建築之諸要素			
第五巻	建築之諸要素			
第六巻				
発行年	1925-1937	1944	1950	不明
発行	建築世界社	土木雑誌社	相模書房	未刊行 (大阪歴史博物館所蔵)

2. 既刊「建築学」

2.1 「建築学」科目と講義録に関する既往研究

仮に、中村順平がエコール・デ・ボザールの教育のある断片を切り取り、自身の教育法に導入したならば、中村順平はどの断片を近代日本の建築教育に取り入れたか。中村順平が経験したエコール・デ・ボザールの教育が完全に移入されたのか、それとも部分的に移入されたにすぎないのか。ここでは、こうした疑問に対し、「建築学」科目の講義録に着目し、中村順平が参照した建築理論を解明する。

序論で述べたように、既往研究では、中村順平とジュリアン・ガデの両者の講義録の類似性が指摘されている。確かに、これまで指摘されてきたように、「建築学」は、中村順平の留学したエコール・デ・ボザールにおける「建築理論」科目から着想を得たもので⁶⁰⁸、その講義録は『建築の諸要素と理論』⁶⁰⁹を範とした。特に、前掲の表 3.3.2 からわかるように、雑誌『建築世界』で連載された「建築学」の構成は、『建築の諸要素と理論』第1巻の目次構成と明らかに類似している。そのため、これまで、例えば、中島久男の中村順平の「建築学」はジュリアン・ガデの「原著の翻訳を基本に執筆」⁶¹⁰したという指摘や、黒石いずみの「中村はガデの1902年に出版された理論書『建築の要素と理論』を翻訳」⁶¹¹し日本に紹介したという記述が確認できる。また、こうした記述は、網戸武夫の著書『情念の幾何学』でも確認でき、中島久男の研究⁶¹²では、さらに、中村順平の未刊行の原稿にも『建築の諸要素と理論』の翻訳箇所が発見されたことを述べている。

確かに、中村順平の記述内容は、『建築の諸要素と理論』の翻訳と見られる箇所が存在するが、必ずしも『建築の諸要素と理論』がそのまま翻訳されたものではない可能性がある。なぜなら、両者を精査し、比較すれば、中村順平の文章にジュリアン・ガデとは異なる他の文献などからの影響が容易に発見でき、両者が単なる原著と訳書という関係ではないといえる。

これまでの「建築学」に関する研究では、ジュリアン・ガデ以外の理論的な影響関係や「建築学」に見られるフランス建築理論の受容についての分析、さらには日本の近代建築教育史におけるフランス建築理論の受容といった側面からの分析などが序論で挙げた既往研究において十分に検証されておらず、ジュリアン・ガデの建築理論をエコール・デ・ボザールの建築理論の代表的な存在のひとつと捉え、その建築理論と「建築学」との類似性の指摘にとどまっているにすぎない。

したがって、以下では、こうした問題意識にたち、ジュリアン・ガデ以外の理論的な影響関係の解明に努める。そして、本論第2編・第2章で述べたように、エコール・デ・ボザールの「建築理論」科目の教育者の役割に立ち返ることで「建築学」科目の存在意義を再考し、中村順平の「建築学」にみるフランス建築理論と教育手法の受容を検証する。

2.2 中村順平の「建築学」既刊書物にみるフランス建築理論

ここでは、中村順平の既刊書物において参照されたジュリアン・ガデとは異なる理論的な影響関係を探り、中村順平の「建築学」科目が、近代建築史および近代建築理論のどの断片に属するのか検証する。なお、ここでの研究対象は、『建築世界』誌に連載された「建築学第一巻～第五巻」、『建築学総説篇』、『建築学技術篇』の「建築学」と名のつく既刊書物3点とし、これらの書物に登場する人名を整理し、中村順平とフランス建築理論との接点を探る。

なお、中村順平の既刊書には、参考文献の記載が極めて少ない。そのため、これらの書物から中村順平が参考文献として使用した具体的な書誌情報を解読することは極めて困難である。一方、中村順平はある言説を引用する際、合わせてその発言者の人名を記載することで、参考文献の書誌情報に変わる情報を提示している。

まず、『建築世界』誌に連載された「建築学第一巻～第二巻」や『建築学総説篇』では、主にジュリアン・ガデが登場するが、その他、中村順平が留学期にエコール・デ・ボザールの「構造」科目を担当したエドワー・アルノーの言説が掲載されている。

『建築世界』誌に連載された「建築学第三巻」以降の「建築之諸要素」に関する論考では、それまでに登場したジュリアン・ガデやエドワー・アルノーのほか、ヴィオレ＝ル＝デュク、ルシアン・マーニュ、マキシム・コリニョン (Maxime Collignon, 1849-1917)、ジョルジュ・グロモールらの名が挙がり、彼らの言説が引用されている。なお、ここで挙げた、エドワー・アルノーやジョルジュ・グロモールは、『建築の諸要素と理論』が出版された1904年以降にエコール・デ・ボザールの教員となった人物である。こうした登場人物から、中村順平の「建築学」が『建築の諸要素と理論』の単なる翻訳ではないといえる。

また、中村順平の既刊書物にみる登場人物は、フランスにおいて建築理論や建築史などに関する文献を発表した人物であった。特に、中村順平の「建築之諸要素」では、壁、開口部、天井、床などに関する歴史的な事例が掲載されたことから、中村順平は建築家のみならず建築史家・歴史家の言説を採用したのだろう。なお、ルシアン・マーニュは、エコール・デ・ボザールで「建築史」科目を1891年から1917年にかけて担当した教員で、マキシム・コリニョンは、古代ギリシャ・ローマの研究者としても知られる。

ルシアン・マーニュやマキシム・コリニョンの言説の採用は、『建築の諸要素と理論』第1巻の掲載図版に関係がある。なぜなら、この第1巻の掲載図版全471点のうち、約9割がギリシャ・ローマ時代あるいはルネサンス以降のいわゆる古典主義建築で占められたことを考慮すれば、特にギリシャ・ローマ時代の歴史的背景やその内容の精査を目的とし、中村順平がギリシャ芸術に造詣の深いマキシム・コリニョンの文献を参照した意図が読み取れる。なお、マキシム・コリニョンのアテネのパルテノン神殿に関する書物『パルテノン』(1914)⁶¹³に掲載された図版は、ル・コルビュジエの『建築をめざして』(1923)⁶¹⁴に引用されている⁶¹⁵。

次に、中村順平の『建築学技術篇』では、「建築詳述」と銘打たれた大題目に対して、「趣味」「classique」「様式」「装飾」「民族」「時代」「環境」「技法」に関する章構成が組まれた。しかし、こうした章立ては、『建築の諸要素と理論』には存在せず、同書の目次を参照した『建築世界』誌連載の「建築学第一巻～第五巻」と連続するものではないことがわかる。

一方、この『建築学技術篇』には、エコール・デ・ボザールの建築言語理解に必要な情報が記載されている。こうした特徴から、この書物は、『建築世界』誌に連載された「建築学第一巻～第五巻」の内容理解のための補足的な書物と位置づけることができる。この書物では、主に前出のヴィオレール＝デュク、ジュリアン・ガデ、ジョルジュ・グロモールのほか、イポリット・テーヌを加えた4名の言説が参照された。以上の4名は、いずれもエコール・デ・ボザールで教鞭を執った教育者で後世に理論的な文献を残した。

また、『建築学技術篇』の構成は、前半部がヴィオレール＝デュクの言説、後半部がイポリット・テーヌの言説に大別できる。前半部では、「《真》の偶像」⁶¹⁶や「趣味の具現化であるべき物」⁶¹⁷が「建築を修める初学者に対して修学の対象としておろそかにできない教典である」⁶¹⁸であり「《Classique》」⁶¹⁹であると述べ、「趣味は真と善との習性 *habitude* である」⁶²⁰というヴィオレール＝デュクの言説でまとめている。さらに、中村順平は「様式とは、一の原則上に樹てられたる理想の表示である」⁶²¹というヴィオレール＝デュクの言説を用いて「様式」の定義を説明している。

一方、後半部の「民族」「時代」「環境」は、まさにイポリット・テーヌが著書『芸術哲学』⁶²²で掲げた芸術の3つのキーワードと一致し、『建築学技術篇』にはその引用箇所が多数見られる。なお、ヴィオレール＝デュクとイポリット・テーヌは、第2編・第2章で述べたように1863年のエコール・デ・ボザールの大改革により新設された「芸術史・美学」科目の、それぞれ初代、2代目の担当者であった。

このように中村順平の既刊書物にはエコール・デ・ボザールの教員達の建築・芸術・歴史理論が融合された。

ところで、中村順平の既刊書物に登場した前述のジュリアン・ガデ、ヴィオレール＝デュクやルシアン・マーニュといった人物は、フランスの近代建築史を代表する建築家の一人、オーギュスト・ペレが影響を受けた人物と一致する⁶²³。なお、オーギュスト・ペレが影響を受けたといわれるもう一人の人物、オーギュスト・ショワジーについても、中村順平は『建築学技術篇』の中でオーギュスト・ショワジーの著書『建築史』⁶²⁴を参照している。

こうした既刊書物の登場人物から、オーギュスト・ペレや同世代のエコール・デ・ボザールの建築家が受けた理論的な影響が中村順平にも投影された可能性がある。なぜなら、中村順平の留学期のエコール・デ・ボザールで教鞭を執った若い建築家ポール・ガデ、レオン・ジョスリー、エドワー・アルノーや、中村順平のアトリエのパトロンであるジョルジュ・グロモールは、オーギュスト・ペレと同世代といえる存在であり、中村順平はこうした教育者に学んでいたからである。

以上より、中村順平が既刊著述に掲載した情報は、エコール・デ・ボザールの教育の歴史に根付いており、中村順平は「建築学」（建築世界版）や『建築学総説篇』および『建築学技術篇』において、主にエコール・デ・ボザールの教員たちの言説を取り入れていたことが判明した。

主な登場人物は次表（表 3.3.4）の通りである。次表からも明らかなように、中村順平は単にエコール・デ・ボザールの理論をジュリアン・ガデの言説だけではなく、他の人物の文献等を使用し総合的にまとめる意図がみられる。中村順平が「建築学」をまとめるにあたり参照した人物の多くは、エコール・デ・ボザールで教鞭を執った教育者が中心であった、

表 3.3.4 「建築学」(建築世界版), 『建築学総説篇』, 『建築学技術篇』の主な登場人物

	登場人物名	エコール・デ・ボザールでの 役割	備考
中村順平留学時に直接的関係のある人物	ジョルジュ・グロモール	中村順平が留学期に在籍した アトリエのパトロン 「建築理論」科目担当者 (在任期間：1937-1940)	
	エドワー・アルノー	中村順平留学時に受講した 「構造」科目担当者 (在任期間：1920-1934)	「構造」= “Construction” エコール・サントラルでの教育 にも従事
中村順平が書物等から情報を得たと考えられる人物	ジュリアン・ガデ	「建築理論」科目担当者 (在任期間：1894-1908)	
	ヴィオレ＝ル＝デュク	「芸術史・美学」科目担当者 (在任期間：1863-1864)	
	イポリット・テーヌ	「芸術史・美学」科目担当者 (在任期間：1864-1871)	
	ルシアン・マーニュ	「建築史」科目担当 (在任期間：1891-1917)	
	マキシム・コリニョン		高等師範学校 ENS での教育に あたった

3. 中村順平とエドワー・アルノー

3.1 エドワー・アルノー

ここでは、中村順平の既刊書物において取り上げられた登場人物のうち、中村順平の留学期間中にエコール・デ・ボザールの専門科目を担当した唯一の存在である、「構造」科目の担当者、エドワー・アルノーに着目し、その講義や講義録から中村順平における建築理論と教育手法の受容を解明する。

エドワー・アルノーは、1864年リヨンに生まれた。エドワー・アルノーは、明治期の日本の土木界の重鎮であった古市公威（1854-1934）や建築家山口半六（1858-1900）らが留学したエコール・サントラル出身者であった。エドワー・アルノーは、1888年にコンストラクター養成課程 *la spécialité de constructeur* の51期生として修了し、技術者資格を取得した。

エコール・サントラルを修了したエドワー・アルノーは、1889年4月6日にエコール・デ・ボザールの2級課程に登録し、ジャン＝ルイ・パスカル（Jean-Louis Pascal, 1837-1920）主宰のアトリエ・リーブル、アトリエ・パスカル *Atelier Pascal* に所属した。なお、エドワー・アルノーの登録番号は、4099番で、2級課程において23単位を取得し、1891年11月6日に1級課程へ進学した。1級課程では、15単位を取得した。エドワー・アルノーは、第37期 *37è promotion* の卒業制作として、「湖畔のヴィラ」 *Une Villa au bord d'un Lac* を提出し、1894年12月14日に修了し、建築家としてのキャリアをスタートさせた。なお、エドワー・アルノーの卒業制作の図面は、中村順平のように翌年の「1895年のサロン」 *Salon des Artistes Français de 1895* に展示された。

エドワー・アルノーの業績において重要なのは、パリ市内にはじめて建設された鉄筋コンクリート造のオフィス・ビルの設計者であったことだろう。このオフィス・ビルは、鉄筋コンクリートの専門家であり実業家でもあるフランスワ・エンヌビック（François Hennebique, 1842-1921）の事務所であり、その設計者としてエドワー・アルノーを採用した。フランスワ・エンヌビックは、このオフィス・ビルの構造に自身が開発したエンヌビック式 *Système Hennebique* の鉄筋コンクリート構造を採用し、パリ市の中央部に位置するサン・ミッシェルに建設した。エドワー・アルノーの建築家で技術者の視点が、新しい技術に眼をむけた設計に反映されている。エドワー・アルノーは鉄筋コンクリート建築の設計者として、フランスでは先駆的な存在であった。

また、エドワー・アルノーは建築教育者としても知られている。母校のひとつであるエコール・サントラルでの教育では「建築・建設土木講義」 *Cours d'architecture et de construction civile* の教員として教鞭を執った。エドワー・アルノーによる母校での講義は、1909年から1934年まで行われた。そして、1920年より、エドワー・アルノーはエコール・デ・ボザールの「構造」科目の教育者となった。エコール・デ・ボザールでは「構造」科目の前任者とは異なる教授法で、建築学と構造学の融合が図られた、エドワー・アルノー流に言えば「芸術」と「科学」が融合した「構造」講義が行われた。

3.2 エドワー・アルノーの講義録

中村順平のエコール・デ・ボザール留学中、「建築理論」Théorie de l'architecture 科目が休講⁶²⁵であったことを考慮すると、中村順平は単にジュリアン・ガデの『建築の諸要素と理論』を範とした講義録の作成を意図していただけなのか。それとも、中村順平が「建築学」科目の範とした科目が当時のエコール・デ・ボザールで行なわれたのか。そのひとつの可能性として、エドワー・アルノーの講義に着目し、ここでは、そこで使用された講義録を概括する。

中村順平のエコール・デ・ボザールへの入学は1921年7月ではあったが、中村順平は1920-1921年度からはじまったエドワー・アルノーの講義を入学前に聴講した。中村順平がはじめて「構造」科目に出席したのは、1921年2月14日（月曜日）⁶²⁶のことで、エドワー・アルノーがエコール・デ・ボザールで講義を始めた初年度であった。この講義の翌日同年2月15日⁶²⁷に、中村順平は前述のジュリアン・ガデの『建築の諸要素と理論』全4巻を180フラン（当時）で購入した⁶²⁸。エドワー・アルノーの講義録『建築・建設土木講義』第1巻で『建築の諸要素と理論』を推奨する記述が発見できるように⁶²⁹、中村順平はエドワー・アルノーの「構造」科目を通じてジュリアン・ガデ講義録の存在を知り、早速書店に向かい購入したと考えられる。

エドワー・アルノーは、中村順平の留学中、エコール・デ・ボザールで「構造」科目を講義する一方で、前述のようにエコール・サントラルでも同様の講義を担当した。エコール・サントラルでの講義名は「建築・建設土木講義」科目であった。エドワー・アルノーは、1909年より母校エコール・サントラルにて第2学年を対象とした「建設土木」Construction civile 科目を担当する⁶³⁰。エコール・サントラルでの経験を踏まえ、1920年よりもうひとつの母校であるエコール・デ・ボザールでの「構造」科目を担当した。エドワー・アルノーの「構造」科目は1934年まで続いた。

エドワー・アルノーによるエコール・サントラルでの講義録『建築・建設土木講義』⁶³¹は1920年に5巻組で出版された。この講義録はエコール・サントラルの1919年度の講義用に作成された5巻組の書物である。講義名に由来するこの講義録は、その後、1924年、1928年、1931年と版を重ね、その内容を刷新しながら発展した。

この講義録の第1巻には、「建物建設のために検討する働きのすべて」Ensemble des Opérations à envisager pour l'Édification des Bâtiments という副題があるように、建設行為において検討すべき12の「働き」Opération が述べられている。第2巻から第4巻までは構造要素の構成を論じ、最終第5巻では、エドワー・アルノーがパリ市内のイタリアン通り rue des Italiens で設計したオフィス・ビルを実例として取り上げ、建築構成から建設過程、完成に至るまでの過程について実際に図面等を用いて解説している。

建築の構成に関する内容が大半を占めたこの第1巻では、エコール・デ・ボザールの建築構成に関する手法が述べられている。の中で、エドワー・アルノーは建築構成の手法の修得に関して、ジュリアン・ガデの『建築の諸要素と理論』の参照を推奨した⁶³²。

『建築の諸要素と理論』第1巻では、建築物における主要構造部のあり方や構造耐力上主要な部分となる要素が抽出され、構築的な視点から論じられている。エドワー・アルノーの5巻組の講義録の第2巻から第4巻は、『建築の諸要素と理論』第1巻における構築的な要素をさらに詳述したものと捉えることが可能であり、エドワー・アルノーは、建築物を「＜構造＞を備えた体系的な構築物」⁶³³

として把握し、その骨格やシステムの解明に努め、それを教授するスタイルを確立したことが講義録から読み取れる。

また、エドワー・アルノーの講義録には様々な書物からの図版が引用された。引用図版の原典を考慮すれば、建築意匠面では、ジュリアン・ガデの『建築の諸要素と理論』や19世紀末から20世紀初頭にかけて活躍したベルギーの技術者で建築教育者のルイ・クロケ（Louis Cloquet, 1849-1920）の『建築論』⁶³⁴が参照され、技術面では、エドワー・アルノーの母校であるエコール・サントラルの教育者ギュスターヴ・オスレ（Gustave Oslet, 1852-1936）の一連の講義録『構造講義』⁶³⁵やA・V・マニー（A・V・Magny）の『鉄筋コンクリートの構造、理論と実践』⁶³⁶が参照された。また、講義録全体を通じ建築全般の歴史的な事例の図版の出典として、ポール・アメデ・プラナ（Paul Amédée Planat, 1830-1911）が編纂した『建築・構造百科事典』⁶³⁷が使用されており、19世紀後半から20世紀初頭にかけて出版された建築書の成果が取り入れられた。

エコール・サントラル向けに作成されたエドワー・アルノーの講義録は、技術者の視点から、建築の理論的側面を自然界の法則に触れて説明し、当時の新しい鉄筋コンクリート技術や鉄骨技術など施工面の具体的情報を提示し、総合的な建設プロセスを教授する講義を想定したものである。

エドワー・アルノーがエコール・サントラルで実践した講義は、建築の一連の建設プロセスすべてを教授する内容であった。エドワー・アルノーは、エコール・サントラルでの「建築・建設土木」科目における講義を通じ、同校における技術偏重ぎみであった「建築・建設土木」科目の改革を目指したのだろう。具体的には、技術者養成学校であるエコール・サントラルの学生に対し、技術教育はもちろん、エドワー・アルノー自身がエコール・デ・ボザールで学んだ建築構成に関する知識や技術を教授することで、建築家の思考法を理解する建設技術者の育成をめざしたと考えられる。エドワー・アルノーは、与えられたプログラムに対し、建築家がどのように着想し、建物の構成を考え、それにどのような素材や構造を適用し、設備付与していくのか、さらには、建設コストの考え方や各種書類作成、現場での監理に至るまで、建築家と建設技術者という二つの立場からみた建設プロセスを教授した。

この講義録がエコール・サントラルという技術者養成の高等教育機関での講義用に編纂されたことからわかるように、エドワー・アルノーは、理論や技術論のみならず、実作や実際の運用方法の実例を説明材料として使用しながら、建築家の設計開始段階から建設の過程での技術者の関わり方について、建築家が行う仕事と技術者が行う仕事に関する相違点などを講義した。つまり、この講義録は、技術者が建築家の実現に向けた設計意図や具現化のためのプロセスはいかなるものであるかという問題意識に立脚したもので、建築家よりもむしろ技術者の立場が前提とされたものといえ、歴代の「構造」科目担当教員の講義をさらに発展させた意図も発見できる。

そして、このエコール・サントラルの講義のために作成された講義録は、エコール・デ・ボザールの「構造」科目においても使用された。エコール・デ・ボザール在籍中の中村順平にとっても、この講義録は「構造」科目の最終課題となる「構造設計」課題の受験に必要であった。

3.3 『建築の諸要素と理論』にみる「構造」理論

前述のように、エドワー・アルノーはエコール・サントラルとエコール・デ・ボザールにおいて同様の講義録を使用した。エドワー・アルノーが総合的な建設プロセスを教授する講義を行なったのであれば、その一部に「建築理論」科目での講義内容との重複が考えられる。また、逆に考えれば、「建築理論」科目において「構造」理論が意識された可能性もある。つまり、中村順平が自身の著作をまとめるにあたり参照した『建築の諸要素と理論』に「構造」理論との接点が見出せる可能性がある。こうした問題意識にたち、ここでは、『建築の諸要素と理論』にみる「構造」理論との接点を考察する。

エコール・デ・ボザールの教育は、その創設から解体に至るまで必ずしも同様の教育法が採用されておらず、母体はそのままに時々に応じて様々な改革が行なわれた。特に1863年の大改革は同校の歴史の大きな転換期となったが、この転換期に先頭をきって改革と向き合ったのがジュリアン・ガデであった。この大改革の際、ジュリアン・ガデは、ヴィオレ＝ル＝デュクによって新設された「芸術史・美学」科目の講義を排斥する運動の主要メンバーであったため、「古典主義者」⁶³⁸と考えられてきた。しかし、ジュリアン・ガデは「古典建築の規範を無条件な遵守を要求」⁶³⁹したわけではなく、むしろ「アカデミーの教義を拒絶した人びとと同じように、機能的、科学的、非様式的」⁶⁴⁰で「諸要素の合理的な構成によって建築が出来上がるという一種の機能的な考え方」⁶⁴¹を示した人物であった。

ジュリアン・ガデの『建築の諸要素と理論』は、「建築理論」科目の講義録であるため、エコール・デ・ボザールにおける美学的な建築理論の伝統の流れにある書物とみられる傾向がある。しかし、ジュリアン・ガデは、この講義録の冒頭で「建築には、はっきりと目に見えるひとつの存在価値しかない：建てること。この語は建築家の役割全てを代弁している。なぜなら保存・修復・復元も建てることだからである。建てることは建築家の目的であると同時に、それが規定する手段でもある」⁶⁴²と述べ、ヴィオレ＝ル＝デュクと同様の見解を提示した。こうした建築の美学的な側面を強調せず、建設行為に対する重要性を唱えるジュリアン・ガデの意識は、『建築の諸要素と理論』における第2巻から第4巻に記載された各建築プログラムのカタログ的な構成にも反映されている。これらのカタログ的な内容は「構造」科目が求めた視点と一致しており、『建築の諸要素と理論』がそれまでのエコール・デ・ボザールの建築理論が培ってきた美学的な建築理論の流れとは一線を画したものだといえる。

ジュリアン・ガデの掲げる要素は、美学的な建築理論の骨子となる古典建築における要素である円柱や柱頭、柱礎、エンタブレチュアやペディメントといったものではなく、壁や窓、開口部、屋根や天井、階段等をさしている。これはヴィオレ＝ル＝デュクが考えた「＜構造＞を備えた体系的な構築物」⁶⁴³として建築物を把握した方法と一致しており、ジュリアン・ガデはデカルト的思考で建築を説明しようとしたヴィオレ＝ル＝デュクの思想を引きつぎ、エコール・デ・ボザールの中心的な科目である「建築理論」科目で教授した。また、この視点に着目したエドワー・アルノーもまたヴィオレ＝ル＝デュクやジュリアン・ガデの思想を引き継ぎ構築的な視点から論じるスタイルを発展させた。

このように、19世紀末のエコール・デ・ボザールの教育には、「建築理論」と「構造」の間での葛藤が建築理論書に反映され、特に、ジャン＝バティスト・ロンドゥレの講義録にはじまる構造的合理主義建築理論がヴィオレ＝ル＝デュクによって強化され、近代建築理論の先駆的な存在としてのジュリアン・ガデの建築理論へと昇華された。19世紀末までに様々な形で発表された構造的合理主義建築理論はその後緻密に分析され、エドワー・アルノーの講義録でさらに構築された。

3.4 エドワー・アルノーの「構造」科目

エドワー・アルノーがエコール・デ・ボザールにおいて行った教育と「構造」科目の歴史的な流れとの違いなど画期的な取り組み等の有無に着目し、エドワー・アルノーの教育の特徴について考察する。

前述の通り、エドワー・アルノーは1920年からエコール・デ・ボザールで「構造」科目を担当した。エドワー・アルノーはエコール・デ・ボザールでの「構造」科目の担当教官1年目の総括にあたり、1921年6月に同科目の開講趣意やその目的、初年度を終えての自身の成果を雑誌 *L'Architecture* 誌に発表した⁶⁴⁴。この報告からエドワー・アルノーが「構造」科目の改革推進の意図が読み取れる。

エドワー・アルノーは同時代のフランスの建築教育機関に共通する問題として講義内容の増大をあげ、建設分野における技術の発達や現場の手続きの変更や更新に伴う学校・学生側双方の対応の困難さを指摘している。また、一見現場主義的な教員引率による学生集団の建設現場見学は危険を伴う上に、建設過程のすべてを効率よく見られるわけではなく、卒業後に必要な実践的能力の修得には困難とした。そこでエドワー・アルノーは学生に興味を持たせ飽きさせない、詰めこみ型ではない技術的・実践的な授業改革を行なった。

その実践として、エドワー・アルノーはまず投影機⁶⁴⁵の利用をあげた。講義内容に必要な画像を投影機で映し、解説を加え、技術・実践面における実践に即した必要な知識を教授した。また、学生に豊富かつ分類された資料を提供しながら「理想的な」⁶⁴⁶建物の歴史全般を概観させた。これにより学生は、実際に現場に出る前に、あらゆる建設方式や実現の困難さに触れ、またノートをとる負担を軽減し授業に集中できるよう配慮した。

一方で、エドワー・アルノーは大教室で行なう投影機を利用した授業の弊害として、学生が能動的に勉強をしなくなること、学生がデッサンによってのみ習得可能な実際の建築言語の練習の機会を失うこと、また学生は与えられた多数の資料の取捨選択ができなくなる危険性を指摘する。

こうした弊害を避けるため、エドワー・アルノーが授業の中で職業的に重要となる骨子を教えることは勿論のこと、大教室での毎回の授業後に1、2時間程度必ずデッサンのための時間を割り、学生たちに300ページ程度のノートに年間で500点ほどの図版のトレースを課した。さらに年度末に口頭試問を行い、学生は年度内に作成したデッサンノートを復習して、教授の質問にデッサンを書きながら答える。口頭試問の問題は、学期初めに90問程度の質問リストとして発表されており、その中から出題されるため年度末の負担が軽減される配慮をした。

こうした負担軽減により、学期最後に行なわれる「構造」科目の設計課題へ集中できる環境を整備すると同時に、設計課題への参加要件として口頭試問やデッサンノートの提出を課した。中村順平は、「構造」科目の図版のトレースに関して、「この労作は、自分にとって、かなり苦しい思い出」⁶⁴⁷と後に述べている。このように、講義修了後に講義で学んだことを再確認させるための作業として、学生達に講義録に掲載された図版のトレースを行なわせる作業を課すエドワー・アルノーは教育手法は、当時のエコール・デ・ボザールでは革新的なものであり、後年、エコール・デ・ボザールの「建築史」科目を担当するルイ・オートクール (Louis Hautecœur, 1884-1973) や「構造」科目の後任教員、フランソワ・ヴィタルに受け継がれた⁶⁴⁸。

また、エドワー・アルノーは「構造」科目の設計課題を2級課程の最終課題と位置づけた。そのた

め「構造」科目を受講するにあたって、「構造力学・材料力学」，「幾何図学」，「截石学」の3科目の事前受講を勧めている。

エドワー・アルノーはエコール・デ・ボザールではエコール・サントラルで実践した講義をもとに作成された講義録『建築・建設土木講義』を用いることで，総合的な建設プロセスを教授する講義をめざした。こうして，エコール・デ・ボザールでの「構造」科目は，エドワー・アルノー就任により教育内容に変化が生じる。例えば，エドワー・アルノー以前の「構造」科目では，組石造，木造や鉄骨の小屋組を描かせる課題のみが提示されていたが，エドワー・アルノーはフランスにおける最初期の鉄筋コンクリート造の建築の設計者としての経験を取り入れ，エコール・デ・ボザールでは行なわれることのなかった新しい構造に関する知識を教授した。

さらにエドワー・アルノーは「構造」科目の最終課題でもある「構造設計」課題においても改革を行い，「建築理論」科目担当教員が作成した「設計競技」課題と融合させた新しい課題出題のスタイルを考案し，実践した。

3.5 中村順平にみるエドワー・アルノーの「構造」科目

仮に中村順平の教育スタイルや理論においてエドワー・アルノーからの影響があったとするならば、具体的にどのような影響がもたらされたのか。中村順平にみるエドワー・アルノーの影響を考察する。

エコール・デ・ボザール留学から帰国した中村順平は、翌年 1925 年から横浜高等工業学校建築学科の主任教授として自身が思い描く建築教育の実践を試みた。教職経験のない中村順平が自身の教育を行なうにあたってどのようなモデルを参照し、教育を実践したのか。

1924 年に日本に帰国した中村順平は様々な機会にフランスで受けた建築教育や建築理論について述べているが、特にエドワー・アルノーについては繰り返し言及しており、エコール・デ・ボザールで苦勞した科目としてエドワー・アルノーの「構造」科目を挙げている⁶⁴⁹。なお、中村順平がはじめて「構造」科目に出席したのは、1921 年 2 月 14 日で、エドワー・アルノーの講義が中村順平にとってエコール・デ・ボザールで受けたはじめての講義であった。

中村順平は 1927 年に「日本建築士」誌の紙面上で、フランスにおける建築家の職能に関する記事を發表しているが、そこでエドワー・アルノーの言葉として「建築は科学であり藝術であり、建築家は従って学者であり藝術家である」⁶⁵⁰としている。

中村順平著『建築学総説篇』第二卷第九章によれば、この言葉そのものは、18 世紀から 19 世紀にかけてのフランスにおける建築家の職能観の変化に関する説明で、フランス 18 世紀において「芸術家」であった建築家が、19 世紀に入ると建築は「科学」とみなされるようになったため、建築家は学者であると同時に藝術家たる必要があることを説いている。同様の見方はジュリアン・ガデの『建築の諸要素と理論』第 1 卷冒頭部⁶⁵¹にも見られるが、中村順平は記事の中で定義の出所として「巴里美術院構造學教授アルノー氏の言」⁶⁵²をあげることで、師エドワー・アルノーとの師弟関係や建築の科学的側面を強調していた様子がうかがえる。また、こうした意識は、中村順平の「バロック・ロココ」に関する論考が掲載された『世界建築全集 8：西洋 III』⁶⁵³の参考文献リストにエドワー・アルノーの講義録が掲載されていることなどからも読み取れる。

中村順平は「構造」科目で必要とされたエドワー・アルノーの講義録の部分訳を行い、訳文のいくつかが著作『建築学総説篇』に掲載された。中村順平は著作『建築学総説篇』の中で少なくとも 2 度エドワー・アルノーの名のみを記して引用文を掲載した。著者はエドワー・アルノーの講義録からの引用と考え、エドワー・アルノーの講義録の調査を行ない、原文該当箇所を確認した。

①『建築学総説篇』「第二卷第二章基準原則」 pp.85-89

エドワー・アルノー講義録第 1 卷(Première partie) “Examen des formes organisées de la nature dans le but d'en retirer des éléments utiles pour nos compositions—Recherche du caractère” 項の p.33 から p.40 中段部分までを引用。

エドワー・アルノーの「自然界に於ける組織的形態」des formes organisées de la nature の考察を紹介。

②『建築学総説篇』「第二卷第九章構造上の科学と芸術との交渉」 pp.252-253

エドワー・アルノー講義録第 1 卷 “L'architecture est un art et une science.” 項の p.52 から p.54 全体を引用。

エドワー・アルノーの建築における「科学」science と「芸術」art との関係に関する考察を紹介。

このエドワー・アルノー文献からの引用該当箇所の調査の過程で特に重要な知見は、引用箇所の発見だけではなく、中村順平が出典を明記していない部分における類似記述の存在であろう。例えば、中村順平は『建築学総説篇』「第二巻第一章概説」における「《le parti》の搜索」においてその出典は記していない。しかし、著者はエドワー・アルノー講義録を精査する過程で、第1巻全体の約44%を占める12の働きの第3番目の項目として“Recherche du 《parti》, composition”⁶⁵⁴とする記述を発見した。この題名から想起されるのは、吉田鋼市が前述の論考で指摘した「parti」の使用法である。中村順平がエコール・デ・ボザールで直接講義を受けたエドワー・アルノーによる講義録を和訳し熟読していたことから、《le parti》の搜索の典拠がエドワー・アルノー“Recherche du 《parti》”である可能性は大いにある。

また、中村順平への実践的影響として、中村順平が横浜高等工業学校で課した設計課題の出題方式にエドワー・アルノーを参照した痕跡が残されている。

中村順平が受けたエコール・デ・ボザールでの「構造」設計課題は、「建築理論」科目の担当教官であるヴィクトール・ブラヴェットが出題する「設計競技」にエドワー・アルノーが出題する「構造設計」課題が付与された形で行なわれた。この課題は通常の「設計競技」として「エスキス」*esquisse* および「提出図面」*rendu* が求められ、「構造設計」課題として提出する場合、前記の「提出図面」にさらにエドワー・アルノーの要求図面を盛り込んで提出するスタイルであった⁶⁵⁵。

この方式は、エドワー・アルノーがエコール・デ・ボザールで教鞭をとりはじめた1920年度から2年間のみ行われた。エドワー・アルノー就任以前の「構造」科目は、科目担当教官が単独で課題を作成しており、また、エドワー・アルノー自身も、就任3年目からは単独で、「構造」の課題に「建築理論」科目で問われる建築構成の要素を含有した課題として出題した。

つまり1921年よりエコール・デ・ボザールに在籍した中村順平は、エコール・デ・ボザールの教育史上、「建築理論」科目担当教官が出題する通常の設計課題と「構造」科目担当教官が出題する設計課題が融合された課題が課されるという、特異な時期を経験した。そして、この方式は、横浜高等工業学校の設計課題「略設計（十二時間）及び本仕上並びに構造設計問題」に踏襲された。「略設計（十二時間）」は上記エコール・デ・ボザールの「構造」設計課題における“*esquisse*”，「本仕上」は“*Projet rendu*”に対応し、「構造設計問題」は“*Projet de construction générale*”に相当しているが、例えば、1929年1月15日に出題された課題は「交通博物館」をテーマとし、建築構成に関わる部分を中村順平が出題し、構造に関わる部分を、当時横浜高等工業学校で講師を務めていた森井健介（1887-1976）が出題した⁶⁵⁶。

また、中村順平は『横浜高等工業学校建築設計競技図集』で「略設計（十二時間）及本仕上並びに構造設計問題」と称するは、以上の設計手続以外、さらに構造図をも要求する競技設計であり、修学期間の短い自分の学校では、既に三年生の第三学期に亘って之を行はしている⁶⁵⁷と述べ、この「略設計（十二時間）及本仕上並びに構造設計問題」は中村順平が受けたエコール・デ・ボザールの教育における「構造」設計課題と同様の位置づけを行なっている。

つまり、エコール・デ・ボザールにおける「構造」設計課題が、2級課程から1級課程へ進学するための最終課題として位置づけられたことを考慮すると、中村順平が横浜高等工業学校の課程がエコール・デ・ボザールの2級課程程度であると考えており、建築教育を「建築家となるための、単に基礎的な技能と学識とを与えるに止め」⁶⁵⁸建築教育機関を「建築芸術の基礎教育を授ける道場」⁶⁵⁹と考

えたことは、この課題の設定に反映された。また、中村順平はフランスにおける「建築家の養成」⁶⁶⁰システムについて「基礎教育だけでなく、実地修得を卒業の必須条件」⁶⁶¹と述べるように、中村順平にとっての横浜高等工業学校での教育は、建築家の養成のための基礎教育課程までの整備にとどまっていた。こうした視点は、本論第3編・第2章「1.3.1」で確認したように、基礎課程の課題や練磨課程における基礎設計練習課題の出題頻度の傾向にも一致している。

一方、中村順平のもうひとつの担当科目である「建築学」科目において、「反射式幻灯機」を使用したことが知られている⁶⁶²。こうした講義スタイルもエドワー・アルノーが投影機を使用した教育スタイルの受容と捉えることができる。

以上から、中村順平が自身のパリ留学経験を語る際に必ず登場したエドワー・アルノーは、中村順平の理論や教育手法への直接的な影響を与えた人物のひとりであり、その理論と教育手法が近代日本の建築教育に受容されたことは明確で、中村順平は、エドワー・アルノーの「構造」科目を通して、ジュリアン・ガデらエコール・デ・ボザールの理論的潮流を吸収しつつ、フランスにおける技術的、実務的知識体系に触れていたと考えられる。

特に、中村順平は建築教育実践面のみならず建築理論においてもエドワー・アルノーの手法と実践を積極的に取り入れた。中村順平が受けたボザールの教育における「構造」科目の経験が中村順平の理論のほか建築家職能観、教育手法の3点に直接的に反映された。いわば、エドワー・アルノーの「構造」科目が中村順平の建築教育モデルのひとつである。

3.6 中村順平にみるフランス建築理論の受容：パルティを一例として

前述のように、エドワー・アルノーの講義録中の記述“Recherche du «parti»”は、中村順平の「《le parti》の搜索」の語源として考えられる。また、この《le parti》「パルティ」の語源をさらに遡れば、エドワー・アルノーが講義録中で参照したルイ・クロケとの関係が指摘できる。

この「パルティ」の語彙に関する吉田鋼市の研究⁶⁶³の存在はすでに触れたが、吉田鋼市はここで「グロモールの parti の使用例はガデよりもむしろクロケに近づいている」⁶⁶⁴と述べている。ここで登場する「クロケ」はエドワー・アルノーが講義録で参照したルイ・クロケである。また、吉田鋼市が指摘するように、中村順平の「パルティ」の使用例が「当時のボザールの教育の直接の反映」⁶⁶⁵であったとするならば、ジョルジュ・グロモールやエドワー・アルノーに由来すると考えられる。

20世紀初頭の大戦間の教育者で「パルティ」を多用した人物として、前述のジョルジュ・グロモールやエドワー・アルノーのほか、彼等と同時代にエコール・ポリテクニクで建築理論を教授したギュスターヴ・ウムデンストックの3名が知られている⁶⁶⁶。いずれも、ほぼ同時代にエコール・デ・ボザールの教育を受けた建築家である。

エドワー・アルノーの使用例は「与えられた課題を前にした我々の最初の反応」⁶⁶⁷や「全体にかななるマスを与え、主たる部分にどのようなまとまりを与えるか」⁶⁶⁸の方針を指しており、ジョルジュ・グロモールの使用例に類似している。また、エドワー・アルノーの講義録から、この語が1920年代のエコール・デ・ボザールの教育においても使用されたことは明らかであり、この時期に教育を受けた中村順平は文章化されたエドワー・アルノーの講義録から受容した可能性が高い。

また、エドワー・アルノーやギュスターヴ・ウムデンストックが技術者養成学校での建築教育者であったことや、ジョルジュ・グロモールによる「建築理論」科目の講義録での「パルティ」の説明よりも、別の書物である「建築入門」においてより詳細に「パルティ」の解説を行っていることから、この語が建築の基礎教育課程において重視された可能性がある。

さらに時代を遡れば、吉田鋼市は、カトメール・ド・カンシー（Quatremère de Quincy, 1755-1849）の「辞書にはない」⁶⁶⁹としているが、フランスの建築家で理論家のジャック・リュカンの著書『構成—非構成』（2009）⁶⁷⁰によれば、カトメール・ド・カンシーの『辞書II』（1832）⁶⁷¹のp.203には、一般的な使用例の掲載が確認できることが指摘されている。また、吉田鋼市が対象外としたエコール・ポリテクニクの建築教育者であったレオンス・レイノーの『建築論』（1850）⁶⁷²でも「パルティ」という語は度々使用されている⁶⁷³。ここでの「パルティ」は、ある解決策を導くために選択した方法や方針を指し、時折具体的な型や形を指した⁶⁷⁴。これは吉田鋼市のいう「予め決められた図式群からの選択」に近く、こうした使用例は既に1850年代のフランスの建築理論書に現れていた。

レオンス・レイノーの建築論は、エコール・ポリテクニクでの講義にその範があり、また、ルイ・クロケの建築論もベルギーにおけるフランスのエコール・ポリテクニクのような技術者養成機関における建築教育での講義に由来していることを考慮すれば、技術者養成学校での使用法がエコール・デ・ボザールに移入されたと考えることもできる。つまり、中村順平はジョルジュ・グロモールからの受容だけでなく、むしろ、エドワー・アルノーによってエコール・デ・ボザールに導入された技術者養成学校での使用例が、中村順平の「建築学」へと引き継がれた可能性がある。いずれにせよ、こうしたフランスの建築理論用語を中村順平は近代日本の建築教育に導入した。

小結

本章では、中村順平の「建築学」科目に着目し、その概要と講義録として発刊・刊行された既刊著述を整理し、既刊著述についてはフランス建築理論の受容という観点から分析を加えた。また、既刊著述の分析から、中村順平が留学期に経験した「構造」科目の教育者の言説を発見したため、その科目の教育者に着目し、中村順平の実践した教育との接点を考察した。

「1.「建築学」」では、横浜高等工業学校で行なわれた中村順平による「建築学」科目に着目し、その講義内容を卒業生の証言から分析し、また、中村順平の講義録としての既刊著述の概要を整理した。

その結果、1.1では中村順平の「建築学」科目では、学年を隔てることなく、開校当時から芸術色の濃い講義が行なわれ、「格調の高い古典の比例の美、建築芸術論、建築家論」が反射式幻灯機から映し出される豊富な図版等を使用した講義が行なわれたことを卒業生の証言から明らかにした。

1.2では、中村順平の「建築学」科目とその講義録といわれた『建築世界』誌連載の「建築学」や、その一部をまとめた『建築学総説篇』、教え子たちの手によって発行された『建築学技術篇』、さらに未定稿の『「建築学」草稿』の相関関係をジュリアン・ガデの『建築の諸要素と理論』の章構成との関係から整理した。その結果、『建築学技術篇』は『建築の諸要素と理論』にはない項目でまとめられたことを指摘した。また、『建築の諸要素と理論』の章構成との関係から、『「建築学」草稿』が『建築世界』誌連載の「建築学」の続編である可能性を指摘した。

「2.既刊「建築学」」では、中村順平の既刊著述に関する既往研究を整理し、既刊著述に登場する人名に着目し、中村順平のフランス建築理論の受容を分析した。その結果、2.1では、登場人物は、エコール・デ・ボザールの歴代教員がほとんどで、特に同校の「建築理論」科目を担当したジュリアン・ガデやジョルジュ・グロモール、「芸術史・美学」科目を担当したヴィオレ＝ラ＝デュクやイポリット・テーヌであった。また、中村順平のエコール・デ・ボザール留学中における「構造」科目の現役教育者エドワー・アルノーの言説を確認したため、直接的な影響を受けた可能性を考慮し、エドワー・アルノーの重要性を指摘した。

「3.中村順平とエドワー・アルノー」では、2.2で指摘したエドワー・アルノーの「構造」科目の教育に着目し、中村順平の建築理論や教育手法への影響関係を考察した。

3.1では、エドワー・アルノーの経歴を整理した。その結果、エドワー・アルノーは、エコール・サントラルにおいて技術者教育を受けた上でエコール・デ・ボザールの教育を受けたこと、パリ市内における鉄筋コンクリート造のオフィス・ビルの最初期の設計者であったこと、さらに教育者としてエコール・サントラルとエコール・デ・ボザールの両校において教鞭を執ったことを確認した。

3.2では、エドワー・アルノーの講義録に着目し、その概要を整理した。その結果、エドワー・アルノーの講義録は、エコール・サントラルの講義用に作成されたが、エコール・デ・ボザールにおいても使用されたことを確認した。既往研究ではこれまでほとんど触れられることのなかったエドワー・アルノーからの影響は、建築理論のみならず、横浜高等工業学校で行った講義スタイルや設計課題の出題方法にまで浸透し、エドワー・アルノーの教育スタイルがいえば中村順平の教育スタイルのモデルであった可能性を指摘した。

3.3では、中村順平の既刊著述との関連性が度々指摘されてきた『建築の諸要素と理論』と「構造」理論との接点を分析した。その結果、『建築の諸要素と理論』には、美学的な建築理論の骨子となる古

典建築における要素による分類ではなく、ヴィオレ＝ル＝デュクが考えた「＜構造＞を備えた体系的な構築物」として建築物を把握した方法と一致した要素で分類されたことを確認した。「建築理論」科目において、こうした「構造」理論が取り入れられ、さらに、その建築理論書がエドワー・アルノーの講義録に受容された流れを明らかにした。

3.4では、エドワー・アルノーの講義に着目し、その概要を整理した。その結果、エドワー・アルノーが映写機を用いた講義を行なったことを確認した。また、エドワー・アルノーが授業後に1, 2時間程度必ずデッサンのための時間を割いた教育スタイルを定着させたことを確認した。また、この教育スタイルは、他の講義ではあまり行なわれなかったスタイルで、その後の教育者に引き継がれた独特な教育スタイルであったことを確認した。さらに、エドワー・アルノーが「構造」科目の担当となり、初めの2年のみ行なった「構造設計」課題の特殊な出題スタイルが存在したことを明らかにした。

3.5では、3.2および3.4で整理したエドワー・アルノーの講義録と講義の特徴と、中村順平が横浜高等工業学校で行なった建築教育との接点を解明した。まず、エドワー・アルノーと中村順平の講義録の関係に着目した結果、中村順平の講義録としての『建築学総説篇』にみるエドワー・アルノーの言説の採用を確認した。また、他の中村順平の論考にみられるエドワー・アルノーを意識した発言の存在を確認し、中村順平がエコール・デ・ボザールで直接講義を受けたエドワー・アルノーからの影響を明らかにした。

また、中村順平の設計課題のひとつには、エドワー・アルノーの教育手法が導入されていることを指摘した。それは、エドワー・アルノーが中村順平の留学期に行なった特殊な課題出題スタイルで、その設計競技に構造設計を加える出題スタイルが、横浜高等工業学校の第3学年における卒業設計に変わる最終課題として定着し、横浜高等工業学校のスタイルとなったことを明らかにした。

さらに、中村順平が「反射式幻灯機」を使用した「建築学」科目の講義スタイルの原型にエドワー・アルノーの講義があった可能性を指摘した。なお、この科目の講義後に設計競技課題の出題がなされたという証言⁶⁷⁵を得たことから、エドワー・アルノーが講義終了後に確認のために課したトレース作業を、中村順平は、講義の確認作業として設計競技課題を提示した可能性を指摘した。このように、中村順平の教育スタイルには、エドワー・アルノーの教育スタイルのエッセンスがちりばめられたことが明らかになった。つまり、中村順平は、エドワー・アルノーの建築理論のみならず、講義や設計競技課題のスタイルを含めた教育手法全般を受容した。

3.6では、中村順平は著作『建築学総説篇』における「《le parti》」の搜索に着目し、この《le parti》とエドワー・アルノーの講義録との関係を吉田綱市の既往研究での視点から考察した。その結果、1850年代のフランスの建築理論書において、この語が使用されたことを確認した。また、ルイ・クロケ、レオンス・レイノー、エドワー・アルノー、ギュスターヴ・ウムデンストックといった教育者にみるこの語の使用から、この語が技術者養成機関の建築教育において多用された可能性を指摘した。つまり、中村順平がこの語を受容した背景には、既往研究で指摘されたジョルジュ・グロモールからの受容だけでなく、むしろ、エドワー・アルノーによってエコール・デ・ボザールに導入された技術者養成学校での使用例があった。このように、中村順平はこうしたフランスの建築理論用語を近代日本の建築教育に導入したことを明らかにした。

第3章 註

- ⁵⁹³ 1925 年設立当時、中村順平は「木炭画」科目の担当教官を兼任していた。1932 年度から渡邊郁一が「木炭画」の担当教官となっている。
- ⁵⁹⁴ 網戸武夫『情念の幾何学』建築知識社、1985、p.336
- ⁵⁹⁵ 網戸武夫、前掲書、p.337
- ⁵⁹⁶ 横浜高等工業学校編『横浜高等工業学校一覧』第 6-21 巻、横浜高等工業学校、1925-1941
- ⁵⁹⁷ 網戸武夫、前掲書、p.336
- ⁵⁹⁸ 郡菊夫「中村順平先生の建築教育」『建築雑誌』Vol.91, No.1106, p.417, 日本建築学会、1976
- ⁵⁹⁹ 川本喜八郎「三人の師のこと」『水煙会報』第 25 号、水煙会、1996、p.31
- ⁶⁰⁰ 中島久男「日本におけるエコール・デ・ボザール教育の導入について」『学術講演梗概集.F, 都市計画, 建築経済・住宅問題, 建築歴史・意匠 1987』pp.771-772, 日本建築学会、1987
- ⁶⁰¹ 明治 40 年創刊の建築系雑誌
- ⁶⁰² 中村順平『建築学総説篇』土木出版社、1944
- ⁶⁰³ 中村順平『建築学技術篇』中村塾出版会、1950
- ⁶⁰⁴ 網戸武夫、前掲書、p.337
- ⁶⁰⁵ 中村順平「建築学」『建築世界』第 19 巻 7 月号、建築世界社、1925、p.2。なお、ジュリアン・ガデの原語綴りなどに誤植が見られる。
- ⁶⁰⁶ 森山学「9033 日本建築士會による海外のアーキテクト／「建築士」に関する状況の日本への紹介：長野宇平治による J. ガデの紹介」『日本建築学会学術講演梗概集.F-2, 建築歴史・意匠 1997』日本建築学会、pp. 65-66, 1997
- ⁶⁰⁷ 中村順平「フランスの建築士」『日本建築士』日本建築士会、pp.1-6, 1928
- ⁶⁰⁸ 網戸武夫、前掲書など
- ⁶⁰⁹ Guadet, J. : *Eléments et Théorie de l'architecture*, Librairie de la construction moderne, n. d., 1901-1904
- ⁶¹⁰ 中島久男、前掲書、1987
- ⁶¹¹ 黒石いずみ「フランス外でのエコール・デ・ボザール」『青山學院女子短期大學紀要』第 56 号、青山学院女子短期大学、pp.A109-A122, 2002
- ⁶¹² 中島久男、前掲書
- ⁶¹³ Collignon, M. : *Le Parthénon: l'histoire, l'architecture et la sculpture*, Hachette et cie, 1914
- ⁶¹⁴ Le Corbusier : *Vers une architecture*, G.Crès et Ci, 1923 (翻訳：ル・コルビュジエ『建築をめざして』(吉阪隆正訳) 鹿島出版会、または、ル・コルビュジエ『建築へ』(樋口清訳)、中央公論美術出版、2004)
- ⁶¹⁵ なお、建築学参考図刊行委員会編『世界建築史参考図集・上冊』建築学会、1931 においても、マキシム・コリニョンの『パルテノン』から図版が引用されている。
- ⁶¹⁶ 中村順平『建築学技術篇』相模書房、1950、p.41
- ⁶¹⁷ 中村順平、前掲書、1950、p.41
- ⁶¹⁸ 中村順平、前掲書、1950、p.41
- ⁶¹⁹ 中村順平、前掲書、1950、p.41
- ⁶²⁰ 中村順平、前掲書、1950、p.37
- ⁶²¹ 中村順平、前掲書、1950、p.55-56

⁶²² Taine, H. : Philosophie de l'art, Librairie Hachette, 1882。これは、1864年から1869年にかけてエコール・デ・ボザールで行なわれた講義を編集したもの。*Philosophie de l'art* (1865), *Philosophie de l'art en Italie* (1866), *De l'idéal dans l'art* (1867. dédié à Sainte-Beuve), *Philosophie de l'art dans les Pays-Bas* (1868, dédié à Gustave Flaubert), *Philosophie de l'art en Grèce* (1869. dédié au peintre Henri Lehmann)が2巻組みにまとめられた。邦訳は広瀬哲士 (1883-1952, 第一高等学校出身, 東京帝国大学文科大学仏文科卒, 慶應義塾大学仏文科教授を務めた人物) によるものが3つの出版社から刊行されている。テュヌ『芸術哲学上』広瀬哲士訳, 双樹社版 (1924), 大村書店版 (1926), 東京堂版 (1942)

⁶²³ 吉田鋼市『オーギュスト・ペレ』SD選書196, 鹿島出版会, 1985。特にオーギュスト・ペレは, ジュリアン・ガデアルシアン・マーニュから直接的な教義を受けている。

⁶²⁴ Choisy, A. : Histoire de l'architecture, G. Baranger, 1899 (翻訳: オーギュスト・ショワジー『建築史』(上巻・下巻, 桐敷真次郎訳), 中央公論美術出版, 2008)

⁶²⁵ 中村順平・山下寿郎「パリ留学時代の思い出」『建築士』1955年9月号, pp.8-14, 日本建築士会連合会, 1955

⁶²⁶ 中村順平 (檜の会編)「パリ日記其の4」『檜』第12号, 檜の会, pp.21-40, 2002.8, p.33

⁶²⁷ 中村順平, 前掲書, p.33

⁶²⁸ 中村順平は4冊の講義録を当時の価格180フランで購入した。国立国会図書館webサイトに掲載された資料 (国立国会図書館 http://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/theme-honbun-102809.php (最終アクセス: 2015.02.05)) によれば, 1920年の1円は6.32フランに相当し, 当時の戦前基準企業物価指数「1.678」から180フランは当時の通貨価値でいえば約28.48円に相当する。この貨幣価値を2006年の指数698.4との関係で計算すれば, $28.48 \times 416.2 = 11853.376$ 円となり, 2006年の貨幣価値では約12000円となる。

⁶²⁹ Arnaud, E. : Première partie, Cours d'Architecture et de Constructions Civiles, Imprimerie des Arts et Manufactures, n. d., 1920, p.68

⁶³⁰ エコール・サントラルでは建築系講義科目として, 創立当初から「建設土木」Construction Civile が用意されていた。創立の翌年には「建設土木・公共事業」Construction Civile et Travaux Public と講義名称が改称され, 1864年には2つの講義「建設土木」と「公共事業」Travaux Public に分裂した。さらに1872年には「建設土木」は, 第1学年を「建築要素」Element d'architecture 科目として, 第2学年を「建設土木」科目として講義が行なわれていた。1909年よりエドワー・アルノーが第2学年を担当し, 第1学年はアンドレ・モーバン (André-Francois-René Mauban, 1870-1946) が担当した。アンドレ・モーバンは, 1894年エコール・サントラルを卒業し, 1899年にエコール・デ・ボザールを卒業した。(参照: フランス国立美術史研究所 INHA web サイト内 AGORHA 所収公開データベース: Leconte, M.-L. C (éd.): Dictionnaire des élèves architectes de l'Ecole des beaux-arts (1800-1968), INHA, 2009-2015) (<http://agorha.inha.fr/inhaprod/servlet/LoginServlet> (最終アクセス: 2015.05.20))

⁶³¹ Arnaud, E. : Cours d'Architecture et de Constructions Civiles, 5 vols. : Première partie, Deuxième partie Tome I~III, Troisième partie, Imprimerie des Arts et Manufactures, n.d., 1920。なお, 本稿では本書を『建築・建設土木講義』とし, 「Première partie」を「第1巻」, 「Deuxième partie Tome I」を「第2巻」, 「Deuxième partie Tome II」を「第3巻」, 「Deuxième partie Tome III」を「第4巻」, 「Troisième partie」を「第5巻」と表記している。

⁶³² Arnaud, E. : Première partie, Cours d'Architecture et de Constructions Civiles, Imprimerie des Arts et Manufactures, n.d., 1920, p.68

⁶³³ 鈴木博之『建築の世紀末』鹿島出版会, 1977, p.121

⁶³⁴ Cloquet, L. : Traité d'architecture. Eléments de l'architecture, types d'édifices esthétique, composition et pratique

de l'architecture, 5 vols., Ch. Béranger, 1901-1913

⁶³⁵ Oslet, G. (éd) : Cours de Construction, Encyclopédie théorique & pratique des connaissances civiles & militaires
Partie civile, 20 parties, Georges Fauchon, n. d., 1890-1908

⁶³⁶ Magny, A-V. : La construction en béton armé, théorie et pratique, Ch. Béranger, 1914

⁶³⁷ Planat, P. (éd) : Encyclopédie de l'architecture et de la construction, 13 vols., Librairie de la Construction
moderne, 1888-1892

⁶³⁸ 吉田綱市, 前掲書, p.26

⁶³⁹ 吉田綱市, 前掲書, p.26

⁶⁴⁰ 吉田綱市, 前掲書, p.27

⁶⁴¹ 吉田綱市, 前掲書, p.27

⁶⁴² “L'architecture n'a qu'une raison d'être, bien nette, bien visible: construire. Ce mot résume toutes les fonctions
de l'architecte, car conserver, réparer, restaurer, c'est encore construire. Construire est à la fois le but de
l'architecte et le moyen dont il dispose.” (Guadet, J. : Preface, Tome I, Eléments et Théorie de l'architecture,
Librairie de la construction moderne, n.d., 1901-1904, p.7)

⁶⁴³ 鈴木博之, 前掲書, p.21

⁶⁴⁴ Arnaud, E. : Le Nouvel Enseignement de la Construction à l'Ecole Nationale et Supérieure des Beaux-Arts,
L'Architecture, XXXIV, no.11, Librairie des imprimeries réunies, pp.1-3, 1921. エドワー・アルノーの「構造」
科目についてはこの記事を参照し記載している。エドワー・アルノーが表明する「構造」科目に対する改革などへの
想いは、エコール・デ・ボザールにおいて同科目の担当教官が、最も重要なポストとして考えられていた「建築理論」
科目について2番目に重要なポストとして考えられていたこと (Epron, J. P. : Comprendre l'éclectisme, Norma,
1997, p.122) にも由来しているのだろう。

⁶⁴⁵ エドワー・アルノーは「Projections」(Arnaud, E. : op.cit., p.2) という語を用いている。1921年当時を考えると
おそらく「エピスコープ」を用いていたものと思われる。

⁶⁴⁶ エドワー・アルノーは「un bâtiment idéal」(Arnaud, E. : op.cit., p.2) という語を用いている。

⁶⁴⁷ 中村順平「パリ美術院Ⅱ」『新建築』1968年3月号, pp.217-224, 新建築社, 1968, p.222

⁶⁴⁸ Brucculeri, A. : Renewal and tradition in the teaching of building construction in the Ecole des Beaux-Arts of
Paris : the course of Edouard Arnaud, 1920-1934, Proceedings of the Second International Congress on
Construction History, Construction History Society, 3 vols., vol. I, pp. 417-440, 2006

⁶⁴⁹ 中村順平・山下寿郎, 前掲書, p.10

⁶⁵⁰ 中村順平「フランスの建築士」『日本建築士』日本建築士会, pp.1-6, 1928, p.2。この一文は、エドワー・アルノー
の講義録第一巻 (Arnaud, E. : op.cit., n.d., 1920, p.52 の項見出し「L'architecture est un art et une science.」及
び p.53 の「l'architecte donc ne peut être complet que s'il est à la fois artiste et savant.」を参照したものと思われ
る。中村順平は「savant」に対応する訳語として「学者」をあてているが、例えば、仏和辞典のひとつ『プチ・ロワ
イヤル仏和辞典第三版』(旺文社, 2003) によれば、「科学者」という訳語もある。エドワー・アルノーの発言の文脈,
「L'architecture est un art et une science.」を仮に中村順平が訳出している「建築は藝術であり、科学である。」と
するならば、もうひとつの引用部分は「建築家は従って科学者であり藝術家である」という訳語をあてることも可能
だろう。中村順平の著述に見られる仏語から変換された言葉にはこうした訳語の別の解釈などを考慮する必要があり、
当時のフランスにおける理論がどのように曲折されて輸入されていたのかを知る上で、また、今後、中村順平におけ

る近代フランス建築理論の受容を考える上で重要な課題のひとつであろう。

⁶⁵¹ ジュリアン・ガデ講義録第1巻 p.19 の「Avec la science (略)」のくだりや同巻 pp.23-24 の「Tel est, (略)」のくだりにエドワー・アルノーと同様の定義が見られる。中村順平は『建築学総説篇』「第一巻第一章予備研究」p.5において「建築家は芸術家の中にあつて、特に科学が必要である」と述べ、その後、ジュリアン・ガデの言葉として「吾々現代人が吾等の先輩よりも學者であると同様に、若し諸君が吾等よりも以上の學者になつてくれなければ、諸君は時代遅れの人間となつてしまふであろう」という一説を引用している。この引用は前述のジュリアン・ガデの「Avec la science (略)」のくだりに相当する。

⁶⁵² 中村順平「フランスの建築士」『日本建築士』pp. 1-6, 日本建築士会, 1928, p.2

⁶⁵³ 中村順平「バロック・ロココ」『世界建築全集8：西洋 III ルネッサンス バロック ロココ 19世紀前半』pp.52-63, 平凡社, 1962の参考文献リストは、同書 p.104に掲載されている。

⁶⁵⁴ エドワー・アルノーの講義録第1巻 pp.17-96の部分が相当する。なお、エドワー・アルノーの講義録第1巻の本文は全181頁で構成されている。

⁶⁵⁵ それぞれの言葉の使用例については、中村順平の受けた「構造」設計課題「パノラマ」Un panorama (Ecole nationale supérieure des beaux arts: 1er Série –Planches 1 à 30, Les Concours d'architecture de l'année scolaire 1922-1923, Auguste Vincent, 1923, pp2-3)を参照した。

⁶⁵⁶ 横浜高等工業学校建築学科編「課題文」『横浜高等工業学校建築設計競技図集』洪洋社, 1937, p.3

⁶⁵⁷ 横浜高等工業学校建築学科編「序」, 前掲書, p.2

⁶⁵⁸ 中村順平『建築という芸術』彰国社, 1961, p.345

⁶⁵⁹ 中村順平, 前掲書, 1961, p.345

⁶⁶⁰ 中村順平: 前掲書, 1961, p.353

⁶⁶¹ 中村順平: 前掲書, 1961, p.353

⁶⁶² 網戸武夫, 前掲書, 1985, p.337

⁶⁶³ 吉田鋼市「『parti』の意味について—クロケ, ガデ, グロモールの使用例による一考察—」『学術講演梗概集. F, 都市計画, 建築経済・住宅問題, 建築歴史・意匠 1989』pp.903-904, 日本建築学会, 1989, p.904

⁶⁶⁴ 吉田鋼市, 前掲書, p.904

⁶⁶⁵ 吉田鋼市, 前掲書, p.904

⁶⁶⁶ Lucan, J. : Composition, non-composition. Architecture et théories XIXe-XXe siècles, PPUR (Presses polytechniques et universitaires romandes), 2009, p.182

⁶⁶⁷ 吉田鋼市, 前掲書, p.904

⁶⁶⁸ 吉田鋼市, 前掲書, p.904

⁶⁶⁹ 吉田鋼市, 前掲書, p.904

⁶⁷⁰ Lucan, J. : op.cit., p.181

⁶⁷¹ Quatremère de Quincy, A. : Dictionnaire historique d'architecture. Volume II, Le Clere, 1832

⁶⁷² Raynaud, L. : Traité d'architecture (1er partie : Art de bâtir, 1er partie planches, 2eme partie : compositions des édifices, 2eme partie planches), Carilian-Goeury, 1850

⁶⁷³ Raynaud, L. : op.cit., pp.12, 31, 36, 43, 63, 74, 80, 164, 188-189, 199, 228, 246, 257, 263, 268, 271, 274-275, 292, 298-299, 302, 318, 324, 327, 337, 351, 357, 361, 369, 372, 374, 379, 383, 390, 397, 398, 424, 426, 436, 440, 445, 447, 449, 451, 456, 465, 483, 485, 493, 498, 504, 514, 528, 576, 578,

589 など複数の箇所で見える。

⁶⁷⁴ なお、レオンス・レイノーの「パルティ」は、主に2通りあり、前述の使用例のほか、ある方法を「利用する」や「採用する」といったニュアンスでの動詞的な使用例もあった。

⁶⁷⁵ 大西春雄の証言（2014年10月19日神奈川県建築安全協会安協サービスセンター2階）

第4章 中村順平の「建築学」にみる フランス建築理論と教育手法②：「『建築学』草稿」

1. 「『建築学』草稿」

1.1 「『建築学』草稿」に関する既往研究

本章では、中村順平の「建築学」著述のうち、これまでその内容が十分に解明されてこなかった『「建築学」草稿』⁶⁷⁶に着目し、その章構成および草稿の参考文献やその引用箇所を解明し、中村順平の『「建築学」草稿』にみるフランス建築理論と教育手法の受容を考察する。仮に、中村順平がフランスの建築理論の動向に広く目配りしながら、多様な情報を取捨選択し、みずからの教育実践に導入したのならば、この『「建築学」草稿』にその痕跡を確認できるのではないだろうか。

また、もうひとつの問題意識として、前章で指摘したように、中村順平の建築理論や教育手法には、エドワー・アルノーからの影響が考えられる。エドワー・アルノーがフランスの民間技術者を養成する建築機関であるエコール・サントラルの建築教育にも携わっていたことを考慮すれば、中村順平がエドワー・アルノーを通じ、単にエコール・デ・ボザールの教育を学んだだけではなく、エコール・サントラルにおける技術学校の教育をも吸収し、その芸術と技術の学校教育システムを横浜高等工業学校に導入した可能性がある。つまり、中村順平は、エドワー・アルノーを通じてフランスの数多くの建築理論や技術論を吸収し、その吸収した理論を「建築学」科目へ反映した可能性がある。この仮説の検証にあたって、これまであまり語られることのなかった未定稿の『「建築学」草稿』を分析し、その内容にエドワー・アルノーとの関係性などを見出す必要があるだろう。

こうした問題意識にたち、ここでは、『「建築学」草稿』を通して中村順平がみずからの実践に導入したフランス語文献がいかなる建築理論であったのか、中村順平のフランス留学期の経験を考慮しながら検討する。

大阪歴史博物館編『館蔵資料集 5 建築家・中村順平資料』（以下大阪歴博『館蔵資料集』）によれば、『「建築学」草稿』は、中村順平が横浜高等工業学校における講義内容を書き記したものであり、『「建築学」の書籍としてまとめることを念頭に執筆されたもので、現在は、同館が所蔵する⁶⁷⁷。中島久男の研究「日本におけるエコール・デ・ボザール教育の導入について」⁶⁷⁸では、『「建築学」草稿』について触れ、「翻訳原稿 VI」という記載の存在が指摘されている。この表記から、『「建築学」草稿』は、中村順平が取捨選択したフランス語の文献や資料の翻訳のまとまりである可能性がある。しかし、中島久男の研究において、この草稿の存在は示されているが、内容の考察などは行われていない。また、網戸武夫の『情念の幾何学』においても、この草稿の存在に触れ、この草稿が『建築の諸要素と理論』の翻訳原稿であることが指摘されている⁶⁷⁹。なお、この研究においても、中島久男の研究同様に、草稿の具体的な内容は明らかにされていない。

このように、『「建築学」草稿』は、以上の既往研究などにおいて存在について触れられているが、その内容に関する詳細な調査・研究はなされておらず、現状では未知の部分が大きいといえる。したがって、以下では、『「建築学」草稿』の具体的な分析を通じ、中村順平が、20世紀前半の日本建築教育の場にいかなる建築理論を導入したのか明らかにする。また、中村順平が構想した建築理論とフランス建築理論の接点を探り、中村順平が最終的に目指したのは、近代日本の現実に即した日本語による建築学の知と実践の構想の体系化であった可能性を検証する。こうした検証作業を経て、中村順平が1920年代から1940年代にかけて構想し、実践した建築教育を横浜高等工業学校で行われた「建築学」科目の一端を解明する。

1.2 『「建築学」草稿』概要

大阪歴博『館蔵資料集』に掲載された写真「25-1」（図 3.4.1）が示すように、『「建築学」草稿』はノート2冊で構成されている。各ノートは、片面、概ね 307mm×212mm の大きさで、通常の A4 サイズよりも少し大きなものである。以下、この2冊を各「ノート1」、「ノート2」とする。

「ノート1」「ノート2」の2冊のノートは、大阪歴博『館蔵資料集』に掲載された写真「25-1」からもわかるように、各左綴じで、見開き右頁には章立てのタイトルおよび本文が書かれ、左頁には右頁の内容に関する小見出しや補足事項・メモ・詳細説明などが付加されている。ノートは、中村順平の直筆によるもので、使用言語は、主に日本語であるが、翻訳原稿であったため随所にフランス語綴りが残されている。また、草稿中には推敲の痕跡が残されており、不要箇所や修正箇所は概ね黒く塗りつぶされている。

大阪歴博『館蔵資料集』掲載写真「25-2」（図 3.4.2）が示すように、各章の見出しには、右頁1段目に章立て、2段目に表題、3段目に参考文献などの手がかりが記載され、その後本文へと続いている。中村順平は、草稿作成にあたり日本語・仏語文献を参照したと思われるが、各章3段目の記載有無からもわかるように、必ずしも明確に参考文献情報を書き残していない。

筆者は、中村順平の死後の1983年に設立された教え子や弟子による同窓組織「檜の会」で当時副会長をつとめていた横浜高等工業学校建築学科卒業生（1942年9月卒）、吉原正（1922-2014）⁶⁸⁰氏のご厚意により、2002年にノート2冊組の『「建築学」草稿』のコピーを入手し、その後、そのコピーの精査および中村順平が参照した具体的な文献の解明作業を開始した。

調査の対象は、『「建築学」草稿』の各ノート右頁の本文と一部図版を含めた全463頁とし、それらを対象に執筆時に参照したと考えられる参考文献の調査を行なった。その調査期間は、2014年までの12年間で、この間、中村順平が草稿づくりに使用した文献の調査、具体的な該当箇所の割り出しおよび原著と『「建築学」草稿』の相関関係を分析した。なお、ノート作成を開始した具体的な時期は明らかではないが、「ノート2」の最終頁に「以下未稿、昭和11年1月8日」の記述が発見でき、中村順平は1936年まで記述を続けた可能性がある。また、1990年ごろには、網戸武夫が中心となり、林久満を校閲者として『「建築学」草稿』の清書作業が行なわれたことが1990年の市原昌の記録から読み取れる⁶⁸¹。

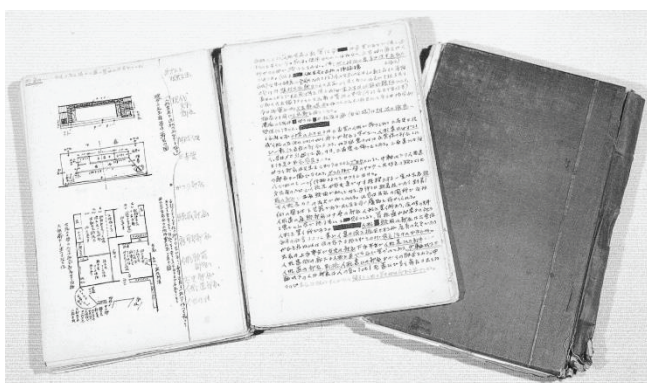


図 3.4.1 『「建築学」草稿
（出典：大阪歴博『館蔵資料集』掲載写真「25-1」）

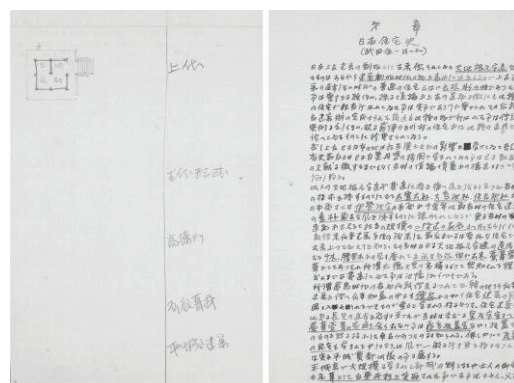


図 3.4.2 『「建築学」草稿
（出典：大阪歴博『館蔵資料集』掲載写真「25-2」）

表 3.4.1 中村順平「建築学」草稿リスト一覧

	番号	表題	推定 言語	手が かり	頁数	手がかり内訳			
						(a) 著者名	(b) 書名	(c) 参照頁	(d) 参照章
ノート 1	1	住宅に於ける建築構成 Eléments de la composition	仏	c, d	12	×	×	p.496	第2冊 第一章
	2	居住, 近代建築以前の居室 Habitation, Le chambre avant l'architecture moderne	仏	×	7	×	×	×	×
		関連図版			1	×	×	×	×
	3	田舎建築 Architecture rurale	仏	×	15	×	×	×	×
	4	建築と公道 (続き) L'architecture et les voies publiques (suite)	仏	×	8	×	×	×	×
	5	ブルガステル橋 Pont de Plougastel	仏	b, c	1	×	◎L'architecte	◎p.11	×
	6	門及塀	日	×	4	×	×	×	×
		門 (図版)			13	×	×	×	×
	7	通路 Les circulations	仏	×	11	×	×	×	×
	8	陸軍建築 Architecture militaire	仏	a	44	Violet-le-Duc	×	×	×
	9	記念碑 Monuments commémoratifs	仏	d	9	×	×	×	第1章 (IV)
	10	公道と建築 L'architecture et les voies publiques	仏	×	9	×	×	×	×
	11	路上の諸建築 (有用建築の部) Edicules divers	仏	b	4	×	edifices publique	×	×
	12	内庭 Les cours	仏	d	14	×	×	×	第11章 (IV)
	13	城郭建築 (日本ノ分)	日	×	12	×	×	×	×
	14	屋根勾配とその形状 Pentes et formes des toitures	仏	a, b	11	M.Oslet et M.Tascombe	couverture	×	×
	15	小屋 Les combles	仏	b	6	×	charpente en bois	×	×
	16	照明 Eclairage	仏	b	6	×	architecture d'aujourd'hui	×	×
	17	古代の工業・ポンペイ Pompei	仏	b	6	×	architecture romaine	×	×
	18	中世の工業 L'industrie au Moyen Âge	仏	×	2	×	×	×	×
	19	工場 Les usines	仏	×	24	×	×	×	×
	20	シネマ・スタジオ Studio de Cinéma	仏	b, c	3	×	●encyclopedie francaise XVI	●p.1646	×
					2	×	●le cinema	●p.25	×
ノート 2	21	通路 Les circulations	仏	d	6	×	×	×	第6章 (III)
	22	火葬場 Crématoire	仏	b, c	6	×	architecture d'aujourd'hui 7	p.64	×
	23	死体焼却炉 Fours crématoires	仏	b	3	×	edifices publique	×	×
	24	軍人墓地 Cimetière militaire	仏	b, c	3	×	architecture d'aujourd'hui no.7	p.77	×
	25	消極防御 Défense passive	仏	b	16	×	architecture d'aujourd'hui no.12	×	×
	26	建物における固有音響現象 Phénomènes sonores particuliers au bâtiment	仏	×	11	×	×	×	×
	27	劇場 Le théâtre	仏	b	6	×	architecture d'aujourd'hui	×	×

	番号	表題	推定言語	手がかり	頁数	手がかり内訳			
						(a) 著者名	(b) 書名	(c) 参照頁	(d) 参照章
ノ ー ト 2	28	国立オペラ劇場の新設備 Le nouvel équipement des théâtres nationaux Opéra	仏	b	3	×	l'architecture	×	×
	29	船Navires	仏	×	11	×	×	×	×
	30	交通	日	a, b	8	島田孝一博士	交通論	×	×
	31	交通（日本）	日	a	4	桶畑湖雪	×	×	×
	32	地上の移動 Locomotion terrestre	仏	×	9	×	×	×	×
	33	陸運史、繁駕 Histoire de la locomotion terrestre, l'attelage	仏	×	6	×	×	×	×
	34	陸運 Véhicules terrestre	仏	b	4	×	archeologie romaine	×	×
	35	筆記・計算機器 Instruments pour écrire et pour calculer	仏	b	3	×	archeologie romaine	×	×
	36	図書館 Les bibliothèques	仏	b	7	×	architecture d'aujourd'hui	×	×
	37	書庫 Le magasin de livres	仏	b, c	5	×	architecture d'aujourd'hui	p.54	×
	38	博物館 Musées	仏	b	8	×	architecture d'aujourd'hui	×	×
	39	バジリク Basiliques	仏	b	4	×	archeologie romaine	×	×
	40	ローマの工営 Casemements des romains	仏	b	3	×	archeologie romaine	×	×
	41	攻城兵器 Sièges des places; machines de guerre	仏	b	5	×	archeologie francais	×	×
	42	公衆浴場	日	b	6	×	東西沐浴史話	×	×
	43	公共祝祭 Fêtes publiques	仏	b	11	×	architecture d'aujourd'hui	×	×
	44	住宅建築 Architecture domestique	仏	×	9	×	×	×	×
	45	個人住戸 Appartements privés	仏	b	3	×	archeologie	×	×
	46	食堂 Triclinium	仏	b	2	×	ville celebre	×	×
	47	日本住宅史	日	a	9	武田伍一	×	×	×
	48	我国上代の顔料	日	a, b	4	村上公郎	仏教美術 4	×	×
						●吉田包春	×	×	×
	49	人形芝居劇場	日	b	9	×	人形芝居と近松上るり	×	×
						●三宅周太郎	●文案の研究	×	×
	50	人形劇場 Le théâtre des marionnettes	仏	b	4	×	archeolo. francais	×	×
	51	サーカス小屋と競馬場 Cirques et Hippodromes	仏	a	3	cloquet	×	×	×
	52	日本劇場史	日	a	10	後藤慶二	×	×	×
	53	鉄造小屋組 Charpente en fer	仏	a, b, c	2	Oslet	○Charpente en fer	×	×
					3	●Cordeau	×	×	×
					11	×	○●decor de métal	●p.20	×
	54	鉄筋コンクリート Béton armé	仏	a, b, c	3	Espittallier	×	×	×
						●Merciot	●Ciment Armé	●p.469	×
	55	基礎 Fondation	仏	a	19	×	×	×	×
備考	<p>・推定言語中の「仏」は「フランス語」を示し、「日」は「日本語」を示す。</p> <p>・上表において、関連情報の記載があるもので、特記なきものは、表題付近または目次に参考文献等の情報の記載がある草稿。</p> <p>●印：文中記載情報 ◎印：文末記載情報 ○印：表題付近に記載はないが、目次記載情報からの想定</p> <p>★印：文中に章立て記述のない参考文献情報記載の表題あり。章立て記述のある表題付近に記載された文献と同様と判断し一連の草稿と判断。</p>								

②参考文献の割り出し

参考文献の割り出しは、『『建築学』草稿』をある文献の抄訳と仮定し、(a)については、その人名表記から該当人物を調査し、(b)については、その書名から該当書籍を調査し、草稿と一致する該当文献と該当箇所の特定制業を行った。手がかりに(a)、(b)以外の記載があるものについては草稿中の固有名詞を、特に仏語と仮定した草稿については本文中の仏単語を手がかりに、また、草稿中の図版番号を手がかりに、特定制業を行った。

日本語文献については、主に国立国会図書館東京本館および東京都立中央図書館において、仏語文献については、主にフランス国立図書館、公共情報図書館、建築・文化遺産都市、フランス国立美術史研究所、パリ装飾芸術美術館、パリおよびその近郊の6つの建築学校、マルヌ＝ラ＝ヴァレ建築学校 *Ecole d'architecture de la ville et des territoires à Marne-la-Vallée*、パリ＝ベルヴィル建築学校 *Ecole nationale supérieure d'architecture de Paris-Belleville*、パリ＝ラ・ヴィレット建築学校 *Ecole nationale supérieure d'architecture de Paris-La Villette*、パリ＝マラケ建築学校 *Ecole nationale supérieure d'architecture de Paris-Malaquais*、パリ＝ヴァル・ド・セーヌ建築学校 *Ecole nationale supérieure d'architecture de Paris-Val de Seine*、ヴェルサイユ建築学校 *Ecole nationale supérieure d'architecture de Versailles*（以上フランス）ならびに日仏会館（東京）の各図書館において、中村順平が教授職にあった1947年以前に出版された書籍や雑誌を中心に蔵書目録などから該当可能性のある文献を検索し、実際に文章を通読することにより、草稿内に引用された文章を発見する作業を行い、適宜日本および外国の古書店蔵書目録などを該当文献の調査に役立てた。

なお、フランス語文献については、調査期間中の2002年10月～2012年6月にかけて、3度、フランス国内において、草稿表題やその内容からフランス語文献の出典解明作業を行なった。また、適宜、想定される文献を古書店等で入手し、調査を進めた。また、2012年7月以降には、それまでに入手した文献は精読を続け、それまでにフランスで複写した草稿該当部のデータについては、適宜各図書館のデジタル・データ等を活用し再確認作業を行なった。なお、再検証作業には、フランス語文献では、主にフランス国立図書館が運営する「ガリカ」Gallica⁶⁸³や建築・文化遺産都市図書館のポータルサイト⁶⁸⁴のほか、「インターネット・アーカイブ」Internet Archive⁶⁸⁵を活用し、また、日本語文献については国立国会図書館の「近代デジタルライブラリー」⁶⁸⁶などのデジタル・データを活用した。

2.2 「ノート1」の参考文献情報解析

ここでは、『「建築学」草稿』の「ノート1」に使用されたと考えられる参考文献の該当箇所の割出し作業の結果をまとめ、それぞれの論考の頁数、日本語・フランス語の区分、章立てとタイトル見出しの記述、参考文献情報に関する記述について以下整理する。

番号1：Eléments de la composition／住宅に於ける建築構成

この草稿の表題は、フランス語と日本語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題付近には、表題上部に「第二冊」、右上に「1《496》」という記述が発見できるが、それ以外参考文献を示す情報の類は発見できない。また、草稿文中における参考文献に関する情報記載の有無を調査した結果、特に、それに類する情報の記載箇所の発見には至らなかった。一方、中村順平の直筆目次の「冊」と「章」の欄に記載された数字から何らかの書物の「2冊1章」を参照した可能性が示唆されている。

「構成要素」に関する記述を示す“Eléments de la Composition”および「住宅における建築構成」という表題とその上の「第二冊」から調査を行うにあたり、ジュリアン・ガデの『建築の諸要素と理論』⁶⁸⁷が、最も該当可能性のある参考文献と仮定した。

その結果、ジュリアン・ガデ講義録第2巻“Tome II”の“Livre VI”の大見出しに、本草稿と同様の表題“Elément de la Composition”を発見した。第2巻は「第6書」Livre VIから始まり「第10書」Livre Xまでが掲載されている。「第6書」のテーマが“Dans l’habitation”となっており、さらに第1章から第9章にかけて居住に関する構成要素に関する内容が記述されている。中村順平の引用箇所を精査した結果、第2巻第1章の概要文がそれに相当した。本草稿は、『建築の諸要素と理論』第2巻pp.3～18の抄訳であることが判明した。なお、前述のように、中村順平が所持した『建築の諸要素と理論』が第3版以降とみられることから、以下『建築の諸要素と理論』の参照頁は、第3版の頁数を記載する。

番号2：Habitation-Le chambre avant l’architecture moderne（居住—近代建築以前の chambre）

この草稿の表題は、フランス語で記されている。また、中村順平の直筆目次では、日本語が混じった表題となっている。フランス語表題から、中村順平はフランス語文献を参照したと推測できる。表題付近に参考文献を指し示す情報の類は記載されておらず、また、草稿文中における参考文献に関する情報記載の有無を調査した結果、特に、それに類する情報の記載箇所の発見には至らなかった。一方、中村順平の直筆目次の「冊」と「章」の欄に記載された数字から何らかの書物の「2冊2章」を参照した可能性が示唆されている。

番号1の続きの論考と考え、前出の『建築の諸要素と理論』第2巻を念頭に調査した結果、第2巻第6書第2章の表題が、“Habitation le chambre avant l’architecture moderne”であり、本草稿表題と一致した。これは、居住空間における「室」に関する記述で、執筆当時の建築以前の「室」について分析したものである。中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、『建築の諸要素と理論』第2巻pp.19～35の抄訳であることが判明した。

番号3：Architecture Rurale／田舎建築

この草稿の表題は、フランス語と日本語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題付近に参考文献を指し示す情報の類は記載されておらず、また、草稿文中における参考文献に関する情報記載の有無を調査した結果、特に、それに類する情報の記載箇所の発見には至らなかった。一方、中村順平の直筆目次の「冊」と「章」の欄に記載された数字から何らかの書物の「4冊2章」を参照した可能性が示唆されている。

前出の『建築の諸要素と理論』の可能性を念頭に調査した結果、第4巻“Addition”第14書 Livre XIV 第2章の表題が、“Architecture Rurale”であった。中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、『建築の諸要素と理論』第4巻 pp.119～148の抄訳であることが判明した。

なお、文章のない1頁分の差込図版が、番号3と番号4の草稿間に確認できた。その図版に記載されたサインから横浜高等工業学校で助教授をつとめた鈴木秀一によるものであることがわかる。番号3または番号4のための図版と考えられるため、精査した結果、図版は番号3と関係の深いものであったで、第4巻の引用箇所における掲載図版が鈴木秀一によってトレースされたのだろう。図版に記載された制作年月日は「1935年5月30日」で、図版は「田舎建築」のテーマに沿って描かれた平面図や立面図、断面図などであった。

番号4：L'architecture et les Voie Publiques／建築と公道（続き）

この草稿の表題は、フランス語と日本語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題付近に参考文献を指し示す情報の類の記載は確認できない。また、草稿文中における参考文献に関する情報記載の有無を調査した結果、特に、それに類する情報の記載箇所の発見には至らなかった。一方、中村順平の直筆目次の「冊」と「章」の欄に記載された数字から何らかの書物の「4冊4章」を参照した可能性が示唆されている。

前出の『建築の諸要素と理論』の可能性を念頭に調査した結果、第4巻第14書第3章・第4章の表題と一致した。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、『建築の諸要素と理論』第4巻第14書第4章 pp.71～87の抄訳であることが判明した。

番号5：Pont de Plougastel

この草稿の表題は、フランス語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。この草稿では、章立て記述はみられないが、中村順平の直筆目次の追加項目に挙げられていたため、1章としてカウントしている。表題付近に参考文献を指し示す情報の類の記載は確認できない、草稿文末に出典情報の記載が確認できた。

その記載内容から精査した結果、中村順平の記載の通り、フランスの建築系雑誌“L'Architecte”の1931年2月号 p.11の部分の抄訳であることが判明した。

番号6：門及塀

この草稿の表題は、日本語で記されている。草稿文中において、フランス語単語等が発見されなかったことから、日本語文献を参照したと推測できる。なお、中村順平は「第5章」と記述しているが、前草稿“Pont de Plougastel”の後の追加から草稿であることから、第6番目とした。4頁に亘り

語句の解説文が抽出されているが、参考文献を指し示す情報の類の記載は確認できない。そのため、中村順平が使用したと思われる書物などを推測し、調査した。

その結果、江戸期の国学者・沢田名垂によって記された『家屋雑考』からの引用であることが判明した。中村順平は、まず、門について「家屋雑考巻二」の「中門」「屏中門」，「家屋雑考巻三」の「門戸」「總門」「韓門」「冠木門」「四足門」「楼門」「土門」「上土門」「平門」「瓦門」「門戸具」，家屋雑考巻四の「薬医門」「埦門」「櫓門」「木戸門」「簀戸門」「鉄門」「鍬石門」を取り上げ、その後「家屋雑考巻三」の「垣牆」「板垣」「籬」「組垣」「塀」「立蔀」の説明箇所を抜粋していた。

また、文末には図版が添付されていたが、草稿本文同様、図版出典先の記載はない。これらの図版を『家屋雑考』のほか『日本建築』⁶⁸⁸など様々な文献を調査した結果、出典元は、武田五一『住宅建築要義』および中村達太郎『日本建築辞彙』であることが判明した。

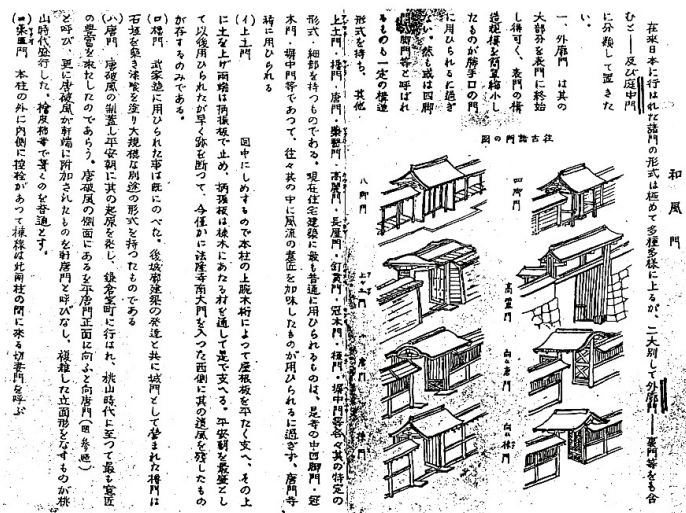


図 3.4.5 『「建築学」草稿』より（一部抜粋）
（一部抜粋／出典：個人蔵（檜の会寄贈））

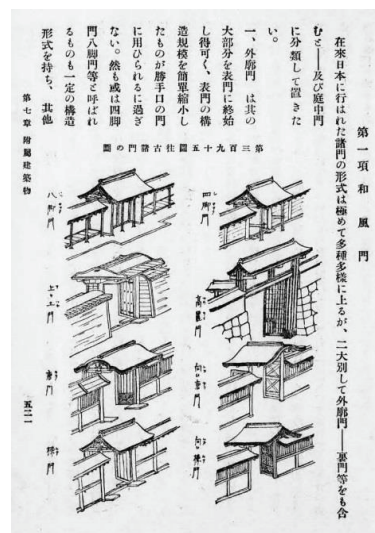


図 3.4.6 『住宅建築要義』該当図版
（出典：『住宅建築要義』）

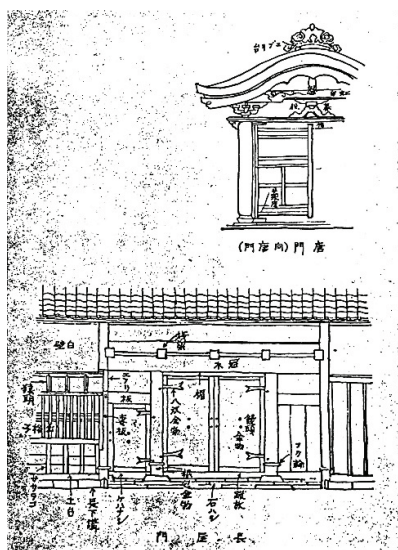


図 3.4.7 『「建築学」草稿』より
（一部抜粋／出典：個人蔵（檜の会寄贈））

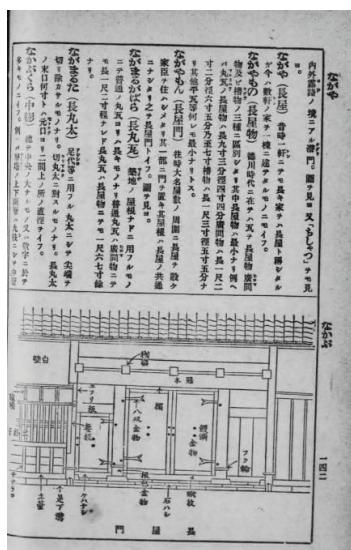


図 3.4.8 「長屋門」図版
（出典：『日本建築語彙』）

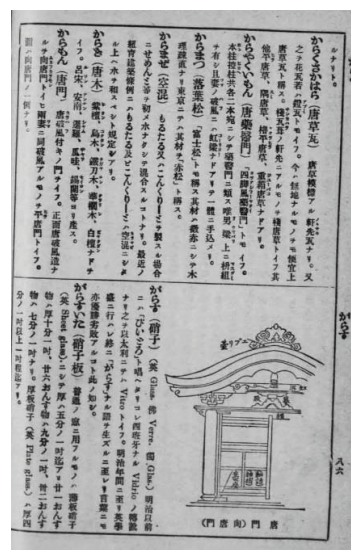


図 3.4.9 「唐門」図版
（出典：『日本建築語彙』）

番号7：Les Circulations／通路

この草稿の表題は、フランス語と日本語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題付近に参考文献を指し示す情報の類の記載は確認できない。また、草稿文中における参考文献に関する情報記載の有無を調査した結果、特に、それに類する情報の記載箇所の発見には至らなかった。一方、中村順平の直筆目次の「冊」と「章」の欄に記載された数字から何らかの書物の「4冊6章」を参照した可能性が示唆されている。

前出の『建築の諸要素と理論』を念頭に調査した結果、第4巻第15書 *Livre XV* 第6章の表題と一致した。中村順平は「第6章」としているが、この記述は『建築の諸要素と理論』の第4巻の第6章を指していたのだろう。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、『建築の諸要素と理論』第4巻 pp.293～317の抄訳であることが判明した。

番号8：Architecture Militaire／陸軍建築

この草稿の表題は、フランス語と日本語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題付近に人名と思われる「Violet-le-Duc ヨリ」という表記が確認できる。中村順平は、ウジェーヌ・エマニュエル・ヴィオレ＝ル＝デューク（Eugène Emmanuel Viollet-le-Duc, 1814-1879）の書物を参照したのだろう。なお、中村順平の「ヴィオレ」の綴りは、“Violet”となっているが、正しくは“Viollet”である。ヴィオレ＝ル＝デュークの著書の中から“Architecture Militaire”（陸軍建築）と同様の表題の調査を行った。

その結果、10巻組からなる『フランス11～16世紀建築解説事典』⁶⁸⁹第1巻に発見した。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、第1巻の「陸軍建築」項の pp.327～452の抄訳であることが判明した。

番号9：Monuments Commémoratifs／記念碑

この草稿の表題は、フランス語と日本語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題付近に参考文献を指し示す情報として、表題上部の「第一章（III）」という表記に着目した。一方、中村順平の直筆目次の「冊」と「章」の欄に記載された数字から何らかの書物の「4冊1章」を参照した可能性が示唆されている。

前出の『建築の諸要素と理論』を念頭に調査した結果、第4巻第13書 *Livre XIII* 第1章の表題と一致した。表題上部の表記「（III）」は、おそらく『建築の諸要素と理論』第4巻をさしているのだろう。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、『建築の諸要素と理論』第4巻 pp.3～31の抄訳であることが判明した。

番号10：L'architecture et les Voie publiques／公道と建築

この草稿の表題は、フランス語と日本語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。また、番号4で取り上げた草稿とほぼ同様の表題であることから、前出の『建築の諸要素と理論』を念頭に調査した。なお、中村順平の直筆目次の「冊」と「章」の欄に記載された数字から何らかの書物の「4冊3章」を参照した可能性が示唆されている。また、番号4の草稿と同様の表題であることに着目し、『建築の諸要素と理論』第4巻第14書第3章と推定

し調査した。

その結果、第4巻第14書第3章の表題と一致した。さらに中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、『建築の諸要素と理論』第4巻 pp.49～70 の抄訳であることが判明した。

番号 11：Edicules Divers／路上の諸建築（有用建築の部）

この草稿の表題は、フランス語と日本語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題下部の括弧書きの表記「《Edifices publique》ニ依る」から『公共施設』Edifices publique を参考文献名と想定し調査した。

その結果、エミル・ギュイヨ（Emile Guillot）の著書『都市と農村の公共施設』⁶⁹⁰の第8章の表題に草稿表題と同様の表記を発見した。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、『都市と農村の公共施設』第8章「公衆便所」と「井戸」の項目が記述された pp.760～776 の抄訳であることが判明した。

番号 12：Les Cours／内庭

この草稿の表題は、フランス語と日本語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題上部の「第十一章（III）」という表記から、番号9で指摘したように、前出の『建築の諸要素と理論』第4巻を念頭に調査した。なお、中村順平の直筆目次の「冊」と「章」の欄に記載された数字から何らかの書物の「4冊11章」を参照した可能性が示唆されている。

その結果、第4巻第15書第11章の表題と一致した。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、pp.407～441 の抄訳であることが判明した。

番号 13：城郭建築

この草稿の表題は、日本語で記されている。草稿文中において、フランス語単語等が発見されなかったことから、日本語文献を参照したと推測できる。中村順平は日本の城郭について11頁にわたる文章を記述している。表題付近および草稿本文中において、具体的な参考文献等を指し示す情報の類の記載はない。

城郭建築に関する書籍を中心に調査した結果、東京帝国大学史学科出身で東北帝国大学法文学部教授を務めた大類伸（1884-1975）の著書『城郭之研究』⁶⁹¹が該当した。中村順平の文章の冒頭箇所と『城郭之研究』の「一 序説」の「研究の範囲」の冒頭箇所に一致が見られ、中村順平は主に「九 城郭の美観」までを参照している。また、本草稿5頁目記載の4種の天守閣スケッチとその説明は、大類伸の著書の天守閣に関する章に挿入された図版とその説明箇所に一致している。

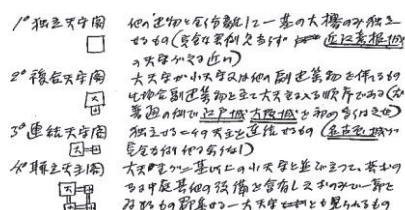


図 3.4.10 『「建築学」草稿』内スケッチ
（出典：個人蔵（檜の会寄贈））

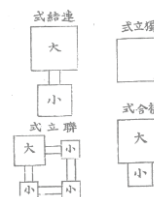


図 3.4.11 『城郭之研究』該当箇所一部抜粋
（出典：『城郭之研究』）

番号 14 : Pentes et formes des Toiture／屋根勾配とその形状

この草稿の表題は、フランス語と日本語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題右には、著者および参考文献名とみられる「(M.Oslet et M. Lascombe 氏 Couverture による)」という表記が確認できる。表題および著者名・参考文献名情報から調査した。

その結果、エコール・サントラル教員を務めたエコール・サントラル出身の技術者ギュスターヴ・オスレ (Gustave Oslet, 1852-1936) 監修の「構造講義」講義録シリーズのうち、ギュスターヴ・オスレと A・ラコンブ A. Lascombe が担当した第 15 部第 1 巻『屋根・配管工事論 1 巻 屋根』⁶⁹²の表題との一致がみられた。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、『屋根・配管工事論 1 巻 屋根』の p.49 よりはじまる「第 3 章 屋根勾配とその形状」III. —Pentes et formes des toitures. の抄訳であることが判明した。

番号 15 : Les Combres／小屋

この草稿の表題は、フランス語と日本語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題右には、参考文献名とみられる「《Charpente en bois ニヨル》」という表記が確認できる。表題および著書名情報から調査した。

その結果、番号 14 と同様のギュスターヴ・オスレ監修の「構造講義」講義録シリーズのうち、ギュスターヴ・オスレが担当した第 4 部第 1 巻『木造小屋組論』⁶⁹³の表題と一致がみられた。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、『木造小屋組論』pp.286～293 の抄訳であることが判明した。

番号 16 : Eclairage

この草稿の表題は、フランス語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題右には、参考文献名とみられる「(architecture d'aujourd'hui)」という表記が確認できる。表題“Eclairage” (照明) および参考文献情報から調査した。参考文献名と思われる情報をフランス建築系雑誌と判断し、雑誌バックナンバーを精査した結果、本草稿は、雑誌 *L'Architecture d'Aujourd'hui*, 1936 年第 7 号 pp.38～47 の抄訳であることが判明した。なお、中村順平の参考文献表記中の“d'aujourd'hui”の綴りは、正しくは、“d'aujourd'hui”である。以下、別草稿においても同様の誤りが散見される。

番号 17 : 古代の工業

この草稿の表題は、日本語で記されている。表題下部に小見出しとして「Pompei」(ポンペイ) という表記と参考文献名と思われる「(architecture romaine ヨリ)」という表記が確認できる。これらの表記と草稿文中のフランス語表記から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。

文献名とみられる“architecture romaine”を手がかりに調査した結果、ルネ・カニャ (René Cagnat, 1852-1937) と文学博士ヴィクトール・シャポ (Victor Chapot, 1873-1954) による 2 巻組みの『ローマ考古学教本』⁶⁹⁴であることが判明した。なお、書籍名の手がかりとして中村順平が残した“architecture”という部分は“archéologie”の誤りであった。さらに、中村順平の引用箇所を精

査した結果、本草稿は、『ローマ考古学教本』第1巻⁶⁹⁵pp.242～244の抄訳であることが判明した。

番号18：「中世の工業」L'industrie au Moyen Âge

番号19：「工場」Les usine

この2つの草稿表題は、フランス語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題付近および草稿文中に参考文献等を示す情報は記載されていない。これまで調査したが、未だに一致する参考文献の発見には至っていない⁶⁹⁶。

番号20：Studio de Cinéma

この草稿の表題は、フランス語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。この草稿は、フランス語が入り交じる5頁の論考で、表題下付近および文章末尾に参考文献情報の記載はないが、文中3頁末尾付近に前半部と後半部で使用した参考文献名が記載され、前半部は“Encyclopedie Francaise XVI p.1646-5”，後半部は“Le Cinéma”p.25が参照されたことがわかるが、具体的な著者名等は不明である。

これらの情報から調査した結果、前半部のみ判明した。前半約3頁にわたる論考は、ルシアン・フェーヴル監修の「ランシクロペディ・フランセーズ」⁶⁹⁷の百科事典シリーズのポール・アブラハム監修『第16巻 現代社会の芸術と文学：素材と技術』⁶⁹⁸が参照された。この著書の頁表記は特殊で、中村順平の参照箇所は“Section B- Les techniques du temps”の第2章“Chapitre II – Le mouvement”の“4.-La technique du cinéma”から“L'aménagement des studios”のpp.16.46-6～7の抄訳であることが判明した。なお、後半部2頁分の参考文献は、現在のところ不明である。

番号21：Les Eglise Voûtées

この草稿の表題は、フランス語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。草稿冒頭の「吾人が」という表記と表題左に記載された「第六章(Ⅲ)」を手がかりに、これまでの分析を踏まえ、『建築の諸要素と理論』を念頭に調査した。

その結果、第3巻 Tome III第11書 Livre XI第6章 Chapitre VIから第15章 Chapitre XVにかけて、同様の表題が確認された。教会建築におけるヴォールト教会 Les Eglise Voûtées に関する論考である。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、第3巻 pp.225～235の抄訳であることが判明した。

以上、番号18および19、ならびに番号20の一部を除き、全ての参考文献が判明した。

2.3 「ノート2」の参考文献情報解析

ここでは、『『建築学』草稿』の「ノート2」に使用されたと考えられる参考文献の該当箇所の割り出し作業の結果をまとめ、それぞれの論考の頁数、日本語・フランス語の区分、章立てとタイトル見出しの記述、参考文献情報に関する記述について以下整理する。

番号22 : Crématoires

この草稿の表題は、フランス語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題下部には「(arch.d'aujourd'hui7のp.64ニ依ル)」という参考文献名および参照頁に関する情報が記載されている。

番号16同様に、“L'Architecture d'Aujourd'hui”誌バックナンバーを精査した結果、1938年第7号掲載の「火葬場」Crématoires特集を発見した。さらに中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、同誌 pp.64～65 掲載のマックス・ブリューメンタル (Max Blumenthal, 1911-1990) の記事部分および pp.66～73 にかけての事例解説部分の抄訳であることが判明した。

番号23 : Fours Crématoires

この草稿の表題は、フランス語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題下部には参考文献名と思われる番号11の参考文献名表記と同様の「(Edifice Publiquesニ依ル)」という記述が発見できる。

『都市と農村の公共施設』を調査した結果、第7章第8節に同様の表題「死体焼却炉」Fours Crématoiresを発見した。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、同書 pp.752～757 の抄訳であることが判明した。なお、原著では「死体焼却炉」は p.759 まで続いているが、本草稿は、日本の火葬事情の部分で終了している。

番号24 : Cimetière Militaire

この草稿の表題は、フランス語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題下部の「(arch. d'aujourd'huiニ依ル No7.p77)」という記述から番号22と同様の建築系雑誌“L'Architecture d'Aujourd'hui”誌のある年の No7.p77 と推定できる。

バックナンバーから同様の表題の有無を確認した結果、同誌1938年第7号に該当可能性のある記事を発見した。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、同誌1938年第7号 p.77 に掲載されたマックス・ブリューメンタルの「軍人墓地」Cimetière Militaire 記事の部分と pp.78～80 にかけて掲載された「軍人墓地」事例解説部分の抄訳であることが判明した。なお、本草稿の参考文献は、番号22のものと同様である。

番号25 : Défense passive

この草稿の表題は、フランス語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。「(arch. d'aujourd'hui No12ヨリ)」という記述から番号24と同様の建築系雑誌“L'Architecture d'Aujourd'hui”のある年の No12 と推定できる。

バックナンバーから同様の表題の有無を確認した結果、同誌 1937 年第 12 号に該当可能性のある「消極防御」Défense passive 記事を発見した。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、同誌 1937 年第 12 号掲載の「消極防御」に関する pp.2-3 の記事と pp.6～8 までの記事、pp.11～12 の記事の抄訳であることが判明した。

番号 26 : Phénomènes Sonores particulière au Bâtiments

この草稿の表題は、フランス語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題「建物における固有音響現象」Phenomenes Sonores particuliere au Batiments や、本草稿の前後の関係からフランスの建築系雑誌 “L’Architecture d’Aujourd’hui” 誌からの可能性が高いと考えたが一致箇所は、現在まで発見には至っていない。

番号 27 : Le Théâtre

この草稿の表題は、フランス語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。「(arch. d’haujourd’hui ニヨル)」という記述から前出の “L’Architecture d’Aujourd’hui” からの引用と考えた。

バックナンバーから調査した結果、同誌 1938 年第 9 号に該当可能性のある「劇場」Le Théâtre に関する記事を発見した。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、同誌 1938 年第 9 号掲載のフランスの近代建築を代表する建築家の一人、オーギュスト・ペレ (Auguste Perret, 1874-1954) による「劇場」に関する記事 pp.2～9 の抄訳であることが判明した。なお、オーギュスト・ペレ設計のシャンゼリゼ劇場 Théâtre des Champs-Élysées に関する記事は、p.6 から始まるが、中村順平はその冒頭のみを翻訳した。それ以降 p.8 まで翻訳せず、その後 pp.8～9 の翻訳を加えている。

番号 28 : Le Nouvel Equipement des Théâtres Nationaux Opéra

この草稿の表題は、フランス語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題下には、参考文献名と思われる記述が「(L’Architecture 1939 juin ニ依ル)」確認できる。フランスの建築系雑誌 “L’Architecture” 誌が参照されたのだろう。

バックナンバーから同様の表題の有無を調査した結果、同誌 1939 年 6 月号に該当可能性のある記事を発見した。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、同誌 pp.197～212 の「国立オペラ劇場の新設備」の記事のルイ・オートクールによる記述部分を中心に抄訳し、記事内の写真とともに説明された設備機器の説明部分は省略されている。

番号 29 : Navires

この草稿の表題は、フランス語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題付近および草稿文中に参考文献を示す情報は記載されておらず、漠然とした表題 “Navires” (船) から該当可能性のある文献調査を行った。

その結果、クロード・ファレール (Claude Farrère, 1876-1957) の著書『船』⁶⁹⁹の部分抄訳であることが判明した。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、同著の pp.7～36 の抄訳であることが判明した。

番号 30 : 交通

この草稿の表題は、日本語で記されている。「交通」と題した8頁にわたる草稿である。表題下の参考文献情報と思われる「(島田孝一博士の交通論に依る)」という記述から日本語文献の参照が考えられる。著者名および参考文献名と思われるこの情報から調査した結果、早稲田大学第6代総長、日本交通学会初代会長を務めた商学博士の島田孝一(1893-1987)の著書『交通論』⁷⁰⁰からの抜粋であることが判明した。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿では、『交通論』の「第一章 交通の概念」および「第四章 交通及交通機関の発達に関する史的考察」部分が主に参照されていることが判明した。

番号 31 : 交通 (日本)

この草稿の表題は、日本語で記されている。中村順平は「30」の論考に続き日本の交通に関する4頁にわたる文章を記述している。表題および表題下記載情報「樋畑湖雪氏に依る」から、該当文献の調査を行った。

その結果、通信博物館設立に尽力した樋畑湖雪(1858-1943)の著書『日本交通史話』⁷⁰¹からの抜粋であることが判明した。なお、中村順平の著者名の「湖雪」は「雪湖」の誤りで中村順平が記載した著者の名前の漢字の順序が前後逆に記載されていた。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿では、『日本交通史話』における「大化の新政」の章から「明治時代」の章の「鉄道」の項に至るまでを適宜抜粋し、まとめていることが判明した。

番号 32 : Locomotion terrestre／地上の移動

この草稿の表題は、フランス語および日本語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題付近および草稿文中に参考文献を示す情報の記載はなく、表題から該当文献を調査した。

その結果、フランスの週刊誌“L'Illustration”誌の別冊、『陸運史・移動・牛車・馬車・自転車・機械式移動・自動車』⁷⁰²(1936)であることが判明した。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、序文V頁からXVI頁の抄訳であることが判明した。

番号 33 : Histoire de la locomotion terrestre, l'attelage／繋駕

この草稿の表題は、フランス語および日本語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題付近および草稿文中に参考文献を示す情報の記載はない。しかし、表題から番号32と関連の深い内容と判断し、番号32で明らかになった『陸運史・移動・牛車・馬車・自転車・機械式移動・自動車』を中心に該当箇所を調査した。

その結果、本草稿は、番号32と同様の文献が参照され、p.33からはじまる“le portage a deux par litière ou par chaise”の節、p.41からはじまる“le glissement par traineau“, p.43からはじまる“La roue“, p.47からはじまる“la traction attelée“, それぞれの抄訳であることが判明した。

番号 34 : Véhicules Terrestres

この草稿の表題は、フランス語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考

文献を参照したと推測できる。表題下に記載された参考文献名と思われる「(archeologie romaine ヨリ)」という記述から番号17の参考文献『ローマ考古学教本』と仮定し、該当箇所を調査した。

その結果、『ローマ考古学教本』第2巻 Livre III 第6章の表題に一致した。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、同書 pp.285～296 の抄訳であることが判明した。

番号 35 : Instruments pour écrire et pour calculer

この草稿の表題は、フランス語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題下に記載された参考文献名と思われる「(archeologie romaine ニ依ル)」という記述から番号34と同様の参考文献が使用された可能性がある。

『ローマ考古学教本』を中心に調査した結果、第2巻 Livre III 第15章の表題に一致箇所を発見した。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、第15章の途中“La tablette et l'écriture à la pointe sèche”と“Instruments calcules”に関する論考が掲載された pp.508～512 の抄訳であることが判明した。なお、同書第15章は p.502 から始まっている。

番号 36 : Les Bibliothèques

この草稿の表題は、フランス語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。「(architecture d'aujourd'hui ニヨル)」という記述から前出の“L'Architecture d'Aujourd'hui”からの引用と考え、バックナンバーを調査した。

その結果、同誌1938年第3号に掲載された「図書館」Les Bibliothèquesの記事に同様の表題が確認できた。さらに、中村順平の引用箇所の分析を行った結果、中村順平は同誌 p.4, p.6 を部分的に、pp.9-10 にかけては全体的な抄訳であることが判明した。

番号 37 : Le Magasin de Livres

この草稿の表題は、フランス語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。「(Archi. d'Aujourd'hui p.54)」という記述から前出の“L'Architecture d'Aujourd'hui”からの引用と考え、バックナンバーを調査した。

その結果、同誌1938年第3号に掲載された「書庫」Le Magasin de Livresの記事に同様の表題が確認できた。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、同誌1938年第3号 pp.54～57 の抄訳であることが判明した。

番号 38 : Musées

この草稿の表題は、フランス語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。「(archit,d'aujourd'hui ニヨル)」という記述から前出の“L'Architecture d'Aujourd'hui”からの引用と考え、バックナンバーを調査した。

その結果、同誌1938年第6号に掲載された「博物館」Muséesの記事に同様の表題が確認できた。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、同誌1938年第6号 p.3, pp.5～10, pp.21～25 の抄訳であることが判明した。

番号 39 : Basiliques

この草稿の表題は、フランス語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題下に記載された参考文献名と思われる「(archeologie romaine ヨリ)」という記述から番号 35 と同様の参考文献が使用されたとみられる。

『ローマ考古学教本』を中心に調査し、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、第1巻 p.128 「バジリク」 Basiliques の抄訳であることが判明した。

番号 40 : Casernements des romains

この草稿の表題は、フランス語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題下に記載された参考文献名と思われる「(archeolog. Romaine ニ依ル)」という記述から番号 39 と同様の参考文献が使用されたとみられる。

『ローマ考古学教本』を中心に調査し、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、第1巻「ローマの工営」 Casernements des romains, pp.261 の抄訳であることが判明した。

番号 41 : Sièges des places ; machine de guerre

この草稿の表題は、フランス語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題下に記載された参考文献名と考えられる「archéologie française」という記述から該当可能性のある参考文献を調査した。

その結果、『フランス考古学教本』⁷⁰³に同様の表題が確認できた。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、同書「攻城兵器」 Sièges des places ; machine de guerre, p.427 (初版) または p.470 (第2版) の抄訳であることが判明した。

番号 42 : 公衆浴場

この草稿の表題は、日本語で記されている。中村順平は公衆浴場に関する6頁にわたる文章を記述している。表題および表題下記載の参考文献情報と思われる「(東西沐浴史話ニヨル)」という記述から、該当文献の調査を行った。

その結果、慶應義塾大学医学部教授を務めた医学博士藤浪剛一(1880-1942)の著書『東西沐浴史話』⁷⁰⁴からの抜粋であることが判明した。『東西沐浴史話』は題名にあるように東洋と西洋に沐浴の歴史が綴られている。中村順平はこのうち日本の沐浴の歴史について奈良時代の項を適宜抜粋し、まとめていることが判明した。

番号 43 : Fêtes publiques

この草稿の表題は、フランス語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題下の「(Arch,d'Aujourd'hui ニヨル)」という記述から前出の“L'Architecture d'Aujourd'hui”からの引用と考え、バックナンバーを調査した。

その結果、同誌1938年第9号に掲載された「公共祝祭」 Fêtes publiques の記事に同様の表題が確認できた。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、同誌1938年第9号の p.79 の抄訳であることが判明した。

また、この草稿途中には、章立ての記述はないが、別の表題が記載されている。表題右に「(Archi,d'Aujourd'hui ヨリ)」という記述が発見できるため、「公共祝祭」に連続する論考と考え、同誌1938年第9号を調査した。その結果、同書p.89の「祝祭要素と装飾」*Elément et décors de fêtes*の抄訳であることが判明し、「公共祝祭」に連続する論考であることが確認できた。

番号44 : *Architecture domestique*

この草稿の表題は、フランス語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題付近および草稿文中に参考文献を示す情報の記載はないが、中村順平の直筆目次の出典欄の「*archeologie*」との記載から、前出の2書『ローマ考古学教本』または『フランス考古学教本』を中心に調査した。

その結果、『フランス考古学教本』に同様の表題を発見した。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、同書「住宅建築」*Architecture domestique*に関する論考が掲載されたp.59（初版）またはp.53（第2版）の抄訳であることが判明した。

番号45 : *Appartements privés*

この草稿の表題は、フランス語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題下の「(*archeologie* ヨリ)」の記載、および、番号44からの連続性を考慮し、『フランス考古学教本』を念頭に調査した。

その結果、同書に同様の表題を発見した。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、同書pp.79～81の抄訳であることが判明した。

番号46 : *Triclinium*

この草稿の表題は、フランス語および日本語が並列されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題下の「(*Ville Celebre* ヨリ)」という記述から該当可能性のある文献を調査した。

その結果、ヘンリー・テドナ (Henry Thedenat, 1844-1916) 著『ポンペイ 個人生活史 (有名都市)』⁷⁰⁵に「食堂」*Triclinium*と同様の表題を発見した。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、同書pp.73～76の抄訳であることが判明した。

番号47 : 日本住宅史

この草稿の表題は、日本語で記されている。この草稿は、日本の住宅史に関する9頁にわたる論考である。表題下の「(武田伍一氏ニヨル)」という表記から、日本語文献の参照と推定した。

調査の結果、東京帝国大学建築学科出身で京都帝国大学建築学科教授を務めた武田五一 (1872-1938) の著書『住宅建築要義』⁷⁰⁶からの抜粋であることが判明した。

さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、同書「第一章住宅建築史 第1節日本住宅史」の「第一項上古の住宅建築」から「第八項明治時代の住宅建築」までの住宅建築に関する部分を要約しまとめていることが判明した。

番号 48：我国上代の顔料

この草稿の表題は、日本語で記されている。この草稿は、顔料に関する4頁にわたる論考である。表題下の「(仏教美術4の村上公郎氏による)」という表記から、日本語文献の参照と推定し、該当可能性のある文献を調査した。

その結果、雑誌『仏教美術第四冊』⁷⁰⁷からの抜粋であることが判明した。なお、中村順平の著者名記述における苗字漢字部分は前後逆で、正しくは「上村六郎」である。雑誌『仏教美術第四冊』に掲載された京都帝国大学出身の理学博士上村六郎(1894-1991)の論考「我国上代に使用されたる顔料の研究」が参照されている。

また、表題部にはないが他の文献を参照したと思われる記述が文中に見られる。本草稿3頁目の中段部の中央から、「吉田包春」という人物名および密陀絵に関する論考を参照したことがわかる。この「吉田包春」と「密陀絵」を手がかりに調査した結果、本草稿では、上村六郎を参照した同雑誌の別の号、『仏教美術第八冊』掲載の工芸家吉田包春(1878-1951)による記事「正倉院の密陀絵に就いて」⁷⁰⁸が参照されている。

さらに最終頁では、上村六郎や吉田包春の論考ではないものが参照されている。醍醐寺および平等院鳳凰堂に関する短い論考で、雑誌『仏教美術』に多数論考が掲載された東京帝国大学建築学科出身で京都帝国大学建築学科教授を務めた天沼俊一(1876-1947)の『日本建築史要』⁷⁰⁹との類似性も見られるが、飛鳥園発行の『東洋美術』別冊の特集『醍醐寺の研究』の中の2論文が参照されている。最終頁上段では、春山武松(1885-1962)「醍醐寺五重塔板絵に就いて」⁷¹⁰、下段では、明石染人(1887-1959)「醍醐寺五重塔の文様に就いて」⁷¹¹がそれぞれ参照されている。

番号 49：人形芝居劇場

この草稿の表題は、日本語で記されている。この草稿は、人形芝居劇場に関する9頁にわたる論考である。表題下の「(人形芝居と近松上りに依る)」という表記から、日本語文献の参照と推定し、該当可能性のある文献を調査した。

その結果、日本大学芸術学部演劇科教授を務めた文学博士内海繁津太郎(1906-1966)の著書『人形芝居と近松の浄瑠璃』⁷¹²からの抜粋であることが判明した。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、「第一編 人形浄瑠璃の本質と歴史的考察」「第二章 人形芝居の起原」「第二節 職業的人形芝居の起原」の第一項「一、傀儡子の人形芝居」が参照されている。なお、最終頁ではさらに別文献を使用した痕跡が残されており、演劇評論家三宅周太郎(1892-1967)の著書『文楽之研究』⁷¹³が参照されている。

番号 50：Le théâtre des marionnettes

この草稿の表題は、フランス語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題下の「(Archeolo. français による)」の記載から、『フランス考古学教本』を念頭に調査した。

その結果、同書第2版に「人形劇場」Le théâtre des marionnettes に関する記述を発見した。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、同書第2版 p.432 の抄訳であることが判明した。さらに、この翻訳部分から中村順平が使用した『フランス考古学教本』は第2版であることが判明し

た。

番号 51 : Cirques et hippodromes

この草稿の表題は、フランス語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題および表題下の参考文献著者情報と思われる「(Cloquet による)」という記述から調査した。

その結果、ルイ・クロケ (Louis Cloquet, 1849-1920) の5巻組みの著書『建築論』⁷¹⁴第4巻に「サーカス小屋と競馬場」Cirques et hippodromes に関する記述を発見した。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、同書第4巻 pp.607～608 の抄訳であることが判明した。

番号 52 : 日本劇場史

この草稿の表題は、日本語で記されている。この草稿は、日本の劇場史に関する10頁にわたる論考である。表題下の「(後藤慶二氏による)」という表記から、日本語文献の参照と推定し、該当可能性のある文献を調査した。

その結果、結果、東京帝国大学建築学科出身で司法省技師を務めた後藤慶二 (1883-1919) の著書『日本劇場史：附・西洋劇場の話』⁷¹⁵からの抜粋であることが判明した。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、『日本劇場史：附・西洋劇場の話』の「第一編日本歌舞音楽略沿革」の冒頭部分から「第三編劇場構造史」の「第五章下第六節看板及櫓」に至るまで、適宜抜粋しながらまとめている。中村順平は、番号49「人形芝居劇場」以降、日本と西洋の劇場関連の記述を遺していることから、東西の劇場史の比較分析を試みた痕跡とみられる。

番号 53 : Charpente en fer

この草稿の表題は、フランス語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題右の参考文献著者情報と思われる「(Oslet による)」という記述から、前出のギュスターヴ・オスレ監修「構造講義」シリーズを念頭に調査した。

その結果、同シリーズ内第4部第2巻、ギュスターヴ・オスレ著の『鉄造小屋組論』⁷¹⁶の表題と一致した。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、同書冒頭部 pp.1～2 の抄訳であることが判明した。

また、訳文途中に「以上 Oslet による以下 Cordeau の部分による」という記述が見られる。この参考文献著者情報と思われる「Cordeau」という記述から、該当可能性のある文献を調査した。

その結果、エコール・セントラル出身の技術者アレクサンドル・ルイ・コルドー (Alexandre Louis Cordeau) の著書『鉄造小屋組・金物』⁷¹⁷を発見した。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、同書冒頭「序」Introduction 部分の全体 p.V～VIII の抄訳であることが判明した。

さらに、この抄訳部の後に、「Travail Mécanique」という小見出しと「(decor de métal p.20 による)」という記述が発見できる。

この参考文献情報から該当可能性のある文献を調査した結果、ルシアン・マーニュ (Lucien Magne) の『金属装飾：鉄』⁷¹⁸に同名の文献の可能性が浮上した。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、同書第2章“Travail Mécanique”(pp.20～35)、第3章“Systèmes équilibres construits par encorbellements”(pp.37～48)、第5章“Le fer dans l'architecture moderne”(pp.61～79)、それぞ

れの抄訳であることが判明した。

番号 54 : Béton Armé

この草稿の表題は、フランス語で記されている。表題から、鉄筋コンクリート Béton Armé に関する論考とみられる。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。表題右の参考文献著者情報と思われる「(Espitallier による)」という記述から、該当可能性のある文献を調査した。

その結果、ジョルジュ＝フレデリック・エスピタイエ (Georges-Frédéric Espitallier, 1849-1923) の鉄筋コンクリートに関する 3 冊の文献の可能性が浮上した。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、冒頭の鉄筋コンクリートの用語定義の箇所では、『鉄筋コンクリート上級講義』⁷¹⁹ を使用し、その後、説明箇所では 2 巻組みの『鉄筋コンクリート講義』第 1 巻 Livre I⁷²⁰ の p.9 と同著第 2 巻 Livre II⁷²¹ の pp.83～85 の抄訳であることが判明した。後者『鉄筋コンクリート講義』の 2 巻組みは、中村順平が留学中の 1921 年に第 8 版が刊行されていた。

また、頁途中に別文献の参照を示す記述がある。「○Mur et cloison」という小見出しと括弧内に記載された参考文献関連情報とみられる「Ciment Armé, Merciot による p.469」という記述から、該当可能性のある文献を調査した。

その結果、ギュスターヴ・オスレ監修の「構造講義」シリーズにあるアルベール・メルシオ (Albert Merciot) が担当した『鉄筋コンクリート論』⁷²²の可能性が浮上した。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、同書 p.469 から始まる「壁と間仕切」Mur et cloison の概論 Généralité の 6 行目以降の抄訳であることが判明した。なお、フランス語では、鉄筋コンクリートを、その含まれる構成要素の違いから “Béton armé または “Ciment armé” の 2 通りで表現する。

番号 55 : Fondation

この草稿の表題は、フランス語および日本語で記されている。フランス語表題から、中村順平はフランス語参考文献を参照したと推測できる。草稿文中には参考文献に関する情報の記載はない。草稿文から鉄筋コンクリートの基礎に関する論考と判断し、番号 54 で取り上げた文献から該当可能性のある引用箇所を精査した。しかし、該当箇所の発見には至らなかったため、別文献を中心に調査した。

その結果、エドワー・アルノー (Edouard Arnaud, 1864-1943) の講義録『建築・建設土木講義』第 2 巻 deuxième partie technique du bâtiment tome 1⁷²³の可能性が浮上した。さらに、中村順平の引用箇所を精査した結果、本草稿は、エドワー・アルノーの 5 巻組みの講義録第 2 巻 (第 2 部第 1 巻) pp.73～85 および pp.122～135 の抄訳であることが判明した。

以上、「ノート 2」では、番号 26 を除く全ての参考文献が判明した。

2.4 『建築学』草稿のフランス語・日本語参考文献比率

調査の結果、「ノート1」および「ノート2」において、番号18, 19, 26の全て、番号20の一部に判明できない点が残されたが、その他すべての参考文献が判明した。参考文献の判明した草稿は、フランス語文献が参照された43章に対し、日本語文献は9章であった。頁数等の比較を表3.4.2にまとめた。

表 3.4.2 フランス語・日本語参考文献章・頁数比較表

	フランス語参考文献	日本語参考文献	合計
章数	43 章	9 章	52 章
割合（対章数）	82.69%	17.31%	100%
頁数	345 頁	79 頁	424 頁
割合（対頁数）	81.37%	18.63%	100%
頁数（図版除く）	344 頁	66 頁	410 頁
割合（対頁数）	83.90%	16.10%	100%

上表からも明らかなように、『『建築学』草稿』の参考文献は、8割以上がフランス語文献であった。一方、日本語文献は全体の1/6程度であるが、日本語文献の挿入意図は、フランス語文献との比較や、フランス語情報のみの偏った理論とならないような配慮とみられる。

また、43章分のフランス語参考文献を、①エコール・デ・ボザール歴代教員による文献、②技術教育機関・技術者向け文献、③歴史教則本、④フランス建築雑誌、⑤その他、の5つに分類し、①から⑤それぞれの章数、ページ数、および、その割合を表3.4.3にまとめた。

表 3.4.3 フランス語文献使用草稿各分類の章・頁数比較表

	①	②	③	④	⑤	合計
章数	12 章	6 章	9 章	11 章	5 章	43 章
割合（対章数）	27.91%	13.95%	20.93%	25.58%	11.63%	100%
頁数	166 頁	35 頁	41 頁	72 頁	31 頁	345 頁
割合（対頁数）	48.12%	10.14%	11.88%	20.87%	8.98%	100%

上表からも明らかなようにわかるように、章数でいえば、①に該当するものに最も多くの章が割かれているが、④に該当するフランスの建築雑誌も次に多い。また、頁数では、①に該当するものが半数近くを占め、中村順平の留学先であるエコール・デ・ボザールと関係の深い文献が選択された。

以上から、中村順平の『『建築学』草稿』における参考文献調査の結果、中村順平の『『建築学』草稿』では、フランス語文献を使用した論考が多数を占め、その多くはエコール・デ・ボザールと関係の深いものであったが、必ずしもジュリアン・ガデの『建築の諸要素と理論』のみの翻訳ではなかったことが明らかになった。こうした結果を受け、「ノート1」および「ノート2」において判明した出典等を整理し、表3.4.4を作成した。

表 3.4.4 中村順平「『建築学』草稿」表題日本語訳・出典文献・言語結果一覧表

章	表題	出典	言語結果	仏語文献分類
1	住宅に於ける建築構成	『建築の諸要素と理論』	仏	①
2	居住、近代建築以前の居室	『建築の諸要素と理論』	仏	①
3	田舎建築	『建築の諸要素と理論』	仏	①
4	建築と公道（続き）	『建築の諸要素と理論』	仏	①
5	ブルガステル橋	“L'Architecte”（雑誌）	仏	④
6	門及堀	『家屋雑考』	日	—
7	通路	『建築の諸要素と理論』	仏	①
8	陸軍建築	『中世建築事典』	仏	①
9	記念碑	『建築の諸要素と理論』	仏	①
10	公道と建築	『建築の諸要素と理論』	仏	①
11	路上の諸建築（有用建築の部）	『都市と農村の公共施設』	仏	②
12	内庭	『建築の諸要素と理論』	仏	①
13	城郭建築（日本ノ分）	『城郭之研究』	日	—
14	屋根勾配とその形状	『構造講義』	仏	②
15	小屋	『構造講義』	仏	②
16	照明	“L'Architecture d'Aujourd'hui”（雑誌）	仏	④
17	古代の工業・ポンペイ	『ローマ考古学』	仏	③
18	中世の工業	不明	(仏)	不明
19	工場	不明	(仏)	不明
20	シネマ・スタジオ	『フランス百科事典』他（一部不明）	仏	⑤
21	ヴォールト教会	『建築の諸要素と理論』	仏	①
22	火葬場	“L'Architecture d'Aujourd'hui”（雑誌）	仏	④
23	死体焼却炉	『都市と農村の公共施設』	仏	②
24	軍人墓地	“L'Architecture d'Aujourd'hui”（雑誌）	仏	④
25	消極防御	“L'Architecture d'Aujourd'hui”（雑誌）	仏	④
26	建物における固有音響現象	不明	(仏)	不明
27	劇場	“L'Architecture d'Aujourd'hui”（雑誌）	仏	④
28	国立オペラ劇場の新設備	“L'Architecture”（雑誌）	仏	④
29	船	『船』	仏	⑤
30	交通	『交通論』	日	—
31	交通（日本）	『日本交通史話』	日	—
32	地上の移動	『陸運史・移動・牛車・馬車・自転車・機械式移動・自動車』	仏	④
33	陸運史、繁駕	『陸運史・移動・牛車・馬車・自転車・機械式移動・自動車』	仏	⑤
34	陸運	『ローマ考古学』	仏	③
35	筆記・計算機器	『ローマ考古学』	仏	③
36	図書館	“L'Architecture d'Aujourd'hui”（雑誌）	仏	④
37	書庫	“L'Architecture d'Aujourd'hui”（雑誌）	仏	④
38	博物館	“L'Architecture d'Aujourd'hui”（雑誌）	仏	④
39	バジリク	『ローマ考古学』	仏	③
40	ローマの工営	『ローマ考古学』	仏	③
41	攻城兵器	『フランス考古学』	仏	③
42	公衆浴場	『東西沐浴史話』	日	—
43	公共祝祭	“L'Architecture d'Aujourd'hui”（雑誌）	仏	⑤
44	住宅建築	『フランス考古学』	仏	③
45	個人住戸	『フランス考古学』	仏	③
46	食堂	『ポンペイ個人史』	仏	⑤
47	日本住宅史	『住宅建築要義』	日	—
48	我国上代の顔料	『仏教美術』第四冊、第八冊（雑誌）『東洋美術特号』（雑誌）	日	—
49	人形芝居劇場	『人形芝居と近松の浄瑠璃』『文楽之研究』	日	—
50	人形劇場	『フランス考古学』	仏	③
51	サーカス小屋と競馬場	『建築論』	仏	②
52	日本劇場史	『日本劇場史：附・西洋劇場の話』	日	—
53	鉄造小屋組	『構造講義』『鉄造小屋組・金物』『金属装飾：鉄』	仏	②
54	鉄筋コンクリート	『鉄筋コンクリート講義』『同上級講義』『鉄筋コンクリート論』	仏	②
55	基礎	『建築・建設土木講義』	仏	① ②

3. 「『建築学』草稿」にみるフランス建築理論

3.1 「『建築学』草稿」にみるフランス語参考文献

前節までに明らかにした「『建築学』草稿」のフランス語参考文献を参照したことが判明した草稿 43 章を対象に、①エコール・デ・ボザール歴代教員による文献、②技術教育機関・技術者向け文献、③歴史教則本、④フランス建築雑誌、⑤その他、の5種に分類し、それぞれの該当文献を出版年順に整理し、著者名、書籍や雑誌名およびその巻号、出版年、表 3.4.4 における該当番号を併記し、一覧表（表 3.4.5）を作成し、各分類について以下、その特徴を考察する。

表 3.4.5 「『建築学』草稿」フランス語参考文献

参考文献名		表 3.4.4 該当番号
巻号		
①エコール・デ・ボザール歴代教員による文献	ウジューヌ・エマニュエル・ヴィオレ＝デュク (Eugène Emmanuel Viollet-Le-Duc, 1814-1979) 著 『フランス 11-16 世紀建築解説事典』(1856-1864)	
	「第 1 巻 Tome I」	8
	ジュリアン・ガデ (Julien Guadet, 1834 -1908) 著 『建築の諸要素と理論』(初版：1901-1904, 第 3 版：1909-1910)	
	「第 2 巻」 Tome II	1, 2,
	「第 3 巻」 Tome III	21
	「第 4 巻」 Addition	3, 4, 7, 9, 10, 12
	ルシアン・マーニュ (Lucien Magne, 1849-1916) アンリ＝マルセル・マーニュ (Henri-Marcel Magne, 1877-1944) 共著 「各種素材の応用芸術」シリーズ (1913-1933)	
	『IV. 金属装飾：鉄』 Décor du métal : Le Fer	53
	エドワー・アルノー (Edouard Arnaud,1864-1943) 著 『建築・建設土木講義』(1920)	
	「第 2 巻」 Deuxième partie Tome I	55
②技術教育機関・技術者向け文献	ギュスターヴ・オスレ (Gustave Oslet, 1852-1936) 編著 「構造講義」 Cours de construction シリーズ (1890-1908)	
	ギュスターヴ・オスレ著 第 4 部 1 巻『木造小屋組論』(1890)	15
	ギュスターヴ・オスレ著 第 4 部 2 巻『鉄造小屋組論』(1898)	53
	ギュスターヴ・オスレ, A・ラコンブ (A. Lascombe) 共著 第 15 部『屋根・配管工事論第 1 巻：屋根』(1908)	14
	アルベール・メルシオ (Albert Merciot) 著 第 20 部『鉄筋コンクリート構造』(1908)	54
	ルイ・クロケ (Louis Cloquet, 1849-1920) 著 『建築論』(1898-1901)	
	「第 4 巻」 Tome IV	51
	アレクサンドル・ルイ・コルドー (Alexandre Louis Cordeau) 著 『鉄造小屋組・金物工事』(1901-1904)	52
	ジョルジュ＝フレデリック・エスピタリエ (Georges-Frédéric Espitallier, 1849-1923) 著 『鉄筋コンクリート講義』(1906)	
	「第 1 巻」 Livre I	54
	「第 2 巻」 Livre II	54
	エミル・ギユイヨ (Emile Guillot, 1863-?) 著 『都市と農村の公共施設』(1912)	
	ジョルジュ＝フレデリック・エスピタリエ著, モーリス・レジンバル (Maurice Régimbal) 改訂 『鉄筋コンクリート上級講義』(1931-1934)	
	「第 1 巻」 Livre I (1931)	54

③ 歴史教則本	カミーユ・アンラール（Camille Enlart, 1862-1927）著 『フランス考古学教本』（1902-1916）	
	「第2巻」 Tome II（1904） 「第2巻・非軍事建築」 Tome II Architecture civile（1929）	41, 44, 45, 50
	ルネ・カニャ（René Cagnat, 1852-1937），ヴィクトール・シャポ（Victor Chapot, 1873-1954）共著 『ローマ考古学教本』（1916-1920）	
	「第1巻」 Tome I（1916）	17, 39, 40
	「第2巻」 Tome II（1920）	34, 35
④ フランス建築雑誌	“L'Architecte”	
	「1931年2月号」	5
	“L'Architecture”	
	「1939年6月号」	28
	“L'Architecture d'Aujourd'hui”	
	「1936年 No.7」	16
	「1937年 No.12」	25
	「1938年 No.3」	36, 37
	「1938年 No.6」	38
	「1938年 No.7」	22, 24
	「1938年 No.9」	27, 43
⑤ その他	ヘンリー・テドナ（Henry Thédénat, 1844-1916）著 『ボンペイ：歴史－個人生活』（1906）	
	ルシアン・フェーヴル（Lucien Febvre, 1878-1956）監修 『ランシクロペディ・フランセーズ』 L'Encyclopédie française（1935-1940）	
	ピエール・アブラハム（Pierre Abraham, 1892-1974）編 『第16巻 現代社会の芸術と文学：素材と技術』（1935）	20
	ルイ・ボードリー・ド・ソニエ（Louis Baudry de Saunier），シャルル・ドルフェス（Charles Dollfus），エドガー・ド・ジョフロワ（Edgar de Geoffroy）共著 『陸運史・移動・牛車・馬車・自転車・機械式移動・自動車』（1936）	32, 33
	クロード・ファレール（Claude Farrère, 本名フレデリック・シャルル・ボルゴーン Frédéric Charle Borgone, 1876-1957）著 『船』（1936）	

3.2 ①エコール・デ・ボザールの歴代教員による文献

エコール・デ・ボザールの歴代教員による文献は、参考文献の判明した草稿のうち、12章166頁を占め、5種の分類中、最も多く参照されている。

中村順平は、エコール・デ・ボザールの教育者4名の書物を参照した。

1人目は、ヴィオレ＝ル＝デュクで、1863年のエコール・デ・ボザールにおける教育改革で新たに誕生した「芸術史・美学」科目を1863年から1864年にかけて担当した。中村順平は、ヴィオレ＝ル＝デュクの事典『フランス11-16世紀建築解説事典』（全10巻）の第1巻を参照した。この事典が全10巻で構成されていることを考えれば、調査対象から除外した本論以外の箇所における参照や、これまで発見されていない別草稿などにその他の箇所からの翻訳が見られる可能性がある。

2人目は、ルシアン・マーニュ⁷²⁴で、「建築史」科目を1891年から1916年にかけて担当した建築家である。中村順平は、ルシアン・マーニュとその息子で工芸家のアンリ＝マルセル・マーニュの共編著「各種素材の応用芸術」シリーズ（全9巻）からルシアン・マーニュが担当した第4巻『IV. 金属装飾：鉄』⁷²⁵を参照した。この「各種素材の応用芸術」シリーズが、全9巻構成であることを考慮すれば、第4巻以外を別の論考で参照した可能性が考えられる。

3人目は、ジュリアン・ガデで、「建築理論」科目を1894年から1908年にかけて担当した建築家である。中村順平に関する既往研究においてたびたび出現するジュリアン・ガデの『建築の諸要素と理論』（全4巻）の第2巻から第4巻が参照された。これまで、中村順平の既刊著述において参照された同書第1巻以外の参照が確認された。

4人目は、エドワー・アルノーで、「構造」科目を1920年から1934年にかけて担当した技術者で建築家である。中村順平は、前章で言及したエドワー・アルノーの講義録『建築・建設土木講義』（全5巻）の第2巻を参照しており、中村順平が『建築学総説編』で引用したことを裏付ける証拠が発見された⁷²⁶。なお、この書物については、前章で述べた。

前記4名の教員たちは、雑誌『建築世界』誌で1925年から1937年にかけて不定期で連載された中村順平の「建築学」で言説が取り上げられた人物である。連載記事では人名のみが記載され、具体的な参考文献名の記載は無かったが、『『建築学』草稿』の分析を通じてその手がかりが得られた。4者の書物は、それぞれ数巻で構成されていることから、中村順平は「建築学」の講義用の草稿作成の際こうした4者の書物を参照していたと考えられる。

3.3 ②技術教育機関・技術者向け文献

中村順平は技術者養成機関で教鞭をとった人物による文献と技術者向けに編まれた文献を参照している。

技術者養成機関で教鞭をとった人物として、まず、前述のアルノーが挙げられる。エドワー・アルノー講義録は、前章でも述べたように、エドワー・アルノーの母校のひとつであるエコール・サントラルの「建築・建設土木講義」Cours d'architecture et de construction civile のために編纂され、エコール・サントラルの講義のほか中村順平留学期にはエコール・デ・ボザールの「構造」科目においても使用された。

中村順平は草稿「基礎」（表 3.4.4・「55」）において、エドワー・アルノー講義録第2巻「建物の構築－鉄筋コンクリート・基礎・組積・床」Edification du bâtiment－Béton armé-Fondation-Maçonnerie-plancher の第4章「基礎，概論」Fondation, Généralités の pp.73-85 および第7章「ピロティの基礎，概論」Fondation sur pilotis, Généralités の pp.122-135 を抄訳している。中村順平が「基礎」の章を翻訳した背景には、エドワー・アルノーがエコール・デ・ボザールでの講義において重視した現れととらえることもできるだろう⁷²⁷。

この「基礎」の前章「鉄筋コンクリート」（表 3.4.4・「54」）において、中村順平はエスピタリエの書物を参照している。

ジョルジュ・フレデリック・エスピタリエは、エコール・ポリテクニク出身の技術者で、フォンテーヌブローの砲工応用学校 Ecole d'application de l'artillerie et du génie à Fontainebleau で「構造講義」Cours de Construction を担当した陸軍中佐 lieutenant-colonel である。フォンテーヌブローの砲工応用学校は、近代日本における陸軍士官学校に派遣されたフランスの軍事顧問団の軍事建築部門を担当した人物が所属した学校の流れを汲むもので、この学校で使用された教科書の類が近代日本の陸軍士官学校で行われた「建築学」教育に用いられており、日本語訳された教科書として残されている。

また、ジョルジュ・フレデリック・エスピタリエは、1891年に開設されたエコール・スペシアル・デ・トラヴァオー・ピュブリック Ecole Spéciale des Travaux Publics⁷²⁸の「建設理論・詳細講義」Cours raisonné et détaille du bâtiment や「鉄筋コンクリート講義」Cours de Béton armé を担当した教育者でもある。

これらの講義の記録は、ジョルジュ・フレデリック・エスピタリエの「構造講義」体系としてまとめられている。エコール・スペシアル・デ・トラヴァオー・ピュブリックの「構造講義」体系の書物は、建物の建設に関わる一般概論の講義録、建物の合理的な建設に関わる方法を教授する講義録、鉄筋コンクリートの講義録、工場建築に関する講義録、建築の講義録などの中分類がなされている⁷²⁹。

この「構造講義」体系の書物の中分類とは別の分類として、鉄筋コンクリートのみに特化された2冊組みの講義録がジョルジュ・フレデリック・エスピタリエによって編纂されている。

中村順平はこのジョルジュ・フレデリック・エスピタリエによる『鉄筋コンクリート講義』⁷³⁰（全2巻）とモーリス・レジナルによる改訂版『鉄筋コンクリート上級講義』（全3巻）の2巻を参照している。中村順平は鉄筋コンクリートの題材として、ジョルジュ・フレデリック・エスピタリエの第1巻から素材、同第2巻から主に壁と梁に関する部分を、モーリス・レジナルの第1巻から定義部

分を取り上げ、抄訳している。

次に、技術系教育機関の文献を参照した草稿の半数にあたる4章分において、中村順平はギュスターヴ・オスレ編著による「構造講義」シリーズの書物を参照している。このシリーズの図版はエドワー・アルノーの講義録に掲載されており、中村順平はエドワー・アルノーの講義や講義録からこの書物の存在を知った可能性が高い。

ギュスターヴ・オスレはエコール・サントラル出身の技術者で1876年よりエコール・サントラルの「構造講義」の補佐役として、学生の設計製図作業を指導する製図主任 *Chef des travaux graphiques* をつとめた。また、ギュスターヴ・オスレは1896年から同校で「建築図画」*Dessin d'architecture* の教授をつとめた。ギュスターヴ・オスレがエコール・サントラルで関わった「構造講義」の講義の記録は、「構造講義」シリーズとしてギュスターヴ・オスレによって編纂された。この書物は、エドワー・アルノーのエコール・サントラル入学以前の1890年頃から巻号を重ね1908年には全20巻にまで及んでいる⁷³¹。

中村順平は、ギュスターヴ・オスレ編著の「構造講義」シリーズからギュスターヴ・オスレ著『木造小屋組論』および『鉄造小屋組論』、ギュスターヴ・オスレとA.ラコンブの共著『屋根・配管工事論 第1巻：屋根』、ギュスターヴ・オスレ編・アルベール・メルシオ著『鉄筋コンクリート構造』の4文献を参照した。

なお、この「構造講義」シリーズには、建築に関する書物も含まれ、ギュスターヴ・オスレは監修者として関わるのみであったが、ジョルジュ・テュブッフ (Georges Ernest Tubeuf, 1850-?) によって『建築理論と実践論』⁷³² (全4巻) が著された。また、ギュスターヴ・オスレの「構造講義」シリーズと前述のジョルジュ・フレデリック・エスピタイリエの「構造講義」体系は、それぞれの分類上の類似点が確認できると同時に、相違点も存在する。双方の書物の主な相違点は、ギュスターヴ・オスレの書物にみる土木インフラに関する講義録の存在と細目ごとに設けられた積算に関する講義録の存在にある。この違いは両校における技術者教育の傾向を表しており、エコール・サントラルが建築・土木全般の構造を扱い、ジュエネラリストとしての総合的な技術者養成を目的とした教育が行なわれていたことを示している。

また、中村順平はエドワー・アルノー講義録に図版が引用された別文献のひとつ、ルイ・クロケの建築理論書『建築論』(全5巻)の第4巻を参照している。

ルイ・クロケはベルギー出身の技術者で、ベルギー・ゲントの土木工芸系学校エコール・スペシアル・デュ・ジェニー・シヴィル・エ・デ・ザー・エ・マニユファクチュール・ド・ガン *Ecoles Spéciales du Génie Civil et des Arts et Manufactures de Gend* を修了し、土木技術者資格 *Diplôme légal d'ingénieur honoraire des ponts et chaussées* を取得した。修了後、ルイ・クロケは、ベルギーのサン=ジャック大聖堂やトゥルネ *Tournai* 教会群、アントアン *Antoing*、ボドゥール *Baudour*、ペリュヴェル *Peruwelz*、フェルイ *Feluy* の教会の修復などを手がけた。

ルイ・クロケは、こうした教会群の改修などを手がけたとともに教職活動にも従事した。ルイ・クロケは、アドルフ・ポーリ (Adolphe Pauli, 1820-1895) の後任として、母校の建築系科目の教員となる。同校では、「建築の諸要素」*Elément d'architecture*、「建築史・関連芸術」*Histoire d'architecture et des art connexes*、「非軍事建築」*architecture civile* の3つの科目や、「建築設計」*Projets d'architecture* などの設計課題を1890年より晩年の1919年にかけて担当した。また、母校での教鞭

の傍ら、ルイ・クロケは、1898年より公共教育省 *Ministre de l'instruction publique* で開講された「建築構成と建築実践」 *Composition architecturale et de pratique architecturale* 科目を担当した。

ルイ・クロケの建築理論書はフランスの建築関連の教育機関のために編まれた書物ではないが、19世紀末から20世紀初頭の建築理論書の中でジュリアン・ガデの『建築の諸要素と理論』やジョルジュ・テュブッフの建築理論書の比較対象として考えられている⁷³³。また、1899年ごろのエコール・デ・ボザールでは学生の所属する各アトリエで重要視されていたという記録が、フランスの雑誌“*L'Architecture*”誌に掲載された建築家シャルル・ルカ（Charles Lucas, 1838-1905）による書評「L.クロケの『建築論』」⁷³⁴に残されている。なお、ルイ・クロケは、この書評が掲載された翌年の1900年に、パリで行なわれた国際会議に出席しており、ルイ・クロケの書物はこの時期のフランスの建築界ににぎわせた可能性がある。

また、ルイ・クロケの『建築論』では、たびたびヴィオレ＝ル＝デュクの言説が引用されており、この書物からフランスとベルギー双方の建築理論の交流の痕跡が確認できる。ルイ・クロケは、19世紀のベルギー建築理論の立役者の一人で、ベルギーにおけるヴィオレ＝ル＝デュクの合理主義建築理論の推進者としても知られている⁷³⁵。ルイ・クロケの講義録から図版を引用したエドワー・アルノーの世代はルイ・クロケの講義録に影響を受けた世代であったのだろう。この著書が中村順平によって参照されていたことは、吉田綱市論文「《parti》の意味について—クロケ、ガデ、グロモールの使用例による一考察—」⁷³⁶との関係で興味深い。前章で《parti》について述べた際、中村順平がエドワー・アルノーから受容した可能性を指摘したが、中村順平がルイ・クロケの書物を参照したことを考慮すれば、ルイ・クロケの書物からの受容の可能性も指摘できる。

一方、中村順平はジュリアン・ガデ、ルイ・クロケの書物を翻訳しているが、ジョルジュ・テュブッフの書物は『「建築学」草稿』では取り上げていないことを考慮すれば、中村順平がエドワー・アルノーの講義録からジュリアン・ガデとルイ・クロケの書物の存在を知ったと考えられる。また、エドワー・アルノーの講義録には、ルイ・クロケの書物から引用された図版が掲載されていることを考慮すれば、エドワー・アルノーの講義録の図版をトレースした中村順平が留学期にルイ・クロケの存在を知り、その講義録を入手し、帰国の際、日本へ持ち帰った可能性が指摘できる。

さらに、以上の技術者養成機関向けの書物のほか、中村順平は、公共事業に関与する現場監督や技術者のために編纂された書物を参照している。

中村順平は、草稿「鉄造小屋組」（表3.4.4・「52」）の冒頭においてギュスターヴ・オスレによる『鉄造小屋組論』の一部を取り上げ、次いでアレクサンドル・ルイ・コルドーによる『鉄造小屋組・金物工事』の序文を抄訳している。

この書物は、1847年に全2巻で刊行されたライヤール・ミニャール（Raillard Mignard）による「建設業者ガイド」 *Guide de constructeurs* シリーズの第7版で、1900年初頭のアレクサンドル・ルイ・コルドーによる改訂時に再編された全4巻組の第2巻である。なお、その他3巻は、第1巻『組積工事』⁷³⁷、第3巻『木造小屋組・建具工事』⁷³⁸、第4巻『屋根・配管・暖房・塗装・硝子工事』⁷³⁹である。

アレクサンドル・ルイ・コルドーは、ギュスターヴ・オスレのように製図主任 *Chef des travaux graphiques* としてエコール・サントラルの教育に携わった教育者である。また、アレクサンドル・ルイ・コルドーは、エコール・サントラルでの教育活動のほか、技術者養成の教育機関のひとつフラン

ス国立工芸院では実習助手 *Répétiteur* として、フランスで公認建築家資格取得が認められた私学の建築系教育機関である *Ecole spéciale d'architecture* では *Professeur* として、また、パリ市やパリのエコール・ラヴォワジエ *Ecole Lavoisier* で製図を指導するなど、教育者として活躍した。なお、アレクサンドル・ルイ・コルドーは、前述のギュスターヴ・オスレ編著の「構造講義」シリーズの第15部『屋根・配管工事論第2巻：積算』⁷⁴⁰や『屋根・配管工事論：配管・電気積算』⁷⁴¹において屋根・配管工事の積算専門家 *Mètreur spécial en couverture et plomberie* として関与している。

また、中村順平は技術者向けに編まれた書物として「公共事業監督叢書」*Bibliothèque du conducteur de travaux publics* シリーズの一冊で、エコール・デ・ボザール出身の建築家エミル・ギュイヨの『都市と農村の公共施設』を参照している。1927年の第2版改訂時には、「公共事業技術者叢書」*Bibliothèque de l'ingénieur de travaux publics* とシリーズ名が改称され、法令部分に新たな条項が掲載された。784頁で構成されたこの書物は、全8章からなり、それぞれ細分化された建築プログラムに関する実例が、多数の図版や写真とともに掲載されている。

中村順平は、エドワー・アルノーのみならずギュスターヴ・オスレやジョルジュ・フレデリック・エスピタリエなど19世紀末から20世紀初頭にかけてフランスの技術者養成教育機関で使用された講義録から構造や構法に関する情報を摘出し、翻訳した。中村順平は、構造や構法に関する草稿において、例えば、ギュスターヴ・オスレによる鋼構造とルシアン・マーニュによる金属装飾の話題を併記し、また、ジョルジュ・フレデリック・エスピタリエによる鉄筋コンクリートの概論を述べた後、エドワー・アルノーによる鉄筋コンクリートの基礎に関する論考をまとめた。つまり、中村順平は、技術者養成教育機関の書物からの情報を翻訳するだけでなく、エコール・デ・ボザールの教育者の文献の情報を盛り込みながら、エコール・デ・ボザール出身の建築家としての視点を交えて草稿を構成した。

3.4 ③歴史教則本

中村順平はフランスやヨーロッパの歴史資料として『フランス考古学教本』や『ローマ考古学教本』を参照している。

『フランス考古学教本』はフランスの中世からルネッサンス期を中心とした著書で、第1巻の「教会建築」Architecture religieuse がテーマとした2冊構成は1902年に、中村順平が参照した「非軍事・軍事建築」Architecture civile et militaire に関する項目が中心の第2巻は1904年に、中世からルネッサンス期の「衣装」Costumes が考察された第3巻は1916年に、それぞれ初版が刊行された。この書籍には、中世・ルネッサンス期の建築物の写真が多数掲載されている。そのため、第一次・第二次世界大戦の戦禍に消えた建築物などが写しだされており、近年、20世紀初頭にまとめられた史的資料として歴史的価値が再認識されている⁷⁴²。

中村順平が参照した第2巻は、カミーユ・アンラールの死後、2分冊された。1冊目の『非軍事建築』⁷⁴³は、カミーユ・アンラールが初版の「非軍事建築」Architecture civile 部分に死の直前まで手を加えた遺稿をもとに改訂され、1929年に刊行された。中村順平は初版のほか、草稿における参照箇所からこの改訂版も参照した。2冊目の『軍事・船の建築』⁷⁴⁴は、歴史記念建造物監督官を務めたジャン・ヴェリエ (Jean Verrier, 1887-1963) によって初版の「軍事建築」Architecture militaire 部分が修正され、改訂版として1932年に刊行された。

『フランス考古学教本』の著者カミーユ・アンラールは、1893年にエコール・デ・ボザールの司書補佐 sous-bibliothécaire となるが、私立建築学校 Ecole Spéciale d'Architecture や国立古文書学校 Ecole Nationale des Chartes, エコール・デュ・ルーヴル Ecole du Louvre で「考古学」Archéologie 科目を担当した教育者であり、フランス近代史に名を残す考古学者である。

建築と考古学に興味を抱いていたとされるカミーユ・アンラールは『フランス考古学教本』第1巻の前書きにおいて、中世からルネッサンス期に至るフランスの建築についてヴィオレ＝ル＝デュクの偉業を意識してまとめたことを述べ、その系譜にある建築家ポール・ベスウィルワルドによる「フランス建築史」科目の重要性を指摘している。1892年にエコール・デ・ボザールの新科目として誕生したこの科目は、中村順平留学期にもポール・ベスウィルワルドによって行なわれた。

もうひとつの歴史教則本『ローマ考古学教本』は全2巻3部構成となっている。第1巻は、第1部「記念建造物」Monuments に関する16章から始まり、第2部「記念建造物の装飾」Décoration des monuments の「彫刻」Sculptures に関する13章が続いている。第2巻は、前巻の「記念建造物の装飾」の続きとして「絵画とモザイク」Peinture et Mosaïque に関する4章が収められ、その後、第3部「身の回りの道具」Instruments de la vie publique et privée に関する16章が続いている。中村順平は、第1巻第1部、第2巻第3部の一部を参照している。

『ローマ考古学教本』の著者ルネ・カニャはラテン・エピグラフィ専門の歴史家で、フランス政府が19世紀後半に発掘を続けていたアルジェリアのティムガドの発掘報告書⁷⁴⁵をまとめたひとりである。この報告書は、ルネ・カニャのほか、当時、アルジェリアの主任建築家を務めていたアルベール・バリユ (Albert Ballu, 1849-1939) とフランスの歴史記念建造物監督官 Inspecteur général des monuments historiques を務めていたエミル・ベスウィルワルド (Emile Boeswillwald, 1815-1896) によって作成された。なお、前述のポール・ベスウィルワルドは、エミル・ベスウィルワルドの息

子で、父親同様、歴史記念建造物監督官を務めた。

もう一人の著者ヴィクトール・シャポは考古学者で、1922年より1934年までエコール・デ・ボザールで「考古学」科目を担当した教育者である。ヴィクトール・シャポと知己のガロ・ロマン期専門の考古学者アルベール・グルニエ（Albert Grenier, 1878-1961）は、『ローマ考古学教本』の第2巻全般をヴィクトール・シャポがまとめたと推察している⁷⁴⁶。

また、ヴィクトール・シャポは中村順平留学期の「装飾画」科目の担当教官エクトール・デスプイ監修の図集『復元・修復された古代記念建造物』⁷⁴⁷の解説を記しており、『ローマ考古学教本』第2巻との接点も見出せる。この『復元・修復された古代記念建造物』の“Supplément”においてヴィクトール・シャポが考古学的見地からの文章を寄せている。

これら歴史教則本は、いずれもエコール・デ・ボザールと関連の深い書物といえ、中村順平留学期の専門科目講義において紹介され、使用された可能性が指摘できる。

3.5 ④フランス建築系雑誌

中村順平は、草稿11章72頁分においてフランス建築系雑誌3誌“L’Architecte”, “L’Architecture”, “L’Architecture d’Aujourd’hui”を参照している。雑誌が参照された草稿の頁数はエコール・デ・ボザールの歴任教員による文献に次いで多い。

“L’Architecte”はフランス政府公認建築家協会 Société des architectes diplômés par le gouvernement (1877年設立) 発行の機関紙で1906年から1914年、1924年から1935年にかけて発行された月刊誌である。

“L’Architecture”はフランス中央建築家協会 Société centrale des architectes français (1840年設立) 発行の機関誌で、1889年から1914年までは週刊誌として、第一次世界大戦中の1915年は発行されず、その後、1916年からは月刊誌として再開し1939年まで発行された。

“L’Architecture d’Aujourd’hui”は1930年に発刊された雑誌で、エコール・サントラル出身のアンドレ・ブロック (André Bloc, 1896-1966) が1966年まで編集に携わり、技術に大きなまなざしが向けられた編集が行なわれ、ル・コルビュジエや若い建築家などの記事が掲載された。

雑誌を参照した9章で“L’Architecture d’Aujourd’hui”が参照され、そのうちの8章は『建築世界』誌上における中村順平の「建築学」連載が終了した1937年2月以降の発刊号であった。中村順平は「建築学」続編を意図し、その原稿を準備していたのだろう。“L’Architecture d’Aujourd’hui”は横浜高等工業学校において定期購読されていたが、中村順平は学生に対しこの雑誌を閲覧禁止とした⁷⁴⁸。

なお、中村順平が参照した最も古い雑誌は“L’Architecte”1931年2月号で、最も新しいものは“L’Architecture”1939年6月号であることから、中村順平は横浜での教育開始以降も、“L’Architecte”や“L’Architecture”からエコール・デ・ボザールの建築家の動向を捉え、また同時に“L’Architecture d’Aujourd’hui”から当時の新進気鋭の建築家たちの動向を捉え、常にフランスの建築関連情報を得ていた。

“L’Architecture d’Aujourd’hui”からは、「劇場」(表3.4.4・「27」), 「図書館」(表3.4.4・「36」), 「書庫」(表3.4.4・「37」), 「博物館」(表3.4.4・「38」)といった公共施設の建築プログラムの記事や中村順平の横浜在職期間の戦時下に必要なと考えられる「軍人墓地」(表3.4.4・「24」)や「消極防御」(表3.4.4・「25」)など防衛施設の外国事例研究が行われ、草稿には、その技術的な視点が取り入れられた。

3.5 ⑤その他仏語文献の特徴

前記4分類に該当しない5章分で参照された文献は、『ポンペイ：歴史—個人生活』を除き、いずれも1935-36年に出版されたものである。

中村順平は、ポンペイの住宅における「食堂」に関する論考をまとめるにあたり、考古学者ヘンリー・テドナの『ポンペイ：歴史—個人生活』を参照している。この書物は1900年ごろより出版された「有名芸術都市」Les villes d'art célèbres シリーズの一冊である。

『ランシクロペディ・フランセーズ』は1932年に教育相となったアナトール・ド・モンズィ (Anatole de Monzie, 1876-1947) の発案のもと歴史家ルシアン・フェーヴルなどが監修した辞書で、1935年の出版を皮切りに1966年まで巻号を重ねた。中村順平は、エコール・ポリテクニク出身のジャーナリスト、ピエール・アブラハム編集の1935年に出版された第16巻を参照している。なお、この書物出版の翌年には、同タイトルで副題の異なる第17巻『現代社会の芸術と文学：作品と解釈』(1936)⁷⁴⁹が出版されるが、これらは2巻組の書物である。ル・コルビュジエやオーギュスト・ペレなどフランスの近代の建築界に名を残した人物が多数関与した辞書である。

『陸運史』は、週刊誌“L'Illustration” (1843年から1944年まで発行) の別冊といえる存在で、写真や図版が豊富に掲載された大型の書籍である。草稿本文では、この一冊のみが参照されていたが、図版の豊富さを考慮すると同種の書籍の利用は草稿内のメモ書きや別の論考執筆の際、または講義などでの図版使用の可能性が考えられる。この書籍出版の前年、1935年には『陸運史-鉄道』⁷⁵⁰ (1935) が出版されており、『陸運史』はこれら2巻で一組の書物と考えられる。

船舶関連の書物として、中村順平は図版が豊富に掲載された小説家クロード・ファレール著『船』を参照している。仏語文献を参照した草稿の多くは、ある頁から数頁連続して翻訳されているが、中村順平はこの書物の場合、他の参考文献に比べて本文64頁と薄いためか、全体を要約し、まとめている。また、1930年代の中村順平が船内インテリア・デザインに関与していたことを考慮すれば、船の略史がまとめられたこの冊子の抄訳は、横浜での講義のためだけでなく、中村順平自身における歴史的な基礎的知識の習得も意図していたのだろう。

なお、船に関する中村順平の論考として、未刊行の『船の建築 Architecture Navale』と題する遺稿の存在が既往研究などで触れられてきた⁷⁵¹。この遺稿は、前述のフランスの建築系雑誌“L'Illustration”から1934年に出版された“Histoire de la marine”⁷⁵²の抄訳が主であるが、『「建築学」草稿』における「船」(表3.4.4・「29」)の章では参照されていない。

4. 「『建築学』草稿」にみるフランスとの接点

4.1 日本語参考文献とフランス語参考文献の関係

『『建築学』草稿』で参照された日本語文献の全体に占めるページ数の割合は、約 16%で、フランス語文献 84%に比べ少ない。日本語文献は『『建築学』草稿』全 55 章中 9 章で参照され、住宅、城郭、劇場の建築プログラムに関する項目や交通などのインフラ、文化人類学的な沐浴や仏教美術に関する項目が取り上げられた。

日本語文献を参照した草稿はフランス語文献が参照された草稿と関係のある内容であった。

『『建築学』草稿』では、国学者・沢田名垂によって江戸期に記された著書『家屋雑考』（1842）から住宅の語彙に関する部分が抜粋された。沢田名垂の『家屋雑考』は、日本住宅史の概説が 1935 年頃までは『家屋雑考』の受け売り⁷⁵³といわれるほど、近代日本住宅史の重要な書籍であった。『家屋雑考』は 1891 年に『百科説林』巻七として発刊されたが、それ以前は写本版が流布していた。日本の建築史書の前史として引き合いに出される著書のひとつで、「平安貴族住宅としての寝殿造り／武家住宅としての書院造り」という歴史的住宅様式の二分法の初出といわれている⁷⁵⁴。こうした日本の住宅の教本的な書物を、中村順平は参照した。中村順平は『家屋雑考』から門及塀に関する記述を抜粋し、同時に中村順平達太郎の『日本建築辞彙』から門および塀に関する同様の字義部分を抽出し、さらに図版として武田五一の『住宅建築要義』の「第七章附属建築物」の「第二節門」のうち「第一項和風門」の図版を引用した。

『『建築学』草稿』では、住宅史に関するもうひとつの書物が参照されている。1926 年に出版された武田五一の著書『住宅建築要義』⁷⁵⁵である。中村順平は『住宅建築要義』の「第 1 章住宅建築史 第 1 節日本住宅史」の部分を要約し、まとめている。『住宅建築要義』の第 1 節日本住宅史は、全 8 節で構成され、「上古の住宅建築」「奈良時代の」「平安時代の」「室町時代の」「桃山時代の」「江戸時代の」「明治時代の」「明治時代以後の」の概説が記述されている。中村順平は、上古から明治時代までの住宅建築に関する節を要約しまとめている。太田博太郎の指摘のように、武田五一も寝殿造りの部分では『家屋雑考』が参照された。例えば、『住宅建築要義』図版第 7 図には、『家屋雑考』掲載図版が参照された。

住宅関連の史的情報は、『家屋雑考』と『住宅建築要義』を主に参照したと考えられる。

劇場に関する項目では、1925 年に出版された後藤慶二の著書『日本劇場史：附・西洋建築の話』⁷⁵⁶から抜粋し、前述のフランスの建築系雑誌から翻訳した劇場に関する項目とともに東西の劇場史を相対的に分析していた。中村順平は、いくつかの劇場のプログラムについての論考を残しているが、東西の人形劇場として、欧米のマリオネット劇場と日本の人形浄瑠璃の比較などを行うためだろう。人形浄瑠璃の話については、前述の卒業生、川本喜八郎の証言にもあるように横浜高等工業学校建築学科の「建築学」科目で講義された演劇の話題のひとつに含まれた可能性がある。その参照源が、内海繁津太郎の著書『人形芝居と近松の浄瑠璃』や演劇評論家三宅周太郎の著書『文楽の研究』などであったと考えられる。

また、日本の古建築情報は、飛鳥園関連の雑誌『仏教美術』や『東洋美術』を活用していたことが判明した。この参照源は、横浜高等工業学校で行われた「建築図画」でも参照された可能性がある。また、中村順平の日本建築の歴史分類の方法はこうした雑誌に基づいているもの可能性がある。つま

り、中村順平が日本建築についての論考をまとめるにあたり、過去の日本の芸術などの情報を含め、『仏教美術』や『東洋美術』からその情報を得ていたものと考えられる。『仏教美術』や『東洋美術』の分類は、天沼俊一の分類に近く、中村順平の日本建築に関する歴史認識は、天沼俊一によっている可能性が指摘できる。

日本語文献の特徴として、フランス語文献とは異なり、建築家や建築史家による書物の引用が少ない点があげられる。また、参照された建築家や建築史家は、京都帝国大学の教員を務めた武田五一や天沼俊一など東京帝国大学の教員ではない点も特徴的で、一方で、文化人による文献を使用している点が、フランス語文献との大きな違いといえる。

日本語文献の使用から、中村順平が自身の理論書としての『建築学』を作成するにあたり、それをフランス語文献のみでの構成とする意図がないことの表れとして、また、日本の状況に即したのものとして自身の理論の確立を目指した痕跡といえる。こうした日本語文献からわかるように『『建築学』草稿』はフランス語文献の翻訳書ではないことが判明した。

このようにフランス語文献および日本語文献の出版年等の傾向から判断すると、『建築学』草稿は主に1935年から1940年にかけて翻訳または要約した文章を集積したものと考えられる。フランス語文献については1925年に横浜高等工業学校での教鞭を始めるにあたって中村順平が既に準備を始めていた可能性も考えられるが、フランス語雑誌の選定などを考えると、「ノート1」に関しては雑誌『建築世界』での連載が終了する1937年前に連載の原稿としてまとめられた可能性があり、また「ノート2」についても連載終了後の再開を期待して原稿が準備されていたものと考えられる。翻訳がなされていたフランス語雑誌の最も新しいものが1939年3月号であった点や日本語文献の中で1940年に出版されたとみられる『人形芝居と近松の浄瑠璃』を使用していた点を考えると、『建築学』草稿は1940年以降にまとめられたことがわかる。

4.2 「『建築学』草稿」にみる『建築の諸要素と理論』の構成

仮に、中村順平の「『建築学』草稿」が『建築の諸要素と理論』の構成に従っていたとするならば、どの部分が該当し、中村順平はどのような構成を範としたのか。ここでは、こうした問題意識にたち、ジュリアン・ガデの『建築の諸要素と理論』と中村順平の「『建築学』草稿」の構成を比較し、両者の相関関係を考察する。

まず、『建築の諸要素と理論』（第3版）の第2巻から第4巻までの各巻における「書」 Livre の数に着目すると、第2巻は4書、第3巻は3書、第4巻は4書でそれぞれ構成され、それぞれに該当するテーマが設定されている。また、本論第3編・第3章で述べたように、『建築の諸要素と理論』の大きな構成として、「A.予備研究」「B.一般原則」「C.建築詳述」「D.建築の諸要素」「E.構成の諸要素」「F.構成の一般諸要素」「G.建築家職能」の7項目が設定されている。『建築の諸要素と理論』の第6書から第14書までがEの分類に、また、第15書がFの分類に、そして、第16書がGの分類に属している。

次に、「『建築学』草稿」内の論考を、①『建築の諸要素と理論』の翻訳、②その他フランス語文献の翻訳、③日本語文献の参照、の3つに分類し、『建築の諸要素と理論』の書のテーマとの関係を検証し、その結果を表3.4.6にまとめた。

表 3.4.6 ジュリアン・ガデの『建築の諸要素と理論』と中村順平の「『建築学』草稿」の構成比較

『建築の諸要素と理論』				『建築学』草稿		
巻	書	書の主要テーマ	分類	① 『建築の諸要素と理論』	② フランス語文献	③ 日本語文献
第2巻	Livre 6	居住施設	E	○	○	○
	Livre 7	教育施設・公共施設	E	×	○	×
	Livre 8	官公庁施設	E	×	×	×
	Livre 9	医療施設	E	×	×	×
第3巻	Livre 10	公益施設	E	×	○	○
	Livre 11	宗教施設	E	○	×	×
	Livre 12	葬祭施設	E	○	○	×
第4巻	Livre 13	葬祭施設	E	○	○	×
	Livre 14	防衛・田舎・庭・公道等 その他施設	E	○	○	○
	Livre 15	一般諸要素	F	○	○	○
	Livre 16	建築家職能	G	×	×	×

この表から読み取れるように、「『建築学』草稿」では、前記7分類のうち、EおよびFの項目に関する記述がまとめられた。また、EおよびFの分類に着目すると、「『建築学』草稿」の内訳では、『建築の諸要素と理論』の第8書や同第9書に該当する論考はないが、その他の書のテーマに該当する論考は確認できる。このことから、「『建築学』草稿」が、概ね『建築の諸要素と理論』の第2巻以降の書のテーマに添った構成であることがわかる。

また、『建築の諸要素と理論』の第7書および第10書のテーマに対応する「『建築学』草稿」内の草稿には、『建築の諸要素と理論』の翻訳原稿が含まれておらず、「『建築学』草稿」が『建築の諸要素と理論』の単純な翻訳ではないことを示している。例えば、『建築の諸要素と理論』の第7書では、教育施設・公共施設として各種学校や博物館、美術館、科学館、図書館が主たる題材として取り上げられたが、中村順平は『建築の諸要素と理論』からそれぞれを翻訳し、自身の草稿に並べることはなく、

むしろ、その他のフランス語文献を使用し、自身の草稿に加えた。特に、これらの建築プログラムで参照されたフランス語文献は、主に雑誌“L'Architecture d'Aujourd'hui”であった。記事の選択に当たっては、雑誌掲載の史的源流を探る解説記事部分が主に翻訳されたが、一部当時の最新事例に関する論考も参照された。

そして、第10書についても同様に、『建築の諸要素と理論』では、公益施設として商業施設や物販・食品販売施設、証券取引所、公衆浴場、鉄道関連施設、劇場が主たる題材として取り上げられたが、『「建築学」草稿』では、これらのうち公衆浴場および劇場の話題が『建築の諸要素と理論』以外の文献から取り上げられた。特に、劇場については、様々な劇場の種類を取り上げ、フランス語文献と日本語文献の双方を使用し、東西の劇場比較が可能な構成となっている。

一方、『建築の諸要素と理論』の第11書のテーマに対応する『「建築学」草稿』内の草稿を除き、その他の項目では、『建築の諸要素と理論』以外のフランス語文献の翻訳原稿が含まれた。例えば、第6書では、中村順平は、居住施設の概説のために『建築の諸要素と理論』を参照したが、その他、過去の事例は『フランス考古学教本』を参照し、また、日本の住宅史に関する部分は『住宅建築要義』を参照した。『「建築学」草稿』における居住施設に関する論考部は、その史的源流を遡る形で構成されており、雑誌の参照などは見られない。そのため、当時の新しい住宅、特にモダニストによる住宅などに関する論考などは取り上げられていない。

なお、『建築の諸要素と理論』の第11書のテーマに対応する『「建築学」草稿』内の草稿では、『建築の諸要素と理論』の内容が翻訳されたが、ヴォールト天井に関する論考部分の抄訳のみが行われたにすぎず、『建築の諸要素と理論』第3巻では主に教会建築について多くの紙面を割いたが、『「建築学」草稿』では、『建築の諸要素と理論』に比して重要性の低いテーマだったのである。

また、『建築の諸要素と理論』第4巻からは、建築家職能に関する論考以外の部分が参照されている。なお、『「建築学」草稿』において『建築の諸要素と理論』が参照された草稿のうち、その半数以上が第4巻掲載の内容であった。

以上より、『「建築学」草稿』には、『建築の諸要素と理論』第2巻から第4巻までに掲載された題材が適宜拾い出された。しかし、『「建築学」草稿』の内容の展開において、『建築の諸要素と理論』は一部で参照されたが、他のフランス語文献や日本語文献からの題材が採用され、『「建築学」草稿』全体が構成された。

4.3 「『建築学』草稿」にみるフランス建築教育手法

「建築学」科目が、エコール・デ・ボザールの「建築理論」科目を意識したものであったのならば、エコール・デ・ボザールにおける同科目の教員の役割が、中村順平の意識に反映された可能性がある。前述のように、エコール・デ・ボザールの「建築理論」科目の担当者の主な役割は、建築理論に関する講義、横浜高等工業学校でいえば「建築学」科目と各種設計競技課題の考案・出題であった。こうしたエコール・デ・ボザールにおける役割を考慮すれば、中村順平が課した設計課題と「建築学」科目の相関関係が見出せる可能性がある。そこで、前章でまとめたこれまでに収集した課題テーマ 312 点と「『建築学』草稿」のタイトル見出しを比較し、両者の相関関係を考察する。

表 3.4.7 「『建築学』草稿」表題と設計課題タイトル比較表

章	『建築学』草稿 表題	設計課題タイトル
1	住宅に於ける建築構成	共同住宅（略+本：1927 年）職工住宅（本：1931 年 9 月，1936 年 11 月，1938 年 12 月）山の家（1933 年 7 月）渡し守の家（1935 年 1 月）在支高官住宅（本：1938 年 12 月）Un hôtel particulier（本：1940 年 1 月）漁夫の家（ア：1937 年 7 月）中流住宅（ア：1941 年 11 月）
2	居住、近代建築以前の居室	客室ノ Cheminée 暖炉（ア：1929 年 2 月）
3	田舎建築	池畔ノ離れ家（ア：1936 年 1 月），漁夫ノ家（ア：1937 年 7 月）
4	建築と公道（続き）	京浜復興記念聯合大博覧会正門（本：1927 年 11 月）
5	ブルガステル橋	観桜橋（ア：1938 年 4 月）
6	門及塀	横浜復興大博覧会正門及圍障（ア：1934 年 10 月）華族会館正面及塀（ア：1935 年 1 月）薬医門ノ研究（ア：1938 年 3 月）木造長屋門（ア：1938 年 11 月）陸軍大学正門及圍障（ア：1938 年 12 月），宮殿表廣庭ノ圍障（16 エ：1943 年 6 月）
7	通路	美術館内庭 portique（ア：1934 年 2 月）宮中御苑内廻廊（ア：1941 年 5 月）
8	陸軍建築	鬼ヶ島城門（1937 年 12 月）
9	記念碑	画家 Monet の碑（10 エ：1927 年）（常陸丸殉難記念碑）（6 日：1927 年）常陸丸殉難記念碑（12 エ：1929 年 5 月）日本海海戦ニ於ケル東郷元帥ノ碑（16 エ：1930 年 5 月）航空研究犠牲者の記念碑（12 エ：1931 年 10 月）満州建国大記念碑（本：1933 年 3 月）千早城址の碑（16 エ：1935 年 2 月）前校長鈴木達治氏記念碑（16 エ：1935 年 6 月）陸軍戦病死者合同碑（16 エ：1937 年 11 月）横浜工業会会員表忠碑（16 エ：1938 年 11 月）赤穂義士切腹跡記念碑（16 エ：1939 年 10 月）三溪原富太郎先生碑（16 エ：1941 年 5 月）
10	公道と建築	江湾競馬場戦勝大凱旋門（16 エ：1932 年 3 月）横浜復興大博覧会正門及圍障（ア：1934 年 10 月）満洲国皇帝歓迎門（16 エ：1935 年 1 月）陸軍大学正門及圍障（ア：1938 年 12 月）大東亜民族歓迎門（16 エ：1944 年 2 月）
11	路上の諸建築（有用建築の部）	横浜櫻道下隧道入口（ア：1928 年 2 月）公園内の地下鉄入口（3 日：1928 年 2 月）地下鉄道換気塔（16 エ：1935 年 12 月）
12	内庭	宮殿内庭入口（ア：1929 年 5 月）宮殿内庭（ア：1939 年 2 月）宮殿内庭入隅（ア：1937 年 1 月，1938 年 2 月，1940 年 2 月）
13	城郭建築（日本ノ分）	日本建築・時代様式の研究「建築図画」
14	屋根勾配とその形状	小市場（ア：1931 年 9 月，1941 年 9 月）馬小屋（ア：1936 年 6 月）
15	小屋	木造牛小屋（ア：1935 年 5 月）
16	照明	維新支那館（16 エ：1938 年 11 月）
17	古代の工業・ポンペイ	
18	中世の工業	硝子工場（本：1933 年 1 月）
19	工場	
20	シネマ・スタジオ	映画ノスタジオ（略・本・構：1938 年 1 月，1940 年 1 月）
21	ヴォールト教会	Une Loge（ア：1936 年 12 月）Voûte en pendentif ノ研究（ア：1939 年 2 月）穹窿ノ Galerie（ア：1938 年 3 月）

章	建築学草稿表題	設計課題タイトル
22	火葬場	火葬場祭壇窯入口（ア：1943年1月）
23	死体焼却炉	
24	軍人墓地	
25	消極防御	野戦病院内祭壇（16エ：1937年9月）
26	建物における固有音響現象	街頭火叩小屋（16エ：1943年5月）
27	劇場	
28	国立オペラ劇場の新設備	
29	船	民衆劇場（略・本：1932年5月） 劇場内 Foyer（ア：1934年11月）
30	交通	琵琶湖丸（16エ：1937年4月）宮中池上遊覧船（16エ：1931年2月）
31	交通（日本）	交通博物館（略・本・構：1929年1月）奈良停車場（略・本：1929年9月）満州鉄道国賓客車内装飾（12エ：1932年2月）在満州通過駅（略・本・構：1933年）建築科山車（16エ：1937年6月）明治神宮駅 Quais abris（16エ：1939年6月）電車通過駅（16エ：1941年4月）乗合自動車待合所（16エ：1941年9月）自働車abri（ア：1928年10月，1937年12月）電車通過駅（16エ：1941年4月）
32	地上の移動	
33	陸運史、繁駕	
34	陸運	
35	筆記・計算機器	
36	図書館	国立美術院図書館入口（ア：1932年11月）帝国美術図書館（3日略：1934年12月）小図書館（ア：1938年10月）
37	書庫	帝国美術図書館（3日略：1934年12月）
38	博物館	横浜市美術館（ア：1927年10月1934年9月）交通博物館（略・本・構：1929年1月）日本美術陳列館（略・本・構：1932年1月）美術館正面入口（ア：1934年4月）某市美術館（ア：1936年4月）小美術館（ア：1938年6月）支那美術館（本：1939年2月）
39	バジリク	Un Dôme の研究（ア：1936年5月）
40	ローマの工営	歩兵小隊ノ営舎（ア1938年9月）歩兵大隊ノ営舎（ア：1936年9月）
41	攻城兵器	
42	公衆浴場	
43	公共祝祭	某温泉浴場内フランス庭園（ア：1927年11月，1933年9月）共同浴場（12エ：1932年5月，16エ：1935年12月）水浴場（ア：1934年6月）
44	住宅建築	祭禮用神輿（16エ：1936年6月）祭典用神輿（16エ：1941年6月）
45	個人住戸	各種住宅課題
46	食堂	各種住宅課題
47	日本住宅史	24人用食堂（本：1932年9月）小食堂暖炉（ア：1930年12月），
48	我国上代の顔料	池畔ノ離レ家（ア：1936年1月）在支日本館（1939年2月）
49	人形芝居劇場	聖徳太子厨子（16エ：1936年11月）
50	人形劇場	紙芝居小屋（16エ：1935年11）満州集団移民部落円舞用櫓（16エ：1941年5月），移動音楽堂（16エ：1943年5月）操人形劇場（16エ：1942年3月）Marionnette 小劇場（16エ：1943年6月）
51	サーカス小屋と競馬場	馬術練習所（略・本：1927年）江湾競馬場戦勝大凱旋門（16エ：1932年3月）馬小屋（ア：1936年6月）満州集団移民部落円舞用櫓（16エ：1941年5月）移動音楽堂（16エ：1943年5月）有蓋調馬場（ア：1937年9月）
52	日本劇場史	能楽出品館（ア：1935年2月）
53	鉄造小屋組	
54	鉄筋コンクリート	Balancement ヲ有スル鉄筋コンクリート階段（ア：1932年5月，1936年2月）
55	基礎	日本美術陳列館（略・本・構：1932年1月）映画ノスタジオ（略・本・構：1938年1月）
【略記号凡例】 ア：「要素分析」課題 16エ：「16時間略設計」課題 12エ：「12時間略設計」課題 3日設計：3日間「本設計」課題 本：「本設計」課題 略・本：「12時間略設計+本仕上」課題 略・本・構：「12時間略設計+本仕上+構造設計」課題		

前表（表 3.4.7）からわかるように、『「建築学」草稿』の各テーマには、それと対応する設計課題が存在した。このことから、『「建築学」草稿』が設計課題説明用に使用された可能性がある。この仮説を卒業生大西春雄氏へヒアリングしたところ、「建築学」の講義の後に略設計課題が出題された記憶があるとの証言が得られた。このようなことから考えれば、『「建築学」草稿』と設計課題は密接に関連したものといえる。つまり、『「建築学」草稿』の各テーマが講義内容となり、住宅、交通（陸運・海運）・インフラなどの土木・都市施設、防衛施設、劇場・図書館・博物館等の公共施設、火葬場・墓地・記念碑、構造、設備等到大別でき、それぞれに対応する設計課題が用意された。

このように「建築学」科目は、単なる座学講義で完結した存在ではなく、その講義では、その講義後に出题予定の設計競技課題のプログラムに沿った題材が説明され、設計課題で問われるプログラムに関する歴史的な展開や先行事例の紹介が、「建築学」科目で教授されたのだろう。つまり、設計課題に取り組むにあたり、各プログラムの建築的な問題点や技術的な課題や、これらの諸要素とその理論を「建築学」科目の講義を通じて提示し、その確認作業として設計課題が位置づけられた教育手法が採用されたといえる。したがって、中村順平の建築教育の特徴は、座学で講義したプログラムに関する理論的な内容を実践的な課題によって確認させる点にあった。

中村順平のこうした教育手法は、エコール・デ・ボザールにおける「建築理論」科目の、特にジュリアン・ガデの『建築の諸要素と理論』でまとめられたスタイルであり、また、エドワー・アルノーが投影機を使用した講義の後に、自身の講義録をトレースさせたというスタイルを融合し、中村順平の教育スタイルを確立したということもできる。このことから、中村順平は、エコール・デ・ボザールにおける「建築理論」科目やエコール・デ・ボザールで受けた「構造」科目の担当教員が行なった伝統といえる座学と設計・製図の密接な連携による教育プログラムを踏襲し、フランスの建築理論のみならず教育手法を受容し、横浜高等工業学校での建築教育で実践した。

小結

本章では、中村順平の未定稿の『建築学』草稿に着目し、その参考文献の解明から、中村順平にみるフランス建築理論と教育手法の受容を考察した。

「1. 『建築学』草稿」では、1.1において、まず、『建築学』草稿に関する既往研究を整理し、これまで内容および章構成など十分に解明されてこなかった事実を整理した。その結果、この草稿が翻訳原稿と捉えた指摘や、『建築の諸要素と理論』の翻訳である可能性を指摘した既往研究を確認した。また、1.2では、『建築学』草稿の概要を整理した。その結果、『建築学』草稿には、明確な参考文献書誌情報の記載などが十分になされていないことを指摘した。

「2. 『建築学』草稿 参考文献調査」は、『建築学』草稿の参考文献の調査の方法や、具体的な解析の内容の報告である。

2.1では、『建築学』草稿の参照元発見に向けた分析・調査方法を述べ、中村順平の目次と草稿内の章立て記述から、章構成を整理した。その結果、この草稿が、本論55章からなるものであることを確認した。また、『建築学』草稿の本論から参考文献をフランス語または日本語と推定し、中村順平の目次および草稿中より読み取れる参考文献に関係する情報を整理し一覧表を作成した。

2.2は、草稿ノート第1冊目の全21章に関する参考文献調査の結果報告である。調査の結果、全21章中18章において使用された参考文献とその一致箇所を確認した。なお、全21章中1章については、その内容の半分で使用された参考文献を明らかにしたが、残り部分の該当文献の発見には至らなかった。また、残り2章については、該当文献の発見には至らなかった。

2.3は、草稿ノート第2冊目の全34章に関する参考文献調査の結果報告である。調査の結果、全34章中33章において使用された参考文献とその一致箇所を確認した。残り1章については、該当文献の発見には至らなかった。

2.4は、2.2および2.3で得られた結果から、フランス語・日本語参考文献それぞれの割合を比較した。その結果、草稿の1/6程度において日本語文献が参照されたことを確認した。翻訳原稿とされた『建築学』草稿だが、単に外国語の翻訳から構成されたものではないことを明らかにした。また、フランス語文献が使用された43章について、「①エコール・デ・ボザール歴代教員による文献」、「②技術教育機関・技術者向け文献」、「③歴史教則本」、「④フランス建築雑誌」、「⑤その他」、の5種に分類し、草稿におけるそれぞれの章数および頁数に関する割合を比較した。その結果、以上の分類のうち①に関連する文献が多数使用されたことを明らかにした。

「3. 『建築学』草稿にみるフランス建築理論」では、2.4で分類した5種の項目それぞれの特徴を考察した。

3.1では、「2. 『建築学』草稿 参考文献調査」で明らかにした参考文献の概要を整理した。こうした整理で作表した参考文献リスト上に草稿との関係を明示した。

3.2では、中村順平が参照した「①エコール・デ・ボザール歴代教員による文献」について概括した。その結果、『建築学』草稿では、単にジュリアン・ガデの『建築の諸要素と理論』が翻訳されただけではなく、ヴィオレ＝ル＝デュク、ルシアン・マーニュ、エドワー・アルノーといった他の歴代教員の文献の使用を確認した。こうしたことから、中村順平の「建築学」が『建築の諸要素と理論』の単なる翻訳ではなかったことを指摘した。

3.3 では、中村順平が参照した「②技術教育機関・技術者向け文献」について概括した。その結果、『「建築学」草稿』では、フランスおよびフランス語圏の技術学校や技術者養成機関等の講義録が参照されたことを確認した。また、これらの書物とエドワー・アルノーとの関係を考察した結果、『「建築学」草稿』では、エコール・サントラルの「構造」講義録が参照され、さらに、エドワー・アルノーの講義録で引用された文献が含まれたことを明らかにした。

3.4 では、中村順平が参照した「③歴史教則本」について概括した。その結果、『「建築学」草稿』では、2冊のフランスの歴史教則本の使用を確認した。また、ここでは、確認した2書の著者に着目し、エコール・デ・ボザールとの関係を分析した。その結果、これらの書物と中村順平の留学期の建築専門科目との関係性を確認した。

3.5 では、中村順平が参照した「④フランス建築雑誌」について概括した。その結果、この分類に該当する文献は、「①エコール・デ・ボザール歴代教員」による文献について多く参照されたことを確認した。また、中村順平が参照した雑誌は、エコール・デ・ボザール系の雑誌と当時の新進気鋭の雑誌の2種に大別できる。つまり、中村順平が、それぞれから最新事例を紹介し、「建築学」に導入したことが指摘できる。こうした「④フランス建築雑誌」の参照から、中村順平が『「建築学」草稿』を作成する際、単に書籍からの情報に頼るのではなく、雑誌の使用を加えることで、当時の最新技術の動向を捉えた意図が汲み取れる。海外最新情報を導入する意図であった可能性を指摘した。この事実は、草稿本文における雑誌の参照箇所からも明らかである。しかし、一方で、中村順平が参照した雑誌の訳出箇所は、建築プログラムの歴史的な記述や技術的な部分の翻訳も多く、“*L’Architecture d’Aujourd’hui*”に掲載された当時の新興勢力としてのモダニズム建築家らによる新たな建築思潮に関する情報はほとんど取り上げられていない。

3.6 では、中村順平が参照した前4項目に分類できない文献を概括した。その結果、この分類では、1935-36年に刊行された書物の参照が多数を占めたことを指摘した。

以上の参考文献の概括から、中村順平が、建築における美学的・意匠論的な側面、建築の類型学的な情報のみならず、構造、構法、設備や土木インフラにいたる都市的視点におよぶ多様な分野を横断的にまとめたことを明らかにした。さらに、これらの文献が、軍事・非軍事・海事 *Architecture militaire, civile et navale* の3領域を含有するものであったことを指摘した。

「4. 『「建築学」草稿』にみるフランスとの接点」では、まず、4.1において、『「建築学」草稿』における日本語文献とフランス語文献が参照された草稿の関係性を考察した。その結果、日本語文献が参照された草稿は、フランス語文献が参照された草稿と同一のプログラムのものが取り上げられ、東西の比較をする意図が現れていた。

4.2 では、『建築の諸要素と理論』と『「建築学」草稿』の構成上の類似性を前章1.2で立てた仮説をもとに検証した。その結果、『「建築学」草稿』には、『建築の諸要素と理論』第2巻から第4巻までの「構成の諸要素」および「構成の一般諸要素」に関連する題材のうち、「官公庁施設」および「医療施設」を除く部分に対応する題材が適宜拾い出されていたことを確認した。一方、こうした構成上の類似性は指摘できるが、『「建築学」草稿』の内容の展開では、『建築の諸要素と理論』が一部で参照されたが、他のフランス語文献や日本語文献からの題材も含まれていた。

4.3 では、中村順平の横浜高等工業学校での役割をエコール・デ・ボザールの「建築理論」科目の教育者とみなしたと仮定し、エコール・デ・ボザールの「建築理論」科目の教育者の役割から、『「建築

学』草稿」と「実習」科目の関係性を考察した。その結果、『「建築学」草稿』のテーマと「実習」科目のテーマの相関関係を発見したことから、両科目がいわばエコール・デ・ボザールの設計競技課題と「建築理論」科目の講義の関係と類似する関係であったことを指摘した。つまり、中村順平は横浜高等工業学校における役割に、エコール・デ・ボザールの「建築理論」科目の教育者の役割を投影し、座学で講義したプログラムに関する理論的な内容を実践的な設計競技課題によって確認させる教育手法を確立し、実践した。

以上より、『「建築学」草稿』の分析を通じ、中村順平にみるフランス建築理論と教育手法の受容を確認した。これまで中村順平の「建築学」著述は、ジュリアン・ガデの建築理論書の翻訳のように考えられてきた。しかし、本章で明らかにしたように、『建築の諸要素と理論』を受容しただけでなく、「構造」理論書の受容や、フランス語文献のみならず日本語文献の参照も明らかにした。特に、ジュリアン・ガデ以外の理論書は、前章で述べたエドワー・アルノーとの関係が指摘できるものであった。特に、エドワー・アルノーの講義録に掲載された図版の出典として取り上げられた書物が、この『「建築学」草稿』において参照された。つまり、中村順平にみるエドワー・アルノーから受けた影響が、この『「建築学」草稿』にも反映されていた。中村順平はこれまで芸術学校の表現技術を導入したことに着目されてきたが、こうした草稿の解明から、フランス唯一の建築家養成機関であったエコール・デ・ボザールの教育の導入だけにとどまらず、フランスの技術者養成の高等教育機関の講義録や技術者向けの書物、さらに雑誌掲載された最新技術情報を参照することで「建築学」全体の骨格を形成し、横浜高等工業学校の建築教育で実践した。

また、草稿本文にみる仏語参考文献に着目すれば、書籍と雑誌に大別され、書籍については、大系的な文献の一部が使用され、それらの文献は、入手経路は不明だが、出版年から中村順平が横浜で教鞭をとる1925年以前のものと1935-1940年頃に大別できる。特に、雑誌については1938年前後のものが多く使用されていることから、雑誌『建築世界』での連載が終了した1937年2月以降も、中村順平は「建築学」の原稿を執筆し続けていたことがわかる。1925年以前出版の書籍は、中村順平がエコール・デ・ボザール留学中に入手したものと思われ、その多くはアルノーの講義や講義録と関係の深い文献であった⁷⁵⁷。1935-1936年頃の書籍は、その入手経路などは明らかではないが、中村順平がフランスから帰国後も定期的にフランス建築の動向の把握に努めていた可能性や、伊藤三郎が1935年2月より2ヵ年、「建築構造」と「幾何図学」の研究で在仏研修中に入手した可能性が指摘できる。

さらに、『「建築学」草稿』の特徴として、『建築の諸要素と理論』の出現以前の建築理論書が極めて少ない点も挙げられる。例えば、ギュスターヴ・オスレの講義録シリーズのジョルジュ・テュブッフの『建築論』、ジュリアン・ガデが賛辞をおくったジャン＝ニコラ＝レイ・デュランの建築論⁷⁵⁸やレオンス・レイノーによる『建築論』⁷⁵⁹など、ジュリアン・ガデが範とした理論書の参照は確認できず、これら過去に遡った文献の使用は見られない。

これら3つの『建築論』を参照した草稿が存在しない理由として考えられることは、中村順平がエコール・デ・ボザールで受けた当時の教育の反映である可能性が高く、エドワー・アルノーの講義録を通じて得た情報に裏付けられている。いずれにせよ、中村順平の建築理論の大枠を決定付けていたのはジュリアン・ガデの『建築の諸要素と理論』で、その構成が下敷きとなり、19世紀末から20世紀初頭に発刊されたフランス語圏の技術者養成機関のために編まれた講義録や当時のフランスの建築雑誌等がベースとなったことは明らかになった。

中 章
古代の工業
Pompei (Architecture romaine 24)
Pompeiの bourgeoisie は二十歳つがと愛嬌い、之を標

▲番号 17

中 章
Les Usines
工場建築の organisation generale の内訳は解決と感嘆
▲番号 19

中 章(Ⅲ) des Eglises Rôtiées
吾人今午 | かな | 批判 | 判つた | は | 美 | 協 | は | ナ | ス | ト | 建築 | の | 巨大 | な | 者 |
▲番号 21

中 章
Fours Crematoires
(Edifice Public - 162)
火葬は昔はナ | 12 | 2 | は | 甚 | 好 | ま | 1 | も | 9 | 2 | 2 | つ | せ | 火葬は新次
▲番号 23

中 章
Defense Passure
(Arch. d'aujourd'hui N°12 34)
飛行機は過去より 未来の戦争 は更に大なる役割を
▲番号 25

中 章
Le Théâtre
(Arch. d'aujourd'hui 24)
知られたる昔のドラマの場所 Phœstos 及 Crossos の大いなり
▲番号 27

中 章
Navires
工史的な古代を語るには先づ初めは来るものは計て工じ
▲番号 29

中 章
交 通 (日本)
(瀬田湖雪村に依る)
太古の交通様式は陸は 水路 は 船 の外何もない
▲番号 31

中 章
Histoire de la Locomotion terrestre
L'Attelage 駕馬
Le portage à 2 par litère ou par chaise
荷物を車や置物の二匹の馬獣では出来ぬが馬車二匹の馬
▲番号 33

中 章
L'Industrie au Moyen age
中世の工芸は 利得とる産業 1が1つある、交通 の困難
▲番号 18

中 章
Studio de Cinema
Cinemaの studioの整備 2 は 3 の探光は 4 の光
▲番号 20

中 章
Crematoires
(Arch. d'aujourd'hui 7 p. 64-162)
何日の時も埋葬法は 5 の肉類と 6 の新会場のなる秩序
▲番号 22

中 章
Cimetière Militaire
(Arch. d'aujourd'hui 7 p. 77)
Cimetière は 7 1934年の N°6 中 8 表は 9 の研究 10 の
▲番号 24

中 章
Phénomènes Sonores Particuliers
au Bâtiments
音の現象は 11 解決する如く 12 の新会場のなる秩序
▲番号 26

中 章
Le Nouvel Equipement des Théâtres
Nationaux
Opéra
(L'Architecture 1939 juin - 162)
近代の舞台は 13 の舞台と 14 の舞台の2つあり、15 の電気と 16 の
▲番号 28

中 章
交 通
(島田幸一博士の交通論に依る)
交通は 17 の及 18 の 19 の 20 の 21 の 22 の 23 の 24 の 25 の 26 の 27 の 28 の 29 の 30 の 31 の 32 の 33 の 34 の 35 の 36 の 37 の 38 の 39 の 40 の 41 の 42 の 43 の 44 の 45 の 46 の 47 の 48 の 49 の 50 の 51 の 52 の 53 の 54 の 55 の 56 の 57 の 58 の 59 の 60 の 61 の 62 の 63 の 64 の 65 の 66 の 67 の 68 の 69 の 70 の 71 の 72 の 73 の 74 の 75 の 76 の 77 の 78 の 79 の 80 の 81 の 82 の 83 の 84 の 85 の 86 の 87 の 88 の 89 の 90 の 91 の 92 の 93 の 94 の 95 の 96 の 97 の 98 の 99 の 100 の 101 の 102 の 103 の 104 の 105 の 106 の 107 の 108 の 109 の 110 の 111 の 112 の 113 の 114 の 115 の 116 の 117 の 118 の 119 の 120 の 121 の 122 の 123 の 124 の 125 の 126 の 127 の 128 の 129 の 130 の 131 の 132 の 133 の 134 の 135 の 136 の 137 の 138 の 139 の 140 の 141 の 142 の 143 の 144 の 145 の 146 の 147 の 148 の 149 の 150 の 151 の 152 の 153 の 154 の 155 の 156 の 157 の 158 の 159 の 160 の 161 の 162 の 163 の 164 の 165 の 166 の 167 の 168 の 169 の 170 の 171 の 172 の 173 の 174 の 175 の 176 の 177 の 178 の 179 の 180 の 181 の 182 の 183 の 184 の 185 の 186 の 187 の 188 の 189 の 190 の 191 の 192 の 193 の 194 の 195 の 196 の 197 の 198 の 199 の 200 の 201 の 202 の 203 の 204 の 205 の 206 の 207 の 208 の 209 の 210 の 211 の 212 の 213 の 214 の 215 の 216 の 217 の 218 の 219 の 220 の 221 の 222 の 223 の 224 の 225 の 226 の 227 の 228 の 229 の 230 の 231 の 232 の 233 の 234 の 235 の 236 の 237 の 238 の 239 の 240 の 241 の 242 の 243 の 244 の 245 の 246 の 247 の 248 の 249 の 250 の 251 の 252 の 253 の 254 の 255 の 256 の 257 の 258 の 259 の 260 の 261 の 262 の 263 の 264 の 265 の 266 の 267 の 268 の 269 の 270 の 271 の 272 の 273 の 274 の 275 の 276 の 277 の 278 の 279 の 280 の 281 の 282 の 283 の 284 の 285 の 286 の 287 の 288 の 289 の 290 の 291 の 292 の 293 の 294 の 295 の 296 の 297 の 298 の 299 の 300 の 301 の 302 の 303 の 304 の 305 の 306 の 307 の 308 の 309 の 310 の 311 の 312 の 313 の 314 の 315 の 316 の 317 の 318 の 319 の 320 の 321 の 322 の 323 の 324 の 325 の 326 の 327 の 328 の 329 の 330 の 331 の 332 の 333 の 334 の 335 の 336 の 337 の 338 の 339 の 340 の 341 の 342 の 343 の 344 の 345 の 346 の 347 の 348 の 349 の 350 の 351 の 352 の 353 の 354 の 355 の 356 の 357 の 358 の 359 の 360 の 361 の 362 の 363 の 364 の 365 の 366 の 367 の 368 の 369 の 370 の 371 の 372 の 373 の 374 の 375 の 376 の 377 の 378 の 379 の 380 の 381 の 382 の 383 の 384 の 385 の 386 の 387 の 388 の 389 の 390 の 391 の 392 の 393 の 394 の 395 の 396 の 397 の 398 の 399 の 400 の 401 の 402 の 403 の 404 の 405 の 406 の 407 の 408 の 409 の 410 の 411 の 412 の 413 の 414 の 415 の 416 の 417 の 418 の 419 の 420 の 421 の 422 の 423 の 424 の 425 の 426 の 427 の 428 の 429 の 430 の 431 の 432 の 433 の 434 の 435 の 436 の 437 の 438 の 439 の 440 の 441 の 442 の 443 の 444 の 445 の 446 の 447 の 448 の 449 の 450 の 451 の 452 の 453 の 454 の 455 の 456 の 457 の 458 の 459 の 460 の 461 の 462 の 463 の 464 の 465 の 466 の 467 の 468 の 469 の 470 の 471 の 472 の 473 の 474 の 475 の 476 の 477 の 478 の 479 の 480 の 481 の 482 の 483 の 484 の 485 の 486 の 487 の 488 の 489 の 490 の 491 の 492 の 493 の 494 の 495 の 496 の 497 の 498 の 499 の 500 の 501 の 502 の 503 の 504 の 505 の 506 の 507 の 508 の 509 の 510 の 511 の 512 の 513 の 514 の 515 の 516 の 517 の 518 の 519 の 520 の 521 の 522 の 523 の 524 の 525 の 526 の 527 の 528 の 529 の 530 の 531 の 532 の 533 の 534 の 535 の 536 の 537 の 538 の 539 の 540 の 541 の 542 の 543 の 544 の 545 の 546 の 547 の 548 の 549 の 550 の 551 の 552 の 553 の 554 の 555 の 556 の 557 の 558 の 559 の 560 の 561 の 562 の 563 の 564 の 565 の 566 の 567 の 568 の 569 の 570 の 571 の 572 の 573 の 574 の 575 の 576 の 577 の 578 の 579 の 580 の 581 の 582 の 583 の 584 の 585 の 586 の 587 の 588 の 589 の 590 の 591 の 592 の 593 の 594 の 595 の 596 の 597 の 598 の 599 の 600 の 601 の 602 の 603 の 604 の 605 の 606 の 607 の 608 の 609 の 610 の 611 の 612 の 613 の 614 の 615 の 616 の 617 の 618 の 619 の 620 の 621 の 622 の 623 の 624 の 625 の 626 の 627 の 628 の 629 の 630 の 631 の 632 の 633 の 634 の 635 の 636 の 637 の 638 の 639 の 640 の 641 の 642 の 643 の 644 の 645 の 646 の 647 の 648 の 649 の 650 の 651 の 652 の 653 の 654 の 655 の 656 の 657 の 658 の 659 の 660 の 661 の 662 の 663 の 664 の 665 の 666 の 667 の 668 の 669 の 670 の 671 の 672 の 673 の 674 の 675 の 676 の 677 の 678 の 679 の 680 の 681 の 682 の 683 の 684 の 685 の 686 の 687 の 688 の 689 の 690 の 691 の 692 の 693 の 694 の 695 の 696 の 697 の 698 の 699 の 700 の 701 の 702 の 703 の 704 の 705 の 706 の 707 の 708 の 709 の 710 の 711 の 712 の 713 の 714 の 715 の 716 の 717 の 718 の 719 の 720 の 721 の 722 の 723 の 724 の 725 の 726 の 727 の 728 の 729 の 730 の 731 の 732 の 733 の 734 の 735 の 736 の 737 の 738 の 739 の 740 の 741 の 742 の 743 の 744 の 745 の 746 の 747 の 748 の 749 の 750 の 751 の 752 の 753 の 754 の 755 の 756 の 757 の 758 の 759 の 760 の 761 の 762 の 763 の 764 の 765 の 766 の 767 の 768 の 769 の 770 の 771 の 772 の 773 の 774 の 775 の 776 の 777 の 778 の 779 の 780 の 781 の 782 の 783 の 784 の 785 の 786 の 787 の 788 の 789 の 790 の 791 の 792 の 793 の 794 の 795 の 796 の 797 の 798 の 799 の 800 の 801 の 802 の 803 の 804 の 805 の 806 の 807 の 808 の 809 の 810 の 811 の 812 の 813 の 814 の 815 の 816 の 817 の 818 の 819 の 820 の 821 の 822 の 823 の 824 の 825 の 826 の 827 の 828 の 829 の 830 の 831 の 832 の 833 の 834 の 835 の 836 の 837 の 838 の 839 の 840 の 841 の 842 の 843 の 844 の 845 の 846 の 847 の 848 の 849 の 850 の 851 の 852 の 853 の 854 の 855 の 856 の 857 の 858 の 859 の 860 の 861 の 862 の 863 の 864 の 865 の 866 の 867 の 868 の 869 の 870 の 871 の 872 の 873 の 874 の 875 の 876 の 877 の 878 の 879 の 880 の 881 の 882 の 883 の 884 の 885 の 886 の 887 の 888 の 889 の 890 の 891 の 892 の 893 の 894 の 895 の 896 の 897 の 898 の 899 の 900 の 901 の 902 の 903 の 904 の 905 の 906 の 907 の 908 の 909 の 910 の 911 の 912 の 913 の 914 の 915 の 916 の 917 の 918 の 919 の 920 の 921 の 922 の 923 の 924 の 925 の 926 の 927 の 928 の 929 の 930 の 931 の 932 の 933 の 934 の 935 の 936 の 937 の 938 の 939 の 940 の 941 の 942 の 943 の 944 の 945 の 946 の 947 の 948 の 949 の 950 の 951 の 952 の 953 の 954 の 955 の 956 の 957 の 958 の 959 の 960 の 961 の 962 の 963 の 964 の 965 の 966 の 967 の 968 の 969 の 970 の 971 の 972 の 973 の 974 の 975 の 976 の 977 の 978 の 979 の 980 の 981 の 982 の 983 の 984 の 985 の 986 の 987 の 988 の 989 の 990 の 991 の 992 の 993 の 994 の 995 の 996 の 997 の 998 の 999 の 1000 の 1001 の 1002 の 1003 の 1004 の 1005 の 1006 の 1007 の 1008 の 1009 の 1010 の 1011 の 1012 の 1013 の 1014 の 1015 の 1016 の 1017 の 1018 の 1019 の 1020 の 1021 の 1022 の 1023 の 1024 の 1025 の 1026 の 1027 の 1028 の 1029 の 1030 の 1031 の 1032 の 1033 の 1034 の 1035 の 1036 の 1037 の 1038 の 1039 の 1040 の 1041 の 1042 の 1043 の 1044 の 1045 の 1046 の 1047 の 1048 の 1049 の 1050 の 1051 の 1052 の 1053 の 1054 の 1055 の 1056 の 1057 の 1058 の 1059 の 1060 の 1061 の 1062 の 1063 の 1064 の 1065 の 1066 の 1067 の 1068 の 1069 の 1070 の 1071 の 1072 の 1073 の 1074 の 1075 の 1076 の 1077 の 1078 の 1079 の 1080 の 1081 の 1082 の 1083 の 1084 の 1085 の 1086 の 1087 の 1088 の

Le Magasin de Livres
(Arch. d'Anjou et L'au p. 592)

人々がこれを知つてよければその書庫を第幾世と称する。附記。

▲番号 37

▲番号 37

番号 37
 手
 Basiliques
 (archéologie Romaine 31)
 裁判は初めの二つは forum であるが、第 2 及び 3 号
 ▲番号 39

▲番号 39

Sièges des Places machines
 de guerre
 陸軍の砲台に使用する為の市販の中古金器を有するが、其の
 番号 41

▲番号 41

^A ^甲
 Fêtes Publiques
 (Ansch. d'aujourd'hui - 20)
 乙 照生所 述 他 的 概 括 中 紀 念 日 也 紀 念 日 的 高 考 已 表 明
 ▲ 番 号 43

▲番号 43

▲番号 45

〒 市
Appartements Privés
(a.k.a. 97)

chambre à coucher 1x 4x7 2x 8x7 1x 10x7 1x 12x7
5L 1x 10x7 1x 12x7 1x 14x7 1x 16x7 1x 18x7 1x 20x7 1x 22x7 1x 24x7 1x 26x7 1x 28x7 1x 30x7 1x 32x7 1x 34x7 1x 36x7 1x 38x7 1x 40x7 1x 42x7 1x 44x7 1x 46x7 1x 48x7 1x 50x7 1x 52x7 1x 54x7 1x 56x7 1x 58x7 1x 60x7 1x 62x7 1x 64x7 1x 66x7 1x 68x7 1x 70x7 1x 72x7 1x 74x7 1x 76x7 1x 78x7 1x 80x7 1x 82x7 1x 84x7 1x 86x7 1x 88x7 1x 90x7 1x 92x7 1x 94x7 1x 96x7 1x 98x7 1x 100x7 1x 102x7 1x 104x7 1x 106x7 1x 108x7 1x 110x7 1x 112x7 1x 114x7 1x 116x7 1x 118x7 1x 120x7 1x 122x7 1x 124x7 1x 126x7 1x 128x7 1x 130x7 1x 132x7 1x 134x7 1x 136x7 1x 138x7 1x 140x7 1x 142x7 1x 144x7 1x 146x7 1x 148x7 1x 150x7 1x 152x7 1x 154x7 1x 156x7 1x 158x7 1x 160x7 1x 162x7 1x 164x7 1x 166x7 1x 168x7 1x 170x7 1x 172x7 1x 174x7 1x 176x7 1x 178x7 1x 180x7 1x 182x7 1x 184x7 1x 186x7 1x 188x7 1x 190x7 1x 192x7 1x 194x7 1x 196x7 1x 198x7 1x 200x7 1x 202x7 1x 204x7 1x 206x7 1x 208x7 1x 210x7 1x 212x7 1x 214x7 1x 216x7 1x 218x7 1x 220x7 1x 222x7 1x 224x7 1x 226x7 1x 228x7 1x 230x7 1x 232x7 1x 234x7 1x 236x7 1x 238x7 1x 240x7 1x 242x7 1x 244x7 1x 246x7 1x 248x7 1x 250x7 1x 252x7 1x 254x7 1x 256x7 1x 258x7 1x 260x7 1x 262x7 1x 264x7 1x 266x7 1x 268x7 1x 270x7 1x 272x7 1x 274x7 1x 276x7 1x 278x7 1x 280x7 1x 282x7 1x 284x7 1x 286x7 1x 288x7 1x 290x7 1x 292x7 1x 294x7 1x 296x7 1x 298x7 1x 300x7 1x 302x7 1x 304x7 1x 306x7 1x 308x7 1x 310x7 1x 312x7 1x 314x7 1x 316x7 1x 318x7 1x 320x7 1x 322x7 1x 324x7 1x 326x7 1x 328x7 1x 330x7 1x 332x7 1x 334x7 1x 336x7 1x 338x7 1x 340x7 1x 342x7 1x 344x7 1x 346x7 1x 348x7 1x 350x7 1x 352x7 1x 354x7 1x 356x7 1x 358x7 1x 360x7 1x 362x7 1x 364x7 1x 366x7 1x 368x7 1x 370x7 1x 372x7 1x 374x7 1x 376x7 1x 378x7 1x 380x7 1x 382x7 1x 384x7 1x 386x7 1x 388x7 1x 390x7 1x 392x7 1x 394x7 1x 396x7 1x 398x7 1x 400x7 1x 402x7 1x 404x7 1x 406x7 1x 408x7 1x 410x7 1x 412x7 1x 414x7 1x 416x7 1x 418x7 1x 420x7 1x 422x7 1x 424x7 1x 426x7 1x 428x7 1x 430x7 1x 432x7 1x 434x7 1x 436x7 1x 438x7 1x 440x7 1x 442x7 1x 444x7 1x 446x7 1x 448x7 1x 450x7 1x 452x7 1x 454x7 1x 456x7 1x 458x7 1x 460x7 1x 462x7 1x 464x7 1x 466x7 1x 468x7 1x 470x7 1x 472x7 1x 474x7 1x 476x7 1x 478x7 1x 480x7 1x 482x7 1x 484x7 1x 486x7 1x 488x7 1x 490x7 1x 492x7 1x 494x7 1x 496x7 1x 498x7 1x 500x7 1x 502x7 1x 504x7 1x 506x7 1x 508x7 1x 510x7 1x 512x7 1x 514x7 1x 516x7 1x 518x7 1x 520x7 1x 522x7 1x 524x7 1x 526x7 1x 528x7 1x 530x7 1x 532x7 1x 534x7 1x 536x7 1x 538x7 1x 540x7 1x 542x7 1x 544x7 1x 546x7 1x 548x7 1x 550x7 1x 552x7 1x 554x7 1x 556x7 1x 558x7 1x 560x7 1x 562x7 1x 564x7 1x 566x7 1x 568x7 1x 570x7 1x 572x7 1x 574x7 1x 576x7 1x 578x7 1x 580x7 1x 582x7 1x 584x7 1x 586x7 1x 588x7 1x 590x7 1x 592x7 1x 594x7 1x 596x7 1x 598x7 1x 600x7 1x 602x7 1x 604x7 1x 606x7 1x 608x7 1x 610x7 1x 612x7 1x 614x7 1x 616x7 1x 618x7 1x 620x7 1x 622x7 1x 624x7 1x 626x7 1x 628x7 1x 630x7 1x 632x7 1x 634x7 1x 636x7 1x 638x7 1x 640x7 1x 642x7 1x 644x7 1x 646x7 1x 648x7 1x 650x7 1x 652x7 1x 654x7 1x 656x7 1x 658x7 1x 660x7 1x 662x7 1x 664x7 1x 666x7 1x 668x7 1x 670x7 1x 672x7 1x 674x7 1x 676x7 1x 678x7 1x 680x7 1x 682x7 1x 684x7 1x 686x7 1x 688x7 1x 690x7 1x 692x7 1x 694x7 1x 696x7 1x 698x7 1x 700x7 1x 702x7 1x 704x7 1x 706x7 1x 708x7 1x 710x7 1x 712x7 1x 714x7 1x 716x7 1x 718x7 1x 720x7 1x 722x7 1x 724x7 1x 726x7 1x 728x7 1x 730x7 1x 732x7 1x 734x7 1x 736x7 1x 738x7 1x 740x7 1x 742x7 1x 744x7 1x 746x7 1x 748x7 1x 750x7 1x 752x7 1x 754x7 1x 756x7 1x 758x7 1x 760x7 1x 762x7 1x 764x7 1x 766x7 1x 768x7 1x 770x7 1x 772x7 1x 774x7 1x 776x7 1x 778x7 1x 780x7 1x 782x7 1x 784x7 1x 786x7 1x 788x7 1x 790x7 1x 792x7 1x 794x7 1x 796x7 1x 798x7 1x 800x7 1x 802x7 1x 804x7 1x 806x7 1x 808x7 1x 810x7 1x 812x7 1x 814x7 1x 816x7 1x 818x7 1x 820x7 1x 822x7 1x 824x7 1x 826x7 1x 828x7 1x 830x7 1x 832x7 1x 834x7 1x 836x7 1x 838x7 1x 840x7 1x 842x7 1x 844x7 1x 846x7 1x 848x7 1x 850x7 1x 852x7 1x 854x7 1x 856x7 1x 858x7 1x 860x7 1x 862x7 1x 864x7 1x 866x7 1x 868x7 1x 870x7 1x 872x7 1x 874x7 1x 876x7 1x 878x7 1x 880x7 1x 882x7 1x 884x7 1x 886x7 1x 888x7 1x 890x7 1x 892x7 1x 894x7 1x 896x7 1x 898x7 1x 900x7 1x 902x7 1x 904x7 1x 906x7 1x 908x7 1x 910x7 1x 91

▲番号 45

日本住宅史
(武田住一日→30)

日本上座建築の創始は古来衛々たる天地根元空造也

▲番号 47

▲番号 47


▲番号 49

▲番号 49

② 番号 45
 Cirque et Hippodrome
 (cloquet 23)
 本は cirque と Hippodrome とは 5 行の amphithéâtre の形を 取つ
 番号 45
 ▲番号 51

▲番号 51

▲番号 53



 Chapente en Fer (Oset²お)

 Chapente métallique, 搭さ²鉄職人²は即 chaudronnier²は tôle, 手²922金

▲番号 53

▲番号 53

基础
Fundation
基礎

基礎は凡ての骨子で、用人がそれには「骨子」、*main, backbone*

▲番号 55

▲番号 55

Les Bibliothèques
(architecture d'aujourd'hui)

古代の図書館と現代の建築

▲番号 36

▲番号 36

▲番号 38

▲番号 38

番号 33
 X 年
 Casernemento dos Romanos
 (Archeolog. Roman = 16.11)
 ローマの兵営は Hygin の 規定によつて建てられる、各兵営は前西
 ▲番号 40

▲番号 40

▲番号「42」

▲番号「42」

第二号 42

Architecte domestique

他の凡てのArtが如何に"何事より得て来たる"ローマ人の都市建築

▲番号 44

▲番号 44

Triclinium 早
 (Vile celebre 等)
 大瓶 sally a' manger は peristyle の 面 に 挿入 した 物

▲番号 46

▲番号 46

我口上似の飲料
 自製するものか、市上即ちの
 日本酒類のときは、我口は、純粋な飲料と見えて、偽日本酒

▲番号 48

Le Théâtre des Marionette
(Arch. franc. 333)

▲番号 50

日本劇場史
(後編 第二十九回)
右表天照大神名義に奉仕する百五十人の神子種々の所業あり

▲番号 52

▲番号 52

Béton Armé (Ciment et acier)

定義: — *béton armé* is *béton de ciment* の 中 へ 鋼 筋 又は *acier* を入

▲番号 54

▲番号 54

第4章 註

⁶⁷⁶ 大阪歴史博物館編『館蔵資料集 5 建築家・中村順平資料』大阪歴史博物館，2009

⁶⁷⁷ 大阪歴史博物館編，前掲書

⁶⁷⁸ 中島久男「日本におけるエコール・デ・ボザール教育の導入について」『学術講演梗概集.F, 都市計画, 建築経済・住宅問題, 建築歴史・意匠 1987』pp.771-772, 日本建築学会, 1987, p.772

⁶⁷⁹ 網戸武夫『情念の幾何学』建築知識社, 1985, pp.336-337

⁶⁸⁰ 建築家。1942年横浜高等工業学校卒業後、鹿島建設株式会社設計部に入社。同設計部所属の天野太郎（1918-1990, 工学院大学助教授、東京藝術大学教授を歴任）主宰の有限会社天野太郎研究室に所属。1967年有限会社天野太郎研究室は天野・吉原設計事務所に改称。1990年天野太郎の死去により1992年に吉原設計事務所に改称。

⁶⁸¹ このノートは中村順平の死後、横浜高等工業学校の卒業生である網戸武夫や林久満らが中心となりワープロ、手書きで清書作業が行われた。この清書作業の注意書きを記したメモによると「元原稿1枚あたり清書原稿約3枚」とあるように1ページ概ね1200字程度で書かれた。清書作業を行った一人である市野昌（横浜高等工業学校建築学科1935年卒）が林久満にあてた1990年5月10日付けの手紙からは、網戸武夫によって清書作業の号令がかかり、多くの中村順平の教え子達がその清書作業にあたったとみられる。なお、市野昌の手紙には中村順平の「読めない字」が多く存在したため、校閲を林久満に依頼した経緯が綴られている。

⁶⁸² なお、章立ての記述がなく、また、参考文献情報の記載はないフランス語のみの4頁の草稿“Palais du resident general au Maroc Henri Prost et Albert Laprade architecte D.P.L.G.”が番号1と2の間に挿入されていたが、章立て記述がないことから、分析対象外とした。この文章は、翻訳されておらず、メモとして事後的に挿入されたと考えた。なお、この論考はフランスの近代都市計画家として名高く、フランスの植民地時代モロッコの諸都市（カサブランカなど）の都市デザインを手がけたアンリ・プロスト（Henri Prost, 1874-1959）とアルベール・ラプラード（Albert Laprade, 1883-1978）によるモロッコの総督宮に関するものである。

⁶⁸³ Bibliothèque nationale de France フランス国立図書館のポータルサイト <http://gallica.bnf.fr/?lang=FR>

⁶⁸⁴ Bibliothèque de la Cité de l'architecture et du patrimoine 建築・文化遺産都市図書館のポータルサイト <http://portaildocumentaire.citechaillot.fr/accueil-ermes.aspx>

⁶⁸⁵ Internet Archive インターネット・アーカイブのサイト <https://archive.org/>

⁶⁸⁶ 近代デジタルライブラリー（国立国会図書館）のサイト <http://kindai.ndl.go.jp/>

⁶⁸⁷ Guadet, J. : *Eléments et Théorie de l'architecture*, 4 vol., Tome I, Tome II, Tome III, Addition, Librairie de la construction moderne, n.d., 1901-1904。本論では“Tome I”を「第1巻」，“Tome II”を「第2巻」，“Tome III”を「第3巻」，“Tome Addition”を「第4巻」と表記した。

⁶⁸⁸ 渋谷五郎『日本建築学 上巻・下巻』須原屋書店，1923，渋谷五郎・長尾勝馬『日本建築 上巻・下巻』修文館，1940

⁶⁸⁹ Viollet-Le-Duc : *Dictionnaire raisonné de l'architecture française du XIe au XVIe siècle*, 10 vol., Bance et Morel, 1854-1868

⁶⁹⁰ Guillot, E. : *Edifices publics pour villes et villages*, Dunod, 1912

⁶⁹¹ 大類伸『城郭之研究』日本学術普及会，1915

⁶⁹² Oslet, G., Lascombe, A. : *Traité de couverture et plomberie - installations d'eau, de gaz, d'électricité. Tome 1- Couverture, Cours de construction 15e partie, Encyclopédie théorique et pratique des connaissances civiles et*

- militaires Partie civile, G. Fanchon, 1908
- ⁶⁹³ Oslet, G. : Traité de charpente en bois, Cours de construction 4^e partie, Encyclopédie théorique & pratique des connaissances civiles & militaires. Partie civile, Fanchon, 1891
- ⁶⁹⁴ René, C., Victor, C. : Manuel d'archéologie romaine, Tome I. Les monuments. Décoration des monuments. Sculpture, Tome II. Décoration des monuments (suite). Peinture et Mosaïque. Instruments de la vie publique et privée, A. Picard, 1916
- ⁶⁹⁵ René, C., Victor, C. : Manuel d'archéologie romaine, Tome I. Les monuments. Décoration des monuments. Sculpture, A. Picard, 1916
- ⁶⁹⁶ 主に分析を試みたものは、番号 18 までに判明した参考文献及び、雑誌“L'Architecture d'Aujourd'hui”, “La construction moderne”誌, “Architecte”“L'architecture”の4誌や中村順平が『建築学』草稿で参照した文献（ヴィオール・ル・デュク全10巻, ジュリアン・ガデ講義録全4巻, ギュスターヴ・オスレ監修「構造講義録」シリーズ全20部, ジョルジュ・エスピタイエ「構造講義録」シリーズ全16部）のほか, ジョルジュ・エスピタイエ (Georges-Frédéric Espitalier) の著書『工場・工業施設建設理論』Cours de construction des usines et des établissements industriels, 『ランシクロペディ・フランセーズ』などを調査したが、現在まで該当箇所は発見できていない。
- ⁶⁹⁷ Febvre, L. (éd) : Encyclopédie française, Société de gestion de l'encyclopédie française, 1935
- ⁶⁹⁸ Abraham, P. (éd) : Arts et littératures dans la société contemporaine, Matériaux et Techniques, Encyclopédie française, Tome16, Société de gestion de l'encyclopédie française, 1935
- ⁶⁹⁹ Farrère, C. : Navires, Flammarion, 1936
- ⁷⁰⁰ 島田孝一『交通論』千倉書房, 1937
- ⁷⁰¹ 樋畑雪湖『日本交通史話』雄山閣, 1937
- ⁷⁰² Baudry de Saunier, L., Dollfus, C., de Geoffroy, E. : Histoire de la locomotion terrestre. La locomotion naturelle. L'attelage. La voiture. Le cyclisme, La locomotion mécanique. L'automobile, Illustration, 1936
- ⁷⁰³ Enlart, C. : Manuel d'archéologie française depuis les temps mérovingiens jusqu'à la Renaissance, Tome II. Architecture civile et militaire, A. Picard, 1904
- ⁷⁰⁴ 藤浪剛一『東西沐浴史話』人文書院, 1931
- ⁷⁰⁵ Thédénat, H. : Pompéi, Histoire - vie privée, Renouard, 1906
- ⁷⁰⁶ 武田五一『住宅建築要義』文献書院, 1926
- ⁷⁰⁷ 上村六郎「我国上代に使用されたる顔料の研究」『仏教美術』第四冊, 仏教美術社, pp.27-33, 1925
- ⁷⁰⁸ 吉田包春「正倉院の密陀絵に就いて」『仏教美術』第八冊, 仏教美術社, pp.74-82, 1926
- ⁷⁰⁹ 天沼俊一『日本建築史要』飛鳥園, 1927
- ⁷¹⁰ 春山武松「醍醐寺五重塔板絵に就いて」『醍醐寺の研究 東洋美術特号』飛鳥園, 1930
- ⁷¹¹ 明石染人「醍醐寺五重塔の文様に就いて」『醍醐寺の研究 東洋美術特号』飛鳥園, 1930
- ⁷¹² 内海繁太郎『人形芝居と近松の浄瑠璃』白水社, 1940
- ⁷¹³ 三宅周太郎『文楽の研究』春陽堂, 1930
- ⁷¹⁴ Cloquet, L. : Traité d'architecture. éléments de l'architecture, types d'édifices, esthétique, composition et pratique de l'architecture, 5 Vols., Baudry, n. d., 1898-1901
(Tome 1 : Murs voultre arcades, Tome 2 : Portes, fenetres cheminees, charpente, menuiserie, planchers, escaliers, combles, couvertures, Tome 3 : Hygiène, chauffage, ventilation, Tome 4 : Edifices divers, Tome 5 : Esthetique,

decoration)

⁷¹⁵ 後藤慶二『日本劇場史：附・西洋劇場の話』岩波書店、1925

⁷¹⁶ Oslet, G. : Traité de charpente en fer, Cours de construction 4e partie, Encyclopédie théorique et pratique des connaissances civiles et militaires Partie civile, Fanchon et Artus, n.d., 1898

⁷¹⁷ Cordeau, A. L. : Charpente en fer et serrurerie, Guide des constructeurs, Traité complet des connaissances relatives aux constructions par R. Mignard, 7 e édition, E. Lévy, n.d., 1901-1904

⁷¹⁸ Magne, L. : Décor du métal. Le Fer, H. Laurens, 1914

⁷¹⁹ Espitallier, G.-F. : Cours supérieur de béton armé, Livre I. Procédés généraux de construction et Calcul des ouvrages, Ecole spéciale des travaux publics, 1931

⁷²⁰ Espitallier, G.-F., Cours de béton armé professé à l'Ecole spéciale des travaux publics, du bâtiment et de l'industrie, Livre I. Procédés généraux de construction et Calcul des ouvrages, Ecole Spéciale des Travaux Publics, 1909

⁷²¹ Espitallier, G.-F., Cours de béton armé professé à l'Ecole spéciale des travaux publics, du bâtiment et de l'industrie, Livre II. Compléments et applications, Ecole Spéciale des Travaux Publics, 1909

⁷²² Oslet, G., Merciot, A. : Le ciment armé dans la construction, Cours de construction 20e partie, Encyclopédie théorique et pratique des connaissances civiles et militaires Partie civile, G. Fanchon, n.d., 1908

⁷²³ Arnaud, E. : Première partie, Cours d'Architecture et de Constructions Civiles, Imprimerie des Arts et Manufactures, n. d., 1920

⁷²⁴ 1849年パリ生まれ。ルシアン・マーニュは父や祖父も建築家であった。1868年1期入学。父であるオーギュスト＝ジョセフ・マーニュ（Auguste-Joseph Magne）アトリエ出身。1872年1級課程進学。ルシアン・マーニュはその考え方においてヴィオレ＝ル・デュクに近いものを持ち建築の保存修復などを専門としていた一方、中世からルネッサンス期にかけてのフランス建築に関する造詣の深い人物であった。

⁷²⁵ 金属装飾に関する書物は3巻からなり、第1巻目は中村順平が参照した「鉄」Le Fer, 第2巻目は「銅と青銅」Le Cuivre et le bronze, 第3巻目は「鉛・錫・銀・金の貨幣・メダル」Le plomb, l'étain, l'argent et l'or, monnaies et médaillesである。なお、このシリーズは、当初、ルシアン・マーニュ単独でまとめられていたが、6巻にあたる『IV. 金属装飾：鉛・錫・銀・金の貨幣・メダル』より、ルシアン・マーニュとアンリ＝マルセル・マーニュの連名表記となり、最終『生地装飾』Décor du tissu はアンリ＝マルセル・マーニュが単独でまとめた。（Magne, L., Magne, H.-M. (éd) : L'Art appliqué aux métiers, 9 vol., I. Décor de la pierre, II. Décor de la terre, III. Décor du verre, IV. Décor du métal (3 vol. Le Fer, Le Cuivre et le bronze, Le plomb, l'étain, l'argent et l'or, monnaies et médailles), VII. Décor du bois, VIII. Décor du mobilier, IX. Décor du tissu, H. Laurens, 1913-1933)

⁷²⁶ なお、この他にも、中村順平が「バロック・ロココ」を分担執筆した『世界建築全集8：西洋III ルネッサンス バロック ロココ 19世紀前半』（平凡社、1962）p.104の参考文献リストにおいてもエドワー・アルノーの『建築・建設土木講義』の記載が確認できる。

⁷²⁷ Arnaud, E. : Le Nouvel Enseignement de la Construction à l'Ecole Nationale et Supérieure des Beaux-Arts, L'Architecture, XXXIV, no.11, Librairie des imprimeries réunies, pp.1-3, 1921

⁷²⁸ 日本人では坂倉準三がル・コルビュジエの勧めにより入学した学校である。（パナソニック電工汐留ミュージアム『建築家 坂倉準三 モダニズムを住む | 住宅, 家具, デザイン』建築資料研究社, 2010, p.166)

⁷²⁹ ジョルジュ＝フレデリック・エスピタリエの「建設理論・詳細講義」シリーズの巻構成は、第1部：基礎、第2部：

組石、第3部：足場、第4部：材料力学、第5部：木材・鋼材、第6部：木・鋼構造、第7部：屋根、硝子、第8部：塗装、給排水、第9部：暖房・空調、第10部：建物配置、第11部：ファサード・建築的パルティの構成、第12部：設計指南、第13部：施工図指南、第14部：建物積算・見積、という構成である。

⁷³⁰ なお、『鉄筋コンクリート講義』は、1906年の“Le Béton armé, Systèmes généraux et calcul des ouvrages en béton armé”がはじまりと見られる。中村順平留学期の1921年に、その第8版として『鉄筋コンクリート講義』が出版されていたことから、表3.4.5において、表題は『鉄筋コンクリート講義』とし、出版年はそのはじまりとみられる1906年とした。この書籍は著者の亡くなる1923年に第9版が、さらに2年後の1925年に第10版が同名のまま出版された。1931年の第11版の際、エコール・スペシアル・デ・トラヴォー・ピュブリックで「構造講義」を引き継いだモーリス・レジナルによって部分的な改訂が行われ、2巻構成から3巻構成へ再編され、書名が『鉄筋コンクリート上級講義』へ改称された。また、第11版改訂の際、第10版まで第2巻に存在した「橋」に関する部分が独立し、第3巻となった。なお、この書物はさらに版を重ね、1950年代には第20版となった。

⁷³¹ ギュスターヴ・オスレの「構造講義」シリーズの全20部は以下の通り。第1部：建設資材に関する概論、第2部：地業、第3部：基礎・モルタル・組積、第4部：木造・鉄造小屋組論（木造小屋組論（1巻）、木造小屋組積算編（1巻補）、鉄造小屋組論（2巻）、金属工事論（3巻）、鉄造小屋組論補足・鉄造新課程（4巻））、第5部：建具（全3巻）、第6部：截石学、第7部：建築理論と実践論（全4巻）、第8部：土木インフラに関する橋（組積橋（全2巻）、金属造橋（全2巻））、第9部：道路（道路（1巻）、河川（2巻）、運河（3巻））、第10部：鉄道（インフラストラクチャー（1巻）、スーパーストラクチャー（2巻）、素材と駆動（3巻）、運搬（4巻）、開拓（5巻）、副次的鉄道（6巻））、第11部：港湾、第12部：水力学論、第13部：鉱物学論（全2巻）、第14部：施工者への設計意図詳細伝達手法・一般事項指南、第15部：屋根配管工事論（屋根（1巻）、屋根積算編（2巻）、配管・電気設備（3巻）、配管積算編（4巻））、第16部：空調・暖房論（全3巻（見積編1巻含））、第17部：塗装（全2巻（見積編1巻含））、第18部：左官（テラス補修・積算編（1巻）、組積補修・積算編（全4巻））、第19部：金属諸工事積算編、第20部：鉄筋コンクリート。なお、ギュスターヴ・オスレの講義録の工種分類は、土木分野を除けば、日本建築学会が1923年に建築施工技術の向上を図るため、委員会を設けて仕様書の標準化をはかり、1923年6月号の付録として添付した「建築工事標準仕様書」（建築學會編（1923）「建築工事仕様書」『建築雑誌 大正12年6月付録』建築学会）で取り上げられた15の工事業種（仮設工事、基礎工事、煉瓦工事、石工事、「こんくりーと」工事、鉄工事、木工事、金属板工事、「スレート」工事、瓦葺工事、金物工事、左官工事、塗師工事、硝子工事、雑工事）と酷似しており、日本とフランス双方における建築工事分類の同時代性がみられる。

⁷³² Tubeuf, G., E. : *Traité d'architecture théorique & pratique*, 4 vol., G. Fanchon, n. d., 1908 (Tome I : Histoire de l'architecture, Tome II : Partie pratique, Tome III : Types de constructions divers. – Habitations particulières, Tome IV : Types de constructions divers. – Edifices publiques et divers) この『建築理論と実践論』は、全4巻からなり、第1冊目は建築史に関する項目がまとめられ、第2冊目に建築の実践手法に関する項目が、第3冊目には、各種住宅建築に関する項目、第4冊目に公共建築の実例などが掲載されている。

⁷³³ Lambert, G., Thibault, E. : *L'atelier et l'amphithéâtre. Les écoles de l'architecture, entre théorie et pratique*, Mardaga, 2011, p.101

⁷³⁴ Lucas, C. : « *Traité d'Architecture* » par L. Cloquet, *L'architecture*, vol. XII, no. 26, Librairie des imprimeries réunies, pp. 236-237, 1899

⁷³⁵ Ballantyne, A. : *Rural and Urban Architecture Between Two Cultures*, Routledge, 2009, p.131

⁷³⁶ 吉田鋼市「《parti》の意味について―クロケ、ガデ、グロモールの使用例による一考察―」『学術講演梗概集.F, 都市

- 計画, 建築経済・住宅問題, 建築歴史・意匠 1989』 pp.903-904, 日本建築学会, 1989
- ⁷³⁷ Cordeau, A. L. : Maçonnerie, Guide des constructeurs, Traité complet des connaissances relatives aux constructions par R. Mignard, 7 e édition, E. Lévy, n.d., 1901-1904
- ⁷³⁸ Cordeau, A. L. : Charpente en bois et menuiserie, Guide des constructeurs, Traité complet des connaissances relatives aux constructions par R. Mignard, 7 e édition, E. Lévy, n.d., 1901-1904
- ⁷³⁹ Cordeau, A. L. : Couverture, Plomberie, Fumisterie, Peinture, Vitrierie, Guide des constructeurs, Traité complet des connaissances relatives aux constructions par R. Mignard, 7 e édition, E. Lévy, n.d., 1901-1904
- ⁷⁴⁰ Oslet, G., Lascombe, A., Cordeau, A. : Traité de couverture et plomberie, Installations d'eau, de gaz, d'électricité, Tome II. Métré, Cours de construction 15e partie, Encyclopédie théorique et pratique des connaissances civiles et militaires Partie civile, G. Fanchon, n.d., 1908
- ⁷⁴¹ Oslet, G., Lascombe, A., Cordeau, A. : Traité de couverture et plomberie, Installations d'eau, de gaz, d'électricité, Métré de plomberie et d'électricité, Cours de construction 15e partie, Encyclopédie théorique et pratique des connaissances civiles et militaires Partie civile, G. Fanchon, n.d., 1908
- ⁷⁴² Sénéchal, P., Barbillon, C., (ed) : Dictionnaire critique des historiens de l'art actifs en France de la Révolution à la Première Guerre mondiale, site web de l'INHA, 2009 (<http://www.inha.fr/spip.php?article2309> (最終アクセス : 2015.02.05))
- ⁷⁴³ Enlart, C. : Manuel d'archéologie française depuis les temps mérovingiens jusqu'à la Renaissance, Deuxième partie. Architecture civile et militaire, Tome I. Architecture civile, A. Picard, 1929
- ⁷⁴⁴ Enlart, C. : Manuel d'archéologie française depuis les temps mérovingiens jusqu'à la Renaissance, Deuxième partie. Architecture civile et militaire, Tome II. Architecture militaire et navale, A. Picard, 1932
- ⁷⁴⁵ Boeswillwald, E., Cagnat, R., Ballu, A., Editeur scientifique (Ministère de l'instruction publique) : Timgad, Une cité africaine sous l'Empire romain, E. Leroux, 1891-1905
- ⁷⁴⁶ Grenier, A. : Eloge funèbre de M. Victor Chapot, membre libre non résidant, Comptes rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres, 98e année N. 2, pp.190-192, 1954, p.191
- ⁷⁴⁷ D'Espouy, H., Seure, G., Chapot, V., Accademia di Francia (Rome, Italie) , Institut de France : Monuments antiques relevés et restaurés par les architectes pensionnaires de l'Académie de France à Rome, C. Massin, n.d., 1910-1912
- ⁷⁴⁸ 網戸武夫『住まい学体系 098 建築 経験とモラル』住まいの図書出版局, 2001, p.39
- ⁷⁴⁹ Abraham, P. (éd) : Arts et littératures dans la société contemporaine, Œuvres et Interprétations, Encyclopédie française, Tome17, Société de gestion de l'encyclopédie française, 1936
- ⁷⁵⁰ Dollfus, C., de Geoffroy, E. : Histoire de la locomotion terrestre. Les Chemins de fer, Illustration, 1935
- ⁷⁵¹ 中村順平は、船の建築に関する未発表草稿『船の建築 Architecture Navale』の存在は、網戸武夫の『情念の幾何学』（建築知識社, 1985）p.351 などで触れられている。
- ⁷⁵² Toudouze, G., de la Roncière, C. : Histoire de la marine, l'Illustration, Paris, 1934
- ⁷⁵³ 太田博太郎『日本建築史序説』彰国社, 1970
- ⁷⁵⁴ 中谷礼仁・中谷ゼミナール『近世建築論集』アセテート, 2004, p.32
- ⁷⁵⁵ 武田五一『住宅建築要義』文献書院, 1926
- ⁷⁵⁶ 後藤慶二『日本劇場史：附・西洋劇場の話』岩波書店, 1925

⁷⁵⁷ エドワー・アルノーの講義録には、ギュスターヴ・オスレの「構造講義」シリーズやルイ・クロケの理論書、ジュリアン・ガデの理論書からの図版が採用されており、エドワー・アルノー講義録の図版をトレースしていた中村順平にとって馴染み深い書物といえるだろう。

⁷⁵⁸ Durand, J., C., N. : Recueil et parallèle des édifices de tout genre, anciens et modernes, 4 vol., chez l'auteur, 1800 や Durand, J., C., N. : Précis des leçons d'architecture données à l'Ecole polytechnique, 2 vol., collections Jacques Coucet (INHA), 1817

⁷⁵⁹ Raynaud, L. : Traité d'architecture (1er partie : Art de bâtir, 1er partie planches, 2eme partie : Compositions des édifices, 2eme partie planches), Carilian-Goeury, 1850

結論

結論

結論

本論文では、中村順平の横浜高等工業学校における建築教育における理論と教育手法に着目し、近代日本におけるフランス建築理論と教育手法の受容の一端を解明した。

その問題意識の原点には、これまでの中村順平研究では、中村順平とフランスの一建築教育機関であるエコール・デ・ボザールという芸術教育機関で展開された建築理論や教育手法との関係性にのみ着目し、論じる場合が多かった点にある。

本論文では、こうした視点を史料の事実から客観的・批判的に再読し、中村順平の教育と理論にみるフランス建築理論と教育手法の受容に関して学術的に論証し、中村順平の教育業績の再評価に向けた研究を行なった。本論文では、近代フランスの建築理論と教育手法の伝播および近代日本における建築教育機関の再考に向け、両者の媒介者として中村順平の建築教育を位置づけ、中村順平の留学期のフランスの建築教育史料や各所に分散した中村順平の教育史料の発掘・調査に努め、史料を実証的に再構築した。

本論文では、既往研究を再検討し、中村順平に関する一連の既往研究の整理により明らかになった中村順平のエコール・デ・ボザール留学期の情報の希薄さに着目し、当時の教育との関係から横浜高等工業学校での建築教育を分析した。以下、各章で得られた結果をまとめる。

本論文は、序論、本論 3 編 8 章、結論からなる。

序論では、本研究の目的と対象、中村順平の略歴、既往研究の成果と課題、および、本論文の研究方法及び構成について述べた。既往研究の成果に関しては、近代日本の参照可能な建築教育機関と教育手法、近代日本における建築教育とフランス人建築家、フランスの建築教育と中村順平、ジュリアン・ガデと中村順平の理論、中村順平と横浜高等工業学校における建築教育の以上 5 つの視点から概括した。これらの整理により、既往研究における以下の課題を浮き彫りにした。

- ・近代の外国の建築教育機関の断片的な情報の統合
- ・近代日本における建築教育機関とお雇いフランス人建築家の再考
- ・中村順平のエコール・デ・ボザール留学期の情報の再整理
- ・中村順平の教育とエコール・デ・ボザールの教育の相関関係
- ・ジュリアン・ガデの『建築の諸要素と理論』と中村順平の「建築学」の相関関係の再考
- ・中村順平の『「建築学」草稿』の解明
- ・中村順平の「建築学」科目と「実習」科目の相関関係

本論第 1 編は、近代フランスの建築理論と教育手法の伝播に関する研究と近代日本における建築教育機関の基礎情報の概括である。

第 1 章は、近代フランスの建築教育の世界的な伝播についての概括である。ジョサイア・コンドルによる近代日本の工部大学校における建築教育開始以前の欧米の主要 4 カ国、アメリカ・イギリス・フランス・ドイツの建築教育を概括した。その結果、特に、フランスでは、一般に知られているエコール・デ・ボザールのみならず複数の教育機関において建築教育が行なわれた事実を確認し、近代日本が参照可能であった建築学科を有する 4 カ国の高等教育機関の差異を明らかにした。また、同時期の近代建築運動の黎明期までの潮流を概括した結果、フランスの建築教育が生み出したローマ大賞受

賞者による過去の様式のヴォキャブラリーの収集が当時の建築の潮流となり、折衷主義の建築が出現した可能性を指摘し、それによりフランス建築教育の優位性が保たれた可能性を指摘した。

第2章は、近代日本における建築教育機関の再考である。

第一に、辰野金吾が牽引した工部大学校の後継組織である帝国大学工科大学において「ボザール流」と称された建築教育が成熟したことを明らかにした。辰野金吾がイギリス留学時に師事した建築家ウィリアム・バージェスの「美術建築」思想の受容と捉え、近代日本における技術官僚養成機関での建築教育の発展過程を概括した結果、ジョサイア・コンドルから辰野金吾へと引き継がれた際、辰野金吾が新設した「自在画」科目を重視した建築教育へと変化したことを明らかにした。

第二に、近代フランスにおける官公庁と建築教育機関との関係に着目し、近代日本における建築教育機関を再考した。太政官制から内閣制に移行するまでの近代日本の黎明期に開設された教育機関である陸軍士官学校および横須賀製鉄所附設覺舎においてフランス人建築家および建築教師の存在が確認された。特に、ここでは、陸軍士官学校において図学関連科目を教授し、日本人教師に西洋図画や写真技術を伝習したお雇いフランス人アベル・ゲリノーが、エコール・デ・ボザール建築セクション出身の建築家で「建築教師」として来日した事実を新たに確認し、指摘した。以上から、軍事建築分野の建築教育には、フランスの理論と教育が導入され、非軍事建築分野の建築教育にはジョサイア・コンドルによって導入された西洋の建築教育を、辰野金吾がイギリスで経験した「美術建築」思想に基づいた建築教育へ改革し、近代日本の建築教育の基盤が確立されたことを明らかにした。

本論第2編は、中村順平が日仏で受けた建築教育に関する具体的な考察である。

第1章は、中村順平が卒業した名古屋高等工業学校における建築教育の概括である。

本章では、同校の教育を学科長として牽引した鈴木楨次の教育を、帝国大学工科大学で受けた辰野金吾の教育およびその源泉であるジョサイア・コンドルの建築教育から紐解いた。辰野金吾は、ジョサイア・コンドルが近代日本に導入した西洋の建築教育を、ウィリアム・バージェスから受容した「美術建築」思想によって修正した。本章は、そうした辰野金吾による教育が名古屋高等工業学校の建築教育に反映されたことを、同校における教育者の構成、教育プログラム、卒業生の証言から明らかにした。さらに、その流れが中村の横浜高等工業学校での建築教育とつながる可能性を指摘した。名古屋高等工業学校の建築教育が、自在画重視の教育であり、辰野金吾の建築教育が名古屋高等工業学校で醸成したといえ、特に中村順平在籍時の教育者である鈴木楨次や土屋純一は、辰野金吾の愛弟子であり、同時期に開設された東京高等工業学校建築学科の教育者の構成とは異なるものであった。また、名古屋高等工業学校の鈴木楨次の建築教育が、「フランス流の建築家を作る教育」であり、中村順平のフランス留学を意識させた教育であったことが卒業生の証言から明らかになった。

第2章は、中村順平のパリ・エコール・デ・ボザール留学経験の再考である。

冒頭では、近代日本における建築教育を牽引した日本人教育者にとって必要とされたと考えられる、それぞれの外国経験について整理した。辰野金吾および東京と名古屋の高等工業学校を牽引した滋賀重列、鈴木楨次らが外国を経験した時期の留学先が英語圏で主であったのに対し、1920年から立て続けに設立された建築学科を牽引した人物らの主たる留学先がドイツ語圏へと変化した。後者の時代に中村順平はフランスへ渡った。対象とした人物のうち、滋賀重列および中村順平を除く全ての教育者が日本国内での教育機関への所属が決定もしくは内定しての国費留学であったのに対して、中村順平

は岩崎財団から留学資金を得ての私費による渡仏で、留学の意味合いが異なっていた。

中村順平のエコール・デ・ボザール留学期の経験は、中村順平の建築教育とフランスの建築理論と教育手法の具体的な比較に不可欠な要素だが、これまでの中村順平研究において史実に基づいた解明がもっとも希薄であった。本章では、中村順平が同校で実際に受けた授業や教育者、進級のプロセスや科目ごとの所要単位数、設計課題の具体的な内容と中村順平の取り組みを史料から明らかにした。

本論第3編は、中村順平の建築教育にみるフランス建築理論や教育手法の受容に関する具体的な考察である。

本論第3編・第1章は、横浜高等工業学校建築学科の設置背景、中村順平の「建築家」観、「建築教育」観、建築学科の教員構成を概括し、設計・製図系科目教育者にみる中村順平との関係を解明した。本章では、設計・製図系科目教育者が中村順平の意思が十分に浸透するよう、中村順平の弟子や教え子で構成されたことを明らかにした。

本論第3編・第2章は、横浜高等工業学校の設計・製図科目に関する新史料の分析である。

まず、筆者は、中村順平の「実習」科目に関する写真保存された学生制作図面史料および中村順平作成の設計課題の課題文を入手した。

中村順平の「実習」科目における課題分類は、エコール・デ・ボザールの設計競技課題の分類との類似性を指摘した。また、中村順平が最終課題として定めた「12時間略設計+本設計+構造設計」課題の存在から、中村順平が横浜高等工業学校における建築教育レベルをエコール・デ・ボザールにおける上下2級の課程のうち、下級課程である2級課程相当であったことを指摘した。

「実習」科目の基礎課程に関しては、図面描写に使用された参考文献を写真史料から解明し、西洋建築を描いた「建築図画」については、具体的な書誌情報を提示した。基礎課程では、実際に描画された図面を収集し分析した結果、その図面の参照源である書物として、ギリシャ・ローマ期の作品では、中村順平の留学期の教員であるエクトール・デスピの図集が主に参照され、ルネッサンス期の描画にあたっては、セザール・ダリの図集が参照された。また、日本建築を描いた「建築図画」については、中村順平の制作意図をエクトール・デスピの図集内容およびヴィオレ＝デュクの思想から読み解いた。その結果、世界でも通用する遺構の復元図や現況図、修復図の類の作成をめざした可能性および建物の構築にみる構造の芸術性の体得を意図した制作であった可能性を指摘した。

「実習」科目の練磨課程に関しては、設計課題文を整理し、「要素分析」課題の課題文において主に記載された参考作品および参考文献の傾向を分析した。それらの傾向から中村順平の「実習」科目におけるフランス建築理論と教育手法の受容を明らかにした。出題された課題のうち、「要素分析」課題の多くや「16時間略設計」課題の一部に見られる参考作品や参考文献から、エコール・デ・ボザールの設計競技年次優秀作品図集やジュリアン・ガデの『建築の諸要素と理論』の使用のみならず、中村順平のエコール・デ・ボザール留学期に師事したジョルジュ・グロモールとの関係を指摘した。中村順平は、横浜高等工業学校における設計・製図課題において、自身の留学期の経験に基づいた設計課題の設定を行い、自身の留学期の教員の図集や理論書を参考文献として活用し、フランス建築理論や教育手法を設計・製図課題を通じて実践したことを明らかにした。

次に、筆者は、横浜高等工業学校卒業生への同校における教育実態の聞き取り過程で、「図学」科目で使用されたプリントを入手した。同校の「図学」科目は、中村順平の弟子である同校の教育者伊藤

三郎が中心となり行なわれた。本章では、入手したプリント史料に描かれた図版から伊藤三郎がプリント作成に使用した文献を解明し、その文献とフランス建築理論および中村順平との関係を考察し、中村順平以外の教育者による「図学」科目におけるフランスの建築理論の受容を明らかにした。「図学」科目では、伊藤三郎によってフランスのエコール・デ・ボザールで教鞭をとったジュール＝ジャン・ピレの図学理論が導入され、透視図学において、中村順平留学期の「透視図学」科目の担当者ポール・ガデの図学理論が導入され、その描画手法が実践されたことを入手した史料から明らかにした。

本論第3編・第3章は、中村順平の「建築学」科目やその講義録に関する既往研究の批判的な再検証である。

本章では、中村順平の留学時の日記から、中村順平がエコール・デ・ボザールの教育プログラムで重視したと考えられる「構造」科目に着目し、その科目を担当した建築家・技術者のエドワー・アルノーが行なった教育手法と中村順平のそれとの具体的な類似性を指摘した。具体的には、エドワー・アルノーの講義での幻灯機の活用法、講義ノートをとらせないための講義録の作成、設計課題スタイルの踏襲といったエドワー・アルノーの要素の受容を明らかにした。これまでの中村順平研究では、フランス建築理論の影響を論じる場合、ジュリアン・ガデとその講義録を重視する論が主流であった。こうした定説に対し、『建築世界』誌で連載された「建築学」(1925-1937)や『建築学総説篇』(1944)が、エコール・デ・ボザールの建築理論書の単なる翻訳ではなく、中村順平独自の建築理論書を目指していたことを取り上げられた建築家の傾向から明らかにした。

また、これまでの中村順平研究では、前述のジュリアン・ガデとの関係や中村順平がエコール・デ・ボザール留学期に師事したジョルジュ・グロモールとの関係が指摘されていたが、留学時の現役の教育者であったエドワー・アルノーの存在は見過ごされてきた。エドワー・アルノーは、近代的な技術者養成機関であるエコール・サントラルの講義録を、建築家養成機関であるエコール・デ・ボザールにおいても使用し、教鞭をとった、いわば技術教育と芸術教育を横断的とする教育者であった。本章では、中村順平が受けたエドワー・アルノーによる講義とその講義録を精査し、中村順平が単にエコール・デ・ボザールの教育だけではなく、フランスの技術教育機関における建築教育を導入し、いわば芸術と技術のエクレクティックな教育を目指したことを指摘した。フランスでは、学生の将来の職能に応じた教育機関が複数存在しそれぞれで建築教育が行なわれたことは特筆すべきである。エコール・デ・ボザールにおいては「建築家」が養成されたのに対し、建築に関わる「技術者」はエコール・サントラルなど工業技術系の教育機関において建築教育を経験した。本章では、中村順平が単にエコール・デ・ボザールの建築教育に固執するのではなく、近代日本の技術者養成学校における建築教育という実態に即し、フランスの複数の教育機関における建築教育に範を求め、横浜高等工業学校において自身の建築教育の確立を目指した可能性を指摘した。

本論第3編・第4章は、中村順平の遺稿史料『「建築学」草稿』の参考文献書誌情報の解明による中村順平におけるフランス建築理論の受容の考察である。解明された文献を、エコール・デ・ボザールの歴代教員による文献、技術教育機関・技術者向け文献、歴史教則本、フランス建築雑誌、その他の5種に分類し、それぞれの特徴を概括した。特に、技術教育機関・技術者向け文献では、エドワー・アルノーやフランスの技術者養成の高等教育機関との関係を考察した。本章では、中村順平が、建築の美学的・意匠論的な側面やその類型学的な情報のみならず、構造・構法・設備や土木インフラに至る都市的視点におよぶ多様な分野の横断的な視点と西欧における軍事・非軍事・海事の建築の3側面

を融合し、遺稿の骨格を形成したことを明らかにした。また、本章では、遺稿と「実習」科目における設計課題との関連性を考察し、「建築学」科目が設計課題のプログラム概説講義に類するものであったことを明らかにした。このスタイルから中村順平の「実習」・「建築学」の2つの科目が相互に関係するエコール・デ・ボザールの「建築理論」科目に相当することを明らかにし、設計を理論の実証とする中村順平の「建築学」の概念を明らかにした。

以上、本論文は、数多くの既往研究を博搜すると共に、自らも多数の史料を究明・読解することにより、中村順平の建築教育とフランスとの関係を体系的に考察し、中村順平のフランス建築理論と教育手法の受容過程を明らかにした。中村順平は、近代フランスの複数の教育機関において行なわれた建築教育の横断的なつながりを見出し、技術教育機関を出自にもつ近代日本の建築教育機関のひとつにおいて、「建築学」により分散された専門分野を再統合し、自身の理論と教育手法を確立した。

日本国内においては、辰野金吾以降において、東京帝国大学工科大学では講座制の導入により、専門分化の傾向が顕著となった。近代日本の建築教育は「建築家養成学校」と「建築技術者養成学校」に分化されることなく、実質的にはすべての学校が「建築技術者養成学校」化していた。

こうした専門分化は、近代ドイツ型の教育の導入によるものと考えられるが、建築技術者を養成する観点や、技術分野の発展においては有効性の高い制度であった可能性がある。そうした背景には、近代日本が目指した「建築家」像が、あらゆる分野を総合的・横断的に判断する「建築家」であるよりも、むしろ専門分化した工学技術を習得した「建築技術者」を目指さざるをえなかった後進工業国としての事情があった。

一方で、「建築家」養成の観点から見れば、「建築家」があらゆる分野を総合的・横断的に判断する能力の養成を必要とするならば、東京帝国大学型の講座制を基本とする建築教育の技術的な専門分化は必ずしも有効であったとはいえなかった。さらに、建築・建設分野の職能が多岐にわたる現実を鑑みれば、建築教育を行う教育機関もまた、学生の卒業後の職能に合わせて、教育内容もまた多様である必要があったであろう。

「建築家」、「建築技術者」養成に意識的であったのが、フランス留学を経た中村順平であり、その存在こそが、横浜高等工業学校における建築教育の方向性を定める契機となったことは、本研究が明らかにする要諦たるところであった。

中村順平は、フランス留学とエドワー・アルノーとの出会いを通じて、「建築家」と「建築技術者」の制度的差異に意識的であったことは、本論において横浜高等工業学校における教育実践を検証することにより明らかとなった。中村順平は横浜高等工業学校において、エドワー・アルノーの教育実践の手法を踏襲しつつ、当時の日本の実態にあわせながら、高等工業学校という当時における「建築技術者」養成機関において、「建築家」養成を行う可能性を追求したといえるだろう。中村順平による教育実践や課題設定の特徴が、基礎力の重視、専門分野の横断と総合力の練磨、各専門に共通する知の集積と応用であったことも、中村順平が教育を通じて、見据えた建築学校の未来には、単なる技術者の量産機関としてではなく、「建築家」としての人格陶冶を可能とする、来るべき建築学校の姿があったといえる。それは、近代日本の建築教育機関が抱えていた「建築家」教育に対する、中村順平によるひとつの問題提起であり、解決策の提示であった。

関連公表論文リスト

【査読付き審査論文：全 4 編】

林要次「中村順平にみるエドワー・アルノーの影響：近代日本におけるフランス建築理論の受容に関する研究 その 1」『日本建築学会計画系論文集』, vol.79, No.699, pp.1205-1210, 日本建築学会, 2014
(本論第 3 編・第 3 章関連論文)

林要次「中村順平の『建築学』草稿」にみるフランス建築理論：近代日本におけるフランス建築理論の受容に関する研究 その 2」『日本建築学会計画系論文集』, vol.79, No.706, pp.2759-2766, 日本建築学会, 2014
(本論第 3 編・第 4 章関連論文)

林要次「お雇いフランス人建築家アベル・ゲリノーの日本経験：陸軍士官学校とフランス建築教育機関との接点」『日本建築学会計画系論文集』, vol.80, No.709, pp.709-715, 日本建築学会, 2015
(本論第 1 編・第 2 章関連論文)

林要次「中村順平の受けたエコール・デ・ボザールの設計・製図教育」『2014 年度第 85 回日本建築学会関東支部優秀研究報告集』, pp. 209-212, 日本建築学会関東支部, 2015
(口頭発表論文：林要次「中村順平の受けたエコール・デ・ボザールの設計・製図教育」『2014 年度日本建築学会関東支部研究報告集Ⅱ』, pp. 553-556, 日本建築学会関東支部, 2015)
(本論第 2 編・第 2 章関連論文)

【口頭発表論文（査読なし）：全 4 編】

林要次「エコール・デ・ボザールの「コンストラクション」科目史」『2013 年度日本建築学会関東支部研究報告集Ⅱ』, pp.425-428, 日本建築学会関東支部, 2014
(本論第 2 編・第 2 章関連論文)

林要次「中村順平の『建築学』草稿」にみる日本語参考文献」『2013 年度日本建築学会関東支部研究報告集Ⅱ』, pp. 473-476, 日本建築学会関東支部, 2014
(本論第 3 編・第 4 章関連論文)

林要次「お雇いフランス人建築家アベル・ゲリノーの日本建築紹介」『2014 年度日本建築学会関東支部研究報告集Ⅱ』, pp. 549-552, 日本建築学会関東支部, 2015
(本論第 1 編・第 2 章関連論文)

林要次「横浜高等工業学校建築学科の図学教育におけるフランス理論」『2014 年度日本建築学会関東支部研究報告集Ⅱ』, pp. 557-560, 日本建築学会関東支部, 2015
(本論第 3 編・第 2 章関連論文)

参考文献リスト

【外国語文献】

- Abraham, P. (éd) : Arts et littératures dans la société contemporaine, Matériaux et Techniques, Encyclopédie française, Tome16, Société de gestion de l'encyclopédie française, 1935
- Abraham, P. (éd) : Arts et littératures dans la société contemporaine, Œuvres et Interprétations, Encyclopédie française, Tome17, Société de gestion de l'encyclopédie française, 1936
- Arnaud, E. : Première partie, Cours d'Architecture et de Constructions Civiles, Imprimerie des Arts et Manufactures, n. d., 1920 (なお, 本論文では「第1巻」と表記)
- Arnaud, E. : Deuxième partie Tome I, Cours d'Architecture et de Constructions Civiles, Imprimerie des Arts et Manufactures, n. d., 1920 (なお, 本論文では「第2巻」と表記)
- Arnaud, E. : Deuxième partie Tome II, Cours d'Architecture et de Constructions Civiles, Imprimerie des Arts et Manufactures, n. d., 1920 (なお, 本論文では「第3巻」と表記)
- Arnaud, E. : Deuxième partie Tome III, Cours d'Architecture et de Constructions Civiles, Imprimerie des Arts et Manufactures, n. d., 1920 (なお, 本論文では「第4巻」と表記)
- Arnaud, E. : Troisième partie, Cours d'Architecture et de Constructions Civiles, Imprimerie des Arts et Manufactures, n. d., 1920 (なお, 本論文では「第5巻」と表記)
- Arnaud, E. : Le Nouvel Enseignement de la Construction à l'Ecole Nationale et Supérieure des Beaux-Arts, L'Architecture, XXXIV, no. 11, Librairie des imprimeries réunies, pp.1-3, 1921
- Ballantyne, A. : Rural and Urban. Architecture Between Two Cultures, Routledge, 2009
- Baudry de Saunier, L., Dollfus, C., de Geoffroy, E. : Histoire de la locomotion terrestre. La locomotion naturelle. L'attelage. La voiture. Le cyclisme. La locomotion mécanique. L'automobile, Illustration, 1936
- Blondel, F. : Cours d'Architecture, 1683
- Boeswillwald, E., Cagnat, R., Ballu, A., Editeur scientifique (Ministère de l'instruction publique) : Timgad, Une cité africaine sous l'Empire romain, E. Leroux, 1891-1905
- Bouillon, A. : Principes de dessin linéaire, L. Hachette, 1839
- Bouillon, A. : Principes de perspective linéaire, L. Hachette, 1841
- Brandon, J. E. R. : Théorie et pratique des ombres des cadrans solaires, Librairie de la construction moderne, 1926
- Bruculeri, A. : Building Construction and Architectural Practice: the Teaching of François Marie Jaÿ at the Ecole des Beaux-Arts of Paris (1824-1863), Proceedings of the Third International Congress on Construction History, 3 vol., vol. I, pp. 245-255, BTU/CHS, 2009
- Bruculeri, A. : Renewal and tradition in the teaching of building construction in the Ecole des Beaux-Arts of Paris : the course of Edouard Arnaud, 1920-1934, Proceedings of the Second International Congress on Construction History, 3 vol., vol. I, pp. 417-440, Construction History Society, 2006
- Buchman, A., Fleischman, A., Wright, F. A. : The Ten-Year Book of Cornell University 1868-1898, Cornell University, 1898
- Choisy, A. : Histoire de l'architecture, G. Baranger, 1899 (翻訳 : オーギュスト・ショワジー『建

築史』(上巻・下巻, 桐敷真次郎訳), 中央公論美術出版, 2008)

Cloquet, L. : Tome 1 (Murs, voûtes, arcades), Traité d'architecture. éléments de l'architecture, types d'édifices, esthétique, composition et pratique de l'architecture, Baudry, n. d., 1898-1901

Cloquet, L. : Tome 2 (Portes, fenêtres, cheminées, charpente, menuiserie, planchers, escaliers, combles, couvertures), Traité d'architecture. éléments de l'architecture, types d'édifices, esthétique, composition et pratique de l'architecture, Baudry, n. d., 1898-1901

Cloquet, L. : Tome 3 (Hygiène, chauffage, ventilation), Traité d'architecture. éléments de l'architecture, types d'édifices, esthétique, composition et pratique de l'architecture, Baudry, n. d., 1898-1901

Cloquet, L. : Tome 4 (Edifices divers), Traité d'architecture. éléments de l'architecture, types d'édifices, esthétique, composition et pratique de l'architecture, Baudry, n. d., 1898-1901

Cloquet, L. : Tome 5 (Esthétique, décoration), Traité d'architecture. éléments de l'architecture, types d'édifices, esthétique, composition et pratique de l'architecture, Baudry, n. d., 1898-1901

Cordeau, A. L. : Charpente en bois et menuiserie, Guide des constructeurs, Traité complet des connaissances relatives aux constructions par R. Mignard, 7^e édition, E. Lévy, n. d., 1901-1904

Cordeau, A. L. : Charpente en fer et serrurerie, Guide des constructeurs, Traité complet des connaissances relatives aux constructions par R. Mignard, 7^e édition, E. Lévy, n. d., 1901-1904

Cordeau, A. L. : Couverture, Plomberie, Fumisterie, Peinture, Vitrierie, Guide des constructeurs, Traité complet des connaissances relatives aux constructions par R. Mignard, 7^e édition, E. Lévy, n. d., 1901-1904

Cordeau, A. L. : Maçonnerie, Guide des constructeurs, Traité complet des connaissances relatives aux constructions par R. Mignard, 7^e édition, E. Lévy, n. d., 1901-1904

Daly, C. (éd.) : Motifs historiques d'architecture et de sculpture d'ornement pour la composition et la décoration extérieure des édifices publics et privés. Choix de fragments empruntés à des monuments français du commencement de la Renaissance à la fin de Louis XVI : portes, panneaux sculptés, fenêtres, chambranles, lucarnes, oeils de boeuf, niches, etc. , n. d., 1869

De Penanrun, T. D., Delaire, E. A., Roux, L. F. : Les architectes élèves de l'Ecole des beaux-arts 1793-1907, Librairie de la construction moderne, 1907

D'Espouy, H. (éd.) : Fragments d'architecture antique d'après les relevés et restaurations des anciens pensionnaires de l'académie de France à Rome, n. d. , 1905

D'Espouy, H. (éd.) : Fragments d'Architecture du Moyen Âge et de la Renaissance d'après les relevés et restaurations des anciens pensionnaires de l'académie de France à Rome, n. d. , 1925

D'Espouy, H., Seure, G., Chapot, V., Accademia di Francia (Rome, Italie), Institut de France : Monuments antiques relevés et restaurés par les architectes pensionnaires de l'Académie de France à Rome, C. Massin, n. d. , 1910-1912

Delaistre, L. : Cours complet de dessin linéaire gradué et progressif, Mallet-Bachelier, 1855

Delaistre, L. : Cours méthodique du dessin et de la peinture, Carilian-Goeury et Vor Dalmont, 1862

- Dollfus, C., de Geoffroy, E. : Histoire de la locomotion terrestre. Les Chemins de fer, Illustration, 1935
- Drexler, A. (éd.) : The Architecture of the Ecole des Beaux-Arts, Museum of Modern Art, 1977
- Durand, J.-C.-N. : Recueil et parallèle des édifices de tout genre, anciens et modernes, 4 vol. , chez l'auteur, 1800
- Durand, J.-C.-N. : Précis des leçons d'architecture données à l'Ecole polytechnique, 2 vol., (collections Jacques Coucet INHA), 1817
- Ecole nationale des beaux-arts, section d'architecture (éd.) : Les concours d'architecture de l'année scolaire 1921-1922, Auguste Vincent, 1922
- Ecole nationale des beaux-arts, section d'architecture (éd.) : Les concours d'architecture de l'année scolaire 1922-1923, Auguste Vincent, 1923
- Ecole nationale des beaux-arts, section d'architecture (éd.) : Les concours d'architecture de l'année scolaire 1923-1924, Auguste Vincent, 1924
- Ecole nationale des beaux-arts, section d'architecture (éd.) : Les concours d'architecture de l'année scolaire 1924-1925, Auguste Vincent, 1925
- Enlart, C. : Manuel d'archéologie française depuis les temps mérovingiens jusqu'à la Renaissance, Deuxième partie. Architecture civile et militaire, Tome I. Architecture civile, A. Picard, 1929
- Enlart, C. : Manuel d'archéologie française depuis les temps mérovingiens jusqu'à la Renaissance, Deuxième partie. Architecture civile et militaire, Tome II. Architecture militaire et navale, A. Picard, 1932
- Enlart, C. : Manuel d'archéologie française depuis les temps mérovingiens jusqu'à la Renaissance, Tome II. Architecture civile et militaire, A. Picard, 1904
- Epron, J. P. : Comprendre l'éclectisme, Norma, 1997
- Epron, J. P. : Architecture, une anthologie. Les architectes et le projet, Mardaga, 1992
- Espitallier, G.-F. : Cours de béton armé professé à l'Ecole spéciale des travaux publics, du bâtiment et de l'industrie, Livre I. Procédés généraux de construction et Calcul des ouvrages, Ecole Spéciale des Travaux Publics, 1909
- Espitallier, G.-F. : Cours de béton armé professé à l'Ecole spéciale des travaux publics, du bâtiment et de l'industrie, Livre II. Compléments et applications, Ecole Spéciale des Travaux Publics, 1909
- Espitallier, G.-F. : Cours supérieur de béton armé, Livre I. Procédés généraux de construction et Calcul des ouvrages, Ecole spéciale des travaux publics, 1931
- Farrère, C. : Navires, Flammarion, 1936
- Feihl, J. N. : Dessins d'architecture. Les travaux de l'élève architecte Frédéric de Morsier à l'école des beaux-arts de Paris 1882-1890, Archimages, 2011
- Frédéric, L. : Le Japon. Dictionnaire et civilisation, Robert Laffont, 1999
- Garric, J., -P. : Bibliothèques d'atelier. Edition et enseignement de l'architecture, Paris 1785-

1871, INHA, 2011 (<http://inha.revues.org/3183>)

Grenier, A. : Eloge funèbre de M. Victor Chapot, membre libre non résidant, Comptes rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres, 98e année N. 2, pp.190-192, 1954

Gromort, G. : Essai sur la théorie de l'architecture, cours professé à l'Ecole nationale supérieure des Beaux-arts de 1937 à 1940, Vincent Fréal et Cie, 1942

Gromort, G. : Histoire abrégée de l'architecture de la Renaissance en France (XVIe, XVIIe et XVIIIe siècle), Vincent Fréal et Cie, 1930

Gromort, G. : Histoire abrégée de l'architecture de la Renaissance en Italie, A. Vincent, 1913

Gromort, G. : Histoire abrégée de l'architecture de la Renaissance en Italie, A. Vincent, 1922

Gromort, G. : Histoire générale de l'art français de la Révolution à nos jours. Tome II. L'Architecture, Librairie de France, n. d., 1920

Gromort, G. : Initiation à l'architecture, R. Ducher, 1938

Gromort, G. : Jacques-Ange Gabriel, Vincent Fréal et Cie, 1933

Gromort, G. : Le hameau de Trianon, Vincent Fréal et Cie, 1928

Guadet, J. : Tome I, Eléments et Théorie de l'architecture, Librairie de la construction moderne, n. d., 1901-1904 (なお, 本論文では「第 1 巻」と表記)

Guadet, J. : Tome II, Eléments et Théorie de l'architecture, Librairie de la construction moderne, n. d., 1901-1904 (なお, 本論文では「第 2 巻」と表記)

Guadet, J. : Tome III, Eléments et Théorie de l'architecture, Librairie de la construction moderne, n. d., 1901-1904 (なお, 本論文では「第 3 巻」と表記)

Guadet, J. : Addition, Eléments et Théorie de l'architecture, Librairie de la construction moderne, n. d., 1901-1904 (なお, 本論文では「第 4 巻」と表記)

Guadet, J. : Tome I, Eléments et Théorie de l'architecture, Troisième édition, Librairie de la construction moderne, n. d., 1909-1910 (なお, 本論文では「第 1 巻」と表記)

Guadet, J. : Tome II, Eléments et Théorie de l'architecture, Troisième édition, Librairie de la construction moderne, n. d., 1909-1910 (なお, 本論文では「第 2 巻」と表記)

Guadet, J. : Tome III, Eléments et Théorie de l'architecture, Troisième édition, Librairie de la construction moderne, n. d., 1909-1910 (なお, 本論文では「第 3 巻」と表記)

Guadet, J. : Addition, Eléments et Théorie de l'architecture, Troisième édition, Librairie de la construction moderne, n. d., 1909-1910 (なお, 本論文では「第 4 巻」と表記)

Guadet, P. : Cours de perspective, Vincent Fréal & Cie, 1929

Guédy, H. : L'Enseignement à l'Ecole nationale et spéciale des beaux-arts. Section d'architecture. Admission. 2e classe. 1re classe. diplôme-prix de l'Académie et prix de Rome, Librairie de la construction moderne, n. d., 1899

Guérineau, A. J.-L. : Ornaments japonais, 1889

Guillot, E. : Edifices publics pour villes et villages, Dunod, 1912

Huffman, J. L. : A Yankee in Meiji Japan. The Crusading Journalist Edward H. House, Rowman & Littlefield Pub Inc, 2003

- Institut Français d'Architecture (éd.) : Roger-Henri Expert 1882-1955, Editions du Moniteur, 1983
- Lambert, G., Thibault, E. : L'atelier et l'amphithéâtre. Les écoles de l'architecture entre théorie et pratique, Mardaga, 2011
- Le Béalle, A. : Cours de dessin classique-élémentaire des cartes géographiques, J. Delalain, 1851
- Le Béalle, A. : Cours théorique et pratique de dessin linéaire lavis et ornement, J. Delalain, 1851
- Lebrun, Th., Le Béalle, A. : Géographie élémentaire des collèges et des pensions, J. Delalain, 1859
- Lucan, J. : Composition, non-composition. Architecture et théories XIXe-XXe siècles, PPUR (Presses polytechniques et universitaires romandes), 2009
- Lucas, C. : « TRAITE D'ARCHITECTURE » par L. CLOQUET, L'architecture, vol. XII, no. 26, Librairie des imprimeries réunies, pp. 236-237, 1899
- Maejima, M. : A Study of Late 19th Century Military Bases and Barracks of the Former Army of Japan, Journal of Asian Architecture and Building Engineering, Vol. 7, No. 2, pp. 155-161, 2007
- Maejima, M. : The Typology of Officers' Mess Halls in Japanese Military Heritage, Journal of Asian Architecture and Building Engineering, Vol. 0, No. 1, pp. 23-30, Asian Architecture and Building Engineering, 2011
- Magne, L., Magne, H.-M. (éd.) : L'Art appliqué aux métiers, 9 vol., (I. Décor de la pierre, II. Décor de la terre, III. Décor du verre, IV. Décor du métal (3 vol. Le Fer, Le Cuivre et le bronze, Le plomb, l'étain, l'argent et l'or, monnaies et médailles), VII. Décor du bois, VIII. Décor du mobilier, IX. Décor du tissu), H. Laurens, 1913-1933
- Magny, A-V. : La construction en béton armé, théorie et pratique, Ch. Béranger, 1914
- Martinon, J.-P. : Trace d'architectes, Anthropos édition Economica, 2003
- Middleton, R. : The Beaux-Arts Tradition and nineteenth-century French Architecture, The MIT Press, 1982
- Oslet, G. (éd.) : Cours de Construction, Encyclopédie théorique & pratique des connaissances civiles & militaires Partie civile, 20 parties, Georges Fauchon, n. d. , 1890-1908
- Oslet, G. : Traité de charpente en bois, Cours de construction 4e partie, Encyclopédie théorique et pratique des connaissances civiles et militaires Partie civile, Fanchon, 1891
- Oslet, G. : Traité de charpente en fer, Cours de construction 4e partie, Encyclopédie théorique et pratique des connaissances civiles et militaires Partie civile, Fanchon et Artus, n. d., 1898
- Oslet, G., Lascombe, A. : Cours de construction de Oslet 15e partie : Traité de couverture et plomberie - installations d'eau, de gaz, d'électricité. Tome 1-Couverture, G. Fanchon, 1908
- Oslet, G., Lascombe, A., Cordeau, A. : Traité de couverture et plomberie, Installations d'eau, de gaz, d'électricité, Tome II. Métré, Cours de construction 15e partie, Encyclopédie théorique et pratique des connaissances civiles et militaires Partie civile, G. Fanchon, n. d., 1908
- Oslet, G., Lascombe, A., Cordeau, A. : Traité de couverture et plomberie, Installations d'eau, de

- gaz, d'électricité, Métré de plomberie et d'électricité, Cours de construction 15e partie, Encyclopédie théorique et pratique des connaissances civiles et militaires Partie civile, G. Fanchon, n. d., 1908
- Oslet, G., Merciot, A. : Le ciment armé dans la construction, Cours de construction 20e partie, Encyclopédie théorique et pratique des connaissances civiles et militaires Partie civile, G. Fanchon, n. d., 1908
- Pillet, J. -J. : Traité de géométrie descriptive. Ligne droite et Plan. Polyèdres. Surfaces. Texte et Dessins, C. Delagrave, 1887
- Pillet, J. -J. : Traité de perspective linéaire, Deuxième édition, Librairie Ch. Delagrave, 1888
- Pillet, J. -J. : Traité de stéréotomie. Charpente et Coupe des pierres, C. Delagrave, 1887
- Planat, P. (éd.) : Encyclopédie de l'architecture et de la construction, 13 vols., Librairie de la Construction moderne, 1888-1892
- Quatremère de Quincy, A. : Dictionnaire historique d'architecture. Volume II, Le Clere, 1832
- Raynaud, L. : Traité d'architecture (1er partie : Art de bâtir, 1er partie planches, 2eme partie : compositions des édifices, 2eme partie planches), Carilian-Goeury, 1850
- René, C., Victor, C. : Tome I. Les monuments. Décoration des monuments. Sculpture, Manuel d'archéologie romaine, A. Picard, 1916
- René, C., Victor, C. : Tome I. Les monuments. Décoration des monuments. Sculpture, Tome II. Décoration des monuments (suite). Peinture et Mosaïque. Instruments de la vie publique et privée, Manuel d'archéologie romaine, A. Picard, 1916
- Sénéchal, P., Barbillon, C., (ed) : Dictionnaire critique des historiens de l'art actifs en France de la Révolution à la Première Guerre mondiale, site web de l'INHA, 2009 ([http : //www.inha. fr/spip. php?article2309](http://www.inha.fr/spip.php?article2309))
- Société des artistes français (éd.) : Explication des ouvrages de peinture, sculpture, architecture, gravure et lithographie des artistes vivants, Charles de Mourgues frères, 1882
- Taine, H. : Philosophie de l'art, Librairie Hachette, 1882
- Thédenat, H. : Pompéi, Histoire - vie privée, Renouard, 1906
- Thomas, A. : Salon de 1881–Architecture, Revue générale de l'architecture et des travaux publics, 1881
- Toudouze, G., de la Roncière, C. : Histoire de la marine éditée par L'Illustration, l'Illustration, Paris, 1934
- Tubeuf, G. E. : Traité d'architecture théorique & pratique, G. Fanchon, n. d. , 1908
- (Tome I. Histoire de l'architecture, Tome II. Partie pratique, Tome III. Types de constructions divers. Habitations particulières, Tome IV. Types de constructions divers. Edifices publiques et divers)
- Vigato, J.-C. : L'architecture régionaliste, Norma éditions, 1994
- Viollet-Le-Duc : Dictionnaire raisonné de l'architecture française du XIe au XVIe siècle, 10 vol. , Bance et Morel, 1854-1868

参考文献リスト

Viollet-Le-Duc : Entretiens sur l'architecture, Q. Morel et cie, 1863 (E・E・ヴィオレ・ル・デュック『建築講話』(飯田喜四郎訳) 中央公論美術出版, 1985)

Weatherhead, A. C. : The History of Collegiate Education in Architecture in the United States, Columbia University, 1941, PhD Thesis

【フランス雑誌】

Société des architectes diplômés par le gouvernement (éd.) : L'Architecte, Librairie centrale des Beaux-Arts

L'Architecture d'Aujourd'hui (éd.) : L'Architecture d'Aujourd'hui, L'Architecture d'Aujourd'hui Société centrale des architectes français (éd.) : L'Architecture, Librairie des imprimeries réunies

La construction moderne (éd.) : La construction moderne, La construction moderne, 1921-1924

Daly, C. (éd.) : Revue générale de l'architecture et des travaux publics, Paulin & Hetzel, 1886-1887

【日本語文献】

青木茂, 歌田真介『松岡壽研究』中央公論美術出版, 2002

明石染人「醍醐寺五重塔の文様に就いて」『醍醐寺の研究 東洋美術特号』飛鳥園, 1930

天沼俊一『日本建築史要』飛鳥園, 1927

天野郁夫「伝統と近代—明治期日本の高等教育—」『明治聖徳記念学会紀要』復刊第47号, pp.362-383, 明治聖徳記念学会, 2010

網戸武夫「建築家外伝」『建築知識』建築知識, 1978-1981

網戸武夫『住まい学体系 098 建築 経験とモラル』住まいの図書出版局, 2001

網戸武夫『情念の幾何学: 形象の作家中村順平の生涯』建築知識, 1985

飯田史也『近代日本における仏語系専門学術人材の研究』広島大学, 1996, 学位論文

石丸三七郎編『泰西絵原写景法附図』原亮三郎, 1885

伊藤三郎, 飯田喜四郎, 岡本博信, 網戸武夫, 佐久間達二, 菊池利治「座談会: 中村順平の業績と建築図画」『C and D』, No.32, Vol.6, pp11-22, C&D 同人, 1975

上村六郎「我国上代に使用されたる顔料の研究」『仏教美術第四冊』pp.27-33, 仏教美術社, 1925

植村正治「明治前期お雇い外国人の給与」『流通科学大学論集: 流通・経営編』Vol.21-1, pp.1-24, 流通科学大学学術研究会, 2008

レオナルド・ヴェネヴォッロ『近代建築の歴史(上巻・下巻)』(武藤章訳) 鹿島出版会, 1978-1979
内海繁太郎『人形芝居と近松の浄瑠璃』白水社, 1940

江藤静児『鉄筋混凝土(コンクリート)にかけた生涯 阿部美樹志と阿部事務所』日刊建設通信新聞社, 1993

近江栄「建築教育 明治・大正の歩み」『建築雑誌』Vol.90, No.1101, pp.1027-1031, 日本建築学会, 1975

大阪歴史博物館編『館蔵資料集 5 建築家・中村順平資料』大阪歴史博物館, 2009

太田博太郎『日本建築史序説』彰国社, 1970

参考文献リスト

- 大森東亜「19 世紀米欧高等教育モデルと日本モデル形成—岩倉使節団の米欧高等教育回覧—」米欧回覧の会 HP : <http://www.iwakura-mission.gr.jp/tokubetu-kikou/kyoiku.pdf>
- 大類伸『城郭之研究』日本学術普及会, 1915
- 岡田義治・初田亨「建築家 松ヶ崎萬長の初期の経歴と青木周蔵那須別邸: 松ヶ崎萬長の経歴と作品 (その I)」『日本建築学会計画系論文集』第 514 号, pp.233-240, 日本建築学会, 1998
- 小野雄司『日本人最初の先端技術者辰巳一造船大監: 修学と近代造船学』研成社, 2009
- 小野田滋「阿部美樹志とわが国における黎明期の鉄道高架橋」『土木史研究』第 21 号, pp.113-124, 土木学会, 2001
- 海津忠雄「福沢諭吉の『芸術』の概念」『福沢諭吉と近代美術』慶応義塾大学アート・センター, 2009
- ジー・ガデー著, 長野宇平治訳『建築士及其職責』建築世界社, 1929
- 金子一夫『近代日本美術教育の研究 明治時代』中央公論美術出版, 1992
- 金子一夫『近代日本美術教育の研究 明治・大正時代』中央公論美術出版, 1999
- 河内義就「わが建築青春記 師, 中村順平」『建築雑誌』Vol.99, No.1218, p.6, 日本建築学会, 1984
- 河田克博「名古屋工業大学建築学科 100 年の歩み」名古屋工業大学建築・デザイン工学科 <http://www.kitalab.jp/ad/history.html>
- 菊池重郎「明治初期における ARCHITECTURE の訳語について (続): 文部省刊行の百科全書「建築学」に関する研究・その 2 の b」『日本建築学会論文報告集』第 67 号, pp.162-168, 日本建築学会, 1961
- 北正巳「ヘンリー・ダイアーと日本—彼の日本観を中心として—」『創大アジア研究』創刊号, pp.123-146, 創価大学, 1980
- 北河大二郎『近代都市パリの誕生—鉄道・メトロ時代の熱狂—』河出ブックス, 2010
- 旧工部大学校史料編纂会『旧工部大学校資料』虎之門会, 1931
- 久米邦武『現代語訳 特命全権大使 米欧回覧実記』(水澤周訳注, 普及版, 全 5 巻+別冊総索引) 慶應義塾大学出版会, 2008
- 倉方秀憲編『プチ・ロワイヤル仏和辞典第三版』旺文社, 2003
- 倉方俊輔『伊東忠太の建築理念と設計活動に関する研究』早稲田大学, 2004, 学位論文
- 黒石いずみ「フランス外でのエコール・デ・ボザール」『青山学院女子短期大学紀要』第 56 号, pp.A109-A122, 青山学院女子短期大学, 2002
- 建築学会編「建築工事仕様書」『建築雑誌 大正 12 年 6 月付録』建築学会, 1923
- 建築学参考図刊行委員会編『西洋建築史参考図集・上册』建築学会, 1931 (第 2 版: 1933)
- 建築学参考図刊行委員会編『日本建築史参考図集』建築学会, 1930
- 神代雄一郎「中條精一郎」『近代建築の黎明』美術出版社, 1963
- 古宇田実「建築教育」『建築雑誌』Vol.46, No.559, pp.843-854, 建築学会, 1932
- 古宇田実「建築教育私見 (特別大會講演)」『建築雑誌』Vol.37, No.446, pp.367-374, 建築学会, 1923
- 公田蔵「明治時代に学ばれたフランス流数学」『数理解析研究所講究録』第 1677 巻, pp.230-242, 京都大学数理解析研究所, 2010
- 公田蔵「明治前期の日本において教えられ, 学ばれた幾何」『数理解析研究所講究録』第 1513 巻,

参考文献リスト

- pp.188-203, 京都大学数理解析研究所, 2006
- 郡菊夫「中村順平先生の建築教育」『建築雑誌』Vol.91, No.1106, p.417, 日本建築学会, 1976
- スピロ・コストフ編『建築家：職能の歴史』（楨文彦監訳, 日経アーキテクチュア・ブックス）, 日経マグローヒル社, 1981
- 後藤慶二『日本劇場史：附・西洋劇場の話』岩波書店, 1925
- 小林克弘編『SD8311 特集・アメリカン・ボザール』鹿島出版会, 1983
- 小林茂『薩摩治郎八 パリ日本館こそわがいのち』ミネルヴァ書房, 2010
- 今和次郎（監修）・大泉博一郎（執筆）・平沢順（写真）『建築百年史：近代編』有明書房, 1957
- 三枝博音, 野崎茂, 佐々木峻『近代日本産業技術の西欧化』東洋経済新報社, 1960
- 酒井一光「9013 建築家・中村順平の設計活動についての一考察」『日本建築学会近畿支部研究報告集：計画系』第 53 号, pp.797-800, 日本建築学会近畿支部, 2013
- 酒井一光「中村順平の設計した商店建築－Yukiya 洋裁店と尾上美粧院について－」『大阪歴史博物館研究紀要』第 11 号, pp.37-54, 大阪歴史博物館, 2013
- 酒井一光「中村順平画「前橋八幡宮透視図」と実現した社殿について」『共同研究成果報告書』第 4 号, pp.A39-A54, 大阪歴史博物館, 2010
- 佐野博士追想録編集委員会編『佐野利器』佐野博士追想録編集委員会, 1957
- 澤護「資料 官雇・お雇いフランス人明細表－明治年間を中心として－」『千葉敬愛経済大学研究論集』第 23 号, pp.105-156, 千葉敬愛経済大学, 1983
- 澤護「幕末・明治初年来日のフランス人建築家」『千葉敬愛経済大学研究論集』第 28 号, pp.119-153, 千葉敬愛経済大学, 1985
- 澤護『お雇いフランス人の研究』敬愛大学経済文化研究所, 1991
- 三三文房編『東京百事便』三三文房, 1890
- フランク・ジェンキンス『建築家とパトロン：16 世紀から現代までの建築家の職能と実務の史的研究』（佐藤彰・五島利兵衛訳）鹿島出版会, 1977
- 滋賀重列「我国建築教育の過去及現在」『建築雑誌』Vol.19, No.227, pp.743-756, 建築学会, 1905
- 篠原修『海軍創設史』リブレポート, 1986
- 篠原修『陸軍創設史』リブレポート, 1983
- 渋谷五郎『日本建築学（上巻・下巻）』須原屋書店, 1923
- 渋谷五郎・長尾勝馬『日本建築（上巻・下巻）』修文館, 1940
- 島田孝一『交通論』千倉書房, 1937
- 嶋田勝次「5006 19 世紀末期のアメリカにおける Ecole des Beaux-Arts の影響」『日本建築学会論文報告集』Vol.63-2, pp.533-536, 日本建築学会, 1959
- 清水重敦・河上眞理『佐賀偉人伝 08 辰野金吾』佐賀県立佐賀城本丸歴史館, 2014
- 清水重敦・河上眞理『辰野金吾』（ミネルヴァ日本評伝選）ミネルヴァ書房, 2015
- アニー・ジャック, 三宅理一解説『ボザール建築図集』（求龍堂グラフィックス）求龍堂, 1987
- オーギュスト・ショワジエ『建築史（上巻・下巻）』（桐敷真次郎訳）中央公論美術出版, 2008
- 新谷肇一「戦前の高等工業学校の制度と建築科の教育に関する研究」『高等専門学校の教育と研究：日本高専学会誌』Vol.8(2), pp.17-24, 日本高専学会, 2003

参考文献リスト

- 水煙会編『水煙会会報』第1～44号, 水煙会, 1971-2014
- 鈴木達治『煙州満筆』煙州会, 1951
- 鈴木達治『煙州残筆』煙洲鈴木達治先生米寿祝賀会, 1959
- 鈴木忠五郎「現代建築教育再検討と之が改善」『建築雑誌』Vol.52, No.643, pp.1091-1096, 建築学会, 1938
- 鈴木博之『建築の世紀末』鹿島出版会, 1977
- 瀬口哲夫『官庁建築家 愛知県営繕課の人々』名古屋 CD フォーラム, 2006
- 瀬口哲夫『名古屋をつくった建築家・鈴木禎次』名古屋 CD フォーラム, 2004
- 瀬口哲夫「名古屋をつくった建築家・鈴木禎次」『INAX REPORT』No.180, pp.4-16, INAX, 2009
- 添田賢朗「芸術開眼」『建築雑誌』Vol.91, No.1106, 日本建築学会, 1976
- 曾禰達蔵「コンドル先生表彰余滴」『建築雑誌』建築学会 1920
- 高橋邦太郎『お雇外国人⑥軍事』鹿島出版会, 1968
- 竹岡和田男「黎明期の西洋画事情 覚書<長崎・秋田・函館>」『北海学園大学人文論集』第6号, pp.77-88, 北海学園大学人文学部, 1996
- 武田五一『住宅建築要義』文献書院, 1926
- 館昭「日本における高等技術教育の形成: 工部大学校の成立と展開」『教育学研究』Vol.43, No.1, pp.13-23, 日本教育学会, 1976
- 田所辰之助『20世紀初頭のドイツ近代建築の発展過程における近代工芸理念成立史の研究』東京大学, 1997, 学位論文
- 中條精一郎「註文者と建築技師と請負業者」『建築雑誌』Vol.25, No.292, pp.84-92, 建築学会, 1911
- 恒川清爾『明治期における技術者の分析: 近代技術確立をめぐる職人と職人的技術者』東京工業大学, 2006, 学位論文
- テュヌ『芸術哲学』(広瀬哲士訳) 東京堂, 1942
- 土居義岳『アカデミーと建築オーダー』中央公論美術出版, 2005
- 土居義岳『言葉と建築』建築技術, 1997
- 土木学会編『古市公威とその時代』土木学会, 2004
- 東京大学編『学問のアルケオロジー』(東京大学創立百二十周年記念東京大学展) 東京大学, 1997
http://www.um.u-tokyo.ac.jp/publish_db/1997Archaeology/
- 富田仁・西堀昭『横須賀製鉄所の人びと』有隣堂, 1983
- 中上川義一郎「若き受験生諸君に」『高等工業学校入学の要領』富勘書院, 1938
- 中島久男「日本におけるエコール・デ・ボザール教育の導入について」『学術講演梗概集.F, 都市計画, 建築経済・住宅問題, 建築歴史・意匠 1987』pp.771-772, 日本建築学会, 1987
- 中谷礼仁『国学・明治・建築家』一季出版, 1993
- 中谷礼仁「亀裂の保存・中村達太郎『日本建築辞彙』を読む」『建築文化』彰国社, 2000
- 中谷礼仁・中谷ゼミナール『近世建築論集』アセテート, 2004
- 中村順平「建築学」『建築世界』第19-24巻, 建築世界社, 1925-1930
- 中村順平「建築学」『建築世界』第26-31巻, 建築世界社, 1932-1937
- 中村順平『建築学技術篇』相模書房, 1950

参考文献リスト

- 中村順平『建築学総説篇』土木雑誌社，1944
- 中村順平『建築という芸術』彰国社，1959
- 中村順平「パリ美術院Ⅰ」『新建築』1968年2月号，pp.215-222，新建築社，1968
- 中村順平「パリ美術院Ⅱ」『新建築』1968年3月号，pp.217-224，新建築社，1968
- 中村順平「パリ美術院Ⅲ」『新建築』1968年4月号，pp.215-222，新建築社，1968
- 中村順平「パリ美術院Ⅳ」『新建築』1968年5月号，pp.213-220，新建築社，1968
- 中村順平「パリ美術院Ⅴ」『新建築』1968年6月号，pp.251-258，新建築社，1968
- 中村順平「パリ美術院Ⅵ」『新建築』1968年7月号，pp.243-250，新建築社，1968
- 中村順平「パリ美術院Ⅶ」『新建築』1968年8月号，pp.215-218，新建築社，1968
- 中村順平，山下寿郎「パリ留学時代の思い出」『建築士』1955年9月号，pp.8-14，日本建築士会連合会，1955
- 中村順平「フランスの建築士」『日本建築士』pp.1-6，日本建築士会，1928
- 中村達太郎『日本建築辞彙』1906
- 中村征樹『近代フランスにおける技術教育の展開：技師集団と職人層の技術知の創造と共有をめぐって』東京大学，2005，学位論文
- 中村征樹「復古王政期フランスの技術書出版ブーム」『科学史研究』第Ⅱ期，Vol.44，No.233，pp.1-12，日本科学史学会，2005
- 名古屋工業大学建築学科創立百周年記念会編『名古屋工業大学建築学科百年史』名古屋工業大学建築学科創立百周年記念会，2007
- NICHE（工学院大学建築学部同窓会誌編集部）編『工手学校－日本の近代建築を支えた建築家の系譜－工学院大学』彰国社，2012
- 西堀昭『日仏文化交流史』駿河台出版社，1981
- 西堀昭「日本の技術革新と横須賀製鉄所（造船所）」『桜文論叢』vol.58，pp.51-69，2003
- 西堀昭『日本の近代化とグランド・ゼコール：黎明期の日仏交流』柘植書房新社，2008
- 日本建築学会編『近代日本建築学発達史』丸善，1972
- 日本建築学会編『建築雑誌』Vol.90，No.1101，日本建築学会，1975
- 日本建築協会編『建築と社会 長谷部鋭吉特集号』1961年3月号，日本建築協会，1961
- 日本図学会文献調査委員会編「文献調査報告（Ⅵ）」『図学研究』Vol.17，No.1，日本図学会，1983
- 丹羽和彦『エコール・ポリテクニクにおける建築教育の理論的特性に関する研究』名古屋大学，1993，学位論文
- 長谷川堯『建築の現在』鹿島出版会，1975
- パナソニック電工汐留ミュージアム『建築家 坂倉準三 モダニズムを住む | 住宅，家具，デザイン』建築資料研究社，2010
- 羽生修二『ヴィオレ・ル・デュク：歴史再生のラショナルリスト』（SD選書218）鹿島出版会，1992
- 林要次『中村順平《classique》考』横浜国立大学大学院，2001，修士論文
- 原正敏「第3回シンポジウム概要 明治期の図学教育」『図学研究』Vol.31-1，pp.21-26，日本図学会，1997
- ルイ・ピエール・バルター『ボザール建築理論講義』（白井秀和訳）中央公論美術出版，1992

参考文献リスト

- 春山武松「醍醐寺五重塔板絵に就いて」『醍醐寺の研究 東洋美術特号』所収, 1930
- レイナー・バンハム『第一機械時代の理論とデザイン』(石原達二・増成隆士訳) 鹿島出版会, 1976
- 檜の会編『あすなろ』檜の会, 全9号, 1990-2009
- 檜の会編『檜』檜の会, 全14号, 1989-2004
- 樋畑雪湖『日本交通史話』雄山閣, 1937
- 平田勝政「大日本優生学の研究」『長崎大学教育学部紀要 教育科学』Vol.63, pp15-29, 長崎大学教育学部, 2002
- ニコラ・フィエヴェ・松崎 碩子 (編)『フランス士官が見た近代日本のあけぼの』アイアールディ企画, 2005
- 藤井正一郎「JIA の建築家達 松本陽一」日本建築家協会サイト内 [http : //www.jia.or.jp/topics/kenchikuka/dat/matsumoto.htm](http://www.jia.or.jp/topics/kenchikuka/dat/matsumoto.htm)
- 藤浪剛一『東西沐浴史話』人文書院, 1931
- 藤森照信「建築設計教育事始め 辰野金吾が受けた建築設計教育」『建築雑誌』Vol.109, No.1362, pp10-11, 日本建築学会, 1994
- ケネス・フランプトン『テクトニック・カルチャー』(松畑強・山本想太郎訳) TOTO 出版, 2002
- ケネス・フランプトン『現代建築史』(中村敏男訳) 青土社, 2003
- ジャック・フランソワ・ブロンデル『建築序論』(前川道郎監修・白井秀和訳) 中央公論美術出版, 1990
- ニコラス・ペヴスナー『美術アカデミーの歴史』(中森義宗・内藤秀雄訳) 中央大学出版部, 1974
- ニコラス・ペヴスナー『ラスキンとヴィオレ・ル・デュク』(鈴木博之訳) 中央公論美術出版, 1990
- ジャン＝ジャック・ベッケール・ゲルト・クルマイヒ『仏独共同通史 第一次世界大戦 (上巻・下巻)』(剣持久木・西山暁義訳) 岩波書店, 2012
- 堀内達夫「日本近代技術教育と学校モデルの移転」『職業と技術の教育学』vol.17, pp.7-14, 名古屋大学, 2006
- 堀内達夫『フランス技術教育成立史の研究: エコール・ポリテクニクと技術者養成』多賀出版, 1997
- 堀内達夫『フランス近代技術教育の成立史研究: エコール・ポリテクニクの成立と技術者養成』名古屋大学, 1995, 学位論文
- 前島美知子『日仏技術交流史からみた陸軍の施設計画に関する研究』慶應義塾大学, 2012, 学位論文
- 松永文雄『我が国における中等建築教育の確立に関する基礎的研究: 大正末, 昭和初期の文部省内と建築学会の検討活動を通じて』九州大学, 2008, 学位論文
- 松田軍平・松田軍平〈回顧録〉編纂会『松田軍平〈回顧録〉』松田平田坂本設計事務所, 1987
- 圓山茂子「美術教育の変遷考: 明治時代から現代まで」『宝塚造形芸術大学紀要』第2号, pp.99-108, 宝塚造詣芸術大学, 1988
- 三木哲『建築家中村順平論序論』横浜国立大学工学部建築学教室, 1965, 卒業論文
- 三宅周太郎『文楽の研究』春陽堂, 1930
- 三宅理一「強烈な異国体験に生きた孤高の建築家 中村順平」『近代日本の異色建築家』(朝日選書 261: 近江栄・藤森照信編) pp.183-192, 朝日新聞社, 1984

参考文献リスト

- 三宅理一『フランス建築事情』鹿島出版会，1979
- 三宅理一編『SD7811 特集 ボザール その栄光と歴史の全貌』鹿島出版会，1978
- 三好信浩「工部大学校の教育」『広島大学教育学部紀要』第24号，広島大学，1975
- 三好信浩『ダイアールと日本』福村書店，1989
- 村上紀四郎『バロンサツマとよばれた男』藤原書店，2009
- 村松貞次郎・市浦健『新訂建築学大系 37 建築学史・建築実務』彰国社，1968
- 村松貞次郎『お雇い外国人⑮ー建築・土木』鹿島出版会，1976
- 村松貞次郎『日本建築家山脈』鹿島出版会，1965
- 森井健介『師と友ー建築をめぐる人びと』鹿島出版会，1967
- 森山学「9033 日本建築士會による海外のアーキテクト／「建築士」に関する状況の日本への紹介：長野宇平治による J.ガデの紹介」『日本建築学会学術講演梗概集.F-2，建築歴史・意匠 1997』pp.65-66，日本建築学会，1997
- 山本経天『近代中国における中等教員養成史研究』神戸大学，2004，学位論文
- 山本正己『建築家と職能ー建築家のプロフェッションとは何か』清文社，1980
- 横浜高等工業学校建築学科編『横浜高等工業学校建築設計競技図集』洪洋社，1937
- 横浜国立大学建築学教室編『建築学教室カタログ 横浜国立大学で建築を学ぶということ』横浜国立大学建築学教室，2012
- 横浜国立大学工学部編『横浜国立大学工学部五十年史』横浜国立大学工学部，1973
- 横浜市建築局企画管理課編『横浜・都市と建築の 100 年』横浜市建築局企画管理課，1989
- 吉田鋼市「素描空間 歌い舞う鉛筆 中村順平」『建築雑誌』Vol.115，No.1463，日本建築学会，2000
- 吉田鋼市「《parti》の意味についてークロケ，ガデ，グロモールの使用例による一考察ー」『学術講演梗概集.F，都市計画，建築経済・住宅問題，建築歴史・意匠 1989』pp.903-904，日本建築学会，1989
- 吉田鋼市「デュランとガデ（建築書の 20 世紀）」『建築雑誌』Vol.114，No.1433，p.29，日本建築学会，1999
- 吉田鋼市『オーギュスト・ペレ』（SD 選書 196）鹿島出版会，1985
- 吉田鋼市『オーダーの魅惑』鹿島出版会，1994
- 吉田鋼市『トニー・ガルニエ』（SD 選書 219）鹿島出版会，1993
- 吉田包春「正倉院の密陀絵に就いて」『仏教美術第八冊』pp.74-82，仏教美術社，1926
- アントワヌ・レオン『フランスの技術教育の歴史』（もののべ・ながおき訳・文庫クセジュ）白水社，1968
- マルク・アントワヌ・ロージェ『建築試論』（三宅理一訳）中央公論美術出版，1986
- 渡邊研司「アーキテクチュラル・アソシエーション創設時における建築教育の理念と内容 1847 年から 1859 年を中心に」『日本建築学会計画系論文集』第 77 巻，第 677 号，pp.1809-1815，日本建築学会，2012

【職員録】

文部省『文部省職員録』文部省
鉄道省『鉄道省職員録』鉄道省
東京市編『東京市職員録』東京市
警視庁編『警視庁職員録』警視庁

【学校一覧】

神奈川県立工業学校編『神奈川県立工業学校一覧』神奈川県立工業学校
京都高等工芸学校編『京都高等工芸学校一覧』京都高等工芸学校
京都帝国大学編『京都帝国大学一覧』京都帝国大学
神戸高等工業学校編『神戸高等工業学校一覧』神戸高等工業学校
仙台高等工業学校編『仙台高等工業学校一覧』仙台高等工業学校
東京高等工業学校編『東京高等工業学校一覧』東京高等工業学校
東京高等工芸学校編『東京高等工芸学校一覧』東京高等工芸学校
東京帝国大学編『東京帝国大学一覧』東京帝国大学
東京美術学校編『東京美術学校一覧』東京美術学校
名古屋高等工業学校編『名古屋高等工業学校一覧』名古屋高等工業学校
福井高等工業学校編『福井高等工業学校一覧』福井高等工業学校
横浜高等工業学校編『横浜高等工業学校一覧』横浜高等工業学校

【インターネット・サイト】

○人物検索

- ・エコール・サントラル出身者：Association des Centraliens
http://www.centraliens.net/docs/consultation_annuairepublic.php?page=search
- ・エコール・デ・ボザール出身者：フランス国立美術史研究所 INHA サイト内 AGORHA 所収公開データベース Leconte, M.-L. C (éd.) : Dictionnaire des élèves architectes de l'Ecole des beaux-arts (1800-1968), INHA, 2009-2015 (<http://agorha.inha.fr/inhaprod/servlet/LoginServlet>)
- ・エコール・ポリテクニク出身者：Société des Amis de la Bibliothèque de l'X サイト [http :](http://www.sabix.org/)
<http://www.sabix.org/>およびエコール・ポリテクニク図書館サイト内
http://bibli.polytechnique.fr/F/?func=file&file_name=find-b&local_base=BCXC2
- ・スコットランド建築家事典：Dictionary of Scottish Architects
http://www.scottisharchitects.org.uk/architect_full.php?id=200323
- ・フランス人近代建築家：建築・文化遺産都市 Cité de l'architecture et du patrimoine サイト内
<http://archiwebture.citechaillot.fr/fonds>
- ・フランス人レジョン・ドヌール受賞者検索サイト：フランス国立アーカイヴ Archive Nationale
<http://www.culture.gouv.fr/documentation/leonore/leonore.htm>

○書籍・文献・論文等検索

- ・国立公文書館デジタルアーカイブ：<http://www.digital.archives.go.jp/>
- ・国立公文書館アジア歴史資料センター：<http://www.jacar.go.jp/>
- ・日本語文献：「近代デジタルライブラリー」国立国会図書館ポータルサイト <http://kindai.ndl.go.jp/>
- ・日本語論文・書籍等検索：CiNii（NII 学術情報ナビゲータ）サイト <http://ci.nii.ac.jp/>
- ・日本建築学会データベース：<http://www.aij.or.jp/de-tabe-su.html>
- ・フランス語・英語文献等：「インターネット・アーカイヴ」サイト <https://archive.org/>
- ・フランス語雑誌：建築・文化遺産都市図書館 La bibliothèque de la Cité de l'architecture et du patrimoine ポータルサイト <http://portaildocumentaire.citechaillot.fr/accueil-ermes.aspx>
- ・フランス語文献：フランス国立図書館ポータルサイト「ガリカ」 <http://gallica.bnf.fr/?lang=FR>
- ・フランス語論文等：フランス国立美術史研究所 INHA サイト内 <http://inha.revues.org/index.html>

謝辭

謝辭

謝辞

本論文は、修士論文で「中村順平」を取り上げてからの約 15 年の成果がようやくひとつのかたちになりました。長い年月がかかった本論文の完成までには、数多くの方々にご指導・ご鞭撻を賜りました。

特に、北山恒先生には多大なるご迷惑をおかけしながらも、修士論文から博士学位論文の審査まで一貫してお世話になりました。遅々とした歩のなか、博士課程後期も中座しましたが、先生からの幾度とない暖かい叱咤激励を賜り、感謝の念に耐えません。

大野敏先生、大原一興先生、高見沢実先生、守田正志先生には、お忙しい中、論文審査の委員をお引き受けくださいましたこと、深く感謝しております。特に、予備審査の際、各先生から貴重なご指摘・ご指導を賜り、その後、最終調整において反映できたのではと感じております。また、十分に答え切れなかった部分については、これからの研究課題とさせていただきたく思います。

本論文は、修士論文から一貫して着目した中村順平の理論と教育に関する研究の集大成ですが、そのきっかけとなった修士論文を審査してくださいました山田弘康先生、北山恒先生、吉田鋼市先生からの有難いご指導があったからこそ、本論文へと結実することができました。

また、博士学位論文の提出にあたり必要とされた査読論文では、日本建築学会に提出した拙稿の審査にあられた諸先生方にお世話になり、日本建築学会関東支部研究発表会において、示唆に富むご指摘・ご指導を賜りました諸先生方には大変お世話になりました。

そして、修士論文作成の際、檜の会の諸先輩方が暖かく迎え入れてくださった経験は、約 15 年間の研究の礎となっています。

特に、横浜高等工業学校建築学科の卒業生である会長・松本陽一氏、副会長・故吉原正氏、大西春雄氏、青木榮氏から、当時の教育状況を伺うことが叶い、また、檜の会所蔵の多くの史料に触れる大変貴重な機会を賜りました。

中でも、2002 年に故吉原正氏の事務所を来訪した際、氏が「こんなものがある」ということでお渡ししていただいたのが、本論文の骨格となる『『建築学』草稿』でした。当時、故網戸武夫氏の没後、氏が保管した中村順平関連資料が檜の会へ渡り、故吉原正氏の元で『『建築学』草稿』が保管されました。本論文を故吉原正氏へお届けしたかったのですが、それが叶わず大変残念ですが、ようやくまとまったことを墓前にご報告申し上げたく思います。

松本陽一氏には、氏の描いた「建築図画」のほか、特に、中村順平のエコール・デ・ボザール時代の制作図面、「建築図画」の原画に加え、ガラス製写真乾板など拝見させていただくことができました。

大西春雄氏には、特に、本論第 3 編で取り上げた当時の貴重な教育史料の研究利用についてご丁寧に応じていただきました。氏には、本論文提出直前まで、当時の教育実態についてお話していただく機会を幾度となく与えていただきました。

大西春雄氏の私家版資料の整理をご担当された檜の会の仁瓶俊介氏には、作業の成果について逐一ご報告いただき、また、檜の会の会報等の貸し出しなど、様々な面でお世話になりました。

そして、檜の会・事務局の近藤高史氏には、中村順平にゆかりのある人々や水煙会の諸先輩方との面会の機会の調整を行なっていただき、大変お世話になりました。特に、昨年の神奈川県建築安全協会サービスセンターで開催された展覧会『中村順平の軌跡－馬車道駅開業十周年を祝して－』の際に

謝辞

は、同協会理事長長田喜樹氏との会話の中から様々な知見を得ることができ、さらに、第2次世界大戦直後に中村順平にすまいとアトリエを提供した横浜高等工業学校建築学科の卒業生、故蒲生久敏氏のご令嬢福田敏子氏から当時の中村順平の生活に関するお話を直接伺うことができました。本論文では、十分に反映できておりませんが、これからの研究課題とさせていただきます。

大阪歴史博物館学芸員・酒井一光氏には、貴重な中村順平資料等に関し、様々な疑問にお答えいただき、大変お世話になりました。

また、フランス滞在に際し、数多くの方々にお世話になりました。

フランス政府給費留学生審査にあたられた諸先生方には大変お世話になりました。滞在中には、特に、パリ8大学の指導教官で、フランスの教育機関での教職経験を与えてくださったクロード・プレロレンツォ先生をはじめ、ヤニス・ティオミス、ジャン＝ルイ・コーエン、ナタリー・ロソー、ヴァージニー・ルフェヴル、アントワヌ・ピコン、ドミニク・ルイヤー諸先生方に、多数のご鞭撻をいただきました。フランス留学を通じて現地の建築教育を体験することにより、中村順平のフランス留学体験の再考には欠かせない貴重な経験知を得ることができました。

こうしたフランスでの経験を後押しし、さらに、帰国後、設計・教育・研究の3つの視点から様々な経験を与えてくださった東京藝術大学教授・北川原温先生には、感謝の念に耐えません。

文化庁新進芸術家海外研修制度の審査委員の諸先生ならびに事前審査を担当されたJIAの諸先生方などにはフランスへの渡航・研究費用等の獲得の際には大変お世話になりました。文化庁の研修生としてパリに滞在し、デュ・ベッセ＝リヨン設計事務所に勤務した際には、所長であるピエール・デュ・ベッセ、ドミニク・リヨン両氏にはフランスにおける両氏の学生時代の経験や設計実務の現状について数々の貴重な進言をいただきました。

宿舎として滞在したパリ大学都市日本館では、当時館長を務められていた寺尾仁先生に大変お世話になりました。寺尾仁先生のご紹介により、現在のパリ・日本館の改修の設計者である早間玲子氏には、渡仏当時のお話や日本館改修の経緯やフランスでの仕事についてお話を伺うことが叶いました。

最後に、多大なる迷惑をかけながらも、応援してくれた両親や兄弟、特に論文博士である父には、幾度とない叱咤激励を受けました。また、中村順平の逸話や昔話に耳を傾けてくれた諸先輩、後輩、そして友人、知人には大変お世話になりました。

そして、わからず積みまれてくる100数十年前の書物は眺め、他方、数十年前の書物には落書きしてくれた4歳の息子、そしてなによりも論文執筆生活を全面的にサポートし、度重なる鋭い指摘をしてくれた最愛の妻、晴子にはただただ感謝するほかありません。

2015年9月